魔法少女リリカルなのはStrikerS　Blood of Promise

F20C

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　Ｂｌｏｏｄ　ｏｆ　Ｐｒｏｍｉｓｅ

【Ｎコード】
Ｎ１１７４Ｏ

【作者名】
Ｆ２０Ｃ

【あらすじ】
魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　Ｌｏｓｔ　Ｍｅｍｏｒｙ　の世界から3年。新主人公&ヒロインをメインに新しいお話が始まります！！
主人公は基本的に女の子大好きな変態、でも強いので、決めるところはしっかり決めて……。
そんな彼が、いろいろあって執務官となったティアナの補佐に！！

でもって、その変態紳士な主人公に隠された過去、秘密……それらが物語に影響して行きます。
私の前作、Ｌｏｓｔ　Ｍｅｍｏｒｙ　の主人公であるエロティック大統領ルーク、とフェイトさんのその後のお話もちらほら……？

そんな感じで、始まります。私、Ｆ２０Ｃがお送りする新しいリリカルなのは、どうぞお楽しみください！！！

お陰さまで、５０万ＰＶ突破いたしました！！　これも読者さま方のおかげですｗｗ

プロローグ（前書き）

というわけで、始まりました、新作でございます！！

Ｌｏｓｔ　Ｍｅｍｏｒｙが完結いたしまして、心機一転という感じですねｗ

と、申し遅れました、初めての方もそうでない方もいらっしゃるかと思いますが、とりあえず初めまして、Ｆ２０Ｃと言います。

この魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　Ｂｌｏｏｄ　ｏｆ　Ｐｒｏｍｉｓｅは前作、Ｌｏｓｔ　Ｍｅｍｏｒｙの続編にあたりますが、あらすじにもありますように、主人公とヒロインは違います。

ヒロインをツンデレガンナー、ティアナさんにお願いし、変態主人公との笑いあり、ラブあり、シリアスありな展開をお楽しみいただければ嬉しいですｗ

さて、前置きはこの辺りにして、今回はプロローグのみということで、短いですが読んでやってくださいｗｗ

感想など、お待ちしております～

プロローグ

人は誰しも生を受ける。

そして、その生を全うし、死んでいく。

高々８０年ぽっちの短い時間を生き、死んでいく。

ある者はそれよりも短く、ある者はそれよりも長い。

人の命に違いがあるとするのなら、それは時間的容量と、その命を取り巻く環境だけだ。

短命ながらも裕福な家庭に生まれた者。

長命だが、貧しい環境に生まれ落ちた者。

もちろん、その逆のパターンも存在する。

裕福だったにもかかわらず、堕ちていく者もいれば、貧しい事をばねに上へ上へとのし上がっていく者もいる。

生まれたての赤ん坊は泣く。

その鳴き声は、生まれたが故に、これから先に待っている死を恐れてのものなのか、はたまた自身が生まれた環境に希望、または絶望を覚えてのものなのか。

死人は口を利かない。

死の直前に叫ぶ者、静かに逝く者。その違いはあれど、死んだ後は何も言わない。
その沈黙は、死という不可避な呪縛から解放された事による安堵を示すのか。それとも、自身が送って来た人生の内容に満足、あるいは絶望しての事なのか。

人の生は祝福される。

生が生まれた瞬間、涙を流す者、歓喜する者、満ち足りた表情を浮かべる者、生まれてきた者の未来を思う者、さまざまな者たちによって祝福される、望まれる。

望まれた命は生きようとする、貧しかろうが、短命だろうが。

途中で生を諦めようとする者もいる。

だが、それでも最初は望まれるがままに生きる。生きようとする。

人間は望まれる事を好む。だからこそ、生きようとする。

では、望まれない命は？　祝福される事のない命は？

自分の存在意義が分からない

生きていても良いのか分からない

自分がどこにも居ない、そこに居るのにどこにも居ない。

透明で、それでいて影だけが生まれる存在。

周囲の人間からは相手にされない、認識してもらえない、してもらえたとしても蔑まれ、疎まれ、挙句の果てに消される。

望まれない命にとって、他者とは敵であり、恐怖でしかない。

……そうだ……俺は……愛されもせず、望まれもせず、ただそこに居ただけだ。

誰も俺なんか俺の生なんて、嬉しく思ってはいなかったんだ。

そうだ……俺は……誰にも望まれてなんか…いなかったんだ……

誰からも必要とされてなどなかった……

だから……

プロローグ（後書き）

Ｆ２０Ｃ「どうも、Ｆ２０Ｃでございます。プロローグ、いかがだったでしょうか？　今回は導入部分なので、かなり謎な感じになってしまっているかと思います。」

？？？「本格的なお話は次回から始まります、一話目から俺とマイハニーが事件の捜査に乗り出すみたいだね？」

Ｆ２０Ｃ「マイハニーって……（；´∀｀）　そうなんだよね、次回はティアと主人公の出会いの話……というわけではなく、出会ってコンビを組んでいる二人のお話がスタートします。二人の出会いは、あとに書くという形を取りたいなぁと思いましてｗ」

？？？「なるほどね……俺とティアのあの口では言えないような出来事はすべて後に……う～ん……あの時の顔を真っ赤にしたティアには萌え殺されかけたな……やはり、ティアはすごいね、流石俺の嫁だ」

ティアナ「勝手に嫁にしないでよ？？！第一、あんたは私の補佐よ！！！」

？？？「上司と部下……夜、誰もいない会社……女上司の何気ない一言からそれは始まった……夜な夜なオフィスから聞こえる……」

Ｆ２０Ｃ「言わせないよ！！！？　まだ一話も始まってないのに何言いだすのこの人？？！」

ティアナ「この変態さが無ければカッコいいのに……」

？？？「ははははｗｗｗ俺から変態さをとったら、他に何が残るんだい？　」

Ｆ２０Ｃ「ダメだこの主人公、早くなんとかしないと……というわけで、次回に続きます。次回は明日には上げたいと思いますので、少々お待ちくださいね」

？？？＆ティアナ「でわでわ～」

Ａｃｔ１　執務官と変態補佐（前書き）

どうも、ＴＶアニメ、ヨスガノソラの主人公の義妹、穹に心奪われた作者です。
ソラ、かわいいよソラ。
原作では主人公の双子の妹らしいのですが……そこは大人の事情なんでしょうね。
兎に角、ソランザム！！！　的な展開を期待していますｗｗ

と、全然関係ない話をしてしまいましたね。
今回は主人公が登場します。名前の方も最後の方に出ますｗｗ
そんな感じで本編どうぞ！！！

とと、その前にこの作品のＯＰ主題歌を……
ＯＰ『楽園のメタファー』　ｓｏｎｇ　ｂｙ　片霧烈火
ＰＣゲーム「ＢＡＬＤＲＳＫＹ　ＤｉｖｅＸ”ＤＲＥＡＭ　ＷＯＲＬＤ”」より

Ａｃｔ１　執務官と変態補佐

思えば、あいつとの出会いはあり得ないものだった。

そう、いろんな意味で。

でも、決して嫌な感じもしなかったし、寧ろ……何故だろう、何か大切なものを見つけた時の感覚。

いつもいつも、セクハラとかスケベな発言とか、大抵の時間をヘラヘラしながら私の傍で過ごしているあいつ。

女の子に弱くて、変態で、それでいて強い。

あいつは私の事が欲しいと言った。

初めは『何を言ってるのこいつは?』とも思ったが、不思議と嫌悪感などはなかった。

そう、あいつにとって、その台詞はとても重い意味を持っていて、かなりの覚悟と勇気を持って言った事なのだろう。

今にして思えば、その事がよく分かる。

そう、あの時はそんな事に気がつく筈も無かった。でも、あいつに何かを感じた、だからこそ……

私はあいつをパートナーに、コンビを組むことにしたんだ。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

観光都市『アトラント』

観光名所として有名な保養地。その筋では有名な世界である。
夏は涼しく、冬は暖かく。避暑にも厳しい冬から逃げたいという人たちが羽を休めるために年中構わずやって来る。
今の季節は夏。海もあるので、ビーチは毎年人でごった返している。
今年ももちろんその例から漏れることはない。

一言で言えば、このアトラントという世界は観光だけでやっていける。そして、観光事業だけで成り立っているのだ。

そんな観光地の街中、その中の人気のない路地で、オレンジ色の長い髪を下ろした、執務官としてはルーキーであるティアナ・ランスターは上司からの通信を開き、今回の仕事について話していた。

『久しぶりだな、ティアナ……いや、ランスター執務官?』

「こちらこそ、ご無沙汰しています。ハラオウン提督。」

通信画面の向こうに居るのは、クロノ・ハラオウン提督。歴戦の凄腕魔導師であり、ティアナが執務官になる以前まで、執務官補佐を務めていたフェイト・T・ハラオウンの義兄である。
三年前に存在していた伝説的な部隊、機動六課の監査役、後見人も務めていた人物だ。

『この間はすまなかったな。うちの部下の仕事を押し付けることに

なってしまって』

「いえ、お気になさらず。私にとっても良い経験にもなりましたし、それに……」

『？？？　それに？』

「い、いえ！！　すみません、こちらの話です…」

ティアナは不思議そうな顔で首をかしげているクロノに慌てて取り繕うような感じで、会話の方向性を保つ。

「私の方こそ、『あいつ』の事では、本当にお世話になってしまって……それを考えれば、あの件は私にとってはプラスな面が多いものでしたから」

『ははは……そうか、そう言ってもらえるのなら、僕としても少し気が楽だ。で、どうだい？　彼とは上手くやれているのか？』

「あぁ……えっと……まずまずですね……補佐としてはそれなりに……」

ティアナは少し言葉を濁す。二人の会話に出てくる人物は、ティアナ的には少し問題ありのようだ。

だが、補佐としてはよく出来るらしい……それも少し怪しく思えてしまうのだが……

『まぁ、何か困った事があれば、いつでも言ってきてくれて良い。僕も最後まで面倒を見るつもりだ』

「はい、ありがとうございます、提督」

クロノもそれを見越したのか、少し笑みを浮かべながらそう言ってくれた。

本当によく出来た人だ。ティアナは改めてそう思った。

『で、だ……。ここからが本題なんだが……。今回、君と彼をそこに送ったわけなんだが……』

「ジャック・ザ・リッパー……ですよね？」

『驚いたな……もうそこまで調べたのかい？　本来ならここで一連の事件の調査を任務として伝えるつもりだったんだがね。』

自分が伝えようとした情報をすでにティアナは理解していたという事にクロノは有能な人材に感心するようにそう呟く。

「町はその噂でもちきりですから……いやでも耳に入ってきまして……」

『そうか……。なら話は早いな。君が居る観光世界アトラントにて、最近猟奇殺人が連続して起こっている。被害者は皆女性、それも鋭い刃物で体を切り刻まれた状態で発見されている。中には内臓や子宮を抉りだされ、持ち去られている遺体もある』

猟奇殺人。それがこのアトラントを悩ませている問題だった。

ティアナがここに向かわされたのはこの事件の捜査、ということだ。

『なのは達の故郷、地球の１９世紀に実際に会った事件とほぼ同じ。違うところと言えば、被害者の数が５人に留まっていないというこ

とくらいだな……』

「ですが、それならこの世界の警察機関が動くものなのでは……」

『それは尤もなことなんだ。だが、犯行現場を目撃した人間が居たらしくてね。その目撃者が言ったらしい、『ジャック・ザ・リッパー（犯人）は空を飛んでいた』とね……』

「空を……飛んでいた……なるほど……」

警察機関だけでは手に負えない筈だ。空を飛べるなんて存在は魔導師くらいのものである。

今回のジャック・ザ・リッパー事件の犯人は魔導師の可能性がある。故に、事件の捜査が管理局に回って来たということだ。

『単独犯の可能性が高いが、念のために注意していてくれ。相手が魔導師である以上、危険はつきものだ』

「はい、心得ています」

一般人では、魔導師には太刀打ち出来ない、目には目を、魔導師には魔導師を、ということだろう。

『詳細はデータファイルとして送っておいた。地元の警察機関と協力して事に当たってくれ。あちらからの協力要請だ、恐らく歓迎してくれることだろう』

「了解しました。では、また何か分かり次第報告を……」

『あぁ、よろしく頼む。では…』

そう言葉を交わし、ティアナとクロノの通信は終了した。
ティアナは端末をポケットに放り込み、路地から歩き出し、大通りに出る。

大通りには多くの人が観光に来ているのであろう、かなりの集客率だ。ジャック・ザ・リッパーなどという猟奇殺人犯が居るかもしれないのに、のん気なものだとは思うが、これが観光都市というものだろう。
恐らくは昼間であれば絶対安全、というなんの根拠もない安全意識を持ってここに来ているのだ。

「さぁて……あいつと合流しなくちゃ……どうせまた待ち合わせ場所には来てないだろうし……ま、大体の居所は分かるんだけどね……」

ティアナはそう呟くと、連れを探すべく、大通りを歩き出した。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

アトラントの中心地にあるとあるカフェにて……

「でさぁ、その悪党はこう言ったんだよ。『お願いします、靴の裏でもなんでも舐めますんで、どうか妻には浮気の事をばらさないでください』ってね……」

「それでそれで??」

「そんなの当たり前だろう？　俺は女性の味方だからね、悪党の奥さんだろうと、か弱い女性。泣く姿を想像するだけで心が痛む……だから……」

黒髪黒眼の青年が、町で知り合ったロングヘアーのかわいい女の子に自身の冒険譚のような、それでいて家政婦は見た的な状況のお話を聞かせている。
女性はその手の話が大好きなのか、青年の話に夢中になっている。
彼女は、市〇悦子さんのファンなのかもしれない。

「これ以上そんな悪い男の所為で、その奥さんが泣かないようにって、全ての浮気証拠を奥さんに速達で届けてあげたのさ。しかも、聞いて驚かないでよ？　その悪党の浮気相手って言うのがなんと……」

「うんうん」

「浮気相手は男だったんだよ……。そりゃあもう奥さんは怒り狂ってね、その悪党を半殺しにして、実家に帰っちゃったんだよ。いやぁ～、あん時のあのおっさんの顔、爆笑ものだったなぁ～」

「あはははは！！！　男が浮気相手って……奥さんの立つ手なしって感じだね！」

青年の話のオチに女の子は結構ツボったらしい。なんというか、笑いのツボのストライクゾーンが広い子である。

「まぁ、愛の形は人それぞれってことなんだろう。あ、もしかしてクレアちゃんも、女の子の方が好きだったりとか……？」

「も～、そんな訳ないじゃない。私は普通に男の子が好きだもん、それに、今なら彼氏募集中だし……」

そう言いつつ、クレアという女の子は青年に誘うような視線でそう呟いてくる。

そして、その青年もその視線の意味を察したのか、クスッと笑うと、カフェのレシートを取り、立ち上がる。

「それは……良い事聞いちゃったな……」

「う、うん／／／／／」

そう言いながら、青年が差し出してきた手をクレアは取り、一緒に店を出た。会計は青年が手早く済ませて……

店の出口をくぐれば、後はヘブンに向けて直行するだけだ。青年の未来はピンク色が保障されていることだろう。

そう……彼の向かうべき未来は……

「あら～…？　随分ご機嫌ねぇ……？」

「げっ！！！？　ティア！！！！？」

地獄に路線変更された。

店を出た瞬間、物凄く怖い笑顔を浮かべたティアナが禍々しいオーラを放ちながら、青年を待っていたのだ。

「これから二人でどこに行くつもりだったのかしら……？」

「あぁ～えぇとだな……よし、ティア。とりあえずそのクロスミラージュを手放そうか。そんな物騒なもの、かわいい君には似合わないよ」

「ご心配どうも。でも安心しなさい、これは仕事だから。変態を排除するっていう、立派な……ね？」

ティアナは怖い笑顔を浮かべながら、且つクロスミラージュを青年に向けつつ、近寄ってくる。

「あ、あはは……私はこの辺りで～……」

「あ、ちょ！！？　そんな殺生な！！！？」

クレアという女の子は二人の間に流れる険悪な空気を感じ取り、そそくさと逃げてしまった。青年が慌てて追いかけようとするが、ティアナのバインドで縛り上げられてしまう。
つまり、青年だけがその場に残っているということだ。

「さて……何か言い残す言葉は？」

「ふぅ……ティア……君に言い残す言葉なんて、一つだけに決まってるじゃないか……」

青年は、ティアナに熱っぽい視線を向けながら、にこやかに笑いながら言った。

「俺は……ティア一筋だよ☆」

ドォオオオオオオオン！！！！！！！！！

青年が星になった瞬間だった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「で、改めて今回の事件なんだけど。一言で言えば猟奇殺人ね。女の人ばかりを狙った切り裂き魔。ジャック・ザ・リッパー……」

「女の子ばかりを狙うか……最低だな……いや待てよ……切り裂く対象が女の子の服に限定されるって言うなら、話は別……サービスカットを俺の心のファインダーに収めるチャンスだという事に……」

「あんたに最低呼ばわりされる犯人に少し同情するわ」

「ショボーン……」

事件の概要を簡単に説明するティアナ、そしてズタボロになりながらも彼女の話を聞く青年。どうやら、ティアナの補佐というのはこの青年の事のようだ。二人は、移動手段である車を駐車場まで取りに行く道を歩いている。

「兎に角、ハラオウン提督から送られてきたデータファイルの検証の前に、アトラントの警察機関に行きましょう。先に顔見せておかないと、捜査しづらいでしょうしね」

「了解了解～、と、あったった……」

二人が仕事の話をしながら歩いていると、駐車場に到着した。そこには、青をメインカラーに、３Ｄカーボンｇｔウィングを付けたの２ドアのスポーツカーが停まっていた。

地球、日本の車メーカーの一つ、ホ○ダが、拘りを前面に押し出して作り上げた車、『Ｓ２０００』である。リアウィングなどのほかにも、フロントバンパーやエンジンフードなどにも手が加えられている。

なぜそんな車を異世界にまで持ってきているのか……それは聞かない約束である。

「ていうか、あんたは何か感じ取れないの？　ここ来てから。」

「無茶言うなよ……こんな人の意識がごちゃ混ぜになってる処で個人を探すなんて……何も分かったもんじゃないよ……」

ティアナの問いに、青年は無理無理と言わんばかりに手をプラプラさせつつ、車のロックを解除しドアを開ける。

二人はその車に乗り込む。運転は青年がするようだ。ティアナはナビシート（助手席）に体を預ける。

「はぁ……あんたの所為で余計な体力使っちゃったわ……ほんと、女の子見たらすぐに鼻の下伸ばしちゃって……」

「ティア……ちょっとジェラシー…？　大丈夫、俺のハニーはティアだけだもん」

「また星にされたいのかしら？」

「すみません……」

ティアナのあまりの迫力ある覇気に軽く当てられてしまう青年は、大人しく車を発進させる。

恐らく言葉のチョイスが古かったのが駄目だったのだろう、とか、そんな的外れな事を考えながら……

「まったく……今回は結構危険が付きまとう仕事なんだから、少しは気を引き締めてよね、『スオウ』！！」

「分かってる分かってる。」

スオウと呼ばれたその青年は、ステアリングを握り、アクセルやクラッチ、シフトノブの操作をホイホイとこなしながら、ティアナのお小言を聞いていたのだった。

こうして、この奇妙な二人のコンビによるジャック・ザ・リッパー事件の捜査が開始された。

Ａｃｔ１　執務官と変態補佐（後書き）

Ｆ２０Ｃ「ていうわけで、Ａｃｔ１始まりました！！！というか、昨日だけで３２件ものお気に入り登録をしていただき、本当にうれしいですｗｗ皆さん、ありがとうございます！！！」

スオウ「これからは俺の変態さに呆れていただけるんですね、分かります」

Ｆ２０Ｃ「変態路線で行く事を主人公が認めているなんて……。というわけで、主人公のスオウです。」

スオウ「どうもどうもｗｗティアの旦那になる男です」

Ｆ２０Ｃ「初っ端から何言ってんのさ……。あ、そうそう。作品内に出てきた車の趣味、あれは１００％作者のものです。Ｓ２０００、かっこいいよＳ２０００……全部が素晴らしい……」

スオウ「ま、リアルじゃ生産終了しちゃったモデルだけどね。あの時の作者の絶望ップリは凄かった……」

Ｆ２０Ｃ「若干半泣きだったよ……。それと、この作品のＯＰとＥＤに関してですが、ＯＰは『楽園のメタファー』で固定ですｗｗ　区切り区切りで変更して行きますがｗｗ」

スオウ「でもって、ＥＤのみを前作と同じように募集したいと思いますｗｗ毎回ＥＤだけは変わる感じだね。皆様からのアイデア、お待ちしておりますｗｗ」

Ｆ２０Ｃ「ではでは、また次回～」

本日のＥＤ「キミと夜空と坂道と」　ｓｏｎｇ　ｂｙ　いとうかなこ

オリキャラ設定（前書き）

作品に出てくるオリジナルキャラクターの紹介場です。

随時更新して行くつもりですので、よろしくお願い致します。

オリキャラ設定

主人公

名前：スオウ（Ａｃｔ１２にて、本名?がソラに…）

年齢：１８歳（多分）

体重・身長：１７５センチメートル　５８キロ

髪の色：黒

瞳の色：黒

好きなもの（人）：かわいい女の子（特にティアナ）・車・エロゲー・和菓子

趣味・特技：エロゲ（らしいのだが、最近はめっきり出来てないとか）、車の運転（尋常じゃなく上手いが、ティアナ曰く『殺人ドライビング』と言わしめるほど）、女性の下着の色を服の上からでも完全に見通す。この技から逃れる事が出来る者はいない。

見た目：カッコいいのに、変態。変態という名の紳士

性格：変態、基本お気楽、のほほん、ニコニコしている。滅多なことでは怒らない。自分の関心の外の事には興味すら示さない。ティアナが絡んでいれば別。

魔力光：???

メインウェポン：？？？

能力：？？？

魔導師ランク：？？？

称号：変態・変態紳士・変態ナンパ師・エロゲソムリエ

性癖：一番好きなのは看護師さんコス、だがティアナならば全部が素晴らしいと豪語する。

　彼が言うには、女性の下着などあって無いようなもの。下着？何それ美味しいの？

イメージＣＶ：福山　潤さん（コードギアスシリーズ、ルルーシュ役。ぬらりひょんの孫より、リクオ。）

エステル

年齢：１８歳

身長：１５７センチメートル　体重：ああ、何をするやｍ……

髪の色：空色のロング

性格：天然ぽい。加えてのほほんとしている。一途で健気らしい（読者様評価）

スタイル：……凶器、胸はフェイト並み　締まるとこはしっかりとしてる

好きなモノ（人）：ソラ、甘いもの

性癖：ソラ曰く、Mっぽいらしい。誘い受けみたいな感じ。

称号：一途な少女、ヒロイン格

イメージCV：堀江由衣さん（17歳）↑我々の業界ではもはや常識。

（D．C．より白河ことり役、ぬらりひょんの孫よりつらら（雪女）役、ひぐらしのなく頃により羽入役）

ほっちゃーん！　ほ、ほーっ、ホアアーッ！！　ホアーッ！！

Ａｃｔ２　捜査開始（前書き）

今作ではタイトルは真面目路線で行こうかな……。
スクラバでのはっちゃけ具合から、ここではスマートなタイトルで行こうなんて考えている作者ですｗｗ

今回はスオウの力の片鱗が少しだけ出てきます。

しかし、彼は変態ですからね。いくらカッコよく決めても変態なんです。

でわ、本編どうぞ！！

Ａｃｔ２　捜査開始

スオウとティアナは一路アトラントの警務部隊（警察的な組織）の施設に向かった。アトラントは観光都市だけに道路の舗装は完璧であり、スオウの運転技術のおかげもあってか、車は快適なドライブを実現していた。
窓から外を見れば、水着でそこらを闊歩する連中や、あからさまにテンションが上がり過ぎている少し危ない人達まで、様々な種類の人間を見る事が出来る。

「平和だねぇ～」

スオウは運転しつつ、のほほんとした口調でそう言う。
大概へらへらしているか、のほほんとしているか、女の尻を追っかけているかのどちらかであり、今はのほほんタイムというわけだろうか。

「平和って言っても、夜になれば猟奇殺人鬼がうろつくバイオレンス極まりない街に一変するんだけどね。一連の事件、決まって深夜の２～３時くらいに起こるらしいから」

「なるほど、ジャック・ザ・リッパーは夜行性なわけだ。あ～あぁ……犯人が女の子だったらいいなぁ……捕まえた後のお楽しみが……でへへ……あれ、これなんてエロゲ？」

「とりあえず、犯人が男である事を願っておくわ」

「うぇ……変な想像したら気持ち悪くなった……」

とか何とか、アホみたいな話をしつつ車を走らせること１０分。二人は目的地である警務部隊の本部に到着した。

二人は来客用の駐車スペースにＳ２０００を着けておき、本部のドアを潜った。
入った瞬間、警察組織特有の堅い匂いがスオウとティアナの鼻に入ってくる。

「ここの本部のお偉いさんに会いに行くんだろ？　さっさと終わらせて、ホテルに帰ろ～？」

「あんたはまたそんなことばっかり言って……。まずはその本人にコンタクトを取らないと、でしょ？　クロノ提督からアポは取ってあるって聞いてるし、受付で聞いてくるからあんたはここで大人しくしてなさい。」

なんというか、子供を相手にする母親のような気分になって来るティアナだった。実際、彼の方が一つ年下なので、余計にそう感じてしまうのかもしれない。
彼女はスオウにそう告げ、警務部隊本部の受付に向かい、受付のお姉さんに用件を伝えた。

「時空管理局、ティアナ・ランスター執務官です。ジャック・ザ・リッパー事件について、警務部隊長のカーム・フェンデル氏とお会いしたいのですが。」

「はい、ランスター様ですね、承っております。部隊長は部隊長室

に詰めておりますので、案内させていただきます」

「はい、よろしくお願いします」

受付のお姉さんは、もう一人の受付嬢の人にその場を任せ、ティアナを案内してくれるようだ。

「あ、ちょっと待ってください。連れを待たせていて……スオウ！！……行くわｙ……・」

と、スオウを呼ぶティアナだったが、先程まですぐそこに居たスオウの姿が消えていた。

またどこかにフラフラと行ってしまったのかとも思ったが、今回はそうでもなくすぐに見つかった。

「へぇ～……お父さんと同じ夢の為に、この仕事を……」

「は、はい……／／／／／／毎日忙しいですけど、とってもやりがいのあるお仕事で……」

「立派だなぁ……しかも、こんなに美人な婦警さんですからね。結構男の人にモテたりするんじゃ……？」

「い、いえ！！　お恥ずかしい話なんですけど、まだ彼氏も居なくって……」

「それはもったいない！！！　こんな美人なお姉さんを放っておくなんて……周りの男性陣の目は節穴ですね……」

「そ、そんな！！　そんな大層なもんじゃないですよ、私なんて…

…／／／／／／」

「あんの……バカ……」

なんと今度は婦警のお姉さん相手にでれでれしているスオウであった。

ティアナはその光景に、頭に怒りマークを付けつつ、ツカツカと二人に近づいて行った。

「あの、よろしければ今度食事でもいかが……ゴブハッ！！！！？」

「あんたは女なら誰でもいいのか！！！！？」

ティアナの黄金の右足がスオウの急所（股間）にクリーンヒットした。

「いや……これはマジダメ……もう使い物にならないかも……ぬおぉぉぉぉ……」

「ちょうど良い機会じゃない？　それなら誰かれ構わず発情する悪い癖も少しは治るんじゃないの？」

「そ、そう言う事になったら……もうティアとの熱い夜の営みも出来なくなるけど……？」

「ありもしない事実をでっち上げるな！！！！　この変態！！！」

「グハッ！！！！？」

スオウに更なる追加攻撃を加え、撃沈するティアナ。周囲にお騒がせしたことをお詫びした後、待たせていた受付のお姉さんの所に戻る。スオウを引きずりながら。

「すみません、お待たせしました」

「あ、はい……。あのぉ……お連れ様は大丈夫なんでしょうか……？」

「あぁ、これの事はお気になさらず。全然大丈夫ですよ。すぐ治りますから」

「は、はぁ……」

そんなやり取りを終え、ティアナはスオウを引きずりながら部隊長であるカーム・フェンデルの下に向かった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

カーム・フェンデルは頭を抱えて悩んでいた。

悩みの内容は二つ。一つは最近、アトラントを騒がせている連続猟奇殺人。

まぁこれに関しては、今日来てくれる管理局の執務官、ティアナ・ランスターという人物と協力して事に当たればいい。解決の糸口は見いだせるだろう。

だが、問題はもう一つの悩みの方だった。これればかりは他人を頼る

ことなど出来ないし、頼るべきでもない問題なのだ。

「はぁ……なんであんな事を言ってしまったんだ……」

カームはため息を吐きつつ、そう呟く。ここ何日かはこんなことばかりだ。後悔ばかりが彼の心に生まれてくる。

「マリナ……」

カームの口から出たのは、結婚して２０年にもなる、妻の名前だ。
そして同時に、彼の悩みの原因でもある。
実を言うと、一週間前に、些細な事を原因に大喧嘩してしまい、現在かなりまずい状況にあるというわけだ。
カームを悩ませていたのは、こういうことが原因だった。

さっさとこちらから謝ってしまえばいいものなのだが、彼の男としてのプライドがこんな時に限ってそれを邪魔するのだ。
本当はすぐにでも帰って来て欲しいと願っている筈なのに。

コンコン……

『部隊長、時空管理局のランスター様がお見えになりました』

と、そんな時にドアをノックする音と、部下の声がカームの耳に入って来た。
家庭の問題もそうだが、今は仕事中だ。兎に角、ここはジャック・ザ・リッパーの事件解決に全力を尽くそう、そう決めたカームは表情を引き締め、客人を迎える体制に直る。

「あぁ、お通ししてくれ」

そして、心に澱みを抱えたまま、彼はドアの向こうの部下にそう伝えたのだった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「いや～これはこれは。遠いところをご足労いただき、本当にありがとうございます、ランスター執務官殿。」

スオウとティアナが、受付のお姉さんに案内された部隊長室とやらに入ってまず飛んできたのが、気持ち良いくらい爽やかな笑みを浮かべたおっさんの挨拶だった。

「私がアトラントの警務部隊を任せられておりますカーム・フェンデルです。どうぞよろしく。」

「こちらこそ、今回は全力で捜査に協力させていただきますので、よろしくお願いします」

カームとティアナはそう挨拶しながら握手を交わす。

第一印象としてはなかなかに人柄の良さそうな人物、警務部隊を仕切っているということから、それなりに能力のある人物なのだろう。

「後ろ者は私の補佐のスオウといいます。」

「どうぞよろしく」

スオウも空気を読んだのか、ここはフレンドリーな雰囲気を出して

カームに挨拶をしておく。

「こちらこそ。よろしく頼むよスオウ君」

カームも同じく爽やかな笑みを絶やすことなくスオウに応える。

「さて、自己紹介も終わったところで、さっそく今回の件についてお話したいのですが、よろしいですかな?」

「はい、私たちもそのつもりでここにお邪魔させていただきましたから」

「それなら良かった。では、どうぞこちらのソファをお使いください。いつまでもお客人を立たせたままというのは私としましても精神衛生上大変よろしくないので。」

カームに進められ、二人はソファに腰掛ける。なかなかに質の良いものらしく、室内に誰もいなければスオウなどはそこで寝てしまうだろう。

「さて……何からお話しましょうか……なにぶん血生臭い事件なので、話しづらい事ばかりなのですが」

「街の噂を聞くだけでも、それは伝わってきました。出来れば、もう少し詳しい事をお話お聞かせ願いたいのですが……」

「分かりました…。私たちとしても、これ以上の犠牲者は出したくありません。人命もそうですが、この世界に観光に来られる方の数が減ってしまうとこの世界の経済が成り立ちませんからね……」

アトラントの経済はそのほとんどが観光事業で成り立っている。それが一連の猟奇殺人事件で客足が遠のけば、深刻なダメージとなることは確実だった。

それからカームは一連の事件の捜査状況をまとめた資料と、被害者についてのデータ、犯行現場の状態、時間帯など、詳しい事をティアナとスオウに伝えた。

被害者は現在の段階で１０人。共通点はその全員が女性という事。

犯行時間帯は深夜2時から3時の間。場所はランダム。

目撃者によるとジャック・ザ・リッパーは空を飛んでいた。

などなど、被害者や、現場の写真などを交え、カームの説明は分かりやすく進んで行った。

「最後に、これは私の部下が巡回中に目撃したことなのですが……犯行があった現場の近くで、魔方陣のようなものが一瞬広がったと……。それが見えた先に行くと、やはり犠牲者が横たわっていたらしいです……」

「魔方陣……ベルカ式かミッドチルダ式かの区別はともかく、空を飛んでいたとい言う証言から考えても、十中八九犯人は魔導師ですね。」

ティアナは少し考える様な仕草を見せ、捜査資料などに目を通す。

スオウはというと、こちらも珍しく真面目な顔で資料を読んでいた。

「うわぁ……ヒドイことするなぁ……こんな若い子まで……」

日ごろから、女の子＝天使説を唱えている彼にしてみれば、今回のような残虐な事件に女性ばかりが犠牲になっている事が許せないと言ったところだろう。

「この資料、少しお借りしても……？」

「はい、もちろん。どうぞ遠慮なく持って行ってください。こちらとしても、事件の早期解決の為に、お二人に協力は惜しみませんので。なにか出来る事がありましたら、遠慮なく仰ってください。」

「ありがとうございます、カーム部隊長。では、私たちはそろそろ……また後ほど連絡を。」

「はい、ではそのように」

大方の事情を把握したティアナは席を立つ。それにスオウも続き、カームも二人を見送るべく立ち上がる。

今回は地元警務部隊の協力もある、彼らと連携して事に当たれば事件の解決は早まるだろうとティアナは考えていた。

「今日は本当にご苦労様です。どうか、よろしくお願いします」

「もちろん、全力を尽くします。早期の事件解決の為にも……」

カームは部隊長室のドアの前で二人を見送る。

彼は二人にそう言って、頭を下げた。年上の男性から頭を下げられるというのはなんとも居心地の悪い気分だが、それだけカームが必死なのだろうと分かってしまう。

三人はそこで別れることになる。だが、そこまであまり口を開かなかったスオウが、振り向きながら口を開いた。

「あ、そうそう。カームさん」

「はい？　なんですかな？」

「奥さんとの仲直り、早くした方がいいですよ。」

「え……？」

カームは一瞬呆けてしまった。なぜ彼がその事を知っているのか、少なくとも彼らにはその事は話していないし、気付かれるような事も言っていない。

そう、妻との喧嘩の事をスオウが知っている筈がないのだ。

「奥さん、多分あなたが来るの待ってます。早めに謝ってあげた方がいいですよ。では、お節介はここまでで。失礼」

「……」

そう言って、ティアナの方に向き直ったスオウの瞳は、先程まで黒色だったにも拘らず、禍々しい紅色に輝いていたのだった。

「……電話……してみるか……」

カームはそう呟くと、部隊長室に戻って行った。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「あんた、また能力使ったんじゃないでしょうね？」

「違うよ。あれは聞こえちゃっただけ。あそこまで意識がダダ漏れだと、放っておくのも可哀想かと思ってね、ちょっとお節介を」

「不可抗力って言いたいんでしょ？　ま、あんたにしては気の利いたことしたとは思ったけど」

ティアナとスオウは警務部隊本部から宿泊先のホテルに向かう車の中で、先程の事について話していた。
カームしか知らない事を言い当てた事についてだ。

「あそこまでハッキリと意識の表層に出てくるくらい大事な人なんだろうからね……どうせなら嫌な悩みじゃなくて、楽しい思い出として意識の中に留めておいて欲しいでしょ。どんよりした意識が流れ込んでくるのが我慢ならないだけだよ。」

「……そう……」

ティアナはスオウの言葉にそう短く返事を返した。
彼がそう言う事を言うと、変に重く感じでしまう。それがなぜかは分からないし、スオウも話してはくれない。
そう思うと、少し寂しい気持ちになってしまう。だが、人間だれしも触れて欲しくないかこの一つや二つあるものだ。それはティアナでも同じである。

だから、強引な追求しない。話してくれるのを待つしかないのだから・
代わりに、仕事の話を持ってくることにした。

「今後の方針だけど、あんたの力を頼りにすることにしたわ。警務部隊の人達と人海戦術で追い詰めるのも手だけど、それじゃ時間がかかるしね。それに相手が魔導師なんだし、魔法に備えのない人達に被害が出るのは火を見るより明らかだしね」

「てことは、警務部隊の人達には一般ピーポーの砦にもなってもらって、実際に犯人を追うのは俺たちだけってこと？　まぁ、前線に出てくるよりは遥かに安全だけどさ」

「そういうこと。深夜といっても、外を出歩く人達は多かれ少なかれ居るでしょうしね。念のために。まぁ、私たちがさっさと犯人を捕まえればその備えも杞憂に終わる事になるんだけど……」

「なるほど、なるほど……早ければ早いほど良いってことか。う～ん……楽しそうなゲームだなぁ……やっぱり、ティアと一緒だと退屈しないから楽しいよ」

ティアナの考えにスオウは楽しそうに笑いながら答えてくる。彼にとって、今回の一連の事件の捜査など、ただのゲームに過ぎないのだろう。
そう、彼にとってはあまりにどうでもいい、それでいて相手にする価値も無いような、そんな事件なのだ。

だが、彼はそれをゲームとして楽しもうとしている。その姿勢には少し問題があるが、関心の外にある事象にスオウが首を突っ込むというのは、あり得ないことだ。

彼が動く理由はただ一つ、ティアナがこの事件を解決したがっているからだ。彼女がその事件をなんとかするというのなら、スオウは喜んでその力を使い、彼女を手助けする。
そう、スオウはそういうタイプの思考を持っている。

まぁ、今回に限っては女性が被害者となっているので、それだけではないのだろうが。

「それじゃ、ジャック・ザ・リッパー狩り、張り切って行こうか？
か弱い女の子の為にも！！」

「動機が微妙だけど……まぁいいわ。しっかり働いてもらうから、そのつもりでいなさいね？」

スオウのそういう部分を理解しているティアナは、少しため息を吐きながらもそう言っておく。
彼のこういった少し歪んだ部分は少し問題ではあるものの、そうなってしまった原因も分からないので、如何ともしがたい。
出来ることなら、近い将来、自分の事など関係無しにその力で何かを成して欲しいと思ってしまうティアナだが、今現在の状況ではそれを望むのは贅沢というものだろう。

「もちろん、ティアの願いなら、俺は何だって叶えてあげるよ。君は俺の、『約束の人』だからね……」

スオウはそう言って、ティアナににっこりと笑いかける。とても純粋な、それでいて本当に楽しそうな笑顔に、彼女もそれにつられて笑ってしまうのだった。

「（ホント……笑顔だけは子供みたいなんだから……）」

心の中でそう呟くティアナだが、不思議と嫌な気持ちではなかった。
そう、スオウとはなぜかリズムが合うのだ。だから、彼の存在がたまにだが心地良くすらある。
だからこそ、こうやってスオウの無邪気な笑顔につられてしまうのだろう。
そんな事を考えながら、ティアナはバケットシートに体を預けた。

「あ！！！　今のお姉さん、めちゃくちゃおっぱい大きかった！！！」

「黙って運転しなさい！！！！！」

「グハッ！！！！？？？？　だ、大丈夫……ティアナの胸は形が良いから、それに言うほど小さくないから、寧ろ大きい部類だから……」

「そういう問題じゃないわよ！！！！　あぁもう、あんたって本当に！！！！」

やはり、リズムが合っている二人だった？

Ａｃｔ２　捜査開始（後書き）

Ｆ２０Ｃ「さて、漸く捜査開始ですね。ていうか、お前というやつは……」

スオウ「いや、マジであのおっぱいはでかかった。９０はあったなぁ……」

Ｆ２０Ｃ「横にあんな美人が座っているというのに……」

スオウ「何言ってんのさ？　ティアは別格に決まってるじゃん。ティア以上に良い女なんてハッキリ言って、居る筈ないね。」

Ｆ２０Ｃ「ま、一応区切りはつけてるわけか。で、次回はどうなるのかな？」

スオウ「次回は俺とティアで犯人を追っかけて追い詰める。所まで行けたら良いんじゃないのかな？　俺のデバイスとかのお披露目とかもあるかもだしね」

Ｆ２０Ｃ「あ、そのことなんだけど……お前のデバイスの名前、まだ決まってないんだよね。一応銃タイプのデバイスなんだけど。見た感じはブラック○ャットの主人公の持ってるハーディスみたいな感じかな。重厚な感じのやつ」

スオウ「悩んでるなと思ってたら、まだ決まって無かったのか……」

Ｆ２０Ｃ「というわけで、何かデバイスの良い名前ありませんかね

？　読者の皆様のご意見を伺いたいです。なにかカッコいい感じの奴がありましたら、教えてくださると嬉しいです。でわ、今日はこの辺りで……」

スオウ「また次回～ｗｗ」

本日のＥＤ「夢の続き」　ｓｏｎｇ　ｂｙ　水樹奈々

バルディッシュさん、アイデア採用させていただきました！！

Ａｃｔ３　ジャック・ザ・リッパー狩り（前書き）

ｉｐｈｏｎｅ４を購入し、テンションマックスな作者でございますｗｗ
今使っているガラケーと併用になり、少しお財布にダメージですがｗですが、機種台が実質タダですから、普通にスマートフォン買うより方お得だと思います。

と、関係ない話はここまでにして。今回はジャック・ザ・リッパーの誕生の経緯と、その犯人を能力を使って探すスオウとティアのお話です。ティアがすこ～しだけデレる……かな？

まぁ、スオウが変態なので急激の距離が縮むとかはありませんがｗｗ

でわ、前置きはこの辺りにして、本編どうぞ！！！

Ａｃｔ３　ジャック・ザ・リッパー狩り

ラドル・レンシスという男を一言で表すと、気が小さく、少し思い込みの激しいところのある男である。
貧しくも裕福でも無い普通の家に生まれ、何不自由なく２３年という人生を今まで生きてきた。
聞くだけでは一般的な、悪く言えば面白味も無い人生を過ごしてきたラドル。
だが、彼にだって暗い過去の一つや二つある。学生時代は虐めに遭っていたし、暴力を受けたことだって数え切れないほどだ。

学生時代の暗い経験が、彼の性格を暗く、そしておどおどしたモノにしてしまった。もちろん、社会に出ても彼をカモにちょっかいを出してくる輩は居る。

彼の暗い性格とおどおどした態度がそれを誘発していたことも否めないが、彼にとって社会になじみ、他者と関わって生きていくということは大変困難なものであった事だけは確かだろう。

そんな彼にも、社会に出て３年目、驚く事に彼女が出来た。見た目も抜群に良いし、性格も優しく、暗いラドルに明るい笑顔を振りまきながら話しかけてくれる女性だった。

もちろん、今までの人生で、家族以外の女性に優しくされた経験などなかったラドルは、その女性に惹かれ、好きになっていく。

そして、この２３年間使われることのなかった勇気を振り絞り、彼

はその女性に告白したのだ。

結果はオッケー。ラドルはその返事を貰った晩は、眠る事が出来ず、テンションがおかしいくらいに喜びまわった。
生まれて初めての恋人、そんな存在に足元が覚束なくなるほど彼は歓喜した。

「（生きていれば、こんな素晴らしいことだってある。僕の人生も満更捨てたもんじゃない）」

生まれた初めて、彼は自分自身の人生に意味を見出した。
毎日毎日、彼女の事ばかり考え、彼女と会うたびに心が震えた。
ラドルは自分が利用されているだけだとは露とも考えていなかった。

付き合い始めてひと月、ラドルはようやくその事に気がつくが時すでに遅し。
彼の仕事でこつこつためていた預金は底を付いていた。原因は彼女への貢物だ。

女はラドルとどこかに行くたびに、それとなく、だが意思が伝わる程度に欲しいものがあるとラドルにサインを出してくるのだ。

もちろん、彼女に夢中になっている彼は迷うことなく、欲しい物を買い与えていく。
それは回数を重ねるほどに規模が大きくなり、最終的にはマンションの一室を買わされたほどだ。

そして最終的に、ラドルは捨てられた。理由は単純明快、女にとって最早ラドルは利用価値が無くなったからだ。

彼女にとってラドルなどお金を出してくれる便利な男程度の存在だったということだ。

根暗のラドルならカモにし易いと踏み、彼女は近づき、擬似的に恋人になることでラドルを利用していただけに過ぎなかった。

ラドルは何度も彼女に会おうとしたが、彼には本当の恋人がいた。それもラドルなど到底及びもつかないような家柄、容姿、性格、加えて相手は魔導師でもあったのだ。管理局で働くエリート。しつこく彼女に会いに来るラドルはその男に何度もボコボコにされ、ついに彼女と会うことは出来なかった。

「（なんでだ！！！　どうしてだ！！！！　僕はあんなに君に尽くしたのに！！！　彼女は僕だけのものなのに！！！！）」

捨てられたラドルは絶望し、仕事も辞めた。何もかもがどうでもよくなり、残ったのは女への憎悪と虚ろな心だけだった。

そんな時だ。ある一人の男がラドルの目の前に現れた。黒いローブを頭からすっぽりとかぶり、その顔を窺い知ることは出来ないが、声から察するに男であることだけは確かだった。

「君の心に燻っている憎しみ、素晴らしい……。あの醜い心を持った女に復讐する手助けをしてあげよう」

そう、突然現れた男は言った。そして、怪しい輝きを帯びた指輪を渡して来たのだ。

「それは君の中に眠っている力を呼び覚ますためのアイテムさ。それを使って、君が憎いと思う者すべてに復讐すると良い。痛みを知る君にはその資格がある。君は断罪者なんだ、この世の罪人を裁く

権利、そして義務を負っているんだよ？」

謎の男の言葉に、ラドルはハッとなる。
この時のラドルに正常な判断など出来る筈も無かった。彼は完全に心に巣くった狂気に飲み込まれていたのだ。

「（そうなんだ……僕は選ばれた存在なんだ……この世の悪を全て切り払う、正義の使者なんだから！！！　そうだ、僕がこの世界を浄化しなくちゃいけないんだ！！！）」

その日の夜、彼は自分を騙していた女を惨殺した。それまで自分にはなかった力を得ることで、今まで出来なかった事が簡単に出来てしまった。
そう、それはまるで、魔法。いや、魔法そのものだったのだ。

その日からラドルは正義の鉄槌として、悪女と思しき女性を次々に殺しまわっていく。中には、清廉潔白な女性もいた、いや寧ろその比率の方が高いくらいだった。

だが、ラドルはもう止まらない。猟奇的な殺人に見せることで、アトラントに恐怖という名の秩序を築こうともしていた。

「だだ……まだ足りない……。正義の鉄槌を下さなきゃいけない相手は沢山いる……キヒッ！！キヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒ！！！！！」

狂ったような、いや、もう既に狂っているのだろう。狂気じみた笑いを上げながら、ラドルは今日も夜の街に繰り出す。
女を殺すため、恐怖という秩序でこの街を統治するために……

ジャック・ザ・リッパーは今日も夜の暗闇を闊歩するのだ。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「……G線○の魔王がやりたい……マウスが恋しい……パソコンが恋しい……」

「また仕事中にそんなことばっかり言って……ていうか、あんたがそれ言うと中の人的に危ないからよしなさいよ」

「宇佐美ぃぃぃぃぃぃぃぃ！！！！！！！！！」

「だからやめなさいってば！！！！　ていうか、ちゃんと探してくれてるの？！」

「それはちゃんとやってるよ。この街広いから時間がかかってるだけ」

カームとの面会から一日経った日の深夜2時、ジャック・ザ・リッパーの犯行時間帯である時間。ティアナとスオウはそんなやり取りをしながら、アトラントの市街地のど真ん中。自然公園の噴水のオブジェクトがあるところに居た。

二人の服装はバリアジャケットである。ティアナのジャケットはお馴染みのタイプである。

スオウのバリアジャケットは黒いロングコートのようなものをメインに作られている。

足には銃型のデバイスが入っているホルスターが見られる。

「昼間は人が多いからあんたの力を使っても無理かもしれないけど、流石に夜は人が少なくなるから大丈夫でしょ？」

「うん、それに大部分の人はジャック・ザ・リッパーが怖いから夜は外出したがらないみたいだしね。一発しけこんでる人達も……あぁ、すみません何でもないです」

余計な一言を言いそうになった瞬間、ティアナからの殺気が飛んできたので光の速さで修正したスオウ。

彼の瞳は、一昨日カームにお節介をしたときと同じく、真紅に染まっている。見れば少し瞳孔がさながら吸血鬼の如き形を取っている。

「分かってるとは思うけど、殺しちゃ駄目だからね？　ちゃんと拘束して管理局に引き渡すのが私たちの仕事なんだから。」

「分かってるって。そんなに俺信用ないかなぁ……」

「あんたは力のセーブが下手くそなの。だから念には念を入れてるだけよ。」

「う……それを言われると弱いなぁ……」

ティアナから念を押されるスオウ。まぁ、間違っても犯人を殺したりはしないだろうが、ちょっと力加減を間違えれば、その限りではない。

スオウもその部分に関しては言い返せないようだ。

彼は大人しく犯人探しに専念する事にする。

「前から思ってたんだけど……」

「ん～？」

スオウが犯人の位置を特定している最中、ティアナがどことなく真剣な様子で話しかけてくる。

「あんたのその感応能力……人の思考を読みとったり、今こうしてるようにある個人の意識だけを探したり、聞くだけなら結構便利な能力だけど、実際辛かったりはしないの？」

「辛い……っていうと？」

スオウは少し質問の意図を測りかねたといったような様子でティアナに向かい首を傾げる。

「要するに、人の思考に敏感過ぎるから分かっちゃうんでしょ？　あんたへのストレートな悪意とか……あんたに向けてじゃないとしても、人間の負の感情…みたいなものが見えちゃうのって、辛い事じゃないの？」

「あぁ、そう言うこと。ん～……辛いって言えば辛いのかなぁ…？　よく分かんないんだけどね、でも所詮人間の負の感情なんて、大半が底が浅いんだよ。本当の悪意や負の感情は底なんか見えない、本当に真っ暗闇なんだ」

スオウはティアナの質問に少し考えてからそう答える。その間にも、ジャック・ザ・リッパーを探すことは怠ることなく。

「そういう真っ暗闇な心をぶつけられると……うん、やっぱりちょっと辛いっていうのかな…？　良い感じはしないね」

スオウは事も無げに話す。他人事のような口ぶりだが、この悩み（本人がどう考えているかは別として）は彼自身にしか分からない。その能力をこうして事件の捜査に使っていることに、ティアナは少なからず罪悪感のようなものを覚えてしまう。

「でもさ」

「え？」

少し下を向いてしまっていたティアナだが、スオウの声に顔を上げる。

「今みたいに、ティアが本当に俺の事を心配してくれてるっていうのが分かるだけで、俺はこの能力に感謝したいくらいだよ。何も悪いことばかりじゃないってことだね。だから、ティアは何も気にする必要はないよ。」

「スオウ……」

スオウはティアナの思考を少し見てしまったのだろう。こうやってフォローを入れてくるあたり、マメな男だ。まぁ、彼からしてみれば変態紳士として当然、とか言うかもしれないが。

スオウの能力の一つ、広範囲にわたる感応能力による超感覚。彼が言うには、ちょっとしたモノを利用した手品らしいのだが、詳しい事はスオウが話したがらないために教えてもらえないままである。

「それにこの能力があれば、ティアのスリーサイズなんかもバッチリ……」

「真面目にやんなさい！！！！！」

「グハッ！！！！？」

少しスオウの事でシンミリしてしまった自分を叱りつけてやりたくなったティアナだった。

と、その時だった。

「見つけた」

「場所は？」

「ここから南東に３キロ……犯人のいる地点から３００メートル先に民間人……段々近づいて行ってる……」

ふざけていただけのように見えたスオウだったが、仕事だけはしっかりとやる男のようだ。見事にジャック・ザ・リッパーの居所を押さえた。

しかし、事態は切迫している。民間人が犯人のターゲットとなってしまうかもしれないのだ。

一応、警務部隊は各地域に展開しているが、人間のやることだ、当然穴は存在してしまうということだ。

「スオウ、あんた先に行きなさい。私を抱えて移動してちゃ、間に合わないかもしれない」

「オッケ～、それじゃ先に行って犯人に（女性なら）恥ずかしい格好させたり、（男性なら）半殺しにしとくから。ティアはゆっくり来ればいいよ。」

「あからさまな男女差別があるような発言な気がするけど、まぁいいわ。とにかく、さっさと行きなさい！！！」

「は～い」

スオウはティアナにそう言うと、その場から一瞬で姿を消してしまった。

そして次の瞬間には、アトラントの夜景をバックに、建物の屋根をどこかの英霊よろしく、物凄い速度で走って跳んでしているではないか。

「流石は……吸血鬼もどき……ってとこかしらね……。さ、私も急がないと！！」

スオウの身体能力の高さは把握済みのティアナも、少しばかり驚きはするものの、今は呆けている場合ではない。彼女もまた、ジャック・ザ・リッパーが犯行を試みるであろう地点まで急ぐ。

ティアナもスオウも、空戦タイプの魔導師ではない。時間に余裕があれば、ティアナをスオウが抱えて、移動するのだが今回はそうは言っていられない。

この前も言ったが、まさに時間との勝負であった。

「よ～し、ジャック・ザ・リッパー狩りの始まりだ♪　頑張ったら、ティアご褒美とか言って、あ～んなことや、こ～んなこととか、そ

～んなことまで……でへへ／／／／／」

とは言うものの、この主人公の頭はティアナとのことで一杯であった事は言うまでも無い。

Ａｃｔ３　ジャック・ザ・リッパー狩り（後書き）

スオウ「ティアからのご褒美……でへへ／／／／」

Ｆ２０Ｃ「だから無いってのｗｗていうか、お前の望みを実現させちゃったら、この小説一気にノクターン化するからね」

スオウ「う～む……こうなったら犯人が女性である事を祈るしか……」

Ｆ２０Ｃ「待て待て。どっちにしろモザイクフラグだよ！！！？」

スオウ「モザイクは日本の文化だから大丈夫だって」

Ｆ２０Ｃ「余計に質悪いから！！！！！」

本日のＥＤ「Ｔｒｉｎｉｔｙ　Ｃｒｏｓｓ」　ｓｏｎｇ　ｂｙ　水樹奈々

アニメ「ロザリオとヴァンパイア」より

Ａｃｔ４　狂人ＶＳ変態紳士（前書き）

さて、スオウの初戦闘ですね。
結構カッコよく書けてるかなぁ……ちょっと怖い成分含んでますけどｗｗ

あと、今回でスオウのデバイスの名前を大発表！！
数多くの名前案、本当にありがとうございました！！！

でわでわ、本編どうぞ！！！

Ａｃｔ４　狂人ＶＳ変態紳士

「いやぁ……来ないでぇ……」

「キヒッ！！！　この諸悪の根源め……キヒヒヒヒ！！！！　今すぐ……断罪してあげるよ……カカカカカカカカカカカ！！！！！」

狂ったように、いや正確には既に狂ってしまっているのだろう。ジャック・ザ・リッパー、ラドル・レンシスは血走った目と、常軌を逸した笑い声をあげながら、目の前の一人の女性に近づいて行く。

どうしてこんなことに？　じわじわと追いつめられる女性の頭の中を支配するのはそんな疑問だけだった。

看護師をしている彼女は夜勤の休憩時間を利用し、自分と同僚たちの分の夜食を買いに、コンビニまで足を伸ばして今から帰るところだった。

そう、ただそれだけだ。世間を騒がしている猟奇殺人犯の噂は聞いていたが、まさか自分がその犯人に襲われることになるなど、毛ほども考えてはいなかった。

その油断がこの状況、ジャック・ザ・リッパーに襲われているという最悪の事態を生み出したというのなら、自分の軽率且つ、危機意識の無さを呪いたくなってしまう。

だが、そんな後悔もここでは何の意味もなさない。
このままでは彼女は確実に明日の新聞のトップを飾る事になるだろう。ジャック・ザ・リッパーの１１人目の被害者という、悲劇性の高い紙面を。

「ヒヒヒヒヒヒヒ！！！！！　これで……今すぐバラバラにしてあげよう……カカカカカカ！！！！！」

そう言いながら、ジャック・ザ・リッパーは手に付けている指輪を天に掲げる。
瞬間、彼の足もとに丸い魔方陣が現れる。
それが魔法であるという事を認識した時には、ジャック・ザ・リッパーの手の中には怪しい輝きを放ったナイフのようなものが両手に二本ずつ、計四本出現していた。
先程まで何も持っていなかった筈なのに、だ。

「い、いやぁ……」

女性は後ずさる。いつの間にか尻もちを着いていたようで、ずりずりと地を這う感じだ。追い詰められた獲物の感覚を生まれて初めて体感した。

そして、その獲物を狩るジャック・ザ・リッパーのは口元を愉快に歪めながら、その手に持ったナイフを振りかぶり……

「これで……１１人目ぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！！！！！」

女性めがけて、狂気の乗った四本のナイフを投擲した。
そのナイフの予測される軌道は見事に女性を貫くコースを取ってい

る。顔・心臓・腹部・臀部など、血が吹き出るような場所をピンポイントに狙ったナイフが彼女を襲う。

女性は目の前に迫る死の脅威から目を背けるようにその双眸を閉じる。動物的本能に従い、両手で体を守るような体勢を取る。

「――――――――――っ！！！！……？？？」

だが、待てども待てども来るべき痛みがやってこない。それと同時に、金属を弾くような甲高い音が四回、彼女の目の前で起こった。

「なに……？」

女性は何が起こったのかと、恐る恐るといった様子で瞼を開く。すると、彼女の目の前1メートルあたりに、先程ジャック・ザ・リッパーの放ったはずのナイフが落ちているではないか。

先程の金属音は何かがこのナイフを叩き落とした音だったのだろう。

女性が呆けていると、同じく何が起こったのかといったような顔をしているジャック・ザ・リッパーと、女性の間に一人の黒髪の青年が上空から降り立った。

自由落下に身を任せて地面に着地した筈なのに、大きな音を立てることなく静かに着地したのだ。

そして、ジャック・ザ・リッパーの姿を見て一言。

「……野郎かよ……ｏｒｚ」

なぜか物凄く悔しそうだった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

スオウは空中でホルスターから黒く、重厚な造りの銃型デバイスを抜き放つ。

「さぁて、オルクス。出番だよ」

『御意。参りましょう、若様』

スオウの呼びかけに、銃型デバイス『オルクス』は丁寧な口調でそう返してくれる。

スオウはそのまま、空中で狙いを定める。目標は女性に向けて放たれた四本のナイフ。

スオウは四発の青い魔力弾を放つ。

時間差を与えられた魔力弾は綺麗にナイフ四本に吸い込まれ、地面にたたき落とす。

『お見事です、若様』

「あはは、どうもどうも～」

スオウはそう答えつつ、女性とジャック・ザ・リッパーと思しき人物の間に降り立つ。

「（ふ……決まった……あとはジャック・ザ・リッパーの正体が麗しの女性、そして助けた女の人からの感謝のちゅーとかを……）」

とか何とか、ティアナ聞けば殴られること間違いなしな妄想をしつつ、女性の無事を確認してから、ジャック・ザ・リッパーの素顔を拝む事にするスオウ。

「（さて、どのような美しい女性が犯人なのｋ……）」

スオウがそう思いつつ目を向けたその先には、血走った眼、それでいてスオウの突然の襲撃に驚いている小太りの男がいた。

スオウの野望（性的な意味で）は一瞬にして崩れ去った。

「……野郎かよ……ｏｒｚ」

スオウは思わずその場に崩れ落ちそうになるがなんとか堪える。そうだ、先程ティアナに言ったばかりではないか、男なら半殺しにすると。

寧ろそうやって自分を納得させなければ、心が折れてしまいそうだった。面倒な主人公である。

「お、お前……なんだなんだ！！！？　ぼ、僕の正義の鉄槌の邪魔をしてタダで済むと思っているのか！！！！？」

と、スオウが下らない事に心を痛めている間に我に返ったようで、ジャック・ザ・リッパーはそう叫び倒してくる。

「え～と……管理局の者で～す。武器っていうか、抵抗は止めて大人しく捕まりなさ～い……今なら君にも弁護を付ける余地がありま～す（棒読み）」

犯人の声に、この前ティアナに教えてもらった、犯人に対する最低限の警告をしておくスオウ。まぁ、相手が男な時点で、ボコるのは決定事項なのだが。

「か、管理局……！！！？　ふ、ふふふふふ！！！！！ヒヒヒヒヒ！！！！！！」

スオウが管理局だと名乗った瞬間、ジャック・ザ・リッパーはひどく愉快そうに笑う。

「お前……あのくそ集団の仲間かよ……僕からあの子を奪ったあいつと同じ……キヒヒヒヒ！！！！　こりゃあ良い！！！！！　管理局なんてクソ共にも、僕の正義の鉄槌を下してやりたいと思ってたところなんだ！！！！」

「うわ……何こいつ……マジキモいんですけど……」

『確かに品性に欠けますね。』

どうやら、管理局の男に女性を奪われたと錯覚しているジャック・ザ・リッパーはスオウ相手に戦うつもり満々なようだ。
スオウとオルクスは揃ってそう感想を漏らした。

「え～と……とりあえず投降の意思は無しと……。じゃあ、さっさと終わらせようか。早く帰って、えむ○むっ！　見て、その後はインデッ○ス二期見なきゃいけないからね。」

「……お前……分かって無いね……この僕の力はお前みたいな雑魚魔導師なんて目じゃないからね……泣いて詫びたって、絶対に許してやんないからね！！！」

余裕綽々のスオウに、ジャック・ザ・リッパー、ラドルは少しイラついた様子でそう睨みつけてくる。

「あ～はいはい。分かった、分かった。凄い凄い。新しいおもちゃを買ってもらって、友達に見せびらかしたいんだよね、分かる分かる。」

「ぐぬぬぬぬ!!!!!　お前、本当に管理局員か!!?　お前みたいなちゃらんぽらんに務まるようなら、管理局は大したことないな!!!」

「うっさいわ!!!　犯人が女ならって……期待してたのに……。なのにさぁ……野郎とか……。もう、俺の傷ついたハートを癒してくれるのは、ティアのご褒美か、竹達ボイスでの罵倒か、ツンデレールガンの胸キュンシーンしかないんだよ!!」

「訳の分からない事を……もう良い、お前をさっさと殺して、その女に正義の鉄槌を下す!!!!」

スオウのふざけっぷりに、ラドルはキレたようで、勢いよく指輪のはまった手を天に掲げる。すると、先程と同じように足元に魔方陣が浮かび上がる、だが同じなのはここまでだった。

「おぉ～……」

「キヒヒ……驚いたか……これが僕の全力だ……絶対に避けられない、防御も出来ないぞ!!!」

なんと、ラドルの背後には数百本のナイフが構築されていた。よく

見れば、そのナイフは魔力を具現化したものらしく、ほのかに紫色の魔力光を発している。

「ギルガ○ッシュみたいな技だなぁ……何それ、もしかしてパクリ？」

スオウはバカにしたような笑みを浮かべながら、ラドルにそう言ってやる。

どこまでも余裕を忘れない、それが変態紳士の戦い方だ。

「うるさい！！！！　さっさと死んでろよぉぉぉぉぉぉ！！！！！」

ラドルが怒り狂ったような声を出しながら、背後に出現させたナイフの山を射出してくる。さながら、本当にゲートオブバ○ロンのようだ。

ナイフの山がスオウに向かって殺到する。だが、スオウは焦るどころかオルクスを構えることすらしない。

「あの……ちょっと！！！？」

後ろで呆けていた女性も、あのナイフの数には正気に戻るしかなかったようで、何もしないスオウに慌てて声をかける。

「ふむ……」

そして、数百のナイフが近付く中、漸くスオウが動きを見せる。彼は右足で地面をトン…と叩いた。

すると……

ドフンッ！！！！

「なっ！！！？」

ラドルの目が見開かれる。
なんと、ナイフがスオウの手前1メートルの所で全て叩き落とされたのだ。
まるでスオウの目の前に、空気の壁が出来たかのようで、殺到してきた数百のナイフを全て防いでしまった。

「面白い技だけど、所詮は素人。デバイスを使うまでも無いなぁ……」

スオウはニコニコしながらラドルにそう告げる。そして、彼はオルクスをホルスターに収めてしまう。本格的にデバイスを使う必要が無いと感じたのだろう。
その台詞には降伏した方が利口だという警告の意味も含まれていた。

「く、クソぉぉぉぉぉ！！！！！！」

ラドルは再びナイフを構築し、スオウめがけて放つ。
しかし、結果は同じ。スオウの前に生まれた空気の壁のようなものに全てが阻まれてしまう。
彼はその場を一歩も動くことなく、少し退屈そうでもあった。

スオウにとって、これはただのゲームだ。
ボスキャラの強さが大したことのないゲームに何の魅力も感じられない、彼の退屈そうな表情の真相はそう言ったことだろう。

「な、何なんだよ……！！！　どういうからくりなんだよ！！！！！」

「敵に教えるわけ無いだろ.ｊｋ」

攻撃が通用しない事に焦りと怒りが混じり合い、混乱の極みにある様子のラドル。

スオウは、最早ラドルに興味を失いつつあった。

「くそ、クソクソクソクソ！！！！！！！　僕は正義の鉄槌を下す使者なんだ！！！！　僕がこんな奴の負ける筈無いんだ！！！！」

混乱の中にあるラドルは駄々っ子のように地団駄を踏む。その姿は大の大人とは言い難く、見るに堪えないものだ。

「もういいや。飽きた。」

それが最後だった。その見苦しい姿にスオウは笑みを薄めて、ゆっくりと右手を前に、ラドルの方に出す。

「がっ！！！！！？　あ……あぁ……い、息……息が……くる……し……」

スオウがラドルに手を向けた瞬間、ラドルは首に手をやり苦しみ始める。

どうやら、呼吸が困難な様子だ。

見えない何かに首を絞められているようでもある。みれば、ラドルの体は中に浮かばされている。

そして、無様にもがき苦しむラドルに、スオウは薄い笑みを、まるで汚物を見る様な目を向けながら口を開く。

「正義の使者か……あははっ！！　さっきから面白い事を言うねぇ、ほんと。……思いあがるな『人間』」

「か、かひっ……かはっ！！！……あが……」

その言葉はただの侮蔑を込めた台詞ではない。ましてや、ただの空気振動の生み出した波でも無い。
そう、その言葉は武器だ。

そして、スオウの黒い瞳は真っ赤に染まっており、凍てつくような視線がラドルを貫く。

「お前がやって来た事はただの八つ当たりだよ。騙された？　奪われた？　断罪する？　お前にそんな資格なんてありはしないんだよ……身の程を弁えろ、人間」

「ひ……あひ……」

その言葉は剣でもあり

「騙すほうも悪いけど、騙されるお前もお前だよ。……少しは頭を使え、人間」

「がぁ……ぎひ……」

槍でもあり

「全ては自業自得だね……理解したか、人間？」

銃でもある。

「物事の因果の基礎も理解しないで、正義の使者気取り。あはは！　……気持ち悪くて吐きそうになっちゃうよ。」

スオウは笑みを戻し、ラドルにそう吐き捨てる。そして、最後に留めの一言を、満面の笑みで告げる。

「自分だけが不幸だとか、そんな幻想に酔ってさ……ほんとイライラするなぁ……いい加減にしとかないと……殺しちゃうよ？」

「ひ、ひぃ……！！」

その瞬間、スオウの表情を見たラドルは薄れていく意識の中で確信した。

目の前に居る男は、『笑いながら人を殺せるタイプ』だということを。

「あ……あが……かひ……」

『若様、その辺りしておかれませんと、死んでしまいます。奥様よりのご命令は捕獲でございますれば……』

「あ、そうだったね。」

ラドルが白目をむき始めた所でオルクスからの言葉で、ティアナとの約束を思い出したスオウ。

ラドル向けていた右手の力を緩める。

「カハッ！！！　はぁ……はぁ……」

ラドルは呼吸ができることを脳が認識すると同時に、肺に空気を入れる。

恐らく、呼吸できる事の嬉しさを体で実感していることだろう。

「あ～危なかった。あと少しで殺しちゃうとこだった。危うくティアに怒られるとこだったよ、ありがとオルクス」

『お気になさらず。それに、その様な男、若様が手にかける価値もございません故』

「いやぁ、ホントにお前は優秀だねぇ～。」

『光栄です、若様』

スオウはオルクスとそんなやり取りをしつつ、後ろで唖然としていた女性に歩み寄る。

「大丈夫ですか？」（清々しい笑顔）

「あ……は、はい！！　その…助けていただいてありがとうございます！！」

「いえいえ、あなたの様な美しい女性の危機とあっては、変ｔ……もとい、紳士として助けるのは当然の事ですよ」

スオウの爽快な笑顔に女性は少し頬を赤らめる。

スオウの心の中では、『計画通り……キリッ』のＡＡが出現していることだろう。

だが、その時スオウの背後でラドルが再び動こうとしていたことに女性が気がつくと、安堵しきっていた表情は一瞬で曇ってしまう事になる。

「認めないいいいいい！！！！！　認めないぞ、僕はぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！」

そう叫びつつ、ラドルは力を振り絞って四本のナイフを出現させ、背中を向けているスオウに投げつけてきた。
隙を狙っていたのだろうか、タイミングだけはバッチリだった。

だが、最後までラドルの攻撃はスオウに届く事は無かった。

「さすがはマイハニー。登場のタイミングって言うのをしっかり測ってたね」

スオウが笑みを浮かべながらそう呟くと同時に、飛んで来ていたナイフはオレンジ色の魔力弾によって全て撃ち落とされてしまった。

「測って無いわよ、バカ」

「あぁん、つれないティア……。でも感じちゃう、ビクンビクン」

「ダメねこの補佐……早くなんとかしないと……」

スオウが声を発したその方向には、クロスミラージュを構えたティアナの姿があった。

「か、管理局が……二人！！！？」

今度こそ、ラドルに勝機は無くなった。まぁ、そんなものは最初から欠片も無いのだが。

スオウは女性の無事を確認すると、再びラドルに向き合い、先程ナイフを防いだときのように、足で地面をトンと叩いた。

ゴフンッ！！！

「うべっ！！！！？」

その瞬間、ラドルはまるで何かに押しつぶされたような声を出して地面に這いつくばらされた。

無論、先程と同じように、ラドルの体の上に何かが乗っている訳ではない。

そう、まるで見えない岩の下敷きになっているかのような状態だ。

「この指輪、うざったいから没収ね」

「く、クソ……この……化け物が……」

スオウは動けないラドルの指から、不可思議な魔法を扱う指輪を抜き取る。

ラドルは悔しげな声で、スオウにせめてもの侮蔑の言葉を浴びせる。

スオウは全く意にも介していなかったが。

「化け物……ね……。私にはスオウよりもあんたの方がよっぽど化け物に見えるけどね。」

「なに……？」

「あんたは心が化け物なのよ。あんたと比べたら、スオウの方が何千倍も良い男よ……変態だけどね」

苦々しい顔をして地面に這いつくばるラドルにティアナはそう止めを刺す。

武器を失ったラドルに成す術はなく、地面に突っ伏した。

「ジャック・ザ・リッパー、あなたを殺人及び殺人未遂の現行犯で逮捕します」

ティアナがそう言ってラドルをバインドで拘束した。

この瞬間、アトラントを震撼させたジャック・ザ・リッパー事件は終幕となったのだった。

「ティア～、ご褒美のちゅーを～♪」

「アホかぁ！！！！！」

「あべしっ！！！」

最後まで煩悩全快なスオウはティアナの後ろ回し蹴りを食らい、夜空に輝く星の一つとなった……

Ａｃｔ４　狂人ＶＳ変態紳士（後書き）

Ｆ２０Ｃ「というわけで、デバイスの名前は霧丸さんから頂いた『オルクス』に大決定ですｗｗその他にも様々なデバイス名前案を送っていただき、本当にありがとうございます」

スオウ「採用を見送らせていただいた名前案は敵キャラのデバイスの名前を付ける時に使用させていただいたりしたいですねｗｗ」

Ｆ２０Ｃ「で、今回で事件は解決だね。次回は少しアトラントの話をした後、ティアナとスオウの出会いのお話を回想として入れたいと思いますｗｗ」

スオウ「ふむ・・・・それが終わったら？」

Ｆ２０Ｃ「そうだね、その次はまた新しい事件だね。でもって、そろそろ敵みたいなキャラも出していきたいなぁ」

スオウ「なるほど、俺とティアのベッドインにはそいつ等を蹴散らす必要があるのか……」

Ｆ２０Ｃ「あながち間違ってないけど止めてくれない、その言い方！！！？ていうか、今日の後半のお前、完璧にダークサイドに浸かってるじゃん！！ダース・ヴェイダーさながらじゃないか！！！」

スオウ「暗黒面の力を見せつけてやんよ！！！！」

本日のＥＤ『Ｓｏｃｉｏｍｅｔｒｙ』　ｓｏｎｇ　ｂｙ　ＫＯＴＯ

KO

TVアニメ「灼眼のシャナ」より

Ａｃｔ５　運命の出会い？（前書き）

さて、今回の最後らへんで、我らが大統領の・・・・・・・名前だけが出てきます。
そのお名前にご注目ｗｗ
今作は、前作のＬｏｓｔ　Ｍｅｍｏｒｙの続編でもありますからね。
あの大統領が出てくるのは、もはや当然といいますかｗｗｗ

あのお方の、ナチュラルエロスフェイトさんの出番も近い！？

そんな感じで始まります、Ａｃｔ５。
ティアナとスオウの出会いのお話です。あと、今話で敵キャラがちらっと出てきますので、どうぞお楽しみにｗｗ

でわ、本編どうぞ～ｗ

Ａｃｔ５　運命の出会い？

「ね～ね～ティア～。俺頑張ったんだよ～？　めっちゃ走ったんだよ～？　ご褒美のちゅープリーズ～♪」

「ア～ハイハイ、ソノウチネー」

「あぁん、ティアのいけず……そんなに俺を焦らして……焦らしプレイなのか？　そうならそうと言ってくれないとさぁ、ＳとＭの間の存在である俺にだって心の準備って言うものが……」

「今すぐ火あぶりにしてあげましょうか？（満面の笑み）」

「さ～て、張り切って帰還の準備しよー！！！」

スオウはティアナの殺気の籠った視線を感じると、物凄いスピードでアトラントを出発する準備を始める。
余りのスピードにスオウの姿が分身して見えるくらいだ。

「まったく……もう……」

ティアナはやれやれといったような、それでいて「困った奴ね」というような優しげな表情で大慌てで帰り支度を進めているスオウを見つめる。
昨日のジャック・ザ・リッパーを追い詰めていた時の、勇敢さなど欠片も見えない。だが、なんとなくだが、それでこそスオウなのだ

と思えてしまうから不思議だ。

ジャック・ザ・リッパーはあの後、警務部隊に引き渡し、彼らの方で管理局に移送される手はずになっている。
あの、謎の指輪がないラドル・レンシスには、ハッキリ言って脅威となる可能性は無かった。
どうやら、あの指輪がラドルにあの不可思議な魔法の使用を実現させたらしい。指輪に関してはまた調査が必要だろう。

取り調べによれば、指輪を渡してきた人物の顔も名前も知らないらしい。
恐らく、指輪を渡した何者かにとっては、ラドルなど捨て駒以下の存在だったというわけだろう。
口封じにも来ないのが良い証拠だった。

まぁ、結果だけを言えば、もうアトラントの人達がジャック・ザ・リッパーなどという存在に怯えながら夜を過ごさなくてもよくなったということだ。

警務部隊のカームからは、スピード解決に驚きと賞賛、そして感謝の嵐だった。
スオウにも別件で感謝の言葉を述べていた。どうやら、奥さんとは話し合えたらしい。

「ねー、ティア～？」

「なにかしら？」

と、今回の事件の事を頭の中で整理していたティアナにスオウが声をかける、見れば準備は大詰めのようで、あと5分もあれば終わる

量だろう。

「次は何すんの？」

「次ね……とりあえず、提督に報告しに行くから本局かな……。その後も多分すぐに仕事だと思うわ」

「そっか。なぁなぁ、オルクス。次はどんなとこ行くんだろうな？」

『そうですね……アトラントのような温暖な所が望ましいですね。気温が極端な土地は体調を崩し易いものです。』

ティアナに今後の行動について聞いてくるスオウ。彼女の予測に、何やら嬉しそうにオルクスに話しかけている辺り、仕事というよりも世界を渡る事を楽しんでいるようにも見える。いや、実際そうなのだろう。

「（ま、そうやってのほほんとしてくれてる方が、私としても気が楽だし、良いんだけどね）」

ティアナはそう考えながら、ソファに座り直す。ホテルのチェックアウトの時間までまだ時間がある。

時間が余ってしまうと、物思いに耽るのが人間というモノだ。そして、ティアナもまた、それから漏れることはない。

彼女は少し、昔の事を思い出し始める。内容は、今まさに目の前に居るスオウについて。

そう、ティアナとスオウが出会った頃の事だ……

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「ここがテロリストの潜伏先………。随分と豪勢な隠れ家ね………」

そう呟きつつ、ティアナは目の前の建物を見る。そこには築１００年ほどだろうか、しかし、年数を重ねた趣、そして豪勢さが古さという部分を帳消ししてしている。

ティアナはクロノの要請でとあるテロリスト集団の潜伏先とされている豪勢な屋敷を訪れていた。
テロリスト集団といっても、情報では管理局との戦闘によって、その数は確認しているだけでも３人だけ。ハッキリ言って、集団と呼ぶには些か少なすぎる。

ティアナはその残りの３人の拘束の為に、ここ、アスタールという世界に来ていた。
彼女がこの任務を請け負う事になったのには理由がある。
こちら側、つまりは管理局側もテロリストとの戦闘でかなりの痛手を負ってしまったらしい。なんでも、以前の潜伏先に小隊を三隊派遣したらしいのだが、ものの見事に敵の罠に嵌ってしまったらしく、なんとか敵の大部分を拘束したはよかったものの、こちらもかなりの痛手を負ってしまったとのことだ。

そこで急遽助っ人として指名されたのがティアナだったというわけだ。能力的にも彼女ならば申し分ないと、クロノからのお墨付きをもらった上での単独任務、まぁ、単独任務などは執務官ともなれば日常茶飯事なのだが。

「さてと………」

ティアナは気配を殺しつつ、建物の中の侵入して行く。相手は三人といえども手負い、加えて能力的には大したことはない。だが、そこに油断が生まれれば、命取りになる。
故にティアナ慎重に歩みを進める。

「（トラップ魔法の類は今のところ見られない……か……）」

魔法を利用した設置型のトラップは今のところは見受けられない。
単に相手が油断しているだけなのか、それともっとほかの何かを仕掛けているのか。
どちらにしろ、この静けさと建物の雰囲気が相まって、不気味なことこの上なかった。

と、彼女がそんな事を考えていた時だった。前方から、何か光るものが飛んできたは。

「っ！！！？」

ティアナは体を捻り、その光る何かを避ける。だが、完全には避けきる事が出来なかったようで、彼女の頬からは少し血が滲んでいた。
そして、ティアナは飛んできた何かの正体を確かめる。

「槍…？」

ティアナの後ろに位置する壁には物々しい造りをした槍が突き刺さっていた。まともに食らっていれば、串刺しになっていたかもしれない。

「こんな屋敷の奥にだけ仕掛けておくだなんて……。ここに居ますよって言ってるようなもんじゃない……」

このトラップの配置の仕方だけで、ティアナはテロリストの力量を正確に把握した。
ハッキリ言って、雑魚も良いところだ。驕るわけでもなく、ただ客観的にそう判断した。

そして、それから歩くこと数分、それまでにもこれ見よがしにトラップがあったが、気にするようなものでもなかった。
ティアナは屋敷の最深部であろう大広間の手前まで来ていた。

ティアナはクロスミラージュを抜き、大広間に通じる扉にカバーポジションを取るような体勢になり、そぉっと扉を開き、中の様子を窺う。

「！！？」

そこにはティアナの予想だにしない光景が広がっていた。

「あ……が……」

「痛ぇ……痛ぇよぉ……」

「はぁ…ゲハッ……」

大広間にはテロリストの三人組らしき男たちが半べそになりながら、あるいは痛みに呻きながら、床に倒れていた。

そして、その男たちの前方には扇状に広がった形で設置されている七つの椅子。さらにその背後は豪勢なステンドグラスになっており、

太陽の光を浴びてそれは美しい芸術品となっていた。

だが、ティアナが目を止めた所はそこではない。扇状に並べられた七つの椅子の真ん中の席に座っている黒髪の青年だ。

瞼を閉じたまま、身動き一つしないが、目の前に転がっている男たちと違い外傷らしきものは全くない。

となれば、この男たちを痛めつけたのはこの青年という事になる。

「（兎に角……入るしかないか……）」

ティアナはそう覚悟を決めると、ドアをゆっくりと開き、クロスミラージュを構えながら大広間に入っていく。

それと同時に、テロリスト（瀕死）はティアナの存在に気がつくと、涙ながらに命乞いをしてきた。

「あ、あんた！！！　魔導師だろ！！！？　あの化け物をなんとかしてくれ！！！」

「もう、管理局でも何でもいいから！！！！」

「俺達……殺されそうに……」

何というか、むさい男三人に詰め寄られると、軽く引いてしまうティアナだが、男たちの様子から放っておいても大丈夫であろうことは確認できた。

「はいはい。あんた達は後でまとめて連行するから、ちょっと待ってなさい。」

ティアナはそう言うと、三人にバインドを施し、万が一にも逃げられないように縛り上げておく。
そして、そのまま椅子に座っている青年に近づいて行く。近くで青年の様子を確認するティアナ。
かなり近づいた筈なのだが、青年は一向に起きる気配する見せない。

「すぅ……すぅ……」

「……寝てる…？」

ティアナは大胆にも青年の呼吸を確認してみると、彼からは規則正しい呼吸音が聞こえてきた。
というか、この謎の青年。ただいま絶賛爆睡中のようだ。

「むにゅ……奈々様……紅白出場おめ……」

この青年にとってのホットなニュースが既に終わってしまっている事だけが確認できる寝言だった。

「えぇと……もしも～し？」

ティアナは意を決して青年を起こしてみる事にする。先程のような寝言を言う人物が、危険人物だとは、少し判断しきれなかったのだ。

「ん～……あずにゃんぺろぺろ……でへへ……」

別の意味で危険人物かもしれない。

「性犯罪者予備軍として拘束した方がいいのかしら……」

「ん…んん…？」

ティアナが青年の処遇について少し考え直していると、どうやら爆睡モードから目が覚めたようで、彼の瞼がゆっくりと開いて行った。そして、目を覚ましたらしい青年の目の前にはティアナの顔のどアップが。

寝ぼけた様子のその青年はティアナの頬から血が滲んでいる事に気がつく。

そして、ティアナが青年の起床に少し驚いている間に、彼はとんでもない行動に出る。

「血……いただきまふ……」

「へ…？」

ペロ…

なんと、青年はティアナの頬から流れていた血を舐め取ったのだ。

突然、加えて衝撃的な事態に、流石のティアナもフリーズしてしまう。

でもって、血を舐めた青年も何か衝撃的な事に気がついたらしく、寝ぼけ顔も消し飛んだように覚醒し、目を見開く。

「美味い……何これ……？」

ペロ……

そして、もう一舐め。ティアナはフリーズしてしまっているため、

その事に気を回すことも出来ない。

一方の青年はティアナの血に何かを感じたようで、表情を少し明るくした。

「へぇ……面白い女だな、お前……こんなに上手い血……生まれて初めてだ……」

その台詞で、漸くティアナのフリーズが解ける。そして、慌てて青年から体を離し、クロスミラージュを突きつける。

「あああああああ、あんた！！　にゃにしてくれんにょよ！！！！？」

「台詞噛んでるよ」

謎の青年の的確な突っ込みに、ティアナは『うっ』っと呻く。突然頬を舐められたのだ、噛んでしまっても仕方ないだろうが、青年はそんな事お構いなしだ。

「そうか……お前が俺の……」

そうやって、一人で納得して嬉しそうに、そして楽しげに笑う。その表情だけは、まるで子供のようだった。

「なぁ、お前」

「な、何よ！！」

余裕たっぷりな様子で、椅子に座り足をクロスさせる青年。

その姿にはどこか……そう、王のような風格すら感じてしまった。
先程の行動から、そんな素養があるとは思えないのにもかかわらず、だ。

「お前、俺の女に、いや、少しアレな言い方かな……。うん、そうだ。……お前、俺の嫁になれ、俺はお前が欲しい」

「はい…？」

出会って約５０秒。ティアナはいきなりプロポーズされた。
流石に、そんな数十秒でそんな申し出を受けるなどとは思ってもみなかったティアナだったので、彼の言葉を理解するのに約１０秒かかった。

でもって、１０秒たった後。顔を真っ赤にさせ、再び青年に噛みつかん勢いで叫び倒す。

「ふ、ふざけんじゃないわよ！！！！　なんでこんな辺鄙な場所で、出会って一分そこそこのあんたと結婚！！！？　電撃結婚なんてもんじゃないでしょうが！！！！　音速、いえ光速結婚レベルよ！！！」

「う～ん……その例えはどうかと思う。何というか、うん、切れが無い」

「～～～～～～～～っ！！！！！！！！」

その出会って一分の男にダメだしされてしまい、ティアナは状況も忘れて頭を抱えたくなった。
自分の中の何か大事なものを吹き飛ばされるような感じだった。

「ま、俺もいきなりそんな無茶が通るなんて思っちゃいないよ。ティアナ・ランスター」

「あ、あんた……どうして私の名前を……！！？」

青年は目を瞑りながらティアナにそう告げる。彼が知る筈の無いティアナの名前を言い当てて。

「ティアナ・ランスター、陸士訓練校を首席で卒業。元機動六課スターズ分隊所属。ポジションはセンターガード、現在は管理局の執務官。得意魔法に幻術魔法、加えてそれらを組み合わせて戦う戦略タイプの魔導師。執務官を目指した動機は、過去に亡くなった兄の夢を代わりに実現させたかったから」

「な……なんで……」

ティアナの経歴ばかりか、戦闘のスタイル、そして過去、執務官を目指した動機まで、ピタリと言い当てる青年に、ティアナは今日初めての恐怖を覚える。

そんなティアナに、青年はニッコリ笑いながら短く答える。

「君の心がそう言ってる」

「こ、心……？？」

訳が分からない。ティアナの頭の中は混乱していた。

テロリストを追ってきて、そのテロリストはすでに戦闘不能。しかも、それよりもヤバそうな存在がいた。しかも、そのヤバそうな奴にこうして口説かれているのだから。

「あぁ、でもって少し気になってるみたいだから説明しておくと、後ろに転がってる連中は、勝手にここに入って来たからボコにしただけだよ。」

「っ！！！」

今度は心の奥底で考えていた事に、答えを出してきた。
そして、青年が目を開くと、驚く事に彼の瞳は真紅に染まっていた。
先程までは真っ黒だったにも拘らず。

「（まさか……読心術！！？）」

「あはは、違う違う。これはただの手品、そんな大層なもんじゃないよ。ちゃんとタネも仕掛けもあるからね」

またしても読まれた。
だが、青年が言うには読心術ではない、手品だという。

「ど、どういうことよ！！」

「う～ん……それは黙秘で。あんまし話したくない」

「そんな言いわけが通用するとでも……？」

ティアナの問いに黙秘権を行使した青年に再度クロスミラージュを向けるティアナ。
だが、青年は全く動じない。
代わりに、彼は右手をティアナに向けてきた。

「え？」

と、それを確認したが最後だった。ティアナの手に収まっていたクロスミラージュはまるで青年の手に吸い寄せられるように空中を舞い、彼の手に収まる。

ティアナ、不覚にも丸腰になってしまった瞬間だった。

「まぁまぁ。俺は君に何かしようと思ってるわけじゃないんだ。ただそうだなぁ……うん、君に惚れたって言えばいいのかな？」

「ほ、惚れたって……」

青年はクロスミラージュを手の上でくるくると回しながら、ティアナにそう告げる。全く恥ずかしがること無く、ティアナに惚れているとカミングアウトしてきた。

「さっき言った通り、俺は君が欲しくなった。だから……」

「え…きゃっ！！」

そう言った瞬間、青年の姿が一瞬のうちに掻き消え、気がつけばティアナの背後に回っていた。

加えて、ティアナを先程まで彼が座っていた椅子に座らせる。その手つきは優しく、まるでガラスを扱うような丁寧さだった。

「君の事、少し傍で見ていたくなった。君の事、知りたくなった。……ダメかな？」

「……」

その瞬間だけ、青年の瞳はひどく真剣だった、そして、その真剣さに負けないくらいに怯えていた。
先程までの動作で、彼の戦闘能力の高さは把握できた。
あれほどの力を持ちながら、何に怯える必要があるのか。ティアナには分からなかった。

こんな突然の申し出、告白、プロポーズ。普通なら相手にもしないだろう。
だが、なかなかどうして不思議な事に、ティアナは彼から目を離せなくなった。これも彼の能力なのだろうかと思ってしまうくらいに、彼の寂しげで真剣な瞳に見入ってしまった。

ティアナが黙りこんでからも、青年は一言も言葉を発すること無く、ただティアナの答えを待っている。

「……」

ティアナは……いや、彼女もまた、知りたくなってしまった。彼の持っている能力の秘密や、彼の抱えている物。
そして、真剣さの中に同居する、何かに対する怯えの正体を確かめたくなった。
自分でもおかしなことだとは理解している。あって間もない男の事でここまで真剣になってしまっている自分が不思議でならない。

だが、それが分かっていても尚、知りたくなってしまった。
心の中の何かが、ここで何もしなければ、絶対に後悔すると叫んでいた。

「……あんた……名前は？」

そう思ったが最後、ティアナは青年の名前を聞いていた。
そのティアナの問いに、彼はにこっと笑い、自分の名前をティアナに教えたのだ。

「俺は……スオウ。今日から、君のパートナーのスオウだ」

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「（そう言えばあれから苦労したわね……。クロノ提督にイロイロ無理言って、スオウを局に入れたり、補佐の試験を受けさせたり……。ムカつく事に補佐の試験、私と同じ満点パスしちゃったけど……）」

ティアナは回想を終え、ソファに座ったまま背伸びをする。
スオウのスペックは身体能力だけではなく、知能も文句なしだった。
もちろん、ティアナの教え方の上手さというものもあるが、まさに、スポンジのように教えた事を身に付けていくため、教える側としてはこれほど楽な相手は他に居ないほどだ。

スオウの能力についても、あの真剣さと恐怖が同居した瞳の理由も、まだティアナは分かっていない。
だが、その答えは恐らくもうすぐ出る。これは確信だ。
スオウを傍に置いておこうと決めたあの時と同じ、ハッキリとした予感。

「さて、スオウ？　もう準備は出来たわよね？」

「あ、うん。もうすぐにでも出られるよ。」

ティアナは自分の中の確信を信じる事にする。そして、いつもニコニコしているスオウの事も信じる。
それが最も良い選択だと、迷うことなく判断できる。

「じゃ、行くわよ。付いてきなさい」

「はいよ～♪」

そして、今日もまた。スオウを隣に、また新しいスタートを始める。
これが、ティアナとスオウの為の物語の始まりなのだ。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

どこかの世界……

月明かりだけが光源の薄暗い建物の中、そこにフードを頭からすっぽりとかぶった二人組が居た。

「で、あの指輪はだめだったのか？」

「ダメダメだった……ていうか、管理局に使用者を押さえられちまった。ま、人間には無理な話だった手わけかな？」

二人は他愛も無い世間話でもするかのようだ。いや、彼らにとっては世間話に等しいのだろう。アトラントでのジャック・ザ・リッパー事件の原因の一つ、あの謎の指輪についての事ですら。

「そう言えば、プライドとラスト……あとグリードは？」

「ダメだな。あの三人はどこに居るのか皆目見当がつかない。ま、もともと俺たちの計画には乗り気じゃ無かったが」

「えぇ～……てことは俺とグラトニー、ラースとエンヴィーだけってこと？」

「そうなるな……。だが、さほど変わりはないだろう？」

二人だけが分かる名前を出す。その者たちは、二人の仲間であり、同類であり、友達でもある。

「王が三人もいないってことは、その分、残りの四人に掛る負担が大きくなるってことじゃん……めんどくさいよ……」

「そう言うな。これは私達にしかできないこと。いや、私達だからこそできることなんだ。」

「まぁ、そうなんだけどさ……」

フードの人物の片方が肩を落としながら愚痴る。どうやら、目的意識はあるのだが、少々めんどくさがりらしい。

「で、そんな君にさっそく仕事だ」

「うげ……ほら来たよ……ラースは何でもいきなりなんだもんなぁ……」

「そう言うなって。面倒かもしれないけど、やらなきゃいけない。私たちはその為の存在なんだから」

「分かった、分かったよぉ……。その話はもう聞き飽きた。やるよ、やればいいんでしょ」

仕事を命じられた方のフード人間はやれやれといった感じでそういう。

そして、ラースと呼ばれた人物が、仕事内容を告げる。

「管理局のトップエースを何人か消してきてくれ。ここにリストがある」

「ほいほい。えぇとどれどれ……ふぅん……やっぱり人間なんてこの程度なんだね。レベル低くて笑っちゃうかも」

「そうかも知れないけど、油断だけはするな。仮にもトップエースだ。特に、その丸で囲ってある奴らは要注意だ」

ラースはそう言って手渡したリストのページを開き、その要注意人物を指さす。

「えぇと…高町なのは……八神はやて……フェイト・T・ハラオウン……ルーク・R・ハラオウン……はいはい、了解っと。ラースがそこまで言うくらいだしね、気を付けるよ」

「あぁ、そうしろ。で？　誰から行くつもりだ？」

ラースは最初のターゲットを、リストを持った人物に尋ねる。
その人物は少し悩んだあと、ターゲットを指さした。

「なるほど、ルーク・R・ハラオウンか……」

「一番強そうだしね。面倒なのは最初に済ませとくよ。あとはゆっくり、僕のペースで、ね？」

「好きにすると良い。時間は腐るほどある。」

ラースとの会話はそこまでだった。
謎のフード男はリストを懐にしまい、部屋を出る。

「さ～て、水の王、スロウス。お仕事行ってきま～すっと」

「真面目にやれ」

ラースからのお小言を背に、スロウスはその建物から飛び去って行った。

Ａｃｔ５　運命の出会い？（後書き）

Ｆ２０Ｃ「ついに出てきたね……名前が・・・・・」

スオウ「アンリミテッド・シュガー・ワークスの使い手の一人、ルークの旦那……そして、ナチュラルエロスで旦那の心を鷲掴みなフェイトさん……なんだろう、病院でインシュリン貰って来た方がいいのかも……」

Ｆ２０Ｃ「それは是非ともお勧めするよ。さて、敵もちらっと出てきましたね。水の王、スロウス。我らが大統領の命を狙っているみたいだけど……」

スオウ「ま、旦那なら万が一ってことも無いでしょ……多分。」

Ｆ２０Ｃ「ま、旧主人公なりに頑張ってくれるさ。」

ルーク「なんだろ、そう言うわれると急に年取った気がするのは…」

本日のＥＤ「Ｌａｓｔ　Ｉｎｆｅｒｎｏ」　ｓｏｎｇ　ｂｙ　Ｃｅｌｕｉ

アニメ「伝説の勇者の伝説」より

ＲＡＹさんアイデア、アイデア採用させていただきましたｗ

Ａｃｔ６　導かれし変態達（前書き）

さて、皆様やって参りました。
ついに、満を持してあのお方が、エロティック大統領がご降臨召されます。

合言葉は「フェイトさんは俺の嫁」です

前作の主人公も結構絡んでくる予定なので、皆様どうぞお楽しみにｗｗ
さてはて、フェイトさんとどのようなリア充生活を送っているのやら……

でわ、本編どうぞｗｗ

Ａｃｔ６　導かれし変態達

突然だが、皆さんは『リア充』という単語をご存じだろうか？
知っている人も、そうでない人も、もう一度辞書（自分の心の広辞苑）を引いて確認してもらいたい。その意味する事がよく理解出来ることだろう。

リア充とは要するに、リアル（現実）の生活が充実している人物のことである。仕事や恋愛方面で、非常に充実している者たちがそう呼ばれる。
そして、非リア充の敵でもある（嫉妬的な意味で）。

リア充になるためには、様々なファクターが必要だ。外見的アドバンテージ、知識、要領の良さ、人当たりの良さ、フラグ構築力、友達百人出来るかな、くらいのコミュニティ構築能力…ｅｔｃ……

ともかく、そんな様々な人間的ステータス、運を持っている人物達がリア充になりやすい。
本人にその自覚が無い場合のリア充もいる。

でもって、この人もまた、リア充と呼ぶにふさわしい人物だと、リア充と呼ばれる社会のヒエラルキーに組み込まれて然るべき存在であるということは、最早言うまでも無いことだろう。

「う～……？」

「ほ～らシエル。お母さん、ここで待ってるよ～早くおいで～♪」

「あはは……シエルは結構立つのが早いみたいだね、リンディさn……お、お義母さんもそう言ってたよ……」

ここは管理局のオフィスの一室。とある執務官の専用オフィスである。

金髪紅眼の男女、そして同じく金髪に紅い瞳を持った、一歳くらいの男の子。

男女二人は幸せそうなオーラ全開で、自分達の子供のよちよち歩きを見ていた。たどたどしいながらも、少しずつ母親の胸の中目指して歩いてくる姿はどこか癒されてしまう。

「う……あぅ」

ぽすん

と、金髪の男性がそんな事を言っている間に、男の子は母親の胸に倒れ込む形でゴールした。最後の最後でバランスを崩してしまったらしいが、歩き始めたばかりだという事を考えれば幸先良いものと思っていいだろう。

「頑張ったね～シエル」

「おかーさ」

「はは……多分「お母さん」って言いたいんだろうな。」

「子供って、一歳くらいで、一つ、二つの単語を話すようになるみたいだしね。」

子供の成長を実感し、嬉しくなってしまう大人二人。
去年授かった我が子だが、一年経っても毎日が発見や驚きの連続である。

さて、話を戻そう。
結果だけを言うと、この金髪の男性、ルーク・R・ハラオウンはリア充だ。もう憎らしいくらいに。

「それで？　忙しい筈のお父さんはこんなところで油を売っててもいいのかなぁ？　ねぇ、シエル～？」

「あぅ！」

「う……だって……気になるんだもん……。ていうか、息子よ……その『お母さんは俺に任せてお前は稼いで来い』見たいな視線を送るのはやめてくれ……」

金髪の女性、ルークの嫁であるフェイト・T・ハラオウンと、息子のシエルに意地悪な質問をされ、ちょっと縮こまってしまうルーク。
この父親にしてこの子有り、という感じで、シエルは母親を特に好いている。加えて、ルークの部下であるアイリスにもダダ甘えな態度を取る。

要するに女性が大好物（性的な意味ではなく）なのだ。これは父親からの遺伝だとしか言いようが無い。
エロティック大統領の血は確かに受け継がれているのだ。

「でも、最近また忙しくなってるんでしょ？　クロノから聞いてるよ？」

「あぁうん……。変な事件が立て続けて起きててさ……。ティアナも確かアトラントって所に捜査に駆り出されたとか何とか……」

「そうなんだ……ティアナとは2ヶ月くらい前に会ってそれっきりなんだけど……。そう言えば補佐の子が付いたとか噂を聞いた事があるなぁ…」

フェイトはシエルを抱っこしながら、ルークとの話を続ける。ここ最近、不自然な事件が多発している事は局内でも少しだが懸案されるべき問題となっている。
ティアナが送り込まれたアトラントの猟奇殺人もその一つというわけだ。

Ｐｒｒｒｒｒ・・・・・・・

と、二人がそんな話をしている時フェイトのオフィスに備え付けられている液晶端末から通信が入った事を告げるコールが鳴る。ディスプレイに映し出されたアイコンを見るに、内線のようだ。

フェイトはルークにアイコンタクトを送り、シエルを彼に預けた上で通信を開く。

「はい、フェイト・Ｔ・ハラオウン執務官です」

『ティアナ・ランスター執務官です。お久しぶりです、フェイトさん』

「あれ？　ティアナ？」

通信の相手は、今まさに話に上がっていたティアナその人だった。

『お忙しいところ申し訳ないんですけど……ちょっとフェイトさんとシャーリーさんに見ていただきたい物がありまして……』

「見てもらいたい物……もしかして、アトラントでの事件で何かあったのかな？」

『お話が早くて助かります。実はそうなんです……。犯人の持っていた指輪の解析をお願いしたくて……』

ティアナからの連絡は証拠品の解析だった。フェイトはルークから聞いていたティアナの任務からアトラントで何かあったのかと予想したのだ。

デバイスマスターであり、メカに強いシャーリーと先輩執務官のフェイトの意見を聞きたいというわけだ。

「うん、わかった。今からおいで？　ちょうどシャーリーも、あとルークもいるから」

『あはは……相変わらずラブラブですね、お二人とも。未だに新婚さんみたいですよ？』

「はぅ……／／／／／／／／／／」

ティアナから少しからかわれただけで真っ赤になってしまうフェイト。周囲の人間から、万年新婚夫婦と呼ばれているのも無理はないだろう。

『では、五分後にフェイトさんのオフィスに向かいますので……

ってコラ！！！スオウ！！！　またあんたはなんの脈絡も無く女の子ナンパするんじゃないの！！！！』

『違うから！！　ただ単にスリーサイズ聞いただけだよ！！！』

『余計に質が悪いからやめなさい！！！！』（バチィィィン！！！！）

『ふべらっ！！！！？』

と、会話の途中で急に賑やかになった通信の先。聞き覚えのない男の子の声だった。察するに、ティアナに付いたと噂の補佐だろうか。加えて、ハリセンで叩かれたような強烈な音と、補佐らしき男の子の悲鳴が聞こえた。

「ティ、ティアナ？？　どうかしたの？」

『あぁ、えっと……すみません。私の補佐がちょっと……。で、では、五分後に失礼します！！』

「あ、あぁはい……待ってるね」

そうして、通信は終了した。何やら賑やかな補佐官を採用したらしく、ティアナは忙しそうだった。

執務官になってから様々な方面で活躍しているらしいティアナだが、意外な弱点は案外身近にいる補佐なのかもしれない。

「ティアナ、今からここに来るんだって。」

「噂をすればなんとやら、だね。ていうか、なんだか物凄く通信の

先が賑やかだったみたいだけど？」

「あはは……えぇと、ティアナも多分いろいろ苦労してるんだよ……」

「？？？」

フェイトの微妙な返答にシエル共々首を傾げてしまうルークだった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

そして、きっかり五分後。フェイトとルーク、そして研究室に籠っていたのを引っ張り出してきたシャーリーを含めた三人が待っているオフィスのドアがノックされた。

「失礼します、ティアナ・ランスターです」

「はい、どうぞ」

フェイトがそう答えると、ドアが開きオレンジ色の髪を下ろしたティアナの姿が。彼女はフェイトと同じ執務官の制服に身を包んでおり、かなり様になっている。

「ほら、いい加減自分で歩きなさいよ、スオウ！」

「いや……なんだかティアに引きずられるのって、ちょっと良い感じかも……でへへｗｗ」

「バカなこと言ってると、またハリセンで一発行くわよ！？」

何やらそこはかとなく変態的な会話が半開きになったドアの向こうで起こっている。フェイト達は目を点にしてその様子を見守っていた。

「分かった、分かったよぉ……。よっこいしょっと……。」

「はぁ……なんだか最近、あんたのどの部位を殴るのが一番効果的なのかが、手に取るように分かりそうになる自分が嫌になるわ……」

「それって性的な意味で？」

「なわけ無いでしょ！！！」（バチィィィィン！！！）

「あべしっ！！！？」

ドア一つくぐるのにここまで時間がかかる人間はそういないだろう。もしかすると、ティアナの補佐を務める人物は別の意味で大物になるかもしれない。フェイト達はそう思ってしまった。

「ほら！！　フェイトさん達にちゃんと挨拶なさい！！　美人には紳士的な態度で接すのがあんたのモットーでしょうが！」

「美人っ！！！？」

美人という単語に即座に反応したスオウ。光の速さで立ち上がり、ドアを全開にして入室し、自己紹介をした。

「どうも、お初にお目にかかります。マイハニー、ティアの補佐を

務めさせていただいております、スオウと申します。好きなものは女の子。嫌いなものはＴＶアニメの３話から８話辺りから発生する作画崩れです。どうぞよろしく……」

三人「「「は、はぁ……」」」

個性溢れる、いや個性が前面に押し出されまくっている自己紹介にフェイト達はポカンとしている。
そこはかとなく、作者の思いが籠った感じも否めない。ともあれ、自己紹介されたからには、こちらもそれに答えるのが人の道というものである。

「えぇと、私はティアナと同じ執務官でフェイト・Ｔ・ハラオウンって言います。この子は息子のシエルです」

「その父親でフェイトの旦那をやらせてもらってるルーク・Ｒ・ハラオウンだよ。俺は客員魔導師ってところかな」

「フェイトさんの補佐官のシャリオ・フィニーノです。シャーリーって読んでね、スオウ君♪」

三人、正確には四人の自己紹介。スオウはそれぞれにどうぞよろしくと、好意的に挨拶をしている。
その様子にティアナはとりあえずホッとした。

「えぇと……ルークの旦那とフェイトさん（黒）はご夫婦という事ですけど……」

「ちょっと待って！！？　私の名前に付いてる（黒）って一体何なのかな？？！」

「下着の色です。」

「なんで知ってるの！！！？　……って、これじゃあ私が下着の色カミングアウトしちゃった感じだよ！！！」

ティアナの安堵はモノの数秒で砕け散った。スオウの無駄過ぎる特技のお陰で。

「ははははｗｗｗこれはまたおかしなことを。変態紳士たるもの、服の上から女性の下着の色くらい見破れなくてどうします。これはほんの嗜みです」

スオウは事も無げに、自分の特技について話す。服の上からであろうと、女性の下着の色を判別する事が出来る。恐らく、人生おいてこれほど役に立たない特技は無いだろう。

「ちなみに、ティアの今日の下着はオレンジ、シャーリーさんは……なんと赤ですか……」

「言わんでいい！！！！！」（バチィィィン！！！）

「あぐぇ！！！？」

「うぅ……しかも当たってる……」

続けざまに下着の色を暴露されてしまう女性陣。ティアナはハリセンを持ってスオウを叩き、シャーリーは恥ずかしいのか顔を真っ赤にしている。

「なぁ、スオウ……」

そこで、ルークが真剣な顔をしてスオウに近づいて行った。その真剣さに、フェイト達を恥ずかしがらせた事に怒っているのかと思い、少しヤバいかも、というような雰囲気がオフィス内を漂う。

「る、ルーク？　シエルもいることだし、暴力は……」

「そうよ？　恥ずかしいって言っても、このバカのいつもの悪い癖みたいなもんだし……」

「じ、実害は何も……」

もしかするとルークによる鉄拳制裁が始まるのかと思った女性陣は、一転してルークを止めにかかる。
まぁ、その心配は杞憂に終わるのだが。

「その技、是非とも俺にも伝授してくれ」

女性陣「「教えを請うの！！！？」」

そう、ルークは男であり、フェイトの旦那であり、一児の父でもある。だが、それと同時にエロティック大統領という全世界の男たちの頂点（エロ的な意味で）に立っている存在なのだ。
エロ関連の知識はどんなことでも吸収しなければ、その名が廃るのだ。

「良いですよ。でわ、こちらに。言っておきますが、俺の指導は厳しいですよ？」

「ふっ……望むところさ。これでフェイトの下着の色を常に把握する事が出来る」

「あなたも行ける口ですね……美味い酒が飲めそうだ。では、まず最初のステップから……ノーパンか着パンかを見極める訓練です」

そうして、新旧主人達はオフィスの片隅であーでもない、こーでもないと、熱い講義を始めた。

女性陣「「ダメだこの主人公……早くなんとかしないと……」」

その時、フェイト達の心は一つになった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「ふぅむ……なるほど……これを作った人、本当に凄いですよ……」

「やっぱり、特別な指輪なんですか？」

「はい、特定の魔法しか使えませんが。この指輪をプラットフォームに、魔力の少ない人でも、魔法を行使することが可能になるように設計されてます。この指輪がリンカーコアの代わりを果たしている感じです」

「ルークのデバイスのドライヴシステムと少し似てるんだね……」

変態二人組を部屋の隅に放置し、女性陣は真面目に目的であった指

輪の解析を進めていた。シャーリーに証拠品である指輪を預け、待つこと五分。指輪の効果、設計など、様々な事が分かった。
流石はデバイスマスターということだろう。

「この指輪は、見せてもらった報告書にもあったように、武器、今回はナイフでしたが、それを作り出すことができます。指輪をコアに見立てて大気中の魔力素を集め、魔力に変換し、それを物質化させる事ができる……。間違いなく、これを作った人は天才です」

「なるほど……だから魔法の適性が無かったラドル・レンシスも魔法を使う事が出来た……。指輪を取り上げれば、能力行使は不可能……ということですね」

シャーリーの分かりやすい説明に、ティアナはなるほどといったように、あごに手をやる。
だが、そこで疑問が出てくる。

「どうして、一般人がそんな指輪を持っているんだろう……？」

「そこなんですよね……。これほどのものになると、ちゃんとした設備のあるところで無いと生成は不可能ですし、ましてやそれが一般市民に流れるなんて……」

フェイトとシャーリーもティアナと同じ結論に至った。
そう、なぜラドル・レンシスがこんな代物を手に入れる事が出来たのか？　ということだ。
魔法の知識も無い彼に、こんなものが作れる筈もないし、彼には魔法工学に関連するコネクションは皆無だった。
どう考えても、彼と指輪には接点が見出せないのだ。

「考えられるとすると……作った人物がこの指輪を何らかの目的で、ラドル・レンシスに与えた……というところですよね……」

「うん……アトラントでは闇市場の類のモノはかなり厳しく取り締まられてる筈だから、その可能性が高いよ」

ティアナの考えにフェイトも同意見のようだ。

とすると、次の問題は誰がこれを作ったか、になるのだが、流石にそんなことは分かる筈も無いし、そんなに簡単な話でもない事はティアナはもちろん理解している。

「この指輪も、ここ最近の奇妙な事件に関係してるのかな……？」

「猟奇殺人や、不可思議な現象が多発している事を考えると、そう思えて仕方ないですね。もしかすると、この指輪は事件の重要な部分に関係している物なのかも……」

フェイトとティアナ、それぞれの考えを交え、そう結論付ける。

何かが確実に動き始めている。そんな妙な胸騒ぎをフェイト達は感じでいた。

「あの、シャーリーさん。時間があればでいいので、この指輪の事もっと詳しく調べてみてもらえませんか？　上には私から報告をしておきますので。」

「はい、それはもちろん協力させてもらいます。私自身、そうするべきだと思いますから」

ティアナのお願いを快く引き受けてくれるシャーリー。取り合えず、件の指輪はシャーリーに預けることになり、その話はそこでひと段

落した。

のだが……

「それは違う！！！！！　旦那はおかしいですよ！！！！！」

「いいや、これぱっかりは譲れないんだ！！！　スオウ、君の方がどうかしてるぞ！！！」

女性陣「「「？？？」」」

突如として、先程まで大人しくしていたスオウとルークが大声を出し始めた。その声に、シエルは少しぐずり掛けたので、フェイトがよしよしとあやす。

「あぁもう……あのバカ二人は……」

ティアナはやれやれといった様子で、睨みあう二人に近づき、何があったのか尋ねる事にした。

だが、尋ねる前にティアナはそれを止めた。原因が二人の会話から容易に特定できたからである。

「アレする時、黒タイツは破くものに決まってるじゃないですか！！！！」

「いいや、断固破かない！！！　脱がせるまでの手順がエロくて興奮するんじゃないか！！！」

「破く事によって生まれる、あのエロさを理解できないとでも言う

んですか！！！！？」

どうやら、女性の黒タイツに関する萌え談義をしている内に、意見が平行線を辿ってしまう事態になったらしい。
というか、なんとマニアックな話題での口論か。
ちなみに言っておくと、スオウが破く派、ルークは破かない派だ。

「またあんた達はそんなくだらいことで……」

「る、ルーク……。流石にそんな話題で怒ること……」

やれやれといった様子で、二人の口論を止めようとするティアナとフェイト。
だが、エロティック大統領、変態紳士である二人にも、譲れないものがあるのだ。

バカ二人「「ティア（フェイト）は黙ってて！！！！！」」

ティアナ&フェイト「「ご、ごめんなさい……（なんで謝ってるんだろう、私達……）」」

珍しく、男二人の覇気に当てられてしまったティアナとフェイトは思わず謝ってしまう。
その必要は全くないのだが……

「……どうあっても、邪道を行くのか、スオウ？　脱がされる最中のあの恥ずかしがる表情を君は捨てるというのか？」

「邪道……？　何を世迷言を……破く事、それ即ちジャスティス。これは世界が定めた黄金のルールなんですよ……」

二人は睨みあい、お互いの信念（性癖）をぶつけ合う。
ここまで下らないことで、このくらい熱くなれるバカを未だかつて見た事があるだろうか？

「なら……」

「だったら……」

男には対話の仕方が二つある。一つは一般的な会話である。そして、もう一つ、古来より男同士の熱いハートをぶつけるために確立された、お互いを理解する方法がある。

そう、拳を交えたＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＩだ。

二人「「よろしい、ならば戦争だ！！！！」」

こうして、ここに新旧主人公が己の全てをかけて、その信念を貫くための戦争（どつき合い）が幕を上げた。
女性陣をほったらかしで……

「はぁ……ルークったら……」

「まったく……仕方ない奴らね……」

「あはは……とりあえず、模擬戦場の使用許可貰っておきますね」

バカな男の戦いに巻き込まれた女性陣のため息が、オフィスにむなしく広がった。

Ａｃｔ６　導かれし変態達（後書き）

ルーク「どうも、はじめましての方もそうでない方もこんにちは、ルークです。前作、Ｌｏｓｔ　Ｍｅｍｏｒｙの主人公だったものですｗｗ」

スオウ「リア充ｋｔｋｒ」

Ｆ２０Ｃ「リア充爆発しろ」

ルーク「ちょっとは暖かく迎えてくれたっていいんじゃない！！？」

スオウ「だって、リア充だもん」

Ｆ２０Ｃ「そうだよね、リア充だもん仕方ない」

ルーク「理不尽過ぎる……」

Ｆ２０Ｃ「さて、次回はなんと新旧主人公によるガチンコバトルでございますｗｗ互いのエロとエロをぶつけ合う二人にご期待ください」

スオウ「あと、結構うみねこのなく頃にのネタが入ってくるかもです。まぁ、そんなに濃いものではないのですがｗｗそうですね、戦闘の序盤はかなり悪ふざけしてますからねｗｗ」

Ｆ２０Ｃ「さて、どちらが勝つのやら・・・・・・・・ともかく、次回にご期待くださいｗｗ」

ルーク「リア充って……リア充って・・・・・・・・・ぐす……」

スオウ「ふ、リア充である事を呪うが良いさ……」

Ｆ２０Ｃ「でもなんでだろう……この妙な敗北感は……」

本日のＥＤ「８４」　ｓｏｎｇ　ｂｙ　岸田教団

アルバム「星空ロジック」より

Ａｃｔ７　スオウＶＳルーク（前書き）

エロティック大統領ＶＳ変態紳士、夢の対決がここにｗｗ

前半の萌え理論対決において、うみねこネタである赤文字と復唱要求の概念が出てきます。

説明は最初でするのでご安心をｗ

そして、戦闘は思わぬ方向に……？

ルークがスオウを模擬戦に誘った理由も明らかになったりします

でわ、本編をどうぞ！

Ａｃｔ７　スオウＶＳルーク

ルール説明

赤き真実：赤文字、この小説内では≪≫で囲われた文章は真実のみを語る。（この小説は文字色をイジる事が出来ないので）

復唱要求：片方のプレイヤーが、仮説を立てたとして、そのプレイヤーはその仮説を相手プレイヤーに突きつけ、赤き真実で復唱するように要求する。赤で復唱された場合は、その仮説は真実という事になる。

復唱を拒否することは可、加えて、復唱を拒否したプレイヤーは何故拒否したかの理由を説明する義務を持たない。

以上

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

ルークとスオウは、フェイトのオフィスから場所を移し、本局の模擬戦登場に居た。屋外に作られたその模擬戦場は空気がおいしく、スオウなどは大きく深呼吸などしていた。

二人はバリアジャケットに身を包んでおり、ルークに手には神剣・アーカーシャが、スオウはホルスターに銃型デバイスオルクスを収めたままだ。

スオウの方に、デバイスを抜く気はまだ無いらしい。

そして、このバカな戦いを見守るのは、ルークの嫁であるフェイト、そしてその息子シエル、フェイトの補佐であるシャーリーとスオウの上司のティアナである。

「最初に聞いておく。降伏するつもりはないか？」

「降伏？　ハッ！！　笑止！！！！！　これは己の信念（性癖）をかけた戦い。自ら負けを認めることなど論外ですよ」

ルークの警告にスオウは何をバカなといったような表情でそう答える。双方、引くつもりは全くないようだ。（フェイトやティアナ達は別の意味でドン引きしているが）

「では仕方ない……俺も、やるからには叩き潰すつもりでやる。フェイトの黒タイツを一度も破くことなくクリアしてきた力を……とくと見るが良い！！！！！」

「そちらこそ、俺のエロゲ脳を舐めない方が良い……いずれ訪れるであろう、ティアとの熱い営み際に、彼女のエロさを引き立たせるために、俺は破く派を貫き通すのみです！！！！！」

両者、足に力を入れ一歩目を踏み出す準備をする。

一色即発、どちらから仕掛けてもおかしくない状況である。

そんな中、女性陣たちは……

「でも、フェイトさんも大変ですね。子育てしながら仕事なんて…

…」

「あはは……でもルークも手伝ってくれるしね。最近はデスクワークが多くって……そんなに苦でもないんだ。」

「毎日シエル君と楽しく過ごされてますもんね。私もシエル君にはかなり癒されてしまって♪」

ティアナ、フェイト、シャーリーはシエルを囲んで、模擬戦場の待合室でお茶に興じていた。
男たちのバカげた戦いを観戦しながらお茶するあたり、彼女たちの大物さが伝わってくるようだ。

そんな中、模擬戦場内では立った二人の戦争の火蓋が切って落とされたのだ。

ルーク&スオウ「「レッツ、パ～～～～リィィィィィィ！！！！！」」

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

先に仕掛けたのはルークだった。

「スオウ！！　君はエロゲをプレイしている内に、黒タイツ破く派になったようだが、それはしょせんゲームの中だ！！！！　リアルとは格が違う！！！！」

ルークはアーカーシャをファング形態にしてスオウにオールレンジ攻撃を仕掛けてきた。序盤からかなり飛ばしているようにも見えるが、これはスオウの実力を測るためモノだ。

「なら、ルークさんに復唱要求！！！　エロゲ内で攻略キャラの中にフェイトさんが居たとして、黒タイツを破いたフェイトさんのCGが目の前にある時、あなたは萌えない！！！」

「……く……復唱を拒否する……」

だが、ルークのファング攻撃をまるで読んでいたかのような動きで素晴らしい体裁きで避けていくスオウ。

スオウの復唱要求にルークは拒否することしかできない。フェイトを基準に持ってこられると、ルークは本能的に萌えてしまうからだ。

そして、ファングの攻撃を避けながらスオウはルークに高速で接近してくる。動きだけを見れば、完全に人間離れしたスピードと体裁きである。

≪ルーク・R・ハラオウンはフェイト・T・ハラオウンが対象ならば、無条件で萌える！！！≫

「あ、赤い真実だと！！！？」

スオウは拳をルークに突き出しながら、赤き真実を以って、ルークを追い詰めていく。

拳・拳・蹴り、素早いコンボでルークを攻め立てて彼を後退させていく。

「ぬぅ……ならばこちらも復唱要求！！！　ティアナの黒タイツを

破く事を禁じられた状況下で、君は破れていないタイツを足に残したままのティアナにはなんの興奮も覚えない！！！」

「……復唱を拒否します……」

スオウの連続攻撃を上手く捌いていたルークだが、スオウへの復唱要求と同時に、ファングを刀身に戻し、スオウに斬りかかる。

スオウは、復唱を拒否しながらバク転することでその攻撃を鮮やかに避けた。

「加えて、赤で宣言する！！」

「？？！！」

≪スオウが興奮するのはティアナに対してであって、そこにタイツがあろうとなかろうと関係なく、タイツの存在による萌え度の変化率は微々たるものである！！！≫

「なにぃ！！！？？」

ルークの赤の真実に、スオウは珍しく焦る。自分の中の萌え理論がルークの赤によってバッサリと斬られてしまったのだ。

「く……」

スオウはバク転の後に、綺麗に着地するも、その表情は険しいものだ。

「ふふふ……所詮は二次元での想像止まりの理論……実戦（性的な意味で）で培った俺の萌え理論の前に、君はリザインするしかな

い！！！」

「エロい妄想をせずして、何が変態紳士か！！！！　実戦を終えた時点で、あなたの妄想力は止まってしまっているんだ！！！　即ち、止まってしまった思考から、新たな萌えに対する閃きは生まれはしない！！！」」

「ふ……諦めが悪いな……。」

萌え理論では完全に優位に立ったルークは、ニヒルな笑みを浮かべながらそう呟く。
ここまで無駄な戦いに熱くなれる輩は他に居るだろうか？

一方、二人の戦いを見ていた女性陣は……

「スオウ君……デバイス無しでルーク君と戦ってる……ていうか、なぜ肉弾戦？」

「もしかして……スオウって物凄く強かったりするのかな、ティアナ？」

「えぇと……何と言いますか…。お恥ずかしい話なんですけど、私もあいつの本気、見たこと無くて……」

シャーリーとフェイトはスオウの実力に少しばかり驚いていた。ルークもまだ本気ではないにしろ、ファングを余裕で避ける当たり、人間離れした反射神経と空間把握能力である。

ティアナ自身、まだスオウと出会って一カ月なので、彼の本気というモノに遭遇した事が無いようだ。

「あぁ、でも、流石にあいつもルークの実力を見せつけられたようですから、そろそろデバイスを使うとは思うんですけど……」

「あはは……ティアナでも想定外の戦い方をする子っていうことだね。」

「そんな感じですね。でも、一つだけ言えるとするなら……」

フェイトにそう答えながら、ティアナは表情を戻して呟く。

「スオウにとって……どんな戦いも、ただのゲームって事だけは確かなんです。」

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「はぁ……はぁ……どうやら、萌え理論対決では勝負がつかないようだな……」

「そうですね……。ま、ルークさんもこれが目的で、俺に模擬戦を仕掛けてきたわけじゃないらしいですしね。オマケとしては楽しめました」

「……なるほど…お見通しってことか……」

さて、女性陣の見守る中。萌え理論での戦闘は一旦の終結を見せていた。
というより、どっちもどっちなので勝ち負けが付かないのだ。

そんな中、二人は先ほどまでとは纏う雰囲気が異なっていた。ルークは真剣に、そう、敵と相対する時のオーラを纏っている。
対するスオウは、いつも通りニコニコしているが、体からは覇気が満ち満ちていた。

「それで？　俺に模擬戦を仕掛けた本当の理由はなんでしょうか？」

「……君から……人間の死の匂いがした。その正体を確かめるためって言ったら、どうだい？」

「あはは☆　そりゃあ、面白いですね。なかなかに笑える趣向だと思いますよ？　要するに、俺がなんなのか、過去に何をしていたのか、これから何をするつもりなのか、ティアと行動を共にしている理由はなんなのか。それを知りたいということですか？」

どうやら、ルークがこの模擬戦をあんなふざけた形で仕掛けたのには、スオウの正体に何らかの答えを出すためということらしい。
ルークはスオウに何か大きな、それでいて暗い何かを感じ取ったらしい。それは過去の自分の経験からくる、同類に対するセンサーのようなものなのかもしれない。

「ティアナは俺にとっても友達だ。もしも彼女に何か危害を加える目的で近づいたというのなら……」

「危害を加える……かぁ……。そんなつもりは全く無いんですけどねぇ……。それに、俺はティアに惚れ込んでますから。命がけで

守ることはあっても、傷つける様な事をする理由が無い。俺は意味の無い事はしないタイプですから」

「なら答えられるんじゃないのかな？　君は何をするためにここに居るのか、何をしてきたのかを……その様子じゃ、ティアナにも何も教えてはいないみたいだ」

ルークのその言葉に、スオウのニコニコ顔が一瞬曇るが、瞬きする間に消えてしまう。
そして、笑いながら目を閉じて、いつもと同じ調子でルークに言う。

「人の過去を詮索するということは、人の見られたくない部分を見るということです。それに、俺だけが一方的に過去を探られるっているのは、流石に気分の良いもんじゃないですね。」

「それは……」

「あなたにだって、人に知られたくない事の一つや二つあるでしょう？　そう例えば……お姉さんの事とか……」

「なっ！！！？」

スオウはいつもどおりにニコニコしながらそう言ってきた。初対面である筈のスオウが知る筈もない、ルークの姉の事を指摘してきたのだ。

「ど……どうして……それを……」

「さぁ……どうしてでしょうね……？　ですが、あなたが俺にしようとしているのはそう言うことです。他人の過去を詮索するとい

うのなら、自分の過去を隠したままというのは不公平ではありませんか？」

表情とは裏腹に、スオウの言葉は辛辣なものだ。だが、人の知られたくない部分に土足で足を踏み入れるということは、決して褒められたことではない。

ましてや、人にはそんな勝手な権利などは許されてもいない。

「まぁ、俺もあなたの事を少し知ってしまったわけですからね。答えるべきなのかもしれませんけど……。折角模擬戦場を貸してもらったんです。模擬戦で俺を叩きのめしたら、あなたの質問に何でも答えるっていうのはどうですか？　そっちの方がゲームが盛り上がります」

「……模擬戦で全部を決めようってことかい？」

「そうですね。まぁ、その方が分かり易くて良いですし。このまま突っ立ったままで話し込んでいても、ティア達に感づかれてしまいますからね。」

そう言いつつ、スオウは閉じていた目を開く。その目はルークやフェイトと同じ真紅の色に染まっている。いや、色合いだけを見れば、二人のそれよりももっと濃い赤である。

「……わかった……。それと、先に謝っておく。卑怯な手段を使って君の事を知ろうとしてすまなかった。」

「……変わった人間だ……あなたは…。うん……少しは楽しめる……かな？」

二人は互いにそう呟いて、ルークはアーカーシャを、スオウはホルスターからオルクスを抜いて構えた。

そして、スオウの一言で、戦闘の第二ラウンドが始まった。

「それでは、ゲーム再開です！！」

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「あ、スオウ君、デバイスを抜いた」

「ここからが本番ってことかな……？」

「それまでに何か話していたみたいだけど……良く聞こえませんでしたね。」

二人の様子を見ていたティアナ達。先程まで何か話していた様子のルークとスオウだったが、その内容までは聞き取ることは出来なかった。

「剣と銃かぁ………クロスレンジも得意なルーク君の方が少し有利なのかな？」

「普通に考えればそうだね。それにルークには眼もあるし………」

「確かに、幻術を使われればお終いなんですよね。それにルークにはもう一本神剣がありますし、ドライヴシステムも残ってます。スオウに勝ち目は薄い………」

冷静に戦況を読むティアナ達。そう、今のところ、スオウがルークに勝てる要素はほとんどない。

だが

「でも、あいつはいつも規格外ですから……それに、あいつにも隠し玉くらいはあるでしょうし。もしかするかもしれません」

ティアナはそう言いつつ、少し笑顔になる。

信頼というにはまだ浅い、これは期待だ。スオウが何かをやらかすかもしれないという期待だ。

そんなティアナの期待を背に、スオウはルークとの戦闘を再開した。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「先制あるのみ！！！」

そう言って最初に動いたのはルークだった。ソニックムーヴで瞬時にスオウの背後に回った彼は、その勢いを殺すことなく、移動中にカードリッジをロードさせたアーカーシャに雷撃を纏わせ、抜刀した。

「なるほど、速い速い。」

ガキィィィ！！！！

ルークの先制攻撃は、スオウのオルクスによって防がれてしまう。
スオウはまるでどこから攻撃が来るのか分かっていたような動きで、
オルクスで最初の一撃を防御したのだ。

「でも、俺も少し速く動けば、そのくらいは出来ますよ？」

「なに！？」

そして、攻撃を防がれた直後のルークの背後に、いつの間にか回り込んでいたスオウ。
一瞬、いやそれよりも早い。まさに瞬間移動を使ったようなスピード。ソニックムーヴと同レベルのスピードを見せた。
そして、オルクスから魔力弾が放たれる。

「ぐぅ！！？」

ルークは背後からの魔力弾を、半身を捻って紙一重で回避した。

「へぇ。これを避けますか。」

「生憎、スピード勝負には自信があるんで……ね！！！」

言いつつ、アーカーシャを再び振るうルーク。
スオウはまたしてもその攻撃をオルクスで受け止める。

ルークの剣撃を楽々受け止めるスオウの技量にも驚きだが、神剣という頭一つ抜けたデバイスであるアーカーシャを受け止めて傷一つ付かない、オルクスにも驚愕させられるルークだった。

「攻められてるばっかりじゃ……勝てないってね！！」

ルークがアーカーシャを振るう隙を突き、スオウがオルクスで魔力弾を放つ。その数3発。

「ダモクレス！！」

『了解です』

ルークはその魔力弾を鞘に収まったままのダモクレスに命令し、絶対防御の盾で防ぐ。タイミング的に回避が難しかったため、盾を使わざるを得なかったのだ。

「ほぅ…。面白いデバイスですね。しかもそのシールド……」

「君のデバイスも特別製なのかい？　強度にしたって、普通のデバイスじゃあり得ないくらいのものを持ってる」

「オルクス、褒められちゃったなぁ？」

『恐縮です』

二人は一旦距離を開く。

戦闘中もスオウの能天気さは変わらない。オルクスへの問いかけも隙を生むだけだというのに、彼は平然と会話していた。

「（どうする……？　鏡花水月で一気に勝負をかけるか？）」

アマテラスの瞳の幻術を使っての抜刀術。防御も回避も不能な技、鏡花水月。

ルークは決着をつけるための戦略を考えている。

と、その思考を止めるかのように、スオウは魔力弾を放ってくる。先程までとは数の桁が違う。数百発の魔力弾がルークめがけて殺到してきた。

「効かないよ」

だが、ルークは焦ることなくダモクレスのシールドでその攻撃を防ぐ。ダモクレスの盾の前では、いかなる物理的な攻撃も魔法攻撃も通用しない。

まさに絶対防御の壁なのだ。

だが、攻撃が防がれているにも拘らず、スオウは魔力弾での攻撃を止めない。それどころか、数を増やしてきた。

見れば、彼の背後には大量の誘導弾がセットされており、撃つたびに新しい誘導弾を瞬時に作っているではないか。

「ゲート・オブ・バ〇ロン、スオウスペシャル！　なんつって♪」

恐らく、この間のアトラントの一件で、犯人が見せたナイフの猛襲を元に即興で思いついた技だろう。技のネーミングセンスが微妙なのがその証拠だ。

「悪いけど、君の攻撃は絶対に届かない。このダモクレスの盾はどんな攻撃も通さない」

「でしょうね。だからこそ、その攻略法を探してるんですけどね」

この無限にも近い魔力弾の嵐がダモクレスの盾の攻略のヒントにな

る。
ルークはスオウの考えが読めなかった。
そして、その攻撃はその後約5分にも渡って続いた。5分もの間魔力弾を撃ち続けていたにもかかわらず、スオウに疲れは全く見えない。
どうやら、魔力の保有量は多い方らしい。
「ふぅ……これで終わりかい？」
ルークは盾を展開したまま、スオウに尋ねる。先程のスオウの攻略法という単語が引っ掛かるが、結局最後まで何も無かった。
ハッタリか何かだろうかとも考え始めていたルークだったが、そんな彼にまたしてもニコニコ顔でスオウが告げる。
「はい、終わりましたね。」
「その割には余裕だね？　潔く降参してくれると嬉しいんだけど？」
「あはは、降参だなんてとんでもない。ルークさんは気が早いですね。」
人を食ったような調子で話すスオウ。やはり、どことなく感じていた事ではあるが、この男はどこか異質だと、ルークは再確認した。
「ここから反撃開始ですよ。……ダモクレスの盾の攻略法は……見つけましたから」
「！」

そして、スオウはオルクスで肩をトントンと叩きながら、自信たっぷりにそう言い放ったのである。

スオウの周りに、新しい風が吹き始めていた……

Ａｃｔ７　スオウＶＳルーク（後書き）

Ｆ２０Ｃ「スオウが主人公に見えてきたかな？」

スオウ「う～ん……本当の見せ場は次回かな？　ちょっと頑張って戦わないとクリアできそうにない相手だしね。それに……」

Ｆ２０Ｃ「それに？」

スオウ「もしもルークさんに勝てたら、ティアが褒めてくれて、そのままご褒美とか言ってあんな事とかを……ジュルリ……」

Ｆ２０Ｃ「とりあえずティアに逃げるように伝えてくるわ。いろんな意味で危ないもんこいつ」

スオウ「そんな殺生な！！！？」

Ｆ２０Ｃ「さて、模擬戦も次回で終わりですね。その次くらいにスロウスが出てくるかな？　もしかすると次回で出てくるかもですがｗｗ」

スオウ「ということで、また次回で～♪　あ、変態紳士委員会の委員を絶賛募集中で……」

Ｆ２０Ｃ「変な勧誘するな！！！！」

本日のＥＤ「残光のガイア」　ｓｏｎｇ　ｂｙ　水樹奈々

Ａｃｔ８　イノベイト・チルドレン（前書き）

さて、今回はルークとスオウの戦闘の決着、でもって敵登場な回です。

なんだかスオウの能力の正体を出そうとするたびに延期してしまいますね……

あと、この作品の設定などもいろんな漫画作品を参考にしたりしてます。と、これは前作にも言える事でしたねｗｗ

私の書くスタイルは基本そんな感じなのでｗｗオリジナリティが無いと言われちゃうと否定できないかもｗｗ

と、私の話しはどうでもいいですね。でわ、張り切って本編どうぞ！！

Ａｃｔ８　イノベイト・チルドレン

「さてと……」

スオウはニコニコフェイスを崩すことなく、オルクスを構える。
オルクスの重厚なデザインからはどこなく大きなプレッシャーを感じてしまうルークだった。
モノが持つオーラとでも言えばいいのか、オルクスからは確かにそれが迸っているのだ。

「（ダモクレスの攻略法……バカな……このシールドはありとあらゆる攻撃を無効化する……言ってみれば反則技みたいな能力なのに……）」

スオウはその反則技に対しての攻略法を、即ち反則を上回る反則技を考えたということでもある。
だが、どうやってダモクレスの盾を突破するのか、ルークは皆目見当がつかなかった。
ダモクレス自身も同じようで、特に何も言ってはこない。

「……うん……良い感じだ……」

ルークがそんな事を考えている間に、スオウは目を細めながら大きく伸びをしていた。だが、それは体に溜まった余計な力を抜くそれではなく、何かを感じる様な、何かに体を同調させているような様子にさえ見えた。

「余裕ぶっこいてる処悪いけど、隙だらけだよ！！！」

そのスオウの様子が隙だらけだったので、ルークは即座に攻撃に移る。アーカーシャを納刀し、抜刀術を仕掛ける。
だが、スオウは慌てることも無く……

パンッ

と手を一回叩く。
すると、その瞬間、攻撃を仕掛けていたルークに頭上からの衝撃が襲う。

ドコォ！！！

「がっ！！！？」

「もう少し待ってって欲しかったんですけどねぇ。ま、いいか……」

そう言って、再びオルクスを構え直すスオウ。その目の前で、アトラントのジャック・ザ・リッパーと同じように、見えない何かによって地面に這いつくばらされているルークの姿がある。

「（なんだ！！？……背中にコンクリートの塊が乗っかってるみたいだ……）」

だが、これしきで思考を止めている訳にはいかない。ルークは動かない体の代わりに、口を動かした。

「アーカーシャ！！」

『はいはい、分かってるわよ！！』

瞬間、アーカーシャがファングとなってスオウに向かって飛んでいく。赤い魔力のビームが瞬き、スオウを襲う……かと思われた。

「そういう手で来ますか……なら…！」

スオウは殺到する赤いビームの方に向かって手を出す。すると、スオウに殺到していた魔力ビームが何かの壁に阻まれ、空中で霧散した。

空気の壁のようなもの。アトラントでもナイフ攻撃を防ぐのに浸かっていた技である。

「どういうからくりかは分からないけど……とりあえず拘束は解けた……」

そして、その攻防の最中、ルークは見えない何かによる拘束から逃れていた。ファングでの攻撃はただの陽動だったようだ。

だが、それをスオウが見逃す筈もない。彼はすかさずオルクスから魔力弾を放つ。

先程の、ゲート・オブ・バ〇ロン・スオウスペシャルとかいう技で、オルクスからの魔力弾に合わせて、スオウの背後から次々と誘導弾が発射される。

「同じ事だよ！！！」

それを先程となじようにダモクレスの盾で防ぐ。当然、ルークには傷一つ付けることは叶わない。

ダモクレスの盾とはそれほどの絶対的な防御力を持っているのだから。

ルークは四方から殺到してくるスオウの誘導弾を防ぐため、自身を包むようにダモクレスの盾を発生させており、前からも後ろからも、上からも下からも攻撃はキャンセルされてしまう。

だが、スオウに焦っているような感じはしない。
それどころか、いつも通りのニコニコ顔である。

「確かに、魔力や物理的な攻撃はダメみたいですね……」

「あぁ。それがこの盾の最大の強みだからな。悪いが、お前じゃこの盾は破れない。」

スオウは表情はそのままにそう言ってくる。その間も、誘導弾が絶えることは無い。

「でも、これならどうですか？」

「？」

と、その時だ。スオウは足で地面をタンッと叩いた。一体何のつもりなのかとルークは思ったが、次の瞬間にその考えは吹き飛ぶ。

スオウの方から刃のような衝撃波のがこちらに向かって飛んで来たのだ。

「（でも、衝撃波くらい……盾で…）」

「くす……果たして防げますかね？」

ルークの心の声に被せるようにスオウがそう言ってくる。その間に

も、衝撃波はルークに接近し、ダモクレスの盾によって防がれ……

ドンッ！！！！

「ぐあっ！！！？」

なかった……

スオウの放ったと思われる刃の形をした衝撃波はダモクレスの盾など知った事ではないというかのように、すり抜けて行ってしまったのだ。

無論、盾で防御したつもりであったルークに、その衝撃波は直撃し、彼を吹き飛ばした。

「ぐ……」

ルークは地面に叩きつけられる。あまり高くは飛ばされてはいなかったようで、打撲程度で済んだが、衝撃波のダメージは確実に通っていた。

「だから言ったでしょ？　攻略法を見つけたって」

「ど、どういうことだ……？」

スオウは先ほどと全く同じ位置から動きもしていない。彼くらいのスピードがあれば、先程の隙に、ルークをノックアウトすることも可能だったはずなのに、彼はそれをしなかった。

どうやら、ルークとの模擬戦は少し楽しいらしい。

「簡単な話ですよ？　その盾、何でもかんでも防げるってわけじゃ

ないってことです」

「？？？」

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「うそぉ………」

ダモクレスの盾を展開しているにも拘らず、スオウの謎の衝撃波によって吹き飛ばされたルークを見て、シャーリーは呆けた様子でそう呟いた。

「スオウ……一体何をしたんだろう………。ていうか、ルーク大丈夫かな……？」

「あう！　あう！！！」

「し、シエルは父親がやられて物凄く喜んでますけど……。これはこれで少しルークが不憫なような……」

「あはは……シエル君ってルーク君と、フェイトさんを取り合ってる感じしますからね。ライバルがやられて、『ざまぁ見ろ』って言いたかったり……」

シエルのルークに対する敵対心が明らかになった瞬間だった。カエルの子はカエル、好みの女性まで同じとは、流石はエロティック大統領ジュニアである。

と、それはともかくとして、戦況は一気に傾いた。無論、スオウにである。
ダモクレスの盾を、どうやったかは不明だが、破ったということは非常に大きい。

「あの盾、フェイトさんが攻撃しても傷一つ付けられなかったのに……」

「うん…あの盾は本当に強力な盾だった。……でも、スオウはその盾の弱点……それを見つけたんじゃないのかな？」

「弱点……。物理攻撃も、魔法も通さないあの盾に弱点……？」

ティアナとフェイトは、目の前の光景について話し合う。
こういう模擬戦は、彼女たちにとっても非常に勉強になる。魔導師もまた、日々の毎日が勉強といったところか。

「でも……スオウって、本当に何者なんだろう……ルークと互角に戦えるなんて……」

「……」

それはティアナ自身も知りたい事ではある。だが、スオウは何も話してはくれない。
ただ、自分の為に尽くしてくれるだけだ。
ティアナにとって、それは少しだけ寂しいものだった。自分が、まだスオウに信用してもらえていないような、そんな気がするから。

だが

「スオウは……良い奴ですよ。ちょっと……いえ、かなり変態なところはありますけど、それでも悪い奴には思えませんから。」

「ティアナ……」

スオウの方も向きながらそう言うティアナに、フェイトは少しだけ昔の自分を、ルークと出会ったばかりの頃の自分を映した。

理由などは分からない。ただ信じたくなってしまう。それが本能というやつなのだろうか。

昔のフェイトも、今のティアナもルークやスオウから、その何かを感じ取っていたのだ。

Ｐｒｒｒｒｒｒｒｒ……

「あ。すみません、通信が……」

「うん、大丈夫だよ。」

Ｐｒｒｒｒｒｒ……

「って、私も通信だ……」

その時だった、ティアナとフェイトにほぼ同時に通信が入ったのは。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「どういうことだ？　何でもかんでも防げるわけじゃないって……」

「そのままの意味です。その盾は、ある一定の攻撃だけは、攻撃に限らず、ある現象だけは防ぐ事が出来ないんです。」

ダモクレスを破ったスオウに、問いかけるルーク。神剣に関しては、十分な知識を持ってはいるつもりだが、やはりまだまだ分からない事が多い。

ダモクレスに何らかの弱点があるとするのなら、今後の為にスオウの話から参考程度に聞いておくべきだろうと思ったのだ。

まぁ、これは模擬戦なのでスオウも意地悪をして、何も教えないというつもりはないようなので、ニコニコフェイスを崩すことなく説明してくれる。

案外、人が良いのかもしれない。

「さっきの魔力弾で五分間ずっと、俺はダモクレスの盾に攻撃しまくってましたよね？　実を言うと、あの時に盾の弱点を見つけたんです。」

「盾の弱点……？」

「そうです。ルークさんは盾で自分を包むように防御していました。それによって、あなたには一切の物理攻撃・魔法攻撃は通用しなくなった。でも、あるモノだけは盾を通過する事が出来るんです」

つらつらと説明を続けるスオウ。どうやら、ゲート・オブ・バ〇ロン・スオウスペシャルは弱点を見極めるための布石だったらしい。

そして、スオウは無敵と思われたダモクレスの盾が防ぐ事が出来な

いあるモノを発見したというわけだ。

「その何かって？」

「……ズバリ、空気です」

「く、空気……？！」

意外過ぎる答えに、ルークは間抜けな声でオウムのように同じ事を口にしてしまう。

空気、即ち、彼らが呼吸するの際に、吸ったり吐いたりしているこの空気の事である。

「さっきの攻撃の時、シールドで守られていたあなたは俺と普通に会話をしていた。シールド内で話していれば、誘導弾の着弾音で普通でもやっと聞き取れる程度の声なのに、あなたはしっかりとそれに答えてきた。つまり、そのシールドは空気の振動を阻害することは無い。」

「でも、それだけで……」

そう、それだけでは決め手に欠ける。シールド内でも距離が近ければ、声くらいは聞こえるかもしれないからだ。

「加えて、５分にも渡る攻撃の最中、あなたは息一つ乱してはいなかった。この事から、シールドの中にあっても、外界からの酸素供給には問題ないという事が分かりました。そのシールドが外界からの攻撃、干渉を全てシャットダウンしてしまうというなら、シールド内は酸素不足になること間違いなしですからね」

「呼吸……」

「最後に極めつけとして、シールド内に居たあなたの髪が魔力弾が着弾した時の爆風でなびいていた。つまり、魔力弾そのものは防げても、それによって発生した爆風、空気の動きは防ぐことは出来ない、こう予想が出来ますよね」

スオウはまるで理科の授業のようにそう説明する。

空気は非常に便利なものである。振動のさせ方によって、声となって意思の疎通を図る事が出来たり、また不連続な圧力の変化により、破壊力抜群の衝撃波をも生み出す事が出来る。

空気を遮断する事が出来ないということは、空気の振動、流れ、圧力の変化などもまた、同じく防ぐ事が出来ない。

スオウの発した謎の衝撃波を防御できずに、ルークが吹き飛んだのはそういうことらしい。

「そのダモクレスっていう剣。多分、防御の身を追求したデバイスなんじゃないですか？　シールドで体を守れても、シールドの中で使用者が窒息死しちゃ意味無いですからね。ま、空気というか、ある一定の重さを持つ元素、原子のみを遮断するのかもしれませんが……細かいところはどうでもいいか……」

そう言い終わって、説明はそこまでのようで、スオウは『どうですか？』というような表情でルークに二コリと笑みを向けてきた。

恐ろしいくらいの洞察力に、ルークは少し呆気に取られそうになってしまった。

そして同時に、久しぶりにこんなにも強い相手に巡り合えた事に、

少し感動すら覚え始めていた。
彼もまた、嫁（フェイト）と同じく少しバトルマニアな面を持っているのかもしれない。

「……スオウ……君は強いな……。さっきの衝撃波も、どうやって出したんだ？」

「それは企業秘密です。これ以上は俺をぶちのめしてからにしてください。」

「ははっ……しっかりしてる事で……」

そう言いながら、ルークはアーカーシャを目の前に持ってくる。
何かをしようとしている構えに、スオウは少し真剣さを表情に出しオルクスを構える。

「スオウ、此処からは……本気で行く。」

「その様子だと、そっちのデバイスにも何かしらの能力があるってところですかね……なるほど、肉体強化系ですか……」

ルークはドライヴシステムを使うつもりだ。模擬戦でそこまでするのかと言いたいが、最早そんな事は頭から吹き飛んでいる。
今ルークは、純粋なまでにスオウとの戦闘を楽しんでいるのだ。

そして、感応能力によって、ドライブシステムについてを感じ取るスオウ。
どれほどの戦闘力アップに繋がるのかも完全に理解できてしまう。
故に、彼もまた少し本気を出してやろうかとか、そんな事を思ってしまうのだ。

スオウもまた、男の子ということだろう。
そして、スオウもオルクスに奥の手の準備をするように……

「オルクス、レガリアを……」

「はーい、そこまで。仕事が入っちゃったから、今すぐ出発するわよ」

「あぁん、ティアの意地悪……」

「ルークも、アイリスがカンカンだよ？　仕事ほったらかしで、何してるんですか！！って……」

「げ……！！！　マジ……？」

言うことは出来なかった。

先程まで二人の模擬戦を観戦していたフェイトとティアナが、二人の戦闘を止めてしまったのだ。
片や、新たな仕事、もう一方は優秀な部下からの催促（かなりお怒りのご様子）。

「ご、ごめんスオウ！！！　この続きはまた今度！！！　また時間がある時にいつでも来てくれ！！」

「あ、はい。俺は構いませんけど……急いだ方がよくありません？　フェイトさんの言い方だとそんなに怖くないですけど、その部下の人かなりご立腹みたいですよ？」

戦闘が不完全燃焼で終わってしまったので、そう言ってくるルークに、スオウは冷静にそう告げる。
能力を使わずとも分かってしまう。こういう人の部下は大抵が物凄く厳しい人であると、相場は決まっているのだ。

「うわ、そうだった！！　それじゃあ、フェイト、俺行ってくる！！！！」

「うん、行ってらっしゃい。シエルも、お父さんに行ってらっしゃいは？」

「……るーく……いってさい」

恐らく、シエルは『ルーク行ってらっしゃい』と言ったつもりなのだろう。自分の子供に名前呼びされる親も親だが……
まぁ、無反応よりかは幾分かマシだと思うしかない。

「それじゃ、皆。また！！！」

ルークはそう言うが早いか、模擬戦場からダッシュで行ってしまった。よっぽどアイリスのお仕置きが怖いらしい。

「それじゃあ、フェイトさん、シャーリーさん。私達もそろそろ……指輪の件、よろしくお願いします。」

「うん、確かに…。お仕事気を付けてね？　また何かあったら、いつでも言ってきてくれて良いから」

「指輪の件は私にドンと任せておいてください！　お二人が帰って

こられる頃には、もっと詳しいデータを取っておきますから」

ティアナにそう言ってくれるフェイトとシャーリー。
優秀な上司に恵まれていると、この時改めて思ってしまったティアナだった。

「はい、ありがとうございます。では、これで……。行くわよ、スオウ」

「うん。では、フェイトさん、シャーリーさん、シエル君、これにて失礼」

スオウもフェイト達にそう挨拶をして、ティアナに付いて行った。
ルークとの模擬戦が中途半端で終わってしまった事に、若干の不完全燃焼感はあるが、ティアナが行くというのなら、そんな気持ちは関係ない。

ティアナの、彼女の夢を、彼女の事を間近で見る。

それこそが、スオウの目的なのだから。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

その日の深夜……

アイリスにこっぴどく叱られたルークは、すぐに任務に就くことになった。その任務先の世界、まだ発展途上の経済都市の街。
夜ということで少し怪しげな雰囲気を醸し出し始めた街中をルークは一人で歩いていた。
天候が崩れつつあるのか、空模様はかなり怪しかった。一降りあるのかもしれない。

「（スオウ……か……強かったな……。本気でやっても勝てたかどうか……）」

思い起こすのは、昼間に楽しい模擬戦を繰り広げた一人の青年の事だ。
ルークの見立てでは、恐らくだがスオウは五分の一の力も出していない。
ドライブシステムを使っても、やっといい勝負が出来るくらいなのではないかと思えてしまうくらいだった。

「（だからと言って、今度やる時も負けるつもりはこれっぽっちも無いけど……）」

自分の負けず嫌いな性格を改めて自覚するルーク。
だが、そのハングリー精神があったからこそ、彼はここまで上り詰める事が出来たのだろう。

と、そんな事を考えている彼に、頭上から殺気と一緒に声が飛んできた。

「でも残念～。　君、ここで僕に殺されちゃうから、勝ち負けもないんだよね～めんどくさいけど……」

「っ！！？」

ルークは素早く気持ちを切り替え、戦いに臨む雰囲気を纏う。
一流の戦士というモノは、頭のスイッチの切り替えが出来てこそ、昔、師であるライルから教わった言葉だ。

ルークの視線の先には、屋根の上に腰かけてめんどくさそうに頬杖を付いている人物が居た。
黒いローブを頭からすっぽりと被っているので、その容姿を確認することは出来ない。
だが、そのオーラから、タダモノではないという事だけはハッキリと伝わってきた。

「ルーク・Ｒ・ハラオウン……うん、確かに本物だね…。なんだぁ、実物見ると僕とほとんど歳一緒じゃん……」

「そういう君は何者かな？　これからホテルに戻って、美人のマイワイフとの電話タイムが待ってるんだけど？」

「しかも、リア充と来たもんだ。エンヴィーとかが聞いたらキレるだろうなぁ……」

そう言って立ち上がる謎の人物。その時、一瞬だがフードの下から顔がちらついた。
その時、ルークの目は、右目が深い真紅に染まっている男の顔をしっかりと確認した。

そんなルークに、フードの男は自分の名前を名乗る。
この時のルークは思いもしていなかった。この男が、いや、この謎の男の属する集団とで大規模な戦いになることなど……

「はじめまして、ルーク・R・ハラオウン。僕はスロウス。水の王、スロウスだ」

「スロウス…？　水の王……？」

名乗りながら、フードを取ったスロウス。フードの下には濃い青色の髪を肩辺りまで伸ばした青年の顔があった。それもかなりの美形だが、彼の放つ独特のだるさというか、無気力感がその魅力を半減させていた。

聞いた事のない名前と顔。どうも知り合いではない。過去の因縁など、数えて霧の無いくらい背負っているルークにとって、仇討などは覚悟しているつもりだが、この目の前の男からはその類の雰囲気は感じられない。

「起きろ、『ヴァサー・デプス』」

「！」

スロウスがそう呟くと、彼の手には三又に分かれた刃を持つ槍が握られていた。トライデント、とでも言えばいいのか。ただの武器ではないような、そんな貫禄のあるデバイスに思えた。

「いきなりだけど、君は計画の邪魔になるからね。ここでご退場願おうか。後々めんどくさい展開になるのは嫌だしね」

「俺も有名になったもんだなぁ……。ていうか、計画って何の事だい？　世界に巫女服の良さを普及させる計画なら、俺は協力を惜しまないけど？」

ルークもまた、相手が武装したことを確認した上で、冗談（半分本気）を口にしながら、アーカーシャをセットアップする。
スロウスが施したのか、人払いの結界が周囲を取り囲んでおり、半径5メートルに人の気配は全くない。

それを確認したルークに、スロウスは面倒そうに答える。さっさと仕事をこなして帰りたいという雰囲気が全快だ。

「詳しくは教えるつもりナシ、なんだけど、別に良いか……。ていうか、俺は巫女服萌えじゃなくて、バニーガール萌えだ。」

ルークの下らない冗談に合わせてくれるあたり、実は良い奴なのかもしれないと、一瞬ながらに思ってしまったルークだった。

「そうだなぁ…一つ言えるとすれば……管理局の支配は終わりを告げるよ。僕達、『イノベイト・チルドレン』の手によってね」

スロウスは、ヴァサー・デプスと呼ばれたデバイスを、ルークの心臓に向けながら、そう宣言したのだった。

気が付けば、ルーク達の頭上からは雨が降り出していた……

Ａｃｔ８　イノベイト・チルドレン（後書き）

スオウ「結局決着はお流れですか……あと、敵も出てきたッぽいし」

Ｆ２０Ｃ「さて、ルークはどうなってしまうのか・・・・・・・・。まぁ、彼の事なので、なんとかするでしょうがｗｗていうか、ダモクレスの盾の攻略法……無理矢理とか言われそう……一応屁理屈こねて、理論付けしたつもりではあるんですけど……」

スオウ「ま、そこはなんとも言えないよね。で、俺たちもなんだか新しい事件みたいだけど？」

Ｆ２０Ｃ「そうなんだよね。ていうか次の事件は君の見せ場でもあるから。ティアが少し、精神的に不安定になっちゃう予定なので」

スオウ「なぬ！！！？　俺のハニーに何するつもりだお前！！！！」

Ｆ２０Ｃ「だからぁ！！！そこで君がカッコよく決めることでフラグを構築して行くんだろうが！！！　偶にはビシッとティアに男らしいとこ見せて好感度上げとけ！！！」

スオウ「さ、作者……お前……そこまで考えて・・・・・・・・・？」

Ｆ２０Ｃ「べ、別に……あんたの為じゃないんだからね？！！　その方がその……読者さんが面白いかなぁって・・・・・そう！！それだけなんだから！！！」

スオウ「ツンデレ乙」

鮮血の刻印さん、デバイスの名前、採用させていただきましたｗｗ

本日のＥＤ『ａｇｏｎｙ』　ｓｏｎｇ　ｂｙ　ＫＯＴＯＫＯ

Ａｃｔ９　帰る場所とそれをくれた人（前書き）

スオウの意外な弱点が明らかに。

スオウ……まさか君にそんな弱点があっただなんて……。

後半はルークの戦闘です。なんだか旧主人公が調子こいててすいません。

まぁ、今回もフェイトさんの愛の力で乗り切っていただきます。

では、本編スタート！

Ａｃｔ９　帰る場所とそれをくれた人

「……ねぇティア」

「なによ？」

「ここさ……何か出そうじゃない？」

「何かって何よ？」

「あれ……ほら……そのぉ……幽霊的な……スタンド（ジョジョの○妙な冒険のアレ）的な……」

スオウとティアナが居る場所。そこには人っ子一人いなかった。というか、スオウの言う通り、人の代わりに何か別のモノが出そうな雰囲気すら醸し出している。

とある世界の工場乱立地帯に二人は来ているのだが、薄気味悪い雰囲気にスオウの様子が心なしかおかしかった。

「……あんたもしかして……幽霊の類が苦手とか……」

「ぜ、全然だけど？？？！！！！　ゆゆゆゆ幽霊なんて、そそそそんな非科学的なモノ居る訳ないじゃん。い、いやだなぁティアは……このお茶目さん（引き攣った笑顔）」

スオウの様子は明らかにおかしかった。そう、分かりやすく言えば

ビビっている。
その証拠に、いつもはティアナの隣を歩いている彼が、彼女の服の裾を手に、後ろを歩いているのだ。めちゃくちゃ挙動不審、且つビクビクしながら。

「あ、スオウの後ろに白い影が…」

ガタガタガタッ！！！！！

ティアナが後ろを指さしながらそう言うと、スオウは近くにあった土管に慌てて隠れてしまった。その時の彼の動きは世界を狙える（なんの部門かは不明だが）くらいの速さだった。

「……あんた……もしかして……」

「いや、違うから……これはあれ……ゆかり王国への入り口が……」
（ゆかり王国についてはグッてみてください）

「……」

スオウの苦しすぎる言い訳に、ティアナはただ無言で、白い目でスオウを見つめる。
彼は彼で、場の気まずい空気に押し潰されそうな気分だった。

「ぷ……あはははは！！！！！　す、スオウ、あんた幽霊にビビってるの？？！　ちょっとかわいいとこあるじゃない……ぷくく……」

「ちょっとちょっと、マイハニー！！？　俺、歳幾つだと思ってんのさ？　もう１８よ？　そんないい大人が、幽霊ごときで……」

「あ、スオウの背中に……」

「あああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！？？？？？　ごめんなさい、マジで！！！　焼きそばパンでもコロッケパンでも買って来ますんで、マジで許してください！！！！！」

ティアナ、スオウの意外過ぎる弱点を、弱みを握る事に成功した瞬間だった。

まぁ、スオウの幽霊恐怖症の原因はこの工場乱立地帯の不気味さだけではないのだ。今回、クロノから回ってきた任務の内容がそれぞ助長しているのだ、

「にしても、『夜な夜なゾンビが徘徊する工場』って……オカルトも良いとこね。B級映画によくある感じだわ」

「ティ、ティア……マジで帰ろう。さっきから後ろから足音がするような気がして、半端なく怖いんだ。ねぇ、お願い。」

「ダメに決まってるでしょ。怖いのが嫌なら、さっさと終わらせて帰れるように努力することね」

スオウの涙ながらの訴えも、ティアに一蹴されてしまう。これまでの振る舞いから、怖いもの知らずのように見えていたが、その実は変なところで怖がりなようだ。

その点、ティアナの方がよっぽど頼り甲斐がある。女性というのは逞しいものである。

「って言っても……ゾンビなんてどこにも見当たらないわね……その前にゾンビなんて存在するかも怪しいんだけど……」

「ここの工場で働いてる人が見たって、そう証言があったからここに来たんでしょ？　もしかして、その人の見間違いかもしれないし……うん、きっとそうだ。てな訳で、異常なし！　さぁ、帰ろう！！」

「おバカ！！」（スパァァァン！！！！）

「へぶっ！！！？」

そんな感じのやり取りをしながら、念のためにデバイスをセットアップして工場内の奥にどんどん進んでいくスオウとティアナ。

今回の任務は夜な夜な工場を徘徊するゾンビなる存在の確認、そして出来るのならばその問題の解決というものだ。
ゾンビなどというオカルトチックな存在に局も首を傾げていたようではあるのだが、工業主体のこの次元世界にとっては操業や従業員の労働に対する妨げになる可能性もあるため、無視することも出来ないというわけだ。

「ゾンビとかなら、ク○スとかレ○ンさん呼べばいいじゃん……俺たちに共通してるの銃使うとこくらいだよ……」

「あと、男女ペアになってストーリー進めるところも、でしょ？
薄気味悪いのは分かるけど、本当に不安になってるのはここで働いてる人達なんだから。しっかりやるわよ？」

「うぅ……了解……」

スオウはちょっと泣きそうになりながらそう返事をする。

なにはともあれ、調べてみない事には何も分からない。二人はそれを確認すると、暗闇で真っ暗な工場の奥を目指して行った……

その二人の後ろを大量の黒い影がゆっくりと、だが確実に追いかけている事に、この時の二人は気が付く事は無かった……

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

一方、イノベイト・チルドレンを名乗る、水の王スロウスと相対していたルークは……

「イノベイト・チルドレンって何かな！！？　おっと！！」

そう口を動かしながら、ルークは自分の心臓目がけて付きだされてくる三叉の槍をアーカーシャで受け止める。金属同士の衝突により周囲には甲高い音が響き渡る。

「教えても意味無いと思うよ～？　君、ここで死ぬだろうしさ」

スロウスは気だるそうにそう呟くと、ヴァサー・デプスを再び突き出してくる。今度は頭狙いだ。

「あぁ、そうかい！！」

ルークはその攻撃を首だけで避け、がら空きになったスロウスの体にアーカーシャを叩きこみに行く。

だが……

「狙いは悪くない……でも通用しないな、その攻撃は」

スロウスはその攻撃を完全に読み切っており、余裕を持って回避した。

その反応の速さは、見切りとはまた別の次元のレベルのモノだと、その瞬間だけでルークは理解した。

「ヴァサー・デプス」

『OK，my lord』

スロウスはルークのカウンターを回避してすぐ、後方に下がり、彼のデバイスヴァサー・デプスに命令し、地面を矛先で叩く。次の瞬間、ルークは我が目を疑った。

「おいおいおい……なんの冗談だよ……」

スロウスがヴァサー・デプスで地面を叩くと、降雨によって地面に降り落ちていた雨水が驚くべき速さで一点に集まり、大きな塊になっていく。

そして、その塊は徐々に何かの形を成していく。牙、そして鱗……鋭い掻き爪を持った何かに……

「水で出来た龍……かぁ……。なんとも芸術的な……」

「アクア・ドラゴン、水分さえあればこれくらいのモノは楽勝だよ」

スロウスはその水で出来た龍を空中に滞空させ、いつでもルークを襲う事が出来る状態を作り出す。

水を操る能力らしいのだが、詳細は分からない。だが、『水の王』

と名乗っている以上、その類の能力を持っている事だけは確かだった。

「それじゃ、さっさと大人しくやられてくれよな」

「断固、お断りだっての！！！」

スロウスがそう言った後、アクア・ドラゴンなるモノがルーク目がけて襲いかかってきた。ルークはアーカーシャを納刀状態から抜刀し、雷撃を纏った剣戟を目前に迫る水で出来た龍に向かって放つ。

「無駄無駄」

「！」

スロウスがそう言った通り、ルークの攻撃は水龍は切り裂きはしたものの、一瞬でその傷を修復し、何事も無かったかのようにルークに襲いかかる。

「危なっ！！？」

ルークは水龍の牙を紙一重で避け、空中に舞い上がる。だが、龍と名のつくだけあって、水龍はそんな事など知った事かというように、ルークを空中にまで追いかけてくる。

「点でダメなら、面で攻めるだけだ！！」

ルークは言いながらアーカーシャにカートリッジを二発ロードし、魔力を爆発させる。そして、その魔力を砲撃に回す。

「プラズマ……スマッシャー！！！！」

赤い雷の砲撃。収束よりも拡散を目的に放たれたその砲撃は水龍に向かって真っすぐ飛んでいく。

バシャアァァァ！！！

そして、ルークも思惑通り水龍はプラズマスマッシャーに飲み込まれ、その形を完全に失ってしまう。

ルークはさらに続けて攻撃の手に出る。ソニックムーヴで空中から姿を一瞬にして消した。

「獲った！！！」

ルークが現れたのはスロウスの背後。彼は完全にルークの姿を見失っている筈である。

ルークは非殺傷設定のアーカーシャを抜刀し、スロウスのがら空きの背後から攻撃を仕掛けた。

が、その攻撃が決まる瞬間、スロウスがこちらを向く。その表情には戦いによる気持ちの高揚や、ましてや死に対する恐怖といったモノは全く見られない。

ただ、彼の右目が濃い真紅に染まっている事だけが、ルークに嫌な予感をもたらした。

「っ！！！」

ルークは寸での所で攻撃をキャンセルし、再びソニックムーヴで距離をとる。

傍から見れば、チャンスを棒に振ったようにも見えるが、次の瞬間

彼の選択が賢明であった事が証明された。

シューーーー！！！！！

と、そんな音を立てながらスロウスの上空から、彼を囲うかのように、大量の水が降ってくる。それも水滴ではない。カーテンのように薄く、強烈な雨のシールドだ。

「惜しいな……あのまま攻撃してたら、腕ぶった切れてたのに……」

スロウスは面倒そうにそう言う。ルークは最初、彼の言葉の意味が分からなかったが、素ロスの足元を見て、ハッとした。

なんと、スロウスを囲うように、円形の切れ目がアスファルトに出来ていたのだ。

先程の水のシールドで、地面に綺麗な切り込みを入れたということだ。

ウォーターカッターという道具がある。加圧された水を0．1ｍｍ～1ｍｍほどの小さい穴などを通して得られる細い水流が、毎秒５００~８００ｍ、凄いものではマッハ3というスピードで放たれ、その水の刃を利用すれば、鋼鉄やダイヤモンドまでもが切断可能な代物である。

スロウスはそのウォーターカッターを驚くべき事にカーテン状にして、上空からはなったのだ。

水の加圧方法や、水の速度の確保などの手段は謎だが、そんな事を考えている余裕が無くなるほどヤバいものであることは確かである。

「おいおい……恐ろしい防御法だな……」

ルークはそう呟きながらも気を抜かない。スロウスの一挙手一投足から目を離すことは無い。

「これでも、一応、王を名乗ってるからね。それに、『水のレガリア』であるヴァサー・デプスが手にある限り、水の存在はそれらが全て僕の武器になる。……理解出来たかな、君に勝ち目が無いってことを……」

スロウスは降りしきる雨を背に、ルークにそう告げる。確かに、気候、能力、そして、どういうからくりかは分からないが、こちらの動きは完全に先読みされてしまっている。
勝てる見込みは薄いだろう。

だが、それは本気を出していない時のルークに限ってのみ言えることだ。

「勝ち目……ねぇ……」

ルークは言いながら、アーカーシャを抜刀し、正面で構える。その様子からは絶望は見て取れない。ルークは諦めてなどいないのだ。

「俺さぁ、愛しのマイワイフと偶にだけど、喧嘩とかもしちゃうんだよね。まぁ、怒ったフェイトもそれはそれで萌えるんだけど……あのほっぺを膨らませて怒ってるところなんか、それだけで昇天しそうになるね。」

アーカーシャを構えつつ、ルークはいきなりそんな話を、リア充話を始めてしまう。そんな彼の様子に、恐怖で気でも触れたのかと思ったスロウスだが、ルークの目を見てその考えはすぐに消えた。

ギラギラとしていたのだ。ルークの眼光は、とてつもなく鋭いものであり、スロウスは不覚にも一瞬飲まれてしまった。

「で、喧嘩して初めて気が付くこともあるんだ。フェイトが本当に心配性だってこと、本当に優しくて、暖かいってこと。俺の事、ちゃんと見てくれてるってことがさ……」

「……リア充自慢かい？」

「あはは……そうかもね。でも、本題はここから。」

ルークはそう言いながらも、少し笑みを浮かべながら話を続ける。

「フェイトは、俺の帰る場所になってくれた。昔、自分の手で帰る場所をぶっ壊した俺に、帰る場所をくれた。もちろん、今も待っててくれてる。でもって、これからもずっと待っててくれる。」

ルークに、帰る場所、自分の居場所、それらを与えてくれたのは、フェイトだった。

「もちろん、フェイトにとっては俺がそうでありたい。フェイトの帰る場所は俺なんだと、胸を張って言いたい。」

もちろん、フェイトに寄りかかるだけではない。お互いに支えあい、足りない部分を補い合う。そんな関係でありたい。

「俺は残りの人生を、自分の帰る場所を、フェイトをシエルを守るために使うと決めた。だから、こんな詰まらん所で死んでるほど、暇じゃないんだよ。」

諦めるなどという選択肢は端から持ち合わせていない。ただ、勝つだけだ。

「俺の帰り道を邪魔するっていうなら、お前が王様だろうが、イノベイト・チルドレンだか何だかだろうが、レガリアがなんだろうが、知ったこっちゃない。ただ、叩き斬るだけだ。」

ルークは目を見開き括目する。その瞳にはアマテラスの瞳が浮かび上がっている。

「勝ち目がない？　だからどうした？　無いなら作ればいいだけだろう！　妻帯者舐めんなよ、この野郎！！！！！　お前なんぞ、マジギレした時のフェイトに比べれば、旧型ザクに等しいわ！！！！」

ドン！！

とそんなＳＥが背景に出そうな、そんな勢いのある宣言。

スロウスはそんなルークに少しムッとした顔をする。対してルークは笑みを浮かべながらアーカーシャに命じ、ダモクレスを抜刀した。

「アーカーシャ、ドライヴスタート！！」

『ら～じゃ！！』

その瞬間、アーカーシャのドライヴが起動し、ルークの体を発生した赤い粒子が包み込む。

ソル・ドライヴ・システム。アーカーシャに搭載された、ルークの切り札でもある。

「……（こんなの残してたんだ……ま、それでも高が知れて……）

」

ルークの魔力は確かに段違いなほどにアップした。だが、スロウスにとってはそれでも脅威とは言い難い。
油断をしていたわけではない。ましてや恐怖などもっとあり得ない。

ズドンッ！！！！！

だが、次の瞬間、スロウスの体は空中高く吹き飛ばされていたのだ。

「がっ！！？……何を……？！」

空中で自分が攻撃を食らった事を認識したスロウス。先程までスロウスが居た場所には、アーカーシャとダモクレスの二刀を振り切ったルークの姿があった。
彼の剣の片割れからは、赤い粒子が止めどなく溢れ出ている。

シャッ！！！

そして、またスロウスの視界からルークの姿が消えた。残像すら映さない超高速。
ハッキリ言って、見るという事を放棄してしまいたくなるような、そんなスピードだ。

次にスロウスが肌に感じたのは横薙ぎの一閃。先程の一瞬で空中に放り上げられていたスロウスに、瞬きの間に追いつき追加攻撃をお見舞いしたわけである。

「くっそ……人間風情が……」

さらに吹き飛ばされながらも、苦々しげにそう呟くスロウス。こちらも本気で相手をしてやろうと、そう思ったその時だった。スロウスの頭に、念話が飛んできたのだ。

『スロウス……予定を変更だ。その男は後日改めて対処する。一旦退け』

『ラース…？……分かったよ……。ここから良いところだったのに……』

『そう言うな…。まだまだお前にはやってもらいたい事があるのだ。では、移すぞ？』

ラースからの危険命令に、しぶしぶながらに従うスロウス。まぁ、こちらもそれなりのダメージを負ったわけで、このまま無様な勝負を続けることは、イノベイト・チルドレンの名誉に関わるので、致し方ない。そう思うしかないスロウスだった。

ルークのさらなる追撃がそこまで迫っても来ていたので、斬り上げるには、まぁいいタイミングでもあるだろう。

「悪いね、ルーク・R・ハラオウン。今日はここまでだ。」

「なにを…！？」

と、スロウスはそう呟くと、空中でヴァサー・デプスを一降りする。すると、スロウスの体は雨水を集めて出来た水の奔流にのみ込まれ、次の瞬間には姿を消していた。

一瞬の出来事に、ルークは振りかぶっていたアーカーシャとダモク

レスを止める事が出来ずに、剣を振るってしまうが、スロウスが居た所には最早何もなく、虚しく空を斬るにとどまった。

「逃げた……か……。何だったんだ…一体……？」

ルークはドライヴをオフにして、ゆっくりと地上に降りる。
ドライヴの副作用によって、体中が悲鳴を上げており、その激痛だけで気絶できるレベルだった。
昔なら血を吐いて倒れているところだが、体が成長したことがそれを緩和しているのだろう。

「それに……最後の攻撃……念のためにアマテラスの瞳で幻術をかけた上で攻撃してたつもりだったんだけどなぁ……効いてなかった……？」

ルークの頭には疑問だけが残った。
いきなり襲撃され、ここまで追い込まれたこともショックだが、彼、イノベイト・チルドレンなる存在の脅威。王の存在、そしてレガリアの存在。

それらだけでも、看過できない問題であることだけは確かだったのだ。

「はぁ……取り合えす……アイリスに連絡しよう……あぁ～あ…また怒られるだろうなぁ……」

と、そんな心配をしながら、部下に連絡を入れるルークだった……

Ａｃｔ９　帰る場所とそれをくれた人（後書き）

スオウ「（（（（（（（（（（；。Д。）））））））））ガクガクブルブルガタガタブルブル……幽霊怖いお……」

Ｆ２０Ｃ「お前……そんな弱点があったのか……見ろ、ティアが向こうで爆笑してるぞ？」

スオウ「し、仕方ないじゃん！！！！　作者だって虫が大の苦手じゃん、カマキリをどアップに持ってこられて気絶してたくせに！！！」

Ｆ２０Ｃ「ううううううるさいわ！！！！　だって虫だよ？？？？！！　怖いじゃん！！！！　なんであんなに足あるんだよ！！！！　どこを見ても薄気味悪いだけなんだもん！！！！！」

スオウ「つまり、俺とおまえは同じ穴のムジナなんだ。仲良くしようぜ」

Ｆ２０Ｃ「だが断る。」

次回はバイオハザードなお話です。
ちなみに私はスナイパーライフルが大好物でしたね。なんどビューティフォーしたことか……
おっと、これはＣｏＤでしたねｗｗ

本日のＥＤ「Ｐｅｒｍｉｔ」　ｓｏｎｇ　ｂｙ　ＭＥＬＬ
ＰＣゲーム「真説・猟奇の檻」より

Ａｃｔ１０　ティアナの涙、スオウの怒り（前書き）

今回から、次回にかけてはスーパースオウタイムになる予定です。

そろそろ、主人公らしく煌めいてもらわないと……

さて、タイトルにもありますように、スオウが怒ります。敵に死亡フラグが立ちましたねｗｗｗ

でわ、本編どうぞ！！！！

Ａｃｔ１０　ティアナの涙、スオウの怒り

ガチャ……

と、金属の擦れ合う様な音と同時に、スオウとティアナの目の前の大きめの扉が開く。室内には旧型の情報端末や傷んだ机などがいくつも置かれており、そこが倉庫だという事が理解出来た。

「ここは倉庫みたいね……異常はなし…と……」

ティアナは室内に何も以上が無い事を確かめると、ドアを閉め次の部屋を目指す。スオウは先ほどよりもこの暗さと不気味さに慣れたようで、ティアナの後を付いて行く。

二人はゾンビが出ると噂の工場、その中を探索中だ。目撃情報が多いのは良いのだが、如何せん多すぎるため、ゾンビの出現ポイントなどを絞り込むことが出来ないのだ。
故に、あまりスマートな方法ではないが、こうして少しずつだが探索を進めているというわけだ。

ゾンビの気配はスオウの能力にも引っかからないようで、今度ばかりは自分たちの足で探すほかない。面倒な話だが、今できることといえばこの程度の事だった。
ゾンビレーダーなどがあるのならば、今すぐにでも飛び付きたい気分である。

「はぁ……結構広い工場だね。これは、下手すると朝までかかるかも……」

「分散して調べてみる？」

「それだけはどうかご勘弁を……」

ティアナの開けたドアの反対側に位置する戸を開け、中を確認しながらそう言ったスオウに、ティアナは冗談を飛ばす。まぁ、スオウからすればまさに「冗談ではない」のだが。

「こんな入り組んだ場所でバラバラに行動するのは色々まずいよね？！！（主にスオウの心臓的な意味で）」

「分かってる。私だってそんな鬼じゃないわよ。」

そのティアナの返事にホッとしながらも次々と部屋をチェックして行くスオウ。

彼としては、もう面倒くさいからこの辺りを更地にしてでも早く帰りたいと思ってしまうくらいなのだが、流石にそれは問題だらけである。

「今、この辺り一帯を更地にして、さっさと帰りたい、とか考えてないでしょうね？」

「ソ、ソンナワケナイヨー」

全部読まれていたらしい。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

その後、小一時間工場内を探索した二人だったが、得に怪しいモノも、ましてや工場員が見たというゾンビなるモノの影も形も見つかることは無かった。

「う～ん……俺とティアのコンビの放つ覇王色の覇気に気圧されて逃げ出したか……」

「そんなバカな話があるわけ無いでしょうが……。まぁ、でも、あれだけ多くの目撃証言があるのにも拘らず、ここまで何の音沙汰も無いとなると……なんだか不気味ね……」

そう言って、ティアナは思案顔になる。

なんとなくだが、誰かの手の平の上で踊らされている感覚がしてならない。

「……」

ティアナは周囲を見渡す。

二人の現在地は工場の中央に近い場所であり、さまざまな機械が来るべき稼働の時間を待っている。

ここまで来るのに、資料に添付されていた地図通りに道を選んできたのだが、屋外ということもあり、月明かりでそれなりに道は明るく視界には困らなかった。

周囲は少し背の高い建物で覆われている程度で……

「っ！！！」

その事実に気が付いた時、ティアナはハッとする。探しても見つか

らない理由が分かったのだ。

「やられた……誘い込まれたみたいね」

ティアナがそう言った瞬間、周囲の建物の屋上に一斉に人影が、さらに二人があるいてきた道からも続々と黒い影が出てくる。

「私達をここまで誘い込むために、隠れてたってわけね……探しても見つからないわけだ……」

「……マジでゾンビだ……ウソだろぉ……」

スオウがそう呻くように言った。彼とティアナの視線の先には、ゆっくりと歩みをこちらに進めてくる人間……いや、人というには些かおかしな部分が目立つ。

ひたすら「あぁぁあぁあ……」とか意味の分からない声を出しながら歩いていたり、顔とかから血を流していたり、目が血走っていたりと、ホラーハウスさながらの、そうゾンビと呼ぶに相応しい者たちが、スオウとティアナに迫りつつあるのだ。

「い、一応聞くけどさ。どうする？」

「どうするも何も……向こうは私達に危害加える気満々みたいだけど？」

「うわぁ……本格的にバイオハザードだよコレ……」

その間も、ゾンビっぽい奴らは二人ににじり寄ってくる。その距離、約２０メートルといったところか。

戦うにしてもこんな工場の、しかも機械類がある場所で戦えばそれだけで被害が出てしまう。出来ることならもう少し開けた空間で戦いたいがそうも言っていられない。
恐らく、その辺りの事も計算してここまで誘い込んでいたのだろう。

「このゾンビ達を操ってる奴が居るのかもね。パッと見、そんなに知性があるようにも見えないし。それで人を罠にかけようとする発想が生まれるなんて考えにくい。」

「じゃあ、その操ってる奴を見つけてボコればいいのかい？」

「本当にこのゾンビ達が誰かの指揮下に居るのなら、ね」

二人はそう言いながら、クロスミラージュを、オルクスを手に迎撃の姿勢を見せる。
だが、ゾンビ的な存在達の数は肉眼で見る限り数百体は軽い。ハッキリ言って多勢に無勢過ぎる。
ティアナとスオウの二人でも、楽勝とは胸を張って言えはしない。

「って、あれ…？」

と、そんな中、突如としてゾンビ達がその歩みを止める。加えて、二人を囲うように展開していたゾンビ集団がモーゼの海のように分かれていくではないか。
そして、そのゾンビの道の先から男の声が二人に対して飛んできた。

「管理局か……今か今かと待っていたが、漸く現れたか……」

その声の主は、ゆっくりとこちらに向かって歩いてくる。全身黒い

スーツのようなもので固めており、一見するとビジネスマンにも見える。

「あんたがこのゾンビっぽい奴らのボスかい？」

「ゾンビ……ふふ…。　まぁ、君たちにはそう見えているのだろうね。だとすれば、その認識で構わないよ。」

スオウが謎の男にそう尋ねると、男は愉快そうに少し笑った後、スオウの考えを肯定した。かなり含みのある言い方だが。
そして、謎の男の顔が月明かりに照らされ、ハッキリと見えるようになる。それと同時に、男は自分から名前を名乗ってきた。

「はじめまして、管理局のお二人。私の名前はキックス、キックス・モンバール。管理局の転覆を目的とする組織に与する者だ。」

だが、その男の顔を目にした瞬間、ティアナの様子がおかしくなる。手にしているクロスミラージュが、小刻みに震えているではないか。
隣のティアナの様子にスオウはまだ気が付いていない。感応能力は常時発動している訳ではなく、今は彼女の感情の揺れを感知出来ていないのだ。

「へぇ～。管理局の転覆ねぇ～。……どっかのバカと同じようなこと言って……。最近ブームなのかねぇ、管理局潰しが」

スオウは誰かの事を思い出すように、男に向かってそう吐き捨てる。
その表情には誰かを憐れむような色と、どうしようもない事を思い出して切なくなってしまったという感情が見て取れた。

「で？　こんなゾンビ共を使って局に何かするつもりなのかい？

一応忠告しとくけど、やめた方がいいと思うなぁ」

「まさか…私は計画の一部に過ぎない。来るべき日にはより多くの同志が立ちあがり、管理局の存在を根底から叩き潰す。そして、人間は新たな、そしてより優れた存在によって統治されることになる。」

男は酔い痴れるかのように、且つ雄弁にそう言葉を並べる。
その言葉がスオウの中に、記憶の中のある人物が昔話していた考えと重なった。スオウは少し表情を苦いモノにしたが、続けて口を開いた。

「自分たちがその優れた存在だとでも?」

「いや、私は違う。人類を導くのはまた別の、異なった理の中で生きる者たちだ。彼らの存在によって、人は争う事をしなくなる。この腐った世界に新たな秩序を創造してくれる。」

どうやら、彼はその優れた存在とやらではないようだ。
優れた存在とやらがなんなのかは分からないが、一つだけ確かな事がある。

「なるほど、要するに、あんたは使いっぱしりってわけだ。ドラ○エで言うところのカンダタさん的なやられ役ってことだね。」

「君は良く分からない例えの仕方をするね?」

「はは……簡単に言うとだね……あんたはただの雑魚だってことだよ。Ｄｉｄ　ｙｏｕ　ｕｎｄｅｒｓｔａｎｄ?」

スオウがめちゃくちゃ上から目線でそう言うと、余裕の笑みを浮かべていたキックスの目元がピクリと動いた。どうやら、少しはムカついてくれたようだ。

「（さてと、細かいことはこいつをフルボッコにした後で、吐かせよう。ちょっと人数差があるゲームだけど、面白そうではあるし…うん、リアル三国〇双が出来ると思えばいいか。……ちょっと怖いけど…）」

と、そんな計画を立てて少し楽しそうにオルクスを構えるスオウ。そして、先程から言葉を発しない相棒に声をかける。

ここは二人で連携して敵をまとめて吹き飛ばした方が早いだろう、そう考えてスオウはティアナに話しかける。

「よし、ティア。二人でまとめてぶっ飛ばそう。俺が前に出るから、ティアは……」

その時になって初めて、スオウはティアナの異常に気が付いた。

「あ……嘘……そんなの……どうして……？」

「ティア……？」

彼女は震えていた、キックスの姿を目から離すことなく。

彼女の双眸は揺れ、明らかに精神に負荷がかかっている。クロスミラージュも彼女の異常に困惑しているようだ。

キックスは、ティアナのその様子に何か思い当たることがあるようで、癇に障る笑みを浮かべている。ティアナの異常さえなければこの場で殴り倒してしまいたくなような、そんな笑みだった。

「そんなはずない……だって……あの時……あの日……」

「ティアってば！！！　どうしたのさ！！？」

スオウが彼女にそう尋ねるも、なんの返事も返ってはこない。それ
ばかりか、彼女はへなへなとその場に尻もちを付いてしまい、クロ
スミラージュも地面に落してしまう。

「お前、……ティアに何した？」

スオウはこの異常の原因であろうキックスを、殺気を込めた瞳で貫
きながら尋ねた。
この時のスオウからは、普段のヘタレ感や情けなさは微塵も見られ
なかった。
珍しく、本気で怒っているようだ。口調もかなりきついものになっ
ている。

「私は何も。ただ、君とその子では見ている物が違う。ただそれだ
けだ。認識のズレとでも言えばいいのかな」

「じゃあ何か？　ティアにはお前の姿が、俺の見ているのとは別に
奴に見えてるってわけか？」

「ご明察。それこそ、私の持つ能力の一つでもある。」

どうやら、ティアナにはキックスの姿が、スオウの見ているそれと
は全く違う人物に見えているらしい。
そして、その誰かの姿が、彼女をここまで動揺、否、混乱させてい
るのだろう。

そして、ティアナが呻くようにその誰かの名前を、固有名詞を口にする。
それはティアナにとっては過去の情景、加えて傷でもあり、力の源でもあった。

「どうして……『兄さん』が……どうして……」

「兄さんって……」

その瞬間、ティアナの思考から様々な情報が溢れてくる。スオウは無意識の内にそれを感じ取ってしまう。
ティアナの心の傷を、スオウは見てしまうことになる。

楽しかった兄との過去の思い出。

兄を失った悲しみ。

その死にかけられた悪辣な言葉。

そして、それを覆すために立てた誓い。

「……」

スオウはティアを見つめ表情を曇らせる。最初に出会ったときに、この女性の情報は能力を使ってある程度読み取った。
形としては知っていたのだ、ティアナの過去については。

だが、こんな形で兄との再会、いや、再会ではない。これはただの

幻想なのだから。
その幻想の所為で、ティアナはここまで揺れてしまっている。いつもはストイック過ぎるくらい、でもそれが綺麗に映ってしまうくらい凛としている彼女がだ。

「お取り込み中の所悪いが……君たちには早々に消えてもらおう。私の力によって、その子は最早戦うことすらできない。仕留めるのは容易い……」

キックスが卑下た笑みを絶やす事無くそう呟くと、ゾンビ軍団が再び動き出した。
このままでは包囲された揚句に惨たらしく殺されるのが落ちだろう。
スオウ一人で応戦しても良いが、こんな状態のティアナを放っておくわけにもいかない。
故に、スオウのとった行動は……

「クロスミラージュ、ティアのバリアジャケットはそのままでよろしく！！」

『畏まりました、スオウ様』

「ティア、ちょっと御免よ」

そうして、待機状態になりカード形態になったクロスミラージュを懐に入れ、スオウはティアナをお姫様抱っこした。
普段なら拳骨の一つでも飛んでくるのだろうが、今のティアナにそんな事をする余裕は無かった。

「兄さん……兄さん……」

ティアナはうわ言の様にそう繰り返すだけだ。いつもは綺麗なその瞳も、今は黒く濁ってしまっている。スオウはそんな彼女を見て、悔しげに歯を噛み締めると、殺到するゾンビ共には目もくれず、キックスに視線を向けて言い放つ。

「ちょっと待ってろ……戻ってきたら殺してやる」

「ふん……逃げようっていうのかい？　ふふ…そんな事私が許すとでも？」

ゾンビ達の迫るスピードが一段階上がる。それと同時に、スオウはティアナを抱きかかえたまま、上空にジャンプした。そして、人間ではあり得ないレベルの跳躍により工場の大型機材に着地し、その場から離れるためにまた長い跳躍をする。

「ティア、ちょっと揺れるけど我慢してくれ」

返事が返ってこない事は分かっているが、スオウはそう言ってから次々と建物の屋根や大型機材を足場に跳躍して、ゾンビの包囲網を掻い潜りその場からいったん退散しようとする。

「Ｇａａａａａａ！！！！！！！」

「ＧＵＧＡＧＡＡＡＡＡＡＡＡ！！！！！！」

と一時的に空中に居る事になるスオウ達の足元では、ゾンビ共が飛びかかろうとしている。

もしも、足にでも取りつかれると面倒なので、スオウは一応の目くらましを放っておく。

オルクスを抜き、空中で砲撃魔法を使う。

「アンリミテッド・バレット（無限の銃弾）」

そして、スオウの背後におびただしい数の誘導弾が生まれ、次々と放たれる。誘導弾は放たれるたびに高速で同じモノが構成され、それがまた放たれる。

無限に続くかとも思われる魔力弾の嵐。ゲート・オブ・バ〇ロン・スオウスペシャルのネーミングが微妙だったので、新しく名前を付けてやったのだ。

魔力弾に当たったゾンビ達が吹き飛び、目くらましには十分だった。その隙に、スオウはティアナを抱えて何処かへと跳び去って行った……。

「ふん……まぁいいさ……。片方を始末したあとに女を消せば良いだけの話だ……」

キックスはそう呟き、満月の空を見上げ愉快そうに笑うのだった……。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

キックスと遭遇した場所から少し離れた工場の事務所らしき部屋に逃げ込んだスオウとティアナ。

とはいえ、ティアナは未だに混乱の中に居るようで、いつもの頼も

しさは見る影もないが。

「ほら……ティア、ちょっと座ろう」

「……うん……」

スオウはお姫様抱っこのままのティアナを手ごろなソファに座らせる。

ティアナもスオウに返事をするくらいには、それでもギリギリの状態なのだろうが、混乱状態は回復したらしい。

だが、未だに彼女の頭の中には死んだはずの兄、ティーダ・ランスターの姿が浮かんでいることだろう。

アレはキックスという男だと分かってはいても、スオウがいくら説明しても、完全に乗り切ることは出来ないだろう。

人間の感情とはそういう風に出来ているのだ。

スオウは敢えて何も言わない。『大丈夫？』など言えたものではない。

今のティアナはどこからどう見ても大丈夫ではないからだ。

だから、スオウは黙ってそこに居る。彼女が何かを口にするまで、ただそこに居る。

「分かって……るのに……」

それから約五分。ティアナが消え入りそうな声でそう呟く。
どこか悔しそうなのは、未だに兄の事を振り切れずにいる自分自身の弱さに対してなのか、それともこんな情けない姿をスオウに見せている事なのか。

「でも……あの顔は……声は……兄さんで……大好きだった兄さんで……」

「……」

「私は兄さんの……意思を……夢を……でも……兄さんに……違うのに……怖くて…」

スオウは黙ってティアナの声に耳を貸す。
まだだ、何か言うのはまだ少し先だ。声を掛けそうになる自分を抑えつけながら。

「私……戦えない……怖くて……戦えないよぉ……兄さんに…武器なんか向けられないよぉ……」

そして、ついに泣きだしてしまったティアナ。
別人だということは理解している、だが、視覚情報として目に映るのは、大好きだった兄の姿。
理解は出来ても、感情がそれを良しとしない。恐らくティアナはあのキックスを攻撃する所か、前に立つことさえできないだろう。
死んだはずの肉親の姿をした敵。これほどやりにくく、恐い対象は無いのだ。

「ダメだ私……執務官なのに……兄さんの夢なのに……怖くて怖

くて……体が震えて……」

今のティアナには怯えしかない。
だから戦えない。だが、それはおかしなことだろうか？　人間は怯えるように出来ている。
根源的な恐怖を感じ取ることが出来るからこそ人間なのだ。

だから、怖がっているティアナにスオウがしてあげられる事は一つだけだった。

ポン……

「あぁ……それで良いんだよ。ティアは戦わなくても良い、恐い思いをしなくて良いんだ。ティアが怖くて立てないなら、俺が負ぶってあげるからさ。怖がったって、良いんだよ。それが人間なんだ、当たり前のことなんだ」

「……う……ぅぅぅ」

スオウはティアナの頭に手をやり、優しく撫でる。そして、優しい声でそれでいてティアナにしっかりと届くように呟く。
ティアナは頭を撫でられながら嗚咽を漏らす。

「大丈夫。ティアが怖いと思うモノは……全部俺が壊す。全部、みんな纏めて消し飛ばして見せる。」

「うぅ……ぅぅぅ……」

「だから、ちょっと待ってて。すぐに戻って来るから」

そう言って、スオウはティアナの頭をもう一度撫でるとその手を離して立ち上がる。

「うあぁぁ……ぅぅぅ……えぐ……ぅぅ……」

そして、ティアナを視線から外し、歩き出す。そうすることでやっとティアナは思い切り泣く。面と向かって、誰かの目があるところでは絶対に泣かない彼女がここまで精神的に追い詰められ、涙を流している。

スオウの逆鱗に触れるにはお釣りがくるほどだった。

「……ブッ殺してやる……」

そう呟き、ティアナの安全の為に使った部屋から出てきたスオウの瞳は爛々と、紅く紅く染まっていた。

ティアナの涙に、スオウが……本気でキレた。

Ａｃｔ１０　ティアナの涙、スオウの怒り（後書き）

Ｆ２０Ｃ「スーパースオウタイムの始まり、始まり～♪」

スオウ「やっと俺の本気を見せる時が来たか・・・・・・・・今日の私は、アニメ三期の八話のなのはさんを凌駕する存在だ！！！！」

Ｆ２０Ｃ「それって相当怖いよね。作画崩壊的な意味で」

スオウ「大丈夫、このお話は京アニが制作を……」

Ｆ２０Ｃ「勝手に京アニ制作にするんじゃねぇよｗｗまぁ、私としては嬉しい事ですがｗｗ」

本日のＥＤ「Ｄａｎｃｉｎｇ　ｉｎ　ｔｈｅ　ｖｅｌｖｅｔ　ｍｏｏｎ」　ｓｏｎｇ　ｂｙ　水樹奈々様

アニメ「ロザリオとヴァンパイア」より

Ａｃｔ１１　ありがとう（前書き）

さて、今回でゾンビ事件はお終いです。次回はまたしてもエロティック大統領が出てくる予定です。

スオウ達ももちろんですがｗｗ

さて、皆様お待たせしました、スーパースオウタイムの始まり始まりｗｗ

Ａｃｔ１１　ありがとう

「ふぅ……」

キックス・モンバールは壁に背を預けて一息吐く。現在彼は先ほどスオウ達と交戦した場所に居る。

というより、移動していなかったのだ。彼らの居場所は放っておいても分かる。

加えて、先程の様子だとスオウはもう一度ここにやってくる可能性が高い。動くだけカロリーの無駄である。

「さて、あの二人の首を手土産にあの方たちに会うとするか……。私の有能さを知れば、その後の世界での私の地位も安泰だ……くくく……」

キックスがあの方たちと呼ぶ存在こそが、管理局を崩壊させ、世界に新たな秩序を生みだす者たちなのだろう。

キックスの表の顔はとある世界での、大企業のトップである。幼少期から勉学に励み、才能を伸ばし、２０歳という若さで会社を立ち上げた。

それから彼の勝ち組人生が始まった。会社は軌道に乗り、業界内では断トツの成績を収めている。

だが、彼はそれだけでは満足しなかった。会社を更に、大きく強固なものに。その為に彼は手段を選ばなかった。敵対的ＴＯＢ（株式公開買い付け）による他社の乗っ取り、裏の世界に手を回し、汚い

手を使ってライバルとなる可能性のある存在を片っ端から潰していった。

結果として、彼の非凡な才能も助けとなったようで、全てが彼の思惑通りに運んだ。キックスは自身の才能に、豪運に、手腕に、自分のことながら恐怖した。決して悪い気分ではなかったが。
だが、彼の中の怪物は確実に大きくなっていったのだ。

「……詰まらんな……」

いつのころからか、彼はしきりにそう呟くようになった。
彼は完璧すぎる自分の人生に魅力を感じる事が出来なくなってしまった。そう、人生に飽きてしまったのだ。

人間は刺激を忘れてしまうと心が死んでしまう。
新しい刺激を体に供給してやらないと生きることそのものがひどく詰まらない、ゲームで言うならばクソゲーに思えてしまう。
キックスがその典型だった。

そんな時だった。キックスの前に現れたフードを被った人物が彼に新しい刺激を与えたのは。
その人物は言った。

「世界をリセットしてみないか？」

その一言で、キックスは体に電流が走ったような衝撃を覚えた、否、快感というレベルのものかもしれない。
世界のリセット、具体的には管理局による支配を壊す事、加えて世界に新たな秩序を、そして導くことを目的としている彼らの誘い。

「これだ！！　私の求めていたモノはこれだったんだ！！！！」

キックスは無論、彼らに同調し、計画に参加した。
後の世界での地位の確約などのメリットももちろんだが、彼は純粋に世界を壊してみたかったのだ。
自身の灰色にしか見えない未来を自分の手で彩ってやろうと、その欲求を満たすためだけに。

彼らから力を貰い、キックスはこうしてここに立っている。あれほどに退屈だった人生が、今では少し楽しくすら思えてしまっている。
キックスは気が付いていなかった、否、気付こうとしなかった。
自分の中のモンスターが完全に彼自身を塗り潰してしまっていたという事に……

加えて彼は気が付かない。
そんなモンスターとなった彼をも壊す者がすぐそこに居た事に。

「かくれんぼは終わりのようだね？」

「あぁ、そうだな。もう隠れる必要も無くなった」

キックスの問いに、黒髪の青年スオウは短く、且つ冷徹なまでに低い声でそう答える。
その彼の様子に、少しだがキックスは違和感を覚えた。

先程までとは全く違う何かを、この男は纏っている。それも途轍もなく大きな何かを。

だが、彼の器ではスオウから発せられている物を感じ取れるのは、それが限度だった。

彼は愚か故に気が付かない。

目の前に居る男がどれほど強大な存在なのか。

自分の力が所詮は借り物であり、自分が矮小な存在でしかないという事に。

だからこそ彼は、今日この日、全てを失うことになったのだ。

「じっくり弄って……殺してあげるから……」

スオウは爛々と紅く輝く瞳をキックスに向けながらそう告げた。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「……」

スオウが部屋を出て少しして、ティアナはようやく落ち着きを取り戻していた。

だが、体の震えはまだ止まらない。ティーダの顔が頭から離れないのだ。

「…私……」

そう呟きつつ、スオウに撫でられた頭を自分の手で触ってみる。
スオウに頭を撫でられ、優しい言葉をかけてくれた瞬間だけは、震えが止まってしまった。
その事を思い出すだけでも、彼女の心は少しだが落ち着く。

「私……変わって無い……昔の頃と……全然変われてない」

ティアナは誰に言うでもなくそう呟く。部屋のテーブルには、スオウが置いて行ってくれたのだろう、クロスミラージュがあった。
だが、彼もまた気を使っているのだろう、自分からは喋らない。

「私は……甘えてばかりだ……兄さんにも…スバルにも……なのはさんにも……スオウにも……」

思えば、自分に厳しく厳しく、ずっとそう言い聞かせてやってきた。
そしてそれが間違いで、なのはにも怒られたりもした。
そして、そこから新しく学んで、少しずつ、少しずつだが変わっていったつもりだったのだ。

「私は……弱い……。弱いから……甘えてばかりだった……。」

無論、甘える事が悪い事とは言えない。
ストイックを貫こうとすれば、それは自滅に繋がる。機動六課時代に、いやという程思い知った事だ。
だからこそ、少しずつ他人に助けてもらえるように、他人を頼る事を許せる自分を、許せる強さを得ようと、そう思った。

だが、それは一朝一夕で得られるものではない。故にティアナはこうして震えている。

「強くなろうって、決めてたんだ……」

現実はこれだ。結局、スオウに全て押し付けてしまっている。
これは自分の弱さが招いたことだ。
あんな幻想の兄に恐怖して、動揺してしまう、自分の心の脆弱さが招いたことだ。

「そうだ……強くなるんだ！！　私は……私は！！」

ティアナは俯き加減だった顔を上げ、大きな声でそう言う。
失敗した。スオウに押し付けてしまった。自分の未熟さを呪う前に、やらなければならない事がある筈だと、彼女は思った。

それから少しの間逡巡したティアナは自分を叱責する。

パンッ！！！！

「しっかりしなさい、ティアナ・ランスター！！！！！」

自分の頬を両手で叩く。気合を入れる意味と、弱った心を奮い立たせるための喝。その二つの意味を持たせたのだ。

「スオウにだけ、背負わせてるんじゃないわよ！！　私はあいつのパートナーなんだから！！！！！」

そう言うと、彼女は机の上のクロスミラージュを手に取り、隠れていた部屋を飛び出した。
曇っていたティアナの瞳には小さな光が差し込んでいた。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

キックスは愕然としていた。目の前に広がっている光景に。先程まで平らだった地面が、クレーターのように窪んでおり、周囲は更地同然になってしまっている。
隕石と嵐が同時に発生したような、そんな異常な光景がキックスの目には映っていた。

先程までは綺麗だったキックスのスーツも所々で破けてしまっており、スーツの持つエリート臭は影も形もありはしない。

「どうした、人間？　ちびったか？」

「あが………お前は………」

キックスはその場に尻もちを付く。目の前にはスオウの姿がある。彼の冷徹な視線はキックスを射抜き、その戦意を完全に叩き潰している。

「さて……お前の作った鬱陶しいゾンビ、いや、幻術でゾンビに見せていた機械共も全部スクラップにしたことだし………そろそろ、お前本体を壊してやろうか………」

「あ…あぁ……ひぃ！」

キックスの理解能力はその限界を易々と突破してしまっていた。
一体何が起こったのか、彼の理解は到底追いつくものではなかった。
一瞬だ、一瞬にして彼の幻術の媒介、要するにゾンビの正体である

機械人形達が吹き飛んだのだ。それも影も形も無いくらいにバラバラにされて。
まるで粒子単位にまで分解されたようだった。加えて、周囲は更地同然、地面にはクレーター。
人間一人で、これほどの真似が出来るものなのか。キックスはその疑問を頭に思い浮かべるだけで精一杯だった。

「ば……化け物……」

「あぁ、そうだね。その認識は間違ってないよ、人間。でも、お前みたいなカスに言われるのだけは我慢ならないな」

そう言いながら、スオウは右手を前に出す。そして、何かを握るような動きを見せた。

ベキッ！！

「ぎゃあぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！」

「叫び方に品が無い奴だな。まるで家畜じゃないか……スーツを着た家畜というのもなかなかシュールな絵だね」

「う、腕が……腕がぁぁぁぁぁ……。お、お前……何を……」

スオウがキックスに向けて出した右手が何かを握ったようなそぶりを見せた途端、キックスの右腕の骨が折れた。
スオウは骨折による痛みで地面をのた打ち回るキックスを見下し、氷のような視線を送っていた。

「何って、君の腕を折っただけだよ。そんなことすら判断できない

のかい？」

「うぅ……触れもしないで……骨が折れるわけが……」

ベキョ！！！

「ぎゃあぁぁぁぁ！！！！！！！！」

彼がそう呟いた瞬間、今度はキックスの左足の大腿骨が折れた。キックスの足は明後日の方向を向いており、使い物にならなくなっていた。

「どうだい？　一方的な暴力による恐怖の味は……」

バキッ！！！

「あぁぁぁぁぁあ！！！！？？？」

キックスの左腕がへし折られる。またしてもスオウがキックスに直接触れることは無い。

「でも、まだまだ…。ティアの傷口を抉るような真似をしたんだ……タダじゃ殺さない。もっともっと……存分に甚振ってから、惨たらしく殺してあげるから」

「ひ、ひぃ……！！」

そう言うスオウは完全にキレてしまっていた。物言いは柔らかいが、言動は明らかに常軌を逸している。その証拠に、今のスオウにいつものニコニコフェイスは影も形も見られなかった。

今のキックスに遭遇した当初の余裕や、人を見下したような態度は微塵も見られない。そこに居るのは、ただただ目の前の捕食者に恐怖しながら無様にも逃げようとする餌だ。
その姿にプライドは愚か、彼の才覚などを見つけるのは至難の技だろう。

ベキッ！！！！

「がぁぁぁぁぁ！！！！？？」

そしてついに、キックスの両手足全てがへし折られた。四回目の激痛だが、こんな痛みに慣れるような輩が存在するだろうか、そう誰に問うわけでもなく考えたキックスだった。

「ははは…無様だね。歩くことも地を這うことも出来ない。ウジ虫以下の存在そのものになったじゃないか」

「ひゅー……ひゅー……」

キックスは最早声すら出ない。掠れたような呼吸音しか、その口からは出てこない。

「おいおい……誰が休んでい言って言った？」

「がぁぁ！！！？？？」

最早折られる手足も無いため、少し気を抜いた瞬間、キックスの体は宙に浮かぶ。否、浮かばさせられているのだ。

「か、かは……い、息が……息が……」

「出来ないかい？　当然だろうね、俺が君の気管を締め上げてるんだから。魔力は使いようなんだよ？　勉強になったかい？　とはいっても、もうすぐ死んじゃう君には関係ない話だろうけど」

先程の手足をへし折ったのも、今まさにキックスが首を、気管を絞められて宙に浮いているのも、全てスオウの魔力によるものだ。ルークが使っていた、魔力を使ってモノに触れずに動かす技、あれと同じものだ。多少の差異はあれど、技術の根っこの部分は同じものなのだ。

「お、お前は……後悔……するぞ……私には……あの方たちが……」

「はは……人間、君は本当に愚かとしか言いようがないね。あいつらにとって、お前なんぞ捨て駒以下の存在でしかない。助けにも、報復にも来る訳も無い……」

スオウは感応能力でキックスの頼りにしている存在達の事を暴く。加えて、その存在達にとってのキックスの価値の無さをハッキリと宣言した。

「なぜ……だ……なぜお前が……あの方達を……知って……」

「お前の言う、あの方達って……『イノベイト・チルドレン』だろ？　言っとくけど、あいつらも言うほど万能な存在じゃないし、ましてやこの世界をリセットするような権利も持っていない。まぁ、お前なんぞよりかはマシな奴らだけどな」

「が……あが……」

スオウはまるで、イノベイト・チルドレンの事を知っているような気口ぶりでそう言うが、キックスは最早声すら出ない。呼吸が出来ない事により、脳に酸素が通らず酸欠状態になっているのだろう。

「おっと」

ガシャン！！！！

「ぎゃ！！！？」

酸欠になったキックスをスオウは首を絞めて宙に浮かんだ状態から、その辺りにあったドラム缶の山に激突させた。
踏みつぶされた虫のような声が一瞬したが、ドラム缶が倒壊していく音にすぐに消されてしまった。

「酸欠になってるとこ悪いけど、お仕置きはまだ終わってないんだ。勝手に死なれちゃ迷惑なんだよ」

「か、かひ……！！」

殺される。キックスはそれを理解してしまった。
助からない、間違いなく、今日、今ここで、殺される。キックスは気が付けば涙を流していた。
それが恐怖に対する彼の反応だった。

「泣いたからって許さないよ。ティアはもっと辛かった……。お前はティアを傷つけた……俺の上司を傷つけた、パートナーを傷つけた……」

スオウはゆっくりと、キックスの首を絞める力を強めていく。
このままでは、あと数瞬でキックスは窒息死、若しくは首の骨を折られて絶命するだろう。
だが、スオウはお構いなしに魔力によるグリップを強めていく。今のスオウは怒っているのだ、これまでにないくらいに、本気で怒っているのだ。

「俺の女を……傷つけた……。１００万回殺しても殺し足りないくらいだ……」

「が……がが……」

キックスは泡を吹きながら白目を剥いている。恐らく、スオウの声など聞こえてはいないだろう。
その事にスオウも気が付いたのだろう、ふぅ、とため息を付く。

「もう良いか……消し飛ばしてやろう……。光栄に思え、人間。この技を日に2回も見れる事をな……」

そして、スオウは何かの技を繰り出そうとする。

だが、それは未遂に終わった。
スオウがオルクスに何か指示を出そうとした瞬間だった。

「やめなさい、スオウ！！！」

凛とした、耳に気持ち良く入り込んでくる声がスオウに届いた。

「ティア……」

その声に、スオウは振り向く。その先には今現在のスオウの怒りの原因でもあるティアナの姿があった。

「それ以上はダメ。ここでそいつを殺したら、情報を聞き出せなくなる。そいつの背後に居るやつらの事が何も分からないままになる」

ティアナはキックスを放すように、スオウに言う。

だが、スオウは珍しくティアナの命令に素直に頷かなかった。

「ダメだよ。ゴミは掃除しないと。それにこいつはティアの触れられたくない場所に土足で上がり込んできた。生かしておく理由が無い」

「それでも……よ。スオウ、殺すのはダメ。」

ティアナの強い言葉に、スオウの手が少し緩む。だが、まだ完全にというわけではない。キックスの首は未だに魔力による圧迫を受けているのだ。

それを見たティアナはゆっくりとスオウに近づいて行く。

そして、彼の空いている方の左手を両手で握る。

「お願い……。こんな奴の為に、あんたを失いたくないの……。だから……言う事を聞いて、スオウ……」

確かにここでキックスを殺せば、スオウが裁かれてしまうことにもなりかねない。ティアナはその事を考えてスオウを止めているのだ。

キックスがどうこうなどという考えは、微塵も持ち合わせてはいない。

「……分かったよ……」

ティアナの真剣な気持ちが伝わったのか、スオウは大人しくキックスの拘束を解く。

右手をパッと開き、魔力の拘束を解除した。

「がっ！！？」

キックスは空中から地面に叩きつけられ、カエルのような呻き声をあげながら地面に這いつくばった。

無様極まりない姿である。

そんな彼に、ティアナがゆっくりと近づいて行く。

「な、なんだ……？　管理局の犬……？　お前の大事な奴を……逮捕するのか…？　そんなひどい事がお前に出来るのか…？」

恐らく、ティアナに対して再び幻術を発動し、自身の姿をティーダに化かせているのだろう。

「それが私の、執務官としての義務ですから。キックス・モンバール、あなたを逮捕します。」

言いながら、ティアナはキックスにバインドをかける。先程のような動揺は微塵も見られない。

「それに……」

バキィ！！！

「ぎゃ！！？」

ティアナは卑下た笑みを浮かべたままのキックスを殴りとばした。

「兄さんは、あんたなんかよりも、もっとカッコいいの。あんたみたいな3枚目が化けても、足元にも及ばないくらいにね」

そう、いつもの調子の、凛とした口調でティアナは言ってやったのだ。

乗り越えた、とはまだ言い難いが、その取っ掛かりは見つける事が出来たのかもしれない。ティアナの表情はすっきりとしたものだった。

そして彼女は、もう一度スオウの方に振り向いて、最高の笑顔でこう言った。

「スオウ……ありがとね。私の為に、怒ってくれて」

「っ！！」

スオウは危うく昇天しそうになった。

可愛過ぎたのだ、今のティアナが。笑顔が、心意気が、気高さが、その全てがスオウを打ち抜いた。

「あぅ……ぅぅぅ／／／／／／／／／／／／」

そして、スオウが珍しく顔を真っ赤にしてアタフタしている。恐らく、ティアナのお礼と笑顔によって脳細胞がオーバーヒートしているのだろう。

だから、彼がティアナに返す事が出来た言葉は一つだけだった。

「ど、どういたししゅて……」

思い切り噛んでしまった。

こうして、ゾンビ徘徊工場事件は解決となった……

Ａｃｔ１１　ありがとう（後書き）

スオウ「結局、俺がどうやってゾンビ共を消し飛ばしたのかはうやむやにしたままか」

Ｆ２０Ｃ「すまんね。お前の事は次の事件で徐々に分かって来る事になるから、それまで待っててくれ。」

スオウ「まぁそれは構わないけどさ。さて、次回のお話は？」

Ｆ２０Ｃ「次回は病院での一コマかな。襲撃されたルークが入院してる病院にスオウとティアナが尋ねる予定です。またしても来ますよ、エロティック大統領とフェイトさんのイチャイチャが……」

スオウ「はぁ……今回でティアの好感度が上がってくれてればいんだけど……」

本日のＥＤ『ｈａｐｐｉｎｅｓｓ』　ｓｏｎｇ　ｂｙ　Ｄｕｃａ
ＰＣゲーム「Ｐｕｒｅｌｙ　～その狭い青空を見上げて～」より

Ａｃｔ１２　再会（前書き）

さて、前半はスーパーフェイトさんタイムです。ていうか、エロ回です。
さすがはナチュラルエロスフェイトさん、作者的にも「どうしてこうなった……」みたいな気分ですｗｗ

さらに後半には新キャラが出てきます。髪型・髪の色などで相談に乗ってくださった皆様、本当にありがとうございます！！！！

加えて、スオウについての新たな謎も出てきて……

さて、能書きはこの辺りにしてそろそろ本編どうぞ！！

Ａｃｔ１２　再会

商業都市アメトリス。
経済が発展を見せているこの世界のとある都市のとある病院内の一室にて、異常事態が発生していた。

病室がピンク色一色に見えるという異常事態である。

「はい、ルーク。あ～ん……」

「あ～ん……」

食事を金髪の美女に食べさせてもらっているルーク・Ｒ・ハラオウン。彼は先日のイノベイト・チルドレンの一人、水の王スロウスの襲撃を受けた際、ドライヴシステムを使った事による反動により、全身筋肉痛で一週間の入院生活を余儀なくされていた。

「あたた……まだ体中が軋む……」

「仕方ないよ…。まだ吐血しなくて良いだけましって考えなくちゃ。」

言うまでもないことだが、彼の面倒を見ているのは嫁のフェイトである。
ルークが入院したと聞き、仕事をほっぽり出して飛んで来てしまったのだ。ちなみにシエルも一緒に連れて来たのだが、今はルークの部下であるアイリスが世話をしている。
シエルはアイリスにも特に懐いており、彼女自身もシエルの相手を

するのは楽しいようだ。

「でも、三日も寝たきりなのに………あぁ〜あ…こんなことならドライヴなんて使うんじゃなかった……」

「ドライヴ使わないで勝てたの？」

「う〜ん……無理だね。どういうわけか、幻術も効かなかったし。あのまま戦ってたら、勝てたかは怪しいなぁ……」

「だったらそういうこと言わないの。すっごく心配したんだから……」

そして、フェイトは少し悲しそうな顔をしてしまう。ルークが襲われて、入院したと聞いた時は心臓が凍る思いだった。今彼女の中にあるこの温もりが失われてしまうと思っただけで、居てもたってもいられずに、あとの事をシャーリーに任せ飛び出して来たのだ。

「あぅ……私、ダメダメだ……。仕事放りだして、私情を優先しちゃうなんて……」

「ま、執務官としてはダメダメかもね。でも、それでも俺は嬉しいかな……。俺、あんまり病院好きじゃないんだ……。だから、フェイトが来てくれて本当にうれしい。」

「ルーク……／／／／／／／／」

恐らく、ルークの病院嫌いは彼の姉の事が関わっているのだろう。だが、フェイトが居るなら話は別のようだ。

「なんていうか、フェイトが俺の専属の看護師さんみたいで……／／／／／」

「専属の……看護師……／／／／／」

そして始まるイチャイチャタイム。これがあるからこそ、知人達から万年新婚夫婦などと言われてしまうのだろう。本人たちもまた否定しない所が憎らしい。

「じゃ、じゃあ……き、着てあげようか…？　看護師さんの服……。それでルークの面倒を見る感じで……」

「えぇ！！？　服って……そんなのどこにも……」

「だ、大丈夫！！　はやてに頼めばすぐにでも貸してくれるだろうし……それにそれに……／／／／／」

とか何とかそんな話になっていくと、フェイトが顔を赤くしながらモジモジし始める。なんだか恥ずかしい事でも考えついてしまったようだ。

最近、フェイトの妄想力が別の方向で発展してしまい、時にルークを驚かせることもあるので、ルークは少し身構えてしまった。

「その…ね…？　最近してないから……る、ルーク欲求不満とかになってたら……その……発散させてあげたいっていうか……私的にもそれはやぶさかではないって言うか……」

「……」

ルークの表情↓（´・ω、・）エッ？

「あの、私がしたいとかそんなのじゃないよ！！？　でも、男の人ってその……溜まってると辛いってはやてにも聞いてるし、シエルが生まれてからはご無沙汰だし……／／／／／／」

「……」

最早、ルークにリアクションをするだけの力など残されてはいなかった。目の前のモジモジしながらかなり際どい発言をしているフェイトに見事に萌え死んでしまったのだ。

だが、ここで返事をしないというのも紳士としては（ルークが紳士ということには異を唱えたいが）如何なものかということで、ルークはなんとか口を開いた。

「あの……するって……ここで……？」

返事というか、誘い受け有難く頂戴します的な台詞に聞こえるのは何故だろう？

「う、うん……／／／／／／ルークさえ……良ければだけど……ふ、服も一応着替え持ってきてるし……」

なんと用意の良い事か。流石はフェイトさん、やる事にそつがない（いろんな意味で）。

「あ…ぅぅ……俺は……その……嬉しいけど……でも誰かに見られたら……」

「だ、大丈夫！！　その時はプロレス技の練習ですって言えば万事解決だから！　」

「いや、何一つ解決してないと思う……」

とか何とか言いながらも、段々と接近して行く二人。体を動かせないルークにフェイトがにじり寄る形だ。
彼女はベッドに腰掛け、ルークに熱っぽい、且つ艶っぽい視線を送りながら迫っていくフェイト。

「ふぇ、フェイト……／／／／／／」

「ルークぅ……」

二人の距離が徐々に狭まっていく……10？……5？……3？……1？……

「失礼しま~す、ルーク~？　怪我して入院したって聞いたからお見舞いn……」

ルーク&フェイト「「…………」」

キスまであと1？にまで迫った時、病室のドアが開かれてしまった。
そして、ドアの向こうにはティアナ、そして補佐であるスオウの姿が・・・・

となれば、必然的にスオウとティアナの視界には今まさに愛の営みに励もうとしていたルークとフェイトの姿があるわけで……

スオウ＆ａｍｐ;ティアナ「「間違えました」」

ピシャン！！！

ドアは光の速さで閉められた。

ルーク＆ａｍｐ;フェイト「「ちょ、ちょっと待って二人とも？？？！！！　これはそう、プロレス技の練習で！！！！！」」

外のティアナ『いえ、お気になさらず！！！　とりあえず私達はその辺りで時間つぶしてますから！！！　２時間くらいで足りますか？？？！』

外のスオウ『いやいや、ここは日を改めて来ようよ。もしかしたら今日は日中ずっとって可能性も……』

ルーク＆ａｍｐ;フェイト「「良いから、今すぐ入って来て！！！！！！　うん、全然大丈夫だから！！！！！」」

と、そんな間抜けなやり取りが真昼間の病院にて繰り広げられたのだった……。

無論、看護師さんに怒られてしまった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

さて、カオス空間と化したルークの病室がようやく落ち着きを取り戻したのは。それから１０分ほどたったころだった。

二人「「お見苦しいところを……本当にすみません……」」

「い、いえ！　その……夫婦さんならある意味必然的な気もしますし……」

「そうですよ。ピー！！！とか、バキュン！！！とかしてても、全然問題ないですよ。それも背徳感と背中合わせとかになると、興奮度が増しますから」

「あんた、それフォローになってないわよ！！！」

と、スオウのフォローのなっていないフォローにより、ルークとフェイトは真っ赤になってしまう。

まぁ、冷静に考えてみれば流石にこんなところで愛の営みを実行に移す事は、常識的にも小説のR指定的にもアウトなので、スオウとティアナのブロックはナイスプレーと言えるものだろう。

「それで？　ルークが襲われたって聞いたけど？　大丈夫なの？」

「あ、あぁそれはなんとか……。ドライヴ使ったせいで全身筋肉痛になっちゃってさ、それで寝たきりになってるだけだから。どこかを怪我したとかって言う事じゃないよ」

気を取り直し、ティアナはここに来た理由の一つでもあるルークの容態を尋ねた。

実際、ルークはただ単に動けないだけなので、命に別条はないのだが、日常生活に支障が出てくるレベルの筋肉痛らしく、入院という措置が取られたのだ。

「ドライヴを使わないと倒せない相手かぁ……一体どこのどいつな

のよ……。あんたをそこまで追い込むなんてよっぽどの使い手じゃないの？」

「だろうね。彼は自分の事を『イノベイト・チルドレン』、水の王、スロウスって名乗ってた。アイリスに頼んで調べてもらったけど、あんまり収穫は無かったな」

「……」

スオウはイノベイト・チルドレンとスロウスの名前を聞いた時、少し表情が動いた。だが、それに気が付くものはおらず、話は先進んでいく。

「イノベイト・チルドレン……この前、私とスオウが捕まえた犯人もその単語を口にしてたわ。なんでも、管理局の転覆と世界に新しい秩序を築くとか何とか……」

「スロウスってやつも、似たようなこと言ってたよ。管理局の支配は終わるとか何とか。まぁ、もしもイノベイト・チルドレンっていうのが、全員が今回みたいな激強揃いとかなら、あり得なくもないかもしれないね」

「確かに、チルドレンって言うくらいだし、まだ仲間が居るって考えた方が妥当よね……」

ティアナとルークは今回、お互い起きた事件を照らし合わせ、分かっている事や予測できる事を列挙する。

まぁ、結果として分かったのは、イノベイト・チルドレンなる存在が管理局の転覆を狙っている事、彼らは複数人いるであろうということ、加えて恐らく彼らはとんでもなく強いだろうということだっ

た。

「あと、連中の使用しているデバイス。『レガリア』と呼ばれる特別なデバイスも注意しておいた方が良い。スロウスの水のレガリア、どういう仕組みか、何で出来てるのかも分からないけど、多分、アーカーシャやダモクレスと同等のスペックがあると見て良いと思う」

「ルークの神剣と同等のスペックって……ますますイノベイト・チルドレンって何者なのよ……」

「それぱっかりは、本人たちに聞いてみない事には何も分からないね……」

ルークとティアナの会話を、フェイトがそう締めくくる。
彼女の言う通り、本人たちから直接聞かなければ分からない事ばかりなのだ。自分たちの頭で推測できるのはこの辺りまでだろう。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「あ、そうだ。ルーク、あんたがこの世界で担当する事になってた事件、私とスオウで担当する事になったから。」

「え?!　それホント??　って……こんな体じゃそう命令されても仕方ないか……」

話もひと段落し、スオウとティアナはお暇する事に居たのだが、その際にティアナはクロノからの連絡事項をルークに伝える。
どの道、今のルークでは動くことすらできないので連続の仕事とな

ってしまうが、ティアナとスオウに仕事が割り振られたということだ。

「あと、フェイトさんにも伝言が……」

「え？　クロノから……？」

そして、フェイトにもクロノからの伝言があるらしく、ティアナはフェイトにその旨を伝える。

「『お前の仕事は僕が引き継いでおくから、お前はお前のやるべき事をしておけ』だそうです」

「クロノ……。あはは……なんて言うか……いつまでたっても頭が上がらないなぁ…」

「俺もクロノさんには感謝しないと……」

どうやら、クロノはすべてお見通しらしい。その上で、義妹の為にこうしてひと肌脱いでくれたというわけだ。
ルークとフェイトはここにはいないクロノに感謝してもしきれない様子だ。

「それでは、確かに伝えました。今回の事件に進展があれば、またお邪魔しますね」

「うん。色々ありがとうね、ティアナ。スオウもありがとう」

「いえいえ、お気になさらず。困った時はお互い様とも言いますから」

フェイトはティアナとスオウにそうお礼を言ってくる。二人としては多少仕事は増えてしまったが、親しい人の一大事ということなら力を貸すのは当然ということだ。

「では、私達はこれで。ルーク、お大事にね」

「あぁ、うん。ありがとう」

「お大事に～♪」

ティアナとスオウはそう言い残してルークの病室を後にしたのだった……。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

アメトリスの街中にまで出てきた二人。早速、ルークから引き継いだ仕事に取り掛かるため、地元の警察に向かっている。

その道中、スオウは何かをずっと考えていた。彼が考え事をすることはそう珍しくはないのだが、内容は一貫してエロいことがメインなので、その都度ティアナにハリセンでの制裁を加えられてしまうのだが、今回は少し様子がおかしい。

「………」

「？　どうかしたの、スオウ？　あんたが考え事なんて、珍しいじゃない」

病院を後にしてからずっと何かを考えている様子だったスオウを不審に思ったティアナは彼の隣に並んで、聞いてくる。

「あはは……まぁ考え事って程でもないけどね」

「何よ、奥歯に物が挟まったような言い方ね。なんなら相談に乗ってあげても良いけど？」

この前のキックスの事件の事もあり、ティアナの態度は少し柔らかくなっていた。まぁ、本人に言えば否定するだろうが、厳しいだけではなく、どことなく暖かい雰囲気が出ているのだ。

「ううん。大丈夫。気にしても仕方のない事だからさ……」

「…？？？」

が、スオウはティアナの申し出をそう言ってやんわりと断る。人には言いにくい事なのか、それとも本当に相談するようなレベルのものではないのか、それは分からないがそう言われた以上はしつこく追求することは憚られる。

「そっか。ま、話したくなったら、いつでも聞いてあげるから。それだけは覚えときなさいよ」

「……うん。ありがとう」

ティアナの心遣いにスオウはそう礼を言いつつ、歩みを進めた。

「……っ！？」

だが、その歩みは僅か3歩で止まってしまった。スオウは前方を見つめたまま動かない。
しかも、彼の瞳は明らかに驚きを含んでおり、珍しく動揺しているようにも見えた。

「どうしたのよ、スオウ…？　あんた今日なんか変よ？」

言いながら、ティアナはスオウの視線の先。恐らくはこのスオウの動揺の原因であろう人物に目を向けた。

そこに居たのは女性だった。背中あたりまで伸びた空色の長い髪、そしてその髪を先あたりでリボンで束ねている。
加えて、スタイルが抜群に良い。顔つきも可愛らしいと形容すべきスペックを誇っており、間違いなく美女と称されるに相応しいレベルであった。

「（またこいつは女の子に鼻を伸ばして……ちょっと見直したと思ってたのに……）」

スオウの硬直の原因が女性と分かり、またいつもの女の子大好き症候群が発症したのかとため息を吐くティアナ。

だが、良く見れば女性の方もスオウの方を見て驚愕しているようだ。
しかも、あちらに至っては目に涙まで溜めてしまっている。

「っ！！！」

そして、堰を切ったようにその涙が溢れ地面に落ちると同時に、その女性はスオウに向かって駆け寄って来た……そして……

ガバッ！！

「なっ！！！？」

なんと、あろうことか謎の超絶美少女はスオウに思い切り抱きついたのだ。いきなりの展開に、ティアナは素っ頓狂な声をあげてしまった。

「お前……エステル……なのか……？」

「うん！！……うん……そうだよ……私だよ……」

スオウは驚愕しながらも辛うじて声を出して、その女性、『エステル』という名らしい女性をなんとか受け止める。

エステルはスオウを抱きしめたまま泣いてしまう。

周囲からは「修羅場だ、修羅場」だの、「誠氏ね」など様々な声が聞こえ、明らかに注目を浴びてしまっている。

「良かった……無事だったんだ……私……ずっと心配で……」

エステルは泣きながらもそう呟き、スオウをさらに強く抱きしめる。

「ム……」

ティアナはその光景に少しだけ、何故だか腹が立ってしまった。その理由はまだ分からなかったが。

だが、エステルの口から発せられた言葉は、その腹立たしさを疑問に変えてしまうのだった。

「やっと……やっと会えた……ずっと、会いたかった……会いたかったよ……『ソラ』……」

「……ソラ……？」

エステルはスオウをそう呼んだ。

それはティアナにとっては知る筈もない名前だった……

Ａｃｔ１２　再会（後書き）

Ｆ２０Ｃ「昔の女ですか？」

スオウ「……ノーコメントで」

Ｆ２０Ｃ「ティアという子が居ながら……マジでドン引きだわ……」

スオウ「……」

Ｆ２０Ｃ「……リアクションが無いと少し対応に困るんだけど……」

スオウ「……」

Ｆ２０Ｃ「ダメだこりゃ。あ、新キャラ、エステルの髪型などの相談に乗ってくださった皆様、本当にありがとうございますｗｗ皆さまの案を見ていると、色は青、または空色という意見が多い感じがしたので色は空色。髪型はロングで後ろで束ねている感じにしましたｗｗ皆さまの評価が少し気になるところではありますが……よろしければ応援してあげてくださいｗｗ」

エステル
年齢：１８歳
髪の色：空色のロング
性格：天然ぽい。加えてのほほんとしている。
スタイル：……凶器

イメージＣＶ：堀江由衣さん（１７歳）↑我々の業界ではもはや常識。

（Ｄ．Ｃ．より白河ことり役、ぬらりひょんの孫よりつらら（雪女）役、ひぐらしのなく頃により羽入役）

ほっちゃーん！　ほ、ほーっ、ホアアーッ！！　ホアーッ！！

すみません、作者の病気が……さて次回は・・・・・・・・修羅場……とかではないのでご安心をｗｗまぁ、少しばかりシリアスな感じになって来る……のかな？

ともかく、次回をお楽しみに！！！

本日のＥＤ「カザハネ」　ｓｏｎｇ　ｂｙ　霜月はるか

ＰＣゲーム及びアニメ作品「Ｈ２Ｏ」より

Ａｃｔ１３　二人の黒十字架（前書き）

今回は伏線祭りでございます。やべ、これ全部回収できるかなぁ…
…とか思いつつ、エステルとスオウのやり取りを書いていましたｗｗ

今回で、スオウ達の事が少しだけですが分かって来るかと思います。
ふむ、しかしスオウめ……ティアだけではなく、こんな美女まで…
…許すまじ！！！

さて、ではでは本編スタートです。

Ａｃｔ１３　二人の黒十字架

「えぐ……ひっく…ソラァ……ソラァ……」

「……」

突然現れ、スオウの事を『ソラ』呼んで、加えて抱きつきながら泣いてしまっているエステルという女性。周囲からはなんだなんだ？　という視線が集まってしまうが、スオウとティアナにそれをどうにかする術はない。

「……スオウ、その子知り合い？」

「……」

ティアナの問いに、スオウは何も答えない。ただ少し苦い顔をしている。こんな表情はティアナも始めて見た。

そして、今度はティアナ発したスオウという名前に、エステルが未だに泣きながらも頭に？マークを浮かべながら聞いてきた。

「スオウ……って…？　ソラは……ソラじゃないの……？」

「でも、こいつの名前は……」

訳が分からなくなってしまったティアナはエステルに対しても戸惑いがちにそう言う。

名前が二つということで、考えられる可能性はいくらかあるが、エステルの様子や、何よりスオウの様子を見る限り、浮ついたものの類ではないことくらいは分かる。

「エステル」

「あ……」

そう、スオウ？　がエステルの名前を読んだ瞬間、一瞬だが彼の瞳が真紅に染まる。さらに、それに呼応するかのように、エステルの紫色の瞳もまた真紅に染まって、一瞬で元に戻ってしまった。

「……うん……分かったよ……」

そして、そう言いながら、エステルはスオウの体を放す。だが、体を放しただけで、彼の腕を放そうとはしない。

絶対に離したくないという、その確固たる気持ちが痛いほどに伝わって来てしまった。

当然、それはティアナにも理解出来てしまう。

先程の二人の瞳の変色の意味するところは分からないが、何らかの意思の疎通を図ったのかもしれない。念話の類だろうかとも思われた。

それによって、二人がどんなやり取りをしたのかは分からないが、どことなく仲間はずれにされているような気分になり、ティアナは少し表情に影を作ってしまった。

「ティア、ごめん。ちょっと、こいつと話したい事があるから、目的地に先に向かっててくれないか？　今回の仕事の詳細はあとで聞くから……」

「それは……別にかまわないけど……でも……」

その子は一体誰なの？　ソラって誰の事？　そう聞きたいのだが、なかなか口は動いてはくれない。

だが、そのティアナの気持ちを悟ったのか、スオウは……

「ごめんね……。あとで話すから……今は…」

とだけ言ってきた。どうやら、今は話す事が出来ないことのようだ。

だが、あとで話すと言ってくれているだけマシ、そう考えるしかない。

「……分かったわよ。行ってらっしゃい。先方には私だけで行くから、あんたはホテルに直帰していいわ。」

「うん、ありがとうティア。それじゃ、またあとで……」

言いながら、スオウは申し訳なさそうな顔をした。その表情には様々なモノが混じっている。だが、その一つ一つがなんなのか。それを知るすべをティアナは持ち合わせてはいなかった。

「あ、あの……ごめんなさい……」

「いいから……。それじゃあね、また後で」

エステルが、慌てた様子でティアナに謝って来た。

ティアナは気にしてない、という事を表すように、二人にそう言い残し、その場を後にした。スオウとエステルもまた、落ち着いて話す事が出来る場所にでも行ったのだろう。周囲の野次馬的な視線が

段々と散って行ったのでそれがハッキリと分かった。

「……なんなのよ……このイライラは……」

ティアナはいつの間にかイライラしてしまっていた自分に気が付き、そう呟いてアメトリスの警察庁に向かって行った。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「……半年ぶり……くらいになるのかな？」

「…そうだね……あの時、ソラが私の事を逃がしてくれた時以来だから……」

スオウとエステルは近くの喫茶店で席を取り、コーヒーをテーブルに配して話していた。

エステルはやはりスオウの事をソラと呼ぶ。どうやら、スオウとエステルにとっては、何らかの意味がある名前のようだ。

「でも……本当に良かった……。あの時……私、ソラが死んじゃったんじゃないかって……そう思うと、気が気じゃなくて……。それで……ソラの事を探してて……」

「相変わらず、心配性な奴だな……。って…もしかしてこの世界に来たのは……？」

「そうだよ…。ソラを探しに……。というか、この半年間ずっとあ

ちこち探し回ってたんだけど……見つかんなくて……。あぁ、でももう良いんだよ?!　こうして会えてわけなんだし……」

どうやら、エステルは何かの拍子に離れ離れになってしまったスオウ、ソラを探すために、あちこち。正確に言えば、様々な世界を探し回っていたらしい。

なんというか、途方もない作業な気がしたスオウは、思わず天を仰いだ。

「リク達から……追われたり、襲われたりはしてないか?」

「うん、それは大丈夫。私があの子たちの事を感じる事が出来ないように、その逆もまたしかりって事みたいで……。」

二人の会話はどこか懐かしむような、それでいて悲しいような感情が含まれた。

だが、それは二人の関係がどうこうという訳ではなく、正確に言えば原因はもっと別にあるのだろう。

「そうか……なら良いんだ。でも、悪かったな。あの時は、あぁするしかなかったんだ。それがお前にここまでの苦労を強いることになるなんて、思ってもみなかったから……」

「ううん。ソラは私を助けようとして、あぁしてくれたわけだし。それに、いろんな世界を旅行してると思えば、結構楽しかったから……」

エステルはスオウ（ソラ）にそう言って、ふにゃっと笑う。どうやら、よほど彼との再会が嬉しかったらしい。

「それで……さっきのあの人……それに…スオウって…？　しかも、その格好……」

エステルは遠慮気味にだが、疑問に思っていた方向に話を進めていく。まぁ、スオウとしてもこの為にティアナと行動を分けることにしたのだから、予想できたと言えばそうなのだが。

「さっきの子は、ティアナだ。俺の……約束の血の適合者だ。管理局の執務官をやっててさ、俺はその補佐官をしてるって訳だ」

「そう……なんだ……そっか、あの子がソラの……。でも、管理局の人間だよ…？　あの子の事を悪く言うつもりはないけど、だけど……」

「俺だって、局に対して忠誠を誓ったわけじゃないし、あいつらのやった事を忘れたわけじゃないさ。でも、いくら泣き喚いても、復讐しても、先生はもう帰ってこない。いつまでも、あの頃のままではいられないだろう？」

「それはそう……だけど……」

二人の間に暗い雰囲気が少し差す。二人にとって、『先生』と呼ばれる存在はそれほどまでに大きな存在だったということなのだろう。

「それにさ……ティアや、その周囲の人。管理局員だらけなんだけどさ、なんか違うんだよ、他の奴らとは……。なんて言うのかな……懐かしい感じがしてさ……だからなのかもしれないけど、守りたくなった……」

「ソラ……」

スオウはそう言いつつ、優しい表情になる。いつものお茶らけている時の彼の表情ではない。真剣みを帯びた、心の底からの気持ちだと言えよう。

「本当の名前を使わないのは、俺が臆病なだけなのかもしれない。お前や先生達みたいな場合以外で、俺なんかを近くに置いていてくれる保証なんてどこにもないって、そう思い込んでたから。結局、杞憂だったのかもしれないけど……」

「昔からそうだね、ソラは。何でもかんでもマイナス方向にばっかり考えて。先生は慎重な性格だから、それで良いって言ってたけど。もうちょっとポジティブに行っても良いんじゃないのって、ずっと思ってた…」

「それを言われると弱いな……。名前の無かった俺に、先生が付けてくれた名前を隠すっていうのは、少し抵抗があったけど。でも、どこから俺や、お前の事があいつらに漏れるか分からなかったから……。こんな方法しか思いつかなかった」

スオウは少し自重気味にそう言う。臆病な自分を笑うかのような、そんな表情だった。

「あ……それなのにごめんね？　私、あの子の前でソラの事名前で……」

「いや、いいさ。もう少しだけ、名前については暈すつもりだけど、ティアは賢いからね。なにか訳があるって事くらいは、理解してくれると思う。」

「……ふ～ん……信頼してるんだね…？」

と、スオウがそう言うと、エステルがジト目で見つめてきながら、拗ねるようにそう言ってきた。

「そりゃそうだよ、相棒の事だからな。お前の事と同じく、信頼するのは当たり前だろ？」

「ムゥ…。そういう言い方ずるいよ……」

だが、そのすね顔も一瞬で崩れ去ってしまう。自分も同じく、という事に納得してしまった自分が悔しいと思ってしまうエステルだった。

「で？　お前、これからどうするつもりなんだ？」

「どうするって……？」

「いや、俺の事探してて、見つかったんなら、目的は達したわけだろ？　これからの身の振り方をどうするのかって、聞いてみただけだ」

「あぁ、そう言う事かぁ」

スオウにそう尋ねられ、エステルは少し思案顔になる。そして、たっぷり１０秒考えた後、彼女の出した答えは……

「出来ることなら……ソラに付いて行きたいなぁ……とか……」

「……そう言うと思ってたよ……。」

スオウは予想通りという様なエステルの答えに、苦笑いしながらもそう呟く。まぁ、エステルがスオウの事を探していたという時点である程度は分かっていた事なのだが。

「も、もちろん！　迷惑だったら、その……止めておくけど……。」

「いや、別に迷惑とかじゃないんだけどさ。俺としても、オルクスとの調律、そろそろ合わせて貰いたいって思ってたとこだし……。お前が居ること自体は寧ろ歓迎なんだ。それに……」

「うん……。ソラにとってのティアナさんがそうであるように、私にとってのソラがそうだから……。」

二人は意味深な言葉を交わしながら頷く。このやり取りにどれだけの意味が込められているのかは分からない。だが、それはきっと二人のとってはとても重要な事柄だという事だけはハッキリとしている。

「私は、風に寄り添う旋律としての役目と、大切なソラの幼馴染として、こうしてあなたの前に居る。ソラの邪魔になるつもりはないよ、私だってソラと同じなんだから」

「いや、お前の力を疑ってるわけじゃないさ。寧ろ、頼りにしたい。でも、今の俺の立場は局員、執務官の補佐だ。そう勝手なことも出来ないことも確かなんだ。ティアに黙って、勝手な事をすることは俺のルール的にアウトだ。だから……」

「……ダメ？」

「うぐっ！！！？？」

何もダメなど言うつもりは毛頭なかった。なんとかしてエステルの面倒を見る責任が、自分にはある。スオウはそう考えてもいた。だが、そんな捨てられた子犬のような、うるうるした瞳×上目づかいの攻撃に思わず唸ってしまう。

「（あぁもう！！！　昔っからそうだ！！！　こいつの前だといつの間にか素の自分に戻ってる……。外面を偽り切れない……俺らしくないなこんなの……。この前だって、ティアの笑顔見ただけで崩れたし……どうかしてるな、俺……）」

スオウは頭の中で自分と葛藤する。スオウ、いや、ソラにとってエステルとはそういう存在だった。
不確定要素の塊のような女だった。出会った時も、一緒に過ごしていた時も、別れの時もそうだった。
いつも、ソラの予想の外側の行動をかましてくるため、悩みの種であると同時に妙な心地よさを与えてくれる、そんな存在だった。

「～～～～～～～～っ！！！！！　わかった、わかったよ！！！　俺が何とかすれば良いんだろ、こん畜生！！！！！」

スオウは頭をワシャワシャとしながらそう叫ぶ。周囲からの視線が一瞬集まるが知った事ではない。

「……ま、俺もお前も、帰るところなんてどこにも無いんだしな……。放っておくつもりなんてサラサラ無いよ」

「ソラ……相変わらず素直じゃない。いつもそうだったね？　なんだかんだ言いながら、私の事助けてくれて。ぶっきら棒な助け方

じゃなかったら、もっと良いんだけどなぁ」

「お黙り」

珍しくツンデレ気味なスオウに、エステルはしてやったりという様な表情でそう言ってくる。無論、スオウはそれを認めるわけではなく、ぴしゃりと叩き斬った。

「ほれ、そうと決まればティアとの待ち合わせ場所のホテル行くよ～。あ～……なんて言えばいいのやら……」

「メジャーからの頼もしい助っ人、っていうのはどうかな？」

「お前はプロ野球の外国人選手か……」

またしても珍しく、スオウが突っ込みに回っている。なんというか、本当にエステルの前ではオートで素の自分に戻ってしまうようだ。それだけ彼女が自然な存在だということなのかもしれないが。

加えて、ここに来るまでは泣きそうだったエステルだったが、今では花の咲いたような笑顔になっている。彼女にとっても、ソラ（スオウ）の存在というモノはそれだけの意味を持っているということだ。

と、スオウは表情を引き締めてエステルに向き直って、真剣な声で告げる。

「でも、忘れるなよ？　俺達は人間じゃないんだ。もしも俺達の力

がティア達に危害を及ぼすような事になった時は、すぐに離れなくちゃいけない。お前とティアなら上手くやっていけるとは思うけど、あまり深い繋がりを作り過ぎると後が辛いって事、覚えておけ」

「うん、分かってる。それに、リク達が動き出した時は、私達で終わらせなくちゃいけない。それが私達の役割、責任だから。」

そして、二人の両の瞳。スオウ、ソラの黒色の瞳と、エステルの紫色の瞳が一瞬にして真紅に染まる。それは彼らが人間ではない別の種であることの証明でもあり、刻印でもある。

「そうだ。それが俺達、『原型種（オリジナル）』の……」

「うん、『複製種（フェイカー）』達に出来る、せめてもの……」

そうして何かを確かめ合う二人の真紅に染まった瞳の中には、さらに黒い十字架の文様が浮かび上がっていた。
人間ではない事のへの証明、刻印、聖痕。
二人の瞳に浮かび上がった黒十字架はそれだけの意味を有し、彼らを生まれた時から苛んでいた。

そして二人は声を揃えて呟いた。

「「償いだから」」

Ａｃｔ１３　二人の黒十字架（後書き）

Ｆ２０Ｃ「ふ～ん……スオウの本当の名前って、ソラっていうんだ？」

スオウ「……まぁ…ね」

Ｆ２０Ｃ「しかも、なんだかあのエステルも一般ピーポーじゃないっぽいし……一体君たちはティア達に何を隠しているのかな？」

スオウ「それはまだ言えない。ティアの事は信頼してるけど……俺達の事情に付き合わせる気はないんだ。」

Ｆ２０Ｃ「ティアが聞いたら烈火の如く怒るだろうね……」

スオウ「それが……ティアの為なんだ・・・・・」

本日のＥＤ「ｔｒｉａｎｇｌｅ」　ｓｏｎｇ　ｂｙ　川田まみ

アニメ「灼眼のシャナ」より

Ａｃｔ１４　調律（前書き）

今回はエステルさんの能力の一端をご紹介。あと、スオウ達の体についての秘密にも少し触れます。

あと、私のリリカルなのはにおける魔法の使用への勝手な解釈も少しあります。

エステルさん、ヒロインに昇格なるか！！
とかの意気込みは別としまして、今回も頑張っていきたいと思います。

ではでは、本編どうぞ

Ａｃｔ１４　調律

「スオウの幼馴染み兼昔の仕事仲間のエステルって言います。改めて、よろしくお願いしますティアナさん」

「時空管理局・執務官のティアナ・ランスターです。スオウの一応は上司に当たります。こちらこそ、どうぞよろしく」

「……」

ホテルでティアナと合流し、スオウ達がまず初めに行ったのはお互いの自己紹介だった。

スオウとエステルの希望としては、彼女の身柄を保護という形で執務官であるティアナがその身分を保障するというもの。

言うなれば、局に一旦腰を下ろすという形だ。過去、何かしらの因縁があるらしい局とスオウ達だが、ティアナなら別だというスオウの考えに基づき、この方法に至ったのだ。

「で？」

スオウに対して、厳しい視線と、『どういうことなのか説明しろこの変態』と言わんばかりの視線が彼を射抜く。

「あぁ、えぇと……。こいつも言ってた通り、エステルは幼馴染でさ……少し前に、ちょっとしたトラブルに巻き込まれて散り散りになってたんだ……」

「散り散りって……あんた達……一体何やらかしたのよ……」

「あはは……えと……ちょっと全力な戦闘を……あはは……はは…」

スオウは明らかに焦ったような笑みを浮かべながらそう言う。無論、ティアナがスオウの様子がおかしい事に気が付かない筈がない。何かを隠している、それがバレバレだった。

「あ、あの！！　ソr……じゃなくてスオウは私を助けようとしてくれて……その……」

「でしょうね。こいつって女の子を助けたりするのは大好きみたいだから。この間も車に撥ねられそうになってた小学生を助けて、『もう大丈夫だよ、かわいい子猫ちゃん』とか何とか言って誑し込んでたもの」

ゴスッ！！！　ゴスッ！！！

「え、エステルさん……？　今のは嘘だから……だからその……踵で足の甲をもろに踏みつけるのはやめてもらいたいんだけど……。だんだんと足の感覚が死んでいってる感じがするんだ」

「知らないもん！！！」

そのままプイッと明後日の方向を向いてしまうエステル。どうやら乙女スイッチがオンになってしまったらしい。

「まぁ、あんたに関しては分かってた事だけど。エステルにも身元

を証明してくれる人や、帰るところは無いって事で良いのかしら？」

「は、はい……。私もスオウも親は居ませんし、前住んでいた所も今は……」

「そう……。ごめんなさい、嫌な事聞いちゃって……」

「いえ、こういう事はしっかりと説明しておくべきですから、お気になさならいでください。元はと言えば、私の我儘なんですから……ごめんなさい…」

ティアナとエステルはそう言いながら、お互いに謝り合ってしまう。何と言うか、お互い硬い感じが見受けられる。探るような、それでいて何か不安そうに、相手の様子を窺いあっている。

「（この子……スオウのなんなのかしら……？）」

「（こんな綺麗な人がソラの……もしかして、もしかすると……もしかするような関係だったり……？）」

二人の考えている事は大体同じものだという事にはもちろん気が付くこともない。

「えぇ～とさ……それでその……どうかなティア？　許可してもらえると思わず抱きつきたくなるくらい嬉しいんだけど」

「抱きついたらハチの巣にするわよ」

「嘘です、ごめんなさい」

ティアナの高速の睨みが一瞬にしてスオウを射ち貫き、スオウはダイナミック土下座にて謝った。ヘタレここに極まれり。

「はぁ……まぁ、あんたの知り合いで訳ありで、おまけに行くとないわけだしね……女の子一人じゃいろいろ危ないだろうし。別に構わないわよ。」

「流石はマイハニー、話が分かる。」

「あ、ありがとうございます!!!　ティアナさん!!」

ティアナは一息ついた後にそう言って、エステルの事を承認した。エステルはペコペコと頭を下げてくる。

「いいのよ、スオウと二人だけっていうのも、私の貞操の危機に起因する可能性もあるわけだし。女二人ならこいつが過ちを犯しそうになった時には、連携して処分を……もとい、調教出来るでしょ？」

「言い直した意味無いよね!!?　前と後で言葉の攻撃力にまったく差が無いのってどういう事なの??」

「そうですね!!　その時は全力でお手伝いします!」

「攻撃力が二倍になった??!」

如何にスオウが信用されていない（性的な意味で）のかがよく分かる瞬間だった。スオウは今すぐにでも実家に（存在しないが）帰りたい気分になった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「まぁ、それはそれでいいのよ。私からもエステルに聞きたい事があるの」

「は、はぁ……。何でしょう……？」

一しきりスオウを弄り倒した後、ティアナは雰囲気を引き締め直してエステルに聞いてきた。ふざけた様子は見られず、純粋に疑問をぶつけて来ているのが分かる。

「あなたも、スオウと同じ種類の人間なの？」

「っ……！」

その質問はある意味では予想外だった。スオウ達はてっきり、エステルがスオウの事を『ソラ』と呼ぶ理由に付いて聞いてくると思っていたのだ。

だが、実際に彼女が聞いてきたのはその事ではなく、もっと深い事、エステルの存在そのものについてだった。

「今日の昼、大通りでスオウに抱きついた時、スオウの目が赤く染まった瞬間、あなたの目も紅く染まった。その後、あなたはスオウと意思が通じあったみたいに大人しくなった。つまり、二人の瞳の変色にはそれ相応の意味があると、私は考えたのよ」

「…………」

「（流石はティア……見逃してはくれなかったか……）」

昼間の一件でティアナはそこまでの予測を立てていた。観察力、洞察力に関しては見事の一言である。流石は執務官を務めているだけの事はあると言えばいいのか。

「私は……その……」

「あ、言い方が悪かったかもね。そこまで強い意味で聞いてるわけじゃないの。別にあなたがなんだって言おうが、私は行動を一緒にするのを止めるとかは言わないから。ただ、知っておきたくはあるのよ。味方の保有能力はしっかりと把握しておきたい、それだけ」

ティアナは何もスオウとエステルの事を根掘り葉掘り聞くつもりは毛頭なかったらしい。ただ、最低限の能力や情報くらいは得ていなければ、有事の際に痛い目に遭う可能性だってある。

彼らが許す限りの事だけ聞ければそれでよかったのだ。

「エステル」

「う、うん……。ティアナさんが考えられた通り、私とスオウは同類です。出来る事に多少の差はありますけど……」

エステルはスオウが『大丈夫』というように頷いたのを見て、ティアナに説明し始める。

ティアナの予想通り、スオウとエステルは同類らしい。なんの括りでの同類なのかは明かされないままだが。

「出来る事について教えてもらえる？」

「あ、はい…。まずはスオウと同じく、私にも感応能力があります。あと、身体能力も普通の人よりかは高いですし。怪我をしても、回復は早いですし、老化も普通の人の何倍も遅いです」

「へぇ……老化スピードや回復の速さとかは聞いてなかったけど？」

エステルの説明を聞きながら、ティアナは自分に伝えていなかった情報の存在を確認して、スオウを少し睨む。

「う……だって……聞かれなかったから……」

「はぁ……まぁ良いわ。で？　スオウみたいに戦えたりもするのかしら？」

スオウの情けない様子に、ため息を付きながらティアナはエステルに続きを促した。

「いえ、私は戦闘とかはちょっと……。身体機能は高いので、ある程度は動けますが、スオウみたいに戦ったりは出来ないですね。」

「ていうことは、戦闘要員ではないってことね？」

「そうですね、どちらかと言えば、私は技術屋の方に入ると思います」

言いながら、エステルは自分の胸ポケットから、十字架を模ったアクセサリーを取り出す。
それは待機状態のデバイスであり、スオウのオルクスも同様のデザインをしているのだ。

「あ、それ……スオウのデバイスと同じ……」

「デザインは同じものですから。これは私のデバイスなんですけど、もちろん戦闘用ではありません。私の仕事はあくまで調律ですから」

「調律……？」

調律という聞きなれない言葉に、ティアナは小首を傾げる。
調律と言えば、音楽の楽器などで聞かれる言葉なのだが……

「実際にやってみたほうが早くない？　ティア、クロスミラージュ出してみなよ」

「え？　デバイスを？」

「そうそう。調律っていうのはさ、簡単に言えば、デバイスと使用者のリズムって言えばいいのかな……とにかくリズムを合わせる作業の事なんだ。やるのとやらないのじゃ、全然違うよ？」

エステルに代わって、スオウがそう言ってきた。彼にそこまで言わせるほど、調律というモノはデバイスの性能を格段に向上させるものらしい。

「ふ～ん……それじゃあ、ちょっお願いしてみようかしら……。クロスミラージュ、良い？」

『スオウさんに推薦であるのでしたら、問題はないかと……』

「そう、それじゃあ……はい。エステルさん」

「はい、では、ちょっと失礼して……」

待機状態だったクロスミラージュを銃型に変形させ、エステルに手渡す。

エステルはクロスミラージュを手に取り、少し調べてからテーブルに置いた。

「このデバイス、凄く良い子ですね。優秀で、それでいてティアナさんの事しっかりと支えようとしてくれてます。」

「そ、そう……？　あはは……なんか照れちゃうな……」

自分の相棒を褒められてしまい、珍しくティアナが照れた。その瞬間を、スオウがデジカメに収めた事は言うまでもない。（後で没収されてしまったが）

「それでは……。起きようか、『ソニード』……」

エステルがそう呟いて、デバイスを起動させると、エステルの手にグローブのようなものが装着される。見た目としては、キャロのケイケリュオンに酷似している。

「では、ティアナさん。私の手を握ってもらえますか？」

「んと……これでいいかかしら？」

エステルのそう言われ、ティアナはグローブ越しにエステルと手を繋いだ。

そして、エステルはその後にもう一方の方の手で、クロスミラージ

ュに手を置く。

「はい、大丈夫です。それでは、始めますね……」

そう言って、エステルは瞳を閉じる。その体には余計な体は一切入っておらず、自然に、何もかもを受け入れる様な、そんな印象をティアナは覚えた。

何かされているという感覚は無いのだが、恐らくエステルはティアナとクロスミラージュを繋ぐ何かを感じ取っているのだろう。

ポゥ……

「あ……」

そして20秒くらいたってからだろうか、ティアナと手を繋いでいる方のエステルの手が輝き出し、少し遅れて反対のグローブも光を放ち始める。

明る過ぎず、暗くもない。そんな暖かい光がエステルのデバイス、ソニードから溢れていた。

「ふぅ……」

エステルが一呼吸を入れてからティアナの手と、クロスミラージュから手を放すと、その光も消えて行った。

「どうぞ。ティアナさんと、クロスミラージュさんとのズレはあまり目立つモノではありませんでしたけど、今のお二人に最適の状態にしたつもりです。」

そう言いながら、エステルはクロスミラージュをティアナに手渡す。

ズレの概念がどのような基準で分かるのかは、エステルにしか分からない事だが、僅かながらにティアナとクロスミラージュにはズレがあったようだ。

「どう、クロスミラージュ？」

『おぉ……素晴らしいです。Ｓｉｒからの魔力供給の効率が格段に良くなっています。加えて、予測されるフレームへの負荷係数もかなりの改善率を……その他にも要所要所で……』

どうやら、調律の効果はかなりのものらしい。クロスミラージュの舌？を唸らせるほどの効果に、ティアナも関心顔だ。

「凄いわね……一体どうやって……」

「あぁ、えと……人っていうのは、脳からの電気信号を体にめぐる神経に流して、情報を処理したりしてますよね。それで、『厚い』とか『寒い』とかを感じたり、脳からの命令で走ったり、歩いたりっていう事が出来てますよね。」

エステルはどこから取り出したのか、スケッチブックにすらすらと絵を描きながら、図解で説明していく。案外、形から入るタイプなのかもしれない。

「それは魔法を使う時も同じで、魔力の出力の調節や、微妙なコントロールなんかも脳からの信号を送って、魔法を使ったり、制御したりします。そこで問題になって来るのが人とデバイスの信号のやり取りの乱れ、均衡の乱れというもので、状態が不変的な機械であるデバイスと、日々変化が絶えない人の体では状態が常に一定のラインの均衡を維持できないんです。」

「人とデバイスの……その信号のやり取りの均衡が崩れる事によって、魔力の移動や出力調整とかに歪が出てくるって事かしら？」

「そうです。それで、私はティアナさんの音（電気信号）を感じ取って、クロスミラージュさんとの均衡を最適なモノにしたっていうわけです。それでも、一時的にかみ合ってるだけなので、継続して調律はして行った方が良いんですけど。それでも個人差が大きいですから、一概には言えることではないですけど」

すらすらと絵を描きながら説明を終えるエステル。スオウはその講義が退屈だったのかあくびを噛み殺していた。

「へぇ～……スオウにしても、エステルにしても、妙な力を持ってるのね……」

「まぁ、そう言われても仕方ないですよね。私達もその辺りの事は自覚してますし……」

エステルは苦笑しながらソニードを待機状態に戻して胸ポケットに収める。

「なるほど……ま、他にも色々と聞きたい事はあるけどね。必要な事だけは聞き出せ出し、これ以上の追求はしないでおくわね」

「……良いのかい？」

「追及して欲しいのかしら？」

どうやら、ティアナにとって必要な事はある程度知る事が出来たの

で、これ以上の質問はしないらしい。ソラについても今日のところは聞き咎めはしないようだ。

スオウはその事を気にして、ティアに尋ねるようにそう言った。

「……」

「ま、時間に制限があるわけでもないんだし。あんた達が話しても良いと思えるような時まで待ってるわよ。それで良いでしょ？」

スオウ＆エステル「「あ……」」

ティアナは少し照れながらそう言ってきてくれた。『ソラ』についてや、スオウ達がなんなのかという根本的な疑問は、彼らの気持ちを尊重するということらしい。

「で、でも、勘違いしないでよね？？！　私だって、その……気にはなってる事だけは確かなんだから……いつかは絶対聞かせてもらうから……それだけは覚えておいてよね……」

「ぐはっ！！！！！？？？」

「ちょっと！！？　そｒ……スオウ！！！？」

ティアナのツンデレ攻撃にスオウが吐血してぶっ倒れた。照れた顔に、そっぽを向きながらのあのセリフに、スオウの萌えメーターは楽勝で振り切って一回転しそうになるところだった。

そして、この日最後のスオウの言葉は……

「ティア……ツンデレ乙……ツン：デレ＝３：７の……黄金比を……後世に伝えて……ガクシ…」

「誰がツンデレよ！！！？？？」

こうして、ティアナとスオウの一向に、新たなメンバーエステルが加入した。

前途多難な感じは否めず、様々な事件などが絡み合っている現在だが、ここにまた新たなスタートが切って落とされたのだった。

Ａｃｔ１４　調律（後書き）

Ｆ２０Ｃ「さて、本格的に本編に参戦する事になったエステルさんですが……」

エステル「どうも、エステルです」

Ｆ２０Ｃ「ぶっちゃけ、スオウ、ソラとどういう関係？」

エステル「フニャ？！　え、えっと……ソラとはその……幼なじみで……その……／／／／／／／／」

Ｆ２０Ｃ「ほうほう……」

エステル「って、これ以上はネタばれにもなっちゃいますからダメです！！！」

Ｆ２０Ｃ「ネタばれになると困るような関係なのか……」

エステル「ち、違います！！！！！」

本日のＥＤ『オレンジ』　ｓｏｎｇ　ｂｙ　逢坂大河（釘宮理恵）・櫛枝実乃梨（堀江由衣）・川嶋亜美（喜多村英梨）
アニメ「とらドラ！」より

Ａｃｔ１５　暗躍と捜査依頼（前書き）

活動報告でもお話しましたが、更新スピードを大きく落とす事になりました。

作者も就活があるので、今のペースで小説ばかりに感けている訳にもいかないわけでして……

活動報告でのアンケート内で、週一の更新という意見が多かったので、今後はそうしたいと思います。私自身、それがベストだと思うので……

休載という形をとって完全に就活だけに集中するという意見も頂きましたが、私自身、小説を書くことが息抜きにもなっているので、止めてしまうと逆に息がつまりそうになるので（；・∀・）

要するに、執筆活動って私にとっての精神安定も兼ねてるんですよねｗｗ

つきましては、週の何曜日に更新するのが良いか、皆様のご意見をお聞かせ願えれば嬉しいです。
スクラパはそのままの週一更新ですので、ご安心をｗｗ

私の都合で楽しみにしてくださっている読者様方には、誠に申し訳ありませんが、どうかご理解のほど、よろしくお願い致します・

最後に、私事でご相談に乗っていただいた皆様、本当にありがとうございました！！

ではでは、本編どうぞ！

Ａｃｔ１５　暗躍と捜査依頼

とある世界の某所。
広さだけを見れば、どこかの倉庫のような、豪華さで言えば、お金持ちが自身の自己顕示欲を満たすために金を掛けまくって成り立った豪華さ、その両方が存在している建物の中にて、黒フードで顔から全身まですっぽりと隠した、おそらくは人であろう存在が４人、大きなテーブルを囲んでいた。

「スロウス、局のトッププランカー共は何人消す事が出来た？」

「う～ん……リストに載ってる奴の半分ってところかなぁ……」

その四人の内の一人、ラースは局の実力者たちの抹消を命じていた、自分と同じイノベイト・チルドレン、スロウスに尋ねる。
首尾は上々のようで、彼の持つターゲットリストの載っている局員の写真に×マークが多く書き足されている。その×マークの数だけ、管理局の人間が死んだという事でもあった。

「なぁに…？　スロウス……肝心の四人は誰にも手を付けてないんじゃない？」

「うるさいなぁ……エンヴィーは。こいつらはラースが一目置いてるほどなんだ。僕だって、最初のターゲットはこのルーク・Ｒ・ハラオウンにしようと思って出向いたのに、途中でお流れにされちゃったんだよ」

「へぇ～？　ラースがねぇ？」

スロウスをからかう様に、その隣に座っていた、口調から察するに女性であろうエンヴィー。
スロウスの話を聞き、興味深そうな視線をラースに向ける。

「ルーク・R・ハラオウンの能力を見誤っていた。ただそれだけだ。他の三人も同じことが言えるだろう。よって、その四人に関してはスロウスの単独戦ではなく、お前達三人に向かってもらう事にする。」

「ただの人間に、イノベイト・チルドレン三人で戦えっていうの？それじゃあワンサイドゲームになりかねないから詰まらないわ……」

「む……」

エンヴィーがそう言うと、さらにその隣に座っていたイノベイト・チルドレン、グラトニーが低い声で唸る。どうやら、あまり喋る事をしないキャラのようだ。

「ま、それは僕も言ったんだけどねぇ……。ラースが譲らなくてさ。」

「お前達は楽観的過ぎる。トップランカー達の中でも、この四人は別枠と考えた方が良い。先日のスロウスと、ルーク・R・ハラオウンの戦闘を見てそれが確信となった。」

「あぁ、その映像なら私も見たけどさ。あれってデバイスの力が大きいんじゃないの？　確かに使用者自体も結構マシな奴だったけど。そこまで脅威になるとも思えなかったし。スロウスが本気になって

れば……」

エンヴィーは尚もラースにそう言う。彼女としては別に戦うのが嫌というわけではない。ただ単に、意味のない事はしたくない、それだけなのだ。

「各地で起こさせている事件も最近かなりの数が潰され始めている。そろそろ、俺達が前に出てくるタイミングになったという事でもある。この四人にお前達を宛がうのはそれを含めての事だ。」

「アメトリスのやつも結局すぐに捕まっちゃったらしいしね。確か、高町なのはの教え子で、執務官のティアナ・ランスターとかいう女にさ」

「なるほど……師匠が優秀なら弟子もまた然りってことかしらね……。ま、ラースの言い分は了解したわ。その三人での任務、やってやろうじゃない」

ラースの考えと、昨今の状況をスロウスから聞かされたエンヴィーは、『仕方ない』という感じでラースのプランに賛成した。グラトニーもまた口には出さないが、異論はないようだった。

「で？　誰を狙うのかしら？」

「まずは管理局のエースオブエース、高町なのはだ。遠距離戦ではほぼ最強と言っていいだろう。人間のレベルで言えばだがな」

エンヴィーの問いにラースはそう答え、テーブルに瓶詰になった小さなカプセル状の薬物を取り出す。

「それは？」

「高町なのはは戦技教導隊の教官だ。つまり、この女の下には多くの見習い魔導師が居る。そいつらに撒く美味しい餌、というところか」

「はは～ん……管理局の将来の芽にも毒を盛っておくっていうわけか。良い趣味してるよ、ラースは……」

「ふん……。最初のころは、この薬は力のない人間の魔導師にとってはまさに天からの贈り物となるだろうがな……。最終的には自らの無力から生まれた欲望に食い潰される事になる……。そして気が付く、管理局などという偽善者集団の一員になろうとした自らの愚かさをな」

エンヴィーとスロウスに、机に置いた薬物の話をしている時のラースの声は、それまでのモノとは明らかに違っていた。

憎しみと、寂寥、どうしようもない怒りの感情が、ぐるぐると彼の中で渦巻いていた。

「そんじゃ、最初はこの薬を局の訓練校の人間に広めて、しばらくは高みの見物と行こうかしら。ターゲットを狙うのは薬の浸食が進んでからね。」

「あくまでも、与えるのは訓練校のガキ共だけだけどね。僕としてはあんまり面倒な事はしたくないんだけど、この前の撤退の分、フラストレーションが溜まってることだし、やってやろうかな……」

「む……」

エンヴィー・スロウス・グラトニーの順で言って、三人はラースに頷く。
どうやら、次なる一手の方針が四人の中で可決されたようだ。

「よろしい。ならば、俺は他世界の事件の管理の集中する。そちらは任せたぞ、水の王、雷の王、氷の王」

「うーっす」

「む……」

「分かったわ、暇つぶし程度の遊んで来ようかしら……♪」

ラースの確認に水の王スロウス、雷の王グラトニー、氷の王エンヴィーはそれぞれ返事をして、その場を後にした。
そして、その場に残ったのはラースのみとなった。

「……本当なら、お前達もこの場に居る筈だというのに……一体どこに居る、プライド、ラスト、グリード……」

ラースの呟きは誰の耳にも入ることなく、ただ室内に小さく木霊しただけだった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

アメトリスにて、エステルがパーティー加入して一週間弱。
かの地での事件をまたしても鮮やかに解決したティアナ達御一行様は、本日本局のクロノ・ハラオウン提督のオフィスまで足を運んで

いた。

実際は最近の事件についての報告などの為に呼び出された形だ。管理局サイドでも、昨今の頻発する怪事件や、局の魔導師が闇討ちに遭うなどという事件が多発しており、かなりバタバタしているようだ。

そんな中、近況報告や、個人的に気になる事など、一局員だけの身には余るためクロノからの呼び出しは、ティアナにとっても意味のあるものだった。

「なるほど……イノベイト・チルドレンに王の存在、加えて特殊なデバイス『レガリア』か……興味深い話だ」

「ルークも彼らの内の一人に襲われています。しかも、ルークに本気を出させかけたレベルです。その力は疑う余地はないかと思われます」

ティアナは机に座るクロノの前に立ち、ハキハキと、凛とした声でそう報告する。

ちなみに、スオウとエステルは席を外している。今は二人で昼食でも取っている頃だろう。

「ふむ……となると、最近巷を騒がせている魔導師の強襲事件も彼らの仕業と考えるべきだな……。局のトップランカーだけを狙って動いているとするのなら、局の力を削ぐという意味では辻褄が合う。」

「私もそう思います。ということは、イノベイト・チルドレン達は本気で管理局を転覆させるつもりなのでしょうか……？」

「現に被害が出てしまっている訳だからな。そのつもりなのだろう……。となると、問題は動機、または局が無くなった後の彼らの目的だが……」

クロノは考え込むような仕草を見せ、システムデスクのディスプレイに映し出されている関連のあると思われる、魔導師強襲事件などの資料に視線を落とす。

「彼らが関わったと思われる事件の容疑者からは「世界をリセットする」、「世界はより優れた種によって統治される」という供述もありました。」

「世界の再統治か……まるで子供が考える様な事だな……。だが、彼らの能力が本物で、それを成しえるだけの力があるのなら、笑い話には出来ない」

言いながら、クロノは席を立ち、大きなガラス張りになっている部屋から外を見る。眼下には本局の建物が並んでいる。

「……気になる事が、無いわけではないんだ」

「……と、仰いますと？」

３０秒ほど物思いに耽っていたクロノが不意にそう呟く。
ティアナはそのままの体勢で、クロノに問い返す。

「３，４年前になるかな……ちょうど、まだ機動六課が出来る以前、君が訓練校に居た頃の話だ。その当時、あるテロリストのグループが一時期話題となった。まぁ、本局の一部の間での話だったが

ね」

クロノは古い新聞の内容を思い返すように話していく。

「そのテロリストグループはグループ名等は一切名乗ることも無く、たびたび現れては管理局の魔導師、それもエース級の腕を持つ者たちを何人も葬り去った。」

「……」

「彼らに遭遇して、奇跡的に生き残った生存者達の証言で、彼らは自分たちの事を、進化した存在と言っていたらしい。そして、王という呼称、コードネームかもしれないが、それによってお互いを呼び合っていたそうだ。」

王という単語に加え、進化した存在。関連性としては十分過ぎる話である。

早計かもしれないが、ティアナはそのテロリストグループとイノベイト・チルドレン達が同一の存在だと考えた。

「ある時を境に彼らの姿はぽっつりと消えてしまったが、今回の件と何らかの関係が有るとも言える。これは個人的な意見だが、彼らは恐らく管理局に良い感情を抱いてはいなかったのだろう。そして、今回のイノベイト・チルドレンも恐らくは……」

クロノはそう言って一息吐く。

彼とて、抱えている事件はこれだけではない。提督という役職に付くという事は、それだけ多くの責任や、それに付いてくるモノを抱え込まなければならない。

事件の火種が多いというのは、上の人間としても頭の痛い事なのだ

ろう。

「なんにせよ、現状は極めて微妙だ。まだ大きな行動を起こしたわけでもないし、確実に全てのピースが関係しているとも言い難い。局の魔導師達にはより一層、気を引き締めるように促すしかない。」

「襲撃を恐れて、魔導師達を大事にし過ぎると、今度は犯罪の鎮圧や防止といった職務に支障がでる、という事ですね。ただでさえ、今は人材不足ですから……」

管理局の今のところの敵は、ハッキリとしないイノベイト・チルドレンではなく、恐らくは人材不足という人的資本の問題だろう。人の力の欠如というモノは、短期的も長期的にも大変よろしくないものだ。

「兎に角、イノベイト・チルドレンの件に関しては僕の方でも調べてみよう。手が足りなくなった場合は、また君にも頼む事になるかもしれない。その際は、よろしく頼む」

「了解しました、提督。」

ティアナはクロノの言葉に敬礼を交えて答える。

恐らく、近いうちにまた出番があるのだろう、その確信を胸にしながら。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「さてと……最後になったが、また君たちに少し調べて欲しい案件があるんだ。正確には、君の補佐と彼の幼馴染み君に、だけどね」

「スオウと……エステルに……ですか？」

報告を終え、クロノからの仕事の依頼の話の中にスオウとエステルの頃が出てきた事に、若干の戸惑いを感じたティアナ。
わざわざクロノが彼らを指名した理由を測りかねていた。

「あぁ、あまり顔が知られていない彼らにしか頼めないような案件でね。執務官として顔が広い君には、頼みたくても頼めないことなんだ。」

「……潜入捜査……ですか？」

「流石だね、察しが良い。執務官としての能力はやはり折り紙つきだ。これも、フェイトの教育の賜物と言えば、兄バカと言われてしまうかな……」

ティアナの察しの良さに、クロノは冗談めかしてそう言った。まぁ、実際フェイトの下での実務研修でティアナが得たモノは多いのだろうが。

「さっきも話した、管理局の人的資本にも少し関わって来ることなんだ。局の未来を背負って立つ、若き魔導師の卵たちが学ぶ場。士官学校や訓練校で最近妙な現象が起こっている」

「妙な現象……ですか…？」

訓練校や士官学校は、教導隊の、例をあげればエースオブエース、

高町なのはのような凄腕がルーキーたちを育成する場所、クロノの言う通り、局の正体を背負って立つ若者たちを育てる場である。

「あぁ。保有魔力のいきなりの上昇、そしてリンカーコアに異常を来す者。例をあげれば様々だが、最近ルーキーの間で専らの噂になっていてね。自身にの中に存在する、眠れる力を覚醒させる魔法の薬、というモノがね」

「それは……ドーピングのようなモノと考えて良いのでしょうか…？」

「あくまで噂なんだがね。だが、実際に二日間で魔力ランクが2ランクアップしたり、その後にリンカーコアが異常を見せて病院に運び込まれたりという様な事が多発している。医療部からも調査の申請があってね。」

訓練校・士官学校で蔓延しているかもしれない謎の薬物。クロノが潜入捜査を敢行してまで調べたい件というのはそういうものだった。

「スオウとエステルに、訓練校にに潜入させ、事の真偽を調べ、可能ならば薬の押収・持ち込んだ人間の確保させる。という事ですね？」

「そうだ。あの二人ならば顔は知られていないし、なのはにも協力を要請すれば、自然に潜入捜査を行う事が出来る、僕はそう考えているんだ。君もそうだが、彼らはまだまだ若いからね、見た目の問題もないだろう」

「なるほど……。そうなると、私は二人のバックアップに回る事になりますね。私も一緒では明らかに不自然になってしまうでしょう

から」

本当に存在するのならば、薬の押収。そしてそれを持ちこんだ人間を捕まえる。かなりシビアな潜入捜査だが、潜入捜査などそのほとんどがシビアなものなので、どこがどう違うとかは無いだろう。

病院に運ばれてしまうなどと言った実害も出ている以上、何も異常なしという事は絶対にあり得ない。

何か大きなものが関与している、クロノとティアナは二人ともそう考えていた。

「了解しました。その件もこの後すぐに二人に話して、準備が出来次第、捜査に移りたいと思います」

「すまないが、よろしく頼む。僕も捜査が円滑に行えるように、なのはや信用できる者達にその旨を伝えておこう。捜査に必要なモノや、手配しておいて欲しい事があれば、また言ってきてくれて構わない」

「はい、了解しました、提督」

ティアナはもう一度敬礼をして、クロノのオフィスを後にした。

ティアナの執務官としての勘が告げていた。なにかヤバい事が起きる。

そんな胸騒ぎが、彼女の歩くペースを速くしたのだった……

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

一方その頃、スオウとエステルはというと………

「もきゅもきゅ…………」

幸せ全開な表情で、ケーキを頬張るエステル
二人が居るのは、クラナガンの中にあるケーキバイキングの店だ。
ティアナが帰って来るまで退屈なので、こうして出掛けに来たようだ。

「ふぅむ………やっぱり、モンブランって恥ずかしがり屋だと思うんだよなぁ………。肝心の栗の実の部分を、ケーキの層で隠している辺り、自分の殻に閉じこもってしまう恥ずかしがり屋さんだと思うんだよね………。そこで、このフォークの出番なんだ。彼の鋭い視線（フォークの先）が彼女の殻（ケーキ生地）の部分を少しずつ削り取って、最終的にはモンブランちゃんの本当の心を切り開く事が出来る……。まさに主人公だ……」

モンブランとフォークを擬人化してうんうんと唸っているスオウの姿が、そこにはあった。

「ソラったら………ケーキは食べるものだよ？」

「これだから女ってやつは……男のロマンが分からん奴だ。ていうか、お前本当によく食べるな。終いには太るぞ」

擬人化妄想を中断させられ、ムッとしながらエステルに抗議の視線を向けるスオウ。
エステルも二人きりなので、スオウの事はソラと呼んでいる。

「うわぁ～、ソラってばデリカシーが無いなぁ……。甘いモノは別腹なんだよ？」

「いや、そう言う問題じゃないだろう。問題はカロリーや糖分的な問題なんだからさ……。」

「でも、私っていくら食べても太んないし……」

「栄養のほとんどが乳に行ってるからだｒ……ふべら！！！？？」

全部言いきる前に、スオウの両眼にエステルの眼潰しが綺麗に決まった。

「だあぁぁぁぁ！！！！　目が、目があぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！」

「む、胸は関係ないもん！！！！　失礼しちゃう」

どこかの大佐よろしく、両目を押さえながらのた打ち回るスオウ。自業自得である。

「乳ばっかり成長してるのは事実だろうが……なんだ、その成長は！！？　けしからん！！　揉んでくれっていうアピールなのか？？！！！　」

「ち、違うもん！！！　ま、まぁ、ソラがどうしても触りたいっていうなら、私だってやぶさかではないというか……むしろバッチ来いっていうか……ごにょごにょ……」

「え？　悪い、最後らへん聞こえなかったからもう一回」

乙女モードに入ったエステル。そして、お約束のように最後らへんを聞き取れないという主人公スキルを発揮したスオウだった。

「何でもない！！！！　ソラのスケベ！！！！　変態！！！！」

「ふ……変態か……心地良い響きだ……」

「褒めてないから！！！！！！」

という風に、太陽が燦々と降り注ぐ午後、どこからどう見てもバカップルと言われても仕方ないような二人組の姿がそこにはあった。

Ａｃｔ１５　暗躍と捜査依頼（後書き）

Ｆ２０Ｃ「お前……お前までもが擬人化萌えを追及しているなんて……」

スオウ「いや、モンブラン見てたら妄想がどんどんと膨れ上がって来て……自分の才能が恐ろしいぜ……」

Ｆ２０Ｃ「私はお前の思考回路が恐ろしいわ……しかも、エステルにはセクハラ全開だし……」

スオウ「う……あ、あいつにはその……遠慮しなくて良いっていうか……あぁ、もう！！！この話はお終い！！！次回からは訓練校、士官学校への潜入捜査になります！！！」

Ｆ２０Ｃ「誤魔化したな・・・・・・・・。なのはさんがようやく登場ですｗｗさて、彼女もまたスオウによって下着の色を……」

スオウ「俺は期待には応える男だ……キリッ」

エステル「やっぱり変態さんだ……」

本日のＥＤ「Ｅｃｌｉｐｓｅ」　ｓｏｎｇ　ｂｙ　川田まみ
ＰＣゲーム「燐月」より

Ａｃｔ１６　潜入捜査（前書き）

いつの間にやら１０万ＰＶ突破だぜ！！！！

さて、このお話からは潜入捜査編です。

このチャプターにて、お話が大きく展開します。スオウとエステルがなんなのかも明らかになる予定でございます。

あと、活動報告にも載せましたが、更新速度を週一にする件。
更新速度は徐々に落とす方向で行きたいと思います。１１月が終わるころには週一になっているかと思いますので、どうぞよろしくお願いします。

でわでわ、スオウの毒牙がなのはにまで？？？　なお話をお楽しみくださいｗｗ

Ａｃｔ１６　潜入捜査

「じゃあ、行くよスオウ君？　準備は良いかな？」

「ベッドの上での熱い戦闘なら大歓迎ですけどね」

「（ソラ？　それ以上喋ったら、明日の朝日を拝めなくなるよ？）」

「オーライ！！！　いつでもオッケーです、なのはさん」

ただいま、スオウの目の前（正確には空中だが）にはエースオブエース、高町なのはがバリアジャケット姿で、相棒のレイジングハートを携えながら戦闘開始の合図を出そうとしている。

さりげなくセクハラ発言をしそうになったスオウに、エステルからの警告（脅し）が入り、スオウは一瞬で大人しくなり、なのはの問いに答える。

「ルーキー達が沢山見てるから、有意義な模擬戦にしようね？」

「あはは……飛行魔法の使えない俺が圧倒的に不利だと思うんですけど……。（ま、良いやられ役ってことなのかな……）」

スオウはこの模擬戦の意図を勝手にそう解釈し、苦笑いしながらなのはに返事をした。

そう、スオウとなのははただいま士官学校の模擬戦場にて、ルーキ

ー達をオーディエンスにした模擬戦を始めようとしているのだ。

空を飛べるなのはと、飛べないスオウでは明らかにアドバンテージがなのはに偏っているので、スオウは良いデモンストレーションなのかな、とそう解釈したのだ。

まぁ、なのはの方にそんなつもりは全く無く、ただ単にスオウの実力を知りたいというだけのものなのだろう。

さて、なぜスオウがこんな事になっているのか、それは少し時間を遡って見る必要があるだろう。

そう、全ての始まりは約一時間前にまでさかのぼる。

ティアナから依頼された、士官学校及び訓練校への若き新米教導官という設定での潜入任務。その任務の為に、エステルを引き連れて、なのはの所にやって来た事が全ての始まりだった………

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「どうも、今回はお世話になります、高町一等空尉（白）。ティアナ・ランスター執務官の補佐、スオウです」

「同じく、エステルです」

「うん、クロノ君からお話は聞いてます。ようこそ、教導隊へ。捜査には私に出来る範囲で最大限の協力をさせてもらいます。………で、さっきの（白）って何なのかな？」

「下着の……」

「スオウ？」（恐い笑顔のエステル）

「どうぞお気になさらないでください、いやマジで」

顔合わせ早々のスオウのセクハラ発言にエステルが釘を刺し、スオウを黙らせる。

女性は怒らせると怖いという事を、彼は重々に理解している。

ティアナから事前に聞いていた通り、なのはにも今回の捜査の事は伝わっているらしく、力になってくれるという事で、スオウは若き新米教導官として、エステルは新人デバイス開発のエンジニアとして、教導隊に入りルーキー達の間で流行っていると目される謎の薬物に関しての捜査を進めるという事になっている。

「にゃはは……二人とも仲良いんだね？　もしかして恋人同士とかなのかな？」

「にゅえ！！！？？　こここここ恋人！！！！！？？？？」

なのはの放った恋人という単語に、奇妙な声を上げならエステルは慌てまくってしまう。だが、一方のスオウという名の変態は……

「あはは、違いますよ。」

バッサリと一刀両断にしやがりました。

「こいつには俺なんかよりも、もっと相応しい奴が居るでしょうからね。俺じゃあ釣り合わないッス」

「……そんな事無いのに……ブツブツ……」

どうやら、エステルの事を高評価しての台詞だったらしく、彼女は少し複雑な気持ちでブツブツ言ってしまう。
まぁ、なのはから見れば可愛らしい光景であった。

「にゃはは……とにかく、仲良しなのは良い事だね。今回の捜査も大変だと思うけど、一緒に頑張っていこうね」

「はい、それはもちろん。こちらこそ、どうぞよろしくお願いします」

「よろしくお願いします」

気を取り直し、なのはとスオウ、エステルは挨拶を済ませ、士官学校の施設の奥に向かう事になった。
施設の中には、魔導師の卵、ルーキーの姿がちらほら見られ、なのはと歩いているスオウとエステルに少しばかり奇異の視線が向けられる。

まぁ、エースオブエースと自分たちとあまり歳が離れていないように見える、若い局員が歩いていれば無理もない事かもしれないが。

「（とりあえず、二人には私の教導の補助って事で仕事をしてもらうね？　スオウ君は戦闘面で、エステルはメカニカルの方面で、っていう感じで）」

「（教導を手伝いつつ、薬の動向や、その兆候が見られる生徒が居るかどうかを調べれば良いわけですね。生徒に近しい方が、調査はし易いでしょうから）」

「（薬での能力強化なんて、噂なだけであって欲しいよね……やっぱり）」

なのはから飛んできた念話にスオウとエステルはそれぞれそう答える。念話を使えば、こう言った秘密の会話も他人に聞かれずに済むのでなかなかに便利である。

「（でも、ティアナからも聞いてると思うけど、いきなり魔力ランクが急上昇して、そのあと直ぐにリンカーコアがおかしくなって、病院に運ばれたっていうのは事実だからね。あまり信じたくないけど、やっぱりそういう薬、能力を急激に増幅させるものが出回っているのは確かだと思うんだ）」

「（この時期のルーキー達は力を得る事ばかりに神経を尖らせていて、焦った行動に出やすいって、ティアも言ってましたから。）」

「（にゃはは……ティアナも少しそう言う所あったからね。やっぱり、地味な教導じゃあ本当に自分に力が付いているのかが分からないんだと思うけど。）」

ティアナからの話は、恐らく彼女自身の体験談なのだろう。なのはも六課時代の事を思い出したのか、懐かしそうにそう呟いた。

「（そうだ、ティアナは元気でやってるかな？　今回の件で久しぶりに話をしたんだけど、直接会った訳じゃ無かったから、気になっちゃって……）」

「（傍から見ても物凄く濃度の濃い毎日を送ってるって感じですね。でも、充実した表情してますよ。）」

「（それに、とっても面倒見が良い人ですよ？　私やスオウの事だって、最後まで面倒見ていただいちゃって……本当に優しい方だと思います）」

「（そっか……ティアナも頑張ってるんだね。二人の話を聞いて、ちょっと安心しちゃったなぁ）」

教え子の活躍は耳に入る事は多いが、その姿を実際に見ている訳でわけではないので、なのはもティアナの事は気になっていたのだろう。

その様子から、スオウとエステルはなのはがティアナの事を本当に大事に思っているであろうことがよく分かった。

そんな念話をしながら、三人はなのはが教導を担当しているルーキー達の待つ演習場に向かった。

そして、ルーキー達との顔合わせにて、スオウを悲劇が襲う事になるのだった。

「今日からしばらくの間、教導官補佐として私の仕事のサポートとしてもらう事になりました、スオウ君とエステルさんです。スオウ君は戦闘訓練で、エステルさんはデバイスなどのメカニカルな面での補助を担当してくれます。」

ざわざわ……

朝の訓練の際に前もって連絡はあったようなのだが、スオウとエステルの若さにルーキー一同は驚いているようだ。

まぁ、それを言ったら、なのはも十分に若過ぎるのだが。

なのはの担当するルーキー達の平均年齢は大体１４～１５歳の、言ってみれば中学生くらいの年代の子供だ。教導対象が短期間で変わるらしい教導隊で、なのはの教導を受ける事が出来るラッキーな子供たちというところだろう。

「それじゃ、二人とも自己紹介をお願いします」

「どうも、ご紹介に預かりました、スオウ＝リーシェンと言います。若輩者ですが、どうぞよろしく。あぁ、それからこの教導グループには女の子が沢山いるようなので物凄く嬉ｓ……」

「（スオウ……真面目にやらないと、股間にクロスファイアー撃ち込むわよ？）」

「兎に角、一生懸命頑張りますので、よろしくお願いしますね（ティア……一体どこから監視してるんだろう……）」

頭に飛び込んできたティアナからの念話に、即座に挨拶を切り上げるスオウ。

そう、ティアナは直接捜査には参加できないため、スオウ達の様子を見守りつつ、離れた所からの監視に従事しているというわけだ。

「エステル＝クライファルと言います。皆さんのお役にたてるよう、頑張りたいと思います」

スオウに続いて、エステルが自己紹介した瞬間、訓練生の男性陣から明らかな喜びに満ちた声が上がったのは言うまでもない。

スタイルはもちろんの事、容姿も整っているため、男性受けが悪いわけが無いのだ。
ちなみに、スオウとエステルのファミリーネームはでっち上げである。

「はい。というわけで、今日の訓練から二人にも参加してもらう事になるんだけど、皆の方から何か質問はあるかな？」

なのはが空き時間を使って設けた質問時間。まるで学校のＨＲのような光景だが、訓練生たちがそのくらいの年齢層なので、あまり違和感は感じられなかった。

ざわざわと質問をするかしないかでかなり間誤付いている様子だ。
この年代の子供達にはよく見られる兆候ではある。

「はい」

と、そんな中で冷たい声が上がる。いや、冷たいと言っても、そんな露骨なものではないのだが、真っ直ぐ過ぎる声の通り方がそう感じさせてしまっているだけなのだろう。

スオウはその手を挙げた人物を見る。
長い黒髪をポニーテールにし、切れ目に意思の強そうな瞳が印象的な少女だった。
どこか、昔のティアナを彷彿とさせるような、そんな雰囲気を纏っている。加えて、スオウとエステルには物凄く怖い視線を送っていらっしゃる。

周囲の研修生も、彼女とはあまり関わりたくないのか、視線を下に

落としている。
恐らくだが、彼女は孤立しているのだろう。

「レイナ＝アルセイフさん、どうぞ」

なのはは一瞬だが、表情を硬くすると、その挙手をしている少女、レイナを指名し質問を許可した。

「それでは。リーシェン教導官、随分お若く見えますね。失礼かとは思いますがおいくつなんでしょう？」

「ん～？　俺もエステルも１８だけど？」

レイナの質問はまず年齢の事から始まった。その最中も、彼女のスオウとエステルに対する厳しい視線は変わらない。

１８って……俺の３つ上なだけじゃん……すげぇ…

え～、でもそれって事は超エリートってことなんじゃないの？

高町教官が連れてくるんだもん、きっとタダ者じゃない筈だって

などなど、レイナの質問に答えたスオウだが、それによって訓練生たちに少しざわつきが起こってしまう。
どうやら、スオウ達の年齢が少し意外だったようだ。外見上は問題無くても、能力的に若者が教導官になった例など、なのはを除けば希有なのだろう。

「そのご年齢で教導官になられたという事は、実力の方もかなりのものだとお見受けします。ですが、経験という面ではまだ不十分な部分も御有りになるのではないでしょうか？」

スオウはそう言われて、『なるほど、そう言うわけか』と納得した。レイナが何を言いたいのか要約すると、魔導師としての人生が掛ったこの大事な時期に、新人の教導官の下でなど、不安でやってられない。と、そんなところだろう。

「ははは、確かにアルセイフさんの言う通りだね。俺もまだまだ新米だ。君らともそう歳も離れてないしね」

「お認めになられるのですね、自分が新米だと」

スオウがニコニコしながら答えると、話を攻勢に持っていけると確信したのか、レイナは少し笑みを浮かべながらそう言い放ってきた。

だから、スオウは笑顔を絶やすことなく、なんて事無いように言い返してあげるのだった。

「でも、俺くらいでも君達全員を全滅させるのに、１０秒掛らないからね。そのくらいの微々たるものだけど、俺にも力くらいはあるよ？」

「……」

一瞬にして、論戦の優劣が決した。

スオウの言葉には嘘などない。５分の一ほどの力でも、彼ならばそれが可能なのだから。

「ま、若輩者の教導ってことだからね。正直言って、俺が君の立場でも同じ事を考えるかもしれないね。それが普通の事だし、君達には誰から教えを請うべきなのかを選べる自由もある。でもね」

さらにスオウは続ける。もちろん、笑顔のままだ。

「うざったい上下関係が存在してる社会では、もう少し言葉を選んだほうが賢明だよ？　誰もがなのはさんみたく優しい人ばかりじゃないからね。小さな事だけど、社会という名のヒエラルキーの最下層に叩き込まれたくないのなら、肝に銘じておいた方が良い。円滑に人生を送りたいのなら……ね」

「くっ……」

「俺からの一番初めの教導はこんなところかな。」

レイナが悔しそうな顔になる。彼女の不満も当たり前かもしれないが、それにしても一応上の人間である存在に対して、失礼な部分が目立つ。

彼女のような我の強い正確なら無理もないのかもしれないし、決して悪い事ばかりではないが。

「だったら……」

「ん？」

「だったら、証明してみてください！！！！　あなたが本当に教導官として申し分のないくらいの力があるのかどうか！！！　模擬戦でも何でもいいです！！　私達に見せてください！！！」

「（うわ……ヒステリックな女……。フェミニストな俺でも、これは生理的に無理だわ……やっぱり、気の強い女の子って言うのはティアみたいな娘じゃないとね。ツンとデレの割合、これ重要。そう思うとやっぱりティアって希有な存在だよね、うんうん♪）」

なんだか面倒な展開になって来たなぁ、とスオウはそう思いつつ、加えて全く関係ない所でティアナを引き合いに出して、自身の萌え理論を構築し脳内で満足していた。

「面白そうだね、それ。私もやってみようかなって思ってたんだ」

「え……？」

レイナの持ち上げた模擬戦話に、スオウの隣に居たなのはがそう言ってきた。

この時、スオウの中の第六感が『逃げろ』と叫んでいた。

「うん、そうしようか。私もスオウ君がどのくらいの技術や能力を持っているのは確認しておきたいし」

「……マジッすか……」

「（……ソラ、ご愁傷様だね……）」

エステルが一足先にスオウの冥福を念話で祈って来たため、今日の夜は風呂を覗いてやろうと密かに決心していたスオウだった。変態紳士たるもの、いついかなる時も、エロい算段を計画している物だ。

「それじゃあ、皆。今から私とスオウ君の模擬戦を始めるから、観

戦室に移動してね～」

訓練生達「「「「は～い！！！！」」」」

「（こいつらノリノリ？？？！）」

どうやら、他の訓練生達も、スオウの能力を疑う事は無くとも、どんな戦い方をするのかなどには興味津津だったようだ。

全員が嬉々として観戦ルームに走って行った。レイナも口元を吊りあげながら去って行った。

「えぇと……もしかして、これって死亡フラグ？　なぁエステル？……ってあれ？」

状況把握の為に、隣に居た筈のエステルにそう尋ねるが、そこには既に彼女の姿は無く……

「スオウ～、頑張って～～～！！！」

訓練生達と一緒に、観戦ルームで手を振っていた。

「あの女ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！」

「まぁまぁ。それじゃ、スオウ君。はじめよっか？」

こうして、冒頭へと続くわけである。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「それじゃあ……はじめるよ！！！！」

「うっす！！（仕方ないなぁ……諦めよう…）」

スオウの諦観もなんのその。模擬戦が開始され、空中のなのは、地上のスオウという構図が出来上がる。

この時点でのアドバンテージは間違いなくなのはにあるだろう。

「（まずは小手調べ……）」

まずはスオウの簡単な能力のデータが欲しい。そう思ったなのははカートリッジを一つ装填し、大量の誘導弾を周囲に発生させた。彼女の得意魔法、アクセルシューターだろう。

「おいおい……流石はティアのお師匠様だな。魔法の構築スピード、マジ半端ないんですけど」

スオウは誰に言うでもなく、そう呟く。なのはの初手だけで、彼女がどれほどの実力者なのかハッキリした。

「（ルークさんと同じレベルって思った方が良いかな……）」

言いながらも、スオウはデバイスを抜くそぶりを見せない。バリアジャケットのみを展開し、なのはの出方を窺っているようにも見えた。

「アクセルシューター……ファイア！！！」

なのはが魔法発動のトリガーを引くと、大量の誘導弾が四方八方からスオウに襲いかかって来た。魔力弾による砲撃、誘導を見たならば、明らかにルークよりもなのはの方が完成度が高い。誘導弾の初期加速を見てスオウはそう判断した。

「……？」

対して、魔力弾を放ったなのはは自身の魔法、魔力の誘導弾に違和感を感じた。

「（アクセルシューターの威力の減衰率が……少し高い？）」

スオウに向かって放ったアクセルシューターだったが、通常では感じないようなレベルで誘導弾の威力が空中で減退したのだ。

二人がそうして思考を巡らせている内に……

ドォォォォォンン！！！！

アクセルシューターがスオウの居た地点に着弾。大きな爆発音が鼓膜を振動させる。

「（避けられた。でも、さっきの動きは……）」

なのはは自分の目を疑った。スオウが魔力弾を回避したのは想定の範囲内、寧ろ当然なのだが、その際のスオウのスピードは尋常ではなかった。

「驚くことでもないでしょう、ちょっと早く歩いただけです」

「！？」

そして、姿を消したスオウの声が、なのはの側面から聞こえた。
どうやら、信じられないスピードで空中にジャンプし、なのはのがら空きの横側に入り込んだらしい。

「（そんな！？　速過ぎて……目で追えないなんて……）

なのははそう考えながらも、咄嗟にレイジングハートにシールドを展開させる。
そこに、間髪いれずに、スオウの手刀が入る。

バチィ！！！

「あれま、防がれちった」

「当然……だよ！！！！」

意外そうな表情のスオウ。なのははスオウの手刀を防いでいるレイジングハートを押し返し、即座に攻勢に転じた。

『ショートバスター』

レイジングハートのＡＩがなのはの持つ最速の砲撃をスオウに対する迎撃として放った。威力は低いが近距離であれば、目くらまし程度にはなる。
その間になのははスオウから距離をとる。

だが、その時、一瞬だがスオウの瞳が赤く光る。

「危ない危ない」

シュゥゥ……

スオウにショートバスターが当たる直前、砲撃そのものが一気にその威力を失った。まるで、魔力を抜き取られたかのように。威力を失ったショートバスターはスオウの手によって弾き飛ばされてしまった。

「驚いたなぁ……。スオウ君、魔力を吸収出来ちゃうのかな？」

今目の前で起こった現象を冷静に分析し、浮かんできた答えをスオウに提示してみるなのは。

それに空中から着地したスオウは顔を上げ、目を開きながら答える。

「まぁ、そんなとこです、正解率で言えば５０％ですけどね。可愛い女の子達も沢山見ている事ですし、タダでやられるわけにはいかないかなぁと思いまして。ちょっと頑張ろうかと……」

そう答える、スオウの瞳は真紅に染まっており、加えてその瞳の中には黒い十字架模様が浮かんでいた。

「それに……」

「……？」

スオウはその黒十字が浮かんだ真紅の瞳になのはを捉え、髪を掬い上げながら言い放った。

「この模擬戦でカッコいいとこ見せておけば、なのはさんフラグが

立つかもしれないんで。」

「（馬鹿スオウ（馬鹿ソラ）……）」

一瞬だが、頭の中に二人の女性の声が響いた気がした。

「あはは！！　私フラグかぁ……。うん、だったら、フラグが成立するような模擬戦にしようね？」

「望むところですよ、なのはさん……」

二人は不敵な笑みを浮かべながら、再び戦闘を再開した。

Ａｃｔ１６　潜入捜査（後書き）

Ｆ２０Ｃ「へぇ～……君の黒十字眼（名前は適当）、そんな機能があったんだ」

スオウ「いや、それこそお前が書いたんでしょうが。ていうか、いきなり模擬戦って……」

Ｆ２０Ｃ「仕方ないよ。これもなのはさんが絡むと決まった時点で定められてたことなんだから。」

スオウ「ま、良いけどさ。あんな美人さんとの模擬戦……胸が熱くなるな」

Ｆ２０Ｃ「って、なんだかんだ言いながらも模擬戦を楽しむつもり満々だね。で？　今回こそ本気で戦うの？」

スオウ「分かんない。気分だね」

Ｆ２０Ｃ「気まぐれな奴……エステルもティアも大変だ……」

Ｆ２０Ｃ「さて次回はなのはさんとの模擬戦に決着を付けて、教導隊での生活を描きつつ、捜査の展開を書きたいと思っておりますので、どうぞお楽しみにｗｗ」

本日のＥＤ「ノーザン・クロス」　ｓｏｎｇ　ｂｙ　シェリル・ノーム（Ｍａｙ，ｎ）

アニメ「マクロスF」より

Ａｃｔ１７　迫る影とお仕置きと（前書き）

スオウ……お前ってやつは……

なのはとの模擬戦ですね、途中名言が意外な形で出てきますｗｗ

あと、挿入歌が熱い！！！

そんな感じで始まります、Ａｃｔ１７！！では、本編どうぞ！！

Ａｃｔ１７　迫る影とお仕置きと

「アクセルシューター……」

「アンリミテッド……」

なのはとスオウ、前者の周囲、後者の背後にはそれぞれ大量の魔力誘導弾が生成される。

スオウは先ほどなのはの魔力をどうやってかは不明だが、砲撃魔法から吸収し、その増加分の魔力を、こちらから放つ砲撃に回しているようで、誘導弾の量は普段の３割増しだ。

「（吸収した魔力を、自分の力に出来るの？！）」

なのはも魔法をセットし終わって、スオウの魔力弾の量を見てその事に行き当たったようで、驚きを表情に出す。一応、アクセルシューターの数量的には負けてはいないものの、吸収した魔力を転用できるとなれば、まさに驚異である。

「ファイア！！！」

「バレット！！！」

そんな思考の渦の中、スオウはオルクスのトリガーを引き、なのははキーワードを口にし、大量の魔力誘導弾が同時に放たれた。

物凄い勢いでスオウとなのはの魔力弾が衝突し、対消滅していく。

両者とも、攻撃を攻撃で撃ち落としているのだ。
傍から見れば、状態は完全に拮抗している。
だが、実際はそうではない。

「（う……こっちの誘導弾がどんどん吸収されて……）」

そう、スオウの能力であろう、あの黒十字模様の瞳によって、なのはの放った魔力弾が次々と吸収されてしまい、彼自身の力に還元されてしまっている。

「実を言えば、これは使いたくなかったんですけどね。でも、なのはさんが遠距離からの砲撃に特化した魔導師だということは前評判で分かっていた事ですからね。遠慮なく弱点を突かせてもらいます」

ここに来て、スオウはその狡猾さを前面に押し出してきた。
恐らくだが、今回のこの模擬戦、なのはにとってはスオウの力を見るためのものであり、スオウにとってはやはりいつもの如くただのゲームなのだろう。
ゲームクリアの為に、スオウは最も合理的な手法、相手の弱点を攻めるという戦法をとっているというわけだ。

「う……くぅ……」

徐々に、なのはの攻勢が押されていく。言ってみれば、ＡＭＦ下で戦闘している感覚に近い。加えて、削ぎ落された分の魔力を相手の力に変換されてしまうのだから、ある意味ではＡＭＦよりも達が悪い。

『フラッシュムーヴ』

と、後一歩で押し切られてしまうと言ったところで、レイジングハートがフラッシュムーヴを使用。なのははスオウから距離を取った。

「ありがとう、レイジングハート」

『お気になさらず』

長年の相棒ということで、心強い存在でもあるレイジングハートは、コアを明滅させながらそう答えてくれた。

「（どうする……？　ちゃちな魔法じゃ、吸収されて反撃されちゃうのが落ちだろうし……かといって、ディバインバスタークラスの砲撃も吸収されないなんて保証はどこにもない……）」

なのははそう考えながらも、心の底では少し違う事を考えていた。そう、スオウの事を『手強い』と、評価していたのだ。ティアナの補佐になったという事から、ある程度のレベルを想定していたのだが、実際はそれを大きく上回るものだったのだ。

「（……そうだ！！！　良い事思いついた……！！）」

と、逡巡した後、良い方法を考えたのか、なのはは表情を引き締める。

「（……何か仕掛けてくる……）」

スオウもなのはの変化を感じ取り、迎撃の構えを見せる。

なのははもう一度アクセルシューターを周囲に展開。

「いくよ……！！！」

そして、それを放つ。先程と同じ量、いや少し多いくらいの誘導弾がスオウを襲う。

だが、そのほとんどが着弾する前にスオウの眼によって吸収され、消えてしまう。

「（さっきと同じ事をしても……）」

スオウが魔力弾を吸収しながらなのはの行動に警戒しながらそう思っていた時、なのはが動いた。

『フラッシュムーヴ』

「！？」

なのはの姿が消えた。いや、普段のスオウなら見逃すはずはなかったが、アクセルシューターの応酬が目くらましになって、彼の眼を曇らせたのだろう。

一瞬だが、スオウはなのはの姿を完全にロストしてしまった。

「やあぁぁっ！！！！！」

「（後ろ！！！？）」

感応能力を全開にして、なのはの位置を読み取り、即座にオルクスを盾に防御に回るスオウ。

なんと、あのなのがは近距離戦を仕掛けてきたのだ。魔力が乗った拳が、スオウめがけて放たれた。

ガッ！！！！

なのはの魔力の乗った拳はオルクスにガードされてしまう。動きの先読みが出来るが故の反応速度だったが、それでもギリギリだった。咄嗟の事だったので、なのはの拳に乗せられていた魔力を吸収する事は出来ず、スオウはオルクスで防御したにも拘らず、派手に吹き飛ばされてしまう。

ただの拳ならばよろめく程度だろうが、魔力が上乗せされているだけでここまで威力に差が出てくるものなのだ。

ガシャアァァァン！！！！！

スオウはビルの構造体に突っ込み、壁は容易に粉々になった。シュミレーターによる偽物のコンクリートでなければ、打撲の一つでは済まない事態になっていたところだったかもしれない。

「……」

なのはは気を抜くことなく、スオウが突っ込んだ偽ビルの瓦礫の山から視線を外さない。

この程度の事で終わるなどとは、サラサラ考えてはいないのだ。

そして、彼女の予測は概ね当たる事になった。

「！？」

ゴウッ！！！！！！

突如、瓦礫の山が吹き飛ぶ。加えて、なのはに向かって、一直線に突き向かってくる風の塊、いや小さなトルネード（竜巻）が襲いか

かって来た。

「くっ……！！」

スオウの繰り出した攻撃であろうことは確かであるが、一体何をどうしたら、人間がトルネードを人為的に、しかも攻撃に転用できるのか？　そんな疑問はもちろんだったが、なのはは回避するのに精一杯だった。

気を抜かずに警戒したいた事が幸をそうしたようで、なのははそのトルネードをギリギリのところで回避した。

避けられた竜巻はなのはの後方にあったシュミレートで生まれたビルを粉々に粉砕し、消滅した。

「ふぅ……まさかなのはさんが肉弾戦で来るなんて……」

「にゃはは……私としては、今の攻撃はなんだったのかを聞きたいところなんだけどね……」

瓦礫の山から出てきたスオウは体に纏わり付く埃をはたき落としながら、なのはがどことなくこの模擬戦が楽しくなってきたのか、少し笑みを浮かべながらそう言った。

「さっきのは企業秘密なんで、悪しからず」

「そう言われちゃうと無理には聞けないね。」

さらにお互いそう呟きつつ、それぞれオルクス、レイジングハートを構える。

模擬戦という事なので、そんなに時間をかける事は出来ない。訓練

生達事態の訓練もあるのだから、時間的にも次で勝負が決まる事になるだろう。

「さぁて……テンション上げて行きましょうか！！　ここでＢＧＭ、『突撃ラブハート』！！！」

「（このバカ！！！　戦闘中に何言ってんのよ！！？　て言うかそんなＢＧＭなんて流れる筈が……）」

ＢＧＭ『突撃ラブハート』　ｓｏｎｇ　ｂｙ　熱気バサラ（マクロス７）

「（って、流れてる！！！？）」

スオウのリクエストに、世界が空気を読んだのか、ＢＧＭが流れ出す。

念話でスオウの行動に突っ込みを入れたティアナも顔は見えないが唖然としていることだろう。

「いくぞ砲撃王、下着の貯蔵は十分かぁぁ！！！！！」

「砲撃王って私の事かな！！！？　ていうか、私の下着どうするつもりなの！！？？」

「無論……マイベストコレクションに。」

どうやら、スオウはフラグのついでになのはの下着まで持って行くつもりらしい。

さすが変態、もう呆れてものも言えない。ティアナは監視している部屋で頭を抱えていた。

「セクハラは良くない……よっ！！！！」

「はっ！！　変態心無くして、何が男か！！！！！」

ドンッ！！！！

名言を次々とカオスなものに変換しながら、先に飛び出したのはスオウだった。人間離れした脚力、速度で一気になのはに接近していく。

彼の走った後には、機関銃でもぶっ放しているのかとも思える様な破裂音のような音すら聞こえ、スオウが如何に速く、脚力を全開にして走っているのかが分かる。

なのはもレイジングハートを構え、スオウを迎え撃つ。

「レイジングハート！！」

『はい、マスター』

なのはもスオウの攻撃に対抗するための策を練り、相棒に作戦を命じて、物凄いスピードで突っ込んでくるスオウと相対する。

スオウは空中のなのはに向かって跳躍。飛行魔法でも使えればまた違うのだろうが、無い物ねだりをしても仕方ないし、スオウ自身あまり飛行魔法を必要としていない節が見受けられる。

「（正面……！？……）」

スオウは飛べないため、跳躍した方向、即ちこの場合ならなのはの

真正面からの攻撃しかできない。
なのはもそれを想定していたようで、スオウの攻撃事態に対応すること自体はさほど難しくはなかった。

だが……

シャッ！！

「え！？（空中でさらに方向転換をして、攻撃ラインを変えた！？）」

スオウは真正面からと見せかけて、なんと空中でもう一度高速移動して、一瞬でなんのはの背後を取った。まるで空中を蹴ったかのような動きに、なのははは驚いてしまう。

そして……

チャキ……

なのはの頭に、オルクスが突きつけられた。
その瞬間、なのはもスオウも動かない。まるで模擬戦場の時間が止まったかのような錯覚に陥りそうになる。

「……引き分け……ですね」

「うん」

その沈黙を破ったのはスオウだった。加えて、スオウの口から出たのは引き分けの一言。この状況下では、明らかにスオウが有利にも関わらず、スオウは引き分けを宣言した。

「まさか、移動砲台を仕込んでいただなんて……」

「スオウ君も、空中でラインを変えるなんて、びっくりしちゃったよ」

スオウは後ろを振り向きながらそう呟く。その視線の先には、なのはのブラスタービットがスオウの背後を取っていた。

スオウがオルクスのトリガーを引くが早いか、なのはのブラスタービットの攻撃がスオウに届くが早いか。

つまり、スオウが引き分け宣言をしたのはそういうわけだったのだ。

スオウがなのはの背後を取り、オルクスを突きつけたのと同時に、なのはもまた仕込んでいたブラスタービットをスオウの背後に回らせたというわけだ。

「にゃはは、うん。良い模擬戦だったね。」

「俺も同意見です。……で、フラグ、立ちました？」

と、地上に着地しながら、最初に言っていた話をぶつけてみるスオウ。どうやら、冗談だけで言った事ではないようだ。

なのははくすりと笑って、スオウに返答する。どこか見透かしたような、悪戯な笑みを浮かべながら。

「スオウ君が本気で戦ってくれてたら、立ってかもね♪」

「げ……バレてた……」

「こう見えてもベテラン教導官ですから」

「あはは……御見それしました、なのはさん」

と、なのははスオウが本気で無い事を見透かしていたようでそんな返事を返してきた。スオウもこれにはタジタジのようだ。

ともあれ、こうして模擬戦は恙無く終了した。なのはとスオウは握手をして訓練生達が居る観戦ルームに向かう事にした。

「あ、下着は………」

「だ、ダメに決まってるでしょう!!!???」

「え～………」

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

訓練生一同「・・・・・・・・・・・・・・・・・」

訓練生達は、あのレイナも含め、観戦ルームで唖然としていた。スオウとなのはの人間離れした戦闘に完全に魅了されてしまっていた。

「で、どうだったかな?　アルセイフさん?　俺となのはさん(白)の模擬戦見て。まぁ、俺もまだまだだけど、あのくらいの事なら出来るってことは分かってもらえたかな?」

「す、スオウ君？　もしかして、（白）って……下着の……」

スオウはこの模擬戦の提案者でもあるレイナに問う。そもそもこれは、スオウの実力に不満があると、レイナが言い始めたことが原因なので、彼女に評価を聞くのが妥当なところだろう。

「あ……う……くぅ……」

レイナは唖然としていた様子から我に返ると、悔しそうに表情を歪ませる。言ってみれば、レイナは負けた事になる。

突っかかって、その上説教を食らい、スオウの実力を見せつけられ、自分がいかに小さい存在なのかを突き付けられた気分だろう。

「……教導官なら……あの位…当然です！！！……くっ！！！」

「あ、ちょっとアルセイフさん？？！」

レイナはそう吐き捨てると、模擬戦ルームを飛び出して行った。なのはが彼女の名前を呼ぶも、全く聞こえていないようだった。

「おやおや……これだからお子様は……」

スオウはやれやれと言った様子で、肩をすくめる。

あぁいったタイプは一度完全に叩き折ってやった方が今後の為だと、スオウは考えているようだ。結構厳しいタイプなのかもしれない。

「仕方ないか……また後で私がフォローしておくね」

「優しいですね、なのはさんは……ティアとそっくりな気がする

な」

「そ、そうかな…？　まぁ、ティアの先生だったからね……それに、この仕事をしていると、あぁ言う子は結構見るんだ……」

と、二人はレイナが飛び出して行った扉を見ながらそう呟いていた……のだが・・・・・・・・・。

「す、スオウ先生！！！」「リーシェン先生！！！」「先生！！！」

「は、はい！？」

いきなり、訓練生の子供たちからお呼びがかかり、思わず変な声が出てしまったスオウ。というか、漸く他の子達も模擬戦の強烈過ぎる迫力から我に返ったらしい。

「す、凄くカッコよかったです！！！　あの、あの！！！…それで」

「あのその……あんなにお強いなんて……凄く素敵でした……／／／／／」

「は、早く僕達に教導を…！！！」

「だぁぁぁ！！！！　分かった、分かったってば！！　一辺に喋るなっての！！！　ちゃんと聞くから！！」

三人ほどの生徒を皮切りに、一気に訓練生達に囲まれてしまったスオウ。どうやら、模擬戦の効果は思わぬ結果を、生徒の心を掴むといった意味でもたらしたようだ。

変態的な言動は絶対に教えないようにしなければと、固く心に誓うなのはの姿があった事は言うまでもない。

「あ、あのすみません、なのはさん……。その、スオウがご迷惑を……」

「ううん……。あぁやって子供達に馴染んでくれたのならそれで良いんだ。さっきの模擬戦は、こういう結果も望んでないと言えばうそになっちゃうからね」

「そうですか……」

訓練生達に揉みくちゃにされるスオウを少し遠くから見ていたなのはに、エステルは申し訳なさそうに謝って来たが、なのはやんわりと返してくれた。

「ところで、エステル？」

「はい？　なんでしょう……？」

「その手に持ってるお仕置き棒は……一体……？」

「あぁ、これですか？　……ちょっと、おバカさんを調k……叱るために♪」

「あ、あぁ……そうなんだ……」

エステルの黒い笑顔に、若干の恐怖とスオウに対する黙とうをささ

やかではあるが、捧げるなのはであった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

その日の深夜……

「なんなんのよ……なんなのよ、もう！！！！！」

ゴスッ！！！

満月が綺麗な夜、そんな叫びと同時に、樹木の一本に拳が叩きこまれ、少しばかり揺れた。
その拳の主、レイナ＝アルセイフは悔しげな、加えてどこか追い詰められているかのような表情をしていた。

「私よりも……私よりも2歳上なだけで……たった二年なのに……なんであんな力を持ってるのよ！！！」

ガスン！！！

再び木が揺れた。加えて、レイナの拳には血が滲む。皮が破れてしまったのだろう。
痛々しいが、彼女はそれを気にした様子もない。

「私は……私は強くならなくちゃいけないの……その素質だって……適性だってグループ内ではトップなのに……誰にも負けている筈がないんだ！！！！！」

ゴスッ！！！

三度木が揺れる。
レイナには信じられなかった。たった二歳しか変わらないにも拘らず、あのエースオブエース、高町なのはと良い勝負をするスオウ＝リーシェン。

自分には才能があると、周囲から言われてきた。これまで受け持ってくれた教導官も、『１０年に一人の逸材かもしれない』、『天才少女』などなど、彼女の事を評価してくれていた。
両親からの期待ももちろんあったし、それに応えたいとも思っている。

レイナに、自分は他の人間とは立っている場所が違う、そのような考えが心に宿るまで、そう時間はかからなかった。

だが、その自身は完全に打ち砕かれた。今日の模擬戦で。加えて、こちらから吹っ掛けた喧嘩（実際にやったわけではないが）にぼろ負けという有様だ。

「くそ……くそぉ……うぅ……」

悔しさで涙まで溢れてきた。
彼女の中で、何かが黒く染まっていく。
それは良心であったり、やってはいけない事と、そうでない事の境界線だ。自分に非がない、自分は優れていると信じて疑わない哀れな少女の心は、黒い影でどんどんと濁っていく。

そこに……

「力が欲しい？」

「……え……？」

声がした。すぐ隣りから。

いつの間に隣にまで来ていたのか、全く分からなかった。しかし、その声の主は確かにレイナの隣に立っていた。

声からして女であろうことは分かったのだが、ローブで顔を隠しているので、その素顔を見る事は叶わない。

「あなたにその気さえあれば、私はあなたの望むモノを与えてあげられる。」

「望むモノ……？」

「そう……あなたの強くなりたいという願いを叶える魔法のアイテム……」

そう言って、女は懐から小瓶を取り出す。中には錠剤タイプの薬が詰まっている。

「あなたの強さを求める願い。それを叶えるお手伝いをしてあげる……」

「……」

普段ならば、こんな怪しい輩の言葉など気にも留めない所だが、この時のレイナにはそんな正常な判断は不可能だった。

女の柔らかい声が、レイナの濁った心にするりと入り込んでいく。

「私は………強く……誰よりも……強くなるんだ………なるんだ！！！」

レイナは堕ちた。

女の手から錠剤の入った瓶を受け取ってしまった………………それがどんな結果を生むのか、理解もしないまま……

「………そう……それで良いのよ…………。愚かな人間は………」

そうレイナに聞こえないように呟いた、女。

イノベイト・チルドレン、氷の王、エンヴィーは表情に小さな笑みを浮かべた。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

レイナと、エンヴィーのやり取りを遠くから見ていた者が居た。

その人物、いや、正確に言うと男は、短めに切りそろえた紅い髪を持ち、その瞳は深い翠色だった。

「なるほど………ラース達は動き始めたという事ですか………。全く……今さら何をしたところで、戻って来るものなど何もないというのに………」

紅い髪の青年は、やれやれと言った様子でため息を吐いた。

「仕方がありませんね……。彼を探してここまで来たというのに、厄介事が舞い込んで来てしまいました。」

言いながら、青年は歩き出す。

「イノベイト・チルドレンには、魔導師では『絶対に勝てない』。この事実がある以上、放っておくわけにもいきませんからね。本当に……やれやれです……」

そう呟くと同時に、青年の姿はパッと消えてしまった。

まるで、陽炎のように、そこには何もなかったかのように……

オマケ：同時刻のスオウとエステル

「また！！！」

バシィッ！！　「ちょ！！？」

「ソラは！！！」

バシッ！！　「エステル！！」

「女の人に！！！」

ビシッ！！！　「やめ！！」

「セクハラを！！！」

ベシッ！！！　「うぎゃ！！？」

「して！！！！」

バシィ！！　「フベッ！！？」

「しかも！！！」

ベシッ！！！　「落ち着・・・・・」

「下着を！！！」

バシッ！！！　「だ、段々とお尻の感覚が……」

「狙うだなんて！！！」

バシイイイイ！！！！　「無くなって来た……」

宛がわれた部屋にて、エステルによる、お仕置き棒を使ったお尻ペンペンの刑に処されている哀れな変態紳士の姿が、そこにはあった。

「そ、そんなに下着が欲しいなら、私の何着かあげるよ！！！！」

意味不明な勇気の出し方をしているエステルの姿も（ｒｙ……

Ａｃｔ１７　迫る影とお仕置きと（後書き）

Ｆ２０Ｃ「なんか新キャラが最後に出てきたね。今後のお話にどう関わって来るのやら……ていうか、お前……なのはさんの下着まで狙っていたとは……」

スオウ「ふむ……あと少しであの白い下着は俺のマイベストコレクションに加わるところだったものを……」

Ｆ２０Ｃ「ちょ?！　お前脱ぎたて狙ってたのか!!?　なんつーマニアックな……軽く引くわ……」

スオウ「全く、これだから素人は困るんだ。洗濯済みの下着にいくらの価値があるというのかね?」

Ｆ２０Ｃ「いや、その前に下着に価値を見出そうとするのがおかしい気がする……」

本日のＥＤ「ダイアモンド・クレバス」　ｓｏｎｇ　ｂｙ　シェリル・ノーム（Ｍａｙ，ｎ）
アニメ「マクロスＦ」より

バルディッシュ先生、挿入歌及び、ＥＤ案採用させていただきました。

Ａｃｔ１８　狂乱（前書き）

事件が目に見える形で展開します。というか、レイナが危ない人に……

やっぱり、薬物はダメ、ゼッタイ。

あと、予定ならスオウとエステルの正体なども明らかにしていくつもりだったのですが、次回に回しますねｗｗ
長さ的に微妙な量なので……

さて、ではでは、本編をどうぞ！！

Ａｃｔ１８　狂乱

スオウとエステルが訓練校に潜り込んで、約五日が経過した。
その間、ある事を除いて、特に問題になるような事は起きず、急激な魔力の増大や病院に担ぎ込まれるような輩は誰一人も出てこなかった。
まるで嵐の前の静けさのようで気味が悪いが、かと言って何かこちらから出来るのかと聞かれれば、答えはノー。
今まで通り、訓練生達の面倒を見つつ、それらしい人物または薬物を見つけることくらいしか出来ない。
という事で、今日も今日とて、スオウはなのはと共に訓練生達と青春の汗を流す羽目になっていた。

「ほれ、もっと戦闘エリア内の全体を見るようにしなきゃ、あっという間に囲まれるぞ～」

「は、はい！！！」

「あと、右の壁に隠れて攻撃魔法撃とうとしてる奴。気配がバレバレ。奇襲は良いけど、自分の呼吸と敵の呼吸、攻撃のタイミングを合わせろ」

「え！！？　バレてる！！？？」

などなど、チームでのシュミレーションにてスオウは訓練生達に混じって動き回りながら、適宜アドバイスや注意を促す。

それは全て、彼が幼い日にある人物から教わった事でもある。

そして、一方のエステルはというと……

「エステル先生……私のデバイス、なんだか調子が悪くて……」

「あの、僕のも……なんだか魔法の構築がいつもより遅くて……」

「うん、任せて。……う～ん……」

エステルはデバイス関連の問題や、その解決法、扱い方などを担当している。

彼女を頼って来た二人はどうやらデバイスの不調をなんとかして欲しいようだ。

「リナちゃんのデバイスはちょっと中の部品が劣化しちゃってるみたいだね。コール君のは一回オーバーホール（完全分解整備）した方が良いかな。」

エステルはデバイスの声が聞こえるかのように、少し触っただけで何をどうするべきなのか、すぐに理解したらしく二人にそう言った。

「ちょっと、待ってね。リナちゃんのは今すぐにでも治しちゃうから」

「え!?　ホントですか??!」

「うん、大丈夫。五分くらいで終わるから。コール君はその後で、

私と一緒にメンテナンス室に行こうね。流石にオーバーホールはここでは出来ないから」

「は、はい！！　お願いします！」

と、言った感じで面倒見のいいお姉さんとしてのポジションをいつの間にやら築いていた。

作業中は髪の毛が邪魔になるので、彼女は蒼く綺麗な髪をポニーテールにまとめ上げて作業に取り組んでいる。

不覚にもそんなエステルにスオウが萌えてしまったのは内緒である。

が、全てが上手く行っているというわけではない。スオウ達が来てから、正確にはスオウとなのはの模擬戦が終わった直後から、明らかに様子のおかしい訓練生が居た。

「はぁぁぁ！！！！」

「うわぁ！！！？」

ドォォン！！！

二人一組での模擬戦、なのはが受け持っている部分において、その異常はハッキリと目に見える形で進行していた。

「えぇぇぇぃ！！！！！」

ガキィィィ！！！

金属と金属がぶつかり合う音で、訓練生全員の視線がそちらに向くことによって、その異常はようやく周囲に認識される事になった。

スオウや訓練生達の視線の先には、地面に尻もちを吐いてしまい、震えている男の子訓練生と、戦闘の意思の無い彼をデバイスで完全に叩きのめすためにデバイスを振り切ったレイナ。

そして、厳しい表情を浮かべ、レイナの凶行をレイジングハートで防いでいるなのはの姿があった。

状況から察するに、一対一の模擬戦でレイナと模擬戦をしていた男の子が敗北、だがそれに構わずレイナはその男の子のに止めを刺そうとしたのだ。

いくら非殺傷設定のデバイスだとは言え、痛みがないわけではない。故に、勝負がついた時点でそれ以上の追加攻撃は厳禁というルールの下で模擬戦を実施していたのだ。

「なんのつもりかな？　アルセイフさん？」

なのはが厳しい表情、声を出しながらレイナに問う。

なのはもレイナのこの暴挙に関しては、寛大にはならない。いや、寧ろ厳しい対応をするのが普通なのだろう。

「ルジ君はもう戦える状態じゃなかったでしょう？　でも、あなたはそれでも戦いを止めなかった。一方的に相手を甚振るなんて事、この模擬戦の目的じゃないよ」

「綺麗事ですね。実戦では、そんな甘い事を言っている人ほど、落とされ易いんです。敵は完全に叩きのめさないと、その後また敵として襲ってこないとも言えません。」

なのはに対してもかなり刺々しい言葉を浴びせる。
確かに、彼女の言っている事には一理ある。戦場において、敵を労わることほど無意味かつ危険な行為はないだろう。
労わる事は油断を招き、寝首を掻かれる事に繋がり、見逃した相手が敵として再び襲ってくる可能性も非常に高いのだから。

「これは模擬戦。実戦じゃない。それにあなたは抵抗の出来ない人に対して暴力を振るっているだけだよ。それも、同じ魔導師である仲間に。」

「……だからなんだって言うんですか……？」

なのはの言葉にまたしてもイラついた様子で返事をするレイナ。その様子は明らかにおかしい。眼は血走り、どことなく危険な雰囲気を醸し出している。

「こんな雑魚魔導師一人いなくなった所で……局の仕事に支障は出ないでしょう…？　それにいずれ私のような優秀な魔導師が成長すれば、どの道淘汰されていくようなレベル……。」

「……アルセイフさん……あなた……」

傲慢。
今のレイナを一言で表せばその二文字で事足りるだろう。

なのはは厳しい表情を崩さないまま、レイナから視線を外すこともない。そして、教導官としての態度でレイナと向き合う。
何があったのかは分からないが、レイナの様子がおかしいのは確かだ。だが、どんな理由があろうと、やってはいけない事というのは

存在する。

「なんですか？　私ばかりが正しい事を言って、怒っていらっしゃるんですか？　大人げないですね、でも事実は事実ですから。私は言った事を覆すつもりはありません」

「……はぁ…。」

未だに挑発的な態度をとって来るレイナになのははは嘆息した。
彼女がため息を吐くなど珍しいことだが、今回はため息を吐きたくなるのも分かってしまう。

少し離れた所からその様子を見ていたスオウも、やれやれと言った様子でなのはと同じようにため息を吐いた。

「（でも、あの豹変……ちょっと気になるな……）」

確かに、レイナの態度は初日から目に余るモノがあったが、今日の彼女はそれに輪をかけてひどいモノにまで悪化してしまっている。
加えて、先程の模擬戦での撃ち込み、戦闘での動きは明らかに鋭さが上がっている。

「（……まさか……）」

スオウは最悪の結果、いや視点を変えれば手がかりを得たと言えばいいのか。
例の薬、若しくは人の魔力などを少ない時間で急激に向上させる方法について、レイナが何か絡んでいるのではないかと見た。

「アルセイフさん、今のあなたに教導する事は何もありません。一週間謹慎処分とします。」

「なっ！！！？」

なのはや、他の訓練生達から見れば当然の処分だと思われるが、レイナにとっては理解に苦しむ言葉だったらしい。

どこからどう見ても、悪いのレイナではある、彼女の身に何かが起きていると分かっているのならば話は別だが。

そう、今のレイナは異常なのだ。

「謹慎中、もう一度自分がした事、すべき事、魔導師として生きていくという事について考えて来てください。反省の色が見えるまで、デバイスは没収。魔法を扱うことも禁止とします」

「何なんですかそれは……？　意味が分かりません！！！　どうして私がそんな仕打ちを受けなければならないのですか！！？」

「それすら分からないようなら……アルセイフさん、あなたに魔導師になる資格はありません」

そう言って、なのはは尻もちを着いていた男の子を助け起こし、怪我の有無を確認した。

多少の打撲の跡があるが、それ以上の怪我はしていないようでなのははホッとした。

だが、その背後でレイナが狂気じみた表情を浮かべてワナワナと震えている事には気が付いていなかった。

「ありえない、ありえない……ありえない、ありえない、ありえない、ありえない、ありえない」

壊れた機械のように同じ単語を延々と呟き、血走った眼でなのはを睨みつけているレイナ。

彼女のデバイスを握る力が一層強くなる。

「（スオウ、分かってるわね？）」

「（あぁ。何かあれば俺が処理するから。その後の事はティアに任せたよ、頭脳労働はしんどいからね）」

「（できれば正気に戻った状態で話を聞ければベストなんだけどね……。錯乱した相手に事情聴取なんて私だって御免だわ）」

「（ははは…言えてる。）」

ティアナから飛んできた念話に返事をしながら、スオウはなのはなのは達の方へを歩みを進めていく。

が、それよりも先にレイナが行動を起こすほうが早かった。

「うあぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！」

「！？」

半狂乱状態となったレイナがなのはに襲いかかったのだ。レイナのデバイスがなのは目がけて振り降ろされ、大量の魔力弾がなのはに殺到する。

「（この魔力量……アルセイフさんの限界以上の……！！）」

なのははその魔力弾を視認し、可能性としてスオウ達が調べている薬の可能性を考えた。

情緒不安定且つ、あの異常な言動。加えて、レイナ自身のキャパシティを超えた量の魔力。証拠としては十分過ぎる。

「く…！！」

なのはは後ろに居る訓練生達に危害が及ばないよう、一瞬で大きめのシールドを張る。

ドォォォォン！！！！！

瞬間、巨大な爆発音が訓練場に轟く。

レイナの爆発的に上昇した魔力によって生み出された魔力弾は、威力の方も申し分ないものとなっていた。

「はぁ……はぁ……。私は……強い……だから……間違っていない……私が……正しいんだ！！！！」

レイナは誰に言うでもなく、虚空に向かって叫んだ。その目は未だに濁り切っており、爛々と狂気の色が垣間見れる。

「なのはさん！！！」

スオウは慌てて彼女の居たであろう場所に向かって叫ぶ。今は土煙がひどく、何も見えないが放っておくわけにはいかない。

「お前……」

「なんですか……！？　あなたも同じ目にあわせて欲しいんですか……？　言っておきますが、今の私はあなたよりも強いですよ……？」

スオウがレイナに向き直すと、彼女は嫌な笑みを浮かべながらスオウにそう言ってきた。
本格的におかしくなってきているらしい。

「スオウ君……私は大丈夫だから……」

「なのはさん……」

その時、漸く晴れてきた土煙から、なのはの姿が現れた。傷一つ負っていない所を見ると、攻撃は完全に防げたということだろう。
後ろに居た訓練生も無事のようだ。まぁ、どうやら気を失っているようだが。

「私の力、理解していただけましたか？　もう、あなたに教わるべきことも何もないです！！！　あはは……あはははははははは！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

狂っている。
レイナは完全に狂っていた。

増幅した力に酔い、精神を持って行かれ、彼女に残っているのは無様なエリート意識のみ。
なのはは、そんな彼女に哀れみの気持ちさえ生まれてしまっていた。

「スオウ君……これって……」

「多分、ビンゴです。例の薬か何かを使っていると思います。でないと、さっきの攻撃に説明が付きませんから。」

なのはとスオウはお互いが考えていた事をが一致している事を確認し、レイナの方に視線を戻す。

彼女は溢れだした魔力を制御することも無く、狂乱したまま笑っている。
周囲の地面は抉れ、他の訓練生達も怯えきっている。

「（エステル、他の子達を避難させてくれ。巻き添えになって死なすわけにもいかん）」

「（うん、任せて）」

スオウはエステルにそう念話を飛ばし、他の訓練生達を避難させる。
戦闘能力は乏しいが、身体能力は人間以上なので、避難の誘導くらいならばエステルに任せておけば大丈夫だろう。

問題としては、こちらの方がもっと厄介なのだ。

「さてと……どうしますかね、この困ったちゃんは……」

「薬を使っているから、魔力量は馬鹿に出来ないよ。スオウ君達が来る前にこうなっちゃった子も、五人がかりでやっと押さえ込めたくらいだから」

「うへぇ……それを二人でやるとは……。」

「大丈夫♪私とスオウ君だもん。きっとなんとかなるよ」

スオウとなのははレイナを前にしてそう言うと、それぞれデバイスを構えた。

「あは……きゃはははははははははははははははは！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

尚も狂乱状態に陥っているレイナは意味のない笑いを絶やすことなく、膨大な魔力を放出している。

普通ならば、魔力が枯渇して倒れてしまうのだろうが、どういうわけかその兆候も見られない。このままでは死んでしまう可能性もあった。

「はぁ……面倒な事になったなぁ……」

狂人相手、加えて時間との勝負でもある。

スオウはため息を吐きながら、オルクス構えるのだった。

Ａｃｔ１８　狂乱（後書き）

スオウ「まったく、これだから人間は……」

Ｆ２０Ｃ「まぁまぁ。あの子もそれだけ追い詰められてたってことでしょうよ。薬の副作用で狂乱状態になってあのが少し心配だけど」

スオウ「ま、そんなこと気にする暇もないかもね。我儘なくそガキなんぞ、瞬殺してくれるわ」

Ｆ２０Ｃ「まぁ、殺さない程度に頑張っておくれ。さて、次回こそ、スオウ達が何者なのかをハッキリさせたいところですね。では、皆様、次回でまたお会いしましょうｗ」

本日のＥＤ『Ｅｉｎｓａｔｚ』　ｓｏｎｇ　ｂｙ　榊原ゆいＰＣゲーム「Ｄｉｅｓ　ｉｒａｅ　Ａｌｓｏ　ｓｐｒａｃｈ　Ｚａｒａｔｈｕｓｔｒａ」より

最後の狂乱したレイナを前にしたスオウとなのはのシーンで流れるとテンション上がりそうなＢＧＭ

「猛犬ケルベロス」　Ｄａｒｋｅｒ　ｔｈａｎ　Ｂｌａｃｋより

アイデアいただいたので採用させていただきましたｗｗ

Ａｃｔ１９　ソラに還る日（前書き）

さて、かなり重要な回になるかと思われる今日のお話。

レイナの運命は？

それすらも些細な事になってしまうスオウとエステルの正体や、スオウの力の片鱗など。かなり大きなお話ですね。

このシーンは結構書くのが楽しみだったので、久しぶりに一日のインターバルで更新しちゃいますｗ

まぁ、もうすぐ週一更新になってしまうので良い所までは頑張りたいですｗｗ

でわ、本編どうぞ～ｗｗ

Ａｃｔ１９　ソラに還る日

「あぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！！！！！」

奇声を上げながら、狂乱したレイナがデバイスを振るい、夥しい量の魔力弾を放ってくる。
威力や精度などを除けば、その数たるや、全力のなのはのアクセルシューター並の量である。

「なのはさん！」

「了解！」

スオウがそうなのはの名前を呼ぶと同時に、彼女はスオウの背後に回る。
そして、押し寄せてくる魔力弾の嵐を前に、スオウは手をパンッ！と叩き合わせる。

ドフンッ！！！

同時に、スオウとなのはの前には、お馴染みになりつつある、正体不明の空気の壁が生まれ、魔力弾の進行を防ぐ。

「（魔力ダメージだけでなんとか気絶させる事が出来れば……）」

そう考えながら、スオウが前を担当してくれている間に、なのははカートリッジを二発ほど装填し、砲撃の構えを見せる。レイジングハートの先端に桃色の魔力が集まり始め、なんとも言えない綺麗な

光景を見せてくれる。

「行くよ、スオウ君！」

「いつでもどうぞ！」

そう言葉を交わし、スオウは空気の壁を取り払い、レイナから放たれた残りの魔力弾を黒十字模様の瞳を見開き、吸収した。

そして、スオウの背後からなのはの砲撃が続けて放たれた。

「ディバイン……バスタァァァ！！！！！！」

桃色の魔力の奔流。見た目は綺麗だが、その実、破壊力満点の代物だ。

非殺傷設定で無い状態で食らえば、間違いなくタダでは済まない。

ドォォォン！！！！！

激しい轟音と共に、なのはの渾身の砲撃が暴走した魔力を放出したままのレイナに直撃する。魔力ダメージだけで気絶するように加減はしているが、多少の怪我はやむを得ないかもしれない。

が、そんななのはの心遣いは無駄であるという事がすぐに判明した。

「あは……あははははははははははははは！！！！！！！！！！！！！」

「ノーダメージですか……」

「そんな……」

レイナは傷一つ負う事無く、そこに立っていた。

「多分、暴走した魔力がバリアみたいな役割を果たしちゃってるんだね……どうにかあの魔力をなんとかしないと……」

「とはいっても……あの量ですからね……俺も吸収しようと思っても一瞬でというわけにはいきませんよ……」

問題となっているのは、レイナが薬の効果によって擬似的に得た強大な魔力。
そのあまりの量に、ディバインバスターですらかき消されてしまったようだ。

さらに、スオウが言うように、流石にあの量の魔力を瞬時に吸収する事は難しいらしい。

なのはの砲撃でも通さないとなると、彼女に攻撃を直撃させるという事は至難の業という事だ。

「さて……どうしたものか……」

「急がないと、アルセイフさんの体も危ない……弱ったな……」

スオウとなのははデバイスを構えつつも、状況を整理し何か打開策がないか考える。時間もそう猶予はない。
こんなとんでもない量の魔力をレイナのような半人前の魔導師が放出し続けているのだ、あと五分と持たないだろう。

「……ふぅ…。仕方ないな、アレやるか」

「アレって……、スオウ君、何か考えがあるの？」

「えぇ、まぁ。でも、俺が出来るのは道を作る事までです。決めるのはなのはさんにお任せするしかないですけど……行けますか？」

どうやら、スオウには奥の手があるらしく、なのはにそう尋ねてくる。

道を作る、つまりあの魔力の大波をなんとかクリアし、なのはの砲撃を直撃させる。

スオウはその道を作るための術を持っているという事だ。

「うん、やるよ！！　私に任せて！！　スオウ君の事、信じてるから絶対大丈夫だよ」

「そ、そうですか……／／／／／／／／（やば……めちゃめちゃ可愛い……女って恐ろしい生き物だな……）」

なのはの元気のいい返事と笑顔に、スオウは思わず顔を赤らめてしまった。

ＴＰＯを弁えろと言いたいが、なのはにそんな表情をされてしまったのだ、今回は『仕方ない』で済ませてやる事にする。

「じゃあ、俺の合図でもう一回ディバインバスターお願いしますね」

「了解！」

二人がそうやって頷きあった瞬間、レイナが再び動き出す。

大きめの魔力弾を瞬時に構成し、二人に向けて撃ってきた。

「あぁ、もう！！」

スオウはもう一度壁を作ってそれを防御しようと、手を叩き合わせようとしたのだが……

ドォン、ドォン！！！！

「お？」

レイナが放った魔力弾はどこから放たれたのか不明だが、オレンジ色の魔力弾によって撃ち落とされた。

「（今よ、スオウ！！　何かよく分かんないけど、さっさとやっちゃいなさい！！！）」

「（おぉ、マイハニー！！　ありがとさん！！！！）」

どうやら、魔力弾からスオウ達を守ったのはティアナだったようだ。監視先から狙撃したというところだろう。彼女のスナイパースキルも上がったものである。

さて、ティアナが作ってくれたこのチャンス、無駄には出来ない。スオウは即座に行動を開始する。

「行くぞ、オルクス。」

『御意』

スオウはオルクスにそう合図する。

すると、オルクスもまたスオウの意図を理解しているようで、青い光に包まれ始める。

銃型のデバイスであるオルクスが青く発光し、宙に舞う。
そして、一瞬強い光を放ったと思った次の瞬間にはオルクスはその形を全く別のモノに変えていた。

「スオウ君……それ……」

「……行きますよ、なのはさん」

なのはもオルクスの変化に少し驚いたようだ。
それもそのはず、オルクスの姿は銃ではなく、全く別のモノに変化していたのだ。

オルクスは青い光を放ったと同時に、スオウの両足に取り付き、その姿を露わにした。
一見すると、ティアナの友人、スバル・ナカジマのデバイスであるローラーブーツ型デバイス『マッハキャリバー』に形状は酷似している。

しかし、要所要所で見れば全く違う作りをしている。
マッハキャリバーが左右、縦に四つのウィール（車輪）を有しているのに対し、変形したオルクスのウィールは大きめのモノが二つである。
加えて、ブーツのようにそれほど深い靴ではなく、一般的な靴とほぼ同じ程度の深さである。

そして、最も印象的なのは左右に一つずつ備え付けられている後輪のウィールだ。

ウィールの側面がまるで二枚の羽のように装飾されているのだ。

「チャンスは一回。行きますよ！！！」

「うん！！」

いつまでも驚いている訳にもいかない。なのははスオウの声と同時にカートリッジをロードし、再びディバインバスターを発射する態勢をとる。

そしてスオウは、羽の装飾が印象的な靴型のデバイスに変形したオルクスが宿った足に力を込め……

「こん……チク……ショウ！！！！！」

思い切り空中を切り裂く勢いで、足を振り上げた。

ドフンッ！！！！

瞬間、レイナに向かって一直線に向かって伸びる、巨大な竜巻が発生したではないか。

まるで、スオウの足に宿ったオルクスを中心に放たれたその竜巻は、レイナの暴走した魔力を一瞬で吹き飛ばし、彼女に対して一直線に向かって伸びる風の道を作りだした。

その竜巻によって出来た風の道の内部には、なんの障害物も無くなのはの砲撃もこれならば直撃することだろう。

「なのはさん！！！」

「ディバイン……バスタァァァ！！！！！！」

スオウの合図と同時に、再びなのはのディバインバスターがレイナに向かって放たれる。先程は寸前で溢れだした魔力に阻まれたが、今回は違う。スオウが発生させた竜巻、その中を走る風の道を伝い、何の障害も無く桃色の砲撃はレイナに向かって一直線に進んでいき……

ドォォォォン！！！！！

見事に直撃したのだった……

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「よかった……気を失ってるだけみたい……」

「でも、すぐに病院送りですねこれは……リンカーコアが絶対イカレてるでしょうから」

「ま、命があるだけ儲けものって思うしかないでしょ。こんな薬を安易に使うから……」

「でも、こんな薬であれだけの事になるだなんて……」

レイナを救出する事に成功したスオウ、そしてなのは。そこに監視を切り上げてやってきたティアナ、エステルを加えて、レイナの安否を確認した一同に安堵の表情が浮かぶ。

なんとか、魔力ダメージでレイナを気絶させ、暴走を押さえ込めた

のだ。

レイナの訓練服からは、錠剤の入った小瓶が見つかり、ティアナはそれを証拠品として預かった。

「でも、訓練場は……しばらくは使い物になりませんね、これは……」

なのは&スオウ「「あはは……やりすぎちゃった……」」

レイナ救出の過程で、激しい戦闘となってしまった訓練場は酷い有様だった。地面は抉れ、壁には穴が開き、まるで嵐でも発生したかのようである。

「しかも、スオウのデバイスは変形するわ、竜巻を起こすわ……あんたって、びっくり人間か何か？」

「あ、あはは……き、企業秘密で……」

ティアナのジト目による追求の手をいつもの決まり文句で回避するスオウ。

オルクスの変形と竜巻による風の道、突っ込みたい部分が多過ぎて、どこから突っ込めばいいのか全く分からない状態だ。

だが、このスオウのいつもの誤魔化しも無駄になる事になるなど、この時は誰もが思っていなかった。

『おいおい……何だこの有様は……』

『まさか、また例のアレか……？』

『勘弁してくれ……今月に入ってもう五人目だぞ……』

レイナの無事を確かめていた一同、その時訓練場に他の教導官であろう魔導師の声が響いた。

訓練場の有様を見て唖然としているようだ。まぁ、この荒れ具合ならば無理もないだろうが。

「ちょうど良いかな。あの先生方にアルセイフさんを運んでもらおう。あぁ～あ～……報告書になんて書こうか……」

「あははは……その件は私が処理しておきますから、大丈夫ですよなのはさん。」

ティアナはなのはにそう言いながら苦笑いする。確かに、事故の様なものであっても、この惨状だ。報告書に準ずるものは書かなければならないだろう。

だが、今回に限って言えば、捜査の中で起こってしまった事なので、処理はティアナ達執務官側でやるだろう。

「はぁ～……でも、ティアナも立派になったね。私びっくりしちゃったよ～。さっきの射撃の精度も凄かったし」

「恐縮です……。先生がよかったので……／／／／」

「にゃはは……そう言われるとちょっと照れちゃうかな……」

なのはとティアナは久しぶりに会えたという事で、表情をほころば

せながらそんな話をする。
生徒の成長を目にして、なのはも嬉しいようだ。

「（……使ったんだね……ソラ……）」

「（あぁ…。放っておくわけにもいかんだろ？）」

対して、わざわざ念話でそんな話をしているのはスオウとエステルだった。
エステルは少しだけ俯き気味に、視線を変形したオルクスに向けていた。このオルクスの本当の姿に、思う所があるのだろうか。

「（調律してもらったら、もう少し違うんだろうけどな……）」

「（あ、ごめん……。オルクスの調律には少し時間がかかっちゃうから……。今度時間を作ってくれるとありがたいかも……）」

「（あぁ、分かった。今度頼むよ）」

と、スオウとエステルがそうして念話を終了した時だった。
レイナの暴走を押さえ込んだということで、どこか油断しきっていた一同の耳に、聞きなれない声が飛び込んできたのは……。

「ありゃりゃ……最後の一人もこんなもんだったかぁ～……。
全く、人間って脆過ぎだよな……」

「仕方ないわよ。あの薬もそれなりに負荷が高いものなんでしょ？

人間が服用して死なないだけましってもんよ」

若い、男女の声が訓練場の瓦礫の山の頂上からスオウ達の耳に入ってきた。

「誰っ！！？」

「いつの間に訓練場に……」

スオウ&エステル「「！？」」

真っ先にその二人の人物の顔を見た瞬間、スオウとエステルの表情が凍りつく。

エステルは兎も角、スオウがこれほどに驚愕するのは珍しい。

ティアナとなのはも謎の人物達の登場に驚いているようだが、彼らの驚きの種類はまた違うものだった。

「はぁ～い♪　こんにちは、高町なのは～♪　私達が広げたマジックアイテムの効果はどうだったかしら？」

「広げたって……この薬を生徒達にばら撒いていたのは……」

「あぁ、そうだよ、ティアナ・ランスター。僕達、イノベイト・チルドレン特製『リンカーコア増強剤』。結果は……そこに転がってる人間を見れば一目瞭然なんだろうね」

そう話すのは青い色の髪を肩辺りまでの伸ばした青年、ルークと戦闘を繰り広げたイノベイト・チルドレン、スロウスだった。

方や、女の方。恐らくこちらもイノベイト・チルドレンなのだろう、歳はスロウスと同じくらいで、茶髪の癖っ毛が印象的な女性だ。美

女とカテゴライズされて然るべきレベルである。

「イノベイト・チルドレン……思いもしない大物が釣れたってわけね……」

「この人達が……クロノ君が注意しろって言ってた……」

ティアナとなのはは突然出現したイノベイト・チルドレンに警戒しつつ、両者ともデバイスを構えた。

「やれやれ、自己紹介くらいはさせて欲しいな。君たちだって、殺される相手の名前くらいは知っておきたいでしょ？」

「お生憎、悪いけど殺されるつもりもないから。あんた達二人まとめてとっ捕まえてあげるわ……。」

スロウスがそう言うと、ティアナは威勢よくそう答える。そのティアナのリアクションに、スロウスは肩を竦めて、隣の女に話しかける。

「エンヴィー、どっちを殺りたい？」

「う～ん……纏めて私が相手をするってのは……」

「ダメだっての。ラースにも言われたでしょうが、油断するなって」

「分かったわよぉ～……。それじゃあ～……って……あら？」

スロウスにターゲットをティアナとなのはのどちらにするかと聞かれたエンヴィーは品定めするようになのは達を見つめる。

その時だった、彼女の視界にスオウとエステルが映った瞬間、彼女の表情が大きく動いた。

まるで、信じられないようなものを見つけたような、そんな表情だ。

「うっそぉ～……なんであんた達がこんなとこ（管理局）に居るの～？」

「お前、何を言って……って……ソラにエステルじゃん……」

エンヴィーの台詞に、訝しい表情を浮かべながら、スロウスもスオウ達の方に視線を向けると、こちらも彼女と同じ表情になってしまう。

しかも、彼に至ってはスオウの名前をエステルと同じように『ソラ』と呼んでいる。

「……はぁ…」

「……」

スオウは面倒そうな顔で溜息を吐き、エステル少し震えながら俯いてしまっている。

「やっほ～、ソラ～♪　エステル～♪　探しちゃったわよ～」

「ほんとだよ……ラースに言われて、僕らが一体いくらの世界を探し回った事か……今思い出してもめんどくさいよ……今度何か奢れよな～」

「……どういう……こと……？」

「スオウ君の事、ソラって……それに…エステル……？」

この場で最も混乱しているのは、恐らくティアナとなのはだろう。
敵であるイノベイト・チルドレンである二人から楽しげに声をかけられているスオウとエステル。
加えて、スオウの事をソラと呼んでいるのだ。二人が混乱してしまっても仕方ないだろう。

「スオウっ！！！」

ティアナが何も言わないスオウの正面に立ち、大きな声を出す。
だが、それでも彼は何も言わない。

「あれ～？　あんた達、自分達の事何も教えてないわけ？」

「あぁ～……だから僕達の二人への態度がフレンドリーだった事が向こうにとっては意外だったってわけか……」

スロウスとエンヴィーはなるほど～、と言った様子でのん気にそう言っている。
彼らからすればなんて事のない問題だが、スオウとエステルに言わせればそれでは済まされない。

そして、エンヴィーとスロウスの口から、二人が最も恐れていた言葉が出てくる。

それは、ある意味ではいつかは分かってしまう事だったのかも知れない。
そう、それが偶々、今日この日だった。ただ、それだけの事なのだろう。

「どういうことなのよ……？」

ティアナは視線の先を変え、スロウスとエンヴィーにそう問う。
敵に聞くのも癪だが、この際そんな事に拘っていても仕方がない。

「簡単な事だよ……だって、その二人……」

「やめっ……！！」

スロウスがそう言うと同時に、エステルがか細い声でそう叫ぼうとするが、全て遅かった。

「僕たちと同じ、イノベイト・チルドレンなんだから」

その瞬間、世界の時間が停まったかのように思えた。
いや、時間の概念云々は置いておいても、確実にティアナ達の時間は止まってしまっていた。
何も言えず、動けもしない。そのくらいの衝撃だったのだから。

「うそ……」

「二人が……イノベイト……チルドレン……？」

ティアナとなのははスオウとエステルの方を向いて、愕然とする。
信じられなかった、この二人が敵と同じ存在だという事が。いや、信じたくなかったという方が正しいかもしれない。

「イノベイト・チルドレン、響（ひびき）の王・ラスト。」

「っ！！！」

エンヴィーがそう呟いた瞬間、エステルが体をびくっと震わせる。
恐らくは、彼女の事なのだろう。

「そんなの嘘よ！！！　だって……だってこの二人は……！！！」

「違わない。ほら、その二人も、僕たちと同じ目を持っている。イノベイト・チルドレンである証、黒十字の模様の浮かんだ目を」

そう言うと同時に、スロウスとエンヴィーの、スロウスは右目が、エンヴィーは左目が紅く染まり、その中心に黒い十字架が浮かぶ。

そして、それに呼応するかのように、エステルとスオウの両目にも同じモノが浮かび上がる。

「そんな……」

別にスオウ達がイノベイト・チルドレンだというがこの大きなショックの主たる原因ではない。
以前、ルークが襲われた時、スオウもエステルも何も言わなかった。

イノベイト・チルドレンの事は知っていたはずなのに。怒りなどよりも、悲しみの気持ちの方が大きいと言えばその通りなのだろう。

「で、ソラもエステルも、なんで管理局なんかと一緒に居るのさ？　そいつら、僕達の敵だよ？　いずれ全員殺しちゃうんだからさ、情が移っちゃ後が辛いかもよ？」

「……前にも言っただろう。俺もエステルも、グリードも、お前達の考えには賛同できないって……」

スロウスの問いかけに、漸くスオウが答えた。
その黒十字の浮かんだ瞳には、強い意志が感じられる。
この時のスオウからは普段のおちゃらけた雰囲気は微塵も感じられない。もしかすると、こちらが本当の彼なのかもしれない。

「何言ってるのよ？　あれだけ局員のトップランカー殺しまくっておいて。　ていうか、忘れちゃったの？　こいつらが私達にした事を、先生を私達から奪った事を」

「……終わったことだろう。もう、全部……。いくら復讐したって、先生は帰ってこない。それに、良く考えてみろよ……管理局はいずれ滅ぶさ。何百年後かは分からないけど、それでも、俺たちならその最後を見ることだって出来る。それで充分だろ？」

スオウは冷たくもあり、悲しそうな声でそうエンヴィーに諭すように言う。
彼らにこれ以上何も壊させたくないかのように。

話の内容は、彼らたちにしか理解できないものであったが、ティアナはクロノが言っていた、三、四年前に起こった局員の襲撃事件を

思い出した。
恐らくだが、考えたくもないが、それをやった人物は……このスオウ達、という事になる。

「スオウ君……嘘……だよね……？　局員を……殺したって……復讐って……」

「……なのはさん……」

なのはが縋るような眼で見つめてそう言ってくるが、スオウは否定しない。
代わりにと言ったように、スロウスがなのはに言ってきた。

「物分かりが悪いなぁ～。今まさにソラが履いてるそのデバイス、『風のレガリア・オルクス』で、一体何人の管理局のカスを葬って来たと思ってるの？」

「風の……レガリア……？」

なのはは訳が分からないと言った様子で、単語だけど復唱する。
レガリア、即ち、イノベイト・チルドレンの七人の王の一人の証。

「あんた達二人が、スオウって呼んでいるそいつ……本当の名前は『ソラ』。」

「でもって、僕達イノベイト・チルドレンの中で、最強の能力者……」

ティアナとなのははもう一度スオウを見やる。
それと同時に、エンヴィーとスロウスが声をシンクロさせて呟く。

「「そうだよね（そうよね）、ソラ？……いいや（いいえ）」」

そう、これが全ての答え、そして別れのキーワード。

「「風の王、プライド」」

それは、スオウがスオウではなく、『ソラ』に還った瞬間だった。

Ａｃｔ１９　ソラに還る日（後書き）

Ｆ２０Ｃ「最初に説明的なモノを。まず、私エア・ギアの愛読者でございますｗｗスオウ、ソラのデバイス、風のレガリアはエアギアで登場するあのレガリアそのモノでございます。」

ソラ「自分で考えるのが面倒になったとか？」

Ｆ２０Ｃ「いやさ、最初の設定ではもっと違うものだったんだよ。でも、オルクスって名前を頂いた時に、その言葉の意味が死を司るみたいな感じでさ、あ、死神と言えばあのレガリアかなぁとｗ」

ソラ「イノベイト・チルドレンは？」

Ｆ２０Ｃ「あれはガンダム００のイノベイターとエアギアの重力子（グラビティチルドレン）を混ぜ合わせて考えました。うん、正直に言おう、かなりこの設定で昔から小説が書きたかったんです」

ソラ「もしかしたら、俺達の正体とかは読者様方の大多数が『あ～やっぱり～』や『そんな事だろうと思ってたよ』みたいに感じられるかもだよね」

Ｆ２０Ｃ「それはあり得る。というか、その可能性大だわ……。ていうか、エアギアのＤＶＤ付きの最新刊が今日発売とか……胸が熱くなるな……」

ソラ「さっさと書店行ってこい。でもって受け取ってこいよ」

本日のED『モザイクカケラ』　song by SunSet Swish
アニメ「コードギアス反逆のルルーシュ」より

Ａｃｔ２０　彼が死んだ日（前書き）

さて、風の王という事がばれてしまったスオウ、改めソラ。
今話からこの作品は大きな展開を見せます。

あと二話かそこらで、過去編に入る予定なので、その辺りもお楽しみにｗｗ

でわ、本編どうぞｗｗ

Ａｃｔ２０　彼が死んだ日

『さよならを言うのはわずかの間死ぬことだ』

レイモンド・チャンドラー『長いお別れ』より

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「風の王……？」

なのはが絞り出すような声でそう呟いた。

イノベイト・チルドレン達が名乗っている、『王』という呼称、そして七つの大罪を使ってのコードネーム。

傲慢・色欲・憤怒・怠惰・暴食・強欲・嫉妬。

王と呼ばれる存在は七人、即ち七つの大罪分の人数が居るという事だ。

スオウ……いや、ソラもエステルもその内の一人であったという事だ。

「ソラ、いい加減、人間に何かを期待するのはやめなよ。僕達にとって、唯一認められる人間はやっぱり先生以外には居なかったんだ

よ」

「それに局だけじゃない、あんたが人間から受けてきた仕打ち、それも忘れちゃったのかしら？」

スロウスとエンヴィーは少し真面目な表情をしてそう言ってくる。それは確かに同胞を心配するものであった。

「忘れたわけじゃない、いや、今思い出しても腹が立つさ。でも、それでもだ。感情に任せて行動しても、ただいろんなものを壊すだけだ、残るのは虚しさだけだった。俺はそれを学んだ」

「だから下等生物の味方をするって言うのかい？　ソラ、君は昔から優し過ぎる。人間に何かを期待した所で、裏切られるのは目に見えているだろう？　君達原型種（オリジナル）が、一体何度人間を信じて裏切られてきたのか、それを忘れちゃったのかい？」

「私達はあんた達のお陰で救われた。だからこそ、同胞でもあり、恩人でもあるあんた達とは争いたくはないの……。」

ソラの答えにスロウスとエンヴィーはそう言う。ティアナ達には聞き慣れないような単語が多く、その内容の全てを理解する事は出来なかったが。

「さ、早くエステルを連れてそこを退いてくれ。僕たちはそこの魔導師を消すようにラースから言われているんだ。君まで巻き込むわけにはいかない。」

「断る。俺は、管理局なんぞどうなろうと知ったこっちゃないが、こいつらを死なせるつもりはない。局を潰すのは勝手だが、後ろの

二人には手を出すな」

「スオウ……」

「スオウ君……」

その言葉に、なのはとティアナは少しホッとした。敵方であるイノベイト・チルドレンと同じ存在と聞き、スオウも、信じたくはないがスロウス達と同じ感情を自分達に向けてこられては、流石に堪えるだろう。

だが、管理局云々はどうでも良いらしいが、なのはとティアナ個人に関しては話は別。

その言葉だけでホッとしてしまったのだ。

「はぁ～……困ったなぁ…。ソラって一度決めると頑固だもんなぁ……」

「仕方ないわね……ま、もともとまともにやり合う気はなかった事だし……」

ソラが下がる事を拒否したため、若干困ったという表情をした二人だったが、すぐにそれも消える。

そして次の瞬間、エンヴィーの黒十字模様の目が怪しく輝いた。

「どうするつもりかしら？　言っておくけど、逃がすつもりは全くないわよ？　こんな目立つ所に現れた時点であんた達の負けは決まってるんだからね」

「何勘違いしてるわけ？」

ティアナがクロスミラージュを構えながらエンヴィー達にそう言うと、馬鹿にするような笑みを浮かべながら、エンヴィーが言ってきた。

「誰も私達があんた達を殺すだなんて言ってないわよ？　ま、相談はしたけどね」

「餌が大きい方が……よく釣れるって事さ」

「なにを・・・…？……まさか！！？」

スロウスとエンヴィーの台詞に何かに感づいたティアナ。だが、その時には全てが遅かったのだ。

ドォォォォン！！！！！！

訓練場の天井が一瞬で崩壊し、破片が崩れ落ちる。そして、その破片を吹き飛ばすかのように、猛々しい雷撃、いや寧ろ雷そのものと言っても良いような勢いで、スキンヘッドの男がなのはに向かって突っ込んできたではないか。

「む！！！」

その男は口数少なそうな表情を僅かに引き締めながら、手に持った雷撃を纏った大剣をなのはに向かって勢いよく振りぬいた。男の腕力に加え、空中からの垂直落下による位置エネルギー、重力加速分のエネルギーを込めた一撃が、なのはを襲う。

「くっ！！」

なのははすかさずシールドを展開する。
しかし、急ごしらえのシールドではとてもではないが防ぎきれるようなものではない。なのははいくらかのダメージ覚悟で、上空からの攻撃を迎え撃った。

ガギィィィィィィ！！！！！

「……？」

だが、いつまでたっても攻撃の衝撃が彼女を襲う事はない。少し前方で何かがぶつかるような音はしたのだが……。
なのははすぐに視界を開く。動物の本能で目を半分瞑り掛けてしまったが、そんな事をしている内に次の攻撃が来るかもしれない、そう思ったからだ。

だが、そんな彼女の心配は杞憂に終わる事になった。

「え……？　スオウ君・・・」

そこには、風のレガリアを履いた右足で謎の男が放った大剣による剣戟を見事に受け止めているソラの姿があった。

「やめろ、グラトニー。」

「む……」

ソラが大剣の攻撃を易々と受け止めてしまったことも驚きだが、それと同時になのはを襲おうとしたこの男もまたイノベイト・チルドレンである事にも少しばかり驚いた。

どうやら、スロウスとエンヴィーは囮、本命はグラトニーと呼ばれるこのスキンヘッドのイノチル（イノベイトチルドレンの略）だったということらしい。

「あ～らら・・・やっぱり防いじゃうよねェ・・・……本来の作戦通りなら、ここで高町なのはに大ダメージだったっていうのにねぇ～」

「ま、ソラが居る時点で無駄だって分かってた事だけどね。モノは試にってやってはみたけど、結果は変わらず・・・…か……」

スロウスとエンヴィーはあまり悔しそうではない。ソラが居るなどと思っても見なかった彼らからすれば、今回の奇襲作戦の成功など最早どっちでもよかったらしい。

「む……」

グラトニーは静かに大剣を引き、スロウス達の居る辺りまで下がる。ソラもまた、足を地面に付けた。

「ま、仕方ないわね。今日はもう帰るわね。ソラとエステルが見つかっただけでも成果は上がったわけだし。」

「だね。ラースもきっと喜ぶよ」

どうやら、この場は引くつもりらしい。彼らとしてはなのはを殺すという案件よりも、ソラとエステル、同胞を見つける事が出来た事が思いがけない、何よりの収穫だったということらしい。

「ま、待て！！！」

「貴様ら・・・・こんな好き勝手をしておいて・・・タダで帰れると思うな……」

「お前達の身柄は我らが拘束する！！！」

と、そうは問屋が卸さないとでも言えばいいのか、スロウス達が退こうとした時、訓練場に来ていた教導官たち、その数約２０人余りがスロウス達を囲む。

加えて、先程の会話を聞いていたのだろうソラとエステルに対しても、若干の警戒を見せている。

「ははは♪　拘束だって、聞いたスロウス？あはは！！！　笑っちゃうわね♪」

「あぁ、聞こえてたってば、めんどくさい・・・・。まったく、下等生物は力の差も分からないのかい？」

「……む……」

と、その教導官たちの台詞を聞き、エンヴィーは何が面白いのか笑い転げ、スロウスはめんどくさそうに溜息を吐き、……グラトニーはいつも通り無表情だ。

「何をごちゃごちゃと……全員、一斉に砲撃をかましてやれ！！！　化け物は俺達の手で退治するぞ！！！！」

おぉぉぉぉぉ！！！！！！

と、教導官連中のなかでも高い地位であろう男がそう檄を飛ばすと、教導官たちは全員でデバイスを構え、砲撃の構えを見せる。
流石に教導官と言ったところで、魔力の収束、威力、構成スピードは申し分ない。

だが、今回は相手が悪かったとしか言いようがない。

「バカっ！！！！　やめろ！！！　そいつらに魔法を撃つな！！！！」

教導官たちが攻撃を放とうとした瞬間、ソラがそう彼らに叫ぶ。
ソラにはこの後に起こるであろう事が簡単に予測できたのだ。同じ、イノチルとして彼らの能力は自分が嫌というほど理解しているが故に。

「総員、放て！！！！！」

だが、ソラの声も虚しく教導官たちは全員揃って砲撃を放った。その威力たるや、纏めれば建物一つ吹き飛ばす事など簡単なのではないかと思える様なものだった。

四方から一斉に放たれた砲撃はスロウス達に向かって殺到する。だが、彼らに危機感という名の感情は全く見られない。
寧ろ、エンヴィーなどは笑みすら浮かべていた。その笑みの意味を、教導官たちは身をもって知ることとなる。

そして、着弾するかと思われた瞬間、スロウス達三人の瞳（それぞれどちらか片方の目に）に黒十字の模様が浮かび上がった。
その瞬間、教導官たちの全力で放った砲撃は綺麗に消え失せる事になる。

ギュオォォ！！！！

「な、なんだ……！！？」

「魔力を・・・…食ってやがる・・・……？？！」

着弾直前、彼らの放った砲撃はスロウス達の黒十字模様の瞳に吸収されてしまったのだ。
その様はいっそ、魔力を食っていると言っても良い。
スオウがなのはとの模擬戦で見せた能力と同じモノを、スロウス達も持っているという事だ。

もちろん、吸収した魔力を自分達の力に変えるという能力も・・・……

「ふん……人間風情が・・・…調子に乗ってんじゃないわよ……起きなさい、『フェンリル』」

「めんどくさいけど、ちゃっちゃとぶっ飛ばして帰るとしよう。『ヴァサー・デプス』出番だよ」

「……『ヴォルト』・・・…」

そして、三人はそれぞれのデバイスを、ソラ達と同じデザインの十字架を模った待機状態のデバイスに命令し、その姿を露わにさせる。

氷のレガリア、『フェンリル』。その姿は大鎌であり、刃の部分は氷のような物質で構成されている。

水のレガリア、『ヴァサー・デプス』。トライデントとでも言えばいいのか、三又に分かれた刃が特徴的な槍型デバイスだ。

雷（いかづち）のレガリア、『ヴォルト』。大柄なグラトニーにピッタリと言っても良いような大剣型デバイス。その刃は帯電しており、雷のレガリアという名に相応しい外見をしている。

その中で、スロウスが最初に動いた。

「ヴァサー・デプス、やっちゃいな」

『ＯＫ，Ｂｏｓｓ』

そう彼が呟くと、ルークの戦闘において見せたアクアドラゴンとは比べ物にならないほど巨大な水龍が出現したではないか。

加えて……

「フェンリル、殺さない程度に甚振ってやんなさい」

『お任せあれ、お嬢様』

パキパキパキ……

室内の温度がガクッと下がったと思えば、エンヴィーの足元から、まるで生き物のように氷が張りめぐらされる。その氷はあっという間に教導員達の足を氷漬けにし、段々と全身にまで広がっていく。

「む……」

グラトニーもまた、雷のレガリアに先程までとは比べ物にならないレベルの雷撃を纏わせる。それは魔力を変換したものとは思えないほど猛々しく、純粋な雷を思わせた。

「う、うわあぁぁぁぁぁ！！！！！！？？？？」

「ば、化け物……ぎゃあぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！」

「クッソォォォォォ！！！！！化け物めがぁぁぁぁ！！！！！」

スロウス達を囲んでいた教導員達は、悲鳴を上げながら氷漬けにされるモノや、スロウス達の事を化け物と叫びながらグラトニーの放った強烈な電撃に焼かれたりと、様々な形で戦闘不能に陥っていく。

まさに、訓練場は地獄絵図と化してしまっていた。

「ひ、ひどい……」

「嘘でしょ……？」

なのははあまりに悲惨な状況に呻き声をあげ、ティアナはスロウス達の圧倒的な力の大きさに唖然としていた。

「だから言わんこっちゃない……」

「ソラ……」

ソラとエステルは苦々しい表情でスロウス達の事を見ていた。流石に、あの中に飛び込めば、ソラでも無傷というわけにはいかないだろう。

教導官がほぼ壊滅するのに、それから３０秒と掛らなかった……

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「ふん……勢いよく噛みついてきたと言っても、所詮は人間……」

「雑魚過ぎてお話にならないわね。」

「む……」

スロウス達は教導官たちが地面に倒れ伏している様を見ながら、そう呟く。

「ほら見てみなよソラ。人間なんて、所詮はこの程度さ。力もない癖に偉そうに管理者面してさ……。」

「……」

スロウスが地面に倒れている教導官の一人の頭を踏みつけながらそうソラに言ってくる。

踏みつけている男を見るスロウスの目は、まるでゴミを見るような視線だった。

「こ、この……化け物……が……」

「ん？　まだ意識あったんだ？　でも残念」

ガスッ！！！

「ぎゃ！！？」

「うっさいから寝ててよ」

スロウスは自分達を化け物と呼ぶその男を蹴り飛ばし、壁に激突させた。

「さてと……今度こそお暇させてもらうよ。ラースは時間にうるさいからね」

「そうよね。この間も一分定時報告遅れただけでお小言だったものね」

スロウスとエンヴィーはそう言いながら、転移魔法を展開させる。地面で呻き声をあげながら倒れている教導官たちなど気にも留めていない。

「それじゃあね、ソラ、エステル。いつでも待ってるからね。気が向いたらお出でよ。子供達も、君に会いたがっているからね」

「あんた達とバカやりながら過ごすのも、悪くないしね」

二人はソラにそう言い残して魔方陣の中に入る。グラトニーもそれに続いた。

「待ちなさいよ！！！！」

「あなた達は……ここで……！！」

そこになのはとティアナの声が響いた。この惨状の中、両者ともデバイスを握ってその先をスロウス達に向けている。
やはり、潜ってきた死線の数がモノを言うのか、彼女達は肝が据わっている。

「やれやれ……そんなに死にたいのかなぁ……」

「やめときなさい。ソラが怒ったら、私達三人でも勝てないわよ」

「む……」

三人は口々にそう言い、まるでなのは達を相手にしていない。
ティアナとなのはにしても、魔法を吸収されてしまっては勝負にならない事は分かってはいるものの、このまま帰すという事が許される筈もない。

だが、両者の間に割って入った存在によって、その緊張状態は一瞬で取り払われた。

「ティア、なのはさん、やめてください」

「「スオウ（君）？？！！」」

なんと、スロウス達に向けていたデバイスの照準の先に、ソラが立ちはだかるように割って入って来たのだ。

「スオウ、そこを退きなさい！！　そいつらは……」

「ごめん、でも出来ないよ。」

ソラは普段からはみられないような真剣な眼差しでティアナを見つめながらそう答える。
是が非でも今居る場所を退かないつもりだ。

「……さっさと行け。スロウス、エンヴィー、グラトニー。あと、帰ってラースに伝えろ、『俺の知り合いには手を出すな』ってな」

「ふふ……あぁ、確かに伝えるよ。ありがと、ソラ」

「またね～♪」

「む……」

ソラがスロウス達にそう言うと、彼らは今度こそ転移魔法でどこかに消えてしまった。
残ったのは、地面に倒れ伏した数名の教導官と、更に崩壊度が増した訓練場、そしてティアナとなのはのソラに対する疑問の視線だけだった。

「どういうつもり?!　あんた、どっちの味方なのよ!!?」

「俺はこの件に関しては、どっちの味方もするつもりはない。ただ、ティア達を殺させるわけにはいかないし、スロウス達を殺させるつもりもない。あんなでも、俺にとっては友達なんだ……」

ティアナの追求にソラは静かにそう答えた。
友達、ソラと彼らを繋いでいるのは間違いなくそれだけではないだろう。だが、彼らがソラにとって意味のある存在だということも確

かだった。

「友達って……こんなことするのがあんたの友達だって言うの？！　こんな・・・・・・・・」

「結果的に、誰も死んでない。あいつらも今回は手加減してくれてたんだ。あいつらが本気で戦ってたら、ここに居る全員が死んでた……。」

「でもだからって！！！」

「ティア、分かってるんだろう？　君たちは生かされたんだ、見逃されただけなんだよ」

ティアナとソラが言い争う。いや、どちらかと言えば、ソラはティアナの怒りを受け流している節がある。

「それに、あいつらにも管理局にここまで喧嘩を売るだけの理由があるんだ。局がやった事を考えれば……俺はあいつらを責める気にはなれない。もちろん、肯定するつもりもないけど」

「理由って何よ！！？　ちゃんと……全部説明しなさいよ、スオウ！！！」

ティアナは自分が少し泣きそうになっている事にその時、気が付いた。

ソラ達だけが知っていて、自分は蚊帳の外。その事実がひどく彼女の心を苛んだ。

「……それは……」

そして、ソラがティアナに話をしようとした時だった。

ガチャ！！！ガチャガチャ！！！！！

「う、動くな！！　化け物の仲間め！！！」

「ランスター執務官、高町教導官！！　あなた達は下がってください！！」

「騒ぎを聞きつけて来てみれば……こんなことを平然と出来るのか……この化け物は……」

どうやら、教導官の誰かが救援要請でも入れていたのだろう。先程と同じくらいの数の管理局の魔導師達が、ソラを取り囲んだ。
無論、ソラがティアナに何かを話そうとしていた事は中断されてしまう。

「ちょっと……待って！！　そいつは私達を助けてくれて……」

「ですが、自分達の仲間を逃がそうとしたのも確かです。それに、このような化け物を放っておけば、また大きな被害を生みかねません！！！　我々の手で処分しなければならんのです！」

処分、即ち殺すという事だ。殺すという動詞を使わないあたり、彼らにとってソラは既に人間としては見られてはいないのだろう。

「化け物……か……」

ソラはそのフレーズに懐かしさを覚えたような表情になり、一瞬だ

が悲しい顔をする。だが、すぐに思考を切り替えこの状況をどう処理するべきか、それを考える。

そして、気が付く。このままでは非常にまずいということに。

「（まずいよな……このままじゃティアの立場も危うくなるし……仕方ない……か）」

ソラはため息を一つ吐く。化け物と呼ばれる自分を結果的には部下にしていたティアナ。この事実により、彼女の立ち位置が危うくなる可能性もあったのだ。

そして、ソラはティアナの隣に居たエステルに向かって声を上げる。

「エステル」

「あ、うん！」

そうソラが言った瞬間。彼の姿は掻き消え、一瞬でエステルを抱きかかえて、その場に居た全員から距離を取った。

その速さには誰も付いてくる事は出来ず、エステルがティアナの傍から居なくなった事に気が付くのに若干の時間がかかってしまった。

「スオウ！！　どうするつもり……」

「ティア、ここから先の事は君には関係ない。人間が一緒だと、足手まといなんだ」

ソラは冷たい口調でティアナにそう告げた。それは別れと拒絶の言葉だった。

「なにを……」

「イノベイト・チルドレンのことは、イノベイト・チルドレンである俺達がなんとかする。人間がどうこう出来る話じゃないんだ。悪いけど、君とはここまでだ」

「なんで……そんなこと……」

ティアナは心にぽっかりと穴が空いたような錯覚に襲われた。いや、実際に彼女の心は傷付いてしまったのかもしれない。

「俺みたいな化け物は……君に迷惑をかけるだけだよ。でも、俺達でしか出来ないこともあるんだ。ティアは俺たちじゃ守れないモノを守るんだ。」

「ま、待って……！」

「化け物にも、化け物なりの使命がある。分かってくれだなんて言うつもりはないし、恨んでくれても構わない。」

そして、ソラは踵を返して先程の騒ぎで大穴があいた壁から逃げようとする。

「ま、待て！！！」

「化け物が……逃がすものか！！！」

「全員！！　あの化け物を叩くのだ！！！！」

が、そうやすやすと逃がしてくれる筈もない魔導師の皆さん方による、砲撃がソラとエルテルを襲う。

「やめて！！！！」

「スオウ君は！！！」

ティアナとなのはの悲鳴めいた声が響くものの、彼らの攻撃は止まらない。
おびただしい量の砲撃がソラ達めがけて放たれた。

「邪魔をするな」

が、その攻撃はソラが後ろ向きのまま風のレガリアによって放たれた風の刃によって、一瞬で吹き飛ばされてしまい、魔導師達も、自分達に向かって一直線に飛んできたトルネードによって、派手に吹き飛ばされてしまうのだった。

「うわあぁぁッぁあぁ！！！！！？？」

「何だ……この風は……があぁぁぁぁ！！！？？」

魔導師達はごみ屑のように宙に放り投げられ、地面とディープキスする事になる。
だが、ソラも加減をしていたのか死傷者はいなかった。

そして、今度こそソラはエステルを抱えたまま壁に空いた大穴から脱出しようとする。

「スオウ……」

ティアナはもう一度だけ、ソラに向かってそう呼び掛けた。
だが……

「スオウなんて奴は……もう居ない」

ソラはそう言って、最後に小さく呟いた。

「……さよなら……今までありがとう」

ティアナが聞き取れたのは『さよなら』までだった。
さよならの後に、ソラは少し何かを口にしていたようだが、ティアナには届く事はなかった。

そして、気が付けばそこにスオウの姿もエステルの姿も無くなってしまっていた。

「スオウ……」

ティアナの頬を涙が一筋流れていく。
何か大事なモノを失くした。その事実だけが彼女の心に残っていた。

こうしてこの日、スオウという個人は死んだのだった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「おやおや……気になって来てみればこの有様とは……ソラもひどい事をしますね……」

そして、その様子をグラトニーが開けた天井の穴から見下ろしている、赤毛の男はそう呟いた。

燃えるような紅い髪はまるで炎のようでもあり、彼の口調とは裏腹に、彼には感じられない猛々しさのようなものが薄らと見えてしまうような気さえする。

「仕方ないですね……ここは私の出番という事でしょう。」

そう言いながら、その赤い髪の男は、ソラが去っていった大穴を見つめたまま、呆然としているティアナを見つめていた。

Ａｃｔ２０　彼が死んだ日（後書き）

Ｆ２０Ｃ「あらら、結局ティア達とはお別れか……」

ソラ「仕方ないでしょ。あのままあそこに居たら、ティアの執務官としての立場が危うくなるだろ。」

Ｆ２０Ｃ「ふ～ん……一応逃げたわけじゃないんだ？」

ソラ「そこは……わからん……。さて、次回は？」

Ｆ２０Ｃ「次回はソラとエステルを追って来たルークとフェイトさんとの戦闘が少しと、新キャラの登場です。それがひと段落したら過去編へＧＯだね」

ソラ「ふむ、まだまだ先は長いな……読者の皆様がたもこのダメ作者のお話に付いてきてくださり、本当にありがとうございます。では、また次回～」

Ｆ２０Ｃ「次回、『風の王ＶＳ雷光二人』にご期待ください」

本日のＥＤ『Ｓｅｐａｒａｔｉｏｎ』　ｓｏｎｇ　ｂｙ　ａｎｇｅｌａ

アニメ「蒼穹のファフナー」より

Ａｃｔ２１　風の王ＶＳ雷光二人（前書き）

戦闘シーン！！！

と意気込んでみたは良いものの、後半に少しだけという謎。

過去編に後２、３話で行けるかと思いましたが、もしかするとあと４話くらい使うかもです。
何事も思い通りには進んでくれませんね（汗）

あ、でもって今回ソラと風のレガリアの能力の一部を公開するにあたって、細かい説明が入るのですが、注意事項をば……

作者はただの経済学部の学生なので、物理や地学などにはあまり詳しくありません。今回考えていた設定も、中学高校時代の知識を必死こいて絞り出した上での成果ですので……

故に、結構無茶な設定になっていたり、そっちの方面に詳しい方からしたら、『そんなバカな、ＨＡＨＡＨＡ』みたいなリアクションを覚えられるかもしれません。

その際は、あまり深く考えないでくださいｗｗそう、考えるな、感じるんだ、の精神でお願いします。正直、詳しい方に突っ込まれると土台から崩れそうな設定かもしれないんで……そう言う感じでお願いしますねｗｗ

さて、それでは今日も元気よく、本編スタート！

Ａｃｔ２１　風の王ＶＳ雷光二人

「スオウ……どうして……」

「ティアナ……」

壊滅状態になった訓練場から一旦場所を変え、なのはとティアナは空き部屋を借りて体を休めていた。
小さな怪我などの手当てを終えてしまうと、すぐにその部屋は暗いムードに覆われてしまった。

スオウ、もといソラがイノベイト・チルドレンだったという事実に加え、彼らの段違いの戦闘能力など、驚く事は多かったが、やはり最も堪えたのはソラがティアナの下を去ったという事実だろう。

『すまないな、ティアナ。こんな時だが失礼するぞ』

「く、クロノ君？」

そうして、落ち込んでいるなのはとティアナにクロノからの画面越しではあるが、通信が入った。
彼の表情は冷静なものだったが、明らかにいつもに比べてどこか曇っているような顔をしていた。騒ぎを聞きつけてすぐに連絡をしてきてくれたのだろう、本当に出来た人だとティアナは思った。

「クロノ提督、スオウ達は……」

『あぁ、それなら恐らく問題ない筈だ。フェイトとルークに追跡及び、連れ戻すように命令した。』

「フェイトさんと、ルークに……」

その二人の名前が出た瞬間、少しホッとした。しかし、それもつかの間、ソラ達イノベイト・チルドレンの力の前ではあの二人でさえ危ういかもしれないのだ。

『不安なのは僕も分かる。報告は聞かせてもらったからな。確かに、彼らの能力はある意味では魔導師殺しの厄介極まりないものだからな。情けない話だが、確実にスオウ達を何とか出来るとは言えない』

「それは私も同意見です。でも……」

『あぁ、そうだ。なにも諦めろなどというつもりはない。君も、君がやりたいようにやればいい。それにここ最近の一連の事件、やはり彼らが絡んでいるようだからな。どの道、スオウ達を追うことには変わりない』

ティアナを励まし、加えて今後の行動の指針をも示してくれたクロノ。

上司としてこれほど優秀な人間をティアナは知らない。

『……一つ気になる事がある。今回の騒ぎで、イノベイト・チルドレン達の存在を知った、管理局上層部がかなり慌ただしくなっているんだ。こちらには何も情報がやってこないため、ヘタな事は言えないんだが、もしかすると上層部は彼らの事を何か知っているのかもしれない』

「上層部が……？　一体どういう……？」

と、そこでソラ達の言っていた事が頭で再生される。

『（管理局がやったことを忘れたのか？）』

そう、彼らは確かにそう言っていた。そして、今日をかなり憎んでもいるようだった。

それと今回の上層部の慌てよう、何の関係もないとは思えない。ティアナは落ち着きつつある頭を回転させ、思考を巡らせる。

「もしかすると、昔、上層部はイノベイト・チルドレンと何かしらの接点を持っていたと考えると……何にしても確証が……」

『その事に関しては、僕の方でも調べておこう。君は傷を癒した後、すぐにイノベイト・チルドレンの捜査に回ってくれ。』

「はい、了解しました。ありがとうございます、提督。」

『なのはも、出来ればティアナを手伝ってやってくれ。教導隊には僕から話を通しておく』

「うん、もちろん！　私もスオウ君の事放っておけないから……」

『君ならそう言うと思ったよ……。では、その様に頼む。ではな』

そうして、クロノとの通信は終わった。

その頃には、落ち込んでいた気持ちも少しは浮上し始めており、何か行動を起こさなければと、そういう気分になっていた。

「ふむ、悪くないですね」

なのは&ティアナ「「っ！！？」

と、そんな時だった、ティアナとなのはしか居ない筈の室内に男の声が響いたのは。

「誰！！？」

「あなたは……？」

ティアナとなのはは声のした方向、正確には部屋の扉に視線を送りながらそう問いかける。
そこには、男性が居た。

「そう警戒しないでください。私は、あなた方の味方ですよ」

その男性は燃えるような紅い髪をしており、瞳は綺麗な橙色をしている。服装はラフなものだったが、彼の口調からか、どこか静を感じさせるものだった。

「いきなりレディの部屋に入って来る輩の言う事をすんなり信じるほど、私は馬鹿じゃない」

ティアナはクロスミラージュをカード型から、銃の形にシフトさせ構える。なのはもデバイスを展開させてはいないものの、警戒心を見せていた。

「ふむ、強気且つ冷静。魔導師としても一流、加えて見目麗しい女性。なるほど、ソラが気に入るのも無理はないですね」

「ソラ……それって、スオウの……」

赤毛男の台詞にスオウの本名が出てきた瞬間、ティアナのクロスミラージュを持つ手が震える。
そして、まさかと思った。

「あ、あなた、もしかして……」

「洞察力も高い。流石は執務官ですね。……そうです、あなたの考えていらっしゃるとおりですよ。私も、イノベイト・チルドレンです。」

赤毛の男は礼儀正しい口調でそう言いながら、橙色だった瞳を真紅に染め、彼の両目、その中に黒十字を浮かべあがらせた。
自分がイノベイト・チルドレンだという証拠を指し示すように。

「改めまして、私はグリード。イノベイト・チルドレン、炎の王です。本名は、シオンと申します、以後お見知りおきを」

「……炎の……王……。て、言う事は……」

「えぇ、そうですよ、高町女史。私もソラと同じく、イノベイト・チルドレン専用デバイス、レガリアを持つ者です。まぁ、彼ほど強くはありませんがね」

グリード、シオンはそうなのはに言いながら爽やかな笑顔を向けてくる。
それだけで彼に戦意がない事が分かってしまった。彼からは殺気が全くと言っていいほど無いのだ。

「……その炎の王様が、私達にどんな要件なのかしら？」

「要件、と言ってもそう大したことではありません。そうですね、あなた方の知りたいと思っている事に対する回答を差し上げるためにここに来た、というのが目的の一つです。」

「私達が知りたい事って……」

「それこそ様々です。イノベイト・チルドレンの事、そして管理局との事、あぁそうですね、ソラの事についても。聞いてくだされば結構答えちゃいますよ？」

どうも掴み所のない男だ。ティアナのシオンに対する第一印象はそんなところだった。

だが、彼が言う事が真実ならば、これは渡りに船というものだ。

そう思った、ティアナが詳しい話を聞こうとした時……

「おやおや、少しまずいかもしれませんね」

「え？」

突如、シオンはそう言って、明後日の方角を見つめた。

まるで、千里眼でも使って遠くの映像を見ているかのようだった。

「ソラ達を追い掛けていた、二人の魔導師さんが、ソラ達に追いついたようなんですけど……。」

「フェイトちゃんとルーク君の事だよ！」

どうやら、彼にはソラとエステルに追いついたルークとフェイトの姿が見えているらしい。
一体どういうからくりなのか気になるところだったが、今はそれどころではなかった。

「一体、何がまずいのよ？」

「いえ、あのお二人かなりお強いのでしょうか？」

「え？……そりゃあね、少なくとも私よりは……。あの二人のコンビなら局内でもトップクラスのレベルだと思うけど……」

シオンはフェイトとルークの戦闘能力を聞いた来た。それが一体何なのかと、ティアナは客観的にみた二人の力を説明してやる。

「だとすれば、勝負は見えていますね。あの二人では、ソラに触れることすら叶いません」

「そ、そんな訳ないじゃない？？！　確かにスオウの強さはとんでもないものなんだろうけど、それでもフェイトさんとルークの二人がかりなのよ？！　触れることすらって……」

ティアナがそう言うが、シオンは眉一つ動かさない。確信があっての発言らしい。
そして、止めと言わんばかりにティアナに告げる。

「ハッキリ言いましょう。風のレガリアを履いたソラに勝てる魔導師は、存在しません。それがたとえ、何人束になって襲いかかろうとも……」

そのシオンの言葉に、なのはとティアナは言葉を失うのだった……

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「さて……と……。降ろすぞ、エステル」

「あ、うん…。ありがと、ソラ」

ソラとエステルは郊外から更に離れた地点にまで来ていた。
周りには人っ子一人見えず、建物らしきものも何もない。どこまでも続くのではないかと思えるような平原が二人の目には映っていた。

ソラはそこまで抱きかかえていたエステルをゆっくりと降ろし、一呼吸置く。

「………ばれちゃった……ね？」

「……そうだな」

エステルがそう言ってくるが、彼女が本当に言いたい事はそんな事ではないだろう。
その証拠に、彼女の頭の中はティアナ達を気遣う感情が多くみられた。

「これからどうするの？」

「リク達の事を放っておくわけにもいかないだろう。まずは直接会うしかないか………。悪いが、お前にも手伝ってもらうぞエステル」

「それはもちろん構わないよ。私だって、そのつもりだったんだから」

ソラにそう答え、強い意志が宿った瞳を向けてくるエステル。
昔からのことではあるが、度胸のある女である。

と、二人は会話が終わった瞬間、同時に管理局の本局の施設のある方向の空に視線を向けた。

「はぁ、放っておけばいいものを……」

「どうしよう……結構魔力が強い人みたいだよ？　それも数が二人だし……」

「気にしなくても良いさ。お前は少し下がってろ、怪我させるわけにはいかないからな。」

「う、うん……」

エステルを背に、ソラはこちらに向かってくる魔導師であろう存在の到着を待つ。スピードはかなりのモノで、どこかで感じた魔力である。

「なるほど、あんた達か……」

そして追手としてやって来たのであろう魔導師二人、ルークとフェイトを確認したソラは、冷たい口調でそう呟いた。
ルークとフェイトは地上に降り、ソラと相対した。その表情はどこか険しいものだった。

「……スオウ……」

「その名前は、もう俺のモノじゃない」

ルークが険しい表情のまま、ソラをそう呼ぶが、彼はすぐにそれを否定した。

そして、即座にフェイトが口を開く、その内容はひどく事務的なものだった。

「イノベイト・チルドレン、ソラ及びエステル。私達はあなた達を連れ戻す、若しくは拘束するよう命令を受けています。一連の事件の重要参考人として、大人しく投降しなさい」

「今なら、俺達の方でも君たちを擁護できる。協力さえしてくれれば、悪いようにはしない」

フェイトとルークはここまで二人を追いかけてきた理由を事務的に伝える。

クロノからの緊急の要件という事で、その内容を聞かされた時は驚かされてしまった。

まさか、彼らを犯罪者のように扱わなければならない事になるなど、考えもしていなかったからだ。

「お願い、ティアナ達も二人の事待ってる筈だから、一緒に帰ろう？」

と、事前の警告を終えると、フェイトはすぐに口調を優しいものに変えてそう言ってくる。

彼女の本質は、恐らくこの優しさなのだろうとソラは何となく理解

していた。

だが、ここでそうホイホイと従って帰るなど論外なのだ。

「その必要性が認められない。スロウス達の事なら、俺達に任せておけば良い。管理局が出張る必要はないと思いますけど？」

「どうしてそうなる？　それに相手は複数人なんだろう？　なら、君たち二人じゃあ……」

「そうだよ！　報告でも見たけど、あんなに強い力を持ってる子達相手に無謀以外の何でもない」

ソラの拒絶の言葉に、ルークとフェイトは即座に自分達も力になれる事がある筈だと、その意味を含めてそう言う。

確かに、数の上では不利な事は否めない。

しかし……

「あなた達が居ようが居まいが、然して差は無いって言ってるんです。人間と俺達とじゃ、スペックが違う。一緒に来てもらっても、足手まといになるだけです」

「っ！……どうして、そんなに自分達だけで抱え込もうとするの？確かに、私たちじゃ力になれないかもしれないけど、それでも私達は友達だよ。苦しい時は、誰かに寄りかかっても良いんだよ？」

「そうだ。これは君たちだけの問題じゃないんだからさ。それに大きな力を持っているからって、全能じゃない筈だ。個人じゃ、出来る事が少ないぞ？」

ソラは再び拒絶する。
それを許すまいと、ルークとフェイトはなおも食い下がる。彼らもまた、自分だけで全てを抱え込もうとして、大切なものを失った。だからこそ、ソラ達にはそんな思いはして欲しくなかったのだ。

「そう言う事は、人間同士の間でやるものです。俺たちみたいな化け物が、どんなに望んだ所で、人間は裏切る。あなた達はそうでなくても、他の人間がそうでない確証なんてどこにもない。俺は、それを嫌というほど知ってる……」

「それは……っ！　でも!!!!　このままじゃ二人とも、大事なものを失くしちゃうよ?!　何もかも自分達で何とかしようとして、手から零れ落ちちゃう。そんなの嫌じゃないかな?」

ソラも、全部の人間が自分達の事を受け入れてくれない、拒絶されるなどとは考えていない、ティアナやなのは、ルークやフェイトなど、例外的な存在もしっかりと理解している。

だが、それでも彼らだけが人間すべてではない。先程の教導官たちのように、自分たちよりも圧倒的に能力が高い存在を前に、恐怖や蔑視、異物を見る目を向けられてしまう。

どうしようもなく、人間は自分達と『違う』ものを恐れる生き物なのだ。それ故に、人間同士であっても、虐めや差別、果ては戦争まで、違いを恐れる人間の弱さ故に起こる事象は数多く存在する。

「……大事なものなんて、全部壊されたよ。あんた達、管理局に……」

「え……？」

フェイトの主張に、ソラはやるせない表情でそう呟く。彼の後ろに居るエステルもまた、悲しい表情になっている。

フェイト自身、管理局が過去にソラ達に何かしらの関わりを持っていたという事と、大事なものを壊されたという言葉に驚きを隠せなかった。

「お話がそれだけなら、俺達は行く。ティアナ達にも言ったけど、これ以上俺達に関わらないでください」

話は終わりだと言わんばかりに、ソラは踵を返し、エステルの方に向かおうとする。

だが、ルーク達が黙ってそれを許す筈も無かった。

「ま、待って！！！　さっきも言ったけど、あなた達には聞きたいことが山ほどあるの！！　お願いだから私達と一緒に……」

「くどい。俺達にそのつもりはない。どうしてもって言うなら、管理局お得意の力づくで無理やりにでも連れて行けばいいだろう……？」

フェイトがそう言うが、ソラは取り合う気はないようだ。

そして、戦闘の意思がある事を示すために、オルクスをセットアップしレガリアを装着する。

「……フェイト、こうなったら仕方無い。気絶させてでも、連れて帰ろう」

「……できれば、そんな事はしたくなかったけど……」

そのソラの動きに対応し、ルークとフェイトもデバイスをセットアップした。剣と戦斧、二人の相棒が各々の手に収まる。

「（魔法は使えない……となれば、物理攻撃で攻めるしかないな……）」

ルークはイノベイト・チルドレン達の魔力を吸収してしまう能力を念頭に入れ、抜刀の構えを見せる。
魔法が使えない以上、剣技を駆使してソラを屈服させるほか方法は無い。

と、ルークとフェイトが同時に動き出そうとしたその時、ソラが呟く。

「物理攻撃で戦う、それ正解ですよ。まぁ、お二人がその場から一歩でも動ければの話ですけど」

「なに？」

そうソラが呟いた言葉にルークが反応した時、ソラはレガリアを履いた足で、地面をタンッ！と踏みつけた。

その瞬間

ドコォォォ！！！！！

「ぐあ！！！？？」

「きゃっ！！！」

ソラが地面を踏み叩いた瞬間、ルークとフェイトは地面に這いつくばらされてしまう。まるで、体の上に車でも乗せられたかのような、そんな錯覚をしてしまいそうになるほどの重さが二人の体を襲った。見れば、周囲数十メートルの地面がこの謎の重みに耐えかねて押し潰され、クレーターのようになっているではないか。

「これは……前の模擬戦の時の……」

「あぁ、そう言えばルークさんは初めてじゃ無かったですよね。まぁ、前の時はレガリア無しでやったので、簡単に抜け出されてしまいましたけどね。今度は……そうはいかない」

ルークは以前にも模擬戦で同じ技をくらっていたので、落ち着いて状況を整理する事が出来た。
どういうからくりかは分からないのだが、この技、まるで何倍にも起きくなった重力によって、体が地面に押し付けられてしまっているかのようだった。

「あ、アーカーシャ……ファングを……」

『ダメ……この状態では飛ばす事なんて無理よ……。分離させた瞬間、今のあんた達と同じ事になるのがオチだわ』

以前と同様にファングでソラの気を逸らせて、その間に脱出をはかろうかと考えたルークだったが、今回のものは効果範囲が段違いに広いらしく、それすら叶わないようだ。

「こ、このぉぉ……」

「う、くぅぅ……」

ルークとフェイトは懸命に立ち上がろうとするのだが、上半身を地面から上げることで精一杯で、両足で立つ事は困難を極めた。
加えて、呼吸もままならない状態で、ルークもフェイトも息を荒くしている。

「ぷ、プラズマ……ランサー……」

そんな中、フェイトは何とか数発の魔力弾を形成し、息も絶え絶えな状態ではあるものの、それをソラに向かって放つ。
吸収させるのがオチかもしれないが、僅かでも集中を乱してくれればと思っての攻撃だった。
だが……

「無駄ですよ……」

「うそ……」

なんと、そのプラズマランサーはソラに着弾する前に、まるで地面に吸い寄せられるような軌道を描き、地面に着弾してしまった。
どうやらこの謎の重力の様なもの、魔力弾にも影響するようだ。

「まさか……ソラ……君、重力を……」

「いえ、俺はそんな芸当はできません。今お二人を這いつくばらせ、魔力弾の軌道を押し曲げたのは、ただの空気です」

「く、空気……？」

ソラの種明かしをフェイトは反復するように復唱した。
空気と言えば、自分達が普段吸っている、あの空気の事だろう。だが、何をどうすれば、空気によって地面が押し潰されたり、人を這いつくばらせたりできるのか、全く理解は出来なかった。

「空気、つまりは大気。大気は星の重力によって引きつけられていて、地表を押す力になっています。所謂、大気圧ってやつです。」

「そ、そんなものを……何に……」

「人間は普段感じないけど、約１０１３２５　Ｐａ（パスカル）っていう圧力下で生きている。１ｍ2あたりで１０ｔｏｎに相当する重さがかかっていることになります。そうですね、小型自動車６台分くらいの重さです」

ソラは理科の授業をするように淡々とした口調で、懸命に立ち上がろうとしている二人に告げて行く。

「１０１３２５　Ｐａ、つまりは1気圧。人間の体がこの圧力を感じないのは、同じ大きさの圧力が体の中から掛っているからです。とまぁ、前置きはここまでです。」

ソラは言いながら、エステルの居る方にまで歩み寄り、彼女を抱え上げて逃げる準備をする。その間も、ルークとフェイトは動く事は出来なかった。

「今、あんた達を押さえ込んでいる空気、細かく言えば空気を構成している分子は小さなボールみたいなもので、それが体にぶつかっている状態が大気圧が掛っているということです。ただ、この空気

分子は動きが尋常じゃ無く早い。だから、重力の影響なんかもある程度しか受け付けない。それこそ、地上に引きつけておく程度です。」

地球から空気が飛んで行かないのは、重力のお陰である。
動きが早く、重力の影響を受けにくい空気分子だが、そのほとんどがそれぞれめちゃくちゃな方向に動きまわっているのだ。

「俺は、その無茶苦茶に動き回っている空気分子の運動ベクトルを地表に居るお二人に向かって一直線に方向転換させただけです。向きが地面に一直線ってことは、その分体に当たる空気分子の数も多くなる。つまり、大気の圧力が大きくなる。いくら体の中から一気圧分の抵抗があっても、それを上回る圧力が掛れば、動く事はもちろん、体の中では肺でまともに呼吸すら出来ない」

「ベクトル操作……？　なるほど……この息苦しさはその所為か……」

詰まるところ、ソラの力の本質、風のレガリアの能力はベクトル操作である。
操作できるベクトルの種類には限りがあるものの、空気や風を操ることなどを可能にしている。

「前に戦った時に起こした風の衝撃波も……」

「風って、要するに大気の相対的な移動速度の差によって生まれるものですから。そのベクトルを操れば、風を使って衝撃波なんてものも作りだす事が出来るというわけです。」

そこで説明は終わりだと言わんばかりに、踵を返して去っていくソ

ラ。未だに大気による拘束は緩む事は無いので、ルークとフェイトは成す術なくそれを見ているしか出来ない。

「す、スオウ……待って……」

「お前……本当に……」

ルークとフェイトは辛うじてそう口を動かす。呼吸がしにくい状態に遭って、意識が薄れて行っているのだろう。

そんな二人に、ソラはすまなさそうに呟いた。

「気持ちは嬉しいですけど……。やっぱりこれは、人間には無理なんです……。二人には、シエル君だっている、子供の事を一番に考えて生きてあげてください。無理に俺たちみたいなのに付き合わなくて良いですから」

シャッ！！

そう言い残して、ソラはエステルを抱えて消えてしまった。

その瞬間、ルークとフェイトを捉えていた大気圧の拘束が解け、二人は漸く呼吸をスムーズに出来るようになり、動く事が出来るようになった。

「はぁ……はぁ……げほっ！！」

「だ、大丈夫……？　ルーク……？」

「あぁ、うん……なんとか……。でも……動くことすらできないなんて……」

ルークは自分の力の無さに少し悔しい思いが膨らんでいくのを感じた。
ドライヴという隠し玉を使うことも考えたが、それでも動けなかった場合の事を考えると、恐くて使えなかった。

「でも……最後のスオウの目……とっても悲しそうだった……」

「最後は、俺達の事を気遣ってくれていた……のかな……？」

ソラの最後の台詞、確かにあれは二人を思っての言葉だったのだろう。拒絶されはしたものの、それだけの事実が、二人を少しだけホッとさせた。
事態は何一つ好転していないという事実を、その背後に抱えながらも……

「スオウ……いや、ソラ……。お前達の過去に、一体何があったんだ……？」

ルークはそう呟くが、その問いに答えてくれる者はいなかった。

Ａｃｔ２１　風の王ＶＳ雷光二人（後書き）

ソラ「さてと、なんとかルークさん達を振り切ったんだけど……ベクトル操作って……それ、なんて一方通行さん？」

Ｆ２０Ｃ「あぁ、そのリアクションを待ってたさ。ていうか、ヒントがあの方ですから。カッコよ過ぎでしょ、アクセラレータさん。マジパネェっす。」

ソラ「そう言えば、先週のインデックス二期での戦闘シーンは鳥肌もんだったよね。『わりーが、ここから先は一方通行だ！！！』とか痺れまくったよ」

Ｆ２０Ｃ「さて、これからどうなるのやら……って、書くのは私なんですけどね」

ソラ「次回はグリードとの話と、俺とエステルのシーンじゃないのか？」

Ｆ２０Ｃ「まぁ予定ではね。もしかすると、新キャラを出すかもしれないけど。まぁ、それは話の進み具合如何によって決まるもんだから」

ソラ「ていうかさ」

Ｆ２０Ｃ「ん？」

ソラ「このお話のヒロインって、ティアだったよね？」

Ｆ２０Ｃ「まぁ、そうだったね」

ソラ「……なんかエステルが出た時点で、ダブルヒロイン化してる気がするのは、俺の気のせいなのか？次回から、エステルをかなりプッシュしていくっていう作者の計画をある筋から聞いたんだけど……」

Ｆ２０Ｃ「・・・・・・・・・・・・・・・さて、ではまた次回！！」

ソラ「逃げやがった……」

Ｆ２０Ｃ「仕方ないじゃん！！！　どっちをお話のヒロインにしようか、エステルを出した瞬間に頭の中にあった予定表が、初期のファミコンの如く綺麗さっぱり消えちゃったんだから！！！」

ソラ「何それ逆切れ？？？！」

本日のＥＤ『ＩＭＭＯＲＡＬ』　ｓｏｎｇ　ｂｙ　川田まみ

Ａｃｔ２２　繋いだ手、繋がった心（前書き）

さて、今回でＣｈａｐｅｒ１は終了ですね。次回からは過去話です。

ていうか、本日はエステルさん押しでいきます。脳内でほっちゃんボイスに変換してお楽しみくださいね。

というわけで、一つの区切りとなるＡｃｔ２２をどうぞ！

Ａｃｔ２２　繋いだ手、繋がった心

「うぅ……面目ない……」

「ごめんね、ティアナ……文字通り、手も足も出なくって……」

只今、ティアナとなのは、そしてイノチルであるシオンの目の前で、ルークとフェイトが揃ってｏｒｚになってしまっている。

ソラに圧倒されたあと、帰還命令がクロノから出たので、二人はこうして本局まで戻って来たのだ。

そして、二人を心配してティアナとなのは達は彼らの所に飛んできたというわけだ。

「い、いえいえ……！！　二人とも物凄く大変だったっているのは分かりますから……それに元はと言えば、あのバカが……」

ティアナは謝って来る二人に、気にしないように言うが、流石に凹んでいるのか、二人は懺悔を続ける。

「言い訳するつもりじゃないんだけどさ……。今日、ちょっと寝不足でさ……うん、気が付いたら朝でさ……。ホント、恐いよな……ダブルベッドって……」

「そうだね……一回だけって決めてたのに、気が付いたら朝だったんだよね……／／／／／／　で、でも、あれはルークが悪いんだよ

？？！　一回だけって言ったのに、私の事あんなにイジメるんだもん……」

「なにこの人達！！？　落ち込みながらイチャついて、ピロートークまで繰り広げるなんて、どんだけ器用なのよ！！！？」

目の前の万年新婚夫婦に対し、ティアナは自分の思いのたけを叫び倒した。

なんというか、一連の騒ぎの事も相まって、やたらと疲れてしまった。

「おやおや、夫婦仲のよろしいようで……。見ていてとても心が温かくなります」

「う～ん……シオン君？　もしかして変わってるってよく言われたりしない？」

シオンの能天気さに、流石のなのはも苦笑いしながらそう突っ込みを入れた。

イノチルというのは、大物なのかもしれない。

と、そこに来てようやくフェイトとルークがシオンの存在に気が付いた。周囲に目が届かなくなるまでピンクオーラを出せる辺り、ある意味ではこちらも大物である。

「えぇと……さっきから気にはなってたんだけど、そちらの方は？」

フェイトがシオンの方を見ながらティアナ達にそう尋ねてくる。

ティアナとなのはからしても、何と答えればいいのか困ってしまうのだが、ここはもう正直に答える方が良いだろうという結論（やけ

くそ気味）に達したので、思い切って話してみる事にした。

「えぇと、この人は……」

「はじめまして、私はシオンと言います。ソラとエステルと同じ、イノベイト・チルドレンの炎の王です。以後、お見知りおきを……」

ルーク&フェイト「「あ、これはこれはご丁寧に……ってえぇ!!!?　イノベイト・チルドレン!!!!!?」」

ティアナが口を開こうとした所に入ってきた、シオンの丁寧な挨拶に、思わず普通に返してしまった二人だったが、自己紹介の内容に驚くのに少し時間が掛ってしまった。

「えぇと……その……イノベイト・チルドレンって……マジ?」

「えぇ、この通り、黒十字眼も持っていますので。」

シオンは言いながら両の目を真紅に染め、黒十字の模様を浮かび上がらせた。

彼らにとって、この模様はイノベイト・チルドレンであることの証明のようなものらしい。

「はぁ……まずは簡単な説明から入りましょうか……」

ティアナは溜息を吐きながら、シオンがここに現れた経緯を説明し始めた。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「なるほど、いきなり現れて、俺達の知りたいと思っている事について懇切丁寧に教えてあげると……。助っ人外国人的な存在ってことか……」

「ルーク……かなり認識として外れてると思うんだけど……」

「かつてのクロマティ的な存在と思っていただければ」

「こっちも乗ってきた！！？」

シオンの登場とその目的の一部をティアナが説明した後、ルークがシリアス顔でそう言い、シオンもそれに乗っかってきた。フェイトとティアナは一転してギャグモードに入ってしまった二人に深いため息を吐いた。

「それで、ルークさんにフェイトさん？」

「うん？」

「なにかな？」

と、おふざけモードからすぐにスイッチを切り替え、シオンがルークとフェイトに尋ねてくる。

「ソラと戦ってみてどうでしたか？　結構強かったでしょう？」

「あ〜……いや……強いどうこうって言うよりも、一歩も動けない

状態だったからねぇ、恥ずかしい話……」

「ソラが本気になったら、あれよりもすごいってことなのかな……。だとしたら、他のイノベイト・チルドレン達も同等の力を持っているんじゃ……」

シオンが聞いてきたのは、ソラとの戦闘の感想だった。

まぁ、戦闘と言っても直接打ちあってもいないので、なんとも言えないのだが、ソラの力が本物であるという事だけは疑いようのない事実である事だけはハッキリしていた。

「ソラ、そして風のレガリアの能力はベクトル操作。まぁ、何も知らない状態では、あのような結果に終わったとしても仕方のない事です。情報というモノは、何に勝る武器でもありますからね。」

「ソラは自分の力を隠してきたわけだからね……。それに比べて、私達の戦闘スタイルとかはかなり知られちゃってるし……」

「それにイノチルには感応能力があるからな……。どうしたって情報戦では勝てないよ」

シオンの説明に実際に戦ったルークとフェイトは表情を硬くしながらそう呟いた。

「ですが、皆さんは人間とは思えないほどの能力を持っている事は確かです。イノベイト・チルドレンとて無敵ではありません。なので、あまり深く落ち込む事はないですよ？　今回の経験を次回に生かせば何かしらの対策なりを講じることも可能です」

「あはは……流石はイノチル……本人からそう言われると納得する

しかないよね……」

「でも、シオンの言う事は尤もだよ。同じ轍は踏まない。この気持ちが大事だと思うな」

シオンのアドバイスは、彼自身がイノベイト・チルドレンであることから説得力満載だった。

ルークとフェイトも、今回の敗戦から分かったこともあるだろう。

もしも次回があるのならば、また違った結果が生まれるかもしれない。

「ねぇ……。分からない事があるんだけど……」

「はい、何でしょう、なのはさん？」

そこでなのはが思案顔でシオンに視線を向けながら尋ねてくる。

彼女の表情は真剣そのもので、今回の件に対しての姿勢が滲み出ているようでもあった。

「そもそも、イノベイト・チルドレンって何なのかな……？」

それはとても単純な、それでいてティアナ達が今一番聞かなければならない事の一つだった。

「単純な質問かもしれないけど、私達って知らない事が多過ぎると思うんだ。スオウ君……ううん、ソラ君の事とか、イノベイト・チルドレンのこと、それに過去の管理局が一体何をやったのか。」

「そうですよね……何にしても、シオンの持っている情報だけが頼りってわけね……」

無論、シオンの真意は分からない。何らかの裏があるという可能性も捨てきれはしないのだ。

だが、現状では彼以外に頼るものもないというのも事実。

ティアナ達がやるべき行動は決まっていた。

「皆さんのご期待に添えるものかは分かりませんが、お聞きになりたいというのなら私はお話します。」

「……。シオン、お願いするわ。あなたの知ってる事、私達に話してくれないかしら」

「うん、俺もそうするべきだと思う。でないと、今後の方針も立てられないからな……」

ティアナとルークがシオンにそう言うと、なのはとフェイトもシオンの目を見て頷いた。

「分かりました。ですが、お話する前に覚悟しておいてください。もしかすると、ソラに対する感情、加えて管理局の存在すら疑問に感じてしまう事になるかもしれません。今まで見てきた世界が、少し違って見えてしまう可能性もあります。それでも、良いですか？」

シオンは最後に確認するようにしてティアナ達にそう尋ねた。

無論、彼らの答えは……

「そんなもん、覚悟の上だ」

「私達は知らなさすぎなのよ……その現状を見過ごすわけにはいかないの」

「うん。それにこのまま放っておくなんて事もしたくない」

「ソラ君もエステルさんも友達だもんね」

シオンの確認に、四人は強い意志を秘めた目を向けてそう答えた。

その様子に、シオンは少し目を見開くが、すぐに笑みを浮かべる。

「そうですか。では、お話しましょう。全ての始まりは１３年前。ソラがまだ５歳だった頃の事です………」

こうして、ソラ、イノベイト・チルドレン、管理局の闇。それらを内包した過去が明かされる事になった………

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

所変わって、ティアナ達がいる本局がある世界とはまた別の世界。

そのとある世界のどこにでもありそうな一般的なホテルの一室に、ソラとエステルはいた。

「あぁ～……………激しく疲れた……………頭痛いし、体は軋むし。今日は厄日だ………」

「調律もしてないレガリアであんな無茶するからだよ！オルクスとの電子的なやり取りがおかしくなっちゃってる状態での空気分子のベクトル操作なんて何考えてるの！？」

ソラがベッドに倒れ込みながら苦言を呈すと、先程まで大人しく自分の後を付いて来ていたエステルからお叱りの御言葉を賜る羽目になってしまった。

「仕方ないだろう……あぁでもしないと逃げらんなかったんだし……。うぅ～……演算頭痛がヒドイ……」

風のレガリアの能力はベクトル操作だが、ベクトルを操作するための能力はあっても、操作するにあたって必要な演算処理はソラの負担が大きい。

なにを、どの方向に、どのくらいの強さで、ｅｔｃ……などなどを事細かく演算して、レガリアによってそれを実行する。

このプロセスは外から見れば一瞬で済んでいるようにしか見えないのだが、ソラの頭の中では膨大な量の演算が実行されている。

彼がイノベイト・チルドレンだからこそ、この演算に脳が付いて行けるのだが、一般的な人間ではこっちに向かってころころ転がってくるボールのベクトルを変えることすらできないだろう。

さらに言えば、イノベイト・チルドレンとて疲れ知らずというわけではない。今のソラのように、演算後のフィードバックによって鈍い頭痛に襲われる事になる。

ソラはこれを演算からくる頭痛なので、『演算頭痛』などという捻りも何もない名前で呼んでいる。

「もう……寝るなら着替えてからにしなよ」

「無理……。エステル、着替えさせて……」

「子供みたいな事言わない！」

そんなやり取りをした後、エステルはベッドの上でウンウン唸っているソラを見ながら溜息を一つ。

演算頭痛がひどいのも真実なのだろうが、実際の所、ソラがここまでへばっているのは精神的なものが多気だろう。

「……」

ポスン……

と、その様子に何を思ったのか、エステルもベッドに背中から倒れ込む。

彼女の蒼い髪がベッドに広がり、さながら花が咲いたようである。

そして、エステルはすぐ傍に放りだされた形になっているソラの右手を、自分の左手で握り、手を繋ぐ形になる。

「……なにやってんの？」

「ソラが、寂しいって言ってるから」

いきなり自分の寝ているベッドに侵略者が現れ、しかも手を取ってきた事に対し、ソラは訝しむような顔で侵略者、エステルに薄く眼を開けながら尋ねる。

すると彼女は真面目な顔で回答してきたので、ソラは一瞬言葉に詰

まってしまう。

「……何をバカな事を……」

「分かるよ。だって、私達繋がってるんだもん。今、ソラは心で泣いてる」

「……泣いてない。俺を泣かせられるのはフラ〇ダースの犬の再放送だけだ」

「またそんな強がり……。」

エステルの手を払うこともせずにそう言っても、全く説得力がない。手を繋いだまま、ソラはもう片方の左腕で顔を隠す。

「後悔してるんじゃないの？　ティアさん達の事……」

「別に……。どの道、そう遠くない未来、ティア達の方が寿命で早く居なくなる。タイミングが少し早かっただけの話だよ……」

「それでも、後６、７０年はあるんだよ？　それに大事なのは長さじゃなくて、短い時間をどうやって一緒に過ごすのかだと、私は思うな」

エステルは少しだけ手を握る力を強めながらそう言う。

ソラや自分が、ティアナ達と同じ時間を生きる事は叶わない。これだけはどう足掻いても変える事の出来ない決定事項だ。

だが、エステルは考える。

限られた時間でも、一緒に居る事が出来るのなら、何を敵に回して

も自発的に別れる事はないのではないか、と。
少ない時間を、他人とのコミュニケーションや、社会というコミュニティの中で右往左往しながらも逞しく生きていく。
それが思考する動物、人間の特徴の一つではないのだろうか。
イノベイト・チルドレンと言えども、時間量が違えど、一時の繋がりくらいは持っても罰は当たらないのではないか。
そんな事を、エステルは漠然と考えていた。

「でも、その繋がりを壊す事が出来るのも人間だ。戦争でも、差別でも、イジメでも、結局は人間の心の狭量さが生むモノだ。その狭量な心が、他者との繋がりさえも容赦なく叩き潰す。俺は、それをよく知ってる……」

「それでも、ソラは人間が大好きなんだね……。ティアさん達の事、大事に思ってるのが伝わってくる……」

お互い、心の中を読み合う。
本来、イノベイト・チルドレン同士ならば、言葉を交わす必要などない。
今のソラのエステルのように、常に思考がリンクしているからだ。
そのリンクのオン・オフは自由だが、今現在、二人はそのリンクを繋いだ状態で話している。
心の中の正直な気持ち、嘘のない、まっさらな本心がお互いの脳に、情報として流れ込んでくる。

「先生が……あの意味不明なくらい騒がしくて、人格破綻する一歩手前で、無駄に哲学チックな言葉が好きな、馬鹿みたいに優しい人を、俺達は知ってるからだ。お前だってそうなんだろう？」

「……うん、そうだね。先生のおかげで、私はソラに会えた……それに皆とも……。優しくしてもらったし、生きていく手段も、戦い方も、人の良い部分も沢山教えてもらったね……」

二人は、同じベッドに並んで寝ころび、手を繋いだ状態で天井を見る。

なにを映すわけでもない、真っ白な天井。

思えば、昔の自分は、この真っ白な天井とは真逆の、どす黒い色に染まっていた。

ソラは目を閉じながらそんな事を考えた。

「寝ようか、ソラ……」

「あぁ……そうだな……寝よう……エステル……」

二人は同時に意識をゆっくりと手放す。

体が沈んでいくような、そんな感覚を覚える。同時に、夢を見る事が寝る前から分かっているという、なんとも不可思議な感覚も存在していた。

そして、手にはエステル手のぬくもりが印象強く残っていた。

思い出す。

一人ぼっちだったあの頃。

初めて人を殺めた時に感じた快感、優越感、そして喪失感。

救ってくれた、一人の人間の事。

凍りついた心を溶かした、暖かい抱擁。

自分と同じ存在との出会い。

楽しい時間。

そして、その時間の終わり。

そこから始まる何か。

小さな欠片が組み合わさり、過去が夢となって再生される。

狂った過去が、暖かな過去が、悲しい過去が、始まりに繋がる過去が。

そう、これは……現在という、ある一点を指し示す事が出来ない動的な概念が生み出す足跡、即ち過去。

とある子供の、とある過去だ。

Ａｃｔ２２　繋いだ手、繋がった心（後書き）

Ｆ２０Ｃ「さて、次回からついに過去編だね。何回分を過去編に費やすかなぁ……丁寧に書くか、それとも勢い良く行くか、そこが問題だ」

ソラ「読者さん的にはどうなんだろうね。やっぱりさっさと現代に戻って本編進めた方がいいのか、それとも過去編もしっかりと見てみたい、なのか。悩みどころであることには変わりないね」

Ｆ２０Ｃ「まぁ、そこは様子を見て決めて行くよ。さて、次回からの過去編・Ｆｒａｇｍｅｎｔですが、ソラ達が見ている過去の夢と、シオンがティアナ達に離している昔話は共通のモノです。」

ソラ「まぁ、視点を一々変えてたらそれこそ何話かかるか分かんなくなるからね」

Ｆ２０Ｃ「そゆこと。では、次回、Ｆｒａｇｍｅｎｔ１　無の子供にご期待ください」

本日のＥＤ『ただ凛として』　ｓｏｎｇ　ｂｙ　岸田教団

Ｆｒａｇｍｅｎｔ１　無の子供（前書き）

さて、今回からはＦｒａｇｍｅｎｔという事で過去編です。
この章でちょこちょこ伏線回収していきたいと思いますねｗｗ

今回はプロローグの内容の伏線回収に……なっていれば嬉しいです
ｗｗ

Ｆｒａｇｍｅｎｔ　オープニング主題歌
「Ｃａｕｓａｌ　Ｃｈａｉｎ」　ｓｏｎｇ　ｂｙ　遊女
ＰＣゲーム「うたてめぐり」より

聞いてるだけでテンション上がってくる曲ですね。ゲーム内容は輪廻転生のお話でしたが、中二な展開がそれを上手く料理してましたｗｗ

では、本編どうぞ！

Ｆｒａｇｍｅｎｔ１　無の子供

何も持っていなかった。

いや、持つ事を許されていなかった、そう言った方が正しいのだろうか。

権利も、自由も、尊厳も、名前さえも、持つ事を許されることもなく、無論、与えられることも無かった。

だが、生まれだけを見れば、彼は恵まれていた。

彼の生まれた家は、某国の大貴族の家だった。全ての点において裕福であり、生まれた家だけを見れば、彼は幸運だったと言えよう。

しかし、その家柄の恩恵を彼が受ける事はなかった。生まれてから、一度もである。

『娼婦と旦那様の子供らしい……』

『まぁ……その娼婦の娘はどうなさったので？』

『さぁな。だが、産んだ子供を旦那様に押し付けて何処かへ消えた。迷惑な話だ』

『旦那様は、その子供の事をどうなさるおつもりなのでしょうか……？』

『ふん、穢れた血の子供だ。そうそう長くはここには置くまいよ。少し育った後、裏ルートで臓器売買の業者に売りさばいても良い。あぁ、そうだ、少し狂信的なカルト集団で構成された研究所、あそこに売っても良いな。あの研究所は羽振りがいいともっぱらの噂だ』

要するに、そう言う事だった。

その貴族の家において、彼は不必要な命だった、ただそれだけだ。

その子供は、名前を付けられることもなく、愛情を受けることもなく、ただ機械的に、動物の成長プロセスに従って成長していった。

自我が芽生え始めた頃になると、周囲の大人はその子供が普通ではない事に気が付く。

時より現われる紅い瞳と、黒十字の紋様。

それだけで、この子供が普通の人間とは違う、いや、人間ではないとその家の大人たちは判断した。

『穢れた血だけでなく、化け物だったとはな……』

『私、あのような化け物と同じ屋敷で暮らすのは嫌でございます！　一刻も早く追い出してくださいまし！！！』

『どの道、捨てるなり売るなりするおつもりだったのでしょう？ちょうど良い機会だと思いますが』

この会話の後、その子供は売られた。

その国では、裏の世界の人間のみしか知らない狂信カルト集団によって創設された研究所に。

額で言えば、車が一台買えるくらいの価格で取引された。

『お前に我らを恨む権利などない。お前は本来存在しなかった命だ』

『生まれてこなければよかったのに……哀れね』

売る払われる際に、その家の主、つまりは血縁上は父に相当する存在と、姉に当たる存在から、そんな言葉をかけられた。

だが、その子供は特別自分の事が不幸だとは思っていなかった。

ずっと前から、こうなる事は分かっていた。

大人たちの考えている事は、手に取るように分かったし、初めからこういう事だった、そう考えて納得する事さえ出来た。

そう、『所詮、人間なんて生き物はそう言うモノだ』、その子供はそう考えていた。

既得権益に縋り付き、欲に塗れ、死を恐れ、他者を食い物にする。

動物と人間の違いを挙げるとするなら、それは思考するかどうかだ。

その子供から見れば、人間は思考するだけの、ただの動物にしか見えていなかったが。

別に思考するから偉いというわけではない。人間があらゆる種の頂点に立っていると言われているが、それはただ運が良かっただけに過ぎない。
幸運だったが故に、人という動物は思考するという概念を手にしたに過ぎないのだ。

自分を買い取った、研究所の男に手を引かれながらその子供は青い空を見ながら、人間という存在の定義を考えていた。

「あおい……」

空の青さがその思考を止めるまで、少しかかった。

この時、子供は生まれてから6年目の誕生日を迎えていた事を知らなかった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

研究所に売り払われた子供。
そんな、いろんな意味で絶望的な状況下で彼は一つの変化を得た。

「次、『ＢＲ－５５８』」

そう、個体を分別するための名前、これを名前と呼ぶべきはか分からないが、兎に角彼は個としての名称を手に入れたのだ。
あの家に居たままでは、決して手に入れることも出来なかったもの

だろう。

「……」

名前を呼ばれたＢＲ－５５８は予め命令されていた事を忠実に実行する。

彼は手を前に出し、用意された人型の的に向ける。

「はじめろ」

研究員の男のその声が彼の耳に入るのと同時に、ＢＲ－５５８は両の眼に黒十字の模様を発現させ、空気中を飛び回っている魔力素を一気に吸収、それを自分が元から持っている魔力を足し合わせ、彼の年齢では考えられないような大きな魔力の奔流を放った。

瞬間、前方にあった人型の的は跡形もなく吹き飛び、それに加えて壁をも吹き飛ばし、部屋の間取りを変えてしまった。

「ふむ……魔力素の吸収過程、自身のエネルギーへの変換効率、まったくもって興味深い」

研究員はＢＲ－５５８の成果をレポートにまとめ始める。

メモ書きなのであろう、字は走り書きだが、難解な言語や数式がちらほら見えた。

「よし、お前はもう良い。部屋で休んでいろ。明日は対人戦を行う」

「……（コク）」

研究員にそう言われ、ＢＲ－５５８は小さく頷き、部屋を後にした。

対人戦、つまりはここに連れて来られた、他の検体との実戦実験だ。
ここに来て一週間弱になるが、これまでも二回ほど対人戦を行った。
貴重な検体を失うわけにはいかないのか、相手を殺すまではしなくても良かったものの、かなり痛めつけた記憶がある。

ＢＲ－５５８にとって、他の検体達は脆過ぎた。手加減しておかないと、あっという間に殺してしまいそうになるので、戦うことよりも手加減することの方が大変だった。

「あ、あの！！／／／／／／」

「……？」

と、ＢＲ－５５８が自室を目指して歩いていると、誰かに呼び止められた。
声色からして女、しかも歳は近いだろう。そこから相手が同じ検体の女であることを推測しながら、彼は声のした方に向き直す。

「あ、えぇと、その……さっきの見てた……君すごいんだね。魔力を使えるだけでもレアなのに、あんなに大きな力を持ってるなんて……」

そこに居たのは、予想通り同じ検体である女だった。
黒髪を肩辺りまで伸ばし、ＢＲ－５５８と同じ実験服を着せられていたその女。
背が彼よりも少し高かったので、一つ二つ年上なのかとＢＲ－５５８は勝手に予想していた。

「あんたは……」

「ご、ごめんね。いきなり声なんか書けちゃって……。私は『ＳＴ－５４６』、君がここに来る二週間前に連れて来られたんだ」

「……そう」

それだけ言って、ＢＲ－５５８は踵を返して歩きだしてしまう。
この女が嫌いなわけではない、ただ単に興味がないだけだ。何の関心も持てない存在相手に時間を割くのは面倒だった、ただそれだけだった。

「あ、ちょ、ちょっと！！！」

と、女は彼を呼びとめる。
どうやら、こちらにとっては興味の対象でなくとも、相手はそうではないようだ。

「なに…？」

ＢＲ－５５８は少しだけ振り向きつつ問いかける。何か用があるのならさっさと済ませ、さっさと部屋に戻りたかった。
無視してそうしても良かったが、女というモノはどうも苦手だった。

「あ、あのね……私、明日対人戦なんだ……。それで、もう私５回連続で負けちゃってて……次に能力の成長が見られなかったら……もしかすると、処分されちゃうかもしれなくて……そうでなくても、薬品の実験台にされたりするかもしれなくて……」

「それは、お前が弱いからだろう。運が悪かったな」

ＢＲ－５５８は率直な気持ちを伝えた。
こんなところに売られてくること自体不運な事なのだが、この目の前の女はそれに輪をかけて不運だ。

能力がなければ、試験的に開発された薬品の実験台にされるか、処分という名目で行われるカルト的な宗教の儀式に使用される生贄にされるのが落ちだ。

女ならば、男の慰みモノとしての使い道もあるだろうが、ここの屑どもはそんな煩悩からは縁遠い連中ばかりなので、そっち方向の心配はしなくても良いのがせめてもの救いと言えば救いだろうか。

「だ、だから！！！　君に……戦い方を教えて欲しくて！！」

「……はい？」

「き、君、魔力無しでも物凄く強いし……。魔力を使わせたら、もっとすごかったから……。その……君が先生になってくれたら……明日勝てるかなって……」

女は何故か顔を赤くしてそう言ってきた。
だが、ＢＲ－５５８がその感情の変化に気づくことはない。というより、他者の感情の起伏などに欠片も興味がなかった。

「お、お願い！！！　わたし……まだ……死にたくない……！
いつか、ここから出たいの！！　だから……だから……付け焼刃でも良いから……」

「……」

若干涙を流しながらその女は懇願してきた。
動物本能に、生存願望から来る死への恐怖。『ただ生きたい』その気持ちだけが、彼女がここで正気を保っていられる支えになっているのだろう。

「（……死にたくない……か……。）」

正直、ＢＲ－５５８には彼女の気持ちは理解出来なかった。
目の前の女は弱者、強者に食われるだけの存在だ。
対して、ＢＲ－５５８は絶対的な強者だった。故に、彼には分からない。弱者の生存本能に駆られた必死さなど……。

そこで、彼が出した結論は……

「付いて来い」

自分の気分に、従ってみた。暇つぶしには丁度良いだろう、その位の気持ちで彼女の鍛錬に付き合う事にした。

「あ、ありがとう！！／／／／／／」

瞬間、女の顔は花が咲いたような笑顔になった。その笑顔に、少しだけだが、胸のあたりが暖かくなった感覚を覚えたＢＲ－５５８だった。

その後、ＢＲ－５５８はその女に、ある程度の戦闘技能を教えた。
魔力の扱い方のコツなども。

彼自身、誰かに教わったわけではない。ただ、人間タイプの体の構造、骨格、筋力などを考えた時、最も効率的、且つ合理的な動きを考えると、今の形に行きついた。ただそれだけだ。
子供の考えた、言ってみれば荒削りな型だったが、子供同士でやる喧嘩、もとい模擬戦ならば十分に通用するものだろう。

加えて、自分の持つ力についても十分に理解している。魔法とはまた違う、良く分からない能力だったが、不思議と何をどうすればいいのかは頭で理解出来ていた。

と、それはともかくとして、女は、ＢＲ－５５８に感謝し、何度も頭を下げながら彼との鍛錬に励んだのだった。

そんな行為が、何の意味もなさないという事実、そして残酷な展開が待っていることなど知る由もなく……。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「嘘……」

目の前で、ＳＴ－５４６、昨日鍛錬に付き合った女が、『信じられない』と言った表情で立ち尽くしている。
ＢＲ－５５８としても、これは意外な展開ではあった。それでも、彼が表情を変えるまでには至らなかったが。

そう、なんてことはない。ただ単に、ＢＲ－５５８の対人戦の相手が、昨日数時間戦い方の手解きをした女だった。
死にたくないと、助けてくれと懇願されたので、暇つぶし程度に鍛錬の相手を務めた相手。

そう、ただそれだけのことだった。

「そんな……うそ……だって……」

女、ＳＴ－５４６は呻くようにそう呟きながら後ずさる。
彼女からしてみれば、相手は絶対に勝つ事が出来ない相手であり、昨日勇気を振り絞って声をかけ、訓練に付き合ってくれた相手なのだから。
絶望と、死への恐怖。それが、彼女の目にはハッキリと映っていた。

『どうした、早く始めないか』

研究員の音声が、スピーカーから流れる。
開始の合図があったにも拘らず、二人が動かないのに業を煮やしたようだ。

「……」

「あ、うぅ……あぁ……」

ＢＲ－５５８は目の前の半べそ状態の女を見てから、口を開く。
自分らしくない。
そも、自分らしさなど意識したことも無かった彼がこんな意識を持つなどおかしな話だが、この時の彼は自分がこれからやろうとして

いる事を考えると、『らしくない』そう思えてしまって仕方なかったのだ。

「……どうした!?　聞こえないのか!!?」

研究員の怒号が聞こえてくる。
ＢＲ－５５８はその声の主が居るであろうモニター室に視線を向け、呟いた。

「うるさいな」

『な、なに!!?』

彼のその予想外の呟きに、研究員の顔に瞬間的に怒りが走る。
恐らくだが、今までこういった形で反抗された事がないのだろう。
それ故に、研究員はＢＲ－５５８の反抗が異常なまでに許せなかった。

「大人しくあんた達の下らない研究に付き合ったやっていたのは、ただの暇つぶしだった……どうせ、俺には他にすることもなったからな」

『な、なにを……』

そう言ってから、ＢＲ－５５８は珍しく表情に感情を現わさせる。
その表情は、人をこけにしたような、そんな薄い笑みだった。彼はその表情をモニターにてこの模擬戦を記録していた研究員に向けていた。

「でも、もう飽きた。悪いけど、今日限りであんたらとはおさらば

だ」

『馬鹿な事を……。お前は売られてきた身だ。そんな勝手が……』

「そんなこと、知ったこっちゃないね。気に入らないなら力づくで止めてみたらどうだい？」

『うぐ……この……くそ餓鬼が……。』

研究員の怒りがスピーカー越しに伝わってくる。だが、ＢＲ－５５８にとっては気にするレベルではない。たかが人間の、情けない感情の波など恐れる必要すらない。

『いいだろう……ならば……お前をこの場で廃棄処分にしてやろう……。おい！！！　他の検体どもをここに連れて来い！！！　全員であの餓鬼を相手に集団戦だ！！！』

「ふん……沸点の低い人間だ……」

と、多対一の状況にも余裕を崩さないＢＲ－５５８。

加えて、なおも研究員を馬鹿にしたような事を口にする。明らかに、彼は相手を煽っていた。

「ね、ねぇ……！！　どうするつもりなの！！？　こんなことしたら、あなたは！！」

「知らん。来るなら来るで全滅させるだけだ。あんたもそのつもりなら、今ここで殺すけど？　そうでないならとっとと逃げるんだな。ハッキリ言って邪魔だから」

と、ＳＴ－５４６にそんな事を言っている間に、研究員が呼び出した施設に捉えられた検体たちがぞろぞろと訓練場のドアを大きな音を立てながら入ってきた。
どうやら、ＢＲ－５５８を殺した奴には褒美をやるとでも言われたのだろう。

こんな劣悪な環境で、美味しそうなインセンティヴをチラつかされれば、普通の子供ならば全力で食いつくことだろう。

「まじかよ……あいつを殺すだけで美味いもん沢山食えるのか……？」

「俺だ……俺がやるんだ……」

「私だって……私だって……！！」

予想通り、検体どもはやる気全開で目を血走らせている。
数の差というアドバンテージも助け、彼らにも余裕が見えた。

『やれ！！！　褒美を手にするのは果たしてだれかなぁ？？？！！
　ははははははは！！！』

と、研究員が耳障りな声でそう叫ぶと同時に、その場に集まった検体全員がＢＲ－５５８に向かって襲いかかった。

そして、その検体達の血走った眼の先に居るＢＲ－５５８は……

「さてと……やりますか……」

そう呟きながら、瞳に黒十字を浮かび上がらせ、両の手を　パン！
と叩き合わせたのだった……

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「あ、が……やめ……殺さない……でく……れ……」

「おやおや……その口からそんな言葉が出るとはね……虫唾が走るよ」

戦闘開始から5分。
現在、ＢＲ－５５８は研究所内に居た研究員、つまりはカルト集団の連中の一人の前に立ち、左手を男の首に向けていた。

男は何かに首を絞められた状態で宙に浮かびあがらされ、呼吸困難に陥って苦しみ喘いでいる。

ＢＲ－５５８が瞼を開くと、その目には黒い十字模様が。
その文様が、研究者の男の恐怖心をさらに煽る。

「こんな……ば、馬鹿なことが……。検体とはいえ……戦闘能力は……ある程度有している筈の連中を……たった一人で……」

「俺を殺したいんなら、ゼオ〇イマーにでも乗ってこい。」

ゴキャッ！

「うぎ！！？」

ＢＲ－５５８が向けていた手を何かを握るように力を込めた瞬間、耳障りな声を出し、研究員は首をあり得ない方向に曲げて地面に落下した。
口からは泡を吹き、涎や吐瀉物が地面に散乱する。

「あっけない……担架切ってこれかよ……人間は脆いな……。」

言いながら、ＢＲ－５５８は周囲を見渡す。研究員だった連中は全員地面に倒れ伏している。
目の前で死んでいる男と同じように、首がおかしな方向に曲がっていたり、五体満足でない者、上半身と下半身が別居状態になっている者もいた。

ＢＲ－５５８を襲ってきた検体達もまた、地面に倒れ伏しているものの死んではいない。
全員、気絶させたにすぎない。

「さてと……これからどうするか……。とりあえず、ここの有り金、全部頂くとして……。う～ん……その辺の傭兵団にでも取り入るか……」

と、ＢＲ－５５８がこれからの身の振り方を考えている時だった。

「あ……あ……」

「ん？」

小さな声がしたので彼はその方向に目をやる。
そこにはＳＴ－５４６が尻もちを付いて、信じられないようなものを見るような目でこちらを見ていた。
まぁ、実際に信じられないような光景が広がっているのだが。

「何だお前、まだ逃げてなかったのか？　ほれ、もうお前は自由だ。さっさとどこへなりへ行けばいいだろう」

そう言いながら、ＢＲ－５５８は彼女の方に向き直って、一歩だけ歩みを進めた。
だが……

「いや……！！！　こ、来ないで……」

「……」

その一言で、ＢＲ－５５８は歩みを進める事を止めた。

「そ、それ以上……近寄らないでよ！！！　この化け物！！！！」

そして、その一言を聞いた瞬間、何故だかは分からないがＢＲ－５５８の胸のあたりに鈍痛が走った。

「人……こんなに……殺して……それに、さっきの……人間じゃない！！」

彼女の言っている事は間違ってはいない。彼は心の中が急激に冷え切っていくのを感じた。戦いの高揚感による熱さなど、一瞬で冷めきった。

「っ！！！」

ＳＴ－５４６は身じろぎ一つしないＢＲ－５５８に恐怖の籠った視線を向け、一目散に逃げ出し、そのままその姿は見えなくなった。

「……そうか……俺は化け物か……」

ＳＴ－５４６が居なくなり、死体と気絶した検体だけになったその空間でＢＲ－５５８は小さく呟いた。
同時に、漸く実感が湧いてきた。目の前に転がっている研究員だった人間の死体。
死体という名の名称が付いた、ただの有機物の塊を目にして、ＢＲ－５５８は人を殺めたという事を実感した。

「ふふふ……ははははは……！！！！　そうかそうか……俺は人殺しか！！！！　化け物か！！！！　そうか！！！！　ははははははは！！！！」

そうして、彼は狂ったように笑い始める。何がおかしいのか、自分でも理解不能だったが、兎に角おかしかった。どうしようもなく笑いが堪え切れない。まるで頭のネジが一つ飛んだかのようだった。

「ははははは……はは……。でもなんでだろうな……こんなに笑えるのに……涙まで出てくんのは……」

笑いと共に彼の顔に涙が一筋流れ落ちた。

この涙の理由も理解不能だった。だが、心を見たしていた快感と優越感、それに何かとても冷たいものが加わった感覚だけが印象に残った。

その冷たい感覚、何かを失ったような、そんな感覚。

その時の彼に、その感情がなんなのか知る術はない。なぜなら彼は……

どうしようもなく、一人ぼっちだった……

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「見つけた……」

蒼い髪の少女が紅い目に黒い十字模様を浮かべた状態でそう呟いた。

「ほんまか？　どんな子や？」

「一人ぼっちで……泣いてる……」

蒼い髪の少女に、銀髪を肩まで伸ばし、片目が髪で隠れてしまっている関西弁の男が尋ねると、女の子はどこか遠くを見ているような表情でそう答えた。

「シオン、お前の方はどうや？」

「私の方では感じ取れませんね。ということは、その子がエステルの対になる存在という事なのでは？」

銀髪の男はもう一人、部屋のソファで本を読んでいる紅い髪の男の子と尋ね、意見を聞く。

「さよか……ちゅうことはや、その子がこいつの所有者になるってことやなぁ……」

男はそう言いながら、十字架を模ったアクセサリーを指でくるくると回す。

「先生、早く迎えに行こうよ……。私、あの子を一人にしたくない……」

「お？なんやエステル、一目惚れかいな？　いや～、お前もついに色気づいてきt……あ、すまん、ほんまに……、だからその振り上げた広辞苑を仕舞っt……ふべら！！！？」

銀髪の男はエステルと呼ばれた蒼い髪の少女の広辞苑攻撃にあえなく撃沈させられてしまったのだった……

「……あの人が、私の……私が待ってた……風……なのかな……？」

エステルはそう言いながら、再びどこか遠くを見るような表情を見せ、少し頬を赤らめた。

Ｆｒａｇｍｅｎｔ１　無の子供（後書き）

Ｆ２０Ｃ「過去編にやっと漕ぎつけたね……いやぁ、長かった……」

ソラ「まぁ、ロスメモに比べれば順調に来てる感はあるけどね。」

Ｆ２０Ｃ「それは言えてるな。あ、ここで重大発表です。私Ｆ２０Ｃ、以前から申し上げていた通り、就活に力を注がねばならないため、このＢｏＰを週一更新にさせていただきたく存じます」

ソラ「次回からの更新は、毎週木曜朝７時となりますので、作者の就職が決まるまで、皆さまどうかご容赦を……」

Ｆ２０Ｃ「ほんと、読者の皆様には申し訳ない気持ちでいっぱいです。更新スピードくらいしか魅力のない作品なのですが、私も気持ち良く小説を書きたいのでｗｗ」

ソラ「そんな訳なので、次回以降もどうぞよろしくお願い致します。」

Ｆ２０Ｃ「週一になるにあたって、一話辺りの量は少し多くするように努力したいと思います。では、また来週……じゃなくて日曜日のスクラパでお会いしましょうｗｗでわでわ～」

Ｆｒａｇｍｅｎｔ　エンディングテーマ
「ヒメムラサキ」　ｓｏｎｇ　ｂｙ　水樹奈々様
アニメ「バジリスク～甲賀忍法帖～」より

Ｆｒａｇｍｅｎｔ２　どこまでも続く空（前書き）

さて、復帰最初のＢｏＰですね。
先週はパソコンお姉ちゃんがお亡くなりなったために、更新できなくてごめんなさい。
毎週木曜日朝７時更新とか言っておきながら、この体たらく。言い訳すらできませんね……

新しいパソコンお姉ちゃんのサポートの元、今後も頑張っていきたいと思いますので、どうぞよろしくお願いします。

では、過去篇その?、どうぞお楽しみあれ～♪

Ｆｒａｇｍｅｎｔ２　どこまでも続く空

人間の限界とはなにか？

世界の限界とはなにか？

化け物には限界という概念はあるのだろうか？

そんな、取り留めもなく且つ、哲学的な答えの見えないような事を黒髪黒眼の少年は、座り心地の悪い椅子に腰掛けながらも頭の中で考えていた。

「う、うぅ……もう……許して……くれ……」

「ん？」

とそんな時、座り心地の悪い椅子から声がした。苦しげな、それでいて痛々しい悲痛な声。

無論、椅子が人語を話すなどホラー話にもならない。

椅子は口を利かない。ただそこにあって、誰かの体を支え受け止めているだけだ。

その椅子から声がしたということは、その椅子は椅子ではないということだった。

「す、すんません……。俺らが、俺らが悪かったですから……」

そう、その椅子は椅子といっても『人間椅子』だった。

「おいおい…椅子が喋ってんじゃねぇよ……っと！！」

「グヘァッ？！」

その子供は、苦しげに、そして子供に対しての異常なまでの低姿勢からくる屈辱などを感じさせる表情を浮かべた男を腰に据えた状態から踵で蹴りつけた。

若干だがベクトル操作によって蹴りの威力は上がっており、死ぬレベルではなくともかなりの激痛を男に与えている。

「げっほ……げほ……」

「ふん……勝手に絡んできて、勝手に負けて。本当ならぶっ殺してるところだけど……」

「ひ、ひぃ！！？」

子供の凍りついた視線に戦慄するチンピラ風の男。

たった今この子供が言った通り、このチンピラ、そして周囲に転がっているこの男の仲間たちは、化け物と呼ばれているこの子供に無謀にも絡んできた。

数の優位性を生かして掛かってきたのはいいのだが、そこまでだっ

た。

全滅までのタイムは３０秒ほどだっただろうか。

「……はぁ……もういいや。飽きた」

そう言って、その子供は人間椅子になっていた男の上から飛び降り地に足をつける。

その表情は、先ほどの言葉を表すかのように、何かに飽きた、そんな顔になっていた。

「は……はぁ……うぅ……」

男の方は恐怖で頭をやられたように、頭を抱えて蹲り、ブルブルと震えている。

絡んできたときの威勢の良さなどは欠片も残っていない。

ある意味で、これが人間の限界なのか、と先ほどの自問に対して一つの答えを出したその子供。

「人間の限界、人間は肉体の性能以上のことは出来ない…か……」

子供は何の感慨もなさそうに、且つ目の前の男に対しての興味など全くなさそうな視線を送りながらそう呟いた。

「ぐえ！！？」

そして、今度はその男を空中に向かって蹴り上げる。

蹴り上げられ、宙を舞う男は重力に従って地面に叩き付けられる。

地面に落下した際、カエルの潰れたような声がしたが、子供にはそ

んなことはどうでもよかった。

「世界の限界は……世界に存在する物体は物理法則に縛られてでしか存在できないってところころかなぁ」

恐らく、この言葉を表すためにこの子供はチンピラの男を蹴り上げたのだろう。

子供にとって、この男はただの玩具、いや実験道具といった方がいいのか。

ともかく、あまり人間扱いはしていないようだった。

研究所の一件から数週間。

あの時の子供は普通に生きていた。

いや、普通の定義を考えれば、この子供の生活スタイルは決して普通ではないのだが。

今現在、彼は単独で行動している。

研究所で拝借した大金を使って、服などを町で購入し、適当に着て、適当な傭兵団にアプローチをかけてみた。

何をするにも金は必要である。手元にある大金もいつかは底をつくことを考えれば、食扶ちを確保しておくのは悪くない選択肢だった。

しかしまぁ、傭兵団の皆々様方も真剣にお仕事をしていらっしゃるわけで、子供などは門前払いだった。

少しムカッとしたのでその傭兵団のボスをシメたのが悪かった。

その日以来、何かとガラの悪い輩に絡まれるのが日常となってしまったのだ。
まぁ、食扶ちというにはあまりに小汚い気もするが、絡んできた相手かから勝手に財布などを置いて行ってくれるので、初期目標を達成していると言えばそうなのだが。

「さぁ～て……どうすっかなぁ……」

地面に落下した際に気を失ったであろう男に今度こそ興味を完全に無くした様子の彼は、気持ちの良いくらいの快晴っぷりの青空を仰ぎ見ながらそう呟いた。

特にやらなければならないこともない。ただ、何の目標もなくぼんやりしているだけというのも芸がない、というより退屈だったのだ。

「あ、化け物にも限界あるじゃん……。目的が無いと時間を持て余す」

と、またしてもどうでもいい発見を口にしながら、とりあえずは町はずれの工場地帯から移動することにした。

まぁ時間など腐るほどあるのだから少しくらい浪費したところでどうということはない。
そんな考えの元で、彼は適当ながらもゆったりライフを成立させていたのだ。

そのゆったりライフが、今日この日、終わりを告げようなどとはこの時の彼は知る由もなかった。

「なんや面白いことを考えとるなぁ。限界の概念について、子供が考えるテーマにしては、随分深いチョイスやな。」

そう、この声が彼のゆったりライフをぶち壊すことになるのだった。

「？」

彼はその声のする方に視線を向ける。

そこには三人の人間（多分）が立っていた。周囲の気配には気を配っていたつもりではあるのだが、こんなにも接近されてから気が付いたのではもう遅い。

さて、その三人の内訳だが、銀髪の男、そして赤い髪と柔和そうな表情の子供。加えて、青い髪を腰あたりまで伸ばしている少女という構成だった。

子供の方は、少年とほぼ同じくらいの年齢であろうことくらいは分かったが、銀髪の男の方は大体２０代半ばから後半といったところであろう。

「そこにわいの考えた人間の限界も加えといてぇな。人間の限界その？、人間は思考の外、考えることのできない事柄については、認識も理解もできない、っていうのはどうやろ？」

「……」

「人間いうんはな、考える事が出来る生き物や。せやけど、『考える』いう概念を持っとるからこそ、考えられる範疇でしか物事を理解も認識もできん。人間が他人を完全に理解できんのは、他人の思考や有体に言えば心の中身を考えることが出来んからや。」

訝しげにその銀髪男の言うことを聞く少年。
飄々とした様子で語る彼の言葉には、どこか冷たいものを感じた。
もしかすると、人間観察の果てに銀髪男が独自に発見した彼だけの真理なのかもしれない。

「他人の気持ちになって、みたいなセリフはよう聞くけど、そんなんは所詮自分の立場を他人に置き換えてシュミレーションしてるに過ぎひん。A君が感じた痛みをB君がA君の気持ちになって感じようとしても、その痛みはA君だけのもんや。痛みは移動なんぞ出来んからな、B君は怪我の具合から、「まぁこれくらい痛いだろう」みたいな自己判断を下しただけや、理解したわけやあらへん。ただの置き換えやな」

「随分お喋りなオッサンだな。なんだ?哲学者かなんかか?」

一通りの自論を展開し終わった銀髪男に少年は挑発気味にそう言ってみる。
感じ的に、この男自体には脅威は感じないが、その後ろの子供二人、特に赤毛のやつからはかなり『ヤバい』感じが伝わってきた。

「い~や、わいはただの科学者や。科学者いうてもマッドなやつとちゃうで?」

「ふ~ん……。で、その科学者のおっさんが、俺に何の用だ? 化け物の噂でも聞きつけてサンプルとして回収でもしに来たか?」

「あはは!! ちゃうちゃう。言うたやろ? ワイはマッドなサイエンティストやないって」

棘のある少年の言い方に笑いながらそう答える、自称科学者の銀髪男。胡散臭さは残るが、これまで殺してきた人間とはどこか違うものを感じた。

「それに、君ならもう分かっとるんちゃうん？　わいの考えてること全部」

「……！」

その一言に、少年は少し面食らった。

実際、彼の頭には男の考えていることが手に取るようにわかった。

人間の思考がダイレクトに脳に響くこの感覚。

戦闘においては、行動の先を読んだり、駆け引きをする際に重宝している能力だったが、まさか会って間もない男にそのことを指摘されるとは思ってもみなかったことだった。

「ただ単に、保護しに来ただけ……。そう君の頭にも情報が行ってるはずやけど？」

「……」

嘘ではない。

そのことは、少年自体が一番よく分かっていた。というか、こんな思考回路をした人間に会ったのはこれが初めてだった。

「どやろ？やる事ないんやったら、ちょっとワイらに協力してほしいんやけど」

「協力？」

「君と、でもってこの子ら、エステルとシオン、あと留守番中の『リク』。この四人で、人助けする手伝いして欲しいんや」

これまた真実。

銀髪頭の言うことが嘘でないと少年は彼の思考を読み取って理解する。

そして、銀髪頭が少年の返答を待つ態勢に入る。取りあえず、さしあたって伝えるべき事は伝えたということらしい。

それに対する少年の回答は……

「断る。大体、その人助けに手を貸したとして、俺に何のメリットがある？」

「うは～……分っとったことやけど、こうもはっきりと拒否られるとちょっと堪えるなぁ」

少年の拒否回答に、銀髪頭は大げさに頭を振る。

特に気分を害した様子もないが、彼としては少年の協力は不可欠な要素のようで……

「メリット……ふむ……。そうやなぁ……なら、協力してくれるなら、この子、エステルを嫁にあげるわ」

「はい！！！？？　ちょ、先生！！？？」

唐突に自分のことが交渉材料、しかも嫁に出されるということになって、エステルは顔を真っ赤にして銀髪頭に睨みを利かせる。軽くスルーされてしまったが。

「どや？　エステルは可愛いし、あと家事なんかも万能やで？　おまけに将来的にはスタイルも……」

「もう！！！」

「ふぎゃ！！？」

なおも続けようとする銀髪頭をエステルがどこからともなく取り出した英和辞典で殴りつけて沈黙させる。

この時、少年はまた一つ勉強した、『女は怒らせるものではない』と。

「確かに、その子は可愛いと思うけど、そもそもそういうのは人間同士でやる事だ。嫁に出すなら他当たりなよ。……それよりも……」

銀髪頭の冗談にため息を一つ吐いて、銀髪頭とエステルの後ろにいる赤毛の男の子、シオンを睨み付けながら口を開いた。

「そっちの赤毛、さっきから気持ちいい殺気飛ばしてくれてるけど、お前は俺と戦いに来たってことでいいのか？」

そう、少年がシオンに言うと、銀髪男とエステルは『ヤバ…』という表情をしたのだが、時すでに遅しである。

「あはは、バレテしまいましたか。そうですね……あなたの力に興味がありまして」

「そうかい。まぁ、俺としてもお前みたいなやつとは一回戦ってみたいと思ってたんだ。どうやら、お前も俺と同類みたいだからな。」

二人はそう言って、お互いニヤっと笑みを浮かべる……そして……

「ちょ、ちょっとシオｎ……」

エステルがこれから起こるであろう事態を防ごうと、シオンに声をかけたのと同時に、二人は動いた。

瞬間、空気が弾けるような音と共に、シオンと呼ばれた少年と名前の無い少年は空中で激突していた。

見れば、シオンの足にはローラーブーツタイプのデバイスが表れている。ローラーブーツといっても、そこまで深さのあるタイプではないが。

後ろ側の二つのウィール、炎を象ったようなデザインを思わせる特徴的なウィールが目を引く。

「へぇ……お前の武器、面白いな」

「あなたこそ、丸腰とは思えない」

少年とシオンは空中で蹴りを出し合った状態でそう呟くと、どちらからとなく表情に笑みを浮かべた。

「僕は、エステルがあなたを感じ取ったその時から、こうしてあなたと戦ってみたかった。直感みたいなものですが、これから会う人はものすごく強いと、私の勘がそう言いましてね」

「バトルマニアってやつか？　はは、こりゃ良いや。俺も、全力で戦える奴が欲しかったところなんだ……。お前なら、殺すつもり

でやってもオッケーみたいだしな」

二人は距離を取りながらそう言い合う。

この時、両者は妙な親近感を感じていた。外見は全く似通っていない二人だが、内面の部分、そのどこかで全く同じ属性を持っているということを感じ取った。

「そのつもりで来てください。僕も、この炎のレガリアがどこまで僕自身を高みに押し上げてくれるのかを知りたいので」

「はっ……俺は実験台か？　でも、良い根性持ってることは評価してやるよ」

「あはは、光栄です♪」

シオンがそういった瞬間、足の炎のレガリアが雄叫びを上げるかのように、後輪の特徴的なウィールから炎が迸った。

その炎は、シオンを中心に猛々しく燃え広がり、まるでシオンの背景が炎で塗り潰されたかのような錯覚を覚えるほどだった。

「へぇ……。そのレガリアってのは大した代物だな」

「レガリアタイプのセカンドシリーズ、デバイスの完成型といえるものですからね。では、お喋りはこのあたりで……行きます！！」

シオンがそういった瞬間、空間が爆ぜるかのように赤い炎で包まれた。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「お～お～……元気なこっちゃなぁ………。」

銀髪男は、激しい戦闘を始めたシオンと名前の無い少年の姿を見ながら、のほほんとした様子でそう呟く。

目の前では、子供二人が派手な殺し合いを繰り広げているというのに、まるで兄弟喧嘩を見守る父親のような感じだ。

「先生、放っておいていいの？！　あの子、レガリア有のシオンと丸腰で戦うなんて無茶だよ！！」

「ん～……まぁ大丈夫やろ。シオンかて、その辺のことはよう分っとるやろ」

エステルの悲鳴めいた声に、尚ものほほん姿勢を崩すことのないこの男。

そのやり取りの間にも、大きな爆発音があたりの空気を振動させた。

「あれでも？」

「…………多分」

銀髪頭の言葉に若干の焦りが見られた。

「そ、それにしてもあの子もようやるなぁ……。レガリア無であそこまで能力を扱えるやなんて大したもんやで」

「（……誤魔化した）」

エステルは銀髪頭の誤魔化し方の下手さに嘆息しながらもシオンたちの戦闘を見ていることしかできなかった。
彼女にはシオンのような戦闘能力はないし、彼女のレガリアもそういった類のものではない。

「あぁでも、そろそろ終わってまうなぁ……。見てみ、シオンが決めにかかりよるわ」

銀髪頭がそう言った瞬間、シオンの持つ炎のレガリア、『ボルカニアス』が強烈な光を放ち始めた。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

楽しい……楽しすぎる……

シオンというらしい目の前の自分と年も変わりないくらいの少年との戦闘は、名前の無い彼の心を躍らせた。

彼は今、生まれて初めて『楽しい』という感情をその身に感じていた。
殺し合いの中でそういった感情を覚えるのはいささかサイコさんな感じもするが、そんな事すらどうでもよかった。

「いいな、お前……こんなに楽しい殺し合いは生れて初めてだ！！！」

「クス……僕もです！！！」

そう言いながら、シオンは炎を、名無しの少年はベクトル操作で生み出した風を、互いにぶつけ合う。
ベクトルで操作できるものはそれこそ沢山あるが、名無しの少年が殊更風を操るのは、もう好みの領域の話だった。
単純に、風を操るのが一番楽で、一番しっくりくるのだ。

「あはははは!!!!!　いいねいいねぇ!!!!　もっと、もっと来てみろよ!!!!!　俺を、俺を殺せるくらいに!!!!　殺してみせろよ!!!!」

名無しの少年のその叫びは、喜びの言葉と、心の奥底にあった強い願望を表していた。
ずっと、もしかしたら生まれた頃から願っていたのかもしれない。
自身の生まれを呪うわけでもない。
自身の体のつくりや能力を呪うわけでもない。
ただ、自分の生きている世界がたまらなく退屈且つ詰まらないものだった。
それだけだった。
強く『生きたい』と願ったことも、思ったこともなかった。ただ、世界に絶望していただけだった。

「（もしかしたら……こいつなら、俺を殺してくれるかもしれない……）」

そんな気持ちと、戦闘の高揚感が相まって、名無しの少年のテンシ

ョンがこんなにも上がっている。

別に望まれた命でもなかった、必要とされた命でもなかった。

ただ、そこに生まれてきてしまった、今日この日まで生き続けてしまっていた。

自分ですら、自身の命に価値を見出す事が出来なかった。ただ、だらだらと生きて来ただけだ。

だが、それも今日で終われるかもしれない。

そう、名無しの少年はいっそ清々しい気持ちにすらなっていた。

その時だった、シオンの炎のレガリアから強烈な光が発せられたのは。

「無限の煉獄（インフィニティ・インフェルノ）……」

シオンが微かにそう呟いたであろうことだけは確認できた。

だが、その後に発生したまるで火山の噴火のような、雄々しい炎がこちらに向かって放たれたので、それどころではなくなってしまった。

「（あぁ、こりゃまずい……。さすがに演算が間に合わん……）」

名無しの少年は、瞬間的にそう判断すると炎のベクトルを操作しようと進めていた演算を途中でやめた。

コンマ数秒の差だが、少年の演算よりも炎の方が早い。その事を、一瞬で理解できてしまったのだ。
炎の大きさが、異常なレベルであることも然ることながら、炎のレガリアから発生しているであろう豪炎の速度もまた異常だった。

「（死んだな、これは）」

名無しの少年がそう判断し、目を閉じる。
こうしているだけで、この退屈な生に終止符が打たれる。そう思うと、少しだが心が軽くなったように思えた。

「あり？」

が、その思いとは裏腹に来るであろう炎の熱や、体の焼けるような痛みなどは一向に来ない。
不審に思った少年が目を開いてみると、驚くべき光景がそこにはあった。

「ふぅ～……危ない危ない。シオン～？　これはさすがに死ぬレベルやで？」

なんと、銀髪男が魔力のシールドを張って、シオンの放った炎を防いでいるではないか。

「す、すみません……つい夢中になってしまいまして……」

申し訳なさそうに謝るシオン、それと同時に炎のレガリアから放たれた強大な炎は一瞬でその姿を消し、あたりは静寂に包まれた。

「オッサン、何のつもりだ？」

「何のつもりも何も、ワイらは別に君を殺しに来たわけやないからなぁ。最初に言うたやろ？　ただ保護して、協力してほしいて」

「……」

助けられた、そのことに感謝するつもりはないが、なんとなく居心地が悪い。

この銀髪頭は、名無しの少年の心を少しだが揺り動かす、そんな不思議なところがあった。

「さて、これで君はワイに命の借りでできたわけなんやけど……」

「借りを返す代わりに協力しろってか？……大人のくせにやり方がめんどくさいオッサンだな」

「あはは、言い方きついな君♪　でもまぁ、そういうことやな。」

どうやら、状況はさらに面倒なことになってきているらしい。

頼んだわけではないが、拾われた命である。義を通すというのなら、ここは大人しく彼らの言う手伝いをするのも一つの道である。

「安心しぃ。ちゃんと君にもメリットはあるさかい。」

「メリット？」

先ほど自分が口にした言葉だが、シオンとの戦闘の高揚感からか、そんな事すら完全に忘却の彼方だった。

「世界が面白く見えるように色々な事を教えたる。あと、君にもシオンみたいな相棒を作ったる。それでどうや？」

「……」

初めは、男の言っていることがよく分からなかった。後者のことならば理解できたのだが、『世界が面白く見えるように』このフレーズがやけに興味深く名無しの少年の心に響いた。

「そや、聞くん忘れてたな。君、名前は？」

「は？……名前……ないけど……」

先ほどの言葉の意味を理解しきれずにいた少年に矢継ぎ早に次の質問を吹っかけてくる自称科学者の銀髪頭。

少年が名前がないことを正直に話すと、男は『そうか、そんなら……』と言いながら唸りだして、数十秒後ハッと思いついたような表情でこう言ってきた。

「そんなら、今日から君の名前は『ソラ』や。どこまでも続いてる、このだだっ広い空。どうや？　なかなかにアホっぽい名前やろ？」

「……名前付けるのかバカにしてるのかどっちなんだ？」

「ははは！！！　どっちともや。そんならそういうわけで、君は今からソラや。ええな？」

「……」

何とも言えない、だがどこか心地いい響きだった。
名前など、以前の研究所でつけられたＢＲ－５５８という記号以来である。しかも、今度はずっと名前らしい名前である。

名無し、いや、ソラがどうしていいのか分からないといった様子でいると、彼の目の前に小さな手が差し出された。

「これからよろしくね、ソラ。」

その手は、青い髪の女の子、エステルのものだった。
かわいい顔に笑顔を浮かべながら手を出すその姿に、先ほどは興味がないような態度だったソラだが、若干頬を赤らめた。

そして、体が磁石で引っ張られるかのように、ソラの手はエステルの手をゆっくりと握った。

「えへへ／／／／……これでもう、一人ぼっちじゃないね」

対するエステルも顔を赤くしながらそう呟いた。恥ずかしいのはお互い様というわけだ。

「おやおや、ここからエステルの逆光源氏物語が幕を開けるわけやな……？まだ状況が呑み込めてない幼気な男の子を惑わす魔性の女……エステル、恐ろしいｋ……あべし！！！？」

銀髪頭の言葉は、またしてもエステルがどこからともなく取り出した国語辞典が彼の頭に直撃することによって途中で途切れてしまった。

だが、ソラは『一人ぼっちじゃない』という言葉に、少しだけ胸が熱くるのを感じたのだった……

Ｆｒａｇｍｅｎｔ２　どこまでも続く空（後書き）

Ｆ２０Ｃ「あれ？エステルって、もしかして初めて会った時から……」

エステル「わ～～～～～！！！！わ～～～～～！！！？？？」

Ｆ２０Ｃ「すみません、不謹慎でしたね」（頭に広辞苑がめり込んでいる）

エステル「そ、そうだよ！！！！大体、逆光源氏物語ってなに？？！明らかに悪意の塊が見え隠れしてるんだけど？？」

Ｆ２０Ｃ「え？そりゃあ、ソラのことを自分好みの男に育てて、その上で美味しくいただくという・・・・・・・」

エステル「そそそそそそ、そんな訳にゃいじゃにゃい！！！！」

Ｆ２０Ｃ「（あ、噛んだ……）」

次回、『Ｆｒａｇｍｅｎｔ３　Ｗｅｌｃｏｍｅ　ｔｏ　ｔｈｅ　ｎｅｗ　ｓｔａｇｅ』

Ｆｒａｇｍｅｎｔ３　Ｗｅｌｃｏｍｅ　ｔｏ　ｔｈｅ　ｎｅｗ　ｓｔａｇｅ（前）

ラノベが本棚を占拠していく……

どうも、衝動買いの絶えないＦ２０Ｃでございます。

どうもいけませんね、イラスト担当が好きな原画家さんだったり、パッと見の絵が綺麗だと、内容すっ飛ばしてレジに直行という癖が付きつつあります……

本日も二冊ほど買ってきてしまいました。
緋弾のアリア８（こぶいち先生の絵なら買うしかない）
精霊使いの剣舞（ブレイドダンス）まさに衝動買い。イラストの可愛さに負けました。

来月には
おれと一乃のゲーム同好会活動日誌３
黒のストライカ２
を買わねばならないというのに……

両作品ともイラストレーターの方が好きなので（ｒｙ

こんなダメ人間ですが、本日もお話をお楽しみください

Fragment3 Welcome to the new stage

「……なんだここ？」

「よう聞いてくれたなぁ……。そう、此処こそが……わいの城……」

「要するに研究所だね」

「あぁん……エステル、人のセリフ盗るやなんてひどい……」

ソラ、エステル、シオン、銀髪男の目の前に広がるのはどデカい建物。

とてもではないが、一介の科学者が数人の子供と住んでいるところには見えない。

「ま、これでも一応管理局お抱えの科学者かやらな、それなりの施設とお給料もろうとるさかいこれくらいで驚いとったらあかんで」

「管理局？」

「あ、そうか。ソラは時空旅行も始めてやったんやもんな、知ってるはずないか。えぇとなぁ……」

先生と呼ばれているその男は、どうやら管理局お抱えの科学者としてこれほど巨大な研究施設に腰を据えているらしい。

「そうやなぁ……簡単に言えば、世界のバランスを保つための組織

……かなぁ……？　まぁ、そういうことも追々教えたるから、まずはさっさと中に入ろうや」

「行こう？ソラ」

「あ、おい……」

管理局の簡単なイメージをソラに説明した先生は、そういって建物の入り口に向かって歩き出す。シオンがそれに続き、ソラもエステルに手を引かれて後を追った。

「あんたはここで何の研究をしてるんだ？」

「ん～？なんのって聞かれるとちょっと困るなぁ……。結構幅広うやっとるから、ヒトの進化の形やったり、デバイスの開発やったり、医療やったり……」

「節操のないことで……」

「はっはっは、よく言われるわ♪」

ソラの嫌味をのらりくらりと避けていく銀髪男。実際、気にもしていないのだろうが、ソラとしてはあまり面白くない。
相手ばかりが余裕を持っているということがどうしようもなく気に入らなかったのだ。

そして一行は研究施設の中の廊下をまっすぐ歩く。部屋の数はかな

りあるようで、ドアの数もそれに比例するかのようにずらりと並んでいる。
科学者の根城ということなので、ドアの向こう側は機械やら何かの研究材料のホルマリン漬けなのだろうかとソラは勝手な予想を立てていた。

「ここや」

と、そんな取り留めのないことを考えているうちに目的の部屋に到着したようだ。
ソラの目の前には重苦しいオーラを放っている研究所のドア……という感じは全くない一般家庭にあるような普通のドアが映っていた。

「りーく～？　今帰ったで～」

銀髪男は、留守番をしていたであろう『リク』というらしい少年の名前を呼びながら、ソアを開けた。

部屋の中はドラマや漫画で見るような研究者のオフィスといった感じだった。ただ一つ、違うところ上げるとするならば、部屋の広さだろう。
多機能パソコンデスクにソファ、テレビに大きめのテーブル、加えてキッチンや冷蔵庫まで。
日常生活をこの部屋だけで過ごすことが可能なくらいの物が、その部屋には据え置かれていた。

「お、おかえりなさい……」

と、ソラが部屋の中を見回していると、奥の方から小さな声が聞こ

えてくる。
見ると、白髪と緑色の瞳が特徴的な少年が見慣れない人物の訪問におどおどしながらも銀髪男にそう言ってきた。

「エステルとシオンも……お、おかえり……」

「うん。ただいま、リク」

「留守番の役目、ご苦労様でした」

シオンとエステルにも、少しどもってはいるがそう声をかけるリクという少年。
人格形成時の真っただ中にあるこの時期の子供には珍しくないことだが、彼は少し臆病で人見知りをしやすいタイプらしい。

その証拠に、エステルと手を繋いでいる（正確には引っ張られてきた）ソラを視界に認めると、途端にビクつき銀髪男の背に隠れてしまった。

「紹介するわ、わいらの仲間の一人で『リク』や。ちょっと人見知りするところあるけど、まぁ慣れるまでの問題やしな、仲良うしたってなぁ」

「よ、よろしくおねがい……します……」

銀髪男にそう言われ、リクがペコリとソラに頭を下げてくる。別に取って食おうというつもりもないのだが、ここまで怖がられると逆に傷ついてしまいそうになる。

「と、忘れとったな。わいの名前まだ名乗ってへんかったな」

「あ、そういえば。『銀髪頭』デフォになりそうだったよ」

「いくらわいでも、その呼び方は勘弁やな……。えぇ、おっほん！！」

ソラとの軽い掛け合いを越えて、銀髪頭もようやく名前を明らかにする。

「わいの名前は、『ヴァルター』。『ヴァルター＝クロンベルク』や」

この瞬間やっと、謎の銀髪科学者の名前が、そしてソラの生き方を変え、その指針となる人物の名前が明らかになった……

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「『イノベイト・チルドレン？？』」

「う～ん、その訳分からん、みたいな表情。何回見ても飽きひんわぁ～♪」

ソラの発した言葉に、ヴァルターは悦に浸ったような表情になる。どうやら、エステルやシオンも同じリアクションをしたらしい。

と、なぜいきなりこんな話になっているかというと、ソラ自身が尋ねたのである。自分は一体何なのか？　自分にできる人助けとは何

なのかということを。

その問いの答えとして、ヴァルターは『イノベイト・チルドレン』という単語を返してきたのである。

「真面目にやれ。でないとあんたの血流のベクトルを操作して全身の血を反時計回りにするぞ」

「すんません……」

ソラが睨みを利かせながらそう言うと、ヴァルターはあっさりと土下座してきた。

大物なのかそうでないのか、判断しにくい人物である。

「えぇとな、イノベイト・チルドレンいうのは、『人間の進化した一つの結果』やとわいは思うとる。」

「思うとるって……それは正式なものじゃないのか？」

「そこんとこは仕方ないんや。なんせ、今まで確認できたイノベイト・チルドレンは過去に数人しか居らんらしいからなぁ……。あんまり認知もされてないし、悪う言うたら人間の進化した形いう意見も疑問視されて、ただの化け物や言うアホが多いんや」

「なるほど、あんたの学説の一つが俺達ってわけだ。でもって、その学説はいまだに研究途中である、と……」

「ま、その通りやな」

一連のやり取りから分かったことは、自分の存在が今一要領を得な

い、それでいて謎な存在であるということだった。
まぁ、自分がなんなのかということは、分かれば儲け物、程度に考えていたので、大してショックでもない。

「まぁ、呼び名はあった方がいろいろと便利やし、とりあえず君らのことはイノベイト・チルドレンいうことで定義付させてもらうで？」

「好きにしてくれ。大した問題でもないし……」

ヴァルターの確認に、そう答えてソラはソファに横になる。

シオンはリクと一緒にどこかへ行ってしまい、エステルは今現在夕食の用意をしているようで、室内にはヴァルターとソラのみである。

エステルが家事万能ということは、どうやら本当だったらしい。

「で？あんたの言う俺たち、イノベイト・チルドレンってただ単に人間の進化した生き物ってだけなのか？」

「噛み砕いて言えばそうやけど、細かいとこで見ればそうやないな。ハッキリ言って、人間の進化にしては急過ぎるところもあるしな。体一つとっても全然造りがちゃうからなぁ」

言いながら、ヴァルターは立ち上がりホワイトボードに何かを書き始める。
ボード上には、簡単な人間のスケッチが二つ描かれる。どうやら、図で説明する気らしい。

「見てわかると思うけど、人間とイノベイト・チルドレン、パッと

見ただけやったら違いなんぞあらへん。目もあれば口もある、五感なんかも同じように備わっとる。でもな、共通点はそれだけや」

ヴァルターは人のスケッチに口や耳などを書き込んでいく。喋りながらも絵をかくその手が淀むことは全くない。

「君も分っとるやろうけど、イノベイト・チルドレンには大きな特徴がある。まず一つに、黒十字眼（ニグルムクロスアイ）やな。その眼は、あらゆる魔力を吸収して、自分らの力に変換できる。イノベイト・チルドレンの身体能力が異常に高いんは、多分やけど常時この眼が空気中の魔力素を体に取り込んどるからや」

「へぇ～……今まで特に意識もしてなかったけど、この眼ってそんな便利なもんだったのか……」

ソラはソファに寝転がったまま、その当たりにあった鏡で自分の目を除きながらそう呟く。

今まで生きてきて、自分の身体能力に特に疑問を持ったことはなかったものの、こうして理由付けを得ると妙に感心してしまえた。

「魔導師からしたら天敵っちゅうわけや。術式を編んで魔法撃っても全部吸収された挙句に向こうの力にされてまうんやからな」

「なるほど。要するに魔導師殺しの能力ってことか」

ソラが自分なりの結論を出したところで、話は次の段階に進む。

そして、イノベイト・チルドレンの二つ目の特徴には、さすがのソラも驚くことになるのだった。

「二つ目の特徴やけど、ある意味ではこれが一番特徴的やな。ある

特定の条件を満たせば、イノベイト・チルドレンは体内時計がある一定の時期に止まってしまうらしいわ。要するに、年を取らへん、寿命で死ぬことがなくなるいう事やな」

「……それって不老不死ってことか？」

ソラはソファから半身を起してヴァルターにそう問いかける。

話だけを聞けば、要するにある特定の条件とやらをクリアすれば、イノベイト・チルドレンは永遠の命を手にするということになる。不老不死、数多くの時の権力者や、死の恐怖から逃れようとした者たちが挙って求めたものが、自分自身の中に可能性として息づいているという事実に、ソラは少し悪寒すら覚えた。

「完全に不死っちゅうわけやない。首切られたら死ぬし、分子レベルとかで分解とかされたり、太陽に放り込まれたりしたら流石に死ぬやろ。まぁ、老衰も病気になることもないから普通に暮らしとったら不老不死ってことやな。よっぽどのことやない限り、撃たれても刺されてもすぐに傷は治ってまうし」

「なるほど、いろいろびっくり動物なんだな、イノベイト・チルドレンってのは……」

自分のことながら、若干引いてしまいそうになる。これではまるで……

そう、エステルたちのこともあるので口には出さないが、まさに『化け物』ではないか。

ソラは思わずそう思った。

「まぁ、その条件言うのはまた今度追々話すとしてや。後の能力はなんか分かるな？」

「……相手の思考を読み取る能力と、俺みたいにベクトルを自在に操る能力や、あの赤毛の炎を操る能力みたいに個々人に差が出る能力のことか？」

「大正解や♪」

ソラの回答にわざわざクラッカーを鳴らしてくるヴァルターに、若干イラッと来たが、相手にすると付け上がるのでスルーすることにする。

出会って一日だが、この男の扱い方が少しずつ理解できて来たソラだった。

「思考を読み取る能力については、もうかなりのとこまで解析は出来あがっとる。まぁ、詳しいことは理論が正しいことが実証されてから説明するとしてや。問題は後者やな」

クラッカーを片付け、ゴミ箱にポイしながらヴァルターはそう続ける。

どちら能力もとんでもないものだが、イノベイト・チルドレンごとに異なった能力が生まれるということには、ヴァルターも首を傾げるしかないようだ。

思考を読み取る能力の正体を突き止める一歩手前まで近づけた彼からすれば悔しいことだろう。

「はっきり言うて、イノベイト・チルドレン個々に発現する固有能

力については、わいでもお手上げなんや。なんで違いが生まれるんか、何が違いを生む要因になるんか、分からんことだらけやな」

「だが、赤毛の持っていた……炎のレガリア、だったか？　あれは完全にあいつの能力に合わせたワンオフ物だろう？　さっぱりわからん能力に、あそこまでピッタリなものがそうそう作れるもんなのか？」

ソラは再びソファに寝転がりながらそう呟く。
その辺にあった雑誌を取ってみたが、中身は知らない文字で書かれていたので元あった場所に返した。

「良い質問やな。レガリアいうんは、わいが考えたイノベイト・チルドレン専用のデバイスなんや。シオンの使うとる炎のレガリアは、完成型のセカンドシリーズいうて、あの形に収めることがイノチルの能力を最大限に発揮できるんや。」

「セカンドシリーズってことは……ファーストシリーズはどうしたんだよ？」

「もちろんあるで。でもな、ファーストシリーズは使おう思えば普通の人間でも扱えるもんなんや。まぁ、並みの魔導師には無理やろうけど……」

レガリアのことに関してはソラも興味があった。
シオンの強さは、レガリア無でもかなりの物だろう。だが、それでもレガリアを使っただけであれほどの戦闘力を持てるというのはある意味で異常なものだった。

「兎に角、ファーストシリーズも扱いにくいもんなんやけど、セカ

ンドシリーズはそれに輪をかけてピーキーな上に癖が強いデバイスでなぁ、イノチル以外には使えんように出来とる。まぁ、元から人間が使う積りで作ってないからなんやけど」

「……あのローラーブーツみたいなデバイスが……イノチル専用デバイス……ねぇ……。まぁ、性能を見てるから否定しようがないけど、いまいちピンとこないな」

「まぁ、イノチルからしたら扱いに慣れるのにそう苦労はせんやろう。ソラにもその内作ったるから、期待して待っといてぇな」

レガリアの説明を終え、ヴァルターはそう言いながらへらへら笑う。大抵のことに無関心なソラであったが、レガリアの存在は少しだけ眩しく見えた。

なんだかんだ言っても、彼もまだまだ子供ということだろう。

「イノチルの戦闘能力を数値化したもんがあるんや、戦闘（バトル）レベルいうんやけど、さっき測ったときのソラの数値は１２１。一般的な魔導師が８５やから、自分の戦闘能力の高さは把握できるな？」

「まぁ、大体は」

「レガリア有のシオンのバトルレベルは３１１。ソラはもともとの戦闘力が高いさかい、レガリア有でなら、もしかしたらイノチル最強になってまうかもしれんな」

数値に直してくれると、シオンの強さが異常であることが余計にハッキリとした。やはり、レガリアはとんでもない代物なのだ。

その事実に、自分はもしかするととんでもないことに首を突っ込ん

でいるのでは？と密かに思ってしまうソラだった。

「自分の力にびっくりって感じやな？」

「当たり前だろ……。わけもわかんない状態で能力使うのと、仕組みを理解して使うのじゃ訳が違うんだから」

ソラの表情から困惑の感情が窺えたのか、ヴァルターはそう言ってきた。

「そんな君にこの言葉を送るわ、『Welcome to the new stage』ってな。まぁ、新しいステージに到達したくらいに考えてればいいんやないか？」

「……そんな、もんかなぁ………」

微妙に納得できないソラだったが、その言葉で少しだが、胸のもやもやが和らいだ。そんな気がしたのだった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

一通りの説明を終え、エステルの入れてくれたお茶を飲み一服するソラとヴァルター。

お茶請けに水羊羹があるという純和風な風景が研究室で展開されていたが、美味しかったので、特に文句もないだろう。

「なぁ、人助けって俺は実際何をすればいいんだ？　ていうか、そもそも俺を連れてきたのって、それが主な目的なんだろう？」

お茶をずず…と飲みながらソラはヴァルターに今一度尋ねた。
イノチルの詳しいことを教えてもらいはしたが、肝心の人助けの内容をいまだに聞いていないのだ。
やる気はあっても、目的がはっきりとしなければ予想すらできない。

「あぁ、それな。それをこれから話そう思とったんや」

ヴァルターもそのつもりだったらしく、ソラの質問に乗っかってくる。
今の今まで忘れていたわけではないようなので、重要度は高いのだろうが、その人助けに自分の力が本当に役立つのか、ソラが気になっていたのはその部分だった。

「言っとくが、俺はベクトルを操ることくらいしかできない。時間のベクトルを逆向きにして過去にタイムスリップしてくれって言われても無理だからな？」

「はっはっは♪　自分、なかなかユーモアのセンスあるやんか。まぁ、そんな夢の詰まったお願いも面白そうやけど、頼みたいのはそういう感じのもんやない」

ソラの冗談に、笑いながら答えるヴァルター。
そして、一しきり笑った後、彼は表情を引き締め、真剣な顔で件の人助けの内容を端的に告げてきた。

「天才症候群（サヴァン・シンドローム）に苦しんどる子供たちを救うのに、手を貸して欲しいんや」

「天才症候群（サヴァン・シンドローム）？」

本日何度目だろうか。

ソラの？マークが頭の上で踊り始めた瞬間だった。

Ｆｒａｇｍｅｎｔ３　Ｗｅｌｃｏｍｅ　ｔｏ　ｔｈｅ　ｎｅｗ　ｓｔａｇｅ（後）

Ｆ２０Ｃ「ぬらりひょんの孫、アニメ二期おめ！！！！！！」

ソラ「今回の話と全く関係ない！！？」

Ｆ２０Ｃ「ふぅ・・・これで来年？もつららがテレビで見れるぜ……これで勝つる」

ソラ「ただ単にほっちゃんボイスが楽しみなだけだろうが！！」

Ｆ２０Ｃ「否定はしない！！だがつららのためだけに見るという事実は変わらん！！！」

ソラ「ダメだこの作者、早く何とかしないと……」

次回、『Ｆｒａｇｍｅｎｔ４　天才症候群』

Ｆｒａｇｍｅｎｔ４　天才症候群（前書き）

世間ではコミケ真っ最中ですね。行きたい……だが遠い……。

さて、今回はエステル回でもありますね。堀江由衣さんボイスで脳内再生してみてください。

今年ももう終わり・・・・・・早いですね……年末はガキ使見たり、奈々様のお姿を拝見したりと忙しいです。

ではでは、皆様よいお年を～♪

Ｆｒａｇｍｅｎｔ４　天才症候群

天才症候群

知的障害や自閉性障害のある者のうち、ごく特定の分野に限って、常人には及びもつかない能力を発揮する者の症状を指す。

サヴァン症候群の原因には諸説があり、特定には至っていないが、脳の器質因にその原因を求める論が有力である。

「というのが一般的な天才症候群の症例やな。」

「で、その天才症候群を、イノベイト・チルドレンを使ってどうしようって？」

一般的な天才症候群の定義、意味を聞きながら、ソラはヴァルターの後に付いて先ほどまでいた部屋を後にし、廊下を歩いていた。

「まぁ、慌てんなさんな。大事なことを伝えきってないんや。重要なんは、わいの治そうとしとる天才症候群は、全く別物いう事なんや。」

「別？」

「そうやなぁ……名前が同じだけで、症状が全く違う感じやな。適

切な病名が無いさかい、天才症候群の名前を借りてるだけなんや」

どうやら、ここでいう天才症候群とは、医学書を開けば載っているようなものではないらしい。

別物、つまりは同じ病気ですらないということだ。

「ここや」

「……？」

ヴァルターはそう言って立ち止まると、目の前のドアを開く。

部屋の中は、病室のような構図になっているが、ベッドの数がかなり多いのが目立った。

そして、そのベッド一つ一つに、子供が横たわり、苦しげな表情を浮かべながら眠っている。

「こいつらは……」

「皆、天才症候群に蝕まれとる……。このままやと、あと一年生きれるかどうかや」

「一年……」

ベッドで苦悶の表情を浮かべている子供たち。彼ら全員が、件の天才症候群を発症しているということらしい。

加えて、ヴァルターから聞かされた彼らの余命の短さに、ソラは唯々彼の口にした年数を反芻するしかできなかった。

「さっきの続きや。この子らが抱えとる天才症候群は、簡単に言えばイノベイト・チルドレンになり切れへんかったが故に発症する病気なんや」

「なり切れなかった……ってことは……」

「そや。この子らも、君らと同じ存在。いや、存在として確立する一歩手前の状態で覚醒し切れんかった。」

ヴァルターの表情からは、何を思っているのかを窺うことは出来なかった。

だが、少なくとも何の感傷も感じない、ということはないだろう。

ソラでさえ、少し心が揺れたのだから。

「具体的には……どうなるんだ?」

「イノベイト・チルドレンになり切れんかった。つまりは、特殊能力は備えとるけど肉体がそれに対応してないんや。イノチルの能力を持ちながら、体は人間のままいう事やな」

ソラの質問に、ヴァルターは言い淀むことなく答えていく。

「イノチルの能力は、それに対応するイノチルの肉体がないと意味あらへん。それ以上に、人間の肉体やと、逆に肉体を蝕んでまうんや。初期症状としては、黒十字眼が片目にしか発現しなくなる。次には激しい倦怠感、頭痛、体の麻痺。最終的には、侵食は精神部分にまで及んで自我が崩壊する。」

「……」

ソラは自分という存在が、如何に幸運なのかを思い知った。
もしかすると、自分もこの子供たちのようにただ静かに死を待つしかない状態になったかもしれないのだ。

「肉体的な死と、精神的な死。そのどちらもが同時に襲ってくるわけや。今までは治療法なんぞなかった。所謂、不治の病っちゅうやつやな。わいがこの子らの主治医にを勤め始めたときは、この倍くらいの子供らが居ったんや。……せやけど、なーんも出来んかった……」

主治医、まぁ、管理局からすればこの子供たちは貴重な実験材料だったのかもしれない。
だが、ヴァルターは決して研究というつもりで彼らと接してはいなかった。
ただ、まだ若い命を救ってやりたいという純粋な気持ちをソラは感じ取っていた。

「悔しい思いもあったんやけど、何よりも自分に腹が立ったわ……。いくら知識を持っとっても、技術があっても、こんな小さい子供らすら救えへん情けない自分になぁ……」

「……でも、今のあんたにはあるんだろ？　治すための方法が」

苦い顔で語るヴァルターに、ソラはそう言った。
そうだ、そもそも自分はその為にここに呼ばれた。子供を蝕む病を救う手だての一つの可能性として。

「……在る。いや、正確には在るという状態に持っていけるかもしれへん位のもんなんや。理論上では、上手く行く。」

「なるほど。俺たちの出番はその方法を確立させるための素材ってことか？」

「有体に言えば」

直接的な言い方をしてみると、意外にも彼はその言い方を肯定してきた。

だが、その表情は人間味を失った科学者のそれではなく。絶対に何とかする、という真摯なものだった。

「わいは今日まで何人もの子供らを看取ってきた。もう少し早くこの方法を確立させることができとったら、救えたかもしれん命を……」

それは後悔、そして子供たちの無念を一人で背負いこんできた男のありのままの言葉だった。

「ここにおる子らの全員が、天才症候群を理由に親から捨てられたり、社会から見捨てられた子らや。傍から見たら、わいのやっとる事なんぞ偽善に過ぎひん。けど……」

ヴァルターはそう言いながら、ソラに目をやりながら力強い声で話す。

「子供らは……『生きたい』言うとるんや……。偽善でも、その願いを叶えてやれるんやったら、わいはそれで満足なんや。せやから、改めてソラ、お前に頼みたい」

真剣な目と表情。能力など使わなくても、目の前の男が本気で事に当たるつもりであろうことは容易に理解できた。

「この子らを助けてやりたい。力、貸してくれ」

返事を返すのに、特に抵抗はなかった。

いや、寧ろ当たり前のような気持ちで返事を返す事が出来た。

今までは、ずっと何かを強制されてきた。生き方を、存在の使い方を、命の使い方を。

だが、今回は違う。これは命令ではない。そう、ただの……『お願い』だった。

「……俺専用のレガリアのことも……忘れんなよな……」

まぁ、素直じゃない返事になってしまいはしたが……

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「ふぅ……なんだかややこしいことに首突っ込んじゃったなぁ……」

夜、ソラは与えられた個室のベッドに寝転がり、天井に向かってそう呟いた。

別に面倒だとか、後悔しているということではない。ただ、今までの日常からはかなり違った方向へと進んでいることを実感し、零れた言葉だった。

「しかも、治療法ってのがこれまた……。ま、ある意味では一番理に適った方法なのかもな……」

言いながら、ソラは先ほどの会話の続きを思い出す。

◇◇◇◇◇

『天才症候群は、イノチルの能力に体が追い付いてないから、能力が体に過剰負荷物として悪さしとる。これを治そう思て、わいは今まで能力を打ち消すことでの治療を目指しとったんや』

『でも、無理だった』

『その通りや、恥ずかしながらな。能力の正体もわからんのに、それを打ち消せるはずあらへん。なら、どうすればいいんか考えた。』

そこでヴァルターはベッドで苦しんでいる子供たちの方に視線を向けながら続ける。

『打ち消すのがあかんのなら、受け入れるしかあらへん。』

『受け入れるって……能力をそのままにしてどうにかするってことか？』

『せや。要するに、体がイノチルの肉体にまで覚醒しきってないからあかんのや。なら、体もイノチルとして覚醒させてやれば、能力の過剰負荷を受け止められるはずなんや』

能力が体が受け止めきれないのなら、体を能力に合うようにしてやるしかない。
ヴァルターの考えた治療法とはつまるところそういうことだった。

『そこでや。ソラやエステル達、完全にイノチルとして覚醒しとる子らの生体因子や、体の筋組織、血液情報、ＤＮＡ情報、その他もいろいろあるんやけど……。兎に角、それらのデータを基に、この子らの体をイノチルとして相応しいもんに覚醒させる。』

『それは……随分と思い切ったと言うか、シンプルな方法というか……』

『シンプルやからこそ、今まで着目もせんかった。人間言うんは融通のきかん生き物でな、保有する知識や技術の量に比例して視野を狭めてしまうもんなんや。』

ヴァルターは少し自嘲気味に笑いながらそう言う。恐らく、自分がその良い例だ、とでも思っているのだろう。

『ま、そういうわけで。明日からちょっと人間ドックみたいなことになるけど、我慢してぇな』

『……バリウムだけは勘弁してくれ……』

『はっはっは♪　それは聞けん相談やな』

◇◇◇◇

「今までなら……あんな光景見ても特になんとも思わなかったはずなのにな……どうしちゃったんだか……」

ソラはなぜ今回の話をすんなりと受け入れたのか、今更ながらに自分の選択に驚いていた。

他人がどうなろうと、それは自分のことではない。

どこまで行っても、自己は自己、他人は他人。それがソラの生きる上での基本スタンスだったはずだ。

だが、ここに来てそれが揺らぎ始めて……いや、実際にはすでに崩壊しているのかもしれない。

兎に角、ソラは自分のことが分からなくなっていた。

夕食を食べて満腹になっているはずなのに、一向に眠気がやってこないのも、頭の中のもやもやが消えないからだろう。

と、そんな時……

コンコン……

「んあ？」

部屋のドアがノックされた。どうやら来客らしい。

とは言え、ドアの開けずとも誰かは分かったのだが。

「こ、こんばんは……／／／／」

「やっぱりお前か……」

別にそんなに遅い時間でもないし、やる事もないのでソラはドアを開けてその来客を招き入れた。

「ごめんね、疲れてるのに……」

「いいよ。ちょうど話相手が欲しかったところだ」

ソラは申し訳なさそうに、そしてなぜか頬を赤くしながら部屋に入ってきた青い髪の少女。エステルにそう言いながら、自分はベッドに腰掛け、彼女をソファに座らせた。

「で、なんか用なんじゃないのか？」

「え、あ、うん……。大したことじゃないかもしれないんだけど……」

エステルは言いにくそうに少しもじもじする。
そして、意を決してという表現がぴったり合うような表情で、ソラに言ってきた。

「そ、ソラ……何かに悩んでるんじゃないかなって！！」

「え？」

確かに悩みというか、もやもやが頭から離れずに悶々としてはいた。
それ故に、話し相手が欲しくもあった。

が、それをエステルに見破られてしまっていたことが意外だった。

「ごめん……ソラの考えてることが……伝わってきちゃって……

…。それで、気になって来ちゃったんだ……」

「……そういうことか……」

考えてみれば当たり前のことだ。イノベイト・チルドレンは思考を感じ取りやすい。
ソラの気持ちの淀みが、エステルに伝わっていたとしても不思議ではない。

「イノベイト・チルドレンはね、意識を共有出来るんだ……。人間の意識を読み取るよりもハッキリと内容が分かっちゃう。」

「んじゃ、あの赤毛と、おどおどしてたモヤシにも、俺の思考はダダ漏れってことか？」

赤毛＝シオン　おどおどしてたモヤシ＝リク　のことだろう。

「ううん……。二人とも、もう寝ちゃってるから。私だけだよ……。あ、それに見られたくない部分には入り込んだりは出来ないから、大丈夫だよ？　そういうのは覗かないのがマナーっていうか、暗黙の了解っていうか……」

「いや、別にいいけどさ……。それに、つまんないことで悩んでた俺が悪い。すまんな、余計な気を使わせた」

「ううん、気にしないでいいよ。私が好きで来ただけだから」

おかしな感じだ。
普段なら、こんなに話したりはしないし、ましてや女相手にこんな時間に部屋に入れたりは（子供にくせに生意気だが）しないのに。

エステルは、ソラが口を開くまで待ってくれた。
無理に聞き出そうとしない、こちらが自然と話したくなるような、そんな気分にしてくれる。聞き上手というのは、最初からこうなのだろうか。

「……ちょっと……分からなくなった」

「……何が？」

ソラが話し出すと、エステルは柔らかく相槌を打って、続きを促してくれる。
優しく背中を押してくれる感じだ。その感じが、妙に心地よかった。

「今まで、ただだらだら生きてきた。生まれて、売られて、実験動物にされて、それでも適当に生きて来た。誰かの意思に流されて、生きてきた」

「……」

「自分の意思で、誰かのためになる事を選択することなんか無かった。研究所をぶっ壊したのだって、傭兵団のリーダーをシメたのも、ゴロツキ共を叩きのめして有り金を巻き上げてたのも……ただの退屈しのぎだった。」

話し出すと、もう止まらない。
今まで、生きてきたことで感じたことをそのまま言葉にして口にしてしまう。
まるでダムの決壊だ。

「退屈しのぎでもしてないと……生きることをやめてしまいそうだった。あの赤毛と戦って、もしかしたら死ねるのかもしれないって思った時、ホッとしてた……」

死ねるかもしれない。退屈しのぎも、もう終わりかもしれない。そう思うと、あの時はホッとしていたのかもしれない。

「誰にも、認めてもらえなかった。生きてることを、生きることを、認めてもらえたことがなかった。認識さえしてもらえない命は……生きてるって言えるのか？」

「でも、それは昔のことだよ。今は違うんじゃないかな？　だからこそ、ソラは天才症候群の、先生の夢に協力してくれたんじゃないのかな？」

「それが分からないんだ……。もしかしたら、これもただの退屈しのぎなんじゃないかって……。それに、すべてが終わったら、俺は用済みになって、また認識されない命になるんじゃないかって……」

自分に対する疑心。ここにいるヴァルターやシオン達に対する疑心。認識もされず、裏切られ続けてきたソラにとって、この疑心という概念は簡単には消えなかった。

治療への協力も、退屈しのぎかもしれない。

また、裏切られるかもしれないという、二つの疑心。

彼の頭の中のもやもやの正体は、そういうものだった。

「私は、違うと思う。ソラは退屈しのぎなんかで、私たちに協力してくれたんじゃないと思う」

「……なんでだ？」

「だって、誰かのために何かしたいって、そう選んだんだよね？　だったら、それは確かにソラの気持ちだよ。自分で選んだ、ちゃんとしたソラの気持ち」

そう言いながら、エステルはソファから立ち上がり、ソラの方にやってくる。

「私もね、いろんな人間に裏切られて、居なくなりたかったんだ……。だから、ソラの疑う気持ちもよく分かる」

彼女もまた、イノベイト・チルドレン。ソラと同じように迫害にあっていたことは想像に難くない。

「怖いよね、不安だよね？　もう、嫌だもんね？　誰からも見向きもされないのは……」

エステルは、ベッドに俯きながら腰掛けていたソラの前にまでやってくると、包み込むように、優しく抱いてやる。

「でも、もう大丈夫。ソラは、此処にいるよ？　生きてて良いんだよ？　私たちが、ソラのこと見てあげるから。だから、ソラも私たちのこと見て欲しいな……」

「あ……」

エステルに頭か抱きかかえられるような状態でそう言われ、ソラは気が付いた。

自分が本当に欲しかったものが。

「（そうか……）」

レガリアなんて、本当はどうでもよかったのだ。

本当に欲しいものは、こんなにも簡単でシンプルで、温かいものだった。

「（俺はただ……『生きてていいよ』って……そう、誰かに言って欲しかっただけなんだ……）」

エステルの言葉に嘘偽りはない。

ソラはイノベイト・チルドレンで、嘘などは通用しないからだ。

彼にとって、言葉というのは、人間よりも大きな価値を持っている。

「（……不思議な女だな……）」

先程まで感じなかった眠気。

それがここに来て急激な勢いでやってくる。どうやら、彼女の言葉でもやもやは完全に吹き飛んだらしい。

このまま眠ってしまうのも悪くない。

ソラは生れてはじめて誰かに寄りかかって眠ってしまいそうになっていた。

だが、それでも今だからこそ言える言葉だけは伝えておきたかった。

『私たちのことも見て欲しい』という、彼女の言葉に返事をしなけ

ればならない。

「……エステル……ありがとう……」

感謝と受け入れるという気持ちを表した言葉。

ソラは、沈んでいく意識の中、それだけを何とか呟いた。

「初めて……名前で呼んでくれたね……ソラ……」

エステルは、ソラの黒い髪をした頭を撫でながら、嬉しそうにそう呟いた。

「やっぱり、あなたが……私の……ふみゅ……」

と、彼女も限界だったのか、ソラを抱えながらベッドに倒れ込んでしまう。

恐らく、彼女もまた眠気が急激に襲ってきたのだろう。

穏やかな表情を浮かべながら、ソラとエステルは眠りについた。

「良い夢見いや……二人とも……」

それから少しして、白衣姿の銀髪男がベッドで二人して眠りこけるソラとエステルに布団を被せてやり、小さく呟きながら部屋を後にした。

Ｆｒａｇｍｅｎｔ４　天才症候群（後書き）

Ｆ２０Ｃ「さっそくフラグビンビンじゃなイカ？」

ソラ「侵略されてるやつに言われたくないわ！！！」

Ｆ２０Ｃ「まったく、いつの間に毒牙にかけたのか……・恐ろしいやつでゲソ」

ソラ「毒牙も何もないっての。なんというか……」

Ｆ２０Ｃ「そういうはっきりしない態度だと、最終回Ａパート後半で刺されるでゲソ」

ソラ「それなんてスクイズ？？」

次回、Ｆｒａｇｍｅｎｔ５『風のレガリア』

Ｆｒａｇｍｅｎｔ５　風のレガリア（前書き）

時間は少し進んで四年後になります。

天才症候群の子供たちのその後と、ソラのレガリア造り、リクとの会話、ヴァルターと管理局の確執、そして彼自身の正体等々……

あれ？詰め込み過ぎ？

た、多分大丈夫。不自然にはなっていない……はず…

あ、そうそう。本日はちょっと哲学入ります。とは言っても、特別な知識は必要ないのでご安心を。（作者自身、今回参考にした哲学の知識はエロゲーから得た物なので……）

私が感銘を受けた哲学者の言葉を交えてお話を進めていく感じですね。

さてさて、では本編をどうぞ～

Ｆｒａｇｍｅｎｔ５　風のレガリア

『幸福に生きよ！』

ルートヴィヒ・ウィトゲンシュタイン　『草稿』１９１６年７月８日

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

４年の月日が経過した。
ソラとエステルは同い年であったようで、１０歳という二ケタ台の年齢を迎えることになった。

天才症候群の治療は、結論から言えば大成功だった。
ソラやエステル、シオンにリク達、完全なイノベイト・チルドレン、後に原型種（オリジナル）と呼称されることになる子供たちの生体データや、遺伝子情報などを利用することにより、覚醒しきれなかったイノベイト・チルドレン達、後に複製種（フェイカー）と呼ばれる子供たちは肉体を限りなくオリジナルのイノチルに近づける事が出来た。

覚醒しきれていない部分を、オリジナルのデータを基に構成された薬で刺激し、覚醒を促す。
そうすることにより、オリジナルとまではいかずとも、天才症候群の原因、イノチルとしての能力を受け入れさせるには十分過ぎるほどだった。

この治療によって、１５人の子供たちが命を繋ぎ止めた。

黒十字眼（ニグルムクロスアイ）が片目にしか発現しないという後遺症は残ったものの、日常生活には何ら支障を来すことはなかった。

「で？　これであんたの目標は一個達成されたわけか？」

「まぁ～、そうなるんかなぁ……。あんま実感ないからよう分からんのやけど……」

ソラとヴァルターは、天才症候群を克服した子供たちが、シオンやエステル、リク達と遊んでいるのを遠くから見ながらそんな話をしていた。

エステルとシオンが体を動かす系の運動を好む子供たちの相手をし、リクは本や絵などの割かし大人しめの遊びを好む子供達の相手をしている。

「どっちかっていうと、わいはソラとかに助けられた、っちゅう形な感じがしてなぁ。別段自分を褒めてやりたいとかは感じへんなぁ……」

「謙虚なのかバカなのか……あんたの場合はよく分からん……」

「うわ、ひどい言い様やなぁ……」

そう言いながらも、ヴァルターから本気で落ち込んでいるような感じはしない。

まぁ、この男が本気で落ち込んでいるところなど未だに見たことはないのだが。

「でも、あいつらにとって……これが本当に幸せに繋がる事だったのか……最近よく分からないことがある。親に捨てられ、社会から捨てられ……ここに運び込まれた。いっそ死んだほうがよかったと思ってるやつも、中に入るかもしれないし、これからの将来で思うやつがいるかもしれない。」

ソラが口にしたのは、そんな『もしかしたら』の話だった。

まぁ、現在のことだけを考えれば、6～8歳という子供たちがそこまで深い思考や、死の概念を理解したり出来るかと考えてみれば、馬鹿馬鹿しい話なのだが。

「まぁ、それはわいも考えた。確かに、わいの勝手な思いだけで命を救われて、迷惑しとる奴もおるかもしれんし、これからそう思うやつが出てくるかもしれへん」

「だったら……」

ソラの言いたい事は、彼も分かっていたことだったようで、そう返事をしていた。

言ってみれば、彼らを救ったのはヴァルターの一方通行な気持ちだったのかもしれない。

ソラの言うとおり、いつか生き延びたことを後悔する子供がいてもおかしくはないのだ。

「でもな、そのまま見殺しにするっちゅうのは『無責任』やと、わいは思うとる」

「無責任？」

「だってそやろ？　見殺しにするいう事は、死なすことや。　死ん

だ後の事なんぞ、誰にも分からん。『死』いうもんは、人間が体験できんもんやからな。そんな、人間の未体験ゾーンにホイホイ子供を放り投げるのは無責任ちゃうか？」

「死は……体験できないか……」

ヴァルターはそう話しながら、パック型のコーヒー牛乳にストローを指して飲み始める。

本人曰く、ビールなどでグイッとやりたいそうなのだが、子供が多いのでそうもいかないらしい。

「死は思うことにこそ意味がある。逆に言えば、語る事も出来んから頭の中で考えることしかできん。死の概念のフレーム部分の更に端っこをな。人間の限界は思考の限界や、つまり、人間が死を理解できる限界は、自分の頭で考える事が出来る範囲まで。」

「だからこそ、誰でも経験可能で、年さえ食ってれば語る事の出来る『生』を押し付けたってのか？　無責任かどうかは置いておいても、そこから生きていくのはあいつら自身だぜ？生きていれば、絶対に嫌なこともあれば不幸な目にも合う。それでも生きろってのか？」

ソラはそう言いながら、コーヒー牛乳をグビグビ飲んでいる男に横目をやる。

「嫌なこともあれば、不幸な目にも合う。でも、その反対も然りや。嬉しいこともあれば、幸せなこともある。世界は裏表で出来とる。何事も表裏一体や。……それにな、人間はどんなに不幸でも、ある一個の目標に向かって歩く事が出来る生き物なんやで？」

「目標？」

目標、ここで言うならば、生きるための指針とでもいうべきものなのだろうか。ソラはそんな風に考えながら、ヴァルターの言葉を待つ。

「簡単な事やで。要するに、『幸福に生きよ！』や。この世に神さんが居るんやとしたら、人間が唯一神さんから何かをもらっとると考えるんなら、それは多分、その一行の命令だけや。その命令が、思考できる生き物が持つ一番シンプルな目標なんや」

神様は一週間で世界を作ったとか、自分似せて人間を作ったなど、様々な思想がある。

だが、ヴァルターが信じているのは、ただの命令。

人が目指す、最もシンプルな目標である、幸せの追求。

「幸福に生きよ……ウィトゲンシュタインか……哲学者の」

「なんや、妙なこと知っとるんやな」

意外な知識にヴァルターは驚いたようで、ソラの方を見てくる。

まぁ、ソラ自身別に本を読んでこの言葉と哲学者の名を知ったわけではない。

「……この前やってたエロゲのメインテーマだった」

「お前……萌えゲー嫌いやろ？　いや、確実に」

「……仕方ないだろ！！！　お前の持ってるゲーム、全部が全部背中が痒くなるようなジャンルばっかなんだから！！！！」

ちなみに作者も同じ口である。
プレイし終わった後、本などを探して読んでみたりしたほどだった。

「まだまだ若いな、ソラ……、それを乗り越えてこそ、真のエロゲソムリエと呼ばれるように……」

「呼ばれたくないわ！！！！……で？　子供たちはその『目標』に向かって歩いていくだろうって、楽観視してるのか？」

話の論点がずれたので、ソラは話の方向性を元に戻す。
エロゲーの話になると、日が暮れてしまうかもしれないのだ。

「まさか。そう思えるような環境を、わいが提供する。無責任にならん為には、責任を自覚して行動する。これがわいのルールやからな」

「……そうかい。じゃあ、あんたが思うようにやればいいさ。俺はそれを見届けるだけだ」

言いながら、ソラはエステル達にいる方に歩いていく。後でちびっ子たちの相手をすると約束していたのを思い出したようだ。
だが、その彼をヴァルターが呼び止めた。

「ガキの癖に、言う事だけは一丁前やなぁ……」

「ほっとけ」

憎まれ口を叩きながらも、ソラは悪い気分ではないようでヴァルターの方を振り返りながら答える。

「夕方から、風のレガリアの調整の続き始めるから、後で研究室に来てぇな」

「へ～い、了～解」

ヴァルターの要件を確認し、ソラは今度こそちびっ子たちの方に向かって歩いて行った。

ヴァルターもまた、やりかけの仕事を片付けるべく、自分の研究室に戻ったのだった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「さてと……やる事はぎょうさんある事やし……」

研究室に戻ったヴァルターは、デスクの多機能ＰＣを立ち上げながら、コーヒーでも淹れようと湯を沸かそうとした。

Ｐｒｒｒｒｒｒｒ……

「ん？」

と、その時、部屋に備え付けられている通信用モニターからコール音が響いた。

どうやら、外部からの通信らしい。

「ここに通信してくる言うことは……局のお偉いさんやろうなぁ……。あぁ～あ、折角のコーヒーブレイクやのに……」

ぶつぶつ言いながら、ヴァルターは通信チャンネルを開く。
面倒という態度が表情に出ないように、真面目な顔を取り繕いながら。

『久しいな、ヴァルター＝クロンベルク』

「これはこれは、ネスター少将閣下。お久しぶりです」

画面の向こう側に映ったのは、鋭い眼をした４０代半ばの男性だった。
鋭い眼光と、細身だが柔な感じをうかがわせない肉体、如何にも組織の凄腕＆幹部クラスの人間という感じだ。

『ふん、貴様が閣下などと……世辞はいい。研究の首尾はどうなっている』

「これは失礼。天才症候群の治療研究は順調です。もはや治療法は確立できたと言えるレベルに……」

『そんなことはいい。私の聞きたいことはまた別のことだ』

と、時空管理局少将、ネスターは吐き捨てるようにそう言ってくる。
尊大な態度だが、権力を持った人間ならば誰しもがこうなる可能性を持っている。そう思えば、特にネスターの態度をどうこう思うことはなかった。

「……イノベイト・チルドレンと、レガリアに関しても、かなりの成果が得られました。感応能力の分析も先週に終わったので、そちらにデータを送ったはずですけど？」

『あぁ、見せてもらった。なかなかに素晴らしい能力を持っているようだな、レガリアの性能も申し分ない』

その報告を聞くと、ネスターは途端に満足そうな表情になる。
彼が望んでいた報告はこっちのことだったらしい。

『【ロールアウト】はいつになる？』

「……失礼ですけど、あの子らは兵器と違います。そういう言い方は控えてもらえませんか？」

流石のヴァルターも、ロールアウトという言い方には我慢ならなかった。
まるで、新兵器を出荷するような言い方を許してはおけなかった。

『何をいまさら……。そのために集めた哀れな子供だ。管理局の未来のため、存分に働いてもらわねば困る。化け物には化け物なりの使い道がある。その使い道を、我々のような広い視野を持つ人間が決める。君は黙って研究だけしていればいいのだ』

「っ……！！？　あの子らは化け物やない！！！　わいらと変わらん、普通の人間や！！！」

『ふん……兵器に情でも移ったか……。が、いくら貴様が吠えようと、あの化け物どもの使い道は変わらん。そして、貴様もまた我らの駒の一つであるということを自覚することだ……』

ネスターは冷たい視線を保ちながら、ヴァルターにそう告げてくる。
彼にとっては、いや管理局にとっては、イノベイト・チルドレン達

はただの兵器。

局にとって都合のいい兵器を作り出すために、天才症候群の治療法を確立させ、イノチルを増産、レガリアの開発を進めていただけに過ぎない。

ヴァルターもまた、命令に従ってその研究に従事していただけだ……そう、最初は確かにそうだった。だが今は……

「自分の生き方くらい、子供に決めさせてやってもいいやろ！！大人がやるべきことは、子供らが選択しやすい環境を作る事や！！！　大人の都合に巻き込むことやない！！」

『それは『普通の人間の子供』にのみ適用される。進化した人間、革新者。これほど便利なものを、普通に遊ばせておくなどもったいないことだ……。それに……だ……』

ネスターは一呼吸を置いてから、ヴァルターに冷たい視線を向けながら口を開く。

『貴様はその為に生み出された存在だということを思い出せ。そして弁えろ。お前はただの駒なのだ、無限の傲慢（アンリミテッド・アロガンス）。』

「っ……！！！」

無限の傲慢（アンリミテッド・アロガンス）。

それは、ヴァルターの本当の名前、いや、開発コードだったものだ。

『貴様には、無限の欲望（アンリミテッド・デザイア）のような野心はないかもしれん。だが、余計な感情が多い。その余計な感情の所為で、我が管理局の正義を汚

すような真似をしてみろ……貴様の存在、細胞の一片も残さず消し去ってくれる』

「……」

ヴァルターは何も言えない。

自分は所詮、作り出された命だ。その自分が、ソラたちに人生を説くなどなんと滑稽な事だろうか。

ネスターの言葉で、考えたくもないことを考えてしまった。

『ともかく、貴様は研究を続けろ。レガリア開発、イノベイト・チルドレンの能力解析が終了次第、彼らは我らが引き取る。その間、しっかりと管理局の教義、正義、戦闘方法などを叩き込んでおけ。私たちが求めるのは即戦力になる兵器なのだからな』

ブッ！！

そう吐き捨てて、ネスターは通信を切った。

残ったのは、通信ディスプレイの前で唇を噛みしめるヴァルターの姿だけだった。

「……クソッタレ……なんて情けない男なんや……わいは……」

ヴァルターに出来るのは、唯々そう呟くことだけだった。

「…………」

研究室の前で、ソラがその会話を聞いていることに彼は最後まで気が付くことはなかった…………

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

夕方、ソラとエステル、ヴァルターは三人で研究室の実験場に缶詰めになっていた。

無論、ソラのデバイスである、『風のレガリア』の調整である。

フレーム構築は終わっていたのだが、ソラの能力に合わせた機構開発や、微調整がかなり難航しているのだ。

デバイスとして使えることは使えるのだが…………

「この………野郎………が！！！！」

そんなソラの掛け声とともに、風のレガリアとソラの演算によって操作されたベクトルが、巨大な竜巻を発生させ、攻撃対象物として据え置いていた自由の女神像(レプリカ)を粉々吹き飛ばした。

が、しかし。

ビキビキ！！！

「あれま………またかいな………。どうしても、出力が７０％超えるあたりでレガリアがソラの能力に追い付かへんなぁ………」

そう、ソラのベクトル操作の能力に、レガリアが付いてこないのだ。７０％の出力が捻り出せれば、まぁ合格と言ってもいいのだが、戦闘に使うとなればそうもいかない。

１００％全開の使用の際の挙動や、パーツへの負荷係数、使用者へのリスクの有無など、中途半端に完成としても良いことなど何もないのだ。

「はぁ……はぁ……。確かに、こいつ無しで能力使うよりも楽だし、出来ることも多いけどさ……」

「やっぱ、１００％の性能出せんと、完成とはとても言えんよなぁ……」

羽のような装飾が特徴的な二つの後輪のウィールを有する、シオンの炎のレガリアと同タイプであるローラーシューズ型のデバイスを手に、演算頭痛に表情を歪ませながらヴァルターのところに帰ってくるソラ。

ヴァルターもまた、この問題に頭を悩ませているようだ。

「演算補助と走行機構とかには問題ないことやし……ここはパーツの素材を変えてみるしかないな。風のレガリアなんや、ガチガチの岩みたいなパーツ構成があかんのかもしれんし。」

「とすると、このあたりの材質でパーツを組んでみましょうか？このセッティングなら……」

ヴァルターの提案に、エステルがパーツの一覧をディスプレイに表

示し、パーツ選びを始める。
彼女や、子供たちの世話でここにはいないリクはメカ関係に強く、ヴァルターのレガリア開発の手伝いをよくしている。

「そうやな、この辺のパーツでもう一回組み直して……パーツ同士での相性重視でやってみよか。意外にこっちの方が良い数値が出るかもしれんし」

「はい、わかりました。ソラ、ちょっと待っててね？」

「あぁ。別に急いでもいないんだ、ゆっくり組んでくれればいいさ」

ソラは言いながら、ミネラルウォーターを口に含みながら椅子に腰掛ける。
能力を行使するのはいいのだが、連続で、且つ全開でベクトル操作を行うのだ。演算頭痛はかなりの物だろう。

その時、椅子に腰掛けたソラに、後ろから声がかけられた。

「お、お疲れ様……ソラ……」

「んあ？　なんだ、リクか。子供たちの相手は良いのか？」

「う、うん、今はシオンが見てくれてるし、ほとんどの子達は寝ちゃったからね……」

声の主はリクだった。知り合ってもう四年なのだが、未だにリクのオドオドした態度は拭え切れていない。
だが、最初の頃を考えると、これがノーマルの受け答えだと思うほかない。彼は彼なりに努力したのだから。

「レガリアの……調整、上手く行かないのかな？」

「そうみたいだな……。でも、最初のころよりもずっと良くなってるし、今月中には完成するだろうだとさ」

「そ、そっか……」

リクの性格を考慮してか、ソラは声に明るいオーラを含ませながら会話してやる。

声のトーンを落とそうものなら、リクはそれだけでビビってしまうのだ。イノチルながらに難儀な奴だとは思うが、別に嫌いではなかった。

「僕の……石のレガリアの時も……結構時間掛かったから……」

「へぇ、そうなのか……。やっぱ、細かい調整とかが難しいだろうなぁ……」

二人はそんな会話を続けながら、エステルとヴァルターの作業の終了を待っていた。

だが、パーツを組み直すのに時間がかかるようで、作業はかなり難航していた。

「……時間もあることだし、ちょうどいいか……」

「え？」

そんなソラの呟きに、リクは彼の方に視線を向ける。

だが、ソラはいつものように遠くを見るような視線でエステル達の作業を眺めている。

「リク、お前さ、他人が怖いんだろ」

「……」

が、声だけはしっかりとリクの方に向いている。
加えて、話の内容はリクのオドオドした性格に少し立ち入る部分を含んだものだった。

「イノチル同士は繋がってることだし、能力を使えばお前が他人を怖がる理由は分かる。でも、それはマナー違反だからしない。でも、大方推測位は出来る」

「……ソラは……何が言いたいの？」

リクは恐る恐るといった様子で訪ねてきた。
もしかすると、自分のオドオドした性格が鬱陶しくなって、それを指摘されるのではないかと少し震えながら。

「別に、お前がオドオドしてるからって俺はお前を鬱陶しく思ったりはしねぇよ……」

「あ、う……」

そんなネガティブな思考は、やはりソラの前では筒抜けなわけだ。

「お前も俺も、子供たちも、人間とは違う力を持ってる。それこそ、人なんて一瞬で殺せるような代物だ。お前は、自分の力で他人を傷

つけるのが怖いんだろ？　だからこそ、他人が近寄る事すら怖くなる」

「……」

沈黙は肯定なり。

今のリクは、その言葉を体現していた。

「なら、お前は能力なんぞこの先使わなくていい。別に力を持ってるからって、それを使わないとダメなわけじゃない。」

「え……？」

「だからとは言わんが……もう少し、他人に関わってみろ。自分の殻だけに閉じこもってても、息苦しいだけだ」

それは、ここに来てリクと関わってきて、ソラが彼に感じていた感想でもあった。

リクは、今にも窒息してしまいそうな、そんな感じがしたのだ。

「で、でも、僕たちの力を狙って、もしかしたら危険だと思って殺しに来る人間だっているんだよ？　そうなったら、戦うしか……」

「お前には無理だろうな……お前は優しすぎる」

そんなリクのもしもの話に、ソラはハッキリと答えてやる。

そもそも、リクという少年は元来戦いになど向いていないのだ。自分の力を恐れて、性根が優しすぎるが故に。

「その……なんだ……。お前やエステル、ガキども位なら俺が守

ってやるさ。お前は無理して戦おうとしなくてもいい。」

「え？　え？」

「お前はお前で、俺に出来ないことをやればいい。俺は俺で、お前の出来ないことをやるだけだ。」

ソラが言いたかったのは、詰まる所そういうことだった。
それだけ言うと、ソラは立ち上がってエステルたちのいる方に歩いて行ってしまった。

「……」

言葉の意味を消化するのに、リクは少しだけ時間がかかった。
今まで、そんな優しいことを言ってくれたのはヴァルター以外に居なかったのだ。
ソラの言葉は、彼に新しい分岐を与えるには十分だった。

「はは……そうだね……僕は……僕に出来ることを、やりたいことをやればいいんだよね……。ありがとう、ソラ……」

そう呟くリクの表情は、いつものオドオドしたものとは違い、リラックスした自然な表情になっていた。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「ふぅ……なんとか、風のレガリアの完成の糸口が見えた感じやな……」

ソラたちとのレガリア調整を終え、自室に戻ったヴァルター。気が付けば、時刻は１１時を回っていたので、ソラ達を先に休ませて、レガリアの微調整の続きをしようと考えていたのだ。

今日の成果は大きく。レガリア完成まで、もう一歩である。仕事の完成が近づくと、テンションが上がってしまう。これも科学者としての性なのかと思うと、少し笑えてしまう。

「……」

が、通信機の方に視線をやって、昼間のネスター少将とのやり取りを思い出すと、そんな楽しい感情も一瞬で冷えついてしまう。

そして、ヴァルターは考えに耽りながら、デスクのディスプレイに一つの設計図を映し出す。

その設計図は、風のレガリアの物ではない。だが、基本コンセプトは踏襲しているようで、ローラーシューズの形をしている。

「もしかすると……あんまり時間はないんかもしれんな……」

謎のデバイスの設計図を見ながら、ヴァルターは呟く。

彼の脳裏では、どのような未来が予想されているのか、それは誰にも分からない。

「このレガリアが、革新の更にもう一歩先にソラを連れて行けるか……。わいの考えが正しいなら、『器』になれるんはあいつなんや……」

ヴァルターは椅子に深く腰掛けて天井を見る。

その眼は、ソラと同じくずっと遠くを見据えていた。

「『風は響いて、空に舞う』……結局は、あの二人次第……やな……」

彼はそう呟くと、その設計図をディスプレイから消し、本来の仕事に戻るのだった……

Ｆｒａｇｍｅｎｔ５　風のレガリア（後書き）

ソラ「最後の・・・・・・・・・何のフラグ？」

Ｆ２０Ｃ「秘密。言っちゃあ面白くないでしょ。」

ソラ「ていうか、先生とネスター少将とかいうオッサンとの会話を盗みぎぎって……俺ってどこの家政婦？」

Ｆ２０Ｃ「そういうのは、市〇悦子さんに任せとけばいいんだよ。さてさて、過去話も後半戦に突入しました。あと、２，３話で終わるといいなぁ……」

ソラ「願望かよｗｗ」

Ｆ２０Ｃ「予定は未定ってね。・・・・・・・・・・・ていうかさ……マジでメインヒロインどうしよう……」

ソラ「ティアかエステルかって話か？　ていうか、作者は絶対どっちか片方じゃないとダメなの？」

Ｆ２０Ｃ「う～ん……両方美味しくいただく展開はありっちゃありなんだけど、スクールデイズ思い出しそうになるからＮＧかな。」

ソラ「刺される役目は確かに御免だしな……」

Ｆ２０Ｃ「そういうことです。近々ヒロインアンケートを取るかもしれないので、その際には読者の皆々様、ご協力をお願いします」

ソラ「過去話終わってから登場予定の、オリキャラ幼女のアイデアも募集しているので、そちらの方もどうぞよろしくお願いします」

次回、Ｆｒａｇｍｅｎｔ６『終わりの始まり』

Ｆｒａｇｍｅｎｔ６　終わりの始まり（前書き）

今回、まさかのあの人が登場。しかも、アニメでは考えられないような行動を……

加えて、ソラとシオンの複合技とか、腐りきった管理局の一幕とか、ラボへの襲撃とか……過去篇もいよいよクライマックスです。
現代編に戻ったら、以前募集したオリジナルキャラを出したいと思います。

ではでは、波乱のＦｒａｇｍｅｎｔ６をお楽しみください。

Ｆｒａｇｍｅｎｔ６　終わりの始まり

「このショートケーキは頂いたぁぁぁぁぁ！！！！」

「させるわけないでしょう！！　このケーキは私の栄養価になる事を望んでいるのよ！！！！」

「はっ！！　エステルと違って、栄養が行って欲しいところに蓄えられないからって、バクバク食ってると太るよ、リーア！！！」

「誰がガッカリおっぱいですってぇぇぇぇ！！！！？？　待ちなさい、レイス！！！！」

平和な？冬の昼下がり。
研究所の中ではそんな賑やか声と、爆撃機の攻撃のような轟音が響く。

本日の爆撃は、青い髪の少年と茶髪の癖っ毛が印象的な少女のショートケーキを巡る戦いだ。

「ふ、二人ともぉ～……仲良くしようよぉ……」

「む……」

ショートケーキを巡ってイノチルの能力を使ってバトルを始め、かなりエキサイトしている二人に、かなりビビりながらも勇気を振り絞ってリクが仲裁を試みるのだが、如何せん効果がない。
彼の隣のスキンヘッドが特徴的な少年、ネルも感情が読み取りずらい表情だが、その口から零れた声は呆れたような雰囲気を醸し出し

ていた。

「あんたって奴はぁぁぁぁぁ！！！！　レディーに向かって胸の話をするんじゃないわよ！！！」

「なんと言っても、お前の胸がまな板だってことは変わんないぞ～！！？」

「死なすぅぅぅ！！！！！」

ヒートアップしていくレイスとリーアの喧嘩は、通常の子供のそれとは次元が違う。

時より爆発音が聞こえるが、突っ込んだら負けだろう。

「こんな時に、ソラとエステルは何やってるのさぁ～……シオンと先生もどっか行っちゃうし……」

と、先ほどから姿の見えない三人に助けを求めたいリクがあたりを見渡すと、彼らの姿はあった。

どこから引っ張って来たのか、立派なコタツで暖を取っている姿を。

ずず……

「「はふぅ……お茶うめぇ～……」」

「このお団子もおいしいね～……ふにゅう……」

ソラはヴァルターと声を合わせてそう呟き、エステルはお団子を食べて蕩けそうな顔になっていた。

「なんかめちゃくちゃくつろいでる！！？　目の前で起こってる戦争みたいな喧嘩にもノーリアクションだよこの三人！！」

リクは生れてはじめて大声で突っ込んでしまった。
最近段々と明るくはなって来たのだが、ここまでハッキリと感情を表に出せるようになったのは大きな前進と言えるだろう。

風のレガリアが完成して二年。
ソラとエステルは１２歳。シオンは１３歳、リクは１１歳になっていた。
ちなみに、今まさに命懸けの喧嘩を繰り広げているレイスとリーア、無口なネルは揃って１２歳でソラ達と同い年だ。

「おやおや、今日も賑やかな風景ですね」

「そんなこと言ってないで、あの二人を何とかしてよシオン……
他の子供たちの教育的にも問題があるような気がするんだ……」

と、給仕室からお茶請けのお菓子を持ってきたらしいシオンが、のんびりとした様子で部屋の光景を『賑やか』と形容した。
実際はそんな生易しいものではないのだが。

さて、先ほどリクの口から子供達という単語が出たが、言うまでもなく天才症候群の患者だった子供のことである。
レイス、リーア、ネル達もその内の三人であり、ここで命を拾った組というわけだ。
子供たちは赤ん坊の時点でここに連れてこられたケースも多く、必然的に年齢が一桁の子供が多くなってしまったというわけだ。

「はい、ソラ。お団子食べる？」

「むぁ～……はむ……」

そんな現状の説明の中、ソラはエステルが差し出した三色団子をコタツでホッコリしながら口に入れる。
まるでエステルがソラに餌付けをしているような風景である。

「なんやソラ？　えらい今日は素直やんか？」

「いや、くれるってんだから、貰わないと損だろう。」

「ほぉ、エステルの食べかけを貰わない手はないと？」

「ぬっ殺すぞ」

「怖っ！！？」

ヴァルターが出しゃばって来たので、すかさずソラが睨みを利かせる。まぁ、これが普段からの二人のコミュニケーションの取り方なので、別段問題視することも無いが。

「くらいなさいレイス……そして人生に終止符を打つがいいわ！！！！！」

と、まだ喧嘩を続けていたらしいこの二人。
リーアが能力を使って、空気中の水分を一瞬で凝結させ、大きな氷の塊を作り出す。

そしてそれを、逃げ回っているレイスに向けてブン投げた。

ビュン！！！

「あぶなっ！！！？」

が、レイスも伊達にイノベイト・チルドレンを語っているだけあって、紙一重でその氷の塊を回避する。

がしかし、彼が避けたことで氷の塊はぶつかる標的を失い、直進することになるわけで……

ゴツン！！！

「あべしっ！！？？」

物の見事に、ヴァルターに命中し、彼の意識を刈り取ることに成功した。

「あー……」

「今、かなり良い音したなぁ……」

ヴァルターが氷の塊を食らって綺麗に吹っ飛ぶところをしっかりと目撃していたエステルとソラは、そう言いながらヴァルターの安否を確認してみる。

「おーい、生きてるかー？」

「……返事がない、ただの屍のようだ（裏声）」

「ザオリク！！！！！」

「ぐほぉぉ！！！！？？？」

ヴァルターがふざけた答えを返してきたので、ソラは復活の呪文を唱えながらも死のエルボークラッシュを叩き込み、彼にとどめを刺した。

「何すんねん自分！！？　復活の呪文唱えながらザキかける奴なんぞ初めて見たわ！！！！！」

「大丈夫だって、お前はデスピサロだから、ザキ系効かないから。」

「いつの間にかボスキャラ！！？　ていうか、ワイにはあんなぎょうさん手は生えとらんわ！！！！」

ドラクエをご存じない方、申し訳ない。

昔々、クリフトというザキ系呪文を使える神官キャラがいて、ザキ系が絶対に聞かない相手にも学習することなくザキを放ち、ＭＰを無駄に消費するという……いや、やっぱりなんでもない。

「あ～……先生ごめ～ん！生きてる～？」

「お陰様でな！！！　危うく人生という名のゴールテープ切るとこやったわ！！！」

今頃気が付いたのか、氷の塊を作って投げた真犯人・リーアが謝ってきた。彼女の手には、？まえたうえでボコボコにされたのだろう、ズタボロになったレイスの姿があった。

「はぁ……何にしても……平和だねぇ～……」

「そうだねぇ～……」

ヴァルターとのお約束になりつつ漫才を終えたソラは、再びコタツに入ってエステルと和やかなやり取りをする。

向こうでは、リーアとレイスがヴァルターに説教されている。まぁ、あの二人の喧嘩も、ヴァルターが仲裁に入りながら説教する光景も、最早日常的な物になっているのだが。

「先生も思うだろ!!?　やっぱ無い乳よりもおっぱいデカい方が良いよなぁ!!?」

「いやいや、無い乳には無い乳の、デカいのにはデカいなりのメリットとデメリットがあってやな……」

「先生?もう一発お見舞いしてあげようか?」

なんとなく、説教の論点がズレているような気もするが、これも平和的な、研究所の光景であり、ソラたちの日常を象徴するモノだったのだ。

「止めなくていいの?　あのままだと、また爆発しちゃうよ?」

「やらせとけばいいんだよ……子供は喧嘩して、怒られて、そうやって成長していくもんなの。あと、俺はレイスの意見に一票だ。無いよりあった方がずっと有意義だし、汎用性の点から考えても大きい方が有益だ。」

「……ソラの変態……」

「変態じゃない。変態紳士だ」

どう違うのかと、激しく突っ込みたくなったエステルだった。

こんな、いつも通りの日常。

平和な日々。

素晴らしい日々。

これがいつまでも続くものだと、この時は誰もが疑いもしていなかった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

Ｐｒｒｒｒｒｒｒ……

物事の始まり、そして終わりというモノは常に突然やってくる。

ソラ達で言えば、この通信の入った瞬間が、まさにターニングポイントだった。

「ん？なんや……？」

局からの連絡かと思ったのだが、どうもそうではないようだ。発信者の名前がディスプレイの端に記載されるはずのなのだが、そこは空白のままであり、この通信の発信者の名前が分からないのだ。

「……はい、ヴァルター＝クロンベルクですけど？」

ヴァルターは少し離れたところで騒いでいる子供達に視線をやってから、ゆっくりと通信に応答した。

すると、通信チャンネルがオープンの状態になり、発信者の顔と声がハッキリした。

『久しぶりだね、無限の傲慢（アンリミテッド・アロガンス）。いや、ヴァルターと呼ぶべきかな？』

「ジェイル……ジェイル・スカリエッティ……。はは、えらい懐かしい顔やなぁ……」

通信の相手は、あの無限の欲望（アンリミテッド・デザイア）、ジェイル・スカリエッティその人だった。

後に、時空管理局相手に戦闘機人達などと共に喧嘩を売った相手でもある。

そして、ヴァルターからしてみると、同じ境遇の存在。言うなれば、『同類』というやつだ。

数年の間だけだったが、ヴァルターはスカリエッティと共に研究に打ち込んでいたのだ。

『君は相変わらず能天気そうな顔をしているね』

「お前こそ、相も変わらずマッドサイエンティストの鑑みたいな顔しとるなぁ……」

2人は画面越しではあるが十数年ぶりの再会をそんな言葉で飾った。
同じ管理局で生み出された存在という事もあってか、はたまた科学者同士の一種のシンパシーなのか、ヴァルターとジェイルは非常に馬が合った。

まぁ、スカリエッティのある種、バカげた研究に付いて行ける存在がヴァルターだけだったという見方もあるのだが、それは大した問題ではないだろう。

『そこにいるのが、件のイノベイト・チルドレンという子供かい？』

「ん……？　って、ソラ……居ったんかいな……」

「悪いのかよ？」

ジェイルに言われるまで、傍に来ていたソラの存在に気が付かなかったヴァルターは少し驚いた様子でそう言った。
ソラはムッと彼の方に視線をやるが、すぐにディスプレイの向こうにいるスカリエッティに視線を変えた。

「あんたは？」

『私はジェイル・スカリエッティ。ヴァルターと同じ管理局お抱えの科学者だ。彼とは同期でね。合同で研究を進めていた時期もある』

「なるほど、同じ穴のムジナってやつか」

ジェイルの自己紹介に辛口気味のコメントしてみるも、ジェイルは余裕を持った表情を崩すことはなかった。

『なかなかに面白い子供だ……ふむ、実に興味深い……』

「あんまり嬉しくない褒め言葉だな……実験台にはならんぞ？」

『そんなことはしないさ。それに、君たちの研究はヴァルターの管轄だからね。私が介入することは出来ないのさ』

ジェイルはジェイルで、やるべき仕事、研究があるのだろう。科学者というのは我が強いというイメージがあるが、この二人の場合はやるべき役割を果たしているという印象の方が強かった。

「で？なんなんや、いきなり連絡なんぞ寄越して来よって……なんかあったんか？」

ソラとジェイルの会話が一通り終わったのを確認すると、ヴァルターがジェイルの用件を尋ねる。久しぶりの連絡とは言え、彼が何の意味もなく通信を回してくるなどとは考えられなかった。

『あぁ、そうだったね……。ヴァルター、君の研究、確かネスター少将の管轄だったね？』

「っ！？　……」

その言葉にヴァルターはソラの方を見る。彼らを兵器として、管理局の都合のいい武器として扱うようにするのが、ネスターから与えられた研究である。

その事実をソラが知ってしまえば、彼がどんな顔をするのかが怖かったのだろう。

しかし

「知ってるよ……。前にあんたが連絡してたのを聞いた」

「……そうか……」

だが、ソラは特に追及などをしなかった。
前回のネスターとの連絡の際、彼の横暴な発言にヴァルターが真剣になって反論してまで、イノベイト・チルドレンを擁護したことを知っているからだ。

『続けさせてもらうよ？　そのネスター少将なんだが……今君たちのラボに向かっている』

「何?!　あのおっさんがか?!」

ジェイルからの情報に驚くヴァルター。ネスターがここに来るなど、まさに寝耳に水だったのだ。

『その様子だと、やはり何も知らされてはいないようだね……。』

「どういうことや!!?　お前、何を知っとるんや!!」

何か悪いことが起きる。ヴァルターは自分の中の警鐘が喧しくなるのを感じていた。
その所為かいつもよりも声が荒いものになってしまう。

『イノベイト・チルドレンを局の兵器として利用しようという計画が、実行に移されることになったようでね。ネスターがそこにいる子供たちを接収するべく部隊を動かしているようなのだよ』

「接収って……しかも部隊を動かすやて?!　戦争でもするつもりなんかあのおっさんは!!」

接収ということは、権力機関が個人の持ち物を強制的に取り上げるという事。

ここでは、イノチル達はヴァルターの研究対象として、彼に管理を任されていただけだが、表現としては間違っていないだろう。要するに、『奪い』に来るという一点を見るのならば。

『上層部は、最早君の考えなど聞く気はないらしい。イノベイト・チルドレンは兵器として死亡率が高い任務に送られる。悪い例えなら神風特攻隊のような使い方というわけだ』

「そ、そんな勝手なことが……。」

『加えて、君の研究の一つ。特殊デバイス……『レガリアシリーズ』だったかな?　連中はその技術も奪うつもりのようだ。邪魔者の君を消すついでに……』

知らない間に動いていた上層部。

イノチルの引き渡しを頑として受け入れなかったヴァルターは、局から用済みの烙印を押されると共に、邪魔者として認識されてしまったらしい。

「おいおい……てことは……もうすぐここは……」

『戦場になるね。局の目的は君たちだ。兵器として確保できればよし、反抗するなら不穏分子として排除するつもりらしい。過ぎた力は争いの元になる、よって処分する。これが管理局上層部の出した

結論だ』

「……腐ってやがる……」

ソラは管理局という存在の汚らわしさを、今になって思い知った。組織という単位には付き物の話ではあるが、ここまで腐りきっているとは思いもしなかったのだ。

『悪いことは言わない。今すぐ逃げたまえ。いくらイノベイト・チルドレン達といえども、まだ戦闘能力のない子たちが多いと聞く。彼らを庇いながらでは、ソラ……今の君では厳しいだろう』

「ジェイル……お前……」

まさか、スカリエッティという科学者が組織を裏切るような真似をして、自分たちを逃がしてくれるなどと思ってもみなかったヴァルターは驚いた顔になる。

例えそれが、ただの情報だったとしてもだ。

「お前……こんな局を裏切るようなことしたら……」

『なに……同族の好というやつさ。それに、他人の研究成果を何の努力もしていない人間が好きにするという行為は、私の精神衛生上大変よろしくないのでね。加えて言っておけば、私は近く局を裏切るつもりなのでね。今更局がどうなろうと知ったことではないのだよ』

ジェイルは確かに人としては破綻している。そう、純粋に自分の欲望のために行動している。

だが、科学者としての彼は間違いなく超一流なのだ。故に、ヴァル

ターはスカリエッティを評価していたのだから。

『脱出するなら急ぎたまえ。あと数分で隊が到着するだろう。私が出来るのはここまでだ……』

「いや……十分や……。おおきに……」

ヴァルターがそうジェイルに礼を言うと、彼は余裕の表情のまま口を開いた。

『ふっ……久しいな、君から礼を言われるのは……。では、さらばだヴァルター、もう二度と会うことも無いだろう』

「あぁ。ほなな……」

ブッ！

そうして、通信は切られた。

「……ソラ！！　時間がない、みんなを連れて、急いでここから脱出や！！！」

「言われなくても……！！！」

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

そこからの二人の行動は素早かった。子供達を集め、事情を簡単に説明し必要なものだけを用意し、非常口の方から逃げる。

ジェイルの情報が無ければ、ここまで素早い対応は出来なかっただろう。
何も出来ずに、ネスター率いる部隊にイノチル達を奪われるという最悪の展開になっていたであろうことは想像に難くない。

子供たちには動揺もみられたが、エステルやリク、シオン、レイス、リーア、ネル達、年長組がうまく誘導したことにより準備は速やかに終える事が出来た。

そして、一行の脱出準備が出来てすぐに……

ドォォォォン！！！！

耳を劈くような轟音と共に、ラボが大きく揺れた。どうやら、大規模な砲撃魔法でも食らったらしい。

「ほな、みんなに逃げるで！！！　ソラにシオン、レイスにリーア、ネル。戦闘になれば、ワイとお前らだけが頼りなんや、よろしく頼むで」

「あぁ」

「任せてください」

「ぶっ飛ばせばいいんでしょ？」

「氷漬けでもいいんじゃない？」

「む……」

ヴァルターの確認に各々は返事をし、大脱出が開始された。

「はっはっ……はぁ……」

「エステル、大丈夫か？」

「う、うん……ごめん……流石に小さな子でも負んぶしながら走るのって大変で……」

ソラは子供の内、まだ満足に歩けない子を負んぶして走っているエステルを心配して声をかける。

「でも……なんでこんな事に……」

「……」

事実を知るソラとしては、彼女の疑問に答えるのは簡単だった。しかし、それを勝手に話すのはソラのルールに反していた。ヴァルター自身の口から聞かされなければ何の意味もないのだから。

「そんな事より、今は走れ。……心配しなくっても、いざって時は助けてやるさ。これから先ずっとな」

「ふぇ!!?　こ、これから先ずっと!!!??　それって、その……つまり……私の……ゴニョゴニョ……」

無論、ソラにそっち方面のつもりがあって言ったわけではない。ただ単に、安心させてやるために言った言葉である。
だが、エステルからすれば、それはプロポーズにも似たレベルのセリフだったわけで……

「そ、ソラ……私……子供は二人が良いなぁって……」

「???　何の話をしとるんだお前は？」

「あ、う、ううん??!!　やっぱりまだ早いよねこういう話は！！！　あははは！！！」

「????　女という生き物はよく分からん……」

飛躍しすぎたエステルの妄想は瞬時に彼女の心の中に仕舞い込まれ、キーロックがかけられた。
というか、脱出中なのだから、ナチュラルにイチャつくのは勘弁願いたい。

そう、エステルとソラの背中に負ぶさっている子供たちは心の中で苦笑いした。

「ハァハァ……もうすぐや、そこの通路を左に行けば……」

しばらく走ると、無骨な通路の向こう側に光が見えてきた。どうやら、あそこが非常出口らしい。
今現在も、砲撃魔法による攻撃は続いているようだが、この分なら逃げ来るのは余裕だろう。

しかし……

「うわっ！！？」

と、自分の足で走っていた子供のイノチルが転んでしまった。

「大丈夫？　ほら、僕の手に捕まって」

「あ、ありがとう……リク兄ちゃん……」

すかさずリクがその子を助け起こす。彼も一人子供を背負っていたのだが、ここで放っておくわけにもいかなかった。

「大丈夫か、リク？　しんどそうならわいが……」

「大丈夫ですって。先生も二人抱えてるんですから。さ、ソラたちが先に行っちゃいます。僕らも急いで……」

ドォォォォン！！！！

と、リク達と彼を心配して駆け寄ってきたヴァルターが再び走り出そうとした時だった。一際大きな砲撃により、ラボがかなり揺れた。そして……

ガラガラガラガラ……！！！！！

「お、おい！！！？」

ソラがそれに気が付いた時には遅かった。

先程の攻撃で建物の中枢がやられたのだろう。皆が走っていた通路の天井が崩れたのだ。

崩れた瓦礫は、先行していたソラ達と、少し遅れたヴァルターとリク達を完全に分断させてしまった。

「お～い、リク！！！　無事か！！？　」

『だ、大丈夫だよ！！！　先生も僕らも無事だよ！！』

瓦礫の向こう側にいるであろうリクとヴァルターに声をかけるソラ。返事がしない時はどうしようかと思ったが、ひとまず安心である。

だが、このままではヴァルター達は捕まってしまう。どちらにしろ、時間の問題だった。

「待ってろ……今瓦礫を吹き飛ばして……」

「待ってソラ！！！　今この瓦礫に不用意な振動を与えたら、他の部分にも影響が出るかもしれません」

「くっ……じゃあ……どうすれば……」

ラボの崩壊具合はかなり危険な域にまで達している。無理な振動を与えれば、今度は皆が生き埋めになる可能性もあるのだ。
ベクトルを操って瓦礫を吹き飛ばしたとしても、そうすると向こうのリク達が怪我をする可能性だってある。

『ソラ！！　自分らは先に逃げとけ！！！　わいらは別の非常口から脱出する！！！』

「だ、大丈夫なのか！！！？」

ヴァルターの提案に、ソラはすぐには結論を出せなかった。このまま自分たちだけで先に行っていいのか？　もっと他に選択肢はないのか？　そんな考えが彼の頭を過る。

『心配せんでええ！！　ちょいと遠いけど、何とか行ける！！　まず、そっちにいる子らの安全を確保したってくれ！！！』

がしかし、ここではヴァルターの意見が正しい。迷っていては、全員が死んでしまうのだ。

ソラは迷いを断ち切りように頭を振ると……

「先に行って合流ポイントで待ってる！！！　そっちもサッサと来いよ！！！」

『おう！！　任しとけや！！！』

ソラたちは再び走り出した。

ここは、ヴァルターの言葉を信じるしかない。まばゆい光の差し込む出口まで、ソラ達は全力で駆けていった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「……遅い……」

脱出に成功し、鬱蒼とした森の中、合流ポイントでヴァルター達を

待っていたソラ達だったのだが、一向に彼らが現れる気配がない。
脱出の際に転移の魔法でも使えれば楽なのだが、このラボの周辺では転移の魔法はロックされていて使用不可なのだ。

「ラボは……もう持たないな……」

ソラに続いて、レイスが燃えるラボを見ながらそう呟いた。
彼らからすれば、家を焼き払われたのと同じである。その胸中を推し量ることは容易ではない。

「ですが、遅すぎますね……脱出ルートの途中で敵と鉢合わせでもしてたらまずいことになりますよ……」

「そんな……」

シオンの言葉に、エステルは不安そうな顔をする。
だが、シオンの言う通りでもある。今、あちらで戦闘能力があるのはヴァルターだけだ。リクは戦いには不向きな性格の上、怖がりなのだ。まず戦闘では役に立たない。

「ソラ……」

「……」

エステルがそう呟きながら、ソラの服の裾を掴む。
彼女の不安が、能力を通して流れ込んできた。

「シオン、俺とお前で様子を見に行くぞ。レイス、リーアはエステルと子供たちを頼む」

「はは……あなたならそう言うと思っていましたよ、ソラ。分かりました、行きましょう」

ソラはシオンと共にラボの様子を見に行くことにした。仮にヴァルター達が捕まっていたり戦闘中ならば助け出さなければならない。故に、戦闘力に於いては申し分ないシオンを同行させることにした。

「子供たちのことは任せておいてくれ」

「先生たちの事、頼むわね……」

「む……」

戦力を分散するのは痛いが、リーアやレイス、ネルまで連れて行ってはこちらの守りが薄くなる。そのことを理解しているのだろう、三人から不満は出なかった。

「ソラ、気を付けてね？死んじゃ…やだよ？」

「分かってるよ。帰ってくるさ、リク達を連れてな」

エステルにそう言って安心させてやり、ソラはシオンと共にレガリアを展開し、ローラーシューズ型のデバイスを身に着け、大きな木々の間を飛ぶように走り出した。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「よっと……」

「あれが……もう一つの脱出ルート……その出口ですね……」

シオンとソラは、茂みに隠れながら出口の様子を窺う。

「うわ……ざっと４０人はいるなぁ……」

「これは……出てこれたとしても、捕まってしまうのが落ちですね……」

出口付近には、大勢の管理局員がデバイス片手に守りを固めていた。
どうやら、脱出ルートを塞いでいるつもりらしい。
まぁ、ソラ達が逃げ延びているので少し遅かったのだが……

「仕方ないな……突破するぞ、シオン」

「はは、その過激なやり方、好きですよ」

一瞬で行動方針を決定したソラに、シオンは苦笑いしながらも同意する。どの道、あそこに溜まられていてはヴァルター達が脱出できないのだ。
排除しておいて問題ではないだろう。

「行くぞ！！」

「はい！」

そうして、二人は茂みから飛び出した。
無論、局員が彼らの姿を見つけるのは時間の問題なわけで……

「い、居たぞ！！！　例の子供だ！！！」

「少将閣下のご命令だ、目標は生け捕りだが、無理な場合は殺して構わんそうだ！！！」

隊長らしき人物の命令と同時に４０人にも上る管理局員がデバイスをこちらに向けてくる。

だが、ソラとシオンからしてみればそこ動きはノロマとしか言えないもので……

「行くぞ、シオン、合わせろよ？」

「えぇ、いつでもどうぞ？」

２人は動きがシンクロしているように同じスピードで、左右に展開し、同時に空中に飛んだ。そして、空中でレガリアを履いた足を振りかぶり、ソラはベクトル操作で大規模な風を、シオンは強烈な炎を発生させる。

そして……

「無限の風（インフィニティ・エアード）！」

「無限の煉獄（インフィニティ・インフェルノ）！」

両者、同時に振りかぶった足を振りぬいた。

すると、発生した風と炎が混ざり合い、螺旋を描きながら管理局員たちに向かっていく。

まるで、炎と風の竜のようにさえ見えた。

「な、なんだ……？」

「ま、まずい！！！　退避だ、総員退避！！！！！」

隊長が局員全員に退避を命じるが遅すぎる。
巨大な風と炎の複合攻撃は、一瞬にして彼らを飲み込み……

「「風爆（ゲイル・ロード）の道！！」」

ソラとシオンの口にした技の名前を表すかのように、爆発と暴風が発生し敵を一瞬にして消し炭にした。
残ったのは、風爆によって抉れた大地。他には何も残ってはいなかった。

「親父のキン●マにいる頃からやり直して来い、粗チン共が」

「下品ですよ、ソラ？」

2人はそう捨て台詞を残してから、自分達の攻撃によって若干変形してしまったドアを蹴り破って、非常口からラボの内部に入って行く。

彼らの声に反応するものは、誰一人としてそこには居なかった。

Ｆｒａｇｍｅｎｔ６　終わりの始まり（後書き）

Ｆ２０Ｃ「まさかスカリエッティが助けてくれるなんてね」

スカさん「ふっ、勘違いしてもらっては困る……私もヴァルターも科学者だ。自分たちの研究成果を他人がどうこうするのは我慢ならなかった。それだけのことさ」

ソラ「新手のツンデレ？」

Ｆ２０Ｃ「ふむ……やっぱり野郎がやっても全く萌えないな……」

スカさん「私にはそんなつもりはないのだが！！？」

ソラ「ていうか……俺とシオンの複合技……めっちゃ凄そうな気が……」

Ｆ２０Ｃ「二人のレガリアの奥義みたいなものを重ね合わせた技だからね。今のところ、なのはさんのＳＬＢどどっこいどっこいの出力出てるらしいから」

ソラ「成長した俺たちが使ったらどうなるんだろう……」

スカさん「ふむ……惑星が一つ吹き飛ぶのではないかな？」

Ｆ２０Ｃ「ドラゴンボールのフリーザを思い出したわ……」

ソラ「ていうか、この作品内でのあんた、アニメと違ってかなり丸くなってるような……」

スカさん「それは仕様らしい。中の人的にも、ジェレミア並にナイスな男に……」

Ｆ２０Ｃ「ジェレミアさんを汚すな」

スカさん「ｏｒｚ」

次回、Ｆｒａｇｍｅｎｔ７『あなたは幸せですか？』

Ｆｒａｇｍｅｎｔ７　あなたは幸せですか？（前書き）

さてさて、次回で過去編も終わりですね。
なんと言いますか、私の作品って基本的に一人は確実に……いえ、何でもありません。

今回も哲学思想的なものでが出てきます。

加えて、来週の更新はお休みさせていただきたいと思っております。
理由としましては、実は私、来週が学期末テストなので……（とはいえ教科は三つほどですが）
勉強もしなければならないので、次回のＢｏＰの更新は再来週となります。申し訳ありませんが、ご理解のほどよろしくお願いいたします。

Ｆｒａｇｍｅｎｔ７　あなたは幸せですか？

【語り得ぬものについて、我々は沈黙するほかない】

ルートヴィヒ・ウィトゲンシュタイン　『論理哲学論考』

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「ふん……散々と手を焼かせてくれたものだな、ヴァルター＝クロンベルク。いや、アンリミテッド・アロガンス」

「はっ……こんの、タヌキおやじが……。最初からこうするつもりやったちゅうわけか……」

「所詮お前はその為に作られた駒に過ぎん。役目を終えた駒に最早利用価値はないからな」

現在、ヴァルター並びにリク達は俗に言うピンチという状態に陥っていた。

ソラ達と別れて、もう一つの出口に向かって走っていたのだが、そのタイムロスが見事に響いたのだ。

「貴重なイノベイト・チルドレンを連れて、どこへ逃げるつもりだったのかは知らんが、管理局の正義に背く貴様の行為は許されざることだ。まったく、作ってやった恩も忘れて……こういうのを、飼い犬に咬まれるとでもいうのかね？」

「はっ、おたくらの正義はえらい便利なんやなぁ、その単語を付けるだけで大体のことが正当化されるんやから……。」

「貴様は視野が狭いのだ。我らは常に大局から物事を見て、そして判断し、行動している。まぁ、お前のような紛い物の人間には分からんことだろうがな」

あそこでのタイムロスさえなければ、ラボに突入してきたネスター率いる部隊と鉢合わせることも無く、このような不毛な言葉の掛け合いをせずとも済んだのだ。
ヴァルターは表情には出さなかったが、苦虫を噛み潰した気分になった。

「せ、先生……」

「リク、安心せぇや。お前らは絶対逃がしたる。その代り、チビ共三人は任せたで？」

リクの不安そうな声に、ヴァルターはそう言って背負って走っていたイノチルの子供二人をリクに預ける。
セリフをそのまま受け取るならば、彼は自分を囮にしてでもリク達を逃がすつもりのようだ。

本来なら、レガリアを持っているリクも戦闘に参加するべきなのだろうが、彼は性格上荒事には向かないし、ヴァルター自身もそんなことは望んでいなかった。
彼は彼なりに、この先の人生の中で自分に出来ることを見つけて欲しいと考えていた。

「ヴァルター、貴様は科学者だ。知識も学も、加えて戦闘もズブの素人というわけではあるまい？　この状況、多勢に無勢というモノだ。大人しくイノチルを引き渡すことが最も合理的な判断だと思うのだが？　そうすれば、命だけは助けてやっても……」

「はっ、正義を振りかざして説法垂れる奴の言葉なんぞ誰が信じるかい！！　それになぁ、合理的な判断がいつも最善な結果を生むとは限らへんちゅう事を覚えとけ、タヌキおやじが！！」

ネスターの透けて見えるような嘘に、ヴァルターはそう答えて、ロッドタイプのデバイスを構える。
何がなんでも、リク達を逃がすつもりなのだ。

「ならば、言ってやろう。その子供たちにとっての最善の結果は、管理局の正義にために戦うことにある。子供は大人の言う事を聞いていればよい生き物なのだよ」

「子供がどう生きるかは、子供が決める。　大人はそれを支えて、間違えそうになったら叱って、良いことしたら褒めて、子供が見たい思うとるモンを一緒に見る。　手本になるんやなくて、一緒になって進んでいくんが大人の仕事や！！！　アホみたいに子供の前ばっかり歩いて、子供を道具扱いするんは屑のやる事やで、タヌキさん？」

ヴァルターの言葉も、ネスター相手では馬の耳に念仏をリアルで体現しているだけになってしまう。
自信の正義のみに固執し、他を見ようとせず、気になるのは自分の地位の事だけのこの男に、何を言っても無駄なのは承知の上なのだが。

「ふん、話にならん……。もういい……殺せ」

「やれるもんなら……やってみぃ！！！」

ネスターがそう言うと同時に、彼の部隊の魔導師たちがデバイスを殺傷設定にし、襲いかかってきた。

ヴァルターもまた、リク達を守るべくデバイスを手に応戦するのだった……

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

一方、ソラとシオンはというと……

「な、なんだこいつら！！？」

「魔法が……吸収されて……がぁ！！！？」

「くそ……なんてスピードだ……追いきれない……ぎゃあ！！？」

ラボの内部にもかなりの数の局員が展開しているらしく、少し進むと敵とエンカウントしてしまう。

まるで、ド〇クエ？のピラミッドダンジョンの奥の宝箱を開けた後のような感じだ。（一歩進むたびに敵とエンカウントするという鬼畜仕様のこと）

「バリクソ邪魔あぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！」

「失礼しますよ！」

が、ソラとシオンのコンビの前には、敵の数など意味をなさない。ローラーシューズ型のデバイスである、レガリアモデルを履いている二人は、ハイスピード且つ、このタイプのデバイスだからこそ可能な三次元的な動きをフルに使い敵を翻弄し、次々と屠って行った。

風のレガリア、炎のレガリアはコンセプトが似ていることもそうだが、能力属性の相性も抜群なのだ。

「死にたくない奴はさっさと帰るんだな！！」

壁を、天井を、縦横無尽に駆けるソラとシオン。一般人の局員に、この二人のイノベイト・チルドレンを止めることなど叶わない。一騎当千、いや二騎当千とでも言ったところか。

「なかなか……敵も数を揃えて来たようですね。倒しても倒してもきりがない」

「あぁ、でもそうまでしても、俺たちを兵器として局のために使いたいってことだろ？　イノチルってのは、あいつらにとっちゃ便利な戦闘兵器以外の何物でもないんだろうからな」

「それが全てではない……そんなことを口にしたところで、意味もなさそうですね……」

２人がそんなことを話している間にも、また前方に局員の姿が飛び込んできた。

強さは大したことはないが、訓練だけはしっかりと受けているらしい。統制の取れた動き、そして連携攻撃。局員の中では恐らく優秀な部分に当たるのだろう。

しかし、それはあくまで人間相手の時のみの話だ。今の彼らを相手しているのは、人間の進化した結果であり、革新。勝てる道理がないのだ。

「もう少しはやく、襲撃に気が付けていれば……子供たちを逃がした後、私とソラで相手を出来たのですが……」

「言うな。情報があっただけましだと思うべきだ。スカリエッティの知らせがなけりゃ、子供たちが何人死んでたか分かったもんじゃない。」

シオンのいう事は尤もだが、ソラの言う事にも一理ある。無いものが転がって来ただけまだましと考えなければやってられない状況なのだ。

「……そうですね……今は、私たちに出来ることをするしかない。そういうことですね」

「あぁ、兎に角急ごう。リクの精神が異常にブレてやがる。きっと敵にでも遭遇して囲まれてんだろ!!」

ソラはイノチル同士のリンクを通じて、リクに異常が起きたことを感知し、スピードをもう一段回早くする。
シオンもソラに追いつくように、ペースを上げて横に並ぶ。

ラボの中がこんなに広いと思ったことはなかった。こんな緊急時でもない限り、猛スピードで廊下を疾走することも無かっただろう。

そんなことを考ええるのと同時に、リクとヴァルターの安否を気に

しながらソラとシオンは風と炎のレガリアを駆って、通路をひたすら進んでいくのだった……。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「がっ！？」

局員の一人に砲撃を食らわせたところに隙ができた。隙と言っても、大きなものではなかったのだが、多対一のこの状況ではどんな小さな隙であろうが致命傷に繋がってしまうものである。

故に、ヴァルターもまたそのごく小さな隙を突かれ、遠距離からの誘導弾で吹き飛ばされてしまう。

ステージが廊下という火線の方向が限られる場所だったが、分かっていてもとても避けられるものではなかった。

「くそったれ……」

ヴァルターは壁に激突し、漸く体に掛かっていた衝撃から解放される。息が止まりそうなほどの強烈な一撃だった。殺傷設定というのは伊達ではない。

「（腕も片方イッてもうとるし……肋骨は……４本くらいやられとるな……。足が無事なんがせめてもの救いか……）」

ヴァルターは素早く自身の体の状態を確認し、周囲の状況を確認する。

目の前には局員が５人。８人いた状態から３人も削れたのだ、成果

としては上々だろう。
加えて、リクと子供のイノチルを逃がすことも出来た。廊下という一本道のステージの特性を利用し、ネスター率いる部隊たちを道に立ち塞がることで足止めさえ出来れば、子供たちは出口に向かって一直線に走るだけでいい。

「（は……建物の構造に助けられた感じやな……まぁ、この際何でもええか……）」

初期目標は達成できた。リクたちを逃がしてやれば、後はどうとでもなる。
この目の前の五人を振り切ることが出来ればいいのだが、上手く事が運ぶかは怪しいところではあるが。

「ちっ……余計な手間を……。イノベイト・チルドレンだけを逃がすなど、面倒なことをしてくれる」

「わいかて、そこそこ強いんやで？　自分の作ったモンのデータくらいしっかり把握しといた方がええんとちゃいますか？」

「ふん、どちらにしろ同じことだ。出口には部隊を配置してある。加えて、仮に突破されたとしても子供の足だ、捕まえるのは容易い」

ヴァルターの嫌みに、ネスターは冷静に答えてくるが、眉間に血管の筋が浮かんでいる。どうやらかなり怒っているようだ。ヴァルターとしては愉快極まりないことではある。

が、しかし。
ここで彼の計算を狂わせる事態が発生する。
狂わせると言っても、その原因となった人物にはそんな悪意などは

全くなかった。ただ単に、ヴァルターのことを救いたいという一心で、恐怖を我慢しここまでやって来たのだろう。

「先生！！！！」

「っ！！？」

その声は、追い詰められているヴァルターと、彼を囲む局員たちの背後から聞こえてきた。

どうやら、一旦安全な場所に出た後、別ルートでネスターたちの背後に回り込んだらしい。

そう、その声の主は先ほどヴァルターが決死の思いで逃がしたリクだった。

「アホッ！！！！　何で戻って来たんや！！？」

「先生のこと……放ってなんかおけない！！！　僕だって……僕だっていつまでも守られてばかりじゃいられないんだ！！！　シオンや……ソラみたいに……僕だって！！！」

リクは言いながら、内ポケットから十字架を模った待機状態のデバイスを取り出す。

それは、今日まで彼が、自信の力を恐れた彼が決して使うことがなかったものだった。

オリジナルのイノベイト・チルドレン、リクの専用デバイス、【石のレガリア・サンダルフォン】。

「起きろ……サンダルフォン！！」

『承知した、我が主よ』

リクが石のレガリアを起動させると、十字架型のデバイスは光の粒子となってリクの足に集まり、凝縮される。

そして、ソラとシオンのレガリアと同じローラーシューズ型のデバイスがその姿を現す。

ソラ達のものと比べ、かなりシンプルなデザインのデバイス。ウィールにも特に特徴らしい特徴はない。

しかし、石のレガリアの名に負けないほどの洗練されたオーラ、そして静という単語を形にしたようなデバイスだった。

「あぁぁぁぁぁぁぁっぁあああ！！！！！！」

リクは、普段の彼からは全くイメージすることが出来ない雄叫びを上げて、その場でレガリアの力、そして彼自身の能力を使用する。

「ちっ…まずいな……」

その姿を確認したネスターは、部下を数名連れて前線を離れ、距離をとった。だが、この彼の判断は正しかった。

「な、なんだ……？　体が……重く……？？！　ぐあ！！？」

「デバイスを……持っていられない……がっ！！？」

「な、何なんだコレはぁぁぁ！！！？」

一瞬、石のレガリアが波動を放った瞬間、ヴァルターを囲んでいた

局員達は地面に這いつくばらせられる。
いや、その表現は少し生やさしい。正しく言えば、地面に『沈んでしまっている』のだ。

ソラのベクトル操作で敵の体に変圧した大気を叩き付けて動きを封じる技があったが、リクのこの能力はその一段上の破壊力を持っていた。

「お、思い知ったか……。僕の……石のレガリアの能力……『重力操作』……あなたたち人間の体では……とても耐えられないはずだ……はぁ…はぁ…」

リクは息も絶え絶えという様子でそう呟く。
重力操作、つまりはGの強さを自在に操作できる能力。人間の体は１Gの環境で生活が送れるように最適化されている。
それが倍の２Gになっただけでも、長時間その環境下にいれば絶命するとも言われている。

体の強度的な概念から言えば、およそ６Gまでの重力に耐えられるように人間は出来ているのだが、リクがかけたGは１０。普通の人間が耐えきれるものではない。

「や、やった……僕も……戦えた……僕だって……」

リクは敵を、局員を倒したことに一安心したのか、その場にへたり込んでしまう。能力の付加が大きいのか、疲労の度合いが窺い知れる。

が、しかし、この行為こそが彼が戦闘の素人たる所以でもあり、もっともやってはいけない行為でもあったのだ。

ソラやシオンならば絶対に犯さない愚を、彼は図らずも犯してしまったのだ。

「リク！！！！　伏せろぉぉぉ！！！！！」

「え……？」

バシュ……！！！

リクは目の前で起こっていることが理解できなかった。

緑色の光の筋が一瞬見えたかと思うと、自分の体はヴァルターに突き飛ばされていて……

そして、緑色の筋、おそらくは魔力の砲撃だろう。その砲撃が、ヴァルターの体を撃ち貫いていた。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

バシュ……！！

ソラとシオンがその場にたどり着いた瞬間、視界に飛び込んできたのは突き飛ばされるリクと、緑色の閃光によって貫かれたヴァルターの姿だった。

緑色の閃光が魔力による砲撃だと理解するまでに時間が掛かったが、遠距離からデバイスをこちらに向けている管理局員と、いかにも権力者然とした男の姿を見た瞬間、ソラはすべてを理解した。

『ヴァルターが撃たれた』という事実を。

「て、めぇ……ら……ぶっ殺してやる！！！！！」

ソラは瞬間的に攻撃を放っていた。
風のレガリアを履いた足を局員、そしてネスター達に向け、風を小さなトルネード。小さいと言っても破壊力を凝縮した強烈なものを放っていた。

彼の放ったトルネードは、廊下の壁を削り取り、それをも暴風の中に取り込みながら局員達を飲み込まんと直進していく。

「……またの機会にするか……」

風が届く一歩手前、ネスターは自身の部下達を前に押し出し、人間の壁のように扱い退散した。

「ぐあぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！？？」

「か、体が……ぎゃあぁぁぁぁぁぁぁ！！！！？？」

風に飲み込まれた瞬間、ネスターに見捨てられた局員達は、削り取られた壁のコンクリートによってミンチにされる。
強烈な風によって渦の中で縦横無尽に動き回る石は、破壊力抜群であり、まさに死神。触れただけでも腕が飛ぶ。

ハリケーンによって、風速８０メートルの勢いによってふきとばされた破片が家や車などを易々と貫くことが出来るのだ、そらのはなった風ならば、それ以上の威力を発揮するのは当たり前のことだろう。

「はぁ……はぁ……。……くそったれが……」

ソラは息を切らせながら、原形を留めていない廊下の一角を見つめながらそう呟いた。

周囲に敵の気配もない、どうやらさっきの連中が最後だったらしい。

「先生！！！」

と、ホッと出来たのも束の間だ。リクの悲鳴めいた声が響いたことで、ソラはヴァルターが撃たれたことを再認識した。

シオンは、倒れ込んだ状態のヴァルターを壁に背中を預けるような体制にしてやる。

が、彼の急所からはおびただしい量の出血が認められた。

瞬間、ソラとシオンは理解できてしまった。「コレは絶対に助からない傷」だと……。

「はぁ……はぁ……リク……油断大敵や……能力を怖がらんと使えたんはえぇけど、警戒を疎かにしたらあかん……」

「先生……！！　僕の……僕のせいで……！！」

リクは涙を流しながらヴァルターに駆け寄る。その間も、ヴァルターの傷からは大量の出血が起こる。

「お前の……所為やない。リクはようやった……自分の力と、ちゃんと向き合おうとしたやろ……。恐がりのお前が……ここに戻

ってきてまでわいを助けようとした……デッカイ成長や……」

「で、でも……僕が…僕が油断して……先生が……撃たれて……血が……血がこんなに……！！」

ヴァルターは力ない声でリクに諭すが、リクは混乱の極みにあり、全く意味をなさない。一種の錯乱状態である。

ゴゴゴ……

「この音は……」

「まずいですね……ラボが崩れるようです……。少々、暴れすぎましたか……」

こんな時でさえ、物理法則の流れは変わってはくれない。どうやら、ラボの重要な柱が度重なる攻撃によってやられてしまったのだろう。局員達による盛大な砲撃が何発もクリーンヒットしたのだ、無理もないことだ。

「……兎に角……ここを出よう……」

「えぇ、長居していては私たちでも一溜まりもないですからね」

現状を嫌になるほど冷静に把握できてしまうソラとシオン。リクが彼らの分まで天パってくれているおかげなのか、はたまた人の死に、人が傷つくことに馴れすぎてしまったからなのか……二人の声は冷静そのものだった。

「待ってよ！！！　このままじゃ先生死んじゃうだろ！！！　ソラ

の能力で何とかしてよ！！！　血を止めてよ！！！！」

「……」

それが出来ればとっくの昔にやっている。
ヴァルターの血流のベクトルを操作して、出血部位から血を流れるのを堰き止めてやればいい。
が、しかし、人間の体というものは思っているよりも複雑に出来ている。その構造をしっかり理解しないで血流を操作すれば、ヴァルターの心臓を破裂させたり、脳への血流を止めたりなど、不測の事態が起きる可能性が高すぎる。

ヴァルターもそれを理解しているのだろう、それ故にソラに何の指示も与えることはしない。

「ねぇ！！！　ソラってば！！！　何で！！！？？　『ゴス！』！ぐぇ……！？」

「すまんな。少し寝てろ……」

掴み掛かる勢いでソラに迫って来るリクに、ソラは掌底を叩き込む。
綺麗に決まった掌底により、リクは一瞬で意識を刈り取られてしまう。

「シオン、リクを連れて先に行け。俺は先生を運ぶ」

「承知しました。ですが急いでください、ここもあまり長くは持ちません」

「あぁ……分かってるさ」

気絶したリクをシオンに任せ、ソラはヴァルターに肩を貸し、立ち上がらせる。
体格差があるものの、そらの身体能力であれば、大人一人させることなど造作もないことだ。

「すまんのぉ……ソラ……」

「何を今更……本当に……今更だ」

柄にもなく謝ってくるヴァルターに、ソラはそう答える。ヴァルター自身も分かっているのだろう、自分の命が残り少ないことを。

「さっきは、おおきにな……。あのままやったら、リクは錯乱したままで、脱出が難しくなっとったやろう……。それに……」

「あぁ……あいつの目の前で、あんたを死なせるわけにはいかん……。でないと……あいつは責任で潰れちまう……」

リクを気絶させて、シオンに任せて先に脱出させたのにはそういう意図もあった。
リクのあの性格だ、自分の責任だと彼は一生自分を責め続ける。いや、もしかすると責任に押し潰されて自ら命を絶ってしまうかもしれない。

「あんたの最期は……俺が看取ってやるよ……」

「はは……重ね重ね、おおきに……」

一歩一歩、ヴァルターを支えながら歩くごとに、この6年間の出来事が思い出される。

レガリアの調整に奔走した日々、エロゲー談義に花を咲かせた日々、戦闘の何たるかを教わった日々、人間について様々なことを教わった日々。

今思えば、そのすべてが素晴らしき日々だった。

「でも……リクのことは……ちょいと心配やな……。生きることに抵抗を感じるようにならんかったらええんやけど……な……」

「大丈夫だ、その点に関しては手を考えてある。手と言っても、あんたの弔い合戦を理由にあいつを縛るだけなんだがな……」

「復讐で……生きる目的を持たすつもりか……？　そんなことしたら……あいつは本来の優しい心を失ってまうやろ……もっとほかの方法で……」

リクのことが心配なのか、ヴァルターはそんなことを口にする。

ソラはヴァルターの仇を討たせるという目的をリクに持たせて、それを糧に生きるように仕向ける積もりのようだ。

「どっち道、俺は管理局に喧嘩を売る……。今回の主犯格には落とし前をつけさせる。リクのことはただのついでだ……。終わった後のことは、俺たちが何とかするさ……」

「何や……ソラ……？　お前……怒ってくれとるんか？」

ヴァルターの声が徐々に弱くなっていく。命の残量が数値に変換できるとするなら、それは確実にゼロに近づいている。

「当たり前のことを聞くな。『親』を殺されて、怒らない奴はいない……」

「……」

「あんたがどう思ってたかは、どうでもいい。ただ、俺たちにとって、あんたは確かに親だったよ。捨てられた俺たちにとっては、立派な親父だったよ……。自慢できる……父親だよ」

「……さよか……」

ソラの言葉に、ヴァルターはどこか満足したような口調でそう返してきた。

どんな表情をしているか、ソラからは見えないし見るつもりもない。ただ、ソラの頭に少し暖かい水が落ちてきたことだけはハッキリ分かった。

「ソラ……最後に、お前に伝えとかなあかんことがある。」

「……なんだ?」

ヴァルターの声は真剣そのものだ。最後というのも、自分の状態を理解しているから出てきた言葉なのだろう。

「今は理解できんでもええぇ。ソラ……お前は器になるんや。器になって……ほんまモンの空になれ……」

「……器?」

「その為の道しるべは、お前とエステルのレガリアの中に入っとる……。いずれ……必要になるときが来たら……ジェイルを訪ねて……道しるべを完成させるんや……。あいつやったら……空を……空のレガリアを……作れるはずや……」

「おい、一体何のことを……」

ヴァルターの言葉は、意味不明だった。だが、必死にソラに大事なことを伝えようとしていることだけは確かである。
ヴァルターにとっては、何よりも大切なことらしい。

「世界の……意思を……正しい方向に……向かわしたってくれ。お前らの……明日の為にも……」

「……」

世界の意思、空のレガリア、器。
よく分からない単語ばかりではあるが、ソラはなぜか、その言葉に大きな意味を感じていた。
もしかすると、ヴァルターはとんでもなく先の、遙か向こうを見ていたのかもしれない。今になって、この男の偉大さを再認識させられた。

「ふぅ……一辺に喋ったら……疲れてもうたわ……」

ヴァルターは、伝えたいことを伝えたようで、安心したような声でそう言った。
そして、途切れ途切れになりつつも口を閉じることはない。

「なぁ、昔……死の概念について話したことがあったやろ……？」

「……死は思うことに意味があるって奴か？　死は体験できないからこそ、語ることが出来ないって言ってた……」

それは、数年前の会話の内容ではあったが、ソラの中には色濃く残っていた。条件さえ満たせば、死という終点を迎えることがほぼ無くなるイノチルであるソラにとっては、人の死というものの概念を考えることがなかったからかもしれないが。

「わいは……もうすぐ死ぬ……。つまり……死を体験する……思考の限界を超えて、経験というプロセスで、死を理解する……。頭で考えた霧でモヤが掛かったモンや無い……、人間の未体験ゾーンを……体験するんや……」

人間の限界は思考の限界。死にゆく彼には、死というものを体験し、理解できるかもしれないという、ある種馬鹿げた思いがあったのだ。

「違うな……それは間違っている……。あんたが死んで……死を体験したとしても、死人は口を利けない……死を語ることは出来ない……。俺たちにとっての死は、いつまでたっても思考の限界の中でのものに過ぎない」

ヴァルターが、死を体験して理解できたとしても、死はすべての終わりである。無論、彼が死んでから口を開くことが出来ないのなら、死を語ることは出来ない。つまり、ソラ達にとっての死は、いつまでたっても変わることはない。

個人の中だけでしか成立し得ない真理は、虚の域を超えることはない。

「『語り得ぬものについて、我々は沈黙するほか無い』……俺た

ちにとっての死は、語り得ないものなんだろうさ……。だから……思うことしか出来ないんだよ……」

「……ルートヴィヒ・ウィトゲンシュタインの……【論理哲学論考】…七つ目の命題やな……」

ヴァルターは静かにそう呟く。彼とて、自分が死ぬからと言って死を理解できるなどとは思っていなかったはずだ。
もしかすると、迎えつつある死が、彼の思考に影響を与えているのかもしれない。

「はは……やっぱり、ソラ……お前とこう言う事話とると……おもろいわ……」

「俺は……まぁ、そうだな……有意義ではあるな……」

含み笑いをしながらそういうヴァルターに、少し笑みを取り戻しながらソラは答える。

そうだ……最後くらい、笑って逝かせたやりたい。化け物にだって、そのくらいの感情はある。
思考できる生き物ならば、当然ではないか。

「なぁ、ソラ……今度は……ツンデレかクーデレ……どっちが萌えるか……話そうやないか……」

「……あぁ……いくらでも付き合ってやるさ。ちなみに俺は、ツンデレはツン：デレ＝7：3の黄金比を提唱させてもらうがな」

こんな会話も、この先出来ることはない。今日この日、この時を以

て、ヴァルターとの時間は終わりを迎えるのだから。

「流石やなぁ……ソラ……お前も……分かってきたやないか……」

「当たり前だ……あんたに鍛えられたんだからな。」

一歩、一歩。

歩みを進めるごとに、その時は近づく。時計の針が回るのと同じで、それは止まることを知らない。

馬鹿正直に、死へのカウントダウンを刻んで、ヴァルターを死へと誘い……

「そうやな……わいが……教えたんやな……。流石や、ソラ……お前は……わいの……自慢の息子や……から……な……」

ヴァルターがそう呟いたと同時に、二人はラボの外に出ることが出来た。日差しが眩しく、ソラは一瞬瞼を閉じた。

ガクン……

それと時を同じくして、ソラの体に掛かるヴァルターの重さが増えた。先程までは、ヴァルター自身の足で歩いていたので、そこまでの重さは感じなかったが、今は……とても重かった。

「あぁ……そうだな……あんたは、俺の親父だよ……。自慢できる……な……」

ソラも、その重さの原因を理解していた。だから、ヴァルターの体

を支えるのをやめ、近くのすっかり葉の落ちた大樹の根元に寝かせてやる。
もう、歩くことが出来ない者を無理させて立たせることもないだろう。彼は、ヴァルターは立派に走りきったのだから。

「……なんつー、幸せそうな顔で逝ってやがんだよ……」

ヴァルターの表情は、とても満足そうだった。苦しみも怒りも、悲しみもない。
幸せだったと言うことを示すかのような笑み、彼の表情にはそれがあった。

「あんたは……幸せだったのか……。こんなところで死んだとしても……あんたは……幸せを勝ち取ったのか……」

ソラは立ち上がりながら、ヴァルターの亡骸を見つめてそう呟く。
幸せという不定形且つ、個々によってその概念が異なるものは、死と同じように、『語り得ないもの』なのかもしれない。

だが、少なくとも、今のヴァルターの表情には、確かな幸せが宿っていた。

粉雪が舞う冬のある日、ソラ達は、大事なものを失った。

Ｆｒａｇｍｅｎｔ７　あなたは幸せですか？（後書き）

本日のＥＤ『Ｃｌｏｓｅ　Ｙｏｕｒ　Ｅｙｅｓ』　ｓｏｎｇ　ｂｙ　彩音
ＰＣゲーム「Ｇ線上の魔王」挿入歌

「道は氷河なり」

「いいぞ……そうやって、見え透いた悪に飛びついてこい。この悪は、ただの悪ではない！」

「野心がいつのまにか恋心に転じることはあるが、恋心が野心に戻ることはない」

かっこいいなぁ、Ｇ線上の魔王は……るーすぼーいさんは流石としか言いようがない。
最後の刑務所前でのシーンは涙腺崩壊しマスタ

次週は更新はお休みです。再来週までお待ち下さい。でわでわ～

次回、Ｆｒａｇｍｅｎｔ８『復讐とすれ違いと』

Ｆｒａｇｍｅｎｔ８　復讐とすれ違いと（前書き）

さて、今回で過去話は終了です。次回からＣｈａｐｔｅｒ３に突入します。

最後らへんに予告として、少しＣｈａｐｔｅｒ３のシーンを切り抜いておきましたので、お楽しみ下さいｗ

加えて、ここで読者の皆様に謝罪を。
実を言いますと、二月から就活が本格化してきまして、ＢｏＰの週一更新が難しい状況になってしまいました。
つきましては、ＢｏＰをガンダムガンダム小説同様に、不定期更新とさせていただきたく存じます。
私の勝手な都合ではありますが、何卒ご理解の程、よろしくお願いいたします。

Ｆｒａｇｍｅｎｔ８　復讐とすれ違いと

ヴァルターという柱を失ったソラ達は、逃亡生活に明け暮れていた。
その中で、いや、ヴァルターを失ったことによって、様々な変化がソラ達を襲ってきた。

一つに、リクの豹変ぶりだった。

温厚で、争い事を好まない彼が、管理局への憎悪を前面に出すようになったのだ。管理局は悪だ、何が正義だ笑わせるなと……

日に日に、彼の性格は変化していった。
しかし、ソラにとっては、これは仕方のないことでもあり、目論見通りの展開でもあった。
リクが、自責の念で、生きることをやめてしまいかねない事態を防ぐためには、生きる目的を与えてやる必要があったのだ。

今回で言えば、管理局への復讐。それこそがリクに闘争本能と一緒に生存本能を刺激する触媒になっている。
怒り・憎しみという感情は、生き物にとってもっとも分かりやすい生きる為の指標になる。
ソラは、そのことを良く理解しながらリクのやりたいようにさせていた。

戦い方を教えてくれと言われれば、とことんまで付き合ったし、彼が強くなるために出来る限り、思い付く限りの手を打った。
まるで、ヴァルターが死んだことを、自分に非があるかのように。

「実行犯のあの男……ネスターだけは確実に殺す。自分のしたこ

とを後悔させながら、ジワジワと……なぶり殺しにしてやる」

「その意気込みだけは買うがな……せめて、俺に一発叩き込めるようになってからにするんだな……」

「……わかってる……。ソラ、続きを頼むよ……」

「……」

ソラは、逃亡生活の大部分をリクを鍛えることに使った。リクもイノチルとしての身体能力を持ってはいるが、如何せん戦闘のセンスに欠けていた。

しかし、努力は続けることに意味があるモノだ。そして、その継続は目に見える成果として彼を向上させていくことになる。

ソラが戦闘に関する天性のセンスを持っているとするなら、リクは努力によってそれに追いつこうと必死だったのだ。

二つ目の変化、それはイノチルの仲間の数だ。

ヴァルターとソラ達の尽力でラボから逃げることが出来た、総勢１８名のイノチル達。

だが、ネスター達、管理局の追撃は厳しいモノだった。ネスター本人は前線には出てこないが、彼の直属部隊であろう一流の魔導師達で組織された追撃チームの襲撃が、頻繁に起こった。

いくらソラやシオンが居るからと言って、相手は雑魚だけで組織されているわけではない。一流の魔導師達は、戦闘においても、追跡

においても一流である。

巧妙なやり口で、ソラ達を追い込み、立て続けに襲いかかってきた。

ソラやシオン、リーアにネル、レイスがいくら頑張ったとしても、統制の取れた相手にまだまだ子供の彼らが完璧に立ち回るなどと言うことは難しい。

なんとか逃げ道を作って逃げることが関の山だった。

しかし、その仮定でどうしても助けることが出来ないイノチル達が出てきた。ソラ達よりもさらに若い世代のイノチル達だ。

いくらイノチルだからと言って、3～4歳になり立ての彼らに、連日の襲撃に耐えられるだけの体力も精神力もあろうはずがない。

管理局の魔導師達によって攻撃を受ける度に……

一人、また一人と、居なくなった……。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

二年が経った。

最近は、管理局からの追っ手の手も緩まっているのか、それともソラ達の逃げるスキルが向上したのかは定かではないが。

だが、仲間の数は確実に減ってしまっていた。当初18人居たイノチル達は、ソラ達を含めて9人にまで減ってしまった。

「ソラ……。逃げるのはもう此処までだよ……。今度はこっちから仕掛けよう。今の僕らなら、あいつらにだって遅れは取らないよ」

「……それは俺も賛成だ。だが、相手は一組織の一部だからな、油断して掛かると痛い目に遭うぞ？」

「あぁ、それは2年前に嫌と言うほど思い知ったさ……。だからこそ、万全の体制で掛かる……。大丈夫さ、僕たち7人の王が揃った今なら……」

『王』という概念を考え出したのは、リクだった。レガリアというのは、つまりは王の証、玉爾の事である。
加えて、彼らは今後の戦闘では、コードネームを名乗るようになる。それは、管理局の罪を糾弾すると言う意味を兼ね、七つの大罪を元に考えられたモノでもあった。

リクは石の王、ラース【憤怒】

リーアは氷の王、エンヴィー【嫉妬】

レイスは水の王、スロウス【怠惰】

ネルは雷の王、グラトニー【暴食】

シオンは炎の王、グリード【強欲】

エステルは響の王、ラスト【色欲】

ソラは風の王、プライド【傲慢】

管理局の本当の姿を糾弾する、そんな意味を込めたコードネームを背に、ソラ達は攻勢に出た。一方的に襲われるのではなく、こちらかは仕掛け、敵を討滅する。

こうして生まれた、7人の王によって、管理局の手練れ達、一流の魔導師達が次々と抹殺されるという事件が発生した。

以前、クロノが話していたテロリスト、連続魔導師殺しの実行犯はソラ達であった。そう、ただそれだけの話だったのだ。

「や、やめ……すまない、俺たちはただ命令で……」

「言いたいことは……それだけですか？」

その日も、近づいていた追撃部隊の魔導師を追い詰め、先制攻撃によって敵の大部分をバラバラに分解した。

そして、残すところ一人になった魔導師であろう男に、リクが汚物を見るような目を向けて迫っていく。

「か、勘弁してくれ！！！　俺には、妻や子供が……！！」

「お前達が……僕たちに命乞いか……僕たちの仲間を何人も殺しておいて……先生まで奪っていったお前達が……」

「アレは命令だったんだ！！！！　仕方ないんだ！！！　頼む、こ

の通りだ！！！　見逃してくれ！！！」

情けない叫び声を上げながら、リクに命乞いをしてくる魔導師。だが、リクの表情は彼の命乞いに比例して、憎悪を纏っていく。

虫の良すぎる目の前の男に、ふつふつと怒りが競り上がってくる。

「虫の良いことばかり言って……。死んでいった子供達は……先生は……そんな言葉すら言えなかったんだぞ！！！！」

ドンッ！！！！

「ぐぎゃ！？」

リクがそう叫んだ瞬間、石のレガリアが波動を放ち、魔導師の男の体に、通常の５０倍の重力を放ち、男の体を地面にめり込ませ、肉の塊になるまで高重力にさらした。

「はぁ……はぁ……」

リクは、グチャグチャになった男の死体を睨み付けながら息を整える。自分の中の感情の高ぶりを必死に押さえ込もうとするが、黒い感情は止めどなく溢れてくる。

「敵を倒したからと言って、無警戒にその場に棒立ちになるなと教えたはずなんだがな。」

「はぁはぁ…ソラか……」

「敵を殺すのに、感情を出しすぎるな。攻撃が大ぶりになりがちだ。雑魚相手ならともかく、一流の奴相手じゃ、カウンターを狙われる

ぞ」

「……すまない…」

ソラの指摘は尤もだった。だが、リクは感情制御が苦手だ。憤怒の名前を背負うにはピッタリかも知れないが、戦場ではそれが命取りである。

管理局に喧嘩を売るように、いや、正確には殺られる前に殺るのスタンスにシフトしたわけだが、その成果もあってなのか最近は襲撃も殆ど無くなっていた。

魔導師を無駄に消費することを嫌ったのか、管理局イノチルから手を引こうとしている兆候なのかも知れない。

ここが、一種のターニングポイントであった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

が、新たな問題はソラ達の内側から生まれた。いや、ある意味では起こるべくして起こった意見の食い違いだったのかも知れない。

その事件は、ソラがティアナと出会う、半年ほど前のことだった。

「ラース、考え直せ。管理局そのものを転覆させるなんて、個人で出来ることの範疇を超えてる。いくらイノベイト・チルドレンでも犬死にするだけだぞ?!」

「君こそ何を言ってるんだい、プライド?　管理局は無数にある世

界を管理という名の名目で支配しようとしている。その過程で、一体どれだけの人の命を無造作に奪っているか……。プライド、管理局は滅するべき悪なんだよ」

それは、ラースが管理局を転覆、崩壊させると言いだし始めたことから始まった。

ソラの考えは、ネスターを始末すれば復讐を終えるという限定的なモノだったが、リクは局全体を破壊しないと気が済まないと言う考えだった。

「で、でも！！　管理局には悪い人ばかりが居る訳じゃないよ、もしかしたら、良い人だって……」

「ラスト……いや、エステル。私が言っているのは、局内部の人間がどうこうじゃない。管理局という組織・体制が悪だと言っているんだ。アレは、世界に必要ない。いや、あってはいけない組織だ」

「ラース、それは極論過ぎませんか？　局が存在することで発生するメリットが存在するのも確かですよ？自分の中の感情だけで物事判断することは、危うい選択だと僕は思います」

「エステルとシオンの言うとおりだ。考え直せ、ラース。折角先生が救ってくれた命を、あの組織のために無駄に消費するなんて、悪いとは思わないのか？」

ラース、リクの意見にソラ・エステル・シオンが反対の意思を示す。スロウスやエンヴィー、グラトニーはラース側に付いた。

「その先生を殺したのは管理局だ。これ以上、私たちと同じような事を起こさないためにも、局は潰す。その必要があるんだよ、ソラ、

エステル、シオン」

意見は平行線を辿る。
そも、ソラはネスターを始末した後のシナリオを既に考えていたのだ。復讐で生まれた生存本能は、復讐が達成されれば消えてしまう。その先の待っているのは、空しさと、虚無感。何もない、何もしたいと思わない。そんな何も生まれない感情しか残らない。

だからこそ、ソラは考えていたのだ、ネスターに次ぐ新しい敵を。その為のシナリオを既に作り出していたのだ。

しかし、リクが此処まで過激な行動に出るなど、予想もしていなかった。いや、ただ考えたくなかっただけなのかも知れない。リクならば、あの優しい少年なら、そんなことはしないだろうと。

その見通しの甘さこそが、この意見の食い違いを生んだのだと、ソラは後悔していた。

「兎に角私は……」

ドォォォォォォン！！！！

と、ラースが続けて何かを言おうとしたとき、ソラ達の隠れ家に大きな振動が響いた。
この感覚は、最近少なくなってきていたはずのモノだった。

「管理局の襲撃か……ふん、性懲りもなく……」

ラースは忌々しげに敵の砲撃があったであろう方角を見る。魔力反応が四方から感知できることを見ると、完全に囲まれているようで

ある。
どうやら、議論に集中しすぎていたらしい。
「まずいな……完全に包囲されてる……。脱出経路を作るのは骨だなこりゃ……」
「ちっ！」
ソラの冷静な判断に、ラースは舌打ちをしながら行動を開始する。
石のレガリアを履き、敵を迎え撃つつもりなのだろう。
「ソラ、話の続きはまた後で。今は生き残ることだけを考えよう。」
「言われなくてもそうするさ……」
ソラもそれに続いてレガリアを履く。どのみち、退路は無い。作らなければ、逃げられないことだけは確かだ。
此処でいつまでも問答を繰り返していても仕方ないだろう。
ソラ達は、迎撃組と脱出組に分かれ、行動を開始する。迎撃組は敵の数を減らし脱出経路を作る。脱出組は子供達を連れて逃げる役目だ。
脱出組には、スロウス・エンヴィー・グラトニー、そしてエステルが充てられた。
「ソラ、気をつけてね？」
「あぁ。そっちこそな。お前はどんくさいから少し心配だが……」
「そ、そんなことないもん！！！」

エステルとのやり取りもそこそこに、ソラは迎撃に向かう。この会話の後、再開まで数ヶ月かかるなどと、この時の彼らは知る由もなかった。

しかし、今回の襲撃は今までの中でも最大級のモノだと、戦闘が開始されてから痛感したソラだった。
敵の物量がかつて無いレベルだったのだ。

「無限の風（インフィニティ・エアード）！！！」

ソラが風のレガリアで、強烈な風を生み出して魔導師の大群に叩き込む。その暴風にさらされた敵は、一瞬で挽肉になって人の形を取れなくなって地面に落ちていく。

しかし、倒しても倒しても、敵の数が一向に減らないのだ。

「ソラ、この魔導師達……」

「あぁ……どうも、普通の人間じゃない……というか、生体反応が感じられない」

シオンと背中合わせに構え、敵に囲まれたソラ。
どういうわけか、今回襲ってきた敵から生体反応が感じられず、相手の意識を読み取ることも出来ないのだ。

これではまるで

「まるで、死人を相手にしてるみたいだ……」

「いえ、多分その考えは近いと思います。見て下さい」

シオンが良いながら、ある方向を指さす。そこには、おぞましい光景が広がっていた。

「あ……あぁ……きひっ！！」

「ぐあ……カカカカカ……」

「おいおいおい……いつから此処はホラーハウスになったんだ！！？」

「頭を砕かれているのに……まだ動くなんて……まさにゾンビですね……」

頭を吹き飛ばされた死体や、心臓のあるべき場所が空洞になっている死体などが、次々と動き出しているシーンを見て、さしものソラも良い気分では無かった。

シオンの言うとおり、今戦っている魔導師全員が、まるでゾンビのような生命力というか、しつこさで絶えず襲いかかってきているのだ。

「こりゃ……多分管理局の汚い部分ってことなのか？」

「恐らくそうでしょうね。死人を強制的に戦わせることの出来るような、魔法か薬かは分かりませんが、その類の手法があるのでしょう」

ソラとシオンは、話しながらも風と炎を駆使し、敵を次々と排除していく。中途半端に殺すと復活してしまうので、跡形もないほどの細かく分解したり、焼き尽くしたりと、その方法は様々だ。

「こりゃ、リクが局を潰したがる気持ちも、ちょっとは分かるな…。認めるつもりはないが……」

「同感です……」

そこから、ソラとシオンはまたバラバラになって戦い始める。子供達は、エステルは無事に逃げることが出来たのか。
ソラが心配していたのはそのことばかりだった。

その後のことは良く覚えてはいなかった。戦って、戦って、傷ついて……かなり深い傷も負っていたのかも知れない。
まぁ、イノチルの自然治癒力ならば、放っておいても直ってしまうのだが、流石に動き回っていては治るモノも治らない。

敵を何とか撒いたソラは、自分がどこにいるのかも分からない状態で、ボロボロの体に鞭を打って歩き続けた。
エステル達と合流したいところではあるが、それも絶望的に難しい。

「くそ……流石に……これは効くよ……」

ソラの腹部からは、大量の出血が見られた。いい加減に、どこかでジッとして体を休ませて治癒に集中しなければ危ないかも知れない。
いくらベクトル操作が出来ても、連戦を繰り返せば演算に狂いが出

てくる。疲労は、頭の回転を鈍らせソラのベクトル操作をも鈍らせる。

彼が此処までボロボロになっているのは、そういうわけだ。普段から反射していた攻撃でさえ、演算が狂うと大打撃に繋がってしまう。ある意味では、綱渡りな能力でもある。

そして、ソラは無人の屋敷に辿り着く。誰の所有物件かは知らないが、休めるのならどこでも良かった。

「ふぅ……痛ってぇな畜生……」

ソラは、七つの椅子が並べてある部屋に辿り着き、その内の一つに腰掛ける。人間、立っているだけで疲れるモノだが、此処まで何かに座れてホッとしたことはなかった。

「エステル……シオン……あいつらは……無事……なの……か……？」

ソラは、薄れゆく意識の中で、仲間の心配をしていた。危なっかしく、どこか放っておけないエステルの事、なぜか馬が合い、戦闘でコンビを組むと抜群に息の合ってしまうシオン。そして、危険な思想に身を沈めつつあるリク達。

「（いつから俺は……こんなに大勢のことを抱えるようになったんだ……？　いや、抱えることが出来るようになったんだ……？）」

自信の変化に、少し笑えてしまう。あそこまで人間が嫌いだったのに、ヴァルター達との交流で、悪くない、そう考えてしまえた自分

が居た。
そして、なによりそんな自分もまた、悪くないと、そう思えた。
薄れゆく意識、恐らく次に目を覚ましたときは傷も全快しているだろう。それまでの、少し長めの昼寝の時間だ。
が、その間際、ソラの脳裏に身に覚えのない女が浮かんできた。オレンジ色の長い髪、そして勝ち気な性格に違わぬ気の強そうな、それでいて美しいと形容できる顔。
会ったことのないはずの女のはずなのに、何故かホッとしてしまう。
「ティアナ……ランスター……」
知りもしない女の名前を、何故か口走るソラ。こんな事は今までに一回もなかった。もしかすると、瀕死の間際にあって脳内彼女でも作り出してしまったのかも知れない。
「……ティアナ……誰だっけ……？」
そう呟いて、ソラは意識を失った。
目を覚まして少ししてから、その女に出会うなどと、この時は知る由もないまま……

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「これが、私が話せることの全てです。」

「……」

「……うそ……」

「ひどい……」

「何なんだよ……それは……」

ティアナとなのは、フェイトとルークが、信じられないという表情で唖然としている。

まぁ、いきなり管理局の裏側を見せつけられて、信じるというのは難しい注文であろう。

「今すぐ信じろ、とは言いません。そんなことが出来るのは、頭のネジが数本抜けている人だけでしょうから。」

四人「「「「……」」」」

シオンの言葉に四人は何も言えない。シオンの言うとおり、少し時間が必要だろう。

時間がないわけではない、少しゆっくりと物事に思考を走らせることも悪くない。焦ってばかりでは、見えるモノも見えなくなってしまうモノだ。

「（ソラ、私は選びましたよ……。あなたは、どうするおつもりですか……？）」

シオンは、どこかに居るであろう友の名を呼びながら、心の中でそう呟く。

彼には彼の思惑が、ソラにはソラの思惑がある。人々の思惑、思考、

主張、行動、世界はそれらで構成されている。
思考のない世界など無い。人が存在するのならば、そこには必ず思考が生まれ、コミュニティが生まれる。

「（あなたが選ぶのなら、私もまた、あなたの剣になりましょう。世界との対話のためにも……）」

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

懐かしい夢を見た。出会いの夢、幸せな夢、別れの夢、悲しい夢。
手には暖かい感触、それがエステルの手だと分かるまで、少し時間を要した。明晰夢を見るなど、いつぶりだろう。そんなことを考えながらも、ソラは意識を浮上させる。

さっさとエステルを起こして、此処を出発しなければならない。局からの追っ手がこないとも限らないのだから。

だが、ソラの意思に反して目は一向に覚めない。夢と現実の狭間で、行き止まりに挟まれてしまったかのように、前にも後にも進めない。

「なんだ……これ……？」

「なん……だろうね？」

「おわっ！！？」

何となく呟いた独り言に、返事が来たのでソラは驚いてしまった。

見れば、いつの間にか隣にエステルが居るではないか。

「何してんのお前？」

「私に聞かれたって分かんないよ……。さっきまで、夢を見てたことしか覚えてないし……」

「なるほど、俺と同じだな」

どうやら、エステルも起きたいけど起きられない症候群の患者の仲間入りらしい。
ともあれ、さっさと起きなければ面倒なことになる。

「さてと、どうしたもんか……」

と、ソラが呟いた瞬間だった。
それは、突然やって来た。

リィィィィィィィィ！！！！！！！！

「「っ！！？」」

突如、ソラとエステルの耳を劈くような音が二人を襲う。瞬間、頭が割れそうなくらいの激痛がやって来る。

「う……ぐぅぅぅぅぅ！！！！？」

「な、何これ……！！？」

頭痛と同時に、まるで膨大な情報を頭に叩き込まれているような感

覚に襲われる二人。いや、実際に脳裏には数え切れない情報的概念が流れ込んでくる。

苦しみ

怒り

憎しみ

悲しみ

マイナスな感情が主な情報の濁流は、ソラとエステルの頭の容量を超えんばかりの勢いで流れ込んでくる。

まるで、何か大きなモノが、何かを伝えたいようだ。

「これ……叫び……？」

「憎しみ……なのか？」

二人が、その何かが伝えたいことの一端に触れた瞬間、彼らの意識は急浮上していった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「はぁ……はぁ……何なんだ今のは……？アレじゃあまるで……悲鳴じゃないか……」

「うん……私もそんな気がした……」

目を覚ましたソラとエステルは、息も絶え絶えといった様子でそう言葉を交わす。先程の情報的概念の洪水は、まるで何かの悲鳴に感じられたのだ。ソラとエステルにとっては……。なぜ、そのように感じ取ってしまうのかは分からなかったが……

『若様。今し方、私の中に保管されておりました、ブラックボックスの開封が確認されました』

「オルクス……？」

『主様、私の方でも同じ現象が……』

「ソニード？」

そして、時を同じくしてソラとエステルのデバイス、風のレガリア・オルクスと響のレガリア・ソニードから、同じタイプの報告がなされた。

これは偶然なのか、それとも……？

「中身は？」

『は、何かのファイル……設計図と思われます』

「ソニードの方は？」

『こちらは……映像ファイルのようです』

同時に開いたブラックボックス。その中には、二種類のデータが隠されていた。

この二つのデータが、ソラ達のこれからを、そしてティアナ達を、世界をも巻き込んだ、大きなうねりの発端になるなど、この時は誰もが予想していなかった。

Ｃｈａｐｔｅｒ．３　予告

新たなイノベイト・チルドレン、そしてソラとエステルとの邂逅。

???「私……ソラと……エステルのことは……好き……」

エステル「えへへ……そっか……／／／／／／」

ソラ「お前、絶対子供好きだろ？」

ティアナ達の決断。

ティアナ「私は……まだ、あいつに……あの馬鹿に言いたいことが山ほどあるの！！！」

なのは「ソラ君達の生き方は……悲しすぎるよ……」

フェイト「まだ……私たちにも何か出来ることがあるはずだよね……！」

ルーク「俺と同じで、まだまだ、あいつらはやり直せるさ」

リク達の宣戦布告。

リク「私たちは、あなた方管理局を断罪する者です。あなた方は、正義という隠れ蓑で真実を覆い隠し、世界を嘘で染め上げる……」

スロウス「だからこそ、あってはいけないんだよ……あんたらは……」

エンヴィー「消えてもらうわよ、この偽善軍団！！！」

グラトニー「む……」

ヴァルターが示した道、そして空のレガリアとは？

ソラ「お前に、やって欲しいことがある。」

スカリエッティ「ほう……、これはまた興味深い研究対象だ……」

エステル「世界の意思を受け止めるためのレガリア……それが空

のレガリア」

ソラの描いたシナリオ、そして裏切り？

ソラ「ご苦労だった道化諸君、此処まで、全て俺の計算通りだった。最早、お前達は用済みだ……」

リク「ソラ……？一体何を……？」

ソラ「ありがとう、リク、リーア、レイス、ネル。君たちは道化としては、特に使い勝手が良い駒だったよ」

リク「ソラあぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

悲しい敵対。

ティアナ「あんた、一体何やってるのか、本当に分かってるの！！？」

ソラ「愚問だな、ティア。俺はその為に生きている。俺は、俺の前に世界を跪かせる」

なのは「させないよ、そんなことは絶対に！！」

ソラ「邪魔をしないで欲しいな……俺にはもう、時間がないんだよ」

そして……

ティアナ「アンタは……もう、スオウでもなんでもない！！！アンタは！！！！」

ソラ「そうだ……俺はソラだ。空のレガリアを使って……世界を手に入れる男だ」

待ち人になるのは……ティア、それともエステル？

？？？「ずっと……ずっと待ってるから」

ソラ「あぁ……。待っててくれ」

Ｇｏ　Ｔｏ　Ｎｅｘｔ　Ｃｈａｐｔｅｒ！！

Ｆｒａｇｍｅｎｔ８　復讐とすれ違いと（後書き）

Ｆ２０Ｃ「不定期更新の件、ホントにごめんなさい！！！　二月も三分の二くらいが就活関連のイベントで埋まってしまっているので……」

ソラ「作者の将来も掛かってるっぽいし、出来れば応援してやって下さいな」

Ｆ２０Ｃ「あ～……大阪まで遠いし、金は掛かるし……何だってんだ畜生……。小説も書けない、エロゲも出来ない、友人と遊びにも行けないとか……私の知ってる春休みじゃない……」

ソラ「まぁ、人生の節目でもあるんだし、気張るしかないっしょ」

Ｆ２０Ｃ「うっす……頑張るっす……。次回の更新は、活動報告にてお知らせしますね～」

Ｆｒａｇｍｅｎｔ、ラストエンディングテーマ
『果て無きモノローグ』　ｓｏｎｇ　ｂｙ　ａｎｇｅｌａ

アニメ「蒼穹のファフナーＲＩＧＨＴ　ＯＦ　ＬＥＦＴ」挿入歌

Ａｃｔ２３　今の自分と昔の自分（前書き）

というわけで、約二週間ぶりの更新でございます。楽しみにしてくださっている方、いらっしゃいましたらごめんなさい。

今回からＣｈａｐｔｅｒ３、新キャラ幼女の登場でございます。カンフー同好会様、素敵なアイデアありがとうございましたｗｗ

加えて、ルークとフェイトの真面目？な話とか、やっぱりイチャイチャとか……そんな感じではじめま～すｗｗｗ

Ａｃｔ２３　今の自分と昔の自分

フウミ・フェリンシティという少女を一言で表すならば、そう、『不遇』である。

『不幸』言い換えても良いのだが、この不遇には不幸の意味も盛り込まれている。

彼女は生まれこそは普通の、それこそどこにでも居るような可愛らしい女の子だ。見た目も、生活感も、持ち合わせている倫理や道徳も、同じ学校で学んでいる、いや正確には学んでいた子供と大差ない。

しかし、彼女には人間とは決定的に違う部分が存在した。それは、決して彼女が何かをしたからと言うわけではない。そう、ただ単にそういう風に出来ていた、ただそれだけのシンプルな理由だった。

怪我をしても瞬きの間に治癒してしまうような、自然治癒能力。

子供の、しかも女の子とは思えないほどの身体能力、膂力。

まるで人の考えていることが分かっているかのような立ち振る舞い、読心能力。

加えて、感情の高ぶりと同時に発言する深紅の瞳に、その中に浮かぶ黒い十字架を模った紋様。

ざっと上げるならば、フウミはこれらの『異』をその身に宿してい

た。

加えて、これらの『異』が発現するまでは、彼女は普通の子供として、普通の友達と、普通の両親、普通の地域社会コミュニティの中で生きている事が出来た。

しかし、発現と同時にフウミの世界は一変し、今までは普通だと思っていた事柄、人間、コミュニティが彼女に牙を剥いてきた。

ある人は、『化け物!!! 近寄らないでよ!!』

ある友達だった子は、『どっか行け、魔女!!』

昨日まで普通に挨拶していたはずのお隣さんは、『となりに悪魔の子が住んでるだなんて…嫌だわ……』

周囲のほぼすべてが、一瞬で敵になった。フウミは孤立せざるを得ない状況に追い込まれてしまったのだ、『異』を持っているだけなのに、何もしていないのに。

だが、彼女の両親は、そんなフウミを見捨てることはなかった。自身の子供であり、宝物であるフウミを忌み嫌うことなど出来ようもなかった。

両親だけが味方だった、居場所だった、警戒しなくてもいい存在だった。

そう、過去形だ。

フウミの両親は殺された。悪魔を生んだ人間と、在りもしないレッテルを張られ、悪魔狩りの一環として、狂気に駆られた隣人や友人だった人たちによって、フウミの目の前で殺された。

最後まで、フウミの事を守ろうとした父親は四つ裂き刑にされ、両手両足をそれぞれ縄で縛り、四方向に牛や馬に引かせて体を裂いて殺された。

最後まで、フウミの事を放そうとしなかった母親は、腕を千切られた上で、生きながらに火あぶりにされ、殺された。

「や、め……やめ……やめて……よぉ…」

狂気に駆られ、高笑いを上げながら両親の命を奪い、『これは正義の裁きだ！！！』と、皆が叫んでいる。

そんな中で、フウミが口に出来たのはか細い抵抗の声だけだった。

彼女の精神は音を立てて崩れ始める、内向的な性格はさらに進行し、口数もほぼゼロになった。

両親を殺されたフウミは毎日を逃げて過ごすしかなかった。逃げて逃げて、逃げて逃げて逃げて……ひたすら逃げるしか、生き残る術はなかった。

逃げながら、フウミは考えた。両親が死んだのは、私が化け物だったからなんだ、と……

自分がいるせいで、二人が死んでしまったと、彼女は自分自身を責め続けた。

そして、いつしか消えてなくなってしまいたいとさえ考えるようになった。

しかし、幼心に死の恐怖は理解の範疇を越えた感情を、一時的にではあるがフウミの中に生み出す。即ち、生存本能だ。

居なくなりたいと考えていても、体は勝手に生きようとする。そん

な自分が、フウミは堪らなく嫌になり、自己嫌悪さえ抱くようになる。

そして、今現在。彼女はこれで何回目になるかも忘れてしまうほどの、命の危機に晒されていた。

「へぇ～、これが依頼にあった化け物のガキかぁ？」

「また随分とかわいい化け物もいたもんだなぁ」

目の前にいるのは、パッと見２０～３０代の男２人。この辺りではあまり見かけない顔に加え、あまり見かけない服装をしている。どこかホワイトカラー然としたその男二人は、値踏みするような目でフウミを見下していた。

だが、フウミの頭の中には、この男たちの考えが手に取るようにわかっていた。その実は、下心と、フウミの処分という二つ。『依頼』という単語から察するに、村の人間から雇われた、フウミを殺すための人材なのだろう。

「へへっ、局の仕事だから、また汗臭い仕事になるかと思ってたが……」

「あぁ、こいつはちょっとお楽しみが出来るなぁ？」

「……」

下種な表情を浮かべながら、一歩、また一歩とフウミに近づいてい

く男達。フウミは、彼らを睨み付けながらも、その場から動くことはなかった。いや、正確には動けないと言った方が正しいか。

フウミの体には、緑色の魔力で出来た拘束具。バインドと呼ばれる魔力で出来た縄が巻き付いていた。フウミの力を以てしても、この縄を引き千切ることは出来ず、身動きが取れないのだ。

そう、フウミは知るはずもないことなのだが、この男二人は魔導師、それも時空管理局の局員というわけなのだ。

「（あぁ、やっと終わるんだ……）」

フウミは迫りくる男たちの手を見つめながらそんなことを考えていた。死の恐怖からくる生存本能も、最早欠片も生まれてこない。身動きが取れない、逃げる事が出来ないという事実が、彼女の生きるという意思を根こそぎ奪ってしまったかのように。

思えば、自分自身の生に、一体どれだけの意味があったのか。忌み嫌われ、両親を奪われ、追い回され、殺されかけ、今こうして男たちの欲望の捌け口にされようとしている。

こんな自分の生に、一体何の意味があったのか。生まれてきた意味などあったのか。

この時の彼女の中では、その問いに対する答えは導き出すことは出来なかった。

「ぎゃあぁぁ！！！！？」

「があぁっ！！？」

「…？」

だが、フウミの死への覚悟は唐突に終わることになる。男たち二人が、いきなり横っ腹から吹き飛んだからである。

まるで、小さな竜巻のようなものが男たちの体をゴミ屑のように宙に放り上げ、彼方へと吹き飛ばしていったのだ。

「……」

その一部始終を見ていたにも拘らず、フウミの表情には驚きも恐怖もありはしない。いや、それらの感情を感じてはいるのだが、彼女はそれを表情に出すという人間らしさを失ってしまっていた。

「やれやれ。近くに同類の反応があったから来てみれば、幼女強姦の現場に出くわすとはな」

「……」

声がしたので、フウミはその声の主がいるであろう方向に視線を向けてみる。

そこには、ローラーシューズのような、少し後輪のウィールのデザインが特徴的な靴を履いた青年が立っていた。

服装はどこにでもいるような人間が着ているものではあり、見た目も普通の人間と変わりない。

しかし、先ほどの竜巻を発生させたのが彼ならば、少なくとも『普通』という形容は間違っている。

「君、大丈夫？」

「……？」

そして、彼に付き従う様に、というより一緒にいるのが絵になるとでも言えばいいのか、青い髪の女性がフウミの無事を確かめてくれた。幸い、怪我などはないが、フウミからすれば今のこの状況の方が重要であった。

「どうした？　喋れないのか？」

男たちを吹き飛ばした青年が、腰を低くして尋ねてくる。髪は黒く、瞳も同じ色。吸い込まれそうな、そしてどこか危うい、だが決して不快ではない青年の声に、フウミはようやく反応する事が出来た。

「しゃべ…れる……」

「おう、ならいいんだ。生憎、俺は手話なる物を使えるほど学があるわけじゃないからな」

たどたどしいフウミの声に、青年は満足そうに頷いてそう言う。だが、フウミとしては分からないことだらけだ。この二人は誰なのか、なぜ自分を助けてくれたのか、さっきの風は何なのか。

「俺はソラ、こっちはエステル。さっきの風は、俺の出したもんだ。でもって、お前を助けたのは、お前が俺らの同類だからだ」

「！？」

フウミは少しだけだが、表情を動かす事が出来た。

自分の考えていることを呼んでいるかのような青年、ソラの言葉にフウミは少し呆気にとられていた。

「驚いたか？　でも、お前にも俺たちと同じ事が出来るはずだ。さっきのロリコン共のバインドだって、魔力を吸収すれば外れたんだが……。まぁ、やり方が分からなかったのならしゃあないか…」

「どう…して……？」

どうしてそんなことが？

答えは目の前にあるのに、フウミはいまだに信じられなかった。自分と同じ存在、同じような力を持った存在が居るなどと、今日まで考えた事もなかった。

だが、現実はそうではない。居るのだ、フウミの目の前に。

「これでも信じられないか？」

「あ……」

ソラは、止めと言わんばかりに自分の目に黒十字を浮かび上がらせる。それは、フウミの目に発現するものと全く同じものであり、彼女がイノベイト・チルドレンであることの何よりの証拠だった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「はぁ～…やっと病院食から解放されたのに、全然すっきりしないよ……」

「あはは……確かに、ちょっと薄味すぎるよね」

ソラとエステルがフウミと出会っていたその頃、ルークとフェイトは検査入院から解放され、病院からの脱出に成功していた。

病院食＝薄味という逸話はそれなりに本当らしく、ルークとフェイトが入院していた病院はもろにそれだったというわけだ。

薄味料理から解放されたにも拘らず、ルークとフェイトの表情があまり明るくないのは無理もないだろう。

ソラ達イノベイト・チルドレンの存在と、過去。管理局の裏側の実態。悩むべきことが山のようにあったのだから。

「これから…どうするべきなんだろう……？」

「それは……管理局の人間として行動するか、別の道を行くかってこと？」

ルークの呟きに、フェイトはそう聞き返す。シオンが話した内容を聞く限り、管理局内部は真っ黒なのかもしれない。Ｊ・Ｓ事件においても、その一部が露わになったのだが、氷山の一角に過ぎなかったというわけだ。

管理局の闇は、予想以上に巨大である。

「それもそうなんだけど……ソラ達が、これからどうするのかを考えると……」

「そうだね……。他のイノチル達と違って、ソラとエステル、シオンは敵対するつもりはないみたいだけど……」

「うん……決して味方でもない。シオンも、話す事を話した後、姿を消しちゃったし……」

シオンは、ティアナ達に自分のしている事を話し終えると、そのままどこかへ消えてしまったのだ。まるで、ここまでが自分の役目だと言わんばかりに。

「ネスター少将……確か今は中将になってるはずだけど……。あんな非人道的な技術まで持ち出して、ソラ達を追い込んでいたなんて……」

「死なない兵士って奴か……。確かに、人が使ってもいい術式じゃない。でも、そこまでしないとソラ達イノチルを追い詰められないってことでもある。俺達がソラに近寄れもしなかったことを考えると、イノチルの力は、もしかすると俺たちの力じゃ持て余すかもしれない」

ソラは、ここに病院送りになった原因である、ソラとの戦闘を思い出す。

ベクトル操作か何かは知らないが、完全に圧倒されてしまった。身動き一つ、剣を振るう事すらできないという不甲斐ない結果。

それなりに腕に自信を持っていたはずなのだが、今では少し笑えてしまう。

「フェイト……俺たちは……弱いな」

「え…？」

ルークはそのまま、自分の中の不甲斐なさを聞いてほしいように、

気持ちを吐露する。フェイト相手でなければ、絶対にしないことではあるが、彼女としては嬉しいことでもあった。

ルークとフェイトは、駐車場に止めてある車に乗りながら、話を続ける。

「神剣使いだろうが、特別な力を持ってても、剣の才能があっても、根本的なところで負けてる。ソラは、未だに生きるか死ぬかの世界で戦ってる。少し前の俺がそうだったように」

「……」

「でも、俺は平和ボケしてたのかもしれない。安全な世界に、少し慣れ過ぎて来たのかもしれない」

ルークもまた、少し前まではデッド・オア・アライブの世界で剣を頼りに戦っていた。一体何人の命を奪ってきたのか分からなくなるほどに。

だが、フェイトと一緒に、故郷であるガリア帝国を支配しようとしていたＡＩ・イヴを破壊し、彼女と一緒になってからは比較的な平和な毎日を送っていた。

子供も出来、仕事も死とは縁遠いレベルの物ばかりだった。そんな暖かく、そしてソラからすれば生温い世界で、安らぎを実感して生きていた。

昔、自分の手で消してしまった時間を取り戻したいという、我儘な願いを少しずつだが実現させていたのだ。

「戦う上で、覚悟とか、心の持ちようだとか、背負ってるものとか

は何よりも重要なんだ。戦う上で必要なモノを持ってるソラは、今でも戦士なんだよ。それに比べて俺は、戦士であることから逃げ出して、ただ自分の居心地のいいところで昼寝してるだけなのかもしれない。覚悟とかを、忘れ去ったまま」

以前、アイリスにも言われたことがある、『ルーク様の目、少し優しくなりましたね』と。

聞こえだけを見ればいいことかもしれないが、その実、いざ命のやり取りをすればこの有り様だ。

優しさと怠惰は比例関係にあるのかもしれない。極論かもしれないが、人間は充足して生活を送っていると、心が穏やかになっていくものだ。

だが、それと同時に、充足する前の生活などで培った、ハングリー精神や向上心、戦いの場で言えば生存本能や、相手を手に掛けるという覚悟、それらが段々と痩せ細っていくのだ。

この前のソラとの戦闘は、その良い証拠だろう。いつの間にか、ルークの生活は充足したものになっていて、戦う上で重要な覚悟など痩せていたのだ。

その点、生まれてこの方途切れることなく、そして今現在も戦士であるソラに勝てるはずもなかったのだ。

「俺も、昔に戻らないといけないのかもしれない。戦士だったころに戻らないと、ソラに近づくこともできない。また同じように地面に這いつくばることになるかもしれないなら……俺は…」

「ストップ」

「ふにゅ！！？」

少し暗い話になりつつあったとき、急にフェイトが真面目な顔になりつつ、ルークの頬っぺたを両方から引っ張る。
どうやら、少し怒っているように見える。

「にゃ、にゃにすりゅんやよ!!　ひゃにゃふぃへ!!　（何するんだよ、離しての意）」

「ダメ。ルークがバカなこと言おうとしたから、これはそのお仕置きだよ」

「お、おひほひ？（お、お仕置き？）」

どうも、フェイトさん的にはルークの話に我慢ならないことがあったらしい。故に、ほっぺを引っ張りまくる刑に処されているのが、今のルークの現状である。

「昔になんて、戻らなくていいよ。ううん、戻っちゃいけない」

「？？？」

フェイトの言葉に、ルークは頬を引っ張られたままの状態でキョトンとしてしまう。

「確かに、昔の……戦うことしか考えてなかった頃のルークは強いよ？　でもね、私は、今のルークの方がずっと強いと思う」

「……へ…？」

「昔のルークはね、戦うことしか考えてなかったんじゃなくて、それしかできなかったんだよ？　心が壊れて、それでも取り戻したい

ものがあって、その気持ちを利用されて。戦うことしかできなかった」

死んだ姉を取り戻したい。昔のルークはそんな叶わない願いのために、戦って戦って、殺して殺して、それの繰り返しだった。

「一つのことしか考えられないから、その事だけを考えていればいい。だからこそ、昔のルークはとっても強い。でもね、そういうのはほんとの強さじゃないよ？」

「ふぇいとひゃん……（フェイトさん……）」

思わぬ言葉に、フェイトの呼び方が結婚前に戻ってしまったルーク。だが、フェイトの言う事だけは、しっかりと聞いていた。

「今のルークは、私や、シエルや、アイリス、ティアナやなのは、それにソラやエステルの事も心配して、一杯考えてくれてる。戦う事だけじゃなくて、周りにいる人たちの事を気に掛けて、守ろうって思ってくれてる。」

そうかもしれない。昔は、取り戻したいだけだった。でも今は、大事なものが増えすぎて、それを守りたいと思う気持ちが大きくなっていた。

「私はね、そういう優しい強さの方が、昔のルークの強さなんかよりも何百倍も頼りになるし、心強いって思えるんだ。」

「……」

フェイトは、ルークのほっぺを解放しながら、そう続ける。

これは彼女の価値観だが、ルークにとっては何よりも参考になる価値観でもある。根っこの部分から優しさで出来ている彼女の言葉、ルークと同じように悲しい過去を持つ彼女の言葉は、ルークにとって何よりも信じられるものだった。

「だから、ルークはそのままでいて？　優しくて、ちょっとエッチで、甘えたがりな、私の大好きなルークでいて欲しいな……」

「……（ボフン！！！）」

その台詞で、ルークは見事にハートキャッチされてしまった。これが、惚れた弱みというやつなのか、何年経ってもフェイトにはドキドキさせられっぱなしである。

「俺は……そのままでも……いいのかな……」

ルークは真っ赤になりながらも、確認するようにフェイトにそう尋ねてみる。

答えは、分かりきっていたが言葉にしないと伝わらないものもある。

「うん、いいよ。君はそのままで……」

「……わ、分かった…／／／／／／／／」

敵わない、ルークは一生、フェイトに頭が上がらないだろう。カカア天下になることは確実だが、こんな奥さんが相手ならばそれも悪くないと、ルークは思ってしまう。

「気を付けてね？　今度また変なこと言ったら、ルークの事、嫌い

になっちゃうかもしれないから…………って、本気にしないでね！！？　じょ、冗談だから、冗談！！！　だからそんな泣きそうな顔しないで〜〜〜！！」

「あぁ、刻が見える……」

「あぁもう！！　相変わらずこういう冗談に免疫がないんだから……で、でも、涙目になってるルークって、ちょっと可愛いかも……／／／／／／／／　も、モフモフしたくなってきちゃう……」

相も変わらず、ガラスのハートなルークに呆れながらも、そんなことを思ってしまうフェイトもまた、惚れた弱みというやつを実感していた。

「（もう、今すぐギューってして、ベッドの上でコロコロしたいかも……／／／／／）」

ルークを抱きしめて、ベッドをコロコロ転がるフェイトさん。是非ともＳＤ絵でご想像してみてください。ちょっと萌えます。

真面目な話から急転換し、このような甘々空間を作り出してしまう、万年新婚夫婦なこの二人は、恐らくこの先ずっとこのままであろうことだけは容易に想像できることだった。

２人「「（でも……本当に辛いのは……やっぱりティアナだよ…………）」」

同じことを同時に考え、悲しい気持ちを共有できる彼らは、恐らく

幸せなのだろう。
彼らの言う通り、今一番つらいのはティアナなのだろうから……。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「あはは……寝ちゃったね、この子……」

「ずっと追いかけ回されてたみたいだからな。疲れが一気に出たんだろ……」

場所は再び変わって、ソラとエステル、加えてフウミのいる世界に。フウミは今現在、ソラの背中におんぶされながら爆睡中である。今まで彼女を支えてきていた緊張の糸が切れたのか、ソラと一言二言、言葉を交わすと倒れるようにして気を失ってしまったのだ。

「町では悪魔扱い、両親は悪魔祓いの儀式の一環で惨殺、良くもまぁ人格崩壊しないで済んだもんだ」

「それに、今回は管理局の人間が絡んでだね。町の人が依頼したのかな…？」

「だろうな。自分たちじゃ手に余ると思って戦闘力のありそうなのに押し付けたんだろうさ。人間のやる事だ、そうそう珍しいことでもない」

ソラとエステルは、そう話しながらゆっくり歩みを進める。ソラはいつも通りだが、エステルの声には若干の怒りの感情が見られた。
まぁ、普通の感覚を持っているのならば、その類の感情を抱いても

仕方はない。

「怒るな、仕方のないことだ。これが人間なんだよ、エステル。」

「で、でも！！」

「分かってたことだろう？　この前、頭に響いたあの悲鳴を聞いたんだから」

「それは、そうだけど…。ねぇ、ソラ……本当にするの？」

2人にしか分からない、二人だけの話。だが、その話の内容にエステルはあまり乗っているわけではないらしい。

「オルクスから出てきたあの設計図、それとソニードに隠してあったあの映像データ。この二つを重ね合わせれば、見えてくる答えは一つだけだ。それに、これは先生の願いでもある。俺がやらなきゃ誰がやるんだっての」

「でも、でも……私は寂しいよ……。もしかしたら、ソラが……」

「まだそうと決まったわけじゃない。兎に角、今はまだ駒が足らない。その問題をクリアしないことには、何も始まらない」

ソラの目には、固い決意が見られた。それを見せられてしまっては、エステルは最早何も言えない。

これから始まるのは、対話。そして、もしかすると少し切ない物語……

「それに、一度やってみたかったんだよ」

「何を？」

ソラがエステルの方を振り返りながら、ニコッと笑ってそう言ってくる。

キョトンとしながらエステルが尋ね返すと、ソラはフウミを背負ったまま、楽しげに、そしてどこか寂しげに答えた。

「世界征服ってやつをさ」

Ａｃｔ２３　今の自分と昔の自分（後書き）

Ｆ２０Ｃ「ねぇ、なにこれ？」

ソラ「いや、あんたが書いたんでしょうが……」

フェイト「ルークゥ♪」

ルーク「フェイト～♪」

スリスリ（＊＾∇゜）（゜∇＾＊）エヘヘ

Ｆ２０Ｃ「誰か、機関銃持ってきて！！！それで私の頭の中の黒い感情をハチの巣にして！！！！」

ソラ「えぇい、落ち着けというに！！！」

Ｆ２０Ｃ「なんだよ畜生！！こちとら就活で精神ポイントガリガリ削られてるってのにこいつらはさぁ！！！」

ソラ「だ、だからそれはお前が……」

Ｆ２０Ｃ「こうなったら、ルークに不倫疑惑掛けてやろう。うん、そうすればフェイトさんもルークに愛想を尽かして……あれ？あの二人は？」

ソラ「もうとっくに帰っちゃったよ……あんたがアホなこと言ってる間に……」

Ｆ２０Ｃ「解せぬ…」

次回、Ａｃｔ．２４　『もう一度』

Ａｃｔ２４　もう一度（前書き）

さてさて、ティアナとスバルのお話会でございます。
私の中では、スバルは難しいことを考えるのが苦手ですが、決してバカではないというのがイメージです。
人の事を深く考えて行動できる、人間性の高い人物だと思っております。

Ｃｈａｐｔｅｒ３　オープニングテーマ
『パラダイムシフト』　ｓｏｎｇ　ｂｙ　片霧烈火
ＰＣゲーム「ＢＡＬＤＲ　ＳＫＹ　Ｄｉｖｅ１」挿入歌

Ａｃｔ２４　もう一度

どこか空虚な気持ちだった。思考を巡らせても、これからの事を考えても、何をするべきかを考えても、なぜか実行に移そうと思えない自分が居た。

そして、そんな自分が、堪らなく嫌になった。

「どうしちゃったんだろ……私……」

ティアナは、部屋のベッドに寝転がりながら天井を見てそう呟く。染み一つない、綺麗な天井だ。

大掃除の際に、思い切って手を付けた甲斐があった。そんな事を思いながらも、頭の中では別の事を考えながら、ただ時間の過ぎるのを待っていた。

こうしていても、何も始まらないと知りながらも……

「スオウ……ううん、ソラか……。あんたはどうして、大嫌いなはずの管理局に……そこの一員である私に力を貸してくれてたのよ……。」

疑問を口に出してみても、やはり答えは返ってこない。心は空虚なままだ。

「あんなことまでされて……大切だった人を殺されて、追われて、傷つけられて、戦って……。矛盾してるわよ……あんたらしくもない、合理的じゃないわよ……」

少し責めるような言い方になってしまうが、実際顔を見てしまえば

ビンタの一発でも決めそうな気分である。だが、やはり今の彼女にはそれすら億劫で……

「……」

思考のループ、頭の中の押し問答は、ピタリと止んでしまう。

三日前からずっとこの調子だ。なのはは、気を遣っているのかそっとしておいてくれるし、クロノはクロノで、ティアナに休暇を与えてくれた。それ故に、今の彼女にはするべき仕事はない。いや、あったとしてもまともにこなせるのかは微妙なラインである。

ソラが居なくなってから、何かが欠けてしまったように思える。加えて、自分が何をするべきなのか、何をしたかったのかさえ、昔はハッキリしていたものが、今では霧で靄がかかったような状態だ。

「はぁ……」

これで何回目の溜息か分からない。何百回、下手をすれば何千回かもしれない。数えることはしていないので、正確なところは不明だが。

と、そんな時だった。

ピンポンピンポンピンポーン！！！！

突如、ティアナの部屋のインターホンが連打された。まるで子供が親を急かすようなリズムで、機械的な音が軽快にティアナの耳に飛び込んできた。

「誰……？」

ティアナは、少し気怠そうに、インターホンのチャンネルを開き、相手を確認する。このインターホンの鳴らし方はなのはでもなければ、ましてやクロノでは絶対にない。フェイトやルークという線もあるが、あの二人もそんな子供染みたことはしないだろう。

『ティア〜〜〜！！　私、スバルだよ〜〜〜♪　遊びに来たよ〜〜〜〜！！！』

「す、スバル！？」

インターホンの向こう側から飛んできた能天気且つ、元気の有り余った声の主は、ティアナの親友兼同僚である、スバル・ナカジマのモノだった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「うは〜〜〜〜♪　このケーキおいひぃ〜〜〜〜〜♪」

「あんたは…………見舞いに来たのかケーキ食べに来たのかどっちなのよ…………」

目の前で、お土産として買って来たらしいケーキを頬張りながら、スバルは恍惚とした表情を浮かべる。なんというか、見ているこっちまで幸せな気分になってしまいそうな、そんな表情をスバルを浮かべていた。

「はほははんはら、ひははほほうふふぉひへひへっへ…………」

「食べながら話そうとしない！！　しっかり噛んで、呑み込んでから話しなさい！！」

相変わらずのスバルに苦笑しながらも、軌道六課に居た頃のように、子供っぽさの残るスバルに注意するティアナ。なんだか、ものすごく懐かしい気持ちになってしまった。

三年近くもたっていれば、そう感じるのも当然なのかもしれないのだが。

「モグモグ……ゴクン！！　えっと、なのはさんから、ティアの様子を見てきてって言われて、ちょうど休みだったから来たんだけど、迷惑じゃなかった……かな？」

「あぁ、そういう事ね……。全然迷惑なんかじゃないわよ、寧ろ大歓迎。ちょうど、話し相手が欲しかったところなのよね……」

あのまま思考のループ、自問自答を繰り返していても、恐らくは時間の無駄。何一つ前には進まなかっただろう。

だから、こうしてスバルが来てくれたことは、ティアナにとっては嬉しいことでもあった。

気を遣ってくれたなのはに、心の中でありがとうを言いながら、ティアナはそう考えた。

「……ティア……悲しい顔してる」

「……そう……かしら？」

「うん。……ソラ……だっけ？　どこかに行っちゃったのって……」

「……（コクン）」

スバルの指摘と、ソラに関する問いに、ティアナは首を小さくたてに振る。スバルも大方の事情はなのはから聞いているのだろう。難しいことを考えるのが得意ではない彼女だが、人の感情、特に寂しい感情、悲しい感情には少し敏感だ。

六課時代も、自分を追い詰めて無理な訓練をしていたティアナをいつも気にしていた。

頭の良し悪しと、人間性の高さは全くの別物だ。

スバルは、間違いなく人間性の高さという点では非常に優れた女性なのだろう。

「あいつは……あいつと、エステル達は……。ずっと、裏切られ続けて……奪われ続けてきた……。」

本当なら、もう少し自分たちの近況などを話してから、少しずつこっちの話を織り交ぜるつもりだった。

最初から暗い話をしても、スバルが喜ぶはずがない。折角見舞いに来てくれたのだから、そのくらいの気持ちのお返しはしたかったのだが、スバルの問いかけ方があまりに優しかったからか……ティアナは自分が先程まで考えていた事を話し始めた。

「化け物って蔑まれて、利用されて、捨てられて……やっと手に入れた小さな幸せも……奪われた……。それも、私たち管理局に……」

「……」

スバルは、黙ってティアナの話を聞いてくれる。落ち着きのない彼女だが、成長がそうさせたのか、聞き上手なのかは分からないが、話し易いことだけは確かだった。

「あの時……あいつが居なくなったとき……。何も出来なかった……。あいつは、とんでもなく強くて……やろうと思えば、あの場にいた全員を殺すことだって出来てた……。正直言うと……怖かったのかもしれない……」

「でも、ソラは何もしなかったんでしょ？」

「えぇ……。それどころか、私に迷惑を掛けないように、エステルを連れてどこかに消えた……。私の地位と、夢を、あいつは理解してくれてたんだって……その時初めて気が付いた」

ポツリポツリと、ティアナは語る。頭で考えなくても、口が勝手に動いて言葉を紡いでくれる。

相手がスバルで良かったと、本気で思った。他の誰にも、こんな醜態を見せるわけにはいかなかった。それをした瞬間、今まで積み上げてきたティアナ・ランスターという人間の意味を見失いそうになると思ったからだ。

「管理局の事なんて、大嫌いなはずなのに……。ほんとなら、私なんかと一緒に居たくないと思ってもおかしくないはずなのに……。あいつは、そこまでしてくれた。正直、嬉しかった……」

「じゃあ、なんでそんなに辛そうなの？」

「……」

そのスバルの問いに、ティアナは答えられなかった。いや、答えは持っているはずのだが、それが言葉として出てこないのだ。
自分でも、なぜここまで辛いのか分かっているはずなのに、言葉に出来ない。
ここ最近の彼女の憂鬱の本当の原因は、もしかするとこれなのかもしれない。

「ティアは……ソラと一緒に行きたかったんじゃないの？　ソラの事……好きだったんじゃないのかな？」

「え……」

スバルの口から飛び出した言葉に、ティアナは思わず間の抜けた声を出してしまった。

『ソラと一緒に行きたかった、連れて行って欲しかった』

『ソラの事が……好きだった』

この二つの言葉が、彼女の心に大きな波紋を起こした。池に石を放り投げたかのような、大きな波紋だ。

「そ、そんなこと……私は……」

「違うの？　だったら、なんでそんなに動揺してるのかな？」

スバルの綺麗な瞳が、ティアナを射抜く。昔は、こんな話をする事はなかった。まぁ、そんな暇がなかったと言えば言い訳になるが、六課に居た頃はこの手の話にはほとんど関わりがなかった。

「（わ、私は……私は……）」

スバルと視線を合わせられない。何故か、心の奥底まで見透かされそうな、そんな感覚にさえ陥った。

だが、『ソラと一緒に行きたかった』・『ソラの事が好きなのかもしれない』、という新たな二つの命題を得たティアナの思考には、それに対応する新しい回答が出された。

「か、仮にそうだったとして……私は……あの子に勝てない……。私は……名前を呼んでもらえなかった……！！」

あの子……つまりは、エステルの事だ。ソラは、迷うことなくエステルの名前を呼び、彼女を抱きかかえて姿を消した。

彼女を連れていくことが当然かのように。あのまま、彼女がその場に残った時の事を考えれば、当然の事なのかもしれないが、それは問題として些事だ。

「エステルってこのことだよね、あの子って？……どうして、勝てないって思うのかな？私の知ってるティアは、そんなに簡単に何かに諦めを付ける人じゃなかったよ？」

「だって！！！　エステルは１２年もソラと一緒にいたのよ！？……１２年も……ずっと一途に……ソラの事だけを好きだった……。……勝てるはずないじゃない……」

先程の二つの命題によって、ティアナは少しだけだが自分の気持ちを理解した。ソラの事を、好きなのかもしれないという仮定が存在しているという事を。

しかし、同時に思ってしまったのだ。ソラの隣には、ずっと……１２年もエステルが居たのだ。

自分は精々が半年と少し……。お互いを知るのにも、関係を進めるにも、勝てる気がしなかった。

「あの子は、ソラと同じ存在だし。あの二人が一緒にいることは、見てるだけでも絵になるって思う、思っちゃうのよ！！ソラの隣には、あの子が居るのが似合うって、そう思っちゃうのよ！！」

あの二人は、確かに一緒にいると絵になった。まるで、最初からそうであるかのように。名刀と、それを受け止める鞘のように、最初からそう在るべきもののように思えた。

自分でそう思ってしまっている以上、エステルには時間でも、気持ちでも負けてしまっている。自分の好きかもしれないという、曖昧な仮定では勝てる気がしなかった。

「そんなの、当たり前じゃないのかな？」

「……」

ついに、スバルにまでそう言われてしまった。

いや、今のこの醜態を見れば、ソラとエステルの事を知らない彼女でも、そう思ってしまうのは仕方のないことかもしれない。

しかし、スバルはさらに続ける。

「だってさ、ソラとエステルが一緒居るところを見て、似合うって思ったのは、ティアだよね？　だったら、ソラとティアが一緒にいるとき、それをエステルが見てたら、エステルはどう思うかな？」

「エステルが……？」

そんなことは考えたことも無かった。ティアナは、自分で見ていたソラとエステルの絵だけを考えていた。そして、その絵がとても似合うと思った。

しかし、逆に考えてみると、ソラとティアナが一緒にいるところをエステルが見ていたならば、彼女はどう思うのだろうか？

「もしかしたら、エステルも同じような事を考えてるのかもしれないよ？　『ソラとティアの二人は、とっても絵になる。ライバル出現だ！！』って、危機感を持ってるかもしれないよ？」

「そ、そんな事……あるはず……」

「なんで、在るはず無いって分かるの？　二人の事を見たのは、ティアじゃなくてエステル。考えてるのもエステルだよ？　ティアは、エステルの心が分かるわけじゃないよね？」

そうだ。あくまで、ソラとエステルの二人がお似合いだと思ってしまったのはティアナだ。

だが、エステルもまた、ソラとティアナの関係に危機感を覚えていたのかもしれない。いや、人の思考を読み取れるイノベイト・チルドレンである彼女ならば、ティアナの思考の奥深くまでを理解していた可能性もある。

スバルの仮定は、観測者と観測対象は一つではないという事だ。観測者と観測対象次第で、観測者の思考は異なる。考えてみれば当たり前の事だろう。

考えていることが完全に同じだという人間など居るはずがない。違った考えを持っているからこそ、人は人を理解しようと努力する。

そして、思考が近しいものになった時、人と人は、互いを理解したという錯覚に陥る。

人間同士は、完全には理解し合えない。お互いの距離を限りなくゼロに近づけることしかできないのだ。

思考の距離、相互理解までの距離がゼロになるという事は、極論ではあるが自分がもう一人いると言ってもいい。全く同じ思考をしている人間などいない、居るとすればそれは、鏡に映った自分くらいだ。

「確かに、エステルはソラととっても長い時間を過ごしてきたんだと思うよ？　でも、ティアとソラの半年間っていう時間も、同じくらいの価値があるんじゃないかって、私は思う。」

「なんで……そう思うのよ……？」

「だって、ティアがここまで気にする男の子なんて、私見たことないもん。それだけ真剣に考えられるってことは、ティアとソラが一緒に過ごした半年間には、それだけの意味があったってことじゃないのかな？」

「あ……」

１２年という歳月は、確かに長い。加えて、あの二人にとっては密度の濃い……意味の深い１２年だったに違いない。

だが、だからと言って、ティアナがソラと過ごした半年間の価値が、それ以下だと誰が言えようか？

問題は、相手の事をどれだけ真剣に想えるか。想えるようになったかである。ティアナとソラの半年間には、エステルとソラの１２年

間に負けない価値があるはずなのだ。

そうでなければ、ティアナがここまでソラの事を真剣に考えるなどあり得ない。男なら誰でも良いなどという気持ちは全くない。自分が、そんなに安い女だとはティアナは欠片も思ってはいない。ティアナがここまで真剣になれる相手、それがソラだった。故に、彼との半年間にはそれだけの価値があったという事だ。

「ティアは、面倒見がよくって、すっごく美人だし、スタイルもいいよね。相手の事をしっかり考えて行動できるし、私から見ても魅力的だと思うよ？　そんなティアなら、エステルって子にも負けないって私なら断言できるよ。なんたって、相棒だもんね♪」

「……相棒……か……」

スバルの言葉には、本当に説得力があった。伊達に、自分で相棒を名乗るだけのことはある。

だが、ティアナの心は確かに霧が晴れていった。先ほどまでの陰鬱とした気持ちなど吹き飛んでしまった。

「スバル……。私はまだ……スタートラインにも立ててなかったのね」

「あはは……。そうだね、立つ前に棄権しちゃうところだったね？　でも、今はどこに立ってるかは分かるよね？」

確認するかのようなスバルの問いかけ。挑むかのような、そんな彼女の瞳にティアナは力強い視線を返し……

「当ったり前でしょ！！　私を誰だと思ってんのよ！！？」

「あっはは♪　うん、それでこそ私の知ってるティアだよ！！」

そして、二人は同時に手を挙げて……

パァン…！

ハイタッチをして、手を握り合った。

何年経っても、目の前の相棒は変わらない。ずっと、自分の味方で、掛け替えのない親友であるという事を改めて確認するかのように。

「私はまだ……あのバカに言わなきゃならないことが山ほどある。だから……私、もう一度あいつに会うわ。会って、話をする……ううん、話がしたい！！」

そう言って立ち上がったティアナは、力強く、いつものような凛とした表情に戻っていた。

執務官、ティアナ・ランスター。これが彼女の本当の姿だ。

「うんうん！！　私ももちろん手伝うよ！！　というか、クロノ提督からの直々の依頼でもともとその予定だったしね♪」

「てことは、またあんたのお守りを私がするわけね……」

「え～！！？　それってちょっとひどいよティア～～～。私ももう、一人前の魔導師なんだから！！」

まるで昔に戻ったような、そんな楽しい会話をしながら、お互いに笑いあう二人。

そうだ、これでいいのだ。すべては、ここから始まっていく。諦めも、後悔も、まだまだ早過ぎる。

ｐｒｒｒｒｒｒ……

と、そんな時だった。ティアナの部屋に据え付けられているコンソールから通信の知らせが入ったのは。

発信者は、フェイト・Ｔ・ハラオウン。

「フェイトさんからだね……？」

「みたいね。何かあったのかしら……？」

スバルとそう言いながら、相手を待たせるのも失礼なので、ティアナはすぐに通信チャンネルを開く。

すると、そこには真剣な表情のフェイトが映し出された。

『あ、スバルも一緒だったんだね。よかった……、連絡を入れる手間が省けるね……』

「お久しぶりです！！　フェイトさん！！」

『うん、久しぶりだねスバル。いつも通り、元気みたいでホッとしちゃったな。』

真剣な表情を少し柔らかくし、フェイトはスバルにそう答える。

だが、それも一瞬の事だ。次の瞬間には、フェイトの表情は真剣なものに戻ってしまう。どうやら、用件はかなり切迫した内容らしい。

『ティアナ、スバル。今、クロノから入った情報だよ。ソラが……現れたの』

「「!?」」

フェイトの一方に、スバルとティアナは驚くと同時に息を飲む。情報と、フェイトの表情からして、彼女もまたソラが現れた場所に移動中なのだろう。

「一体どこですか!!?」

ティアナが、すぐにそう問い返した。少し失礼かもしれないと思いながらも、口は勝手にそう動いていた。

そして、フェイトの口からソラが現れた場所の名前が明らかにされた。だが、その場所はあまりにも意外で、それと同時に因縁のある相手が居る場所でもあった。

『スカリエッティが拘留されている、衛星軌道拘置所……ソラは今、そこに居る』

何かが、ティアナ達の思いもよらない何かが、確実に始まりつつあった……

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

――――衛星軌道拘置所

「と、止まれ！！！　ここは管理局直轄の……ぐえ！！？」

拘置所の入り口にて、人間が一人吐瀉物を地面にまき散らしながら、倒れ伏した。死んではいない、だが、決して無事でもない。憲兵であろう男は、四肢の骨をあり得ない方向にへし折られ、白目を向いて意識を手放していた。

「うっせぇんだよ、タコが。」

ソラは、地面に力なく倒れている男の方を見ることなくそう吐き捨てると、無機質な拘置所のドアを見つめる。彼がここに来た理由はただ一つ。足りない駒を揃えるためだ。

「これが……ここからが始まりだ。」

ソラは静かに首にかけていた十字架型の待機中のデバイスを手に取り、セットアップした。同時に、少し楽しそうに、そして切なげな表情を浮かべながら、ソラは呟いた。

「さて……戦争を始めようか？」

Ａｃｔ２４　もう一度（後書き）

Ｆ２０Ｃ「というわけで、ティアナとスバルの語らい、でもって復活回でしたね」

スバル「えへへ～、私大活躍だったね♪」

Ｆ２０Ｃ「前書きにも書いた通り、スバルは基本頭のいい子だと思うんですよね。勉学とかの方向ではなくて、人間的に頭のいい子」

スバル「う～ん、そんなつもりはないんだけど、ティアが元気になってくれただけで、私は嬉しいよ」

Ｆ２０Ｃ「流石は相棒ですね。さてさて、次回はスカさんの登場、でもって戦闘回でございます。ソラの圧倒的な性能に心奪われてくださいなｗｗ」

Ｃｈａｐｔｅｒ３　エンディングテーマ

『Ｉ　ｐｒａｙ　ｔｏ　ｓｔｏｐ　ｍｙ　ｃｒｙ　－ｌｉｔｔｌｅ　ｓｅａ　ｓｔｙｌｅ－』　ｓｏｎｇ　ｂｙ　川田まみ

敢えて言わせてもらおう……Ｉ' ｖｅ　Ｓｏｕｎｄは素晴らしいと！！！！

Ａｃｔ２５　鉄格子の中での再会（前書き）

鉄格子、というか務所なんですけどね。

今回はスカさんとソラの邂逅、でもってティアナ達との悲しい戦いの始まりとなっています。

ソラの本性、力の片鱗等々……物語も中盤を終え、そろそろ終盤に差し掛かる感じになってきましたね。

この話を完結させた後はどうしようかと最近考えているんですよね……。

けいおん！小説に手を出すか、はたまたなのは小説で新しいのを書くか……悩みます。

ちなみに、なのは小説で書く場合、ヒロインはこんな感じで絞り込んでます。

候補？　ギンガさん

候補？　アインハルト（ｖｉｖｉｄ読む必要ありますよね……）

って二人しかいねぇｗ

まぁ、まだ構想の域を出ていないので何とも言えませんが。現段階では、かなりの確率でけいおん！に手を出しそうですしねｗ

と、お話はこの辺りにして、本編をどうぞ～

Ａｃｔ２５　鉄格子の中での再会

Ｉｎ ｔｈｅ ｗｏｒｌｄ，ｅｘｃｅｐｔ ｔｈｅ ｏｎｌｙ ｗａｙ ｔｈａｔ ｙｏｕ ｃａｎ ｎｏｔ ｗａｌｋ ａｎｙｏｎｅ．
Ｗｈｅｒｅ Ｄｏｅｓ ｔｈｅ ｒｏａｄ ｗｉｎｄ ｕｐ，ｎｏｔ ｔｏ ａｓｋ．Ｅａｒｎｅｓｔｌｙ ｐｒｏｍｏｔｅｄ．

世界には、キミ以外には誰も歩むことのできない唯一の道がある。
その道はどこに行き着くのか、と問うてはならない。ひたすら進め。

フリードリヒ・ヴィルヘルム・ニーチェ（ドイツ）

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

ドォン……

振動が独房全体を震わせる。いや、独房だけではないこの拘留所全体が揺れているかのようだ。
そんな中にあって、厳重な警備によって囲われている一人の受刑者、元広域次元犯罪者・ジェイル・スカリエッティは普段と変わりない、不遜な表情を浮かべながら独房の中で過ごしていた。
外で何が起こっているのかは知らないが、彼の取っては興味の範囲外。気にする必要も、気にするつもりも、慌てることもありはしな

い。

彼にとって、興味対象に当てはまらないものなど、存在しないも同じことである。

ドォン……ガシャアァァン！！！！

「ふむ……とは言っても限度というモノはある」

しかし、興味対象に入らずとも、これほどの轟音だ。彼の思考を乱すには十分すぎる。脳内での思考実験を邪魔されたスカリエッティは、まぶたを開き外の情報を得るために独房の外に視線をやってみる。

と、その時だった。

パキ……バキ……ガシャアァァァァァァァァン！！！

なんと、独房に通じる唯一の扉、それも厚さ一メートル・毎分ごとに変わるランダムパワスワード式のロック・耐熱・耐寒・対魔法攻撃等々……その他様々な加工や機能で魔改造されている独房を塞ぐドアが、綺麗に吹き飛んだではないか。

吹き飛ばされたドアが、スカリエッティの前方・僅か１０センチ前を掠めて、独房内の壁に突き刺さった。

「やれやれ……随分と荒っぽい面会だな」

凶器にしか見えない分厚いドアが目の前を掠めていったにも拘らず、スカリエッティは表情一つ変えることなくそう呟く。

しかし、ドアを吹き飛ばした張本人が独房内に入って来ると、スカリエッティは僅かだが愉快そうな顔をする。
手荒い面会人の顔に、見覚えがあったからである。

「よう、天才科学者」

「……ふ。彼の、ヴァルターの教え子である君にそう呼ばれると、なかなかどうして寒気がする。だがまぁ……よくもこんなところまで来たものだよ、ソラ」

ドアを吹き飛ばし、独房内に入って来たのは、風のレガリアを履いた青年、ソラだった。
スカリエッティが最後に彼を見たのは、ヴァルターとの最後の通信の時だ。つまりは、軽く数年ぶりの再会というわけになる。

「どうやってこの拘留所に忍び込んだのかな？　私が言うのもなんだが、ここの警備は鉄壁のはずだ。映画のような華麗な潜入ミッションを演じるような余裕もないはずだがね」

「潜入？　俺がそんな面倒なことするわけないだろうが。正面から突破してきたんだよ」

ことも無さ実にそう言うソラ。だが、実際に彼は正面玄関から堂々と拘留所に入り、邪魔する憲兵たちを半殺しにしながら、スカリエッティの拘留されている、この独房目指してやって来たのだ。

「おやおや……流石はイノベイト・チルドレンと言ったところかな。なかなかどうして興味深い……」

「お前のマッドサイエンティストっぷりも相変わらずだよ、スカリ

エッティ」

「ふふ……。まぁ、そんなことはどうでもいい。今日は一体何の用でここに来たのかな？　見たところ、私に何か用事があるように見えるが？」

ふざけたやり取りもそこそこに、スカリエッティは本日のソラの用件を尋ねてくる。まぁ、こんなところまで、わざわざ拘留所にカチコミを掛けてくるくらいなのだ。
ただの暇つぶしという事はないだろう。

「あぁ……。お前に造ってもらいたいものがあってな。そいでもって、ここからお前を連れ出しに来たってわけだ」

「ふむ……私に造ってほしいものかい？　だが、内容にもよるな。詰まらないモノなら私は降りるよ。ここから出られるというのはそれなりに魅力ではあるのだがね」

「相変わらず、興味のないものにはドライな奴だな」

まぁ、スカリエッティがこういう反応を見せることは想定の範囲内だった。科学者気質が強すぎると、興味の枠内に入らないことに対して、とことん無関心になるという、ゲーム内などの敵キャラのテンプレのような設定だが、スカリエッティのようなタイプにはそれが当てはまる。

「安心しろ、造ってもらいたいものってのは、お前がこれから興味を持って止まないモノに対する、アプローチのための道具だ。」

「ほぅ……私が興味を持って止まないモノかね？」

「あぁ。まぁ、まずはこの映像データを見ろ。ここから出て、俺達に協力するかどうかはその後で決めるんだな」

ソラは、小型のＰＤＡを懐から取り出し、スカリエッティに投げ渡す。そのＰＤＡには以前、エステルのデバイス内にブラックボックスとして格納されていた映像データが入っていた。

スカリエッティは、剣呑な瞳を動かしながらＰＤＡを操作し、映像データを再生し始める。

そして……

「ほぅ……くくくくく……これはこれは……」

先程までの剣呑な瞳は、徐々に怪しい光を帯び始める。一般的な人間に言い換えるのであれば、生気が戻って来たと言えばいいだろう。

詰まる所、ソラの手渡した映像データの中には、スカリエッティの興味の対象になり得るものが入っていたという事だ。

「はっはっはっはっはっは！！！！！！　これはいい！！！！　実に興味深い！！！！研究対象として大いに興味が湧いた！！！！」

映像データを見終わったスカリエッティは、心底楽しそうに・嬉しそうに・愉快そうに、気持ちいいくらいに大笑いした。

まるで、新しい玩具を手に入れた子供のように、純粋な喜びに打ち震えているかのようでもあった。

「さて……。じゃあ、改めて返事を聞こうか？　ここから出て、俺

に協力するかどうかを」

「ふふふ……いやはや、本当にあの男は面白い問題を私に……君たちに残したものだよ……。感動すら覚えるね……。」

スカリエッティは、ソラの問いに対して、愉快そうに笑いながらそう呟いた。

彼の瞳は、先ほどまでの囚人のそれではない。すでに、彼は科学者・スカリエッティに返り咲いていた。

「いいだろう……。この問題は実に興味深い研究対象だ……。君の欲しがっているものも作ってみせようじゃないか……」

「よし……交渉成立だ」

この瞬間、ある意味で史上最強最悪の協定が結ばれた。この協力関係が生み出すものが、世界に何をもたらすのか……すべてを知るのはソラ達だけだった……

「さぁて……スカリエッティ。お前はここから逃げるための手段を用意しろ。方法は何でもいい。」

「了解した……ふふ……。君は何をするのかね?」

「そろそろ、面倒な人たちが来るころだろうからな。その足止めだよ」

ソラとスカリエッティは、そう話しながら独房を出る。

ソラ自身、ここまで暴れておいて何もないまま逃げられるなどとは

思っていない。間違いなく、管理局の連中がここにやって来るだろう。

となれば、スカリエッティを連れての正面突破は少し面倒だ。ならば、彼の頭脳を利用してスマートに逃げる方がいい。無駄な体力を使うのも建設的ではない。

こうして、事態は徐々にだが、確実に始まりつつあった……

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「こ、これは……！？」

「憲兵だけじゃなくて……常駐してるはずの魔導師まで……」

ソラの出現……軌道留置所に現れた侵入者の一報を受けて、ティアナにフェイト、そしてルークとスバルが留置場の入り口に立っていた。

入り口には、四肢を完全にへし折られ、意識を失っている憲兵が倒れ伏している。

加えて、留置所内の廊下にも常駐している魔導師が倒れていることが窺える。

「よかった……意識を失ってるだけみたいだね……」

「こっちの魔導師の人も同じです」

フェイトとティアナが負傷者の状態を確認する。幸いなことに、意識を失っているだけのようなので、命に別状はないようだ。

だが、地面に倒れて意識を失っている局員が、まるでヘンゼルとグレーテルが落としておいたビスケットのように、廊下に延々と続いている。

「これ……ソラ一人でやったって言うのか……？」

「現場からの最後の通信では……侵入者は一人。黒髪の青年で、赤い目に黒い十字模様が浮かんでいるって」

「という事は、間違いありませんね」

「で、でも、一人で拘留所を制圧なんて……」

ルークが信じられないという表情を浮かべながらそう言うが、フェイトが冷静にそう返す。報告にある通りならば、この惨状はソラ一人の手によるものだろう。

ソラの事を知らないスバルも、彼の能力に驚きを隠せないようだ。

「これが……あいつの本当の力……。ううん、まだ全然本気じゃない。あいつは、一人でフェイトさんとルークを動けない状態にしたんだから」

スバルにそう冷静に返すティアナ。確かに、フェイトとルークを同時に相手にしただけでなく、行動不能にまで追い込んだのだ。ソラの能力が分からなかったという事も大きいが、それでも彼の戦闘能力は突出したものがある。

「とにかく、ここは後続の医療班に任せて、私たちは先に進もう。まだ、ソラはこの中に居るだろうし」

「でも、一体こんな場所に何の用が……」

「本人に聞くのが一番早いわよ。さ、行きましょ」

フェイトが医療班の手配を済ませ、行動の指針を決める。スバルもティアナも、無論ルークも彼女の意見に同意見である。

一行は、気を失っている局員たちの安否を確かめながら、電気系統が破壊されたのか、薄暗い回廊を進んでいく。

「もしも、また戦闘になったら厄介だね……」

「そうならないことを願うけどさ……。なんとなく、難しい気がする」

フェイトとルークは、前回のソラとの戦闘を思い出していた。ベクトル操作という、ある意味反則的な能力を自由に行使できるソラに対して、手も足も出なかったのだ。
あの戦闘の事は、嫌というほど印象に残っている。

「ソラを説得できるのは……多分、ティアだけだ。大丈夫か？」

「分からない……。分からないけど……」

ルークが、ソラと遭遇した場合の事を考え、ティアナにそう問いかけてくる。確かに、この中で一番長い時間を共に過ごし、彼の事を

少しでも知っているティアナの声がソラに届く可能性が最も高い。
戦闘になったとしても、前回と同じ轍を踏むつもりはないが、出来ることなら穏便に事を進めたいと思ったのだ。

そして、ルークの問いにティアナは……

「わたしはただ、あいつと話がしたいだけ。そのために、今ここに居るんだと思う」

「……そうかい」

ティアナの目には強い意志が見られた。シオンからの衝撃的な話を聞いた直後の、まるで迷子になった子供のような弱さは全く感じられない。
それを見たルークは、安堵したかのような笑みを浮かべて歩みを進めることに集中した。

そして、歩くこと約五分。フェイト達は拘留所内で最も広いスペースを有している（とは言っても、平均的な学校の体育館ほどの広さだが）広間に足を踏み入れた。

「ひどい……」

フェイトが広間の中に広がっている惨状に苦い顔をしながらそう呟く。広間には、ここに来るまでに廊下などに倒れ伏していた憲兵たちと同様に、四肢をへし折られて気を失っている魔導師たちが、そこら中に転がっている。

そして、そんな負傷者の山の中に、彼はいた。

「ソラ……」

「君にその名前で呼ばれるなんてね……。ちょっと感慨深いよ」

負傷者の山、広間に据え置かれている大きめの待合用のソファに、いつもと同じニコニコした表情で、ソラは座っていた。ソファの配置は、フェイト達の入って来た入り口の対面にあるため、彼らは対峙するかのような形で相対していた。

「なるほど、シオンがあんたたちに話したわけか……。まったく、余計な事ばかりする……」

ティアナ達の意識を読み取ったのだろう。彼女たちが、ソラ達イノベイト・チルドレンの過去についての情報をシオンから聞かされたことを、ソラは見破って来た。

「ソラ……あんたは何をしようとしてるの？　こんな……多くの人を傷つけて……」

「大袈裟だな、ティア。安心しなよ、誰も殺しちゃいない。俺はリク…ラースと違って、そんな勿体ないことはしないからな」

「そういう問題じゃないわよ！！」

ティアナは、何故かソラの受け答えの仕方が異様に癇に障った。こうして話しているにも拘らず、ソラが自分の方を向かずに別の事を考えながら話している、そんな感覚がティアナは我慢ならなかった。

「落ち着いて、ティアナ……。……勿体ないっていうのは、どういう事なのかな？　シオンから聞いた話では、あなた達は私たち管理局を憎んでいてもおかしくないはず。でも、こうして手加減してまで局員の命を取らずにいるよね？」

「う～ん……憎みなんて感情はあんまりないなぁ。それはリクや他のイノチルにこそ相応しいと思うけど」

「憎しみはないって……。君は恩師を殺されているんだろ？　それなのに……」

フェイトの問いに、ソラは感慨深くもなさそうに答える。少し意外な答えに、少々不謹慎ではあるが、ルークは再度問いかける。しかし、ソラの返答は……

「恩師だろうがなんだろうが、ヴァルター・クロンベルクという人間はもう居ない。世界のどこを探してもだ。仮定はどうあれ、死んでしまった人間だ、今更何かしたところで、何かを憎んだところで、得る物なんて何もない。復讐なんて、非合理的な行動をしても、自己満足にしかならない。」

「そんな……」

そもそも、復讐と言う行為は端的に言ってしまえば、自分の中の自己満足を満たすことを目的にしている。
そう言ってしまえば、身も蓋もない話だが、ソラはあくまで現実主義だったのだ。

冷徹に、そしてドライな考えを示すソラに、スバルが小さく呟く。
自分が同じ立場なら、仮に言えばティアナや、姉のギンガを失った

時、自分ならどうするか考えると、少しではあるがリク達の気持ちも分かるというモノだ。

しかし、本来ならリク達の側に居るはずの、居てもおかしくないソラが、こんな返答をしたのだ。スバルはソラが理解できなかった。

「そこの青髪。だったら聞くが、俺がリク達に加勢して、あんた達管理局をぶっ壊したとして……何か変わるのか？　死んだ人間は生き返るのか？」

「え……」

心を読まれた。スバルは、ソラの読心能力を知ってはいたものの、ここまでハッキリと読まれてしまうとは思ってもみなかった。加えて、ソラの問いに対しての答えは、一つしか存在しないことを即座に考えてしまった。

「答えはあんたが今考えてた通りだよ、死んだ奴は生き返らない。生き物は死んだらそこまでだ、ただのタンパク質の塊に成り下がるだけ。なのにだ、あのバカ共は意味のない行動を未だに続けてる。事を完遂させたとしても、得る物なんてちっぽけな自己満足だけ。いやはや、実に非合理的だ。これじゃあ、あいつら自身が毛嫌いしてる人間と一緒じゃないか」

「だったら、あんたはどうなのよ!!　あんたも、少なくとも数年前は、あんたがバカって、非合理的だって言ってる連中と同じことをしてた!!」

ティアナが大きな声でソラに問う。そうだ、ソラもまた、ヴァルターが死んだ直後はリク達と共に、管理局相手に喧嘩を売っていたの

だ。
やっていた事と、現在の言動が一致しない。

「相変わらず、ティアは痛いところを突いてくる……。確かに言う通りだよ、俺も昔はバカだった。若気の至りとしか言いようがない。でも、俺は気が付いたんだよ、あの行為には何の意味もないってさ。でもって、それを教えてくれたのは君自身でもある。自覚はないだろうけどね」

「何を……？」

過去の行為を無意味だと、バカげた行為だと、ソラは気が付いたという。そして、それを教えてくれたのはティアナだという。
だが、彼女自身にそんな覚えはない。だからこそ、ソラの言っていることが理解できなかった。

「なら、今君がしているこれは？　拘留所を襲撃して、沢山の負傷者を出したこの行為にはいったいどんな意味があるの？」

「……」

そのフェイトの問いに、ソラは少し乾いた笑みを浮かべ、黙り込んでしまうが、それも一瞬だ。
顔を上げると、真剣な表情を浮かべたソラがそこには居た。

「やらなきゃいけないことがありましてね。その為に、スカリエッティをヘッドハンティングしに来たんですよ」

「スカリエッティを！？」

意外な、そして危険極まりない名前が出てきたことに、流石のフェイトも表情に驚きを隠せない。
彼のやったことを思えば、スカリエッティを拘留所から出すことほど恐ろしいことはない。

「あいつも快く俺の話に乗ってくれたんでね。さっさとここからトンずらするつもりだったんですけどねぇ」

そこに、ティアナ達が来た。ともすれば、ただで帰れるなどあり得ない話だ。
彼女たちを退けなければ、スカリエッティを使って、あるモノを造らせることも、あの映像データが語る『世界の現実』を変えることもできない。

「というわけで、そこ、退いて頂けますか？」

ソラは、笑顔を浮かべながらフレンドリーなノリでそう言ってくる。
しかし、そこで大人しく道を開けることなど出来るはずもない。
ティアナ達が取るべき行動は、一つしかなかった。

「ティアナ、ゴメン……。ソラの事、捕まえるよ？」

「……仕方ないです。縄でぐるぐる巻きにした上で、じっくりと話を聞くことにしましょう」

結局、こうなってしまう。
本当なら、ちゃんと話し合いたかった。もっと、しっかりと話したかった。だが、今のソラはティアナの話を聞きながらも、相手にしていないのだ。
そんな相手に、いつまでも声を張り上げて叫んでもいても仕方ない。

少し……お灸を据えてやる必要があると、ティアナは判断した。

「ソラ……あんたの話、じっくり聞かせてもらうわよ……。ちょっとキツイお仕置きの後でね！！！」

「お～、怖い怖い。ま、こうなると思ってたし、別にいいんだけどさ……。はぁ～、殺さないように手加減するのも難しいんだよ？」

「生意気言っちゃって……。もう泣いたって許してあげないから、そのつもりでね」

そう言うと同時に、ティアナ達はデバイスを構える。

フォーメーションとしては、フォアードにルークとスバル、クロスレンジにフェイト、フルバックにティアナという形だ。

四対一という、傍から見ればワンサイドゲーム、フルボッコと捉えられても仕方のない状況だが、相手はイノベイト・チルドレンである。卑怯者と思われようが、油断はできない相手なのだ。

「仕方ない……か……。オルクス、すまんがもう一仕事だ」

『御意』

ソラもまた、風のレガリア・オルクスをセットアップする。一対四という状況にあるにも拘らず、彼からは余裕が感じられた。

まるで、数が問題にはならないとでも言いだけな様子で。

そして……

「……スバル！！」

「うん！！！」

ルークとスバルが同時に飛び出した瞬間、戦闘が開始された。ルークはアーカーシャによる抜刀攻撃、スバルはリボルバーナックルと、マッハキャリバーの瞬発力を生かした一撃。

２人は左右に展開し、ソラを挟撃する戦法をとる。

「バルディッシュ」

『Ｙｅｓ，Ｓｉｒ』

そして、二人が同時攻撃を仕掛けると時を同じくして、フェイトは砲撃魔法をセットする。二人の攻撃が失敗した場合の保険として、そしてルーク達の攻撃の後に続く連携を兼ねている。

ティアナは、フルバックから様子を窺う。何か、魔術的なトラップがある場合には、即座に対応できる。加えて、いつでも射撃が行えるように待機しておく。

「ふっ！！！」

「リボルバー……シュートォ！！！」

そして、ルークとスバルの左右からの同時攻撃がソラに迫る。ルークの抜刀術に、スバルのリボルバーシュート。

息の合った攻撃、タイミングも申し分ない。

しかし、その攻撃を前にしてもソラは表情一つ変える様子はない。

パシ！　パシ！

「うわ！！？」

「わわ！！？」

そして、迫りくるルークの剣技とスバルの拳を見極め、ルークの剣を持っている方の手と、スバルの放った拳を同時に掴む。加えて、二人の瞬発力から生まれたエネルギーを殺すことなく、自身の体を軽く回転させ遠心力に変える。

そのまま、その遠心力を利用してソラはルークとスバルを投げ飛ばした。

ガシャアァァン！！！

「ぐっ……」

「うぅ……」

左右からの攻撃を見切られ、カウンター気味に壁に向かって投げ飛ばされたスバルとルークは、土煙を上げながら壁に激突する。

「スバル！！　ルーク！　くっ……、プラズマランサー……ファイア！！！」

その光景を目の当たりにし、ソラの動きの速さと無駄の無さに驚きながらも、保険として砲撃魔法プラズマランサーを放つフェイト。

無数の雷撃を帯びた魔力弾がソラに向かって放たれる。

しかし、ソラはその攻撃に慌てることなく対応する。彼はいつかのように手を叩き合わせ、砲撃の射線上に空気の壁を発生させる。

「同じ手は……通じないよ！！！」

が、フェイトも同じ轍を踏むようなことはしない。プラズマランサーが空気の壁に阻まれる直前に、プラズマランサーの魔力弾の軌道を操作する。

操作された魔力弾は、一度明後日の方向を向いて動いたと思ったら、即座に軌道修正し、ソラを直上から狙う。

「流石、これだから美人な年上お姉さんは怖いんだ」

その攻撃方法に、ソラは愉快なのか笑みを浮かべながらそう呟く。相変わらず、余裕を感じさせたまま。

「でも、まだカードが一枚足りてませんよ？」

コン！

ソラはそう言いながら、レガリアで地面を叩く。また、大気圧を利用してフェイト達の動きを封じるのかと思ったがそうではない。というより、あの技は屋内では実現不可能な技である。あの技は、大気を遮る屋根がない屋外でのみ有効なのだ。

屋内の限定された空気、大気の量では人を行動不能に追い込むほどの質量は得られない。

だからこそ、ソラがベクトルを操作した対象は……

「これ、お返ししますね」

「プラズマランサーを!?」

ソラを頂上から襲うはずだったプラズマランサーは、彼の頭上一メートルほどで、一瞬だか、時が止まったかのように停止。そして、返品と言わんばかりにソラのベクトル操作によって、フェイトめがけて飛んで行った。

「別に、魔力弾のベクトルを操作できないとは言ってません」

「くっ……」

フェイトはすぐさま防御体制とシールドを張ろうとするが、コンマ数秒動作が遅い。恐らく、こちらの制御している魔力弾などに関する攻撃は、ベクトル操作の干渉範囲外だと思っていたのだろう。それ故に、反応が若干遅れてしまったのだ。

「させないわよ!!」

そこで、ティアナのクロスミラージュが雄叫びを上げる。ベクトル操作によって、フェイトめがけて迫りつつあったフォトンランサー目がけて、砲撃を放ったのだ。

「クロスファイア……シュート!!!」

ドォォォン!!!!!

ティアナのクロスファイアによって、プラズマランサーは空中で相殺され、爆散する。

「もらったぁぁぁ！！！！」

「おぉぉぉぉぉぉ！！！！」

その爆発によって、生じたチャンス。先ほど、壁に投げ飛ばされたルークとスバルが、再びソラに攻撃を仕掛ける。

「残念、その攻撃は不合格だ」

が、ソラには隙が無い。ルークとスバルの攻撃を完全に読み切っている。

そして、左側面からアーカーシャを振り下ろしてきたルークにはで回し蹴りを、右側面からリボルバーナックルで攻撃を仕掛けてきたスバルには、回し蹴りで生まれた遠心力を上乗せした裏拳を叩き込んだ。

「がっ！！？」

「うっぐぅ！！！」

回し蹴りと裏拳のタブルカウンターが綺麗に決まり、ルークとスバルは、フェイトとティアナ達方向へ吹き飛ばされた。

「ルーク！！！」

「スバル！！？」

2人「「ふみゅ！！？」」モニュ……

吹き飛ばされたルークとスバルは、それぞれフェイトとティアナによって抱きとめられてキャッチされる。
その際に、ルークがフェイトの胸にダイブする形になったことはいつもの事である。（なんと羨まけしからん）

「あ、ありがと……ティア……」

「どういたしまして。でも、そうそう呑気な事ばっかり言ってられないわね……」

スバルがティアナに助けてくれたことにお礼を言うが、ティアナはソラから視線を話さない。これだけの手数を以てしても、一発も攻撃が入らないのだ。短気な奴ならキレて無茶な攻撃を仕掛けかねない。

「だなぁ……ていうか、こっちは四対一なのに……。あいつの体術、体捌き凄いな……攻撃をあぁも簡単に避けられるなんて……」

「……る、ルーク？？　真剣な顔で真剣なこと言ってるところ悪いんだけど、今は離れよう、ね？　帰ってからまた沢山ギューってしてあげるから」

「む、バレてしまったか……だったｒ…くぎゅ！！！？」

こんな場面でイチャつくのはマジで勘弁してもらいたいと、ティアナとスバルは同時にルークに拳骨を食らわせた。
本当に、この万年新婚夫婦は時と場所を選ばない。

「ほんと、人間ってのは呑気な生き物だ」

戦う相手であるソラにまでこう言われてしまっては、最早締まりもへったくれもあったものではない。

しかし、戦いの緊張感だけは張りつめている。今現在、圧倒的にフェイト達が不利だ。

四人で組んでも仕留められないという事実。このまま各個撃破でもされようものなら、状況はますますこちらに不利になってくる。

「これは……厳しくなりそうね……」

ティアナは、クロスミラージュを握る手に力を込めながら、そう呟くのだった……

Ａｃｔ２５　鉄格子の中での再会（後書き）

Ｆ２０Ｃ「ソラがなんとなくクールすぎるような希ガス」

ルーク「なんていうか、あれが彼の本性なんだろうね。でも、根っこの部分は俺達には見せてない感じがするよ」

Ｆ２０Ｃ「根っこ……というと？」

ルーク「何か隠してるってことさ。それこそ、彼の目的そのものじゃないかって考えてるんだけどね」

Ｆ２０Ｃ「なるほどねぇ～～……。ていうかさ、四対一で攻撃一発も入れれないなんて……」

ルーク「い、言うなよ！！！／／／／　俺達だって頑張ってんの！！」

Ｆ２０Ｃ「フェイトさんの乳揉んでたくせに何を言ってるか……」

ルーク「あれは……良いものだ……」

Ｆ２０Ｃ「マ・クベｗｗｗ」

今回、シナリオ分岐アンケート（ヒロインをティアナとエステルのどちらにするか？）を実施しようかと思っていたのですが、地震の影響などを考慮し、延期することにいたしました。
事態が少し落ち着いた後、改めて行いたいと思います。

Ａｃｔ２６　あなたはそこにいますか？（前書き）

タイトル、ファフナーしか思い浮かばないと思ったあなた。
美味しいお酒が飲めそうですね。劇場版を見に行っていれば話題は無限大でございます。

ここで皆様にアンケートです。
今作のヒロイン、ティアナとエステルなのですが、どちらをメインヒロインに据え置くかというアンケートを取りたいと思います～

二通りのシナリオを考えてはあるので、どちらを選んでくださっても構いません。ですが、両方というご意見は申し訳ありませんが却下でお願いします……
あまり、ルート分岐とかはさせずに、お話の結末を一つ収束させたいと考えているので……

ちなみに、エステルシナリオは奇跡ありですが、少々ご都合主義。ですが優しいお話です。テーマは「永遠のお話」

ティアナシナリオは、奇跡無し。現実主義なお話ですね。ですが、幸せについて触れたいと思っています。テーマは「数分間の純愛」

って感じです。

ご意見はメッセージでも感想でも結構です。期限は次のお話の更新日までという事で、どうぞご協力お願いいたします～♪

Ａｃｔ２６　あなたはそこにいますか？

――――時空管理局・無限書庫――――

「ごめんね、ユーノ君。忙しいところに、割り込む形でお願い事しちゃって……」

「ははは、良いよ気にしなくても。なのはからの頼みだし、最近の事件についても気にはなってたからね。」

気の遠くなるような規模で、延々と並んでいる本棚。室内は円筒形をしており、縦に長く伸びており、通路と思われる部分がその内部を縦横に走っている。

管理局が、管理下に置いている世界、そしてその中の書籍やデータが保管されている施設。

世界の記憶を保管する場所とさえ言われている、規模のデカすぎる図書館の中にエースオブエース・高町なのはと、彼女とは長い付き合いである友人、ユーノ・スクライアは居た。

「イノベイト・チルドレンにレガリア、ヴァルター・クロンベルク……話を聞いただけでも、かなり大きな問題だね。それに、大きな声では言いにくいけど、管理局の暗い部分も関係してそうだ」

「さし当たっての問題は、やっぱりイノベイト・チルドレン。その中のリク、リーア、レイス、ネルっていう子達。その四人は、ハッキリと局に敵対の意思を示してるから……」

「戦いは避けられそうにもない……そういう事かい？」

なのはは、ユーノの問いかけに小さく頷いた。シオンから聞かされた過去を聞けば、ただ単にリク達を敵として処理してしまえばいいなどという考えは浮かんでこなかった。
少なくとも、今回の件には管理局の薄暗い部分が強く関係しており、同時に戦乱の原因にもなりかねないからだ。

「管理局だってソラ君たちが見て来たモノが全てじゃない。ソラ君は、それをよく分かってくれているみたいなんだけど……他の子はそうじゃないみたいだから」

「でも、仕方ないことだとは思うよ。恩師を殺されてるんだ……誰だって、仇は憎いものだよ……。僕だって、なのはやフェイト達に何かあったらどうなるか……」

感情を持つ生き物ならば、喜びもすれば悲しみもする。恨みや妬みといった感情もまた、生き物ならではの特徴の一つである。
リク達に関していってしまえば、彼らの感情はとこも間違ってはいない。

しかし、人から賛同を受けられるかは別問題だ。

被害を被る側からすれば、厄介なことこの上ない相手である。なまじ、リク達イノベイト・チルドレンの戦闘能力は驚愕すべきレベルのモノなのだから。

「でも、やっぱり私達もただ黙ってやられちゃうわけにはいかない。それで、なにかイノベイト・チルドレンについて知る事が出来たらと思って、ここに来たんだけど……」

「なるほどね……。対抗策を練ろうにも、僕たちは彼らのことを何

も知らない……能力の正体や彼らの存在意義、ルーツも……。それを知るのは、確かに有意義だと思うよ、なのは」

ユーノはそう言いながら、イノベイト・チルドレンについてのデータや書籍、管理局のありとあらゆる情報、履歴までを調べ上げている最中だ。

「あのフェイトや、ルークでさえ手も足も出なかった相手か……。単体でそれだけの力を操れるなんて、イノベイト・チルドレンの潜在能力の目を付ける局の上層部の思惑も、ある意味では当たり前なのかもしれないけど……」

「うん、それでも他者に何かを強要するなんて、ましてや大切なモノを奪ってまで自分たちの手の中に居れようなんてことは……間違ってるよね……」

ユーノはコンソールに手を走らせながら、なのはは悲しそうな顔でそう呟く。

無限所の中は、無機質なコンソールのタッチ音が機械的に響くのみだ。

「……あった……。例の、ヴァルター・クロンベルクっていう科学者の研究資料だ。でも変だな……データの出所が分からないぞ……？」

「もしかすると、ネスター中将が回収したデータなのかな？」

「いや、それならデータのアドレスが管理局のモノになってるはずなんだ。でも、この研究資料にはそれが無い……どういう事なんだろう……」

ユーノの活躍により発見されたイノベイト・チルドレンの研究資料。ヴァルター・クロンベルク、ソラ達の恩師であり、故人。局の身勝手によって命を落としてしまった人間の資料を発見したなのは達。

しかし、どこか怪しげな匂いを漂わせる、アドレス不明という現象。なのはとユーノはそのデータを開けるか否かを迷ってしまう。

「どうする？なのは……」

「……開けてみよう。どっちにしたって、何か分かる事があるのなら見てみる価値はあると思うから」

だが、このまま見つけたデータを放置したままでも、状況は変わらない。ならば、藪蛇覚悟で特攻を掛けるくらいの勢いで行けばいい。そう考えたなのはは、ユーノにデータの閲覧を要求した。

ユーノがコンソールを操作すると、データが開封され、中に入っていたであろう文章データやグラフ、写真などが出てきた。

「……『深層心理学』・『ユング心理学』・『分析心理学』・『シンクロニシティ』……随分と心理学に関する論文やデータが多いな……。このヴァルターって人は、心理学専攻だったのかな？」

「でも、こっちにはデータベースの概念についての論文とかがあるよ？　機械工学やＡＩ工学にも精通してたのかな……」

開封されたデータの中は、主に心理学についての論文や、データベースの研究などの資料だった。

思っていたヴァルターの研究内容とはあまりにもかけ離れた内容に、

なのはとユーノは首を傾げるばかりである。

「あ、あった。イノベイト・チルドレンについての研究資料と、考察資料だ」

「うわぁ……こっちもすごい量の文章データだね……」

そして、データ内を探っているうちに現れたイノベイト・チルドレンについての研究資料。当たり前というか、予想通りと言うか、やはり文章データの量は頭が痛くなるほどの量を誇っていた。

「これは……全部を読むのには丸一日かかっちゃうかもね……」

「だ、だね……。手分けして読んでいくしかない……あれ？」

と、文章データを流し読みしていたなのはの目に、気になるワードが飛び込んでくる。膨大なデータの中にあって、その二つのキーワードは特に目を引いたのだ。

「イノベイト・チルドレンの人間に対する読心能力について……」

「読心能力の正体……という事なのかな？」

「多分。ちょっと読んでみるね」

なのはは、コンソールを操作して資料を素早く読んでいく。中にはかなり専門的な単語もあったが、それを排除して読んでも、素人のなのはにも資料の概要くらいは理解できる。

スバル辺りが読んでいれば、頭から黒い煙を出していただろう。

「ふむ……これはかなり興味深いね……」

「だね……。イノベイト・チルドレンの読心能力は、彼らだけが扱う事の出来る特殊な脳波を介して行われている……かぁ……」

なのはと共に資料を呼んでいたユーノが、記載されていた文章の内容に驚きながら呟き、なのはもそれに同意しつつ、読心能力の概要を読み上げていく。

「でも、この特殊な脳波で、一体どこから私たちの思考情報を持ってくるんだろう……？」

「一番考えられそうな可能性は、直に目の前に居る相手の脳に、脳波を使って直接干渉するって説だろうけど……。ヴァルター博士は、その説を否定してるみたいだね」

「でも、それなら一体どうやって……？　脳波を使えても、情報を取り出す場所が無いなら、読心能力は成立しないんじゃ……」

ざっとではあるが、大まかな概要くらいは理解してはいる二人ではあるのだが、重要な核心部分に関しては分からないままだった。

手元にある資料も、肝心なところは欠損しているらしく、脳波によってどこから人間の思考情報を読み取っているのかは分からずじまいだった。

「これは後で他のみんなにも意見を聞いてみよう。僕たちだけじゃ限界あるしね。次に、何か気になるところがあるんじゃないのかい？」

「あ、うん。これなんだけど……」

取りあえず、読心能力については保留という事にして、なのはの目に留まった項目の二つ目に話をシフトする。

ユーノに促され、なのははゆっくりとコンソールを操作し、その気になる項目を表示した。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

同時刻、拘留所……

「ハーケン……セイバァァァ！！！」

「クロスファイア……シュート！！！！」

ルークの繰り出す紅い色をした飛ぶ斬撃と、ティアナの橙色の砲撃が両側面からソラを襲う。

両者の攻撃の威力は申し分なく、直撃すれば間違いなく意識を刈り取られることだろう。

がしかし、こんな攻撃で勝負が決まるなどとは、攻撃を放った本人であるルークとティアナは思っていない。

コンッ！

ソラは、左右から迫る攻撃に一瞬目をやった後、風のレガリアで地面を叩く。
その瞬間、ルークとティアナの攻撃のベクトル支配権がソラに移り、二人の攻撃は明後日の方向を向いてしまい拘留所の壁を吹き飛ばすに終わった。

「はぁぁぁぁぁ！！！！！」

「おおおおおおおお！！！！！！」

だが、ティアナ達もただバカの一つ覚えのように攻撃を繰り返しているわけではない。先ほどの攻撃で破壊された拘留所の壁、その粉塵によって周囲は土煙が舞い、視界が少し悪くなる。

そして、その土煙の中から、巨大な剣と化したバルディッシュを手にしたフェイトと、マッハキャリバーの加速エネルギーを乗せたリボルバーナックルを振るうスバルが飛び出してくる。

「ふぁぁ……」

しかし、驚くべきことにソラはその二人の攻撃に対して、欠伸をしながら対応した。

ガシィ！！！　バチィ！！！

「嘘！！？　あぁぁぁ！！？」

「くぅ！！」

スバルのリボルバーナックルをベクトル操作の反射で、彼女の攻撃

をそっくりそのまま弾き返し、スバルを吹き飛ばす。
フェイトのザンバーによる斬撃は、片手で、それも指二本で受け止められてしまった。

グンッ！！

「くっ！！！」

ザンバーを指で止められたフェイトはすぐに離れようとするが、魔力で出来た刃はピクリとも動かない。まるで、コンクリートの塊でも持っているかのようにビクともしない。

そして、ソラはそのままザンバーを持ったフェイトをルーク達の方向に投げ返す。フェイトは空中で体勢を整えるが、すぐに次の攻撃に移る事はなかった。

「はぁ……はぁ……嘘でしょ……こっちは、４人掛かりなのに……。」

「くぅ……どうやって勝つんだよ……ある意味イヴよりも強いぞ……」

圧倒的不利。

この単語がルーク達四人の脳裏を過った。先ほどから、フォーメーションを生かした攻撃を仕掛けているのだが、全くの無駄に終わり続けている。
ソラのベクトル操作による絶対的な防御、そして異常なまでの体術がルーク達に攻撃をことごとく無効化していた。

「しかも……ソラの方からの攻撃は一回もない……手加減されてるんだよ、私達……」

フェイトが少し悔しそうにそう呟く。そう、ソラは防御やカウンターで動きはするものの、攻撃の手を一回も使う事が無いのだ。
シオンの話で出てきた、レガリアの力も技も、全くと言っていいほど使っていない。

これを手加減と呼ばずに何と形容すればいいのか、四人はその答えを知らない。

「いい加減、やめません？　俺、早く帰ってドラマの再放送見たいんで」

「減らず口だけはお構いなしね……。だんだん腹立ってきたわ……」

ソラがそう言うと、ティアナは目が笑っていない状態で、怖い笑顔を彼に向けた。
だが、４人掛かりで指一本も触れる事が出来ないこの状態では、何を言っても苦しいだけだった。

「あんた、なんで攻撃してこないのよ！！　私たち舐めてんの！！？」

つい、というか、ティアナは悔しさもあってかソラに大きな声でそう怒鳴る。バカにされているという気持ちと同じくらいに、自分のことなど相手にもしていないという事が悔しく、腹立たしかった。

「別に俺はティア達を殺したいわけじゃない。ただそこを通してほしいだけだしね。殺す理由も無ければ、攻撃する理由もない。ティ

ア達が仕掛けてくる攻撃を適当に流しとけば、いずれはスタミナ切れになるだろうし、無駄な戦闘はしたくない」

「無駄って……。あんたは、私と正面から向き合う気はないの？？！」

「……向き合ってるさ。今こうして」

「ううん、あんたは私を……私達を見てない！！　ずっと他の事を考えながら、私たちの相手を適当にこなしてるだけじゃない。あんたは私たちの思考を読んで、私たちに事を分かったつもりになってるだけよ」

クロスミラージュを構えながら、ティアナはソラにそう言う。今日、この場であった時から感じていた不快感。
ソラがティアナ達の事をしっかりと見ずに話をしながら、気持ちだけはほかの方向に向いている。

ティアナにはそれが許せなかったのだ。

「進化した人間か何だか知らないけど、上から見下ろされるのは我慢ならないのよ！！　特にあんたには！！」

目の前に居るこの生意気な、一つ年下なこの男とは対等な立場に居たかった。今思えば、それだけでよかったのかもしれない。
対等な立場で、言葉を交わして、喧嘩して、助け合って、寄りかかり合って……

ティアナが望んだものは、ただそれだけだ。今まで通り、日々起こる犯罪や事件を一緒に捜査して、毎日を過ごせるだけで十分だった。

別に、色恋沙汰に発展などしなくてもよかったのだ。いっその事、エステルも一緒にこの先もずっと……。そう、臨んだのはそんな小さな毎日。人生と言う不連続なモノを内包する、『毎日』という連続だ。

だが、世界はこんなにも思い通りにならない。

ピーーーーーーー!!!

「な、なに!!?」

「この音……?」

その時だった、室内に機械的なビープ音がけたたましく響いた。フェイトとルーク、スバルは周りを警戒するが、ティアナだけはソラから目を離さない。

ソラは、そんな彼女の視線を受けて少し表情を変える。どこか、嬉しいことがあったような小さな笑みを浮かべていた。

「何がおかしいのよ?」

「……いや…ちょっとね。でも残念だ、タイムオーバーだね」

「え……?」

一瞬、ソラの言っている事の意味が分からなかった。だが、次の瞬間彼の背後に現れた移動魔法の魔方陣と、それを制御しているであろう男の顔を見て、その意味を理解することになった。

「待たせたねソラ。すこし、この拘留所の移動魔法妨害システムへのハッキングに時間を食ってしまってね。いやはや、こういう事はクアットロ辺りに任せたいところだよ」

「いや、それでも見事なハッキングスコアだよ。１０分も掛かってない」

その男、ジェイル・スカリエッティは薄い笑みを浮かべつつ、ソラの背後に移動魔法用の陣を作り出していた。

「スカリエッティ！！！！！」

その瞬間、フェイトが高速でスカリエッティを確保しにかかる。ここで彼を逃がしてしまえば、またＪ・Ｓ事件の二の舞を引き起こすとも限らない。

ルークとスバルも、フェイトに続きスカリエッティの身柄を確保しにかかる。

しかし、ソラがそれを許すわけがない。

「……オルクス、第二形態（セカンドシフト）で再起動だ」

『御意』

ソラがそう呟くと、オルクスが怪しい輝きを帯びる。後輪に風が集まり、レガリアの核の部分であろうパーツなどが薄っすらと見え隠れする。

「フェイト、スバル！！　ちょい待ち！！！」

「きゃう！！？　る、ルーク！？」

「な、なんで！？」

一瞬で、レガリアの変化とその危険度を悟ったルークは、突撃を敢行した両隣の二人の首根っこを掴み、緊急停止させる。

彼の本能とでも言えばいいのか、戦いの中で培われた勘が『あれは危険だ』と頭の中で囁いてきたのだ。

そして、その間にもオルクスの変化は進む。後輪はウィールの形を失い、禍々しい、どこか鋭い刃のようなものに変わっていく。前部のウィールはそのままなので、変化の度合いがよく分かる。

「あれは……かなりヤバい」

「……」

ルークの真剣な表情を伴ったその言葉で、フェイトもソラのレガリアの変化を注視する。

刃のようなモノが、後部のウィールがあった部分に五つ程現れ、絶えることなく風を帯びている。

どうやら、あれが風のレガリアの本当の姿のようだ。

「申し訳ないけど、これで終わらせます」

そして、ソラは更なる変形を遂げた風のレガリアを履いた足をルーク達に方向に向ける。

その瞬間、レガリアが纏っていた風が一瞬で渦を巻き始め、小さなトルネードになる。それも、以前通常形態のオルクスで放ったものとは違い、数が多い。
どうやら、あの形態になったオルクスは、ベクトル操作の演算がより強化されるようだ。

「無限の風（インフィニティ・エアード・セカンドギア）？」

そして、大量の小さな竜巻が、ルーク達に向かって放たれた。食らえばただでは済まない、人を殺せるだけの威力がこもった風の凶器だ。

「フェイトさん！！　スバル、ルーク！！！」

ティアナは、その攻撃を見て一瞬で想像したくないシーンに思考を直結させてしまった。
とっさにフェイト達の名を呼ぶが、それで何かが変わるわけではないことは分かっていた。

「くっそ……！！」

目の前には人を軽くバラバラに出来る風の刃を幾重にも内包した竜巻の大軍。まともに食らえば命はない。
ルークは、両脇に抱えたフェイトとスバルを背後に投げ飛ばし、竜巻に相対する。

「ルーク！！！？？」

「ダメだよルーク！！　そんなの防ぎようがないってば！！」

背後からフェイトとスバルの声が響くが、返事をしている余裕はない。これからルークは、ひどく集中力を使う事をするのだから。

「（集中……集中……！！！）」

全神経を目に集中。失敗すれば、ルークは当然後ろの二人もハンバーグ用のミンチ肉になってしまう。

綱渡りな賭けではあるが、助かる方法をこれしか思いつかなかった。

そして、全神経を集中し、ルークが目を開くと、彼の瞳には刃のような紋様が浮かび上がっている。

ルーク固有の能力、『天照』である。

バチ……バチチチチチチ！！！！

そして、ルークがその瞳で捉えた竜巻の大群は、黒い雷を帯び始める。ルークの天照の能力は、『絶対破壊能力』。魔法だろうが超合金だろうが、全てを分解破壊する黒い雷を操る能力である。

シュウウウウウ……

黒い雷によって、ソラの発生させた竜巻は１つ残らず消滅させられる。渦を巻いていた凶悪な風の塊が、嘘のように霧散していったのだ。

「はぁ……はぁ……」

「ルーク！！」

竜巻を消滅させ、目を閉じたルークは手を目にやりながらその場に崩れ落ちる。その様子を見たフェイトは、彼のもとにすぐに駆け寄る。

彼の能力に対する、対価の存在があったからだ。

「うぅ……まずいなぁ……何も見えない……」

「やっぱり、対価が……。ごめんね、ルーク……」

ルークの天照の対価、一時的な失明。

これは、ルークとフェイトがであった直後に起こった、高性能ＡＩが引き起こした事件の解決にも活躍した能力なのだが、その使用には対価が存在する。

能力を行使した後、能力者は対価を支払わねばならない。ルークの場合、それが一時的な失明と言うわけだ。

「流石は天照。『絶対破壊能力』は怖いな……でも、これでしばらくその技は使えない」

「っ……！！　まさか、ルークに天照を使わせるためにさっきの攻撃を！？」

「えぇ。レガリアを壊されでもしたら面倒ですから。厄介の芽は摘んでおきたかったので」

恐らく、ルークの技の効力などは思考を読み取ることで得た物なのだろう。

そして、その脅威を認めたソラは、先ほどの攻撃でルークが二人を庇って天照を使うであろうことを予測した。

天照と言う不確定要素を潰す為に、風の攻撃を放ったのだ。すべて、計算通りだったようである。

「ソラ、あんたって奴は……！！！」

「おっと。ティア達も大人しくしておいてよ。俺はもう帰るからさ」

コン……

ソラの思惑に、流石のティアナも怒りを隠しきれない。一歩間違っていれば、三人がどうなっていたのか想像に難くないからだ。

しかし、そんな彼女をしり目に、ソラは変形したオルクスで地面を叩く。

すると……

ガクンッ

「な…！！？　か、体が……動かな……い……？？」

いきなり、ティアナは体の自由を失った。というか、腕も足も、指ですら全く動かす事が出来ないのだ。

まるで、体がマヒしたかのような、それでいて体と脳の結びつきが途切れてしまったかのような感覚だった。

「う……くぅ……」

「な、何これ……？」

スバルとフェイトも同じようになっているらしく。スバルは地面に付し、フェイトはルークを抱きかかえながら尻餅をついている。

「どうして……ここは、屋内なのに……？」

ティアナは可能性として挙がって来た、ベクトル操作による大気圧による拘束を思い出した。しかし、ソラと戦う前にも説明したように、あの技は屋内では使えない。

屋内と言う限られた大気量では、人の体の自由を奪うまでの圧力にはならないからだ。

そして、ティアナの疑問に、ソラが答える。

「人間の体っていうのは、脳からの電気信号で動くもの。何かをしようとすれば、脳がその命令を電気信号にして神経とかに流して筋肉を動かしたりする。今のティア達の体に流れてる電気信号のベクトルを支配下に置かせてもらってる。指も動かせないはずだよ」

「電気信号の……ベクトル操作……？」

電気信号と言うのは、その名の通り電気である。それが、脳から神経に……というプロセスを経て人間の体は動うようにできている。

ソラは、その電気信号のベクトルを操作して、ティア達の自由を奪ったのだ。

「話すこととか、呼吸には問題ないから安心してくれ。」

「ふ、ざけんじゃない……わよ……。こんな……」

そう言いながら、ソラは踵を返してスカリエッティの作り出した移動用魔方陣の方に歩いて行く。
ティアナは、指一本動かない状態で何とかソラを視界に収める。その後姿には、迷いが無い、そして同時に何か大きなものを背負っているようにも見えた。それが一体何なのかは、全く分からないが。

「あ、そうそう。二、三日中にリク達が管理局に本格的な攻撃を仕掛けると思うから気を付けろ。あいつら、本気で局を潰すつもりだから」

「な……あいつらが……？」

ソラの口からの警告。ソラ達とは反対に、管理局の破壊のみを目指すイノチルの集団。以前の遭遇でも、管理局側の魔導師が大勢ノックアウトされてしまった。
それを考えても戦闘力はソラ同様、折り紙つきである。

「それだけだ。気を付けてな……」

「ま、待ちなさいよ！！！！」

言う事だけを言って、再び撤収しかかるソラの背中に、ティアナはありったけの声をぶつける。
このまま彼を行かせるわけにはいかない。そうでなくても、ソラの目的くらいは聞き出しておきたかった。

「あんたは、あんたの目的は何なのよ！！！？」

「……」

その質問に、ソラは一瞬黙り込むが、一言だけ呟くように口を開いた。

「なぁ、ティア。　君は、本当にそこに居るのかい？」

「な、何を……？」

「あなたは、そこに居ますか？　って……そういうことさ」

ヒュン！！

ソラは、それだけを言い残すとスカリエッティ共々移動魔法でその場から跡形もなく消えてしまった。

この問いかけが、彼の目的の大きなヒントになるなど、この時のティアナには知る由もなかった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

再び、無限書庫のなのはたち……

「こ、これは……？」

「うん、もしかするとイノベイト・チルドレンの弱点……なのかもしれない」

ユーノとなのは、二人の視線の先にはヴァルターのイノチルに関す

る研究資料が表示してあるディスプレイがあった。

そしてそこには……

『イノベイト・チルドレンの特殊脳波に対する、逆干渉についての考察』

味気ない文字が一列に並んでいたのだが、これから来たるべき戦いにおける重要な、そしてなのは達にとっては生命線となるヒントがそこには記載されていた。

Ａｃｔ２６　あなたはそこにいますか？（後書き）

Ｆ２０Ｃ「風のレガリアのセカンドシフトは、マンガ『エアギア』を読んでいらっしゃる方ならお分かりかと思いますが、スピットファイアとアイオーンヲ穴あきにした、あの形態です」

ソラ「あ～……１８巻だね。スピが死んだときは作者泣きそうだったよね」

Ｆ２０Ｃ「仕方ないだろうが。炎のレガリアをカズに託して、自分は……うぉぉぉぉぉぉん！！！！」

ソラ「うぜぇ……。あ、エアギアをご存じない方申し訳ないです。イメージとしては、ローラースケートの後輪部分が変形して、禍々しい形になったと思っていただければいいのでｗ」

Ｆ２０Ｃ「分かりにくいな……。あ、ヒロイン選択アンケートの方も募集しておりますので、皆様からのご意見、お待ちしております～～」

ソラ「次回には結果発表を行うので、お楽しみに」

Ａｃｔ２８『開戦前』

Ａｃｔ２７　開戦前（前書き）

二週続いての更新ですね。もうすぐ完結になるので、ガンダムよりも優先して更新することにしました。

あと何話くらいかかるでしょうか……１０か１５か……恐らくはそのくらいで終わるかと思いますｗ

あ、後書きにて先週行いましたヒロイン選択アンケートの結果を発表したいと思いますので、どうぞお見逃しなく～

では、本編どうぞ

Ａｃｔ２７　開戦前

とある世界。かつてのイノチルが、ヴァルターと生活をしていた研究所跡にソラと拘留所からの脱出に成功した、ジェイル・スカリエッティは立っていた。

「こんな更地に、君たちの隠れ家があるのかい？」

「まぁな。ていうか、この前開いたオルクスのブラックスボックスの中に、ここの情報も一緒に入ってただけなんだけどな。どうせなら、有難く使わせてもらおうと思ったわけ」

ソラは、そう言いながら地面をレガリアで一回叩く。
すると、その行為に呼応するかのように地面に切れ目が入り、人一人がやっと入れるくらいの小さな階段が現れた。
どうやら、ヴァルターの残してくれた隠れ家は地下に存在するらしい。

「あの男らしい隠れ家だな。子供っぽいというか、科学者らしくないというか……」

「あぁ、そいつに関しては同感だ。さ、行くぞ」

地下基地と言う、まるで男のロマンなどと真顔で言いそうなヴァルターらしい隠れ家の趣向に、スカリエッティとソラは同じ感想を抱いたらしく、苦笑しながらその階段を降りていく。
入り口は狭く感じたが、一度中に入ってしまえばそんな感覚は無くなってしまった。利用可能な居住区画はかなり広く作られているよ

うで、下手をすればその辺りの豪邸よりも広い敷地を有しているかもしれない。

「一つ聞きたいのだがね。研究に必要な機材などはあるのかな？」

「あぁ、ヴァルターが遺してたのとか、俺が必要だと思ってかっぱらってきたのとかな。管理局の機器資材庫の警備はザルだったよ」

「なるほど、それは素晴らしい」

機材やもろもろに必要な素材などは、ソラがすべて揃えていた。まぁ、オルクスのブラックスボックスの中にあった、必要な物リストに則って探して持ってきただけなのだが。

そんな会話もそこそこにして、二人は両開き式のドアの前に辿り着いた。部屋の中には誰かいるのだろう、明かりが零れていた。

「今帰った」

「あ、おかえりソラ」

「おかえりなさい、ソラ」

ソラの声に二つの声が返ってくる。一つはエステル、傍らには以前保護した、イノベイト・チルドレンの少女、フウミが居る。

そして、もう一つの声なのだが、これはソラの予想外の人物だった。

「シオン……」

「お邪魔させて頂いてます」

そう、もう一人はイノチルの炎の王、シオンだった。どうやら、ソラが留守の間にエステルとフウミと合流していたようである。

「シオンお前だろ？　ティア達に俺たちのこと教えたの……。余計なことしやがって……」

「えぇ。ですが、説明の手間が省けたでしょう？　それに、遅かれ早かれ分かってしまう事ですし、あなたがやろうとしている事の為にもなります」

「はぁ……。お前にはお見通しってわけか……」

シオンが居たことは確かに予想外だったが、別段まずいことではない。逆に、この口ぶりだとシオンはソラに協力してくれるとみて間違いないだろう。

彼は、以前からリク達とは違い、ソラに賛同的な意思を示していたのでいづれは来るであろうとは思っていたが。

「まぁいいや。ここに居るんなら、協力してもらうからな」

「えぇ、もちろんそのつもりです♪　で、そちらの方が天才科学者のジェイル・スカリエッティ氏ですか？」

ソラに協力することを伝えたシオンは、視線をソラの後ろに居たスカリエッティに移す。シオンやエステルはスカリエッティとは面識はないため、これが初顔合わせという事になる。

フウミはフウミで、ソラが連れてきた彼に、エステルの陰から興味津々のようだった。

「あぁ、私がそうだ。ソラから興味深い研究対象を聞かされてね、利害の一致で協力させてもらうことになったのだよ……くくく……」

「エステル……あの人…変……」

「あ、あははは……」

マッドサイエンティスト精神全開なスカリエッティに、フウミは無表情ながらも厳しいコメントを出してくれる。エステルは、正直な彼女の意見に苦笑いを浮かべることしかできなかった。

フウミも、保護したての頃はソラ達に対して心を完全には開いてはくれなかったが、やっと最近になって普通に会話すること出来るところまで来たのだ。これはこれで、進歩だと言えるだろう。

「とりあえず、スカリエッティ。奥の部屋がお前の研究室になってるから、好きに使ってくれ。詳しい資料や、作ってほしいモノの設計図なんかもまとめておいた。足りないものがあったら、随時言ってくれ」

「ふむ、望むところだろ言っておこう……。ふふふ……やはりいいものだな、興味深い研究対象があるというのは……くくく……あははは……」

「ったく、お前のマッドサイエンティストぶりは務所行っても治らないってことがよく分かったよ……」

高笑いを上げながら、嬉々として研究室に向かうスカリエッティに、若干の呆れを覚えながらも、ソラは一息ついたという風にソファに

腰掛ける。
少し、戦い過ぎたかもしれない……

「ソラ……疲れてる……？」

「ん？……あぁ、そうかもな……。少し……疲れた」

エステルの陰に居たフウミが、そんなソラに声を掛けてくる。無表情なので良くは分からないが、恐らく心配してくれているのだろう。
だが、そんなフウミの表情が『今のソラ』にはよく見えなかった。

「ソラ、何か食べる？」

「いや、いい。すまんが、少し眠る……起こさないで……くれ……」

スゥ……

と、短く呟くと同時にソラはあっという間に眠りに着いてしまった。
どうやら、かなり疲労していたようである。
エステルは、そんな彼にすぐに毛布を掛けてやり、フウミを傍に置いて落ち着いた。

シオンは、ソラのその姿に若干の違和感を感じながらも、同じようにソファに座り彼の目覚めを待つことにした。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「では、報告を聞こうか。まず、フェイト・T・ハラオウン執務官」

「はい」

時空管理局・本局、クロノ・ハラオウン提督のオフィスには、名前を呼ばれたフェイトに、ティアナ、スバル、そしてなのはとユーノが揃っていた。

ルークが居ないのは、天照の対価で視力を一時的に失ってしまっているために、病院送りになっているのだろう。

「概要に関しては、簡易報告書にある通りです。ジェイル・スカリエッティが拘留されている軌道留置所において、イノベイト・チルドレン・ソラと遭遇。身柄の確保に全力を注ぎましたが、敵わず……」

「スカリエッティ共々、逃げられてしまった……。いや、見逃してもらったというべきか……」

「面目次第もありません……。今回の件は、全て私の責任です。一度戦闘を経験していながら、彼の能力を見誤っていました……」

この部屋には、監視カメラも音声録音の機械も存在しない。謂わば、情報的に隔離された空間である。

彼らの言動や行動、態度などが局の上層部に報告されることはまずない。しかし、そこにあって義兄であるクロノに対して、フェイトが敬語を使うのは付けるべきケジメがあるからである。

フェイトは、今回の一件を自分の責任とし、クロノに頭を下げた。

執務官という立場から言えば、ティアナもそうなのだが、フェイトと彼女ではキャリア・経験が違う。先輩ぶるつもりは全くないが、

実際にフェイトの感じている責任は大きかった。

ティアナもまた、今すぐにでもフェイトの前に立って、責任が彼女だけにあるわけではないと抗議したい気持ちを押さえつつ、冷静な表情を浮かべてクロノから視線を離さなかった。

「ふぅ……」

クロノは、そこで一息つく。まるで、『ケジメはここまで』と言うような感じで、フェイトの方を見た。

どうやら、堅苦しいシチュエーションはここまでのようだ。

「いや、お前だけの責任ではないさフェイト。戦闘の様子は、バルディッシュに記録されていた映像データを見て分かった。お前達四人でも歯が立たないほどの使い手だ、あまり使いたくない言葉ではあるが、仕方がない」

「クロノ……」

クロノのその言葉に、フェイトは少しシュンとしながら悔しそうな表情をする。見れば、ティアナとスバルも同様の表情を浮かべている。

今回の戦闘、ハッキリ言って『ボロ負け』というやつだ。彼女たちの精神的なダメージはそれなりのモノだろう。

「しかし、スカリエッティを連れて行くとはな……。ソラは…彼は何を考えているんだ……？」

「それについては何もわかってなくて……ただ……」

クロノの疑問に、フェイトがティアナの方を見ながら答える。フェイトの視線を受け止めたティアナは、ソラが去り際に呟いた言葉をクロノに伝える。

「ソラは私に、『君は本当にそこに居るのかい？』・『あなたはそこにいますか？』と……そう言ってきました」

「あなたは、そこに居ますか……。随分と哲学的な呟きだな、存在の確かさを問うているのか……精神的な立ち位置を問うているのか……捉え方はいくつもあるが」

クロノはそう言いながら、デスクの上で手を合わせ、額を少し当てるような仕草をする。彼もまた、少し疲労しているようである。

「目的がよく分からない……厄介な事だよ。もう一組のイノベイト・チルドレンのリク、ネル、レイス、リーア。目的がはっきりしている辺り、まだこちらの方が対処しやすいな……」

「そのリク達の事ですが、ソラの話では2，3日の間に何かしらの行動を起こすだろうとのことです。信憑性の程は不確かですが、危機管理の観点から警戒が必要かと思います」

クロノに対して、ティアナはハッキリと情報を伝えていく。リク達の管理局への攻撃の可能性。これもまた、目前に迫った危機と言えるだろう。

クロノの言って通り、目的がはっきりしているので、その点で悩む必要はないが、彼らは管理局に対して明確な敵意を持っているのだ。野放しておくことなど到底出来ない。

「聞く限りだと、ソラとリクの両者には協力体制は見られない。復

警に対しての考え方がその良い証拠だ。その会話自体がブラフの可能性があるが、恐らく両者は対立も協調もしていないのだろうな」

「私もそう思う。きっと、ソラが言ってた2，3日中にって話も九分九厘本当だと思う」

ソラとリクの協力体制の有無によっては、襲撃予想の情報はブラフの可能性も考えられた。局側の混乱を招く目的で、ソラがニセの情報をティアナ達に掴ませたという可能性だ。

しかし、ソラの話している様子を見るに、その可能性も低い。恐らく、ソラの言っていることは真実なのだろう。

「ソラの事も気掛かりだが、まずはこちらの問題が先決だ。リク達の管理局襲撃と言う危機が……。これに関しては、もう海だ陸だと意地を張っている場合ではない……局が一丸となって取り組むべき問題だ。加えて、彼らに対する何らかの対抗策を講じる必要もあるだろう」

クロノの言う通り、Ｊ・Ｓ事件以来の局の存亡が懸かった問題である、リク達の存在。陸だ海だと、部署や内部で揉めている暇は全くないだろう。

「その事で、僕となのはから皆さんに報告したいことがあるんです。イノベイト・チルドレンに対する、対抗策について……」

「これは、無限書庫で集めた情報なんだけどね……」

と、そこでなのはとユーノが口を開いた。彼らは無限書庫で発見した、ヴァルター博士の研究資料からイノチルの能力や、正体、そしてそれに対する様々な考察などの資料を調べていた。

その過程で見つけたのが、イノチルに対する対抗策の可能性だった。

「皆さんも知っている通り、イノベイト・チルドレンの主な特徴の一つして、『読心能力』があります。加えて、それぞれ個別に強力な特殊能力を持っている。身体能力も非常に高く、魔力を吸収する能力もある……まさに、進化した存在と言えます」

「その中で、私たちが注目したのが、『読心能力』。端的に説明するとね、イノベイト・チルドレンの読心能力の正体は……特殊な脳波みたいなの……」

「脳波？」

ユーノとなのはの説明に、フェイトが首を傾げながらそう尋ね返す。脳波と言えば、病院などで検査の過程で取ったりすることのあるアレの事なのだが、それと読心能力がどう繋がるのかが分からなかった。

「イノベイト・チルドレンは、特殊な脳波を扱う事で来て、その脳波でどこか……データベースのようなところのアクセスしているらしいんだ」

「データベース？　読心能力なら、人の心っていうか、精神に干渉するとかではないの？」

「うん、僕たちも初めはそう考えたんだけど、ヴァルター博士の資

料によるとその意見は否定されてるんだ。イノチルは、離れた場所に居る人間の思考を読み取る事が出来るからね」

直接他人の精神に干渉しようとすれば、どうしても対象を目の前、若しくは近場に来させる必要があるが、イノチルの場合は距離の制限などが無い。

まるで、どこかから情報を引き出しているかのようだと、ヴァルター博士は考えていたようだ。

「その思考情報の出所については……？」

「ごめん、そこまでは……。資料も途中で欠落していて、ここまでしか分からなかったんだ。でも、この脳波を利用して、イノベイト・チルドレンの能力を妨害できるかもしれないんだ」

ティアナの問いに、ユーノは申し訳なさそうに答えながらも、希望となる可能性を一つ提示する。

確かに、資料は欠落してしまっていたのだが、今ティアナ達に必要なリク達の襲撃に対応する術についての情報を手にする事が出来たのだ」

「えぇと……その脳波を使って……一体どうやって……？」

「うん。彼らイノベイト・チルドレンは特殊脳波によってどこかから思考情報を取り出している、ここまでは良いよね？」

「は、はい。何とか……」

スバルが少し頭から煙を出しながらも、必死にユーノの説明を理解

しようとしている。まぁ、彼女からすれば頑張っている方だろう。

「資料にあったのは、特殊脳波を利用してのイノチルへの逆干渉の可能性。つまり、脳波と同じような波長を生じさせることで、読心能力の妨害が出来るかもしれないってことなんだ」

「要するに、ジャミングみたいなものですか？」

「そうなるね。それに加えて、その逆干渉波でイノチルの特殊能力使用にも妨害効果が得られるかもしれないんだ。つまり、イノベイト・チルドレンの能力を大幅に削ぐ事が出来るってことなんだよ」

ティアナが間に意見を挟むと、ユーノは「その通り！」と言った様子で頷き、イノベイト・チルドレンの能力を奪う、『逆干渉波』の概要を説明してくれた。

読心能力だけでなく、重力操作やベクトル操作と言った、イノチル特有の能力すらも無力化できるかもしれない対抗策。

確かに、これが実用化できれば、来るべき戦いを有利に運ぶ事が出来るかもしれない。

「その逆干渉波を発生させるための術は？　どうにかなりそうなのか？」

「はい。今、シャーリーとマリエルさんに急ピッチで作業に掛かってもらっています。イノチルの特殊脳波については、詳しい資料がデータの中に入っていたので、それを参考にすれば何とかなると……」

クロノがその対抗策の実用性を尋ねてくると、なのはが真剣な表情

をしながら即座に返答をする。
正直、イノベイト・チルドレンを相手にするのならば、普通の方法では無理がある。クロノは客観的にそれを理解していた。だからこそ、可能性があるのならば当てにしたいと考えていた。

「そうか。では、二人には出来る限り急いでくれと伝えてくれ。足りないモノがあればすぐに用意させるとも」

「はい、分かりました」

少しずつではあるが、光明が見えてきたと言っていいのか。目前に迫ったリク達の襲撃に対する対抗策が見つかり、ソラ達の事も気にはなるのだが、最初にクロノが言った通り、リク達の件が最優先だ。

しかし、この状況下においてティアナは少し釈然としないものを感じていた。

「（……何だろう……？　どこか……何かがおかしいような……？）」

違和感を覚えながらも、その正体が何なのかは分からない。どこかモヤモヤした気持ちを抱えながらも、今は局に迫った問題を見極めなければならない時である。
管理局の暗部の事もそうだが、今後も考えていかなければならない問題は山積みである。

ティアナは、頭の片隅に浮き出た違和感を少しの間忘れ、クロノやフェイト達との話し合いに集中することにした。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

少し長めの睡眠をとったソラは、深夜になって目が覚めた。体には毛布が掛けられており、恐らくエステルがやってくれたのだろうと予想が出来た。

彼女とフウミ、シオンも既に広間には姿はなく、個室で休息を取っているようだ。奥の研究室からは明かりが零れており、スカリエッティが未だに研究に没頭していることがよく分かった。

「外の空気でも吸いに出るか……」

ソラは気分転換でもと、隠れ家の外に出ることにした。屋内に籠りっ放しと言うのはやはり体に良くない。

ふらつく体を何とか動かしながら、ソラは外を目指した。

「ふぅ……歩くのも辛いとは……儘ならないなぁ」

外に出たソラは、そこら辺にあった柱の瓦礫を椅子にして腰掛けた。視線を上にしてみると、そこには数えきれないほどの星の光が爛々と輝いている。

周囲に人工の光が無いからこその絶景とでも言えばいいのか。兎に角、夜の星空は気持ちが良かった。

「リク、スカリエッティ、シオン、エステル、ティア、管理局、必要な駒は揃った………。あとは、やるだけか……」

星空をボーっと見上げながら、ソラはこれからやる事のシナリオを思い浮かべ、穴が無いかを考える。
まぁ、どんな作戦のもイレギュラーは付き物だが、考え得るものくらいは把握しておきたかった。

「一番のネックは、リク達と局の戦争だな……。ティア達が上手くやってくれるといいんだけど……っ！　ゴホっ！　ゲホっ！？」

と、シナリオのおさらいをしていたソラだったが、体を襲った急激な不調と咳によって、それは中断されてしまう。
咳はすぐに止まったが、ソラはゆっくりと咳を止めようとした右手を見る。
すると、そこには……

「こんな夜中に外に出ていると、風邪を引きますよ」

「……シオンか」

右手にあるものなど、見ないでも分かったのだがシオンの声がした瞬間、ソラは手を拳に握りしめて隠した。

シオンは、ソラの座っている瓦礫に肩を並べて座る。炎を思わせる赤い髪は、夜でもかなり目立ち、キャンプファイヤーでもしているのかと思えるくらいだった。

「こんな夜中に、何か用なのか？」

「少し、気掛かりな事がありまして」

シオンはいつも通り丁寧な口調だったが、どこかいつも以上に真剣な表情をしていた。
剽軽な性格ではない男だが、堅物くそ真面目と言うわけでもない。
だが、今の彼は酷く真面目な顔をしていた。

「空のレガリア……先生の設計図や、予測できる効果、体への影響を見せて頂いたのですが……」

「あぁ、それがどうかしたか？」

「空のレガリアを使うと、イノチルであるあなたでも、僕でも、体にはとんでもない負荷が掛かります。人間ならば、一瞬で死に追いやられてしまう」

空のレガリア、今回のソラの計画には必要不可欠なパーツの一つだ。
これが揃わないことには、何も始まらない。それ故にスカリエッティをここに連れてきたのだから。

計画の核となるべきレガリアなのだが、使用に当たっての予測されるリスクは相当に高いモノらしい。

「……大丈夫さ。俺はもう、ティアから『血』を貰っている。死ぬようなことはないよ。先生の予測データでも、万が一にも死ぬことはないだろうってな」

『血』
それが彼らにとってどれだけ大きな意味を持つのか、何をもたらすのか。それは、彼らの頭の中にしかない。
だが、その有無が今回の計画の要になると言ってもいいことだけは確かだった。

「で？気になる事ってのはそれだけか？」

「いえ、もう一つだけ……。ソラ、あなた……どこか体が悪いのではないですか？」

「……」

この質問に関しては、ソラにとっては不意打ちだった。

イノベイト・チルドレンの身体能力からして、人間の発症するような病気になる事はまずない。それを知っているはずのシオンから、そんな事を聞かれるとは思っていなかったのだ。

「何のことだ？　それ以前に、俺はお前と同じイノベイト・チルドレンだ。病気とかにはならないことくらい分かってるだろ？」

「では、あなたの右手。開いてこちらに見せてください。」

「……」

気取られないように、普通に返したつもりだったが、シオンの目は誤魔化せなかったらしい。ソラが不自然に拳を作っているのを、彼は見逃さなかった。

「どうしました？　見られるとまずいモノでもあるんですか？」

「……っち、わーったよ。ほれ……」

シオンを誤魔化すのは不可能と判断したソラは、拳の形にしていた手を開き、それをシオンに見せた。

そこには、考えたくないモノ、あるはずの無いものが在った。

ソラの手には、赤い結晶がいくつも転がっていた。大きさにばらつきはあるが、天然の宝石のような、それでいて血のように濃い赤色をした結晶だ。

「……」

「……これは……天才症候群の末期症状……？」

シオンは、やはりと言う気持ちと、予感を信じたくなかったという気持ちが混ざったような表情でそう呟いた。

血のように赤い結晶。それは比喩ではなく、本当に血なのだ。

ソラの手に転がっているのは、『血が結晶化したもの』なのだから。

天才症候群は、末期に陥ると少しずつ体が結晶化していく。吐血した血も、内臓もすべてが無機質な結晶となってしまう。

「どうして……？　イノベイト・チルドレンであるあなたが……」

「単純な話さ……俺の能力が、個人が持つには大きすぎた……それだけの話だ。能力に、俺の体が追い付いてない……」

天才症候群は、イノチルとしての能力が、体のキャパシティを超えることで発症する。ヴァルターが救おうとしていた患者たちは、体が人間のまま能力だけが開花したために、天才症候群を発症した子供達だった。

しかし、ソラの場合は違う。身体能力もイノチルでありながら、能力の強大さを受け止められないという状況だ。

「一体いつから……先生の治療法は！！」

「先生が死んでから半年くらいたったころからだ。あと治療したいところだが、無理だ。あれは人間だった体をイノチルのそれに強化することで、能力を制御、安定させる治療法だ。俺の体は生れたときからイノチルの体だ、もう強化するための伸びシロがない」

ヴァルターの考案した治療法は、イノチル向けではない。そも、イノチルが天才症候群を後天的に発症するなど想定もしていなかったのだ。
その点で言えば、ヴァルターを責めることなど出来ないし、そんなつもりもなかった。

「どうにかならないのですか……？」

「どうにかできればいいんだが……出来ることならそうしたいが……ダメなもんはダメだ……。……俺はもう長くない」

いつもと同じ、冷静なソラの声。自身を襲っている病魔など気にもしていないようにも見えるが、そんなはずはない。
彼の心中を察することなど、能力を使ってもシオンには出来なかった。

「そんな体で空のレガリアを使ったら……」

「死ぬ……だろうな……何もしなけりゃ一か月くらいは持つだろうが…。先生唯一の誤算が、俺の体……。そうでなきゃ、あの人がこんなこと俺に頼むはずがない」

ソラは、ゴロリと瓦礫に寝転がりながらそう言った。それは彼がヴァルターの事を信じているが故に出た言葉。
色々な事を教えてくれた恩師が、自分に死を求めるような事はしないという信頼だった。

しかし、現実はこうだ。ソラは遅かれ早かれ死ぬ。

「なら、空のレガリアは僕が使います。そうすれば……」

「無茶言うな。お前はまだ血を貰っていない。今の体で空のレガリアを使ったら、お前が死ぬだけだ」

「ですが……！！」

「転がる死体の数を増やしても仕方ないだろ……少し冷静になって考えてみろ」

珍しく、シオンが声を荒げる。どうしようもない、そんな単語を頭から追い払いながらシオンは言う。
抗うように、それでもと……

「……エステルには……？」

「言ってない……でも、あいつは賢いからな……もしかすると、気づくかもな……」

「……はぁ…何てことだ……」

だが、結局事態は変わらない。シオンは頭を抱えるように沈む。
イノベイト・チルドレンと言えで万能ではない。生前のヴァルター

の言葉を、思わず頭の中で反芻してしまった。

「ティアの血を貰ってなかったら、俺はもっと早くに死んでただろうな……。でも、それがここまで騙し騙しやってこれた……。ほんと、ティアには感謝してもしきれない」

「……あなたが彼女に尽くしていたのは、その借りを返す為……ですか？」

「……あぁ、そうだろうな……。今はもう……よく分からないが……」

良い感情を持っていなかった管理局、その中に居るティアナにソラが力を貸していたのは、『恩返し』だった。彼女にはそのつもりはなかったのだろうが、結果的にソラは今日まで生きながらえてきた。何か返す事が出来ればと考えたが、彼女の力になって働くという事くらいしか思いつかなかった。

「今更やめる……なんて言わないよな？　シオン…？」

「……えぇ……あなたの体に事を聞かされたら余計にね……」

ソラは確認のためにもう一度聞いておく、シオンの意思を。
それに対して、シオンは力強く頷き、再び彼に協力することを誓う。

「すべては……」

「あぁ、『変数X』を世界に生み出すためだ。その為の、空のレガリアと俺だ」

『変数X』
それが、ソラ達の目指すもの。自身の体の事を無視してまで、ソラが生み出そうとしているものだ。
ティアナ達が知りえない、ソラ達の目的。それこそが、この単語である。

「……ソラ、あなたはそれでいいのですか……？生きようとは……思わないのですか？」

「まぁ、人並みに生存欲はあるつもりなんだけどな……。でも、それでもこれは俺がやりたい事なんだ……先生の願いとかじゃない。俺が選んだ事なんだよ……」

「変数Xを生み出した後……ティアナさん達ともう一度……とは考えていないのですか？」

珍しく、今日のシオンは饒舌だ。そんなことを考えながら、ソラは答える。
たまには、男同士で語り合うのも悪くはない。会話の内容が辛気臭いのがマイナスポイントではあるが。

「そうだな……欲を言えば……な……。出来ることなら、数分間でもいい……話がしたいとは思う……でもな、やっぱり無理なんだよ……」

「……」

シオンは、ソラの方を向きながら黙り込む。この夜空と違い、こち

らのソラは酷く儚い色をしている。
自然の演出が、少し憎たらしく思えてしまった。

そして、ソラは自身の未来を静かに口にした。

それは変えられないこと、回避不能のイベントで……とても悲しい現実だった。

「俺は、もうすぐ…いなくなる……」

Ａｃｔ２７　開戦前（後書き）

ソラ「見事に死亡フラグっていうか、回避不能イベント発生させてくれたなおい……」

Ｆ２０Ｃ「ティアナサイドとソラサイドで動きがあったわけですが、ソラの方は少しもの悲しい感じですね……自分で書いておきながら」

ソラ「で？ヒロインアンケートの結果はどうなったんだ？」

Ｆ２０Ｃ「あぁ、それそれ。では、さっそく発表しちゃいましょうか。今作、ＢｏＰのヒロインは……」

ソラ「……（ー ω ー）ｙ┛~~~~」

Ｆ２０Ｃ「ティアナに決定いたしました～♪　ってなんで電子タバコ吸ってやがるのお前？」

ソラ「いや、前ふり長いし……」

Ｆ２０Ｃ「とても命少ない主人公に見えないよ……。と、結構僅差だったんですけどね、二票差でティアナになりました」

ソラ「という事で、シナリオの大筋も決まったところで、次回もお楽しみに～～」

Ｆ２０Ｃ「次回も来週に更新……出来たらいいなぁ……」

最後になりましたが、アンケートの答え頂いた皆々様方、本当にありがとうございました！
エステルに票を入れて下さった方、申し訳ありません……。ですが、その分内容の濃いものにしたいと思っていますので、どうぞご期待くださいませ。

次回Ａｃｔ２８　『宣戦布告』

Ａｃｔ２８　宣戦布告（前書き）

どうも、毎度お馴染み、なのは小説界の燃えないゴミ、Ｆ２０Ｃでございます。

新学期も始まり、大学生活、高校生活、社会人生活などなど、新しいスタートを切られた方も多いのではないでしょうか？

かくいう私は、大学生最後の年。４回生でございます。就活で少し忙しいですが、そろそろ決めていきたいですね。結果早く来てくれ……

大学自体にもゼミ行くだけなので、週一回だけですね……なんだか引きこもり率が上がりそうで怖いです。

さてさて、長いお話はここまでで、本編をお楽しみくださいｗ

今回、ルークがフェイトに少し甘えます。羨ましい……

Ａｃｔ２８　宣戦布告

――――時空管理局・病院内――――

「なるほど。その逆干渉脳波が次の戦いの切り札ってわけか……」

「そゆこと。今はシャーリーさんやマリエルさんが最終調整に入ってるところ。二日で何とかしちゃうんだから凄いわよね」

「その道のプロだしな。戦うの専門の俺にはよく分からん世界だよ」

クロノのオフィスでの話し合いから二日が経過していた。未だにリク達の動きはないのだが、嵐の前の静けさと言う言葉もあるように、いつ来てもおかしくはないし、襲撃の際には大規模な戦闘が予想される。

それに伴い、局内では『海』や『陸』といった差別意識を一時的に押し殺しての体勢の構築が進んでいる。まぁ、こんな時なので反対意見はほとんどなかったのだが、上層部もいやに協力的だったのがティアナやクロノ達からすると、気持ち悪くはあった。

恐らくは、自分たちの非人道的な技術などが、イノチル達によって世間に露見することを恐れているのかもしれない。

どちらにしろ、追々は追及のメスが入る事にはなるだろう。実際、クロノ達がその当たりの案件に対するアプローチを陰から行ってい

るらしい。

「……でも、ゴメンな。次の戦闘、俺は役に立てそうにない」

「良いわよ。あんたはスバルとフェイトさんを守ったんだから。それだけでも勲章モノよ、責任感じる必要ないわ」

病室のオーソドックスなタイプのベッドに、目を閉じた状態で体を預けている青年、ルークにティアナはそう答える。

一昨日の『天照』の使用によって、ルークは対価として一時的に視力を失ってしまい、今こうして病院送りという事になってしまっている。

当然のことながら、今後予想されるリク達の襲撃の際には、戦力としては扱うことは出来ないだろう。

「そうだよ、大体またあんな無茶して……もしもあの風を消せなかったら、ルークどうなってたか分かんないんだよ？　それなのに……クドクドクドクド……（以下エンドレス）」

「す、すんません……」

病室に居るもう一人の女性、というか嫁であるフェイトは大層ご立腹なようで、ルークに対してジト目を向けながらクドクドとお小言を始める。

それだけ心配したという事なのだろうが、かかぁ天下となっているルークとフェイトの関係を見て、ティアナは苦笑するしかなかった。

「でも……ソラの奴、俺達を殺そうとはしてなかった……。あの攻撃も、天照で無力出来ると分かってて撃ってきたようにも見える……」

「あ、それは私も思った。それ以前に、ルークの天照が厄介だから先に潰しておきたかったらしいわよ？」

「なるほどね……頭の回る奴だよ。天照の事自体は、俺の思考を読んで知ったんだろうけど、そこからの能力潰しまでの手際が見事っていうしかない。俺がスバルとフェイトを庇うのも計算づくだったんだろうしな。ほんと、イノチルってのはとんでもないよ…」

ソラのあの攻撃は、彼自身が言った通りルークの目を潰す為のモノだ。絶対破壊能力によって、レガリアを失うという可能性と不安要素を先だって摘んでおく。
常に最悪を想定して計画を立てるタイプなのだろう。

「……でも、皮肉よね。こういう非常時に直面してでしか、局内が一つに纏まらないっていうのは……今でさえ、イノベイト・チルドレンっていう目の前に差し迫った危機があるからこそ強調していられるんだろうけど…」

「ま、全部が終わればまた元通りだろうな。その時に管理局が存在してれば、の話だけど」

「ルーク、そういう言い方しないの。クロノ達だって頑張ってるんだから……」

ティアナが言う様に、確かに今の局内の協調的な雰囲気は目の前に差し迫った危機があるからこそのものかもしれない。
ルークが考えている通り、一時的では意味がない、恒久的な組織内の纏まりと言うものが管理局には決定的に欠けている。

組織と言うものに、勢力や派閥と言うものは確かに付き物ではある。
しかし、局の場合はそれが目立ち過ぎる節がある。

「この事件が、何らかの触媒になってくれれば……局内の膿を取り除ければ、また新しい一歩が踏み出せるかもしれない。クロノ提督はそう考えているわ」

しかし、ピンチはチャンスとはよく言ったもので、今回を契機に局内部の腐敗部分を一掃してしまおうという考えを念頭に置いて、この危機を乗り切ろうと考えている者達もいる。クロノがその良い例だろう。

上手く行けば、上層部の腐敗や、内部での違法な行為・武器などを洗い出し、糾弾することも出来る。
民衆からの局に対する信頼は、短期的は落ちてしまうだろうが、こういった物は長期的な展望を基に進めなければ話にならない。

新体制での局の構築、イノチルの脅威を退け、管理局が目指すべきものはまさにこれだろう。

「だったら、尚更ここで潰されるわけにはいかんでしょ。ティアやフェイトの仕事は、戦いの後の方が多くなるだろうし」

「ルークも、ね？」

「ふぇ、フェイトさんや…？　俺は昔から、事務仕事と言うのは苦手でしてね？」

「ルーク？　好き嫌いはダメなんだよ？　パパがそんなだと、シエ

ルも真似してルークみたいに……」

「う……わ、分かってるよ……やればいいんでしょやれば……」

それにしても、すっかりと言うか、完全にフェイトの尻に敷かれているルークだった。

フェイトさんの尻に敷かれるとか、私たちの業界ではご褒美です。

と、そんな感じでホンワカした時間が過ぎていた時だった。

来るべきものが、目の前に迫っていた危機が牙を剥いてティアナ達を襲ってきたのは。

ドォォォォン！！！！

「うわぁ！？」

「な、なに…？」

「まさか……」

突然の轟音、加えて振動によって、三人は少し体を揺らされる。

病院そのものが揺れているような錯覚にも襲われるが、倒壊していく気配はない。恐らく、爆発乃至は地震が起こった地点はここから離れているのだろう。

『ティアナ、フェイトちゃん！！　リク達が現れた！！』

「なのはさん！（なのは）」

揺れが静まって数秒も経たないうちに、なのはからの通信が飛んできた。どうやら、彼女はイノチルが現れた場所に近いところに居るらしい。

「場所は？　どこです！？」

『ミッドチルダの地上本部！！　シャーリーたちの作業の様子を見に来てたんだけど……。兎に角、私は応戦に向かうから二人も急いで！　きっと、私や地上の局員だけじゃ一分も保たない』

「分かりました、フェイトさんとすぐそちらに向かいます！！　無理はしないでくださいね！」

『うん、善処してみる！』

事態が事態なので、長々と話をしているわけにもいかない。ティアナは手短に要件と自分たちの動きをなのはに伝え、フェイトと示し合わせて現場に向かう事にする。
イノチルの能力は、なのはも重々分かっている事だろう、それ故に彼女でも一分保つがどうかという判断をしたのだから。

「じゃあルーク、悪いけど私たちは行くわ」

「ごめんね、ほんとは付いててあげたいんだけど」

「そんなことは良いから、早く行けって。なのはさんも待ってるんだろ？」

病室に残していくことになるルークにそう言うと、彼からも出発を急ぐように促される。彼とて、出来ることならば一緒に戦いたいと

ころではある。しかし、今の自分が言ったところで足手纏いにしかならないことは火を見るよりも明らかな事、ルーク自身もそれを自覚していた。

「あぁ……それと……フェイト……」

「ん？　なぁに？」

と、ルークは病室を出るフェイトに声を掛ける。その表情は、どこか不安げで昔の彼を思い出させた。

「帰って……来るよな……？　フェイトは……」

「……ルーク」

その問いには、『信じている、でもフェイトの口から聞きたい』という気持ちが伝わって来た。自分自身が、一緒に戦闘に参加できるのならばこんなことは聞かない。

なぜなら、一緒にいるときはルークがどんな手段を使っても彼女を守るからだ。

だが、今回はそうもいかない。自分が傍に居ようとどうしようもないことはあるだろうが、少なくとも『置いて行かれる』ことはない。もう二度と、あの喪失感を味わいたくはない。ルークはそんな気持ちを未だに消す事が出来ずに生きている。

それを重々理解している、ルークの一番の理解者であるフェイト。

今彼女に出来ることは１つだけだった。

ちゅ……

「うん、帰って来るよ、約束♪」

「…………（ボフン！！）」

柔らかい何かが、自分の唇に触れた感覚。それを自覚した瞬間、目など見えなくてもルークにはフェイトが何をしてくれたのか理解できた。

数秒経たない間に、顔を真っ赤にしながら、ベッドの上をごろごろしている。

「行ってきます」

「……うん…／／／／」

フェイトは優しく笑みを浮かべながらそう呟き、ティアナと共に病室を後に。

ルークは、皆の無事とフェイトとの約束を胸に、ベッドに体を預けたのだった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

初撃の威力は、出来るだけ大きな方が良い。それも、敵が怯む、乃至は戦意を失うほどのモノであれば尚の事。

一撃目で生まれた隙や、低下した士気と言うものは立ち直るのに時間が掛かる。その綻びさえ見逃さなければ、戦闘開始時点での優位

性が確立できるのだ。
事実、今リク達の目の前では、管理局の大元である本局のビルの一本が完全に倒壊しており、それを見上げて惚けている局員たちの姿が多くあった。

「あはは♪　見て見なよリク、管理局の連中のアホ面ｗｗｗ　今現実に起きてる事が信じられないって顔してさ♪」

「いい気味だよ。まぁ、こんなのはまだまだ序の口なんだけどね」

「スロウス、レイスの言う通りだ。管理局、今日この日を以て、お前たちの歴史は幕を下ろす……震えて待つと良い……」

リーア、レイス、リクが火災と土煙を上げている瓦礫の山を見下しながら、愉快そうにそう呟く。
無口なネルは、相変わらず無表情なままだが、その表情にはほとんどわからない程度だが、若干の優越が見て取れた。

本局のビルを一本へし折ったのは、リクだ。石のレガリアを使う事で彼は重力という自然界に存在する、強い味方を自在に操る事が出来る。
ビルを粉々に破壊するなど、彼にとっては造作もないことだ。

「さて、管理局共の混乱を利用しない手はない。一気に本丸と、ネスターの首を獲るぞ」

「あぁ」

「えぇ、もちろん♪」

「む……」

そして、リク達はこの大規模な混乱に乗じ、行動を本格的な段階にシフトさせる。彼らの目標は仇敵ネスターの命、そして管理局の中核部分の破壊にある。

その過程で、局の主だった、或いは名の知れた魔導師たちも消していく。今から全滅させるつもりは全くない、理想は各個撃破による戦力の分散、収縮なのだから。

リク達は事前に決めていたルートに従って、本局の中心部に向かって疾走する。そのスピードは、以前のモノよりも断然に早く、彼らの運動能力の高さを物語っている。

リク達から見れば、周囲の景色が新幹線に乗っているような錯覚さえ覚えてしまう速さで流れている事だろう。

「！」

と、先頭を走るリクが何かに気が付く。そして、すかさずハンドシグナルで後続のレイス達に止まれと命令を下した。

「な、なんだお前たちは！？」

「こんなところで一体何をしている！！」

「こちら外周部、Ｂ班。怪しげな一団を発見、指示を求む」

停止したリク達の目の前にいたのは、管理局の局員だった。その数３人。

察するに、非常事態態勢が敷かれ、索敵班として局の外周に配置さ

れた面々なのだろう。

異常なスピードで目の前に現れたリク達に対して、当然ながら彼らは警戒心を尖らせる。そんなことが、全く意味をなさないと分かるはずもないまま…

「リク？　殺っちゃっていいわよね？」

「あぁ……いや、その前にやっておくことがある」

リクはそう言うと、石のレガリアを展開。重力を操る自身の能力のバックアップを行う。

彼は、無表情のまま3人の局員たちに視線を合わせ、能力を発動させた。

「がっ！？」

「な、なにが！！？」

「ぐぅ！！？」

その瞬間、三人の局員の体は地面に這いつくばらせられ、視線だけをリク達に向けることしか出来なくなってしまった。

リクの能力によって、今彼らの体には通常の何倍もの重力が掛かっている事だろう。

「おい、今開いている通信チャンネルをそのままにしておけ」

「あ…ぐ……」

先程、本部と通信を交わしていた局員に、リクは冷たく言い放ち、上からゴミを見るような目で見下ろす。
どうやら、本部と繋がっている通信チャンネルを使用して、何かを伝えるつもりらしい。

「聞け、偽善者集団共。私たちは、お前たちに平穏を奪われた者……そして、お前たちをこの世から一片たりとも残さず排除する、断罪人だ」

リクは、昔からは想像も出来ないような迫力のある声で、局本部に繋がっている通信ラインを介して声を届ける。
憎しみを込めて、怒りを込めて、悲しみを込めて。自分たちの中にある感情を、言葉と言う旋律に乗せて管理局そのものに叩き付ける。

「お前たちの存在、所業、虚で塗り固められた綺麗事。私たちは、それを許さない。正義という隠れ蓑で真実を覆い隠し、世界を嘘で染め上げる……そんなお前たちを、私たちは絶対に許さない」

そこでリクは一呼吸を置き、目を見開く。
今の彼には、迷いと言う概念はない。吹き飛んで、月まで行ってしまったのかもしれない。
しかし、それだけの覚悟、何よりも憎悪が彼を今ここに立たせている。未来のことなど考えていない。
彼らにあるのはただ一つ、『管理局崩壊』という目標、世界が求めている回答だ。

「さぁ、管理局の諸君。戦争を始めようか？」

こうして、宣戦布告は成された。
奪われた者と奪ったもの、憎しみの連鎖。人間が幾星霜の月日を費やしながらも、結局は抜け出せない無限回廊。
それを象徴するような戦争が、今まさに始まったのである。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「始まった……」

「の、ようですね……」

ソラとシオンは、アジトに在るスカリエッティの研究室。さらにその中にある、転移魔法ゲートの前に立ちながらそう呟いた。
転移魔法ゲートの行く先は、ミッドチルダ地上本部。今まさに、リク達が戦争を始めた場所、戦地の真っただ中である。

「予定に何か変更は？」

「いや、無い。スカリエッティとエステル達は、指定の時間になったら移動を開始してくれ。流石に、戦いながらセキュリティを突破していく自信はない」

「良いだろう、任せたまえ」

ソラは、スカリエッティとエステル、フウミにそう告げ行動目標と過程の確認をしておく。今回、スカリエッティとエステル達には局のセキュリティやシステムのハッキングを担当してもらうことにな

っている。
元々、二人は戦闘向きではないので、こういった技術的な部門を任せた方が得策だろう。

「空のレガリアの適合率はどうかな？　風のレガリアとのマッチングは、数値上では規定値をクリアしているが、実際のところは君の感覚に依るところが多いからね」

「今のところ何の問題もない。いい出来だよ、スカリエッティ」

ソラの足には、風のレガリア・オルクスが既に展開済みであった。
シオンも同じで、炎のレガリアを足に纏っている。

さてさて、空のレガリアとのマッチングという事で、オルクスの外観が変わったのかと聞かれると、答えはＮＯだ。
オルクスの見た目は、これまでの物と遜色はない。しかし、スカリエッティがヴァルターの設計図を基に完成、改良を加えた空のレガリアは、確実にオルクスに実装済みなのだ。

「あと、これも君から頼まれていたものだ。持って行くと良い」

「あぁ。ありがとさん」

そして、もう一つスカリエッティの手から、ソラに何か金属で出来た、パーツのようにも見えなくもないモノが手渡された。
ソラは、それを確認すると服の懐に滑り込ませておく。これの出番は、少し先になりそうだった。

「さてと……んじゃ行きます……」

クイクイ…

「ん？」

と、準備が完了してソラがいよいよ行動を開始しようとした時だった。ソラの服の袖を、フウミがクイクイと引いてきたのだ。どうやら、何か伝えたいことがあるらしい。

「どうした？　フウミ」

ソラは彼女と目線を合わせるために腰を落として尋ねてみる。無表情な彼女ではあるが、感情が無いというわけではない。言いたいことだって、伝えたいことだって、人並みにあって然るべきだ。

「ソラ……私は……何をするの？」

「……」

「私も……戦う？」

フウミの言いたかったのは、『自分の役割』だ。この中で、特にやるべきことが割り当てられていない、というか割り当てることが不可能なのだが、兎に角、フウミは自身の役割を知りたかったようだ。

ソラは、彼女の質問に一瞬押し黙ると、少し笑みを浮かべながら、『彼女の役割』を教えてやった。

「見届けること、だな」

「見届ける……？」

「あぁ、俺達が何をして、世界がどんな選択をしてどう変わっていくのか。それを見届けるのが、お前の役目だ」

恐らく、幼い彼女では役割の全てを理解することは無理だろう。しかし、近い未来、彼女が成長して世界を知っていくにつれて、この役割の意味は明るくなっていく。

「それに、お前が戦う必要なんてどこにもない。イノチルだからって、お前が人殺しをしなきゃいけない理由なんてないからな」

「……じゃあ、ソラは？　ソラは何で戦うの？」

「俺は生れたときから『こっち側の人間』だからな。それに、こういう生き方しかできない。でも、お前は違う。もう戻れない俺やシオンとは違うんだよ」

ソラは、そう言うとフウミから視線を一瞬外す。

『自分はズルい言い訳を使っている、戦う理由はもっと別にあるじゃないか……』

そう自覚していても、フウミを『こちら側』にやる事だけはしたくなかった。

ソラ達にとってフウミは、幼いころの、ヴァルターの研究所で穏やかに暮らしていたあの頃の自分たちの象徴のような、取り戻せない過去の思い出の塊のような存在だったからだ。

「フウミ、エステルの言う事ちゃんと聞くんだぞ？　勝手に離れたりするんじゃないぞ」

「うん……」

そして、最後にそう言ってから、ソラはエステルの方を向く。
本当なら、言うべきことは他にもいくらでもあったのだろうが、上手く言葉に出来る気がしなかった。

今のソラは、立っていることもやっとの状態だった。

「じゃあ、エステルよろしく頼む」

「うん、気を付けてね……」

エステルの瞳には、心配の一言が現れるようだったが、それを決して口にはしない。ソラの事を、誰よりも評価し、信頼している彼女なのだ。
心配はしても、余計な気を回してそれを口にしたりはしない。彼女は、強い女だった。

ヒュン……

短いが、強い信頼を含んだやり取りを合図に、ソラとシオンは転移魔法ゲートによって、その場から姿を消す。
目を開けば、目の前は戦場だ。先ほどのフウミとのやり取りで、少し心に生まれた温かい気持ち。それを握りしめるように、ソラは腕の前で拳を作った。

スタ……

少し急な着地だったが、足のバネを最大限に利用してその衝撃をほぼゼロにする。
転移魔法は便利だが、慣れない内は舌を?むことは必至だろう。

そして、ソラとシオンは同時に目を見開く。転移魔法で降り立った、ミッドチルダ地上本部。
大きなビルが一本瓦礫の山と化しており、多くの局員が忙しそうに駆け回っている。

「なんだお前たちは!!?　どこから現れた!!?」

「おい、こいつら……報告に遭ったイノベイト・チルドレンじゃないか!!?」

「こ、攻撃態勢に移れ!!　我が部隊で、イノベイト・チルドレンの首を獲る!!!」

まぁ、敵地のど真ん中に転移したのだ。豪勢且つ、熱烈な歓迎は想定の内だった。ソラとシオンの目の前には、何百人もの管理局の魔導師たちが隊を構えている。
転移地点がバレタわけではなさそうだが、完全に場所が悪かった。

「ソラ、体の方は大丈夫ですか?」

「立ってるのがやっとだ。まぁ、ここでそんな泣き言言ってるわけにもいかんよな……」

「そう…ですね。道がありませんよ、これでは……」

数百人の隊を組んだ魔導師の山、大群とでも言えばいいのか。ミッドチルダ本部に向かって真っすぐ走ればいいだけの道が、人の壁によって塞がれている様を見れば弱音など吐いている暇もない。

加えて、向こうさんは既にやる気満々のようで、あちこちで魔方陣の展開が確認された。

「だったら……やる事は1つだけだろ？」

「同感です」

ヒュン！

そう示し合ったソラとシオンは、一瞬でその場から姿を消し、空高くに飛び上がっていた。同時に、風のレガリア・オルクスと炎のレガリア・ボルカニアスのそれぞれを吠えさせる。

ソラは大規模な風を、シオンは猛々しい豪炎を。

2人のコラボレーションスキル、全てを吹き飛ばす風爆撃。

「「風瀑の道（ゲイル・ロード）」」

ゴァア！！！！

ソラの風と、シオンの炎。その二つが絡み合い、爆発的な威力を内包した炎と風の一閃。子供のころに一度だけ使用したその技は、息の合い方、威力、タイミング、キレ、全てが完璧だった。

ドォオオオオオン！！！！

一瞬だ。瞬きの間に、目の前に展開していたはずの魔導師の大軍隊は吹き飛んでいた。
しかし、今回は殺していない。ソラ達の目的は、殲滅ではないからだ。

ソラ達の目的は、あくまで『対話』だから……

トン……

風爆（ゲイル・ロード）の道を放った二人は、同時に着地。
そして、爆風で少し乱れた髪を手で治しながら、あちこちに気絶した魔導師たちが転がっている瓦礫の上を歩き出す。まるで、そこが自分たちの道であるかのように。

「道が無いなら、作りゃいいだけだろうが」

「変わっていませんね、あなたのそういうところは」

そう言い交わし、二人は歩く。風爆によって生まれた、彼らの道を……

Ａｃｔ２８　宣戦布告（後書き）

Ｆ２０Ｃ「ＢｏＰがクライマックスに突入しましたので、完結までガンダム小説はお休みにしたいと思います。こっちに集中したいので……。」

ソラ「あ、スクラパは今まで通りですので、引き続きよろしくです」

Ｆ２０Ｃ「さてさて、久しぶりの合体技だね」

ソラ「殺さないように、非殺傷で頑張ってみたんだけど上手く行ってよかったよ」

Ｆ２０Ｃ「ていうか、立ってるのがやっとって……そんな体で大丈夫か？」

ソラ「一番いいのを頼む」

Ｆ２０Ｃ「はいどうぞ。（機械の体）」

ソラ「……」

Ｆ２０Ｃ「哲郎、機械の体は欲しくないですか？」

ソラ「誰が哲郎か。ていうか、なんで９９９？」

次回　Ａｃｔ２９　『逆干渉脳波』

Ａｃｔ２９　逆干渉脳波（前書き）

ヒーハー！！！

春休み開けたはずなのに、全然そんな気になれないぜ！！！

まぁ、そんなことは置いといて……タカ！　トラ！　バッタ！！
今のトレンドはこれだろ！！（作者の頭の中では）
オーズ！！オーズ！オーズ！カモン！！！

すみません、取り乱しました。
ていうか、オーズ見てて気が付いたんですが、メズールのＣＶってゆかなさんなんですね。気が付いたときやたらテンション上がりました。
ゆかなさん、なんてエロイ声を……うわ、なにをするやｍ……

作者はヤミーさん達にどこかへ連れ去られてしまったようです。

Ａｃｔ２９　逆干渉脳波

Ｔｈｅ ｅａｒｔｈ，ｓａｉｄ ｈｅ，ｈａｔｈ ａ ｓｋｉｎ；ａｎｄ ｔｈｉｓ ｓｋｉｎ ｈａｔｈ ｄｉｓｅａｓｅｓ．Ｏｎｅ ｏｆ ｔｈｅｓｅ ｄｉｓｅａｓｅｓ，ｆｏｒ ｅｘａｍｐｌｅ，ｉｓ ｃａｌｌｅｄ ”ｍａｎ．”

「地球は皮膚を持っている。その皮膚はさまざまな病気も持っている。その病気の一つが人間である」

フリードリヒ・ヴィルヘルム・ニーチェ　『ツァラトゥストラはかく語りき』より

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

圧倒的。

この言葉を使う時、人は目の前に立つ脅威に対して、何も思考できなくなる。あまりに力が強大過ぎて、あまりに力差があり過ぎて、あまりの恐怖によって、何も出来なくなってしまう。

頭の中が真っ白になってしまっているというのは、詰まる所そういう事だ。

そして、管理局の魔導師としてはペーペーも良い所な、アウル・ラスタームもまた、その『圧倒的』という言葉に呑み込まれてしまっ

ていた。

「（あ、足が……手も……動かない……う、嘘だろぉ……）」

配属先が決まって三週間。ようやく舞台にも馴染め、同期の女性魔導師との仲もそれなりに良好、上司の愚痴を聞くために度々飲みに誘われ、深夜に帰宅することも珍しくない。

まぁ、局員生活のスタートとしてはまずまずのモノだったはずだ。

しかし、目の前の現実はどうだ？

かつての仲間だった同僚、上司たちは物言わぬ肉塊となって、そこかしこに転がっている。鼻を嫌に刺激する血の匂いに、人肉の焦げた匂い。

アウル・ラスタームにとっての局員としての日常は、いとも簡単に破壊され、非日常にシフトする。

人の、個人の日常など、これほどまでに脆弱で、いとも容易く壊れてしまう。

「リク、この辺り一帯の殲滅はこんなもんじゃないかしら？　小粒な奴しかいなかったけど」

「あぁ。このまま真っ直ぐ、ネスターの居るであろう本局に突入する。雑魚は後で掃討すれば済むことだ」

「ゴミ掃除は後回しってことかぁ。ま、掃除はあんま好きくないし、良いんだけどね」

そして、目の前には『圧倒的』な戦闘能力を以て、アウル・ラスタ

ームの日常を粉々に破壊した存在。
そう、つい二日前に部隊の先輩から聞いていた、イノベイト・チルドレン達。

話を聞いただけでは、俄かに信じられなかった。管理局が存亡の危機に陥るかもしれないなど、そんなことは有得ない。ただの妄言だろうと。
話をしていた先輩でさえ、恐らくは笑い話のつもりだったのだろう。

しかし、やはり現実は違う。
アウルは、二日前の、話を聞いて先輩と馬鹿笑いをかましていた自分を殴り飛ばしたくなった。
そんな後悔すら、最早何の意味もなく、手遅れだと分かっていながらも……

「あら？　まだ息があるのが居たのね？」

「あ……ぐ……」

虫の息ではあったが、このまま見逃してほしいと願っていたアウルの願いは届かず、イノチル、リーアによってその存在を感知されてしまう。
瞬間、アウルの心拍数は一気に跳ね上がる。命の危機、死への誘いが、目の前の女性からひしひしと伝わってくる。

「運がいいわね～♪　でも、残念。あなたのラッキーもほんの数分の分しかなかったってことね」

「（し、死にたくない！！　死にたくない！！！！　くそぉぉ……）」

最早、手も足も満足に動かせない状況にあって、アウルに残されたのは『死』だけだった。リーアが、鳥肌が立つほどの美しさと、それに勝るとも劣らないほどの禍々しさを兼ね備えた大鎌。氷のレガリア、フェンリルを振りかざしながら、アウルの首を飛ばさんとする。

「じゃあ～ね～♪」

ブンッ！！

そして、その大鎌は振り下ろされ、彼の命を奪いに来る。刃が、少しずつ、少しずつ……。

その光景がスローモーションに見え、これまでの思い出が頭の中を駆け巡る。

走馬灯、まさか本当に見れるなどとは思っていなかったが、そんなことに感動している余裕など今の彼にはあるはずもなかった。

ガキィィィ！！

「！？」

「（……？）」

しかし、スローモーションで迫って来ていた大鎌は、間に割り込んできた白い杖型のデバイスによって阻まれる。

金属同士が擦れ合う、耳障りな音を立てながら大鎌はアウルの目の前で止まっていた。

「よ、かったぁ～……間に合ったよ……」

「あんたは……」

アウルと、リーア、そして他のイノチル達、リク、レイス、ネル達が、一斉に大鎌の一撃を防いだ張本人と思われるデバイスの持ち主の方に視線をやる。

そこには、栗色の髪をツインテールにし、白をメインカラーにしたバリアジャケットを身に纏った女性が居た。
多くの死傷者が居る中にあって、彼女の登場は美しく、神々しくすらあった。

「ほう……？　高町なのはか……」

「……あなた達……なんてことを……」

エースオブエース、高町なのは。
管理局の中でも指折りの魔導師でもあり、不利な展開を一気に覆すだけの力を持った戦乙女。

彼女は、瀕死のアウルに止めを刺そうとしたリーアの一撃を、相棒であるレイジングハートで受け止めていたのだ。

「はっ！！　やっと戦い甲斐のある奴が出て来たってわけだ。　この前は殺し損ねたからねぇ……」

リーアはその見た目にそぐわぬ様な、猛禽類を思わせる鋭い視線をなのはに向けて、闘気を漲らせる。
それだけで、周囲の空気が震え、肌で分かるほどの戦闘能力が伝わってくる。

「待って！！　あなた達の事や、昔何があったのか、ヴァルターさんのこともシオン君から聞いたの！！　だから……」

ドフン！！！

「うぅ！？」

なのはが言い切る前に、周囲の瓦礫の山が一瞬の内に押し潰されてしまう。まるで、なにかとんでもない重さを持った存在によってプレスされたかのように。

その現象の正体が、リクの放った重力の力場であることに気が付いたのは、それから数瞬後の事だった。

土煙が晴れ上がり、その向こう側で鬼のような形相を浮かべて、石のレガリアを発動させていたリクの姿があったのだ。

「お前たちが……お前たち管理局の屑共が、先生の名前を口にするな！！！！」

憤怒
ラースとはよく言ったものだ。

確かに、怒りと言う感情は、今のリクを最も的確に表しているだろう。加えて、彼自身怒りと言う感情に身を委ね、全てを壊そうとしている。

「あ～らら……リクを怒らせちゃった。　こりゃ、あんた死ぬわね」

ガィン！！

金属音を立てて、リーアの大鎌となのはのレイジングハートのこう

着状態が解ける。リーアは、即座になのはから距離を取る。
怒りをあらわにしたリクの攻撃の巻き添えをくうのは、ハッキリ言って御免だった。

「お前たちのような、偽善の集団のような連中がいたから、先生は！！！！」

「っ！？」

リクの石のレガリアから、禍々しい光は迸る。なのはは、一瞬でその光の危険度を察知して、足元に転がっていたアウルを担ぎ、フラッシュムーブで緊急離脱する。

そして、次の瞬間。

ベコン！！！

「うそ……？」

先程まで、なのは達がいた地点の地面が、奥深くまで沈み込んでしまったではないか。一体どれほどの重力を、一点集中させればこうなるのか計り知れないものをなのはは感じていた。

しかし、ここで引くわけにはいかない。このまま彼らを見逃せば、より多くの犠牲者が出ることは確実。無茶はしないと、ティアナとフェイトとは約束をしたわけだが、早くもその約束は守れそうにもなかった。

「ごめん、ここで大人しくしてて！！」

「は、はい…」

なのはは、素早くアウルをリク達のいる地点から離れた場所に降ろすと、またすぐに空に舞い上がる。足手纏いを抱えたままでは、とてもではないが時間稼ぎすらろくに出来ないことは明白だった。

しかし、なのはの側にある手札はあまりにも少ない。

「（魔法は……ダメ……。リク達は、魔力を吸収する目を持ってる……、下手をすれば逆に相手の力を上げちゃうことになる）」

そう考えながら、リク達に対して牽制の意味を込めながら、空からのプレッシャーを与えてはみるが効果はゼロ。

取り敢えず、動き回っていさえすれば高重量による攻撃を受けることはない。

先程から、なのはの周囲の空間が一瞬歪んでは元に戻っていることから、リクは絶えず攻撃を放っているようである。

しかし、こちらに攻撃のための手が無いとなるとジリ貧になってしまうのは目に見えている。

「ほらほらぁ！！　相手はリクだけじゃないよぉ！！？」

「僕達もいるんだなこれが」

「む……」

「っく！」

さらに、相手は四人。リクのほかにも、リーアにレイス、ネルとい

った、彼に次ぐ実力を持った存在が敵に回っているのだ。
一瞬でも気を抜けば、それこそあの世行きである。

「レイジングハート！！」

『ラウンドシールド』

リーアの氷の柱、レイスの水流操作によるアクアドラゴン、ネルの電撃、それらすべてが混ざり合い、三位一体の攻撃となってなのはを襲う。
彼らの存在を忘れてはいなかったなのはだが、幾らなんでも全員を相手にしていては話にならない。
咄嗟にシールドを張ってやり過ごそうとするが、当然ながらその威力全てを殺すことは不可能だ。

ピキ……ミシ……ガシャン！！

リーア達の攻撃によって、シールドはあっけなく破られる。なのははミッドチルダ地上本部の方向に吹き飛ばされる。

「強い……これじゃあ……うぅ……」

地上本部の一歩手前まで吹き飛ばされ、なのは漸く体にブレーキを掛ける事が出来た。あと少し遅ければ、建物の壁に叩き付けられていたかもしれないと思うとゾッとしない話だ。

「ちょっとリク～？　自分だけ楽しむなんてずるいわよ、私達にも遊ばせてよね」

「……すまない、少し熱くなり過ぎた」

リーアとしては、リクのガス抜きをしておきたかった。怒り狂ったリクは、確かに強くはあるのだが情報処理能力、つまりは頭の回転が悪くなってしまう。
今回のような、大きな戦争では彼の冷静な判断が絶対不可欠だ。こんなところでバーサーク状態になって、辺りを更地にされても困る。

「ま、でも、あのエースオブエースを追い込みながら、地上本部の手前までこれたことだし。ここで彼女をやっちゃえば、局の士気は急降下間違いなしだね」

「く…」

レイスがそう言いながら、三又方の刃を持った槍、水のレガリアを手にしながら、なのはにその切っ先を向ける。
後ろは壁、なのはに退路は残されていない。

「（万事休す……どうする……？）」

あらゆる可能性を模索し、この場を乗り切る策を考える。しかし、イノチルに対してはその『考える』と言う行為そのものが間違いなのだ。
彼らは、人の思考を読み取り、行動を先読みするのだから。

『なのは！！』

『フェイトちゃん？』

と、その時だった。なのはの頭に直接響いた親友の声。フェイトからの念話が届いたのだ。

どうやら、念話はイノチル達にも感知できないようで、なのはの動揺や、何かがあったのだという事だけは理解したようだが、そこから先が続かなかった。

『なのは、今は何も聞かずに地上本部の大型会議室まで来て！！』

『！』

フェイトからの念話は、それだけで切れてしまった。

しかし、フェイトの意図は理解できた。恐らく彼女は、イノチルの読心能力を防ぐためになのはにも目的を告げずに指示だけを寄越したのだろう。

目的が何なのか分からなければ、イノチルに伝わるのは『大型会議室にまで来い』という指示だけだ。

「レイジングハート！！」

『アクセルシューター』

なのはは、一瞬で数十の魔力弾を周囲に配置、半分を目くらましに、もう半分を背後の壁に直撃させ、大穴を開ける。

「ちっ！！　何を企んでいるのか知らないが……」

「逃がさないわよ！！！」

なのはが、背後に空けた大穴に飛び込み、本部の建物内に逃げ込んだのを確認するとリク達もすぐに追跡行動に移る。

彼らは飛行することは出来ないが、運動能力が非常に高い。走るだけでも、なのはがギョッとするほどのスピードを以て追いかけてく

る。

「（でも、負けてられない！！）」

しかし、なのはとて伊達に死線を潜っていない。一切無駄の無い動きで、人員が避難し人っ子一人いない本部の回廊を飛んで移動する。彼女クラスの魔導師でなければ、回廊という限定された空間をこれほどのスピードで飛行することは出来ないだろう。

「（大型会議室は……たしか、地下のはず……だったら！！）」

なのはは目的地と現在の位置関係を思い起こすと、時間短縮のための行動に出る。このままバカ正直に会議室まで行っていてはなのはにとっては不利な条件が多い。

なのはは、再びアクセルシューターを展開、その魔力弾を前方役２０メートルの地面に叩き付け、地面に対して大穴を開けた。すかさずその中に飛び込み、なのはは直接上から大型会議室を目指す。

「（何を考えている……高町なのは……？）」

リクは、なのはの不可思議な行動に首を傾げながらも、彼女を追跡する。普段の彼ならば、ここは一旦体制を整えてから、罠に気を付けて慎重に進むという選択をしただろう。

しかし、今日の彼は、長年の復讐を果たせるという高揚感から、若干ハイになっていた。その事が、彼に油断と慢心を生んだのだろう。

やはり、彼は戦闘には不向きだった。彼は、感情をコントロールする術を知らない。冷静に見えても、中身はただの子供だった。

ガシャン！！！！

何層目の壁を破ったのか、なのはが数えるのをやめた頃、漸く大型会議場に到着した。ここは、多くの要人や局のお偉いさんが集まって時に不毛な、時に馬鹿馬鹿しい議論を交わすための場所である。しかし、その広さには目を見張るものが在り、東京ドーム一個分とかの例えを地で行くレベルである。

「なのは！！！」

「フェイトちゃん！！」

そして、そのだだっ広い空間の中に咲く、金色の花。なのはの親友は、バリアジャケットを身に纏い、相棒を手にしながら大型会議場の中央に立っていた。

「ハーケン……セイバー！！！」

フェイトは、なのはが大穴から飛び出してくるのと同時に、その穴に向かってハーケンセイバーを放つ。なのはを追ってきているであろうリク達を、出会い頭に攻撃するつもりなのだろう。

魔力を吸収できると言っても、目視出来ていないものまでは処理しきれないだろうと考えたのだ。

そして……

「っち！？」

その読みは正しかったらしく、一番に飛び出してきたリクは目の前に迫ったハーケンセイバーに目を見張る。
僅か1メートル先に、黄金に輝く刃が突然現れれば、誰であっても驚くだろう。

「サンダルフォン！！！！」

『Ｙｅｓ，Ｂｏｓｓ』

が、リクが自身のデバイス、石のレガリア『サンダルフォン』の名を呼ぶと同時に、彼の足に付随したデバイスが発光、次の瞬間にはハーケンセイバーの軌道は操作された重力によって地面に向かって一直線に落ちていった。

「随分と、姑息な真似をしてくるじゃないか。局の犬ども」

「ま、無駄だってけどね～♪」

「残念賞だったね」

「む……」

リクに続いて、リーア、レイス、ネルが大型会議場に降り立った。
恐らく、彼らには先ほどのフェイトの攻撃が彼らをここに誘い込んだ目的だと思わせる事が出来ただろう。
成果としてはそれだけで十分な成果である。

あくまで、自分たちの手札をすべて出し切った感を醸し出し、彼らに読心能力を使う気を無くさせなければならない。

「全く……管理局の屑共は、自分たちが世界の病だっていう事も自覚も無に、平気で嘘を吐く、卑怯な手を使って戦う……根絶するべき病だよお前たちは」

「随分な言い様だね……ニーチェにでもなったつもりかな？」

「真理だ。お前たちの存在は、世界にとって病以外の何物でもない。だからこそ、私たちが根絶する。その権利が、私達にはある」

リクの言葉に、フェイトは不敵に微笑みながら言って返すが、リクは構わずに言い返してくる。どうやら、何を言っても彼には通じないようだ。

分かっていた事ではあるが、彼らの管理局への憎しみは深く、どす黒い。

しかし、だからと言って、例の事件に関係の無い者までを死に至らしめる権利が彼らにあるのだろうか？　そんなことをただ黙って見過ごし、許せるものなのだろうか？

問われるならば、なのはたちの答えは『ＮＯ』である。

だからこそ、リク達はここで止める。そして、これから変わっていく管理局の姿を見せつける必要がある。

「（ティアナ！！）」

「（了解です！！）」

フェイトは、彼らの油断と隙を見逃さなかった。瞬時にティアナに念話を飛ばし、事前に打ち合わせたとおりに事を運ぶ。

「！？」

それと同時に、リク達の表情が一変する。
フェイトの思考を読み、彼女の真の狙いを理解したのだろう。彼女たちが持っている切り札、イノチルの能力を奪い、抑制する術の存在を。

しかし、気が付いたところでもう遅い。油断しきっていた彼らに、逃げるだけの時間は残っていないし、それをさせないために屋内の、それも入り組んだ地下のこの場所を選んだのだから。

「逆干渉脳波……お願い！！」

ティアナは、願いを込めて手元のスイッチを押しこむ。
周囲には、スピーカーのような機器が置かれており、それが大型会議場を囲うように円形に配置されている。
このスピーカーのような機械こそが、逆干渉脳波を発生させる装置。
そして、ティアナの持っているスイッチこそが、その起動ボタンだったというわけだ。

そして、起動ボタンが押されたことにより、大型会議場にティアナ達の切り札である対イノベイト・チルドレン用・逆干渉脳波の散布が開始されるのだった……

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「くそ……くそくそくそ……。えぇい！！！　こんなはずでは！

！！」

ネスター・オルベーンは焦っていた。いや、錯乱交じりで混乱していた。

イノベイト・チルドレン達の襲撃、これは予想されていた事ではあった。彼もまた、その為の対策などは講じてきたつもりである。伊達に中将まで上り詰めていない彼ではある、まぁ卑怯な手を使っての昇進ではあったが。

この、地下にある彼のオフィスにも、事前の脱出ルートは作らせておいたし、身辺警護の魔導師たちにも息を掛けておいた。

イノチルと言っても、数で押せば問題ない。彼が過去の戦いで得た彼らの戦闘能力からたたき出した対抗策がそれだ。

いくら個としての能力が突出していたとしても、数で押せば隙が生まれ、そこを突けばあとは雪崩方式で畳掛けれればいい。

「何なのだ……この異常な戦闘能力は……！！？」

しかし、データと言っても月日によって変化し、更新されなければ何の意味も持たない。彼が把握しているイノチルの戦闘能力は、最も新しくても４年前のものだ。

その４年間で、リク達は異常なまでの成長を遂げ、局に牙を剥くまでになった。リク達の成長速度とその質、彼らイノチルを蔑み、ただのモルモット程度に思っていたネスターの傲慢は、ディスプレイに移る局の建物の残骸と、その周囲を転がる魔導師の死体が表していた。

「くそ！！　脱出ルートも作動しない！！！　外と連絡もつかんのか！！！」

加えて悪いことに、何故かネスターのオフィスの脱出ルートは作動せず、外との連絡手段までもが消失。
出口は言わずもがな、うんともすんとも言わない。まさに、彼は八方塞の状態でオフィスに閉じ込められていた。

彼とて魔導師だが、ここ何年かは全く鍛錬などはしていない。出世のための裏の根回しや謀略、裏金の調達などばかりをしていたのでデバイスさえ持ち歩いていない。
最早、彼には魔導師と呼べるだけの要素が存在していなかった。オフィスの中で慌てふためいているのは、醜い心を持った哀れな老人だけだ。

「どうする……あいつらが狙うとすれば、私の命……ここで終わるわけには……！！！」

彼の上昇志向はその限りを知らない。
中将まで上り詰めた彼だが、今後の進出の先としては政治に部分に顔を広めておくつもりだった。
局だけではない、様々なモノを自身の下に置きたかったのだ。

そんな哀れな、小さな野望しか抱けない哀れな老人。結局のところ、彼は小物だった。

そして、そんな彼をこの世から消し去る来客が、部屋のドアを叩く。

ガシャァン！！！

「地上に繋がってる脱出ルートは使えませんよ、俺が叩き潰しておきましたから。あ、ついでに通信手段も周囲に屯してた魔導師とかもね」

「なっ！！？」

吹き飛ぶドア。ネスターは身を屈ませて隠れようとするが、そんなことは全くの無意味。

此度の来客は、そんな事では誤魔化されない。

「こんにちは、ネスター中将閣下……」

「お、お前は！？　ヴァルター・クロンベルクの……！？」

ドアを吹き飛ばした張本人、風のレガリア・オルクスを履いた、最高のイノベイト・チルドレン。

ソラは、悠然とネスターのオフィスに足を踏み入れる。

「おやおやおやぁ？　随分と綺麗で広いオフィスをお持ちなんですね……？　あなたのようなブ男な老害には似合わないインテリアも多い……」

「い、イノベイト・チルドレン……」

ネスターが一歩後ずさるたびに、ソラが一歩を踏み出す。徐々に、徐々にネスターは死の淵に追いやられている。

見れば、オフィスの入り口にはもう一人のイノチル、シオンが背を預けながら事の成り行きを鑑賞している。

「な、何しにここに来た……？　い、今更ヴァルターの仇でも討ち

に来たか、化け物が！！」

虚勢を張れるだけの無駄な威勢だけは一級品なこの男。しかし、どもりながらのセリフでは相手を怯ませるだけの武器にはなりえない。

「仇？　あぁ、違う違う。　それはリク達の目的であって、俺はもっと別」

「別だとぉ……？」

仇でない。だとしたら、目の前の男が自分の命を狙う理由が分からない。

少なくとも、彼との接点などヴァルターの事を除いて考えられない。

「お前は、この後の世界にとって不必要な存在だ、老害。もし、俺がお前を殺す理由を上げるとするなら、お前に罪状があるとするなら、それは『老害』だろうな」

「あ、ぐ……くそ……化け物が……」

ソラの瞳が赤く輝き、その中心に黒い十字模様が浮かぶ。

そして、ソラは愉快そうな表情を浮かべながら、一歩、また一歩と歩みを進める。

既に、ネスターの背には後ずさるべきスペースは残っていない。

「私が不必要とはどういう事だ！！！？　局の未来は、私無しでは……！！」

「思い上がるな。お前など、所詮は金と家柄だけが自慢の俗物……お前などが居なくとも、局には有能な人材がいる。お前が邪魔

だというのはな、その若い人材がお前のような老害が居るせいで、上の椅子に座れないっていうことだ」

世代交代、いやゴミ掃除と言うべきか。

いつの時代も、かつて名声を極めた人物がとんでもない目標または政策を掲げて、自分たちに有利なルールなどを敷こうとした事は枚挙に暇がない。

ネスターもまた、その俗物たちと同じであり、典型だ。

「……それじゃあ、そろそろ……スクラップの時間といこうじゃないか？」

一歩一歩、ネスターの死の足音が近づいていく。ヒタリヒタリと、相手を詰るようなスピードで。

ズキン！！

「（っ…！　クソッタレ……このポンコツが……もうちょっと保たせろ……頼むから）」

そして、ソラにも同様に……その時は迫りつつあった。

Ａｃｔ２９　逆干渉脳波（後書き）

ルーク「あれ？作者は？」

フェイト「さっき、向こうで『もっとエロゲーを～』とかなんとか言いながら、妙な格好した人たちと一緒に歩いて行ったけど？」

ルーク「……確実にメダル入れられたよね！！？　ヤミーの宿主になっちゃってるじゃんか！！？」

フェイト「う～ん……作者さんが帰ってこないとスクラパの更新が出来ないんだよね……」

ルーク「あぁもう、どんだけ手の掛かる作者なんだ……。あ、それはそうと、本日の哲学は登場回数の多いニーチェさんのモノです。」

フェイト「結構きつい内容っていうか、言い方だよねこれ……」

ルーク「まぁね……でも、実際のところはどうなんだって聞かれたら、違うとも言い切れないんだよね……」

Ｆ２０Ｃ「もっと、もっとエロゲー……アニメが見たい……」

はやて「その辺に落ちてたメダル、作者にあげたらこんなことに……どないしよ……？」

Ａｃｔ３０　敵として、悪として……（前書き）

ヒーハー☆！！！（なんか最近作者の中で流行ってる）

新作のアイデアが次々と頭の中に……

ていう事で、このお話もそろそろクライマックスです。あと、４～５話で終われる……かな？　自身はないですけど頑張ります。

さてさて、次回作でのヒロインを誰にするかアンケートを、後書きの方で実施したいと思いますので、皆様のご意見を私めに……どうぞよろしくお願いします～

あ、ちなみに次回作のヒロインは、なのはさんか、ｖｉｖｉｄの新ヒロイン、アインハルトさんですｗ皆様のご意見、お待ちしてますｗ

Ａｃｔ３０　敵として、悪として……

「む……？」

その異変に気が付いたのは、普段は全く話さないネルだった。いや、気が付いたというか、一番早く『効力』が現れたと言った方が適当かもしれない。

人間には一切意味をなさない、ある一定の特殊な波動、脳波。

彼らイノチルは、この脳波を利用して、何かデータベースのようなものにアクセスし人の思考などを読み取っている。

その脳波を逆手にとって、彼らの能力を奪い取るシステムが『逆干渉脳波』である。

「うぅ……ぐぅうぅぅ！！！？」

「ちょっと、ネル！？　一体どうした……く、ぐあぁぁぁぁぁぁ！！！？」

「レイス！！？　う！？　あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！？」

その逆干渉脳波の効力なのか、突然、ネル、レイス、リーアの順番に地面に崩れ落ち、頭を抱えて苦しみ始めた。

彼らだけが扱う事の出来る特殊な脳波ゆえに、普通に人間にはまったくの無害。フェイト達にはまったく影響はない。

「ぐ、あぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！　な、なんだ……これは……？！」

そして、当然ながらリクもまた、その特殊脳波の恩恵を受けていたので彼らと同じように頭を抱えて苦しみだす。

「くそ……思考を読むことが……出来ない……！？　が、あぁぁぁぁぁ！！！！？」

「能力も……何も使えない……ぐぅぅぅぅ！！！」

どうやら、逆干渉脳波の効力は思った以上のものが在り、彼らの読心能力だけでなく、リク達固有の重力操作や、魔力を吸収する魔眼の能力まで、全てを奪い取ってしまうようだ。
こうなっては、最早リク達は普通に人間と何も変わらない。

「フェイトちゃん！！　スバル！」

「うん、分かってる！」

「了解です！！」

そして、この機を逃しては何の意味もないと、なのはとフェイト、スバルはリク達を拘束するべく動き出す。
彼女たちの手には、手錠のような道具が握られており、どうやらそれを使ってリク達を捕まえるつもりらしい。

「く！！　私に触るな！！　管理局ぅ！！！！！」

「む……！！！」

「くそぉぉぉ！！！！」

まずは、リーア、ネル、レイスの三人に拘束用の手錠のようなものが装着される。
この手錠、少し変わった外観をしており、手錠の金属の部分に青い宝石のようなものが埋め込まれている。

「こ、この手錠……くそ……！！」

そして、フェイトの手によってリクにも同じモノが装着され、イノチル全員に青い手錠が施された。
これで、イノチルに対するなのは達に出来得る限りの対処法が成されたわけだ。

「（ティア、脳波を止めて。こっちは終わったから）」

「（はい、了解です）」

なのはから念話で作戦の完了を確認したティアナは、逆干渉脳波の散布を止める。肉眼、耳などの人間の五感では全く認識できないものだが、イノチルには確かな効果があった。
これが無ければ、今頃本部は壊滅的なダメージを受けていた事だろう。

「この、たかが手錠で僕たちの動きを封じ込められると思ったら大間違いだぞ！！」

「そうよ……こんな手錠、すぐに破って……」

「む！！」

レイス達は、逆干渉脳波の散布が止んだことで、激しい頭痛から解

放され、すぐに手錠を壊そうと全力で引き千切りにかかる。
彼らイノチルの力があれば、普通の手錠ならば簡単に引き千切る事が出来ることだろう。

しかし、この青い手錠は『普通』ではない。逆干渉脳波同様、彼らの能力を封じ込めるために作られた特別製のモノなのだから。

「くそ……力が……出ない……」

「どうなってるのよ……！　私達、イノベイト・チルドレンが……こんな手錠1つ……」

「……まさか…」

レイスとリーアは、懸命に手錠を壊そうとしているが、手錠はビクともしない。と言うよりも、彼らの力が手錠を引き千切るのに足りていないのだ。
その手錠のからくりを見抜いていたリクは、信じられないという表情をしながら、目の前にいるなのはたちに視線をぶつけ、口を開いた。

「この手錠は……僕たちの能力を……封じるための……」

「そうだよ。あなた達の使用している、特殊脳波を封じ、一時的に無効化する逆干渉脳波。さっきのがそれだね。そして、その手錠からは微弱の逆干渉脳波が絶えず発生してる。あなた達の能力も、眼も、身体能力全てを封じ込める」

「微弱なモノでないと、さっきみたいな激しい頭痛を伴うかもしれないということで、シャーリーたちが作ってくれた、特別製の手錠

だよ」

リクの問いに、なのはとフェイトが答える。
逆干渉脳波を使用する上での効果や副作用は、ある程度は予測できた。先ほどリク達を襲った激しい頭痛もその内に一つである。
放っておけば、生命にも関わるかもしれないというデータが出たが故に、微弱なレベルにまで落とした逆干渉脳波を発生させるための手錠を開発したのはその為だった。

「イノベイト・チルドレン。リク、リーア、レイス、ネル。あなた達を、殺人及び建造物破壊などの現行犯で、逮捕します……」

「くそ……ちくしょぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！」

フェイトの告げたその言葉に、リクは感情を爆発させて吠える。
自分たちの力を過信したが故の、今回のこの失敗は大きい。見下していたはずの人間たちによって生み出された、自分たちの能力を殺す力によって、彼らの復讐は頓挫してしまった。

「こんな……こんな手錠で……僕たちの計画が……先生の無念を晴らすことも出来ないのか……！！！」

「違うよ！　ヴァルターさんは、少なくとも君たちにこんなことは望んでなかったはずだよ！？　こんな、自分たちの痛みを無関係の人たちにまき散らすような事は……」

「うるさい！！！！　お前たち管理局の豚共に言えた義理か！！！
先生を殺したお前たちが！！！」

リクを諭すようになのはが言うが、効果は全くない。いや、寧ろ今

の彼には何を言っても逆上させてしまうだけかもしれない。
今のリク達は、憎しみに支配されてしまっている。この中毒から抜け出すのは容易ではない。

「フェイトさん……」

「うん、こればっかりは今すぐにどうにかすることは難しいね……」

今まで逆干渉脳波の器具の傍にいたティアナが、フェイト達のいるところまで駆けより、リク達の様子を見てやりきれない気持ちになっていた。
少なくとも、過去の出来事さえなければ、もっと世界が彼らに優しければ、こんな事件は起こらなかったのだろう。

しかし、世界はどうしようもないくらいに現実主義だった。

「……あなた達をこのまま連行します。然るべき処分が、公式の場所で下されることでしょう」

「……」

そして、執務官であるフェイトがリク達に今後の事を話す。今回の事件における、人的被害や物理的被害を総計すれば、一体いくらの損失になるのか、今はあまり考えたくなかった。

しかし、これで一息つける。
目前に迫っていた、リク達という危機を乗り切る事が出来たなのはたちの心には、そう言った安心感が生まれていた。
もう一つの思惑が、今まさに彼女たちの近くまで近づいている事に

は、この時は誰もが気が付いていなかった。

ガシャアァァァァァン！！！！

「っ！？」

「な、なに！？」

「こ、これは！！？」

「敵？！」

突如、大型会議場の壁の一面に大穴が空いたのだ。なのはたちの作戦によって、ただでさえ穴だらけなのだが、修理費が更に上方修正されることが確定的だった。

ティアナ、スバル、なのは、フェイトの順に大穴が空いた壁の方に視線を向ける。

リク達も、手錠で身動きが取れないながらも、目線だけを動かして彼女たちと同じ方向を視界に入れる。

瓦礫と化した壁と、舞い上がる粉塵。そこから何が飛び出してくるのかと、フェイト達はデバイスを構えて警戒する。

そして……

「ひ、ひぃ！！！？　た、助けてくれ……た、頼む……こ、殺さないでくれぇ……」

「ね、ネスター中将!?」

その大穴から出てきたのは、件のネスター中将その人だった。しかし、フェイトが素っ頓狂な声を出してしまうほどに、今の彼の姿は異様だった。

たまに演説などで見る厳格な表情、出で立ちは見る影もなく、服はボロボロ、顔も汚れ放題といった様子だ。

とてもではないが、管理局の中将まで上り詰めた人間には見えなかった。

「ね、ネスター……なんであいつが……!!!　くっそ、この手錠さえ……!!!」

仇敵を見つけたという事で、リクは体全体を暴れさせて動こうとするが、最早普通に人間と何ら変わりない今の彼に、手錠を何とかできるはずもなく、地面をのた打ち回るだけに留まる。

フェイト達のいる位置から、ネスターの出てきた大穴まで約５０メートル程。少し遠くはあるが、あんな状態の彼を放っておくわけにもいかないのでティアナ達は助けに行こうとした……

しかし、その一歩はすぐに止まってしまう事となる。続けて大穴から姿を現した、ソラの姿を確認したことによって。

「おいおい、あんまり逃げるなよ……野郎のケツを追っかける趣味無いんだ」

「あ、が……やめ……やめろ……！」

風のレガリアを展開し、狩りでも楽しんでいるかのような愉快な表

情で、ソラはネスターを追い詰めていく。
対して、ネスターの表情は恐怖に歪み、後ずさりをしながら懸命に逃げようとする。

「ソラ！！！　あんた、何やってるのよ！！？」

「ん？　あぁ、ティアか。　どうぞお気になさらず、ただのゴミ掃除だ……よっと！！」

「げふ！！？」

ティアナ達の姿を見たソラは、特に驚く様子もなく、ネスターを蹴り飛ばす。空中に放り上げられたネスターに対し、ソラは薄い笑みを浮かべる。
その笑みの意味を理解したティアナは、これから彼が行うであろう暴挙を止めようとする。

「ソラ、やめなさいってば！！！」

しかし、当然ながらソラは止まらない。ネスターの存在は、彼にとっては邪魔以外の何物でもない。消す理由はあっても、生かしておく理由が無かった。

「オルクス」

『畏まりました』

そうソラが呟くと、オルクスから発光現象が起こる。それが意味するところは、ソラの能力が発動するという事だ。
その発光現象を目の当たりにしたネスターもまた、自身に何かが起

こるであろうことだけは予測できたようで、空中で恐怖する。

「た、助け……頼む……」

「却下」

ネスターの命乞いを、一言で打ち消すソラ。

そして、足元に落ちていた壁の瓦礫の破片を拾うと、それを素手で握り潰し、破片となったそれらを空中にばら撒いた。

「い、一体なにを……」

フェイトがそう呟く。あんな石の破片を投げて何をするつもりなのか、フェイト達には予想も出来なかったが、ソラが風のレガリアを履いた足を空中のネスターと石の破片に向けたことで、全員がハッと息を飲んだ。

「さようなら、ネスター中将閣下殿」

ドフンッ!!

ソラは、空中を舞う石の破片に向けて、ベクトル操作で生み出した、圧縮した空気の壁をぶつけた。その空気の壁、風の壁によって、空中を舞っていた石の破片は一瞬にして凶器に変わる。

風の勢いは、数字にすると風速８０~９０メートル。

その凄まじい風によって、爆発的なエネルギーを与えられた石の破片は、さながらショットガンの如き威力を以て、ネスターの体に襲い掛かる。

「ぎゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁああぁぁぁぁぁ！！！！？？？？」

バシュ！　バシュ！　バシュ！　バシュ！！！

石の破片は殺人的な威力で、ネスターの体に次々と風穴を開けていく。空中に放り上げられたネスターが、五体満足で地面に落下してくる可能性は、限りなくゼロに近かった。

ドチャ……ベチャ……

「ふぅ、ゴミ掃除完了……」

「相変わらず、その技はえげつないですね。あまり生では見たくないものです」

「だったらアイマスクでも持って来い。（ま、こんな技、もう使うだけの余裕はないが……）」

今しがた、人一人を穴あき状態で地面に叩き付けた人間の会話とは思えないほど、ソラとシオンはいつも通りだった。彼らの数メートル先には、最早肉塊と呼ぶしか形容の使用がない、ネスターだったモノが血の海の中に落ちているにも拘らずだ。

フェイトやなのは達は、ここに来てソラ達に本当の意味で戦慄を覚えた。彼らにとって、人の命とはこうまで軽く、そして脆いものなのだと。

「ソラ！！！」

しかし、ティアナだけは違った。ネスターを躊躇いもなく、命乞い

さえを無視して殺したソラに対して、ティアナだけは強い視線を送っていた。

「あらら、怖い怖い。でも、謝ったりはしないよ？　このおっさんは俺の計画にとって邪魔な存在だったんでね、早々にご退場頂いた。ただそれだけのことだよ」

「計画って……。っ、あんたが何を企んでるのかは知らないけど、こんな……」

「正義ばかりが人を救うとは限らない。悪を成してでしか討てない巨悪もある。管理局内での、ネスターの悪行の数々、ここで指折り数えて列挙していったら日が暮れちゃう勢いなんだけどね」

ティアナが言いたいことを読み取り、ソラは先回りして口を開く。詰まるところ、ソラは自分が正義の鉄槌を下したなどとは考えていない。自身のやっていることは明確な『悪』だと自覚しながらも、行動を起こしているのだ。

「はは……あははははは！！！！　ネスターめ、死んだのか……あははははは！！！！」

そして、ネスターの死を最も願い、この時最も喜んでいたのはリクだった。手錠で身動きが取れないながらも、ソラのいる方向に視線を向け、先ほどの怒り狂った表情は消え、純粋な喜びを表す顔になっていた。

「ソラ！！　やっぱり来てくれたんだね！！あはは！！　ありがとう、やっぱり君は僕たちの同志だったんだ……仇敵、ネスターを消し、管理局を壊滅させるために、僕たちに力を貸して……」

リクはソラが自分たちを助けに来たのだと思い、嬉しそうにしながらそう言ってくる。確かに、ここでソラが彼らに加勢すれば管理局は、フェイト達は再び窮地に立たされることになるだろう。

しかし、ソラの目的はもっと他に在った。

「ソラ、いきなりですまないが、この手錠を外してくれないか……この手錠と、僕たちの脳波に干渉して能力を抑制する、姑息な術を管理局は使ってきたんだ……これさえなければ、こんな奴等……」

「……」

リクの声が届いているにも拘らず、ソラとシオンは何もないかのように歩く。ティアナ達は彼らの一挙手一投足に気を配りながら、ソラ達から視線を離さない。

そして、ソラは大型会議室の議長が座る一番大きな椅子に腰掛け、足をテーブルにドカッと置く。行儀悪い光景だが、何故かそれを言い咎める事が出来ない。
そんな風格が、今のソラからは感じられた。

「ソラ……何をしてるんだい……？　早く僕たちの手錠を……」

「はぁ……」

そこで漸く、リク達の存在に気が付いたように、ソラは面倒そうに片手を上げる。それを見たティアナは、ソラがリク達を助けると思ったのだろう。すぐさまそれを防ごうとする。

「ソラ！」

カチッ！

「ぐあぁぁぁぁぁぁぁ！！！！？」

ティアナは再び逆干渉脳波の起動スイッチを押す。瞬間、特殊脳波によってリク達は再び激しい頭痛に襲われる。

出来ればこんなことはしたくなかったのだが、ここまで来て事態をややこしくして欲しくなかった。

しかし……

「ふわぁ……」

「……き、効いてない……？！」

ソラは欠伸をしながら上げた方の手で頬付きをしながらテーブルにその手を付く。リク達を助けるためではなく、ただ単に頬付きをするための動作をしただけだったようだ。

しかし、ティアナ達にとって、そんなことはどうでもよかった。問題は、ソラとシオンに逆干渉脳波の効力が全く見られなかったという事だ。

「どういう事……？　リク達には……ちゃんと……」

「自分たちの弱点くらい、把握してるのは当然。ましてや、その弱点を突いてくる術があるのなら、それに対する対策を立てるのは当

然だろう？」

言いながら、ソラは懐から金属で出来た小さなパーツのようなものを取り出す。見れば、シオンもまた同じものを首から下げているではないか。

「逆干渉脳波を中和するための装置さ。スカリエッティに作らせた」

「どうして、あなたが逆干渉脳波の事を……」

そうだ、対策を前もって用意していたという事は、ソラ達は逆干渉脳波の存在を知っていたという事になる。いくら読心能力があるからと言っても、違う世界に居るティアナ達の思考をピンポイントで読むことなど出来ないし、ソラもそれは重々承知済みだ。

ならば、一体どうやって…？　ティアナ達の疑問は深まるばかりだったが、意外にもソラはあっさりとその答えを教えてくれた。

「情報の出所はしっかりと確認した方が良いよ、ティア。無限書庫の情報も、安全なモノばかりとは限らないんだからさ」

「まさか……！　あの資料や研究データは……？！」

「あぁ、俺がリークした」

そう、あのヴァルターの研究資料や、逆干渉脳波の資料などを無限書庫に紛れ込ませたのはソラだったという事だ。

ユーノが、資料にデータのアドレスが無いことを不思議がっていたが、ある意味当然である。外部からの不正アクセスによって紛れ込まされたデータだったのだから。

「それを予想通りに発見してくれて嬉しかったよ。逆干渉脳波を使ってのリク達の迎撃が失敗しちゃうと、局そのものが無くなっちゃうからね。そいつらにも囮の役目があったから、使うタイミングが肝だったんだけど……。うん、やっぱりティア達は優秀だね」

「何を……何を言っているんだい、ソラ……？　僕たちは……同じ志を持った……同志……じゃ……」

自分たちの事を『囮』と形容したソラを、信じられないという目で見るリク達。しかし、ソラとティアナは、彼らのことなど気にもしないで話を進める。

「じゃあ……私たちが逆干渉脳波を見つけるところから、リク達の襲撃も、脳波を使った私たちの迎撃も、リク達の敗北も……全部、あんたの考えてた筋書き通りだったって……全ては、あんたの掌の上ってこと！！？」

「細かいところまではそうじゃないけどね。でも、大体は俺の計画通り。無い頭をフルに使ったから、すんごい疲れたよ」

無い頭など、本当に口だけだ。ここまで狡猾、そして他人を駒としか見ていない作戦を考える事が出来る賢さ、冷酷さ。
ティアナは思う、『あぁ、これがソラの本性なのだ』と……

「ソラ……君は……僕たちを……かつての仲間を……捨て駒にしたって……そう言う事なのかい……？」

「う、嘘だよね……？　君が……僕たちを、裏切るわけないよね？！　だって、僕達友達じゃないか……」

「そ、それに、私たちは王よ？　あなたにとっての力にもなれる…
…それなのに、私達を裏切るなんて、有得ないわよね……？！」

「む……」

そして、リクが、レイスが、リーアが、ネルが。
ソラに救いを、そして最後に残った信頼の意図を頼りに、そう尋ね
る。今回ばかりは、ティアナも口を噤んで、ソラの答えを待つ。
彼女の中では、彼の答えは予想する事が出来ていたのだが……

そして、ソラもまた、今回は無視することなく彼らの問いに答える。
恐ろしいほどに冷たい視線を、無様に地面に転がっているリク達の
方に向けながら……

「ぷっ……あはははは！！！！　あっはっはっは！！！♪　おい
おい、俺を笑い死なすつもりなのか！！？　あははは！！！！
やめてくれ……くくく、腹が捩れる……」

「……な……？」

一瞬にして、ソラの表情は喜劇を見ているかのような、滑稽なモノ
を見ておかしくて堪らないといったモノになり、椅子に座りながら
も彼は腹を抱えて笑い出す。
どうやら、リク達の言動がツボに決まったようだ。

「同志？　仲間？　バカかお前ら？　所詮お前らなんてなぁ……レ
ガリアを使えるだけのただの使い捨てカードなんだよ。先生の仇っ
ていう、安易な目標を持った、異常なまでに扱いやすい駒だった…
……いや、どちらかと言えば道化だな……」

「うそ……だ……」

「嘘じゃないさ……お前たちは、俺のゲームの最終目的に到達するための、ただの道具……。そうさ、全ては盤上での戯れだったんだよ……俺が風のレガリアを手にしたあの日からのなぁ……」

最後までソラを信じようとした、手繰り寄せようとした信頼の糸を、ソラが完全に断ち切る。
その様子を、フェイト達はただ唖然として見つめていることしか出来なかった。

「でも、逆干渉脳波の事を差し引いても、人間如きの策に遅れを取る様な出来損ない……そんな弱い王なら、もう要らない」

「な……ぐぅ……貴様……」

「ありがとう、リク、レイス、リーア、ネル。お前たちはもう用済みだ」

「っ！！　ソラアアアアアアアアアア！！！！！！！」

それが、最後だった。リクは、ソラに向かってありったけの憎悪を込めて叫ぶ。
ソラは、そんな彼に冷酷な視線を向けて薄い笑みを浮かべていた。

「……ソラ……あんたの最終目的って……何なの……？」

そこで、再び口を開いたのは、俯き加減で、どこか悔しそうな表情

をしたティアナだった。肩はワナワナト震え、クロスミラージュを持つ両手は、これでもかと言うほどに強く握られていた。

ティアナの問いに、ソラは少し間を空けてから、リク達に向けるのとは別の笑みを浮かべながら答えてくる。

「とってもシンプルな事だよ。空のレガリアを使って……俺は世界を、俺の前に跪かせる……その為に、様々な世界に影響力を持つ管理局を手に入れる」

「……シオン、あんたもソラと同じ意見なの？」

ソラの答えを聞き、ティアナは彼の傍に控えていたシオンに同じ意味を含めた問いかけをする。

いや、これは問い掛けではなかった。そう、これはただの確認だ。

目の前の二人の男が、自分たちにとって一体『何』なのかを確かめるための。

「えぇ、私も彼に賛同しています。　私の目的は、ソラを『王』にすることですから」

「そう……よく分かった……」

ティアナは、ソラとシオンの回答を得ると同時に、なのは、フェイト、スバルに視線を送る。

そして、その動作になのはたちも無言で頷き、それぞれのデバイスを握り締める。

今この瞬間、ソラ達はティアナ達の『敵』となったのだ。

「……おい、管理局……この手錠を外せ」

「え…？」

そして、ソラ達に自分たちの意思を伝えようとした瞬間、再びリク達から声が上がる。

先程まで喚いていた彼らだが、今はどこか、冷静になったというか、静かな物言いになっていた。

「信用しろとは言わない、今でも管理局は憎い……怪しい動きをすれば、またすぐに例の脳波を使って動きを制すればいい……。だから、今だけは……」

「あんた……」

今や、ティアナ達はリク達に対して完全なアドバンテージを有している。仮にここで手錠を外したとしても、またすぐに捕まえることは可能だろう。

リク達はそれを分かっていながら、手錠を外せと言っている。それは彼らの次のアクションが何なのかを予想するのには十分な判断材料だった。

「僕達が……倒さなければならない存在と戦うために、お前たちの力を利用する……ただそれだけだ。お前たちは、僕たちの力を利用すればいい。悪い話ではないはずだ」

「……」

つまりは、一時的な共闘の申し入れ。

ただ、逃走や裏切りの可能性が出た際には、ティアナ達の持つアドバンテージが働き、彼らの自由を奪う事が出来る。
決して対等な立場での共闘ではないが、リク達の思いは既に復讐から遠のいていた。

彼らにも見えていたのだろう。本当に倒すべき敵の姿が。

「……分かった、でも怪しい動きをしたらすぐにまた捕まえるから、そのつもりでね」

「あぁ、それでいい……」

そして、ティアナがなのはたちに目配せをすると、リク達の手錠が同時に解除される。
リク達は、ゆっくりと立ち上がり、鋭い視線でソラとシオンを射抜く。

目の前にいるのは、かつての友でも、同志でもない。ただの、倒すべき『敵』である。

ティアナは、リク達の解放をした後、再びソラとシオンの方に向き直り、自分たちの決意を表明する。
ソラ達が、今の自分たちにとってどういった存在なのか、彼女たちはどのような選択をするのかをハッキリと伝える。

「ソラ、私たちは、あんたを認めない……あんたのゲームを、クリアさせてあげない」

「……へぇ？」

「私たちは……あんたを……完膚なきまでに叩きのめす！！！
世界は、誰かのモノにしていいものじゃないし、管理局をその為の道具にもさせない！！！」

ティアナがクロスミラージュを、なのはがレイジングハートを、フェイトがバルディッシュを、スバルがリボルバーナックルを、リクが石のレガリアを、レイスが水のレガリアを、リーアが氷のレガリアを、ネルが雷のレガリアを……

皆が、それぞれの武器をソラとシオンに向け、宣言する。

「あんた達は……私たちの、敵よ……もう、スオウなんて幻影は、見ない……」

「……」

ティアナの宣言に、ソラは目を閉じ、逡巡する。
彼の中でも答えが出たのか、若しくは何か決意を新たにしたのか、眼を見開く。そして、ティアナ達の方に手を動かし、手のひらを上方向に出して、グッと握り拳を造り口を開いた。

「あぁ、そうだ。スオウは幻影……俺はソラだ……空のレガリアを使って、世界を手に入れる男だ」

座っていた椅子から腰を上げ、立ち上がる。同時に、オルクスを以前に見せた第二形態セカンドシフトに移行させる。
彼も、一つの決意の上でここに立っている。最早、ティアナ達を前に後に引き返す道は、必要なかった。

「来い、遊んでやる」

そうして、ソラの最初で最後の全開戦闘の幕が、切って落とされたのだった……。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「あんた達は……私たちの、敵よ……もう、スオウなんて幻影は、見ない……」

ティアナと、リク達の敵意に満ちた視線がソラを射抜く……。分かっていた事ではあるが、考えていたよりもかなり辛いものがあった。

「（あぁ、でも……これでいいんだ……。そうやって、分かりやすい悪に飛びついて来い……！！）」

眼前に在るのは、自らを敵と認識したティアナ達管理局の未来、そして人類の可能性の一つである、イノチルのリク達。
両者が、共通の敵として見つけた『悪』。それが自分だと、ソラは自覚していた。

そして、ここから始まる戦闘こそが、彼にとっての本当の目的。

「（さぁ、始めよう。人の可能性と、明日を手に入れるための世界との対話を……）」

ソラは、眼を開き、自らの世界を認識する。
しかし、体は既にボロボロだ。ティアナの顔も、リクの顔も、ぼや

けてでしか見えないし、遠近感もかなり怪しい。立っている感覚さえもあやふやで、気を抜けば意識も飛びそうだった。ベクトル操作など、満足にあと何回使えるか分からない。

だが、後戻りの逃げ道は要らない。
もう、ソラには進むしか選択肢はなかった。

「あぁ、そうだ。スオウは幻影……俺はソラだ……空のレガリアを使って、世界を手に入れる男だ」

敵として、悪として、ティアナとリク達の前に立つ。
そうすることで初めて、ソラにとっての世界が確定される。

認識と世界、言葉と旋律。ティアナ達の観ている世界と、ソラの観ている世界の違いを挙げるのならば、それはたった一つ。

言葉と旋律に対する、認識の違いだけ。

ただそれだけの違いが、こうまで両者の世界を異なったものに確定させる。

「（行こう）」

そして、確定したソラの世界とティアナの世界において、共通した、しかし認識の違う言葉を以て、ソラは対話のための戦闘を開始する。

「来い、遊んでやる」

異なった世界において、その言葉はある側面からは同じ意味を、また別の側面からは違う意味を以て世界に響く。

世界にソラの言葉が響いた瞬間、彼は最後に考える。
そう、出来ることなら、願いが叶うのなら、この世に奇跡などというありもしないものが在るのならば、と……

「（出来ればもう少し……生きてみたかった……）」

そんな願いも、奇跡も、この世界には無いと知りながら……

Ａｃｔ３０　敵として、悪として……（後書き）

Ｆ２０Ｃ「ヒーハー☆！！！」

ルーク「うっせぇｗｗｗ　ていうか、なんでそんなに流行ってんのさ？」

Ｆ２０Ｃ「いや、なんとなく。という事で、Ａｃｔ３０いかがだったでしょうか？ソラ、完全に悪役なんですよねこれ……」

ルーク「でも、本当の狙いは別にあるっぽいね……ソラの頭の中って一体どうなってるんだろう……」

Ｆ２０Ｃ「少なくとも、常日頃からフェイトさんの事ばっかり考えてる君とは違うんですよ」

ルーク「だって仕方ないじゃん、フェイトって可愛いし、超美人で性格も良いし、マジ嫁だし」

Ｆ２０Ｃ「うわ……何なんだこいつ、出番ないくせにこの存在感……」

ルーク「旧主人公ですから」

Ｆ２０Ｃ「さてさて、ここで読者の皆様にアンケートを実施させて頂きたいと思います～。お題は、『私の次回作のヒロインを誰にするか！』でございます」

ルーク「時間軸としては、ｖｉｖｉｄの世界でのオリジナル的な…
…そんな感じなんだよね」

Ｆ２０Ｃ「まぁね。その為にｖｉｖｉｄのコミック大人買いしてきたよ、メロンブックスで。２０００円ほど吹っ飛んだけど、後悔はない！！！」

ルーク「フェイトが可愛かったしねー♪」

フェイト「か、可愛いだなんて……／／／／／／」

Ｆ２０Ｃ「話が前に進まないんで、この人たち無視してアンケート進めちゃいますね。で、次回作のヒロイン候補ですが、『候補？は我らがエースオブエース、高町なのは様』、『候補？は、ツインテとクールビューティーが魅力的、アインハルト・ストラトスさん』という事になっております』

アインハルト「次回作の主人公の方は……ヒロインが……／／／／わ、私の場合は私と同じ年齢、ヴィヴィオさんのお母様がヒロインになられた場合は１７歳という事のようです／／／」

はやて「この二人の内、どちらかを選んで感想、または作者へのメッセージでもいいので、送ってやってくださいな（呼ばれてきた）なんや、アインハルト？　顔真っ赤やで？」

アインハルト「／／／／／／／／／／べ、別ににゃんでもありません」

はやて＆Ｆ２０Ｃ「「（あ、？んだ……）」」

ルーク「因みに、なのはさんヒロインのお話では、お姉さんななのはさんと、主人公とのシリアス且つホンワカなストーリー」

フェイト「アインハルトがヒロインの場合は、甘酸っぱくて、ニヤニヤしちゃうようなお話になる予定だよ♪」

Ｆ２０Ｃ「アンケート実施期間は次回の更新日までとさせていただきます。ということで、結果は次回の更新の際に発表できるかと思いますので、お楽しみに～。どうぞ、皆様のご意見をよろしくお願いいたします」

次回　Ａｃｔ３１『ソラ＞空＜の願い事』

Ａｃｔ３１　ソラ&ｌｔ；空＆ｇｔ；の願い事（前書き）

ゴールデンウィーク！！！
という事で、小説に割ける時間が多くなりますねｗｗ
Ｆ２０Ｃ『小説を書ける時間が増えるよ！！』
はやて『やったね、たえちゃん！！』
ルーク『おい、やめろ』

茶番ですね、申し訳ない。ていうか、このネタが分かる方がいるのか不安でなりません。

それはそうと、先週実施した私の次回作のヒロインアンケートの結果が出ましたので、ここで発表させて頂きますｗｗ

次回作のヒロインは……

覇王っ子　アインハルト・ストラトスさんに決定いたしました！！！

いやぁ～、やはり覇王は強かった！！ということで、次回作も頑張っていくのでどうぞよろしくお願いいたします～

では、本編どうぞ～～

Ａｃｔ３１　ソラ&ｌｔ；空＆ｇｔ；の願い事

「ソラあぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

「あんただけは！！」

「裏切り者……僕達の気持ちまで利用してぇ！！！」

「む！！」

イノベイト・チルドレン、リク・リーア・レイス・ネルがソラに対して攻撃を仕掛ける。四人の所有しているそれぞれのレガリアが発光し、彼らの能力を発動させる。

レイスが水のレガリアで、空気中の水分を操作し一見すると、何もないところから水が出てきたような錯覚さえ覚える。そして、その水を利用して、リーアの氷のレガリアによって、それらの水は何百もの氷の槍に変化した。

その氷の槍は、リーアの大鎌を振り抜いたと同時に、ソラに向かって殺到する。

「シオン」

「はい、分かってますよ」

しかし、氷の槍とソラの間に、シオンが立ちはだかり、同じように炎のレガリアを発動させる。

後輪のウィールが激しく回転し、そこで起こった摩擦熱を何倍にも

増幅し、巨大な炎を形成する。

ボッ…ボボボボボッ！！！！！

「僕たちの事を忘れるな！！」

「む！！」

そして、氷の槍と同時に、別方向からリクとネルが、ソラに攻撃仕掛ける。

ネルは大剣型のデバイス、雷のレガリアに猛々しい電撃を付与させ、リクは重力操作でソラの動きを止めに掛かる。

「鬱陶しい……」

コンッ！

が、リクの重力操作など全く影響ないかのように、ソラは風のレガリアで地面を踏み叩く。

瞬間、こちらに向かって飛び掛かっていたリクとネルは、見えない壁に阻まれたように空中で一瞬静止した。

しかし、それも一瞬の事。次の瞬間には、恐らくは彼らの飛び掛かって来た時のベクトルを反射させたのだろう、リクとネルは弾き飛ばされ、会議室の壁に叩き付けられた。

「がっ！！？」

「むぅ！？」

ゴォォォ！！！！

それと時を同じくし、ソラに迫っていた氷の槍は、シオンの作り出した炎によって、一瞬で蒸発させられる。

加えて、その炎は技を放ったレイスとリーアに向かって一直線に向かっていく。

「こいつはおまけだ、有難く受け取ってくれ」

そこで、ソラが再び動く。彼は風のレガリアで激しい風を生み出し、シオンの炎を追わせる。レイスとリーアに向かっていた炎と、その炎を追う風が空中で重なり合い、風瀑の道を生み出した。

ガシャアァァァン！！！

「ぐあ！！？」

「きゃぁ！！？」

風瀑の道をまともに食らい、レイスとリーアはリク達同様吹き飛ばされ、大きな壁に叩き付けられる。

まるで、クズ布が風に煽られてしまったかのようでもある。

「ソラ！！」

リク達が吹き飛ばされた瞬間、魔導師組も行動を開始する。リク達とコンビネーションを生かしていけばいいのだが、彼らの感情や、なんの訓練もしていないという事から、連携は端から考えていなかった。

いや、こうして一緒に戦っているだけでも、十分な連携と言えるだろう。

ティアナ、なのはがおびただしい数の魔力弾を生成し、全方向からの攻撃を試み、スバルとフェイトはクロスレンジからの直接攻撃をシオンに対して行う。

「（能力を使ったばかりなら、ソラのベクトル操作の演算にもラグが出るかもしれない……）」

「（魔力を吸収する魔眼も、視界に入っていないと効果が出ないことは、さっきのリク君達の待ち伏せの時に分かった……だから！！）」

ソラが能力を使った直後、加えて魔眼の効力の外、つまりはソラの死角を狙うための全方位からの砲撃。

リク達がソラに吹き飛ばされた意味は十二分にあったのだ。

「「ファイア！！」」

そして、ソラを全方位から取り囲んだ薄紅色の魔力弾と橙色の魔力弾が、なのはとティアナの合図で放たれる。

「っ！？」

この攻撃は、ティアナ達の読み通り有効だったようで、ソラが四方から迫ってくる魔力弾の壁を見て目を見開く。

ベクトル操作の反射を使おうにも、先ほど大規模な風の演算を行った直後で、反射に回す演算が間に合わないようだ。

しかし、ソラはこの危機を異常な動きでクリアする。

「っと！！」

なんと、ソラは風のレガリアを履いた足で、向かってくるティアナ達の魔力弾を足場に、飛ぶように移動し始めたのだ。
魔力弾の一つ一つの起動を読みつつ、それを足場に真っ直ぐにティアナ達の方向にソラが猛スピードで肉薄してくる。

「うそ！？」

「そんな出鱈目！！？」

ティアナとなのはの反応は普通だろう。魔力弾を足場に走るなど、出鱈目以外の何物でもない。
しかし、ソラはやってのける。

この時、ティアナは改めて思った、ソラ達イノチルと、普通の人間の生まれついての、生き物としてのスペックの違いと言うものを。

「っ！　クロスミラージュ！！」

「レイジングハート！！！」

『『ラウンドシールド』』

なのはとティアナは、同時にシールドを展開し、もうスピードで迫ってくるソラに備える。風が来るか、それとも先ほどのような石の破片を使ったショットガンが来るのか。
ここは兎に角、防御以外の術はなかった。

「らぁぁ！！！」

バチィィィィいい！！！

が、二人の予想は外れる。

ソラは、なのはに向かって拳を出してきたのだ。

ラウンドシールドで、ソラの拳を受け止めるなのはだが、その拳の異常さに一瞬で気が付くことになる。

「（何、このパンチ！！　とんでもなく重っ！！？）」

そう、ソラのただの拳と思われたその攻撃は、途轍もなく重かったのだ。

その重さ、威力の正体が、拳に乗せた力のベクトルをソラが操作してのモノだと理解したのは、なのはのシールドが粉々に砕けた瞬間だった。

ガシャン！！！

「っく！！」

シールドが消えれば、なのはを守るものはない。ソラの拳が、淀むことなくなのはに向かって降りかかる。

しかし、彼女とて教導官であり、エースオブエースと呼ばれた存在だ。ソラの拳に対してレイジングハートを盾に素早く防御する。

ガキィ！！

しかし、やはりベクトル操作で、膂力を上げた拳は尋常でないほど

の威力だ。直撃は防げたが、なのははは吹き飛ばされてしまう。

「貰うわよ、ソラ！！」

ソラの相手はなのはだけではない。シールドを素早く消し去ると、ティアナは一瞬で数十の魔力弾を周囲に展開し、ソラの死角を狙って放とうとする。

「ちっ……」

コンッ！

今回も演算が間に合わなかったようで、ソラは舌打ちをしながら、レガリアで地面を叩く。

瞬間、足にかかる力のベクトルをいじったのだろう。踏み叩いただけにも拘らず、ソラとティアナの周囲の地面が粉々になって破壊される。

「う、この！！」

ティアナの足場も崩れ、まともに砲撃を行えなくなった。

彼女は展開した魔力弾を何とか発射するが、狙いが定まらないその攻撃は、ソラには届かなかった。

「はぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

「おぉぉぉぉぉ！！！！」

一方、シオンとフェイト&スバルの攻防は、近接戦闘を主観に置いたものに纏まっていた。
シオンの場合は、ベクトル操作による攻撃の反射などを警戒しなくてもいいので、魔力の吸収だけに意識を配っていればいい。
それ故の、近接戦闘だ。

フェイトのバルディッシュ・ザンバーフォームの斬撃と、スバルのリボルバーナックルのテンポの速い攻撃を、シオンは紙一重で交わしている。

「せいっ！！！」

「っ！」

が、その攻防のバランスが一瞬崩れる。
フェイトの重い一撃が、シオンの防御を一瞬崩し、彼の体勢を不安定なものにした。

フェイトとスバルは、その瞬間を逃すことなく目配せをして一瞬で次の行動に移る。デバイスから薬莢が飛び出し、カートリッジがロードされる。

「トライデント……」

「一撃……必倒！！！！」

フェイトの金色、スバルの青色。
両者は美しさすら覚えてしまう魔力光を放ちながら、それぞれの必殺技を放つ。

「スマッシャー！！！！！」

「ディバイン、バスタァ！！！！！」

近距離からの金と青の魔力の奔流。まともに食らえば間違いなく意識を刈り取られる。魔眼で吸収したいところだが、ここまで近距離・巨大すぎると吸収しきれずに体がパンクしてしまうかもしれない。距離さえ開いていれば、話は別だが今はそんな事を言ってはいられない。

故に、シオンもそれ相応の対応を以て、その攻撃を退ける必要がある。シオンの足の炎のレガリアが、一際激しく発光する。

「無限の煉獄（インフィニティ・インフェルノ）」

ゴアァ！！！

一瞬だ。

瞬きの間に、シオンの周囲に先ほどのリク達に対する攻撃に使われた炎など話にならないくらいの豪炎が発生する。

そして、その豪炎は向かってくるフェイトとスバルの魔力の奔流を飲み込んでしまった。

「うぅ！！？」

「うわぁ！！」

その炎の余波を受け、フェイトとスバルはまともに立つ事すら叶わず、なのは達のいる方向に押しやられてしまい、思わず両者同時に膝を地面に付いてしまった。

「ソラァァァ！！！！」

性懲りもなく、再びリクが特攻を仕掛けてくる。どうやら、リーア達は壁に叩き付けられ意識が飛んでしまっているらしく、戦闘不能状態に陥っているようだ。

「そう死に急ぐなよ、遊びはこれからなんだからさ」

特攻を仕掛けてくるリクに対し、ソラは冷酷な視線を投げながら、レガリアを発動させていくつもの小さな竜巻を出現させる。

その一瞬、ソラの表情に苦痛が薄く見られたが、それに気が付けたのはシオンだけだった。

「無限の風（インフィニティ・エアード・セカンドギア）？」

ゴアッ！！！

が、ソラは体を襲う激痛を抑え込み、気合だけで技を放つ。幾重にも重なった小さな竜巻は、非情にも真っ直ぐこちらに向かって疾走してきたリクを飲み込み、再び壁に叩き付け、冷たいコンクリートとのハグをさせる。

ガシャァン！！！

「ぐあぁ！！！？」

リクの呼吸が一瞬止まる、イノチルでなければ今の攻撃で確実に死んでいただろう。

瓦礫となった壁が、地面に転がり壮観な造りをしていた大型会議室

の面影は微塵も見当たらない。

「く……そ……ソラァ……」

「リク！！！　前見なさい！！！！」

なんとか意識を失わずに済んだリクが、眼を開いて立ち上がろうとしたその瞬間、ティアナの声が響く。

彼女の目には、リクの危機が鮮明に移り込んでいた。

ベクトル操作で力のベクトルを強化した拳を振りかぶって、リクに攻撃を仕掛けるソラの姿が。

「なっ！？」

「はい、さようなら」

ドゴォ！！！

「がふっ！！？？」

ソラの拳は、地面で立ち上がろうとしていたリクの胴体にクリーンヒット。肋骨を余裕で砕き、内臓が潰れる感触、リクの吐血。

リクは、一瞬で戦闘不能に追いやられ、地面に大の字になって気絶するほかなかった。

リクの周囲の地面が、拳のインパクトの衝撃で深くへこんでしまっているところ見るだけでも、ソラの拳の威力と、乗せていたエネルギーの強大さが窺い知れる。

「ふぅ～……」

リクを叩きのめしたソラは、軽くジャンプしたかと思うと、近くにあった瓦礫の山に腰掛けて、地面に片膝をついているティアナ達の方に視線を向ける。

その表情は、いつも通りの余裕を感じさせる薄い笑みを浮かべていた。

「おいおい、啖呵切っておいてこの様か？　いやぁ～、やっぱり俺様ちゃんって最強じゃね？　シオン？」

「何を仰いますか。何度か結構危なかったじゃないですか？」

「ちょ、おま……そこは『ソラが誰よりも強いことなど最初から分かっていた事です』とか言うとこだろうが……」

「申し訳ないです、嘘はつけない性分でして」

「あ～、そうかい」

まるで、テレビゲームでハイスコアを出したかのようなテンションでそう言うソラに、しっかりと冗談に合わせて対応してくるシオン。八対二という、圧倒的な戦力差にも拘らず、戦況は圧倒的にティアナ達の劣勢だ。

それ以上に、ティアナ達は戦慄していた。

ソラとシオンの、底なしの戦闘力に……

「ま、所詮は人間と出来損ないのイノチルの複製種（フェイカー）と中途半端な強

さしかない純粋種（オリジナル）ってところか……」

ソラは、地面に倒れ伏して意識を失っているリク達、意識はあるものの、地面に片膝をついた状態になっているティアナ達を流し目で見ながらそう呟く。

ティアナ達ならまだしも、同じイノチルでも戦闘能力にここまでの差があるというのは、ハッキリ言って想定外ではある。

だからと言って、ティアナ達が諦めるわけもないのだが。

「シオン、ここからは俺一人でやる。手は出すなよ？」

「……っ！　はい、分かりました」

ソラはシオンにアイコンタクトで何かを伝えると、シオンを戦線から下げさせた。ティアナ達四人の相手を、同時にするのはこれが二回目ではあるが、前回の結果はティアナ達にとって厳しいものだった。

それが今回で覆る可能性もまた同じだ。

しかし、ティアナはソラの命令を聞いた瞬間のシオンの表情の変化を見逃さなかった。何か、沈痛な面持ちとでも言えばいいのか、兎に角ソラの方を見て一瞬だけ表情が曇ったのだ。

その表情の正体までは探り取れなかったが。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「（ソラ……もう、限界なんですね……）」

シオンの胸中は、ソラの限界を察していた。先ほどのアイコンタクトも、そろそろ勝負を決し、次のステージに移行する事を示していたのだ。

ソラの目的の第一段階は、人間の可能性を見せること。

次に、第二段階は、対話だ。

そして、最終段階、ソラ達の最終目標でもある『変数X』の誕生。

大まかに分けると、ソラ達の計画はこの三段階に分けられる。

「ティア、なのはさん、フェイトさん、青髪…スバルだっけか？　どうです？　そろそろ、このゲームも終わりにしませんか？　正直言うと、もう積ゲーなわけなんですけど」

そして、ソラは戦闘を自分から終わらせるように、ティアナ達に対してあくまで超上から目線で挑発する。

次の一撃で、第一段階の全てを終わらせる、そしてそれは、ソラ自身の役目の終わりを意味している。

「まだよ……！！　私たちは、まだ倒れてもいないし、死んでもいない！！　あんたの勝手を許すわけにはいかないのよ」

「なるほど……うん、元気のいい答えだね。なら、全員で一斉に砲撃でもしてみたらどう？　一人ならともかくとして、四人全員の魔力は俺でも吸収しきれない。まぁ、それでも能力を使えば防ぐことは可能だけど。」

ソラは、ティアナ達に選択肢を敢えて与える。
そうだ、この戦闘においてソラは決して『勝ってはいけない』。だが、その為に手を抜くことも許されない。
つまりは、全力勝負で何が何でもティアナ達の勝利に終わらせる必要があるのだ。その為には、ティアナ達にとって勝つための選択肢を用意し、最後の攻撃をどのようなモノにするのかをプロデュースする必要があった。

全力のソラを、完膚なきまでに叩きのめす。

人の可能性を示すための、第一段階の目的をクリアするための条件がこれなのだ。

「（……誘い……？　ううん、でも確かに、あの魔眼は大量の魔力を一度には吸収できない。以前のなのはさんとの模擬戦でも、ディバインバスターの威力を削ぐことは出来ても、消すことは出来なかった。それに、今回の戦闘でも魔法攻撃はすべて躱すか、反射するか……確かに、選択肢としては一番現実的……）」

イノチルの能力の中で、一番厄介なところは、魔力の吸収能力だ。
だがしかし、どんな能力にも弱点はあるわけで、吸収量の限界が今の場合はそれに当たる。

しかし、シオンが相手なら、一斉砲撃の手は通用するのだろうが、相手はソラだ。あらゆる力のベクトルを操作し、攻撃を反射させてしまう彼の能力。
砲撃と言えども、向かう先がソラではなくティアナ達になってしまえば自滅以外の何物でもない。

「安心しなよ、ベクトル操作で攻撃を反射したりなんかしないからさ。俺も、今の俺に出来る最高の技で迎え撃ってあげるよ。それなら、このワンサイドゲームもイーブンな形になるだろ？」

「っ……完全に舐められてますね……」

「だね……」

が、ベクトル操作による反射と言う選択肢は、ソラ自身が潰してしまった。圧倒的優位からくる余裕による、手加減を演出しているのだろうが、実際、最早ソラには砲撃を反射するだけの演算能力は残っていなかったのが実情だ。

しかし、こうまで舐め切られた態度を取られれば、ティアナ達も黙ってはいないだろう。

ソラの言葉がブラフの可能性も考えられたが、この状況ではティアナ達からすれば、ソラがそんな搦め手を使ってくる理由がないと考えるだろう。

そう言った、精神的な作戦もソラは良く熟知している。

ティアナとなのはが目配せをしてアイコンタクトを取る。そして、次にフェイトとスバルにも同様のアクションを。

「（どの道、私たちに残っている選択肢は多くない……だったら）」

「（ソラ君の言動そのものがブラフの可能性もあるけど、ここまで優位に立ってる彼が、わざわざそんな面倒な事をする理由が見つからない）」

「（なら……向こうが油断している間に、一か八かだけど、力勝負に持ち込むのも一つの手段……）」

「（何よりも、ここまで言われたら、絶対に負けたくない！！）」

ティアナ、なのは、フェイト、スバルの順に、答えは出た。

情報的、状況的な判断と言う観点ももちろんだが、ソラとの真っ向勝負を選んだ背景には、彼女たちの強い負けん気が在った。

諦めない心、屈しない心、自身の信念を貫く覚悟、明日を願う気持ち。

ソラが彼女たちに期待していたのは、純粋な戦闘力ではなく、そう言ったメンタル、精神的な部分の強さだった。

「答えが出たっぽいね？　それじゃ、ガチンコってことで行ってみようか？」

そう言って、ソラは腰掛けていた瓦礫から腰を上げ、自身の足で立ち上がる。

が、着地した瞬間に危うく倒れそうになる。

どうやら、体の方は既に限界を超えているらしい。が、そんなことを気にしている暇はない。

次が、本当のラストアタックなのだから。

「（オルクス、この攻撃が終わったと同時に、空のレガリアを起動しろ）」

『（御意）』

靄がかかったような頭で、なんとかオルクスに次の命令を下しておく。
この攻撃が終わった後が、ある種一番重要なセクションになる。空のレガリアの発動、それによる対話の開始。
ここまで、なんとか保ってきた体が悲鳴を上げているが、知った事ではなかった。

「クロスミラージュ」

「レイジングハート」

「バルディッシュ」

「マッハキャリバー」

目の前の戦乙女たちが、自身の相棒の名を呼びながら、足元にそれぞれ魔方陣を浮き上がらせる。
彼女たちの瞳にあるのは、ソラに対する敵意、そして守るべきものを見定めた揺るぎ無い魂。これから、彼女たちはソラという『悪』を倒す。
そして、新しいステージに段階を移行させる。

「……壮観、だね」

ゴウッ！！！

そして、悪であるソラもまた、最後の力を振り絞り自分に生み出せる最高・最強の風を集中、凝縮させる。

それはさながら、小さな台風のようにも見えるが、そんなに甘っちょろいものではない。

今まで使用してきた風の数十倍の破壊力と、殺傷能力を秘めた、正に『死の風』である。

これが、風の王最高の技であり、ソラに出来る最後の攻撃だ。

「ソラ……私は、あんたのことを認めない」

「……あぁ、それでいい」

「あんたと過ごしてきた、あの半年も、この事件が終わったら綺麗に忘れるつもり」

「……そうか」

ソラの人を駒としか見ていない所業に対する、ティアナの怒りと否定の意思は揺るがなく、堅い。

目の前にいるのは、いつもへらへらしていて、女の尻ばかり追いかけていたバカな執務官補佐などではなく、ただの犯罪者だ。倒すべき、巨悪だ。

「決着を付けましょう……今までの事全部に……」

ティアナの集束魔法、スターライトブレイカー・ファントムストライク。

「全力全開……スターライト……」

なのはの集束魔法、本家スターライトブレイカー。

「雷光一閃……プラズマザンバー……」

フェイトの砲撃魔法、プラズマザンバーブレイカー。

「一撃必倒……ディバイン……」

スバルのクロスレンジの砲撃魔法、ディバインバスター。

四人の最高の技が、ソラに襲い掛かるまで、さほど時間はかからない。

まともに直撃を食らえば、イノベイト・チルドレンと言えどもタダでは済まないだろう。

そして、ソラも……

「無限の風（インフィニティ・エアード・ファイナルギア）・終」

集束・圧縮した風を、ティアナ達四人に向けて放つ態勢に。

こちらも、ティアナ達の魔法と比べても遜色ない、若しくはそれ以上の威力を秘めた攻撃だ。

これらの技がぶつかり合い、最終的に立っていた方の勝ちである。

そして……

「「「ブレイカーーーー！！！！！」」」

「バスタァーーーー！！！！」

「行けぇぇぇぇぇぇ！！！！！」

両陣営の、最大級の攻撃魔法がそれぞれの魔力光を輝かせ、或いは暴風を伴って放たれた。

ドォオオオオオオオオオオ！！！！！

「いっけぇぇぇぇ！！！！！！！」

「おぉおおおおおおおお！！！！！」

「届けぇぇぇ！！！！！」

「お願い！！！！！」

ティアナ達は、祈るような思いで自身の中の魔力を砲撃魔法に注ぎ込み、威力とパワーに還元する。

その攻撃は、ソラの放った禍々しい風の攻撃と空中で拮抗しており、エネルギーとエネルギーがぶつかり合い、凄まじい衝撃波を発生させ、周囲の瓦礫を吹き飛ばす。

「らあぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

そして、ソラもまたこれまでにないくらいの声を上げて、ベクトル操作の演算に集中する。彼の起こした大規模な風は、僅かな誤差が生まれても途端に威力を弱めてしまう。その為、これまでにないほ

どの集中力が要される技だ。

「っく……！！」

「だ、ダメ……！？」

「なんて風なんだろう……！！」

「うぅ……！！」

驚くべきことに、押されているのはティアナ達だった。彼女たちの砲撃はソラの風によって徐々に、徐々に押し返されていっているではないか。

全てを飲み込む死の風、暴風。

その勢いは、なのはたちの最高の技をも飲みこみ、術者である彼女たちに迫り牙を剥く。

「（～～～～っ！！！！　だ、ダメなの……？！　どうしても……！！？）」

ティアナは、懸命にソラの風に抵抗し、砲撃に力を注ぎ押し返そうとするも、力が一歩及ばない。

加えて、彼女たちの魔力も無尽蔵ではない。限りがある魔力だ、当然伸びシロの限界はある。

諦めるわけではないが、魔力量と言う限界においては、ティアナ達は逆らうことは出来ない。魔力があってこその魔法であり、今目の前で拮抗状態にある砲撃魔法なのだ。

元がなくなれば、全てが終わる。

「（ダメ！！　弱気になるな、ティアナ・ランスター！！！　ここで負けたら……私は……！！！　最後の最後まで、あいつを……ソラを過去に出来ない！！！！）」

ティアナは、足に、腰に、全身に気合を入れる。なのは達も同様に、まだまだ目は死んでいない。
勝負を諦めない者にしか、勝利の女神は微笑まない。

故に、諦めなかった彼女たちに、勝機は訪れたのだ。

ゴウン！！

「っ！！？」

突如、ソラの周辺の風景が歪む。同時に、ソラの体が一瞬だが体勢を崩された。

「う……くそ……」

ソラの体勢を一瞬崩したのは、リクが一瞬だけ発動させた重力操作によるものだった。空の周辺の重力を一瞬だが大きなものにし、彼の体勢とベクトル操作の演算を狂わせた。
超精密な演算をしていたソラにとって、突如周囲の重力が変わるということは、風を制御する演算に大きな狂いを招くことになる。

リクは、一瞬の重力操作を行った後、再び意識を失ったようで地面に倒れ伏した。
しかし、このリクの一瞬のアシストが、大きな転機となった。

「くっそ……ゴホッ！！！　ゲホッ！！」

さらに、ソラの体は既に限界をとうに超えていた。結晶化した血液が、彼の口から吐き出される。

演算の大幅な狂い、崩れた体勢、限界の体。

これらがもたらす結果は、非常に単純明快。

ドォォォォォォォォン！！！！！

ソラの風は、ティアナ達の砲撃に押し返され、一瞬で掻き消される。そして、拮抗する対象を失った四人の砲撃は、ソラを飲みこみ彼を吹き飛ばしたのだった………

砲撃が直撃する瞬間、ソラの口元には笑みが零れていた………。まるで、安心したかのような、それでいてスッキリしたような、そんな笑みを。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「はぁ……はぁ………」

「も、もう……魔力が空っぽだよ………」

「私も……はぁはぁ……」

「はへぇ～……」

ティアナ、なのは、フェイト、スバルはソラを吹き飛ばして地面に倒れ込む。すでに彼女たちに余分な魔力は無い。最早、空を飛ぶことも無理だろう。

しかし、ソラを倒してだけでは、戦いは終わらない。炎の王、シオンがまだ控えているのだから。

「……お見事です、皆さん」

「負け惜しみ……？　はぁはぁ……それとも、今から私達を消すつもりなのかしら？」

シオンの賞賛の言葉に、ティアナは皮肉交じりでそう返す。事実、今の状態では、如何にこの四人でもシオンには瞬殺されてしまうだろう。

ハッキリ言って、万事休すだった。

「いえ、そのどちらでもありません。皆さんのお陰で、私たちの計画は次の段階に進む事が出来ます」

「次の……段階……？」

「あなた方は、ソラと言う巨悪を、イノベイト・チルドレン最強の個体を倒したことによって、世界に人の可能性、人の強さと、明日を繋ぐ力を見せてくれました。世界との対話に必要な準備は整いました」

シオンの言葉の意味を計りかねたなのはは、尋ね返すようにシオン

の言葉を反芻する。
彼の言う、人の可能性、強さ、明日を繋ぐ力と言うのが、先ほどのソラとの闘いにおけるティアナ達の姿だとするのなら、これから始まる世界との対話とは何なのか？
彼女たちにはまったく分からない。

「すぐに分かりますよ……。ほら、見てください」

シオンが言う様に、彼の指し示す方向に視線を向けるティアナ達。
そこには、彼女たちの砲撃魔法で吹き飛ばされた、ソラが地面に横たわっていた。

その姿は、ボロボロで、先ほどまで圧倒的有利に立っていた風の王の片鱗は見る影もない。

しかし、そんなボロボロで身動き一つできないはずのソラの体に異変が起こる。

ドクンッ！！　ドクンッ！！

「な、なに！！？」

「ソラ君の体が……？」

ティアナとなのはが、ソラの体が脈動し始めたことに驚愕した。今の彼のダメージでは、指一本満足に動かせるはずがないのだ、驚くのも無理ないだろう。

「私たちの本来の目的は、あなた方を対話のステージに連れてくること。世界征服も、管理局の支配も、全てあなた方をその気にさせ

るための方便でしかありません」

「だ、だったら何!?　ソラは、ソラは……私達に倒されるつもりで?!」

「はい。その通りです」

ソラとシオンの真の目的。そして、ソラの真意。

彼らの言っていた目的はただの建前で、ソラはティアナ達に倒されるべく敵となった。

ティアナは、その事実に耳を疑った。

そして、その間にソラの体がゆっくりと動きだし、立ち上がる。見れば、彼のデバイス、風のレガリアから青い色の発光現象が起こっている。今までには無かった現象だ。

「空のレガリアが、ソラを通じて、皆さんの対話相手を論理空間から、皆さんの世界にアクセスさせています」

「……」

立ち上がったソラの目には、生気が無い。どこか虚ろな眼で宙を見ている夢遊病者のようでもある。

いや、今現在、ティアナ達の目の前に居る男はソラですらない。

真っ先にソラの変化を見て立ち上がったティアナが、その感覚を誰よりも鮮明に感じ取っていた。

「あんたは……誰?」

問う。

今目の前にいる存在が、一体何なのかを。対話相手だというならば、その正体、存在意義、コミュニケーション能力の有無などを確かめる必要がある。

虚ろな目で、ソラを通じてこちらを見ている『何か』にティアナが問いかけると、それはソラの口を開いて、彼の声で答えた。

『我々は……お前達だ』

Ａｃｔ３１　ソラ<空>の願い事（後書き）

本日の挿入歌＆ＥＤ

『パラダイムシフト』　ｓｏｎｇ　ｂｙ　片霧烈火

ＰＣゲーム「ＢＡＬＤＲ　ＳＫＹ　Ｄｉｖｅ１」挿入歌

次回Ａｃｔ３２『コミュという概念と言語による限界』

Ａｃｔ３２　コミュという概念と言語による限界（前書き）

最初に言っておく！！　私は持ち上げてから突き落とすタイプだと！！！！

この言葉の意味は、本編でご堪能ください……

今回は、物語の核心、対話の相手が登場します。まぁ、恐らくは予想済みな方もいらっしゃるかと思いますが……

兎も角、本編に行ってみましょうか……ヒーハー☆……

Ａｃｔ３２　コミュという概念と言語による限界

本書の核心はほぼ次のような言葉で捉えることができるであろう。
およそ言いうるものは明瞭に言いえ、語りえざるものについては沈黙せねばならぬ。

かくして、本書は思考にある限界を定めようとする。
というより、思考にではなく、思考の表現に限界を定めようとする。
なぜなら、思考に限界を定めるためには、
われわれはこの限界の両側を（従って思考されえぬものを）思考できねばならぬからだ。

ルートヴィヒ・ウィトゲンシュタイン　『論理哲学論考』・序文より

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

『我々は、お前達だ』

再び起き上ったソラの体を通じて、『何か』がティアナの問いにそう答える。その言葉には、さまざまな意味が含まれており、同時にティアナ達のさらなる混乱を招くのは当然の帰結だった。

「どういう……意味かしら？　我々って、あんた一人にしか見えないし……。それに、あんたが私達っていうのはどういう事なの？」

何かから発せられた、我々という単語。

即ち、ソラの体を借りている何かの正体は複数いるという事になる。

だがしかし、それではその『我々』がティアナ達の方を差して『お前達』と言うのは一体どういう事なのだろうか？

その疑問を解消したのは、シオンだった。

「皆さんも不思議ではありませんでしたか？　なぜ、私たちが人の思考を読めるのか」

「それは……特殊な脳波を使って、どこかデータベースのようなところとアクセスして……」

「えぇ、そうです。ですが、皆さんはそのアクセス先をご存じではないでしょう？　人の思考が蓄積されるようなデータベースの存在、普通では考えられませんからね」

イノチルの特殊脳波については、ティアナ達も把握済みだ。それから生み出されたのが、逆干渉脳波と言うイノチル対策なのだから。

しかしながら、シオンの言う通り、イノチルが特殊脳波を使って、どこへアクセスして人の思考を読んでいるのかは皆目見当がついていない状態だった。

「簡単に言えば、私達イノベイト・チルドレンは、人の意識の総体、人の思考が集まる場所にアクセスする権利と能力を有しているという事です」

「意識の……総体って？」

「私たちが逆干渉脳波の技術を無限書庫に紛れ込ませたことは覚えていらっしゃいますね？　その資料の中に、先生の研究資料だった『深層心理学』・『ユング心理学』・『分析心理学』・『シンクロニシティ』などの心理学系列の資料があったはずです」

意識の総体と言う単語には、流石のティアナも聞き覚えが無かった。そんな彼女たちに、シオンはさらに以前リークしたヴァルターの研究資料についての事を思い出させる。
思えば、心理学専攻なのかと思いきや、データベースの理論などの機械工学の論文まで、さまざまなジャンルの資料が内包されていた。

「意識の総体、先生の研究はこの存在を見極めることに在りました。その存在を疑うきっかけになったのが、我々イノベイト・チルドレンです」

「ヴァルターさんの研究の目的は分かったけど、その……意識の総体っていうのは具体的には何なのかな……？」

ヴァルターの研究の目的は、人間の意識の総体。まぁ、それは良いだろう。
問題は、その意識の総体が今回の一連の事件と、イノチルの能力とどう関係しているのかという事だ。
フェイトは、その当たりの事を含めて改めてシオンに尋ねる。

「皆さんは、聞いたことがありませんか？　『人の意識は、とても深い部分で繋がっている』や『集合無意識』といったお話を。人の心のネットワーク、精神的な結合体、意識と言う概念の集合体」

「も、もしかして、あんた達が人の思考を読むためにアクセスできるデータベースっていうのが……その集合無意識とか……？」

「噛み砕いて言えば……。先生の研究では、この意識の総体を『コミュ』と呼称していました。そして、このコミュの活動と人の活動が、双方に強い影響を及ぼしているという事を先生は突き止めました」

突飛もない話だ。

普通に考えれば、そう言うリアクションを取るのが自然だろう。だがしかし、実際にソラ達は人の思考を読み取れるし、コミュの存在を思わせる発言もしている。

『我々は、お前たちの意識、心と言う概念そのものだ。お前たちの意識は我々の一部であり、我々はお前たちの意識そのものでもある』

「つまり、一は全、全は一ってこと？」

『お前たちの好きに解釈すればいい』

そして、ソラの体を借りて『コミュ』と呼ばれる存在が、口を開き、スバルの問いにも答える。

その声は、どこか浮世離れしているというか、幻想的なモノにも聞こえた。

『我々は、通常ならば思考の可能領域の外の存在。つまり、語りえないものだ。言語と言う線で限界を与えることで、『集合意識』または『コミュ』と言うような言葉や意味という形でしかこの世界には存在しえない』

このお話を読んでいる方の中に、丸い三角形を思考出来る方はいるだろうか？
恐らく、そんな奇天烈で存在しえない図形を思考出来る方は、この世界中どこを探してもいないだろう。（おにぎりのような形の三角形は論外です）
つまり、この丸い三角形は、コミュなどと同じような思考可能領域の外側の存在という事だ。
普通、丸い三角形を思考しろと言われても、『そんなのは不可能だ』と結論するだろう。

しかし、丸い三角形を思考できないと結論付ける時点で、我々は結論する過程で丸い三角形について思考している。

この時に我々が思考しているのは、丸い三角形と言う存在そのものではなく、日本語としての丸い三角形という言語についてなのだ。
存在しえず、思考できない存在であっても、丸い三角形は『丸い三角形という言葉』としては存在し得る。
その為に必要な物が、言語による限界の線引きなのだ。

言語を用いれば、空虚で存在しないような観念や概念であっても言葉として世界に存在することを可能にしてしまう。

つまり、今ソラの口を動かしているのはコミュと呼ばれる人の意識の総体。思考不可能な人の意識の総体、概念という、言語によってこの世界にある存在だ。

『我々とお前たちが直接会話できるよう、ヴァルターという存在は空のレガリアなるものを造りだし、器とした。お前たちがソラと呼んでいる、このイノベイト・チルドレンは器に我々を満たすための受信機のようなものだ』

「私達と、人の意識の総体、コミュの対話が……ソラの目的……？　空のレガリアは、コミュを受け入れるための器、記憶媒体みたいなものだったってこと……？　ううん、それ以前にこんなバカな話……」

これまでの計画の軸、目的としてのこの対話。それこそがソラの目的だというのなら、コミュとの対話にどれだけの意味があるのか、ティアナ達は測りかねていた。

その様子を見て、コミュはさらに語りだす。

『我々は、お前たちの意識の総体。そして、お前たちは我々の一部、つまりは視点の一つ一つという役割を帯びていると考えられる』

「って、そんなの説明しようがないじゃない！　あんたが私たちの意識の全部纏まった存在だっていうけど、そんな証拠はどこにもない。それに、私たちがあんた達の視点の一つって言うなら、今こうして思考して、考えてる私は一体何なのよ？　考えてる私は、意識を持って確かに今ここに存在してる」

ティアナは、コミュの説明に引っ掛かりを覚え、すぐに反論する。確かに、ここまで聞いた話は、コミュやシオン達からの一方的な情報だ。それを証明するモノはどこにもない。

『では、こう仮定すればどうだ。この世界は、悪魔が五分前に生み出したもので、お前たちの記憶も何もかもが作られたものだというのは』

「そ、そんな無茶苦茶な……」

『では、仮定?だ。今ここで起こっているのは、全てソラと言う存在が見ている夢。お前たちが思考していると主張しているその人格は、実は彼の中の妄想だった』

「妄想って……そんなことあり得ない」

『何故ありえないと言える? そう言えるだけの根拠はあるのか? お前が言う様に、我々にもその証拠を提示できるのか?』

コミュはティアナの反論に対して、そう言ってくる。
確かに、コミュなる存在の確かさを証明するモノは無い。しかい、同時にそれを否定し、別の可能性を確立できる要素も無い。
そんなものはこの世界の誰もが持ち合わせてはいないし、仮定などは人が自分の都合のいいように考えれば無数に存在する。

『お前たちが思考して、意識があって存在していると言っても、それを証明するだけの根拠にはならない。意識の連続性は存在の証明にはなり得ない。以前、ソラがお前たちに『あなたはそこに居ますか』と言ったのはそう言った意味だ。』

「だったら、あんたの存在も、私たちが視点だってことも」

『その通りだ。ハッキリと証明はできない。故に、我々は『お前たちが視点の一つ一つと言う役割を帯びていると考えている』という言い方をせざるを得なかった。結局のところ、この世界の成り立ちや意味などは、語りえないことに過ぎない』

人が在るからこそ、コミュが生まれるのか。逆に、コミュが在るからこそ人は存在しているのか。

結局のところ、それを証明する手段はない。卵が先か鶏が先かという話だ。

『我々とお前たちの違いは、保有している情報量の差でしかない。お前たちが知りえないことは、我々も知りえないし、逆に我々の知っている事ならばお前達も知っている。個体によってその差は生れてしまうが、知らない者は知っている者からその情報を得る事が出来る』

人と人同士の間で生まれる、情報の非対称性。自分は知っているが、相手は知っていない。相手が知っている事を、自分は知らないということはよくある話だ。
人とコミュの間においても、特殊な形ではあるが同様の現象存在している。

今のところ、そしてこれから先もお互いの存在の確かさ、不確かさなどは証明できることはないだろう。
語りえないものについて、人は沈黙しなければならない。つまりはそう言う事だ。

「はぁ～……信じられないけど、でも否定する材料もないんじゃ……ね……」

『柔軟な考え方だ。それも我々の美点の一つでもある』

フェイトがそう呟くと、コミュはそう言って、一同を見渡す。ソラの姿をしてはいるモノの、やはりどこか違う。

「で？　ソラやシオンがそこまでして私達とあんたを話し合わせたいってことは、この対話にはそれだけの意味と、価値があるってこ

とでいいのかしら？」

『無論だ。悪くすれば、我々はそう遠くない未来に自らを滅ぼしてしまうかもしれない。人の意識が、昨日を過去を見てばかりではな』

両者の存在の不確かさの議論は、今は考えるべきではないと考えたティアナは、ここまでして成し遂げたかったソラの目的である、コミュとの対話に話を戻した。

すると、コミュはその口から意外且つ、恐ろしい事を言い出し始めたではないか。

「滅びるって……それはどういう……？」

『言葉通りだ。我々の意識が、過去ばかりを見ている。明日を見ようとしていない。それはつまり、我々の意識が明日を望んでいないという事になってしまう。人の意識そのものが自身の滅びを望んでいるのに等しい』

コミュは人の意識の総体だ。その彼らが人の滅び、衰退を口にしたという事は、多くの意識、視点が世界に絶望しているという事とも取れる。

『おかしいと思わないか？　ここ最近、いや数百年単位で見ても、人は争い戦争をする。お前達で言えば、ＪＳ事件や闇の書事件、ＰＴ事件と、世界規模での大きな事件が連続し過ぎている。人に争い事は付き物だが、ここまで世界の存亡、世界の在り方を変えるような事件が続くことに疑問を持ったことはないか？』

「あ……」

確かにそうだ。事件は起こるべくして起こるものだが、それにしてもここ１０年程を振り返っても、世の中を震撼させるような事件が連続し過ぎている。
規模の大小を議論するつもりはないが、そういった事件が横行し過ぎていることに誰もが疑問を抱きすらしなかった。
事件が起こってしまうのは仕方のない事
そんな意識すらあったのかもしれないし、指摘されれば否定も出来なかった。

「じゃ、じゃあ……そんな大きな事件が連続している原因が、人の意識の変化ってこと……？」

『全てとは言わないが、原因の一部だと考える事が出来る。多くの人の意識が闇に染まれば、我々にもその変化がフィードバックされる。そして、その闇は深層心理を伝って、より多くの人間の意識に影響を与える。人の心が荒れれば、社会も荒れる。社会が荒れれば、世界全体が荒れ始める。危険な思想を持った人物が行動を起こしやすくなる』

負の連鎖と言えば、ぴったり当て嵌まるこの説明。
確かに、なのはたちの経験したＪＳ事件なども、管理局内の闇、スカリエッティの台頭など、様々な要因が絡み合って起きてしまった事件だ。
闇の書にしても、ＰＴ事件にしても、人の心と言うものが濃く関係していることが今更ながらによく見えてくる。

『我々の意識の変化を、イノベイト・チルドレンであるソラ・エス

テル・シオンは敏感に感じ取った。そして、ヴァルターと呼ばれる存在は、それすらを見越し彼らのデバイスに空のレガリアなどの情報を隠しこんでいた。彼らが、我々の意識変化を感じ取ることを、情報の開封条件にな』

恐らく、今回の事件で一番の曲者は、ソラ達の恩師ヴァルター・クロンベルクだろう。コミュの存在の想定から、レガリアの設計、情報の開示条件など、想定されるあらゆる可能性を模索したに違いない。

『我々の意識の悪い方向への変化を、ヴァルターは早期に予期し、対策として空のレガリアを使用しての対話と言う手を考え付いた。そして、ソラはその意思を継ぎ、お前達を対話相手として選び事を進めた』

「で、でも、そんな大きな……人の意識の全体の事に、私たちが対話したところで意味なんてあるの？　流石にスケールが大きすぎて……」

コミュの言葉に、嘘偽りはない。第一、彼らは人の意識の総体であり概念に過ぎない。ここで嘘を吐く意味などないし、嘘と言う概念すらないかもしれない。

しかし、話が本当だとしてもスバルの言う様に、スケールが大きすぎる。ティアナ達だけが頑張ったとして、それが意味を持つのかが怪しかった。

『言葉だけでは無理だ。言葉と行動、これらが無ければ世界には、我々には響かない。だが、人数は関係が無い。お前たちの言葉と行動が、我々の意識に波紋を作り出す』

「行動って言うと……？」

『お前たちは、イノベイト・チルドレンの中でも最高クラスの個体、ソラを倒した。それぞれの力を結集し、明日を諦めず、敵対していたリク達をも受け入れ、戦いに臨み勝利した。人の可能性を示す為には、十分過ぎる結果だ』

コミュ全体の意識編成に波紋を作り出す為、ソラはティアナ達に敢えて敵対し、悪となって倒される敵となった。
その行為の全ては、コミュに対して人の可能性を示す為だったという事だ。

「ソラ……あんた……」

今はコミュに体を預けて、意識の無いであろうソラの体を見ながら、ティアナは呟く。
結局は、彼の計画通り、掌の上で踊らされていたというわけなのだが、今はそんなことはどうでもよかった。
ソラがどれだけの覚悟で、自分たちと敵対していたのか。それを考えると、切なくなってしまう。

『行動は既に示されている。後は、お前たちの言葉だけ。基本的に、我々コミュは何にも属さずただそこに在るだけの存在。我々の編成意識を変えるかどうかは、お前たちの言葉次第だ。意識の変化が確実に起こるとは限らないが』

「……」

対話の最後、コミュはティアナ達の言葉を待つ。

明日を望み、過去ではなく未来を見つめる気持ちを伝えなければ、世界は人の意識は負の連鎖から抜け出すことは出来ず、いずれは自壊してしまう。

人の明日を望まない気持ちから生まれた負の連鎖が、世界を荒れさせているのなら、その逆に改善していくためには、明日の望む人の心をコミュにフィードバックさせる必要があるのだ。

ティアナは、なのは・フェイト・スバルの顔を見て、視線を送る。三人とも、笑顔でティアナに対して頷き、彼女と同じ思いであるという事を伝える。

そして、ティアナもそれに頷き返し、コミュに向き直す。

「私たちは、ただ守りたい人や大事にしたい人達が、そこで笑っていてくれる世界が欲しいだけ。あんた達の編成意識を変えるだとか、そんなのは二の次なのよ」

『……』

「人間誰だって、過去は振り返りたくなるし、後ろを向きたくなることはある。それは仕方のないこと、人はそんなに強くない。でも、それでもね……」

ティアナは、そこで一旦言葉を切ると、深呼吸をする。自分の思ったことを、ただ言葉にするのがここまで難しいものなのかと、改めて言語と言うものの重要性を認識してしまう。

「でも、私は、私たちは最後は前を向いて生きていけるように精一杯生きるだけ。私たち人間は弱いけど、弱いばかりじゃない。下を

向いてばかりじゃなくて、いずれは前を向いて歩きだせる強さを持ってるって、信じてる」

明日を望むだけでなく、人自身の可能性を信じるティアナ達。
人の意思が変わったとしても、そこから歩き出すのもまた人だ。その歩き出せる強さを持っていると、彼女たちは信じている。

ティアナ達が伝えたかったのは、それだけだった。

『なるほど……。それがお前たちの言葉か……』

コミュは、一度目を閉じ何かを思案するかのような仕草を取る。実際、何かを考えているのかは分からないが、ティアナ達にはそう見えた。
そして、数秒後コミュが再び目を見開く。

『波紋は広がった。我々全体に響くかどうかは、これからのお前たち次第だ。人の可能性、信じる心を、変数Xに見せてやる事だ』

「変数X？」

『直に……分かる事だ……』

対話は成功したのか、コミュは意味深な単語を含みながらそう返してくる。変数Xという言葉に、なのはが首を傾げながら反芻するも、どうやら時間切れなのかコミュの言葉が途切れだしてしまう。

『対話は……終わった……この者の体を、お前たちに……返す……残り……ない……時間……大事……することだ……』

バタン……

そう言って、コミュは、いやソラの体は地面に倒れ伏した。見れば、空のレガリアの発光現象は終わっており、風のレガリアは十字架を象ったアクセサリー型の待機モードに移行していた。

「終わった……の？」

「みたい……だね……」

「なんだか、ものすごいことに関わっちゃったような気がします……」

なのはが地面にへたり込みながらそう言うと、フェイトとスバルも同様に、尻餅をつくように地面に座る。

未だに、先ほどまで目の前で起こっていたことが夢のように思えてしまうが、体が現実だと教えてくれていた。

そして、ティアナだけが、倒れているソラにゆっくりと歩み寄っていた。彼らのしでかしたことは許せるものではないが、ただの悪ではなかった。

倒れて動けないのなら、肩を貸してやることくらいはしてやろうと思ったのかもしれない。

「うぅ……んあ……？」

「起きたわね？　この変態策士」

と、ティアナの足音に気が付いたのか、ソラが目を覚ます。しばらくは周囲をキョロキョロと見渡していたが、ティアナやシオンの姿を認めると、何やら納得したような表情になった。

そして、少し泣きそうな表情で目の前に立っているティアナに向かって……

「ティア……今日はオレンジ色か……ごっちゃんです……いやぁ、でもこれはかなり刺激的なデザインの……」

ゴスッ!!!

「ふぎゃあぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!!!!!!??? な、なんで顔面蹴るの!!? ただ単にティアの下着の色言っただけじゃん!!!」

「さっきまでのシリアス展開から、どうしてそういう馬鹿な方向に話を持って行けるのよ!!? ていうか、人の下着覗いておいて悪びれる様子もゼロってどんだけよ!!?」

まぁ、倒れている人間の目の前に、ティアナのような短いスカートタイプのバリアジャケットで立ってしまえば、男のロマンが詰まった神秘ゾーンが見えてしまうわけで……

まぁ、ソラの目にはティアナの今日の下着がバッチリ完全に見えてしまったわけだ。まさに眼福である。

「一回地獄見て来なさい!!!! この女の敵!!!! 色情魔!!!! 変態!!!!」

ゴスッ！　ゴスッ！！　ゴスッ！！！

「にゃあぁぁぁぁぁぁ！！！！？？？　や、やめて！！！　とりあえず謝る、謝るから許して！！！！　ダメ、裂けちゃう！！　そんなにしたら裂けちゃうぅぅぅぅ！！！！！」

「気持ち悪いセリフを垂れ流すんじゃないの！！！　男のセリフっぽくないわよそれ！！」

最初は足でソラを蹴飛ばしていたティアナだったが、次は手でポカポカとソラの頭を叩き始める。

そして、その位置は段々と下がっていき、最終的にはソラの胸板辺りを力なく叩くに終わっていた。こんなやり取りを彼とするのも、ひどく久しぶりな気がした。

「この……ほんとの、大馬鹿……ちょっとだけ……心配したんだから……」

ぽん……

そうして、ティアナは手を出すのをやめて、頭をソラの胸に預けた。

敵対して、裏切られたと思い、彼を忘れるつもりで叩きのめした。

しかし、それをもが彼の計算であり、本当の目的を知った時、ティアナは何故かひどく安堵してしまった。

ソラが本当の意味で自分たちを裏切ってなどいないと、そう思えたからだ。

「あぁ……えっと……その…ごめん……。ほんと、すまん……」

「ダメよ……許してあげない……。罰として、しばらくこうしてなさい……ついでに頭を撫でなさい……」

「……はいはい……合点承知です」

スオウと言う幻影は、もう見えないが、そこにはソラとしての彼が確かに居た。

狡猾で、冷酷な彼もソラの一部なのだろうが、優しいところや、こう言った一面もまた彼なのだろう。

ソラはただ黙ってティアナのしたい様にさせてやり、彼女の橙色の綺麗な髪をゆっくりと撫でてやった。

「あはは……2人の世界って感じだね……」

「またまた～。フェイトちゃんだって、ルーク君と一緒の時はあんなんだよ？」

「あ～、それは言えてますね。もう周りの声とか聞こえてないみたいでｗｗ」

「そ、そんな事ないもん！！　私とルークは、大人な関係で、そんないつまでも新婚夫婦な感じじゃないもん！！！」

ダウト！！！

読者の皆様から、そんな声が一斉に聞こえて来そうで怖い。フェイトさん、自覚が無いというのはこの世で最も怖い事なんですよ？

「……」

が、嬉々としているなのは達とは対照的に、シオンの表情は暗かった。何かを覚悟している、そんな表情で一同の姿を見つめていた。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「さて……とりあえず、ここから出ましょう？　あんた達の取り調べもあるし、救助活動だってまだ残ってるんだから」

「だね……うわぁ……ここも結構派手に壊れちゃってるね～……出口は……」

「あそこの階段の傍に在る出口しか原型留めてないね……。あそこから出るしかないみたい……」

少ししてから、ティアナは最後にソラの頬に黄金の左ビンタを叩き込み、この大型会議場からの脱出を始める。

しかし、なのはの言う通り、大型会議室はド派手に壊れており、まともに使えるドアがフェイトの見つけてモノしかなかった。

飛べば済む話なのだが、今の彼らにそんな魔力は欠片も残っていなかった。

「リクとネルは、私は運びます。レイスとリーアをお願いしてもいいですか？」

「うん、任せて」

「了解！」

シオンは、リクとネルを担ぎ、フェイトはレイスを、スバルがリーアを担いで移動することになった。
イノチル四人は、完全に気を失っており目を覚ましそうになかった。
リクも怪我があるものの、命に別状は無いようだ。

「痛っつう……ティア達の砲撃、マジで効いた……」

「あんたが舐めた真似してくるからでしょうが……自業自得よ」

「にゃはは……本気出さないと私たちが危なかったしね……」

ソラは全身ボロボロになりながらも、何とか歩けるようでティアナ達に続いて歩みを進める。
ボヤいてはみるものの、ティアナの言う通り自業自得な面が大きいので、なのはも苦笑いを浮かべるしかなかった。

レイスを担いだフェイト、リーアを担いだスバル、なのは、リクとネルを担いだシオンが順々に扉を潜って大型会議場を後にする。

「……はは……」

しかし、ソラはそのドアの前で立ち止まった。
見れば、ソラの右手から赤い色の水晶のようなものが浮き出しているではないか。

天才症候群の末期症状が、ここに来て一気に襲い掛かってきているらしい。

パキン……

ソラは、ティアナ達のそれを悟られまいと、手に現れた赤い水晶を握り潰し地面に捨てる。
そして、首に掛かっていた待機モードのオルクスを手に取った。

「（オルクス……最後の頼みだ……ティアの事、よろしく頼むよ……）」

『（……畏まりました……ご主人）』

にっこり笑いながら、オルクスに最後の命令を下すソラ。そう、これが最後の命令だ。
今まで苦楽を共に、視線を潜って来た相棒に対する最後の命令、願い事。

風のレガリア・オルクス。彼は最後まで、主人の願いを聞き届けた。

「ティア！」

「何よ、ソラ？　って、わ？！」

チャラ……

ティアナは、背後からのソラの呼びかけに答え、振り返る。すると、ソラが何かを投げ寄越してきたのを見ると、慌ててそれをキャッチした。

そして、手の平を見てみると、そこにはソラのデバイス、風のレガリア・オルクスがあった。

「あんた……これ……」

「持ってろ、お守りだ」

未だにドアの向こう側、大型会議場に居るソラから投げ渡された、オルクスを手に、訳の分からないという表情をしながら、ティアナはソラに視線をやる。

いきなり歩みを止めたティアナに気が付いたなのは達も、こちらを振り返って何事かと言うような表情だ。

「（ソラ……）」

その中にあって、シオンは悔しげに眼を閉じた。これからのソラの運命を知っている彼には、なぜソラがお守りにと、オルクスを投げ渡したのかが分かったのだ。

「何……やってるのよ？　早く行くわよ？　っていうか、お守りって……」

「……」

戸惑うティアナ、そしてなのは達に対して、ソラは今までにないような爽やかな表情でニコッと笑うと、ティアナ達の居る廊下と、自分の居る会議場とを繋ぐドアを……

「……バイバイ」

バタンッ……！！

そう小さく呟いて、金属的な音を立てながら、そのドアを閉めたのだった。

Ａｃｔ３２　コミュという概念と言語による限界（後書き）

本日のＥＤ　『Ｐｒｏｏｆ』
Ｓｏｎｇ　ｂｙ　ａｎｇｅｌａ　　ＴＶアニメ『蒼穹のファフナー』より

次回Ａｃｔ３３『終の空＞ツイノソラ＜』

Ａｃｔ３３　終の空&ｌｔ；ツイノソラ＆ｇｔ；（前書き）

さて、物語もクライマックスでございます。

今日からの三日連続更新ですべてに決着を付けましょう……

ていうか、新作の資料としてＶｉＶｉｄ全巻買ったわけなんですけど……アインハルトが可愛すぎて、何回も読み返してしまう……

武装形態も含めて、可愛いよ！　アインハルト！！

Ａｃｔ３３　終の空&ｌｔ；ツイノソラ＆ｇｔ；

扉が閉じられる。
その向こうには、何かをやり切ったことに対しての達成感を覚えてなのか、爽やかな笑顔を浮かべたソラの姿が在った。

バタン……

無機質な音が、廊下に響く。ティアナもなのはも、フェイトもスバルも何が起こっているのか、ソラがどうなってしまうのか全く分からないし予想も出来なかった。

「ちょっと……ソラ！！？　あんた、一体何のつもりよ！！？」

ティアナは、すぐにドアを開いてソラを引っ張り出そうとここと見るが、ドアは全くビクともしない。
どうやら、ドアの向こうでソラがドアに掛かるあらゆる力のベクトルを遮断しているらしい。レガリア無でも、ここまで能力を扱える彼はやはり最高のイノベイト・チルドレンなのだろう。

今やこのドアには、一切の物理攻撃も魔法攻撃も通用しない。ティアナ達のいる廊下と言う世界と、ソラのいる会議室と言う世界を分断する完全な境界線となっていた。

『ははは……いやぁ、なんて言うかその……最後の最後で……体に限界が来たみたいだ……』

「限界って……あんたそれ、どういう意味よ！？」

ドアの向こうから、ソラの声が聞こえる。
どうやら、ドアを背にして座り込んでいるようで、扉の向こうに居るティアナ達に話しているらしい。

「ソラは、天才症候群の末期症状を発症しています。元々、あと一月足らずの命でした。そんな状態で、空のレガリアの負荷を体に受ければ……」

「じゃ、じゃあ……ソラ君、自分の命が危ないって分かってて……？」

「……（コク）」

ティアナの問いに答えたのは、シオンだった。
そして、彼の口から出た事実に、なのはやフェイトは思わず絶句する。そんな状態の体を振り回して、あそこまでの戦闘を自らに課し、コミュの意思を受け止める役目をやり遂げた彼の壮絶な覚悟。
あまりに、悲しすぎる選択と生き方だと思ってしまった。

「自分の居なくなる姿は、見せたくないんでしょう……。ティアナさん、お願いです……最期は、あなたの傍で……逝かせてあげてください……」

「あ……う、嘘……だって……さっきまで……あんなに……」

閉じられたドアを見て、シオンが深々と頭を下げてティアナに頼み込んでくる。
彼らがこう言っているという事は、最早治療のしようが手の付けようがないという事なのだろう。
それを理解してしまい、ティアナの目元には大粒の涙があふれ出る。

『どうかしたのか、ティア？　……もしかして、泣いてるとかか？　執務官が泣き虫じゃこれからの管理局が思いやられるぞ？』

「っ！！」

しかし、その涙が溢れ出る寸前に、ソラの声を聞いたティアナは、根性でその涙を振り払い、気丈にもいつもの表情に戻って返事をした。

「ば、バカね！！　この私がそうそう泣くはず無いでしょう！！？　ったく、あんたはいつまでも馬鹿な事ばっかり言うんだから……」

言いながら、ティアナは向こうでソラがやっているのと同じように、ドアを背に地面に座り込み、彼を背中越しに感じることにした。このドア一枚の厚みが、ティアナとソラを分つ境界線。あまりに薄く見えるが、今の二人にとっては絶対的な境界線だった。

そして、そんな二人の事をなのは達は、ただ黙ってみていることしか出来なかった。

『ははは、そうか。なら安心した……ティアはそうでないとね』

「あんたに心配されるなんて、私も落ちたもんね……。まぁいいわ、それよりもまだあんたに聞きたいことがたくさん残ってるんだから、ちょっと話に付き合いなさいよ」

『あぁ、いいとも。時間は腐るほどあるからな。ティアからの質問

なら、俺なんでも答えるからさ』

嘘だった。

現実は、ソラにそこまでの時間を残してはくれなかった。持ってあと何分だろうか、時間的なモノは、今だけは考えたくなかった。

「……ねぇ、ソラ……今回の事、どこから計算通りだったの……？　もしかして……私と初めて出会った時から？」

ティアナとソラの話は、まずはそこから始まった。二人の出会い、豪華な且つ大きな屋敷内のある一室での、あの出会いだ。

『いいや……あの時は、そんなこと考えもしてなかった』

「じゃあ、どうして私に協力して管理局の仕事なんか手伝ってたのよ？」

『それは……ティアが、俺の約束の血の適合者だったから……』

「約束の……血？」

ここに来て、ティアナは初めて聞く単語を耳にする。気にはなっていたのだ、なぜソラが局員である自分に協力していたのか。その答えを聞こうと思ってした質問だったのだが、また新たな事実が分かりそうだった。

『イノチルは……ある特定の因子を持った人間の血を体内に取り込むことで、不老不死になる……俺の場合、その血を持ってたのがティアだったってわけ。適合者は個々人で違うんだ……。まぁ、俺の場合は天才症候群が末期にまで来てたから……ティアの血を取

り込んでも延命措置にしかならなかったけど……』

「そう……」

ソラの場合は、血を取り込んでも体が既にボロボロだったため、延命効果しか得る事が出来なかった。

ソラの体が健康ならば……この時ほどそう思う事は無かった。

『でも、その血のお陰で、少しの間だけど生きる事が出来るようになった……。だから、恩返しくらいはしたいと思って……ティアの仕事を手伝うことにした……』

「恩返し……か……。あんたって、結構律儀なのね？」

『ははは、まぁね……。でも、言いだすのは怖かったよ……俺が普通の人間とは違うって分かれば、これまでの人間と同じように、また迫害に合うんじゃないかってね……。でも、ティアはそんなことは全然なかった……』

「当たり前じゃない。私はね、懐が深い女なのよ？　ちょっと特別だからって図に乗るんじゃないの」

本当に、自分は意地っ張りだと、ティアナは自嘲的な笑みを浮かべて思う。こんな時くらい、弱い部分を見せればいいのかもしれないが、それではソラにとってのいつものティアナではなくなってしまう。

ソラが求めているのは、気高く、凛々しい、ちょっと気の強いティアナ・ランスターと言う女なのだから。

『実を言うとさ……俺、ティアの事、初めて会う時よりも前に知っ

てたんだ……』

「？　どういうこと？」

『イノチルは、約束の血の適合者の情報を、コミュから受け取る事が出来るんだ。その情報が、俺に来たのがティアと会う直前だったってこと。ビックリしたよ、頭に流れ込んできた女の顔と名前と、全く同じ子が現れたんだから……』

自分の事を会う前から知っていたとは、なかなかに珍しい体験ではある。しかし、ソラにとっての自分が、どんな形でも特別な存在だったという事に、ティアナは素直に嬉しいと感じてしまった。

「なに？　運命でも感じちゃったの？」

『ははは……さぁね……。でも、嬉しいとは……思ったかな……』

ソラは、ティアナの何でも無さそうな言い方に、感謝しながら会話を続ける。
その間にも、彼の体の結晶化は少しずつだが、確実に進んでいた。

「で？　血を貰って恩返ししてくれてたあんたが、どうして……今回みたいな計画を考えたの？　やっぱり、ヴァルターさんの願いだったから…？」

ティアナは少し気になっていた事を尋ねてみる。自らの命を懸けてでも、成し遂げたいと思ったコミュとの対話。
コミュの存在と、その異変、解決策を提示してくれたのは確かに彼の恩師である、ヴァルターだ。

そこだけを見れば、ソラは恩師の意思を継いで今回の計画を実行に移したことになる。

しかし、ティアナは彼がそれだけでこのような事をするとは思えなかったのだ。

そして、その予想が大筋当たっていた。

『いや、先生はあんまり関係ない……。言っただろ？　先生はもう居ないんだ……何をしたところで、先生が何か言ってくれるわけじゃない……』

「じゃあ……どうして……？」

『……俺の……我が儘……って言えばいいのか……。このままの世界に、納得できなかったからだ』

我が儘、納得できなかった。

まるで子供の言い訳のようにも聞こえるが、実際その表現が一番適していたのだろう。

ソラは自分の起こした行動を、そう形容した。

「納得できないって…？」

『……言ったよな、俺が復讐なんてバカみたいだって思えたのは、ティアのお陰だって』

「う、うん……」

『お前と一緒に仕事して、毎日何かに一生懸命取り組むことの楽し

さっていうか……充実感っていうかさ……そう言うのを、改めて知る事が出来た。何より、一生懸命なティアの姿見てたら……急に吹っ切れたっていうかさ……兎に角、なんだか救われた気持ちになった』

リク達に行動を、『バカみたい』と言ってせせら笑ったソラ。そして、そう思えたのはティアナのお陰だと、彼は言った。
その要因は、彼とティアとの半年間に及ぶ毎日のお陰だった。

『毎日毎日……ティアが必死になって働いてるとこ見て……カッコいいなぁって……そう思った。でも、世界はどうあっても腐ってる……ティアみたいに必死で努力している人間もいれば、ついさっき俺が肉団子にしたオッサンみたく、努力している人間の手柄を横取りして出世したり、バカみたいな報酬を貰ってる……』

彼の言っていることは、別に管理局内に限った事ではない。どこの世界でも、そんな世の中でも、人間がそこに居るならば必ず起こってくる現象だろう。

だが、ソラにもよく分からなかったのだが、ティアナがそういうバカみたいな流れの中に巻き込まれるのだけは、我慢ならなかった。

『それに輪をかけて……コミュの意識が、自壊を望んでいるとか、バカじゃないのかって思ったよ……。ティアは……頑張ってるのにさ……。俺にはそれが……我慢ならない……だから』

「だから……こんな無茶までして……？」

『今となっては、何を言っても言い訳にしかならないけど……』

全てがティアナの為と言うわけではない。それに、彼女を理由にこんなことをしようと思いたくはない。
それは、ティアナにとって重荷になる。彼女を出汁に、世界の在り方をどうにかしたとそう思わせたくなかった。

だからこそ、ソラは今回の出来事を自身の我が儘、納得できなかったからと原因付たのだ。

「ソラ……あんた……馬鹿よ……」

『あぁ、俺も……そう思う』

再び涙が溢れそうになるが、ティアナはそれを必死で堪え、気丈に振る舞う。負けたくなかった、泣いてしまいそうな自分自身の弱い心に。

パキ……パキ……

『うぅ……』

「ソラ！？」

ソラの体の結晶化は、着々と進行していた。体の至るとことから、赤い色の水晶が浮きだし、彼の体を蝕む。最早、自分で歩くことも出来ない。
ティアナが、少し慌てた様子でドアの向こうの彼に声を掛ける。

『はは、大丈夫…大丈夫……。あぁ、そうだ……ティア、お願いがあるんだ……』

「な、なに？　何か欲しいものでもあるの？」

ソラの頼みと言う事ならば、出来る限りの事はしたい。いくら金が掛かろうが、どれくらいの年月が掛かろうが、自分にどんな不利益が降りかかろうが、そんなことはどうでもいい。

ただ、ティアナはソラに消えて欲しくなかっただけだ。

『リク達には……俺はどこかに逃げたってことにしておいてくれ……。俺が生きてるって思いこんでれば……あいつらは、今度は俺を復讐の相手として……生きるための糧にする……』

「それって……あんたを悪者にして……リク達に新しい、生存目標を与えるってこと？　でも……あんたはそれでいいの？！　このまま物別れになっちゃうのよ？」

『先生が死んだときから……元々そうするつもりだった……。あいつらは弱いからな……俺が何とかしないと、話にならない……』

ソラの願いは、リク達の事だった。

彼らの今後の処遇はまだ未定だが、恐らく逮捕などは免れないだろう。スカリエッティ同様、軌道留置所での拘留と言うのが現実的かもしれない。

しかし、ソラの心配は、リク達の生きる意志に関してだった。

局への復讐、ネスターへの復讐。ネスターは既にソラによって殺害されてしまったため、今のリク達には復讐相手が居ない。

今まで彼らは、復讐だけを生きる糧にして今日この日までを行き繋いできた。

しかし、その目標がなくなれば、彼らが何をしでかすかは分からない。

だからこそ、ソラは自分をヒールにして、新たな彼らの復讐相手に据えるという計画を、ヴァルターが死亡した時から考えていたようだ。

どうせ死ぬ身ならば、その死すらも利用する。それがたとえ自分の死でも。

ソラは、目的の為ならば手段を問わないタイプなのだろう。

だが、これではあまりにも……

「そんなの……そんなの、あんまり過ぎるわよ……。これじゃあ、あんたばっかりが貧乏くじじゃない……」

『でも、あいつらは……友達なんだよ……。あんな事しておいた手前、大きな声で言えた身分じゃないのは分かってるけど……これが……せめてもの……』

リク達をも利用した計画。その過程で、彼は完全な悪を演じ、リク達の心に自分に向けた復讐心を生み出した。

歪んでいたとしても、それが生きるための糧になるのなら何でもいい。最早、リク達がまっとうな道に戻る事は不可能に近いのだ。

世界が、彼らにあまりにも冷たすぎたから。

「だったら……あんたの人生の終わりは、こんなのでいいっていう

の……！？　あんたの価値は……人生の価値は、そんな使われ方でいいの？！」

ティアナは、いつの間にか背中越しに話すのをやめて、ドアに縋りつくような形でソラと話していた。
何としてでも、彼を繋ぎ止めておきたい。そんな一心で。

『俺の人生の……世界の価値は、十分過ぎるもんだったよ……。ティアとのあの半年間が……俺の世界の……価値だ……。それでもう……十分なくらいに、俺は満足だよ……』

「っ！ソラ……あんた……ほんとにバカよ……。もう、バカすぎて……手に負えないじゃないのよ……」

ここまで言われてしまうと、ティアナもＮＯとは言えない。溢れ出る涙を必死に堪え、心の中で、彼の願いをしっかりと聞き届ける。
恐らく、ソラもコミュ経由でその気持ちを受け取っている事だろう。

『あり……がとう、ティア……。やっぱり……君は、俺の……思ってた通りの……女の子だった……』

「う……あぅ……うぅ……」

ソラの声が途切れ途切れになっていく。その意味を、ティアナは時間が迫っているのだと理解していく。
こうなると、幾ら堪えても、気丈に振る舞おうとしても、涙が勝手に溢れ出てきてしまう。

そんな彼女に、ソラは話し掛ける。

『ティア……俺、夢を……見たんだ……』

「うぅ……ぐす……ゆ、夢……？」

何の脈絡もなく始まった、ソラの夢の話。

いや、今のソラに最早会話における、脈絡の概念など気にしている余裕はないだろう。

ただ、ティアナに聞かせたい話を、ただ話したいだけなのだ。

『何かさ、有得ないような夢でさ……。俺も、ティアも……なのはさんやルークさん、フェイトさんが普通に……学校通っててさ……。はぁ、はぁ……フェイトさんと、ルークさんが……仲の良すぎる……姉弟……で……。なのはさんにも、ちゃんとした相手が居てさ……』

それは、夢の話。もしもの話をしたら出てきた、そんな可能性の話だ。

しかし、それを話すソラの声には、とても楽しそうな感情が籠っているのが分かった。

『俺は……中学生の……生徒会長やってて……たまにドンパチもやってて……。体育祭とか……旅行とか……普通に行っててさ……なんて言うか……すごく……暖かい夢だったよ……』

「旅行とかなら、これからでも行けるわよ！！　ううん、私が連れてってあげるから……！！　あんたの行きたいとこ、全部付き合うから……だから……だからぁ……お願いだから……居なくならないでよぉ……」

何故、ソラが夢の話などを始めたのか、ティアナにも分からない。

だが、そんな小さな願いくらい、いくらでも叶えてやりたかった。
そんな普通の、ありきたりな願いならば、どれだけでも付き合ってやろうと、本気で思った。

そう叫びながら、ドアに縋りつく彼女の姿は、ただのか弱い女の子だった。

「私……私は……あんたが、あんたの事が好きなのよ！！　だから……この先もずっと好きでいさせてよ……！　私の傍で……好きでいさせてよ……」

ソラは、ティアナと過ごした半年間こそが、自分の世界の価値だといった。もう満足だと、十分だと言った。

しかし、それが何だ。

ティアナは、そんな彼の悲しい価値観など理解したくもなかった。
ただ……ただ単純に、彼に気持ちを伝えたかった。居なくならないで欲しかった。

この先も、ずっと……好きでいさせて欲しかった。

『……俺は……ティアの事が……好きなのかどうか……もう…分からない……』

「っ！？」

一瞬、自分の存在が、ソラにとって自分の考えているような存在ではないと言われたのかと思った。
エステルの事もある。彼女だって、ソラの事を好き……いや、愛し

ているはずだったのだ。

『好きって言う気持ちが……もう分からない……。そう言う感情が……無くなったみたいに……ティアに…言いたいことが……あった筈なのに……』

パキ……パキキ……ピキ……

しかし、ティアナの予想は外れていた。

ソラのティアナへの気持ち云々ではない、天才症候群が起こす肉体の結晶化が、精神にまで影響を及ぼしているからだ。

紅い水晶が……ソラの体を覆っていく。

『何も感じない……嬉しいことが……嬉しいことを言われたはずなのに……心が……消えていく……。これが……居なくなるって……事なのか……昔……助けられなかった……あの子供達みたいに……』

「いや!!　ダメ!!　ソラ、気をしっかり持ちなさい!!!　あんたは消えない!!　まだここに居るでしょ!!!?」

天才症候群を発症した、そして、ヴァルターの治療法が確立する前に死んでしまった、子供達。

彼らも、死の間際には体中が結晶化した後、心が死に絶え、体が砕け散って世界から居なくなった。

もうすぐ、自分もそうなるのかと……ソラは空虚になった心でそう考えていた。

『あれ……オルクス……どこやったんだっけ……?』

「私が持ってる！！　あんたが、お守りにって……さっき！！　渡して……くれた！！」

『あぁ……そうだっけ……？　あれ……？　誰に……渡したんだっけ……？　とても……とっても……大事な人に……渡した気がするんだけど……。ねぇ……君は……何か知らない……？』

「私が受け取ったわ！！　ティアナ・ランスターが、ティアが受け取ったから！！　ソラ……お願い……！！　しっかりして……！」

そして、侵食は進み、ついには記憶や認識に至る間隔までをソラから奪い取っていく。さっきまで話していたティアナの事、オルクスを渡したこと……その全てが、彼から消えていく。

そして……世界から……ソラが居なくなる……

『ティア……良い……名前……だ……ね……きっと……可愛い……女……の子……』

世界と言う全から、ソラと言う一が消えていく。その流れに逆らえるものは無く、現実と時間の矢は、一方だけしか指す事が出来ない。

だが、思う。それでもと。

消えて欲しくないと……行かないでほしいと。

「そうよ、ティア……！！　あんたの……あんたの事が好きな……女の子よ……！　ねぇ、もうちょっと話しましょ？　私の好

きな物や嫌いなモノ……嬉しかったこととか、悲しかったこととか……！　まだまだ、ソラに聞いてほしいことが……あんたと話したいことが一杯……一杯……」

『……そうだ……ね……そりゃいいや……時間は……一杯ある……から……ティア……俺と……もっと……もっと……』

パキ……パキ……

『……話を……しよう……』

カシャァン……！

「！？」

瞬間、ドアの向こうでガラスのような何かが、砕け散る音がした。
そして、同時に、先ほどまでドアを支配していたベクトル操作の力が一瞬で消えてなくなる。
先程まで、ティアナとソラを遮っていた絶対的な境界線は、既に存在しない。

そこに在るのは、ただのドアだ。

「……ソラ……」

呟く。

しかし、答えは返ってこない。聞こえていないだけかもしれない、そう思う。

ソラがそこに居るのか、居ないのか……。今やただのドアになった、金属製の板を押して中を観れば、答えはハッキリとする。

「……っ！！」

しかし、出来ない。

この扉を開けてしまえば、その先の会議室の中の世界が確定してしまうから。

ソラが居ない世界か、居る世界。

そのどちらかが、扉を開けた瞬間に確定される。ティアナを観測者にした、シュレディンガーの猫箱の完成だ。

怖かったのだ、世界を確定させることが。

少なくとも、この扉を開けなければ、ソラのいる世界といない世界は、重なり合った状態で存在していることになり、前進も後退もしない。

解釈を変えてしまえば、ソラが居る世界を観測したティアナと、居ない世界を観測したティアナの二人が存在していると、多世界解釈を無理やり持ってくることも出来る。

だが、そんなものは結局は可能性の話でしかない。そんな可能性に、

ティアナは縋っていた。

「ティアナさん……」

「ソラ……返事……しなさいよ……ソラ……！　もう、変態な事しても……怒らないから……！　ナンパしても……叩かないから！！　だから……返事して……私の名前……呼んでよ……」

ドアに向かって、涙を流しながら訴え続けるティアナに、シオンが近づく。

そして、同じようにドアを見つめながら、彼女に世界を確定させる。

コミュに可能性を示した以上、彼女たちには責任がある。明日を望む心を持つこと、人の可能性を信じることが。

だからこそ、ティアナは観なければならない。箱の中の猫を。

「ティアナさん……もう、終わりました……」

「……し、おん……」

「……そこにはもう……誰も居ません……」

キィ……

言いながら、シオンは扉を開く。金属同士が擦れる音と共に、ドアが開かれ、世界が確定された。

「……あ……あぁ……ソ……ラァ……！！」

そこには、誰も居ない。

ついさっきまで、そこに居て言葉を発していた、青年の姿はそこにはない。

在るのは、風に舞って消えていく赤い結晶。そして、先ほどの戦闘で地下であるはずの大型会議場の天井に大穴が開き、そこから見える夕焼け。

大空が、オレンジ色に染まって、一日の、その世界の終わりを告げる。

なのは、フェイト、スバルもまた、涙を流していた。

ソラが消えたのが悲しいのか、目の前のティアナの姿を見て悲しいのかは分からなかったが……ただ、涙が止まらなかった。

「ソラ……ソラァ！！！！　うぅ……ぐす……うあぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

橙色の綺麗な髪を、夕焼けの光に照らされながら、ティアナは大事なモノを失ったのだと理解し……

ただ、涙を流しながら、悲しみを世界に吐き出すことしか出来なかった。

ここに、扉越しの、たった数分間の純愛が幕を閉じた。

Ａｃｔ３３　終の空&ｌｔ；ツイノソラ＆ｇｔ；（後書き）

本日の挿入歌＆ＥＤ
『暁の車』　Ｓｏｎｇ　ｂｙ　ＦｉｃｔｉｏｎＪｕｎｃｔｉｏｎ
ＹＵＵＫＡ

アニメ『機動戦士ガンダムＳＥＥＤ』挿入歌

次回Ａｃｔ．Ｆｉｎａｌ　『ずっと一緒』

Ａｃｔ．Ｆｉｎａｌ　ずっと一緒（前書き）

残すところエピローグだけとなり、この作品のゴールが最早目前にまできやがりましたね……

今回のお話書いてて、なんだかＣＬＡＮＮＡＤ思い出しましたｗ
あ、ちなみに一番好きなキャラは杏です。でも、フェイトさんはもっと好きです。

さてさて、今日は週に一度の大学（ゼミの授業）です、友人とお昼食べた後は、メロンブックス行って、薄い本を……ゲフンゲフン！！

Ａｃｔ．Ｆｉｎａｌ　ずっと一緒

イノベイト・チルドレン、が引き起こした、いや、管理局の闇が作り出した未曾有の大事件から、二週間が過ぎた。

世界は、以前と変わりようもなく時間の矢が示す方向に向かってまっすぐ進んでいる。

破壊された管理局の施設などの復旧には、まだかなり掛かると思われ、復旧に当たる役員や作業員はこれからが本当に地獄になるのだろう。

しかし、悪い事ばかりでもない。管理局の一時的な半壊を機に、局内の不正や上層部の暗部が次々と露呈し始めたのだ。
その事態を受け、局内部で大規模な組織改革が行われるらしい。
クロノ達を筆頭に、若く力のある者が重用されるとも言われ、局内部ではかなりごたごたとした変化が起こっている。

上層部などの悪事の露呈に関してだが、これにはエステルとスカリエッティが噛んでいたらしい。
ソラやリクの混乱に乗じ、彼らは局内部のデータベースに侵入。普段ならセキュリティの厳しいブロックを簡単にこじ開け、そこからさまざまな情報を引きだし、それを全局員のデバイスやデスクのコンソールなどにすべてぶちまけたらしい。
これも、ソラの計画の一つであったらしく、上層部の一斉捜査に大きな影響を与えたとされている。

さて、そのスカリエッティに関してだが、エステルの話によれば事

件が終わってすぐに姿を消してしまったとのことだ。
局の腐敗部分を大公開するという愉快な仕事を楽しそうにやっていたらしいのだが、それが終わってすぐにどこかに行ってしまい、それっきりだという。
ヴァルターの、コミュに関する研究資料などを穴が開くほどの勢いで読んでいたので、今頃その研究中なのかもしれない。
少なくとも、彼が再び管理局に牙を剥く可能性は低いだろうとの事だった。彼からしてみれば、局と遊ぶよりも新たな研究対象に没頭することの方が重要なのだろう。

そして、今回の被害の最たる原因、リク、レイス、リーア、ネル達の処遇に関しては、以前のスカリエッティ同様、軌道留置所での懲役という処罰が下された。
尚、ソラの最後の願いどおり、ティアナはソラの事をリク達には、旗色が悪くなり逃走した、と説明してやった。

リク達の目には、強い怒りが灯っており、自身で命を絶つことは心配しなくてもいいだろう。
いつ、彼らが軌道留置所から出てこれるかは分かったものではないが、もしも自由になったのなら、彼らはソラを探しに行くのだろう。
もうすでに、居なくなった存在に復讐するという、永遠に果たせない復讐のために。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「では、私たちはこれで……」

「すみません、いろいろお世話になってしまって」

「……ありがと」

ミッドチルダ内に在る、次元港。未だに事件の傷跡からなのか人の姿はまばらな状態ではあるが、多くの世界との行き来ためのプラットフォームになっている施設だ。

その次元港の広大なロビーに、イノベイト・チルドレンであるシオン、エステル、そしてフウミが少し大きめの荷物を各々の手に持ち、ミッドチルダから他の世界に旅立とうとしている。

「良いのよ。それに、あんた達の事は司法取引ってことでの処置なんだしね。私が責任持つのは当然でしょ？」

三人を見送りに来たうちの一人、ティアナ・ランスターは執務官の黒い制服に身を包みながら、礼を言ってきたシオン達にそう返す。

シオン達の処遇に関しては、司法取引と言う形で局上層部などの違法実験の証言などを得る代わりに、特に御咎め無しという事になっている。

エステルとフウミは直接的には今回の件には関わっておらず、ソラもシオンも先日の事件ではネスター以外の人間は一人として手に掛けてはいない。

加えて、ネスターを殺害したソラは、最早裁き様がないのでどうしようもないという事なのだろう。

過去の魔導師襲撃事件に関しての件もあるので、シオンに関しては定期的に管理局に足を運んでもらう事にはなるが、それでもかなり温情措置と言える。

まぁ、局の身から出た錆が、今回のような形でしっぺ返しをしてきたようなものだ。

「ごめんね……本当なら、無罪放免ってことに出来ればいいんだけど、シオンは昔の事があるから」

「いえ、それはそれ、これはこれです。私は自分のやったことにケジメはつけるつもりでしたので。フェイトさんがお気に病む必要はありません。それ以上に、今回のような寛大な処置をして下さったんです、幾らお礼を言っても感謝しきれません」

ティアナと同じ、黒い執務官の制服姿のフェイトが少し申し訳なさそうに言うと、シオンは自身に非があると、逆に彼女に感謝した。

「で、これから三人はどうされるんですか？」

「はい、なのはさんの故郷である地球と言う世界の、落ち着いたところで居を構えようかと。フウミの事もありますから、学校の事も考えないといけませんね」

「にゃはは……海鳴市の近くだから、何かあったら翠屋においでよ。お母さんたちには言っておくからね」

「あはは、はい。是非お邪魔させて頂きたいと思います」

スバルの質問にエステルが答え、なのはとシオンが笑い合う。

今生の別れでもないし、長期間の別れでもない。三人が地球に住むという事になるのなら、これからもあう事を多々あるだろう。

「あれ？　そう言えばルークは？」

「あぁ、あそこに……」

と、一緒に来ていたルークの姿が見えないと、フェイトがキョロキョロしながら探していると、なのはが彼が居る先を指さした。

そこには……

「いだだだだだだだ！！！！　シエル、お願いだから髪の毛引っ張らないで！！　俺この年から禿げたくないぃぃぃぃ！！！！」

「きゃはははははは♪」

「にゃあぁぁぁぁぁぁ！！！　おねが、やめ……あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！？？」

待合室のソファにて、息子であるシエルに髪の毛を引っ張られて背中に馬乗りにされているルークパパの姿がそこにはあった。

「はぁ……何をやってんのよあいつは……」

「し、シエル！？　パパをイジメちゃだめだよ！！」

呆れるティアナ、旦那の非常事態（髪の毛の生命的な意味あいで）と息子の遊びを止めさせる為に、慌てて駆け寄っていくフェイト。

何と言うか、いつまでたってもドタバタな家族である。

「ふぅ……危なかった……クールで鰤背なナイスガイが、全面荒れ放題の荒野頭のオッサンになるところだった……」

「あんたのどこにクールで鰡背なナイスガイな要素があるのよ？」

「あはは、だよね、ルークってただの変態だし♪」

「にゃはは……否定してあげられないのが辛い……かな…？」

「あれ、なんか前が霞んで見えないや……」

シエルの猛攻から何とか脱出したルークだったが、ティアナ・スバル・なのはの隙を生じさせない三段構えの口撃によって、若干涙目になっていた。ざまぁｗｗ

「あぅ～……おかーさん……」

「ん？　どうしたのシエル……？　ティアナがどうかしたの？」

と、ルークを巡ってのバカなやり取りもそこそこに、シエルがティアナの方に手を出しながら、何かを伝えたがっている。

その指の先を見てみると、ティアナの首に掛かって、胸辺りで光っているアクセサリーが目に付いた。

ソラが、ティアナにお守りにと渡した、風のレガリア・オルクスだ。

「うぅ～」

「だ～め、あれはティアナの大事なモノなの」

どうやら、ティアナの胸に光るオルクスの事が気になったようで、

シエルは手を伸ばしていたらしい。
オルクスの事が話題に出ると、必然的にソラの事を全員が思い出し、少し空気が悲しいものになってしまう。

「……あ、あのさ……エステル……オルクスなんだけど……」

あなたが持っていて、そう言おうと思った。
ソラの計画通りだったとしても、彼の事を何も知らずに敵対し、何も出来ぬまま逝かせてしまった。
それに対し、エステルはただ一途にソラを想い続けている。

彼が居なくなったと伝えたときも、『そうですか……』と、そう短く呟き涙を見せることなく強く振る舞った。恐らく、一人の時には思い切り泣いたのだろう、今でも心の中では泣き続けているのかもしれない。

そんな強い女性、エステルこそがオルクスをお守りとして持つに相応しいのではないか。ソラが本当に想うべきなのは、エステルなのではないのか？

最近、ティアナはそんな事ばかりを考えながらオルクスを首から掛けていたのだ。

そして、一時の別れではあるが、エステルにオルクスを渡すべきだと思い、彼女に申し出ようとしたのだが、エステルからの返事は意外なモノだった。

「いえ、それはティアナさんが持っていてあげてください。ソラは、

ティアナさんだからこそ、オルクスをお守りとして渡したんだと思うんです……。きっと、誰よりも大事な人だったから……」

「で、でも……あんただって……」

「……はい、ソラの事は好きでした。ううん、愛していました。でも、ソラはティアナさんを選んだんです。だから私は、彼を想い続けるだけでいいんです。彼と過ごしたあの時間があれば……私はそれだけで満足ですから……」

ティアナが差し出したオルクスを、首を横に振って受け取ろうとしないエステル。

そして、エステルはフウミの頭を撫でながら、にっこりと笑いながらティアナにオルクスを受け取らない理由を話した。

ソレが、ソラの出した答えなら、自分は彼を想うだけでいいと。これから先もずっとだ。

彼女は、ソラの結論に納得していたのだ。そして、そこに自分が介在する権利もなければ、そんな事をしても何の意味もないことを知っていた。

「ソラって、あぁ見えてものすごくプライドが高いんです。そんな彼が、ティアナさんのためにあなたの下で働いていた……」

「でもそれは……私があいつに血を上げて、それを恩としてあいつが……」

「ソラは、恩だけじゃ動いたりしません。きっと照れ臭かったんだと思います。あなたに真正面から好きと言うのが。多分、生まれて

初めてだったんじゃないかな……だからこそ、そんなあなただからこそ、ソラはオルクスを渡した」

「……私は、そんなに持ち上げられるような女じゃない……ソラが居なくなったときだって……自分でも信じられないくらいに泣いた……。今でも、気を抜くと泣きそうになるくらい……」

ティアナも、ソラが消えたあの日、しばらくは泣き崩れていた。なのは達も、彼女の気持ちを察してか、ただ黙ってそこに居てくれた。コミュに明日を望んでいるという宣言をした以上、その自分がソラと言う過去を見つめ続けていてはいけないと、自身を無理矢理にでも奮い立たせなければ、今頃、まだティアナは泣き続けていた事だろう。

だがしかし、やはり心の中にはポッカリと穴が開いているような気分から抜け出すことはいまだに出来ていない。

「それは、私も同じです。あはは……私達、揃って泣き虫さんですね……」

「エステル……そうかもね……。ま、泣かせる男が居るからなんだけどね」

エステルは自分もティアナと同じだという。決して強くなどないと。2人は、冗談を言って笑い合い、再び視線を交わし、言葉を交わす。恐らく、ティアナ同様、エステルも心の中にある虚無感を感じているのだろう。

彼女たちのような思考を読む能力は無くとも、それくらいは分かる。

「ソラがオルクスをティアナさんに渡したのは、きっとお守りのほかにも理由があると思うんです。だから、ソラの意思通り、ティアナさんが持っててあげてください」

「……うん、分かった」

ティアナは差し出していたオルクスを再び自分の首から下げる。キラリと光るコア部分が、太陽の光で綺麗に輝いている。

この選択が、正解なのかどうか今は分からない。だが、ソラがティアナに渡したという事には何らかの意味があるのだろうと、二人は信じる事が出来た。

「それじゃあ、今度こそ……」

「えぇ、またそっちに顔出すし、うちにも来てくれていいから。元気で」

ティアナとエステルはそう言い合うと、どちらからでもなく握手をし、頷き合う。同じ思いを持った相手同士、通ずるところがあるという事だ。

その光景を、なのは達は笑顔で見つめていた。

その時だった。

「うぅ……？　おとーさん」

「ん？　どうかしたのか、シエル？」

再び、シエルが何かに興味を持ったらしく、今度はルークの名前を呼びながら、何かを指さしている。
しかし、今度はティアナの方ではなく、一行のある待っている場所から少し離れたところに向かって、シエルの小さな手は伸びていた。

「？」

何事かと、ティアナはシエルの指差す方向に視線をやる。

そして、彼女は息を呑んだ。

「……」

いつからそこに居たのだろうか。そこには、子供がいた。
年齢は、5歳から6歳と言ったところだろうか。どこか虚ろな瞳で、こちらを見つめゆっくりと歩みを進めてくる。

「え…？」

エステルも、その子供の存在に気が付いたのか、思わず口元に手をやる。信じられないという表情だ。
そして、彼女を皮切りに、その場にいたシオンを除く全員が驚愕した。

その少年の容姿が、あまりも……

「……ソラ……？」

そう、顔立ちがとても他人とは思えないくらいに、ソラに酷似していた。大きく違うところを上げれば、髪と瞳の色の違い程だ。
その少年の髪は、ティアナと同じ橙色で瞳は青色。

まるで、ソラとティアナの子供のような、そう見間違えても仕方のないレベルで酷似している子供が、そこには居たのだ。

「……」

「あ、あんたは……？」

空虚な目で、ティアナだけを見つめるソラ似の子供。フェイト達の方には目もくれずに、ジッとティアナの方だけを見つめている。
そして、ゆっくりと、まだどこか覚束ないような言葉ではあるが口を開いた。

『我々は……、ティアナ・ランスター、お前に我々の新たな視点を、変数Xを預ける』

「その話し方……もしかして、コミュ？！」

その子供から出た言葉は、聞き間違うことも無い。人の意識の総体、コミュのものだった。ひどく事務的なその話し方は、忘れようにも忘れられない。
ティアナの目の前にいるその子供の体を通じて、空のレガリアのアシスト無しで話が出来ているところから見て、この子供が特殊な存在であることだけはよく分かった。

「やっと来ましたか……」

「どういう事よシオン？　あんた、この子の事何か知ってるの？」

その子供を見ながら、ホッとしたように言うシオンに、ティアナが問う。どうやら、シオンはこの子供、コミュが変数Xと呼ぶ存在が来ることを知っていたらしい。

「えぇ、その子供、変数Xの誕生こそが、私とソラの最後の目標でしたから。……まぁ、ソラにソックリの子供だとは思ってもみませんでしたが……」

「変数X……」

ソラとシオンの最後の目的。変数Xの誕生。

それは今ここで成立したことになる。しかし、この子供に一体どんなことをさせるつもりなのかは皆目見当もつかない。

ティアナは、子供の方に向き直り、コミュの言葉を待つ。

『我々の編成意識の中で、お前たちの起こした行動と言葉は、今も響き続けている。しかし、波紋は1つだけではいずれは消えてしまう。他の波紋と衝突させ、新たな波紋を生み出す必要がある。その波紋を作り出すために、我々は新たな視点を、変数Xをお前に渡す』

池に石を投げ入れれば、当然波紋が広がる。しかし、それはすぐに消えてしまう。

複数の波紋同士が、絶えずぶつかり合い新たな波紋を作り出す為には、池に投げ入れる石の量を増やす必要がある。

つまり、変数Xとは、その為の視点だというのだろうか。

「私達も、あんた達の視点の一つなんじゃないの？　だったら、新しく視点を作る必要があるの？　一つ視点が増えたところで、あんた達の中に大きな波紋が発生するとは思えない」

『変数Ｘは、特別な視点だ。この者が観た世界、社会、人、概念は、普通の視点と比べて、我々の編成意識に優先的にフィードバックされる。つまりは、波紋を生み出す事が出来る』

ティアナの問いに、コミュは答える。
要するに、この子供が観た情報的概念、世界、人間の在り方などは、コミュ内部に大きく影響を与えるという事だ。
優先的なフィードバックとは、そう言う事だろう。

『我々の意識を変えるために、この者にお前たちの世界を観せてやることだ。でなければ、この世界に変化は訪れない』

「最後の最後まで……結局は人次第ってことなのね……」

『当然だ。我々は、お前たちなのだから』

ティアナは、ふぅ、と息を付き、変数Ｘの顔を見る。
本当に、おかしくなるくらいにソックリだ。二週間前に居なくなった、生涯でただ一人好きになった男に。

「なんで……その子はソラと似てるのかしら？　それに、髪と瞳の色は……」

『この変数Ｘを生み出す際に使用した生体データは、ソラのモノだからだ。そして、ソラはお前の血液を取り込んでいた。結果、遺伝子情報が融合を果たし、この形になっただけの事』

「それってつまり……遺伝的に見たら、その子はソラとティアナの……子供ってこと……？」

『お前たちの好きに解釈するがいい』

ティアナとフェイトの質問に、コミュはそれぞれ回答を出す。

その結果から得られた事実は、どこか切なく、同時に暖かなものだった。変数Xの姿がソラに酷似している事、ティアナと同じ色の髪と瞳をしている事。

両者の遺伝子情報が結合して生まれたのが、この子供と言うわけだ。

二人の子供と認識することに何の問題もないだろう。

少なくとも、ティアナの心情を除いては。

『我々の役目はここまでだ。後は、お前達次第だ』

ガクン……

そう言って、コミュは変数Xの体から消えた。リンクを切断したのだろう。

一瞬糸の切れたようになった変数Xの体だが、すぐに彼自身の意識を取り戻したようで、生気の戻った瞳で周りをキョロキョロと見渡している。

「んん……？　あ！」」

そして、目の前のティアナの姿を見つけると、パッと花が咲いたような笑顔になる。

「初めまして！！　お姉ちゃんがティアナ？」

「え、えぇ……」

人懐っこい笑顔を振りまきながら、変数Xはティアナに駆け寄る。
そして、彼女の胸元に光るオルクスを見つけると、その笑顔をより一層明るいものにした。

「やっぱりそうだ！　その首飾りを持ってて、ティアナって綺麗なお姉ちゃんが、俺のお母さんなんだよ？」

「……えと……それは誰かがそう言ってたの？　覚えてたらでいいんだけど、誰の事か分かるかな？」

ティアナは、フェイトがいつも小さな子供にやっているように、出来るだけ優しく問う。
彼女の下で執務官補佐をしていた経験上、こう言ったスキルも少しだが心得ていた。

「え～と……誰かは分かんない……。でも、黒い髪したお兄ちゃんだったよ？」

「っ！」

黒い髪のお兄ちゃん。この子との関係性から見て、思い当たるのは一人しかいない。
その事実に、その場にいた全員が息を呑む。

「ど、どこでその黒い髪のお兄ちゃんに会ったの？」

「うんと……分かんない、多分夢の中……」

夢の中、つまりは現実世界ではないという事だ。一瞬、ソラがどこかに生きているのではと思ったティアナだったが、やはり世界はそうそう優しくはない。

死んだ人間は、決して生き返りはしない。ソラ自身が口にしていた事だ。

「どうかしたの……お母さん……？」

「……う、ううん、何でもないわ……ちょっと、ね……。うん……そっか、お母さんか……」

またしても、危うく泣きそうになってしまった。どうしたって、時間は元には戻らないし、死と生は逆転しない。

これは世界のルールだからだ。

だからこそ、その限られた環境の中で人は生きていかなければならない。不条理や、不幸に見舞われたとしても、そこで生きるしかないのだ。

「ねぇ、名前、教えてくれる？　あなたの、名前」

だからこそ、ティアナは生きる。窮屈で、融通の利かない、この不条理な世界で。

自分らしく、ただ我武者羅なまでに生きる。

その姿を、見ていてくれる存在が居るのなら……

「うん！　俺の名前は、『クゥ』！　６歳だよ！」

「クゥ……うん、そっか……良い名前ね……」

その名前を聞いた瞬間、自然と涙が溢れてきた。止めようとは思わなかった。

『ソラ』→空←『クゥ』

先程まで心に抱えていた虚無と言う穴の中に、新しい何かが流れ込んでくる気がした。それは、どこか暖かく、愛しい気持ちにさせてくれる。

これから、世界の可能性と人を信じるという事を見せていくために、心は強く持とうと昨日までは、ついさっきまでは考えていた。

しかし、クゥに見せるべきなのは人間の綺麗な部分ばかりではいけない。いや、もう視点などの事は考える必要はない。

普通に、我が子を育てるのに、そんな打算的な思考は必要なのだろうか？

否、答えはＮＯだ。

「ねぇ……クゥ……？　私……私が……あなたのお母さんでも……良いのかな……？　こんな泣き虫な……、弱虫なお母さんだけど……それでも、傍に居させてくれる……？」

クゥに必要なのは、世界の視点という役割ではない。与えられるべきは、そんな役割ではない。

そう、クゥが与えられるべきなのは、ティアナの、母の愛情だけだ。
世界だろうが、なんだろうが、これだけは譲るつもりはない。誰に何と言われても、曲げるつもりはない。

そして、クゥを抱きしめながら問うティアナに、クゥは太陽のような笑顔で答える。

「うん！　お母さんが良い！！　泣き虫なお母さんでも、お母さんじゃないとやだ！　それに、お母さんを泣かせるやつは、俺が皆やっつけてあげるから」

「うん……！！　うん……！！　そっか……ありがとう、クゥ……！」

クゥを、我が子を抱き締め、ティアナは涙を流した。
悲しい涙ではなく、嬉しくて仕方が無かった。この涙を止める術など、この世界のどこにもありはしない。
それを止めようとする者も、居るはずもない。

「これから、ずっと一緒だよ、お母さん」

奇跡はない。

しかし、幸福は、確かにそこに在った。

Ａｃｔ．Ｆｉｎａｌ　ずっと一緒（後書き）

本日の挿入歌＆ＥＤ
『一番の宝物』　Ｓｏｎｇ　ｂｙ　ＬＩＳＡ

次回　エピローグ

エピローグ（前書き）

１つのお話が終わる時って、なんだか少し寂しい気持ちになっちまいます……何と言うか、エロゲーをフルコンプした時のあの虚無感が……

はいどうも！　買おうと思ってたエロゲーがことごとく延期になり、今月の購入予定が一本に絞れたＦ２０Ｃでございます。

いやはや、残念な気もしますがホッともしてます。出費的な意味あいで。

まぁ、一つのゲームに集中できるので、私としては万々歳な感じではありますが……

さて、どうでもいいエロゲ談義はここまでです。

このエピローグを以て、魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　Ｂｌｏｏｄ　ｏｆ　Ｐｒｏｍｉｓｅ　は完結でございます。

次回作の、覇王っ子、アインハルトがヒロインの新作にして、Ｆ２０Ｃのなのは小説の集大成になるかと思われる、魔法少女リリカルなのはＶｉＶｉｄ　とある訓練生と覇王っ子（仮）　も、近日連載開始なので、そちらの方もどうぞよろしくお願いいたします。

ではでは、最後のお話をお楽しみくださいませ。

エピローグ

春風が吹き、木々に生い茂っている葉が空を舞う。
始まりを告げる季節、春。

時間とは、やはり進んでしまうものでどうあってもその流れを止めることなど出来はしない。

時間が過ぎれば、季節が流れ、年が明け、新たな年を迎え、世界は新しいステージに立つ。
大袈裟に言っているだけで、これは当たり前のことで、今更この時間の流れに疑問を持つ者はいない。

世界の中では、全てはあるがままに在り、全ては起こるままに起こる。

「クゥ～！　早く支度しなさい、今日はお休みじゃないわよ～！」

「は～い、分かってる～！　もうちょっと待ってて～～！！」

ソラが居なくなったことも

クゥが現れたことも

彼を引き取り、育てていることも

先日、クゥがザンクト・ヒルデ魔法学院初等部に入学したことも

これらの出来事は、世界においては、起こるままに起こった事実でしない。しかし、世界は起こった事実であること全てで構成、成立している。

「忘れ物は無い？　筆記用具はちゃんと持ってる？」

「うん、さっきちゃんと確認したもん」

「ならよろしい。　じゃ、行きましょう」

「は～い♪」

そんな世界の中で、人は毎日を生きて、世界を構成する事実を作り、重ねていく。

ティアナが執務官として活躍すること

フェイトとルークが、最近珍しく喧嘩をしたこと（仲直り済み）

エステル達の生活が、かなり落ち着き始め、フウミも普通の学校生活を送れていること

そんな積み重ねが、今日も増えていく。

人間が、その積み重ねに何の疑問を持たないのは、その行動原理の根底にある一つの願望、目標があるからだ。

即ち、幸福を目指すという、人の人生、生活の中では当たり前すぎて認識すらされにくい目標だ。

ティアナにしても、クゥにしても、誰しもが願い、また目指そうとする。それが当たり前の事なのだから。

ある哲学者は言った、『幸福に生きよ！』と。

もし神と言う存在がこの世界にあるのなら、人間に神が与えるたった一つの命令が、この短いフレーズなのだと。

これからも、毎日、時間が進み、世界が積み重なっていく。その日々が、どうか素晴らしきものになりますようにと、心の奥底の無意識で願いながら。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「学校にはもう慣れた？」

「うん、すっごい楽しい！　友達も出来たし、ヴィヴィオお姉ちゃんにリお姉ちゃん、あと、コロナお姉ちゃんも……優しくしてくれるし……／／／／／」

「……へぇ…？」

ティアナは、傍らを歩く息子、クゥ・ランスターに、学校の様子などを尋ねてみる。

ヴィヴィオも、初等部四年生として進級し、最近ではなのはとフェイトから、セイクリット・ハートというデバイスをプレゼントされ

たらしく、嬉々とした様子だったらしい。

でもって、クゥの話に若干の引っ掛かりを覚えたティアナは、悪戯心からか少し意地悪をしてみる。

「なんだか、コロナのところだけ声が上ずってたみたいだけど、どうしたのかしらね～？」

「にゃにゃにゃ、にゃんでもないよ？？！　普通にしか話してないもん」

「あら、そうかしら～？　（ヤバい……結構弄り甲斐があるわこの子……ｗｗ）」

どうやら、隠し事はまだまだ下手くそらしい。

どうも、聞くところによると、クゥはヴィヴィオ達仲良し三人組の中の、コロナにお熱らしく（誰だ死語って言った奴）、甘えたり、こうしてからかわれたりすると真っ赤になってしまう。

どうやら、クゥがコロナに惚れるような何かが起こったことは間違いなにのだが、それはまた別の機会のお話だ。

ソラとは似ても似つかないところではあるが、可愛げがあっていい。

「今日はどうするの？　ストライクアーツの訓練、一緒にするんじゃないの？」

「多分……いや、絶対する」

クゥは、ヴィヴィオ達に交じって、ストライクアーツを学んでいる。

最初は、ヴィヴィオやノーヴェ達の訓練を横で見ていただけらしいのだが、自分でもやってみたくなったらしく今ではすっかり夢中になっている。

戦闘面というか、身体的な能力の才能に関しては、ソラのそれを色濃く受け継いでいるようで、ノーヴェに言わせて『末恐ろしいガキ』だそうだ。

「そう……なら、怪我はしない様にね？　あと、能力を使って悪戯しないこと！　いいわね！？」

「そ、ソンナコトシナイヨー……」

でもって、受け継ぐというかなんというか、変数Xとして生まれたクゥではあるが、やはりというか肉体的な能力と共に、彼独自の能力を持っていた。

どうも、クゥは少々特殊なイノベイト・チルドレンとして生まれたらしく。読心能力も魔力吸収の魔眼も持ち合わせてはいないのだが、能力と身体能力だけはイノチルと言う風変わりなタイプらしいのだ。

事実、彼が人の心を読んだりという事は、これまで一度もない。直感力に優れているという傾向は見られるモノの、それに留まっている。

「い・い・わ・ね！？」

「は、はい！！」

そして、ティアナが最も頭を痛めているのは、クゥの持つ能力だ。

詳しいことは伏せるが、悪戯小僧な彼は能力を使って悪戯をすることが多く、その防止のためにティアナは日々四苦八苦している。

まぁ、その度に愛の鉄拳（強烈なデコピン）ｏｒウメボシ（頭をぐりぐりするアレ）を食らわせてはいるので、その内止めてくれると願いたいところではある。

「って、クゥ！　もうそろそろ始業の時間じゃないの！？」

「……あ……あと１０分だ……」

と、そんな微笑ましいやり取りをしていて、歩くのを忘れてしまっていた二人は、時計を見てギョッとする。

学校の始業時間まで、あと１０分しかないのだ。

普段から、途中まで一緒に出歩くのが常なのだが、今日は少しのんびりし過ぎてしまった。

「じゃ、俺先に行くから！！　またね、お母さん！！」

「いいから、早く行きなさい！　あ、車とか道路標識には気を付けるのよ？」

「分かってるって！　行こう、エウロス！」

『畏まりました、ご主人』

遅刻しない為には、普通に走るのではだめだ。『裏ワザ』を使って登校することにしたクゥは、懐から小さな十字架を象ったアクセサリーを取り出し、その名を呼ぶ。

このアクセサリーは、クゥのデバイスで『エウロス』という。見た目は。風のレガリア・オルクスと全く同じであり、入学祝にとエステルがわざわざ作ってくれたのだ。

デザインは、ソラの使っていたものと全く同じではあるが、コンセプト全く違う。ベクトル操作の演算補助などと言う能力はクゥには全くの無意味なので、彼女なりにいろいろ考えてくれたようで、エステル曰く『風を掴むデバイス』と言うコンセプトらしい。

その真価が発揮されるのはいつのことになるかは不明ではあるが、これからに期待したいところだ。

本来なら、父親の形見として、オルクスをクゥに持たせてやるべきなのかもしれない。しかし、ソラは『ティアナのためのお守り』として、オルクスを彼女に譲り渡したのだ。

そんな彼の意思を、ティアナとエステルは最大限に尊重したいと思い、エウロスをクゥに贈った。

今のオルクスは、デバイスではあるが、もう二度と人を傷つける道具として使われることはないだろう。

「じゃーねー！」

ガシュ！

と、エウロスを履いた足で地面を蹴ると、クゥは羽でも生えたかのような跳躍力を見せ、建物の上を飛ぶようにして走って行ってしまった。

ローラーシューズ型のデバイスという事で、扱いが難しいはずなのだが、今ではこの通りで、たまに遅刻しそうになる時にこうして道ではないところを走り、ショートカット登校をすることがあるとい

うわけだ。

「まったく……あの子は……」

ティアナは口ではそう言いながらも、表情は優しげなそれだった。
我が子の成長というか、可愛さと言うか、親バカになったつもりはないが、それらが堪らなく嬉しく思えてしまう。

『ティアナ様は子育ての才能があるのかもしれませんね』

「あらそうかしら？」

『えぇ、坊ちゃんの元々の性格もありますが、なんにでも興味を持つ好奇心とそれをモノにしようとする努力、ハングリー精神は、ティアナ様からしっかりと伝わっているようですし。何より、子供の成長が一番嬉しいと感じるのは、良い親の証拠かと存じます』

『私も同感です、Ｓｉｒ』

首元のオルクスと、懐に入れているクロスミラージュからそんな声が掛かり、ティアナは恥ずかしそうにしながらも悪い気分ではなかった。

「フェイトさんの助言がなきゃ、こうはいかなかったかもね……。一人じゃ絶対厳しいと思ったわ……」

『確かにそうかもしれませんが、今のクゥ様を見ればＳｉｒがどれだけいい母親をしていらっしゃるのかは分かります。多少、体の造りは違うかもしれませんが、普通に学校に行き、友人方と汗を流し、普通に女性に好意を持っている。これは素晴らしいことだと思いま

す』

「そう……そうかもね……」

クロスミラージュからそんな言葉を掛けられ、ティアナは再び歩き出す。

今までの子育て、クゥとの接し方が間違いだったのか正解だったのか、それは分からない。

執務官として忙しい彼女だ、たまにクゥをヴィヴィオの家、つまりはなのは達の自宅に預けざるを得ない時もある。

同じ執務官として、母をしているフェイトもそうなのだが、やはり仕事と子育てはこの上なく難しい。

しかし、全く苦しくないのが不思議だ。

あぁやって、子供の成長などを実感できるだけで、無限大に力が湧いてくる気すらする。

本当に、最近のティアナは充実していたのだ。

「でも、まだまだ、これからなのよね……何もかも。全部が、まだまだ始まったばかり……スタートラインからどのゴールにたどり着くか、そしてそのゴールからまたどんなスタートを切れるかは、やっぱり人間次第」

ソラが居なくなり、クゥが生まれたあの日をスタートとするならば、ティアナ達はまだまだ始まったばかりだ。

いか様にも変化する可能性はあるし、そのままの可能性だってある。

世界のありよう、人の生き方と言うのは、そう言う事だ。

だからこそ、今、ティアナ達に出来ることは1つしかない。

「毎日を、必死に生きる。我武者羅に。……頑張んないとね……あんたもそう思うでしょ、ソラ？」

ティアナは、気持ちいいくらい澄み切った青空を仰ぎ見ながらそう呟き、再び歩き始める。

――――お手並み拝見だな、ティア？

「……えぇ、見てなさい。あんたが惚れた女の、これからをね」

風と一緒に、どこかのバカの声が聞こえた気がした。

世界から居なくなり、空になった、そんなバカの声が……

ティアナは風を肌に感じながら、今日も毎日という連続の中を生きていく……その胸にいつも寄り添う、風を感じながら……

Ｆｉｎ

エピローグ（後書き）

グランドエンディングテーマ
『クオリア』　Ｓｏｎｇ　ｂｙ　ＵＶＥＲｗｏｒｌｄ
映画『劇場版　機動戦士ガンダム００　－Ａ　ｗａｋｅｎｉｎｇ　ｏｆ　ｔｈｅ　Ｔｒａｉｌｂｌａｚｅｒ－』より

あとがき

はい、ということで如何だったでしょうか？　魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　Ｂｌｏｏｄ　ｏｆ　Ｐｒｏｍｉｓｅ。

ウィトゲンシュタインの論理哲学論考という哲学本の思想をちょびちょび入れたりと、若干私の趣味全開な部分もありましたが、楽しんでいただけたのなら幸いです。半年と少しと言う連載期間を経て、漸く完結を迎える事が出来ましたが、やはり感慨深いですね……

最終的には、悲恋と言う形になったのは、劇中でもソラが口にしていた『死んだ人間は生き返らない』という言葉の存在があったからです。

ロスメモでは、最終的にルークは息を吹き返すんですが……

ハッピーエンドかバッドエンドかと聞かれると、私としては答える術を持ちません。クゥという存在を得、ティアナにとっての幸せの定義がどう変化したのかという事なんですよね。

無論、ソラが生存していればそれは完全なハッピーエンドとして成立しますが、クゥと二人で新しい生活を始めたティアナ、忙しいながらも充実した毎日を送っているこのエンドも、捉え方によってはハッピーエンドになるのでは？

という曖昧な解答しか、私は持ち合わせていません。

ですが、最後当たりでティアナが言っているように、全てはこれからなんです。

始まったばかりの物語の結末について、あれこれ議論するのは、まぁ楽しいかもしれませんが、結局はナンセンスです。

続編でも、クゥとティアナの物語は語られる予定なので、この続きはそちらでお楽しみにと言う形でご容赦願えればと思いますｗｗ

さて、ここからは次回作のお話ですね。

既に皆様方はご存知かとは存じますが、今一度発表いたします。
次回作のヒロインは、ＶｉＶｉｄでの新ヒロイン、アインハルト・ストラトスさんです！！

新作のために、ＶｉＶｉｄ全巻をまとめ買いし、資料は揃っておりますｗｗ

次回作の時間軸は、ヴィヴィオとアインハルトが出会う直前から、という事になりますね。覇王っ子がヒロインという事で、今からテンションがアガリクス……ゲフンゲフン！！

アインハルト、マジ覇王、な作品にしたいと思いますので、皆様新作の方もどうぞよろしくお願いいたします！！

というか、お気づきになった方もいらっしゃるかと思いますが……

クゥ……ＶｉＶｉｄの仲良し三人組の一人、コロナに好意を持ってるんですよね。まぁ、その理由などは新作で追々という事でｗｗ
お子様の可愛い感じの恋も書いて行ければとか思ってますｗ

次回作　『魔法少女リリカルなのはＶｉＶｉｄ　とある訓練生と覇王っ子（仮）』　の執筆、徐々に始めておりますので、近日中には連載スタートという事にしたいと思いますｗｗ

ちなみに、活動報告でも書きましたが、タイトルの案が降ってこないぜ！！

魔法少女リリカルなのはＶｉＶｉｄ　シエルは見た！　ルークとフェイトのイチャイチャ日記

魔法少女リリカルなのはＶｉＶｉｄ　スカリエッティのぶらり途中下車の旅

魔法少女リリカルなのはＶｉＶｉｄ　出番無かった組の愚痴トーク会

まともな案が一つも思い浮かばない、私の灰色の脳みそです。

さて、末尾になってしまいましたが、今日までこの小説を読んで下さった読者の皆様、並びに感想を下さった皆様、私の描く作品に最後まで付き合っていただき、本当にありがとうございました！

ここまでやってこれたのも、皆様からのご助力、アドバイス、お褒めのお言葉などがあってこそでございます。

次回作においても、何卒ご鞭撻、ご愛顧の程よろしくお願い申し上

げます。

それではまた次回作、スクラパにてお会いしましょう！！

ヒーハー☆！！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1174o/

魔法少女リリカルなのはStrikerS　Blood of Promise

2011年7月31日18時24分発行